

博士論文

大和物語の研究

令和元年七月

柳田忠則

大和物語の研究
目次

緒言

第一章 大和物語の伝本

| | |
|--------------------------------------|-----|
| 第一節 『大和物語』の伝本—その研究略史— | 9 |
| 第二節 伝為氏筆本『大和物語』の研究 | 24 |
| 第三節 鈴鹿本大和物語考 | 46 |
| 第四節 日本大学図書館蔵『大和物語』の伝本 | |
| —新資料の紹介を中心にして— | 77 |
| 第五節 三条実起筆『大和物語』小考 | 107 |
| 第六節 『大和物語』附載説話第二類をめぐって | 117 |
| 第七節 物語の成長—『大和物語』附載説話第二類の本文— | 130 |
| 第二章 大和物語の創作性 | |
| 第一節 大和物語における在原業平関係章段について | 155 |
| 第二節 大和物語における虚構の方法—一四一・一四二・一五四段を例にして— | 172 |
| 第三節 『古今』『伊勢』『大和』—ひとつの共通話をめぐって— | 187 |
| 第四節 歌語りから創作へ—『大和物語』第一四九段をめぐって— | 204 |
| 第五節 都の女と地方の女—『大和物語』における対照性の問題— | 225 |
| 第六節 大和物語の創作方法—第三段を考察の対象として— | 233 |
| 第七節 大和物語の創作方法—いわゆる「ならの帝」の章段をめぐって— | 264 |

| | | |
|-------------|--|-----|
| 第八節 | 大和物語の創作方法―伊勢関係の章段― | 278 |
| 第九節 | 大和物語の創作方法―在中将関係の章段を中心にして― | 297 |
| 第十節 | 大和物語の創作方法―『後撰集』との関わり的一面― | 341 |
| 第三章 大和物語の構成 | | |
| 第一節 | 『大和物語』小考―構成意識をめぐっての一試論― | 357 |
| 第二節 | 『大和物語』小考―前半と後半の分け方についての一試論― | 373 |
| 第三節 | 『大和物語』の宗干関係章段―構成との関わりを中心にして― | 384 |
| 第四節 | 大和物語の構成について―後半の章段を考察の対象として― | 399 |
| 第四章 大和物語の注釈 | | |
| 第一節 | 詠み手の心―『大和物語』第三十段― | 417 |
| 第二節 | 「心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに」考 ―『大和物語』第一四一段― | 426 |
| 第三節 | 甲斐侍従筆『大和物語追考』について | 440 |
| 第四節 | 日本大学図書館蔵『大和物語鈔』の研究 | 446 |
| 後記 | | |

緒言

大和物語は歌物語を代表する作品である。しかし、その研究状況を俯瞰すると、同じ歌物語に属する伊勢物語に比べ、雲泥の差があり、いわばその陰に隠れた存在である。大和物語のみを対象にした研究書の上梓はまことに少ない。また、大和物語を特集に編んだ研究誌もまれである。これらの事実はその一面を如実に物語つていよう。しかし、それだからと言って研究が滞っているわけではなく徐々に進展しつつある。したがって、それに拍車をかける意味でもさらなる研究の発展が待ち望まれている。

大和物語は歌物語から長編物語へ移行する過渡期の作品で、様々な問題点を内包しているように思われる。それだけに未開拓な分野が多く、新しい視点からの研究が要求されていることはいうまでもない。例えば、創作性や構成意識の問題をあげることができよう。前者の場合、従来、大和物語は歌語りの集成と言われてきた。確かにその要素は否定できないが、中にはそれだけでなく、虚構という意識をもって創作された章段が存在するようである。とりわけ、後半においてはそれが顕著である。また、後者の場合、大和物語は伊勢物語のように、ある男の一代記風の体裁をとっているわけではなく、様々な人物が登場している。しかし、そうはいうものの、同一人物の章段が連続して配置されたり、地方の話と都の話とが交互に配置されているところなどがみられる。しかも、これらの中には意図的になされたところも存在するようである。

一方、大和物語の諸本、注釈、注釈書などと言った、基礎的な面についても従来の研究成果を踏まえつつなされるべきである。因に諸本研究では新資料の紹介、それに伴って以前に紹介された伝本の位置づけの再検討。また、注釈では作者や詠作者の心情に迫る必要がある。さらに、注釈書では新しい資料の発掘を試み、注釈史上の位置付けをする必要がある。

これらは研究テーマの一部にすぎないが、いずれにしても多角的な研究の必要性を痛感するのは私一人だけではあるまい。そのような意味で、その一翼を担えたならばと思ひ、本書をまとめた次第である。

第一章 大和物語の伝本

第一節 『大和物語』の伝本

—その研究略史—

中古末期の歌学者、藤原清輔は『袋草紙』の中で、「大和物語 和歌二百七十首此中連歌三首但本々不同」と記しているが、この本は現存しない。これは現存の大和物語諸本と比べてかなり歌数が少ない。また『昆沙門堂本古今集注』⁽¹⁾や『河海抄』⁽²⁾にも現存大和物語にみられない話が載っている。『袋草紙』の「二百七十首」本については高橋正治氏の「大和物語の原初形態に関する試論—浦輔のいふ「和歌二百七十首其内連歌三首」本をめぐって—」⁽³⁾（『国語と国文学』32巻6号、昭和30年6月。後に『大和物語 稿選書』（塙書房、昭和37年10月）に再録）と、これに反論された久保木哲夫氏の「歌語り研究メモ—「大和物語の原初形態」に関する高橋正治氏への疑問—」⁽⁴⁾（『未定稿』5号、昭和32年7月）の研究がある。また、これには高橋氏が「公忠集考—大和物語原初形態の内—」⁽⁵⁾（『文学・語学』15号、昭和35年3月）の中で再反論されている。このようにどのような形態であったかについてはまだ時間がかりそうであるが、いずれにしても現存の諸本とは、かなり異なつた本の存在が推定される。しかし、これが現存のものといかなる関係にあるのか、またどの系統に属するのかわかることは明らかでない。

ところで、大和物語の諸本について一往の系統立てをしたのは、江戸時代に入ってからであった。北村季吟は『大和物語抄』において六条家本、二条家本、定家本の三種があることを指摘した。このうちの六条家本については、鈴木知太郎氏の「季吟のいはゆる六条家本大和物語に就いて」（『国学』5輯、昭和12年1月。後に『平安時代文学論叢』（笠間書院、昭和43年1月）に再録）と鈴木棠三氏の「大和物語六条家本の本文について」（『国文学論究』7輯、昭和13年8月）がある。即ち、鈴木知太郎氏は季吟が実際に六条家本を見たのではなく、それは袖中抄からの引用であることを指摘された。鈴木棠三氏も同じ考えをされ、このことがその存在を否定するのではなく、多くの資料から六条家本大和物語における本文の特徴を考察されている。この季吟

の指摘をもとに池田亀鑑氏は「大和物語伝本考」(『国語と国文学』6巻1号、昭和4年1月。後に『物語文学Ⅱ 池田亀鑑選集』(至文堂、昭和43年10月)に再録)という論考において、六条家本、二条家本、定家自筆本の三系統に分類され、その基礎を築かれた。この説は川瀬一馬氏の「大和物語の異本と平仲物語の発見(上)」、「(下)」(『国文学誌』1巻7、8号、昭和6年11、12月。後に『日本書誌学之研究』(講談社、昭和18年6月)に再録)、鈴木知太郎氏の「大和物語諸本の系統―特に二条家本及び定家自筆本に関して―」(『文学』2巻5号、昭和9年5月。後に『平安時代文学論叢』に再録)、阿部俊子氏の「大和物語の伝本に就いて」(『国語』3巻1号、昭和13年1月)、「大和物語の伝本の系統」(『校本大和物語とその研究』三省堂、昭和29年6月。増補版、昭和45年10月)といった各論考、および高橋正治氏(『大和物語 塙選書』塙書房、昭和37年10月、『日本古典文学全集大和物語』解説、小学館、昭和47年12月)、南波浩氏(『陽明叢書国書篇 第九輯 大和物語』解説、思文閣、昭和51年6月)による多少の修正が加えられ、現在でも二つないし三つに分ける方法がとられている。例えば高橋氏は系統を大きく三つに分け、第一類にA・B・C・D・E・F・G・Hの八系統、第二類(P系統)に御巫本・鈴鹿本、第三類(Q系統)に勝命本をそれぞれ所属させている。また南波氏は、第一類 現行流布本の系統本(二条家本系統)、第二類 異本系統本(六条家本系統)、第三類 勝命系統本の三つに分け、第一類の二条家本系統には(1)定家自筆本系、(2)為家書写本系、(3)為氏書写本系の三つ、第二類を御巫本と鈴鹿本、第三類は勝命本のみとされた。⁶⁾高橋氏と南波氏の系統分類は大綱において一致しているが、細部の点で異なっている。即ち、第一類系統内の分類について前記の如く、南波氏が三系統であるのに対して、高橋氏は八系統を立てておられる。今、両氏による所属伝本を比較してみると次表のようになる。

| 高橋 正治氏 | | 南波 浩氏 | |
|--------|--------------------------------|-------|------------|
| A | ○△為氏本・△大永本・玄陽文庫本 | | 為氏書写本系統 |
| B | ○△群書類従本・△古活字本・南葵文庫本 | | ※(定家自筆本系統) |
| C | ○△為家本 | | 為家書写本系統 |
| D | 文明十年親長書写本・蓬左文庫本・多和文庫本・三条西家本 | | 定家自筆本系統 |
| E | △野坂元定氏蔵本・太宰府神社蔵本・無窮会文庫本 | | 定家自筆本系統 |
| F | 狩谷椽斎旧蔵本・近衛植家筆本・△大東急文庫本・高橋正治氏蔵本 | | ※(定家自筆本系統) |
| G | 首書本・○△大和物語抄・大和物語虚静抄 | | 定家自筆本系統 |
| H | ○△宮内庁書陵部蔵桂宮本・中川家旧蔵本 | | ※(定家自筆本系統) |

(注) ○印を付けた伝本は阿部俊子氏の『校本大和物語とその研究』に、△印は本多伊平氏の『大和物語本文の研究 対校篇』にそれぞれとり上げられている伝本を示している。

両氏の大きな相違は※印を付けた伝本を定家自筆本系統とみるか否かにある。それゆえ、ここでは論述の便宜上、第一類において高橋氏と南波氏とが同じくみている伝本にふれ、次いで対立している伝本にふれ、さらに第二類、第三類へと進み、最後に古筆切にふれてみようと思う。その場合、各伝本の書誌、本文等については先学の詳細な研究があり、それに譲るとして、ここでは主として各伝本の研究状況とそれの影印・翻刻状況等について昭和の初年から平成二十年あたりまでを目安に概観していくことにする。

二

大和物語の伝本研究において池田亀鑑氏の業績を見逃すわけにはいかない。とりわけ伝為氏筆本と伝為家筆本は氏の解説により、それぞれ複製刊行された(『伝為氏筆本』古文学秘籍複製会、昭和8年9月。解説のみ高橋正治氏『大和物語諸本目録 A系統』(新典社、昭和63年10月)に再録。『伝為家筆本』育徳財団、昭和11年12月。解説のみ『物語文学Ⅱ 池田亀鑑選集』に再録)。この複製刊行によって、多くの注釈書、テキストの底本となり、その思恵は測り知れない。しかし、これらの複製本はいずれも稀覯本となってしまうが、幸い伝為氏筆本は影印刊行をみたことはありがたい(『国立歴史民俗貴重典籍叢書文学篇第十六巻 物語一』解題柳田忠則、臨川書店、平成11年5月)。また、翻刻ではあるが、両本とも高橋正治氏の『大和物語の研究(系統別上)』(私家版、昭和44年10月。再版 臨川書店、昭和63年10月)に収められた。両本の研究についてはまず複製本の解説がある。池田氏は為氏本について本文、勘注を通して、誤説も少なく、本文校訂上、非常に重要な伝本の一つであることを説かれている。また為家本についても氏は定家自筆本の面目を明らかにする上に重要な傍証となり、かつこの本特有の本文もあつて校勘上貴重な資料になると言われている。それと「付」として掲げられている「為家自筆本文校異」は為家本を中心にして定家本、為氏本の本文の異同を記したもので、貴重な資料である。また、高橋正治氏の「伝為家筆本大和物語の系統—定家自筆本大和物語の再建への位相—」(清泉女子大学紀要 41号、平成5年12月)という論考があつた。従来、この系統は為家本一本のみであつたが、H系統の桂宮本と蓬左文庫本にみられる校合書き入れ本文を調査し、その結果、それは為家本系統の一本であることが判明し、他系統本との関係について考察されている。為家本研究に一石を投じよう。このほか為氏本については高橋正治氏の「古写本における校合形式の書写方法」(『ぐんしよ』9号、昭和37年10月)がある。これは為氏本の書写方法について考察されたもので、それは一部の写本を作るといふ一つの作業を二人で行い、本文の正確さ

を期したということである。このような方法は為家本にもみられるようで、堀部正二氏が「前田家本大和物語の一考察―古写本に於ける闕字と校合の或場合―」（『國學院雑誌』46巻12号、昭和15年12月。後に『中古日本文学の研究―資料と実証―』（教育図書、昭和18年1月）に再録）という論考でふれておられる。また、柳田の「伝為氏筆本『大和物語』の研究」（『大和物語』の研究）（私家版、平成12年12月）、本書第一章第二節）は為家本をはじめ、後述の大永本、玄陽文庫本と比較し、本文の性格について考察したものである。

為氏本と同系統のものに大永本と玄陽文庫本がある。前者についてはじめてふれたのは鈴木知太郎氏である（『大和物語諸本の系統―特に二条家本及び定家自筆本に関して―』）。ここでは三条西家逍遙叟本という名称で記されている。その後、この本は東京教育大学（現在、筑波大学）の所蔵するところとなり、その名称も識語の一部をとって大永本と呼ばれるようになった。高橋正治氏はこの本について「群書類従本系統大和物語伝本考」（『清泉女子大学紀要』14号、昭和41年12月）の中で詳しく述べられている。それによると、大永本は群書類従本系統と為氏本系統の関係を探る上で貴重な伝本であるとのこと。この本の本文について考察したものに、新藤協三氏の「大永本大和物語本文考」（『山形大学紀要（人文科学）』8巻4号、昭和52年2月）がある。これは本文、書き入れを精細に調査したもので、特に後者を通して近世初期には、為氏本系統の伝本がかなり流通していたことを推定されている。大永本は前記の高橋氏の著書に翻刻と写真版で収められており、また同氏によりこの本の校訂本もある（『大和物語（A系統大永本）』新典社、昭和63年4月）。

一方、後者の玄陽文庫本は高橋氏の所蔵になるもので、氏により「大和物語A系統新出本の紹介」（『清泉女子大学紀要』35号、昭和62年12月、後に『大和物語諸本目録 A系統』に再録）と題して紹介された。その後、この本は氏の著になる『大和物語諸本目録 A系統』に為氏本に校異の形と影印でそれぞれ収められている。高橋氏によれば玄陽文庫本は為氏本よりも大永本と近い関係にあるとのこと、この本の出現は先程の新藤氏の推論をさらに確かかなものとしよう。鈴木裕史氏の「『大和物語』伝為氏筆本の本文―敬語表現・語法から見たその性格―」（『伝承文学研究』46号、平成9年1月）は敬語表現や語法の面からその本文の性格について、同系統の大永本、玄陽文庫本と比較し考察されたものである。その結果、為氏本は多くの欠陥や破格の語法を有しているとされ、A系統内では玄陽文庫本が最善本、次いで大永本、最後が為氏本の序列にあるという。検討した用例が少ないので、もっと多くの箇所にあたる必要がある。

定家自筆本系統に移って、まず文明十年藤原親長書写本の系統であるが、この系統に属する伝本は前記の通りである。これら以外の伝本として陽明文庫本、松平文庫本がある。前者は南波浩氏の解説で影印本が出た（『陽明叢書国書篇 第九輯 大和物語』）。南波氏によると、この本は大和物語寛喜本系統の最善本とみられる純度の高い伝本であり、誤写が少なく定家自筆本復元への面においても重要な位置を占めると言われている。この本は本多伊平氏の『大和物語本文の研究 対校篇』（笠間書院、昭和55年2月）の底本になっている。後者の松平

文庫本はまだ翻刻、影印もされていないが、この本を研究されたものに高橋氏の「松平文庫所蔵花山院作物語」（「ぐんしょ」2号、昭和38年11月）という論考がある。高橋氏はこの本を宮内庁書陵部蔵桂宮本系統とみておられるが、これは氏の誤解であろう。この本の冒頭には「花山院作物語の御つくり物かたりとある本にあり云々」の一文がある。これについて氏は狩谷本系統と寛喜本系統は平中附載説話のないものであるから、「花山院作物語の御つくり物かたりとある本にあり」の本文は前にかかり、平中附載説話とは関係がないと言われている。これに対し、迫徹朗氏は「大和物語研究の現段階」（「国語と国文学」56巻2号、昭和54年2月）において、この本文が永青文庫本、宮内庁書陵部蔵桂宮本でも附載説話を記し始めるにあたっての前置になつていことから高橋氏の見解には従えないことを述べられた。そして本文を調査され、この本は寛喜本系統でもその中でも蓬左文庫本や三条西家本に近いことを指摘された。さらに宮崎主恵氏も「松平文庫本大和物語の伝本系統について」（長崎大学「国語と教育」14号、平成元年12月）という論考で、その本文系統について考察された。その結果、この本は寛喜本系統の本文を受け継いでいるものの、中川家本系により訂正されたり、附載説話が付け加えられたとみておられる。前記の伝本の中で、蓬左文庫本は竹鼻續氏の解題で複製刊行された（『蓬左文庫蔵大和物語』ほるぷ出版、昭和58年4月）。この本は寛喜本系統諸本の中で陽明文庫本に近く、今後の定家本の研究には欠かせない資料とのことである。また三条西家本は現在、学習院大学の所蔵となつており、これは高橋氏の解説により写真版で刊行された（『学習院大学所蔵三条西家旧蔵本大和物語（D系統本）』東京美術、昭和59年7月）。氏はこの本について本文の考察上、極めて貴重な伝本であると言われている。文明十五年藤原親長書写本は現在その所在が不明で、その転写本である池田亀鑑氏蔵本の写しが高橋氏の『大和物語の研究系統別上』本文篇』に翻刻されている。ところが、文明十五年藤原親長書写本が出現したのである（拙稿「寛喜本系統の一伝本」（『大和物語の研究』翰林書房、平成6年2月）、本書第一章第四節）。今後の伝本研究の貴重な資料となろう。この親長書写本には「花山院の御つくり物がたりなりとある本にあり」の一文があるが、平中附載説話を持っていない。このことについて迫徹朗氏は親長書写本が何らかの事情で削除したのではないかと推測され、この本と近い関係にある多和文庫本、陽明文庫本にもこの本文があることから寛喜本系統がこの親長書写本にその源を発していると考えておられる（『大和物語研究の現段階』）。陽明文庫本は南波氏の解説で影印本が刊行された（『陽明叢書国書篇 第九輯 大和物語』）。なお、定家自筆本系統の諸本については高橋正治氏に「大和物語D系統本の系統」（清泉女子大学紀要 43号、平成7年12月）という詳細な論考がある。今後の伝本研究の基礎となるものである。

巖島神社宮司、野坂元定氏の所蔵されている大和物語を「巖島神社 野坂家蔵大和物語—天福元年書写同二年校合の定家本について—」（『中世文芸』12号、昭和32年12月）と題して紹介されたのは友久武文氏である。氏はこの本について定家自筆本を再建する上で重要な一資料と言われている。その後、高橋氏は「大和物語第一類本の系統—天福元年定家自筆本の位置—」（『国語国文』27巻6号、昭和33年6月）という論考において、この本と他の伝本との関係を考察

された。その結果、この本の出現により、同じく定家自筆本系統の寛喜本との祖本を想定する上で貴重な資料と言われている。この本は高橋氏の解説で複製刊行されている（『大和物語野坂元定氏蔵』天福本 新典社、昭和46年10月）。解説では天福本系統について説明され、次いで野坂元定氏所蔵本と他の天福本系統諸本との関係を、さらに天福本系統と寛喜本系統・F系統（狩谷椽斎本）との関係をそれぞれ論じておられる。最後に天福本系本文の異同が示されており、益すること大である。なお、この本は同氏の『大和物語の研究系統別』本文篇』に翻刻されている。またこの本は『日本古典文学全集大和物語』の底本になっている。⁽⁸⁾ この本の出現により、無窮会文庫本がこれと同系統であることが判明した（『大和物語第一類本の系統―天福元年定家自筆本の位置―』）。これと同系統のものに前記の如く太宰府神社蔵本がある。この本ははじめ井源衛氏が「大和物語評釈・二〇 巢守」（『国文学』8巻14号、昭和38年10月 後に『大和物語評釈 下巻』（笠間書院、平成12年2月）に再録）の中でふれられ、その後、迫徹郎氏が「太宰府天満宮蔵『大和物語』について」⁽⁹⁾（熊本女子大学国語国文学論集」3集、昭和40年2月 後に『王朝文学の考証的研究』（風間書房、昭和48年3月）に再録）という論考で補足されている。この本は野坂家蔵本とともに天福本の祖本を再建するために重要な伝本とのことである。

高橋氏の分類になるG系統は注釈書の本文である。これらの本文は純粋度がかなり低く祖本再建にあたっては除外すべき本と言われている（『日本古典文学全集大和物語』解説）。高橋氏の『大和物語の研究系統別』本文篇』には氏所蔵の首書本が翻刻されている。大和物語抄についてはその依拠した伝本と同じ系統のものが出現した（拙稿『大和物語抄』の引く定家本について）（『大和物語の研究』、本書第一章第四節、大和物語抄の本文を考える上で貴重な資料となろう。大和物語抄は『国文学注釈全書 第五冊』（國學院大學出版部、明治42年8月）、『未刊国文古註釈大系 第九冊』（帝國教育会出版部、昭和13年6月 覆刻版 清文堂 昭和43年10月）等に収められている。⁽¹⁰⁾ このほか、この系統に属するものに秋成校正本がある。この本についての研究に高橋正治氏の「村井古巖所蔵大和物語の本文について」（清泉女子大学紀要）13号、昭和40年12月）という論考がある。これは刈谷市立図書館にある、村井古巖が天明四年甲辰年七月四日、彼の所持の古写本によって校合した大和物語抄を検討し、平中附載説話の伝来経路を採ったものである。その結果、秋成校正本を宮内庁書陵部蔵桂宮本とみて、この系統の本から平中附載説話の末尾を移入したと考えておられる。この秋成校正本は附載説話第二類（B類とも）に属し、小林茂美、中田武司の両氏の編により影印刊行された（『大和物語―秋成校正本―』桜楓社、昭和49年4月）。

次に分類上、考えが対立している伝本にみていこう。まず群書類従本であるが、これについては前記の高橋氏の「群書類従本系統大和物語伝本考」がある。これは群書類従本系統諸本の系統内における位置付けをされたものである。また、群書類従本を寛喜本あたりから派生したとみる佐藤友美氏の「群書類従本大和物語について」（熊本大学「国語国文学研究」14号、昭和53年12月）がある。これには迫氏も賛同されており、さらに氏は高橋氏の分類になるB・F・Hの各系統を定家自筆本に帰属すべきものと考えておられる（『大和物語研究の現段階』。古活字本については本多伊平氏

により架蔵のものが影印刊行された(『大和物語』慶長元和中刊十一行(イ)種本)。和泉書院、平成元年4月)。氏によると、この第一類(イ)種本は、わずかの誤植を別にすれば、古活字版、流布の整版本中でも最も正確で、十分信頼に値することである。この慶長元和中刊十一行本を中心にとり上げ、その刊行年次について検証した、高木浩明氏の「古活字版調余録—『大和物語』の刊行年時を考える—」(『汲古』56号、平成21年12月)がある。静嘉堂文庫所蔵の狩谷椽斎旧蔵本は高橋氏の『大和物語の研究』系統別本文篇下(私家版、昭和45年11月。再版 臨川書店、昭和63年10月)に翻刻されている。本文において第二類系統の伝本との交渉がみられるものに宮内庁書陵部蔵桂宮本等の伝本がある。前記以外にこれに属するものとして永青文庫本、雨海博洋氏蔵本がある。前者は迫氏の解説で影印本(『大和物語 永青文庫本』勉誠社、昭和57年5月)と写真版(『細川家永青文庫叢刊 第十卷 大和物語』汲古書院、昭和59年7月)とがある。氏はこの本について誤脱等があり、本文価値の点では宮内庁書陵部蔵桂宮本に劣るが、注目すべきことはこの本が大和物語抄の末尾に付された平中附載説話の親本的存在であると言われている。後者は岡山美樹氏の解説で翻刻された(『大和物語の研究』桜楓社、平成5年6月)。一往ここに入れておいたが、氏の解説によると、該本は慶長十三年の書写になり勘物は天福本系統のもので、本文は寛喜本系統の為衆本、陽明文庫本にも近く、この本は桂宮本、寛喜本、天福本が渾然一体となっているような形態、内容といわれる。本文の伝流を知る上で貴重な伝本と言えよう。宮内庁書陵部蔵桂宮本は雨海博洋氏の解説で影印本が刊行された(『桂宮本大和物語』白帝社、昭和47年3月。解説のみ『歌語りと歌物語』(桜楓社、昭和51年9月)に再録)し、高橋氏の『大和物語の研究』系統別本文篇下に翻刻もされている。雨海氏はこの本と第二類系統本の親密性を指摘されている。なおこれは系統上、考えの対立している伝本ではないが、奈良絵本付載の伝本を紹介した(拙稿「奈良絵本付載の「伝本」」『大和物語の研究』に再録、本書第一章第四節)。この類の伝本は少ない。⁽¹²⁾該本は混態本文であるが奈良絵本と本文の関わりを探る上で貴重なものとなろう。混態本文と言えば「三条実起筆大和物語」も同類である(本書第一章第五節)。

三

次に第二類系統(高橋氏のP系統)であるが、これに属する伝本は現在のところ、天理大学附属図書館所蔵御巫清勇氏旧蔵本と愛媛大学附属図書館所蔵鈴鹿三七氏旧蔵本の二本だけである。前者は鈴木脩一氏が大和物語及び平中物語の研究上、最も有力な新資料として「別本大和物語と平中物語の異本—御巫本大和物語に就いて—」(『文学』1巻3号、昭和8年6月)という論考で紹介された。また後者については紹介者がはつきりしないが、はじめてその名が現れるのは阿部俊子氏の「大和物語の伝本に就いて」という論考あたりであろうか。高橋氏の『大和物語の研究』系統別本文篇下には両者が比

較できるように翻刻されているし、鈴鹿本は写真版でも収められている。なお御巫本は「天理図書館善本叢書」の一冊として阪倉篤義氏の解題で影印刊行された（『竹取物語 天理善本叢書29』八木書店、昭和51年7月）し、鈴鹿本も糸井通浩氏の解題で影印本がある（『鈴鹿本大和物語 愛媛大学附属図書館蔵』和泉書院、昭和56年10月）。阪倉氏は御巫本にある異本校合の書き入れの本文と鈴鹿本本文などの関係を整理し分析されている。もともと同系に属する両本間に異同が生じたのは、その原因のひとつにそれぞれが独自に流布本である二条家本系統の本文の影響を受けたことによるのではないかと推測されている。また糸井氏は独自の異文に注目され、特に小野好古に対する敬語表現から歌語り成立の場が作品大和物語の言語表現に反映しているのではないかと考えておられる。なお、『校本大和物語とその研究』、『大和物語本文の研究 対校篇』には御巫本と鈴鹿本が対校されている。

このように資料が提供されているのだが、これらの伝本の研究となるとそれほど多くない。成立については高橋氏の「別本大和物語の成立に就いて―構成論を基礎とした試論―」（『国語と国文学』30巻2号、昭和28年2月）がある。御巫本、鈴鹿本を為氏本と比較し、御巫本、鈴鹿本を単なる説話集として、一段一段の説話的面白さのみ関心を持った読者によって恣意的に改変された伝本とみておられる。また、本文については後世の改作が多いことを指摘した、柳田の「鈴鹿本大和物語考（上）、（下）」（『語文』46、49輯、昭和53年12月、昭和54年12月、後に『大和物語の研究』に再録。本書第一章第三節）がある。このほか敬語や官位の面から考察されたものに、新聞水緒氏の「うてのつかひ」と「うさのつかひ」―御巫本・鈴鹿本大和物語の一側面―（『仏教文学』12号、昭和63年3月）、御巫本大和物語の本文改変について―敬語を手がかりとして―（大谷大学『文芸論叢』10号、昭和63年3月）があった。前者は大和物語四段と史書を検討し、御巫本、鈴鹿本の「うさのつかひ」がもとの姿で、流布本の「うてのつかひ」はそれを改変したものとみておられる。また後者はこの逆で敬語の使用法を手がかりに御巫本、鈴鹿本の改作を指摘されたものである。なお、新聞氏の前者の論文は「豊日史学」（54巻2・3号、平成2年1月）に再録されている。さらに高橋正治氏の「大和物語PQ系統本の性格」（『清泉女子大学紀要』42号、平成6年12月）という論考があった。氏は御巫本、鈴鹿本のみならず、これらとの関係の深い、後述するQ系統の伝本、さらに古筆切、袖中抄や河海抄にみられる大和物語逸文を加え、P・Q系統本の性格について考察されている。その結果、PQ両系統のいずれにもまたがる本文が多く、両系統本は同系統本文を持つものとして、その異文を考慮しなければならないと言われる。広い視点に立つての考察は有意義である。

御巫本と鈴鹿本では、一七二段と一七三段の間に九章段（平中物語一九〇二七段）を附載している。これには前記の高橋氏と阪倉氏の著書のほかに翻刻と注釈がある。前者については早く阿部俊子、今井源衛両氏による『日本古典文学大系大和物語』（岩波書店、昭和32年10月）、同じく阿部氏の『校本大和物語とその研究』があり、本書では鈴鹿本が対校されている。さらに阿部氏には『大和物語 校注古典叢書』（明治書院、昭和47年3月）もある。このほか、柳田の『校注大和物語』（新典社、昭和63年10月）がある。

一方、後者については早く武田祐吉、水野駒雄両氏による『大和物語詳解』（湯川弘文社、昭和11年5月）再版（昭和39年6月）、次いで柿本獎氏の『大和物語の注釈と研究』（武蔵野書院、昭和56年2月）、今井源衛氏の『大和物語評釈 下巻』（笠間書院、平成12年2月）がある。ここであげた翻刻、注釈は御巫本を底本にしている。また、これを考察されたものに雨海博洋氏の「大和物語附載説話第一類と第二類の性格」（『平安朝文学研究』5号、昭和35年4月。後に『歌語りと歌物語』に再録）、「御巫本大和物語附載説話冒頭の「右京大夫宗子」について」（『国文学研究』20集、昭和34年9月。後に『歌語り』と『歌物語』に再録）と柳田の『大和物語』附載説話第二類をめぐって」（『古典論叢』13号、昭和58年11月。後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和58年』（朋文出版、昭和59年12月）、「大和物語の研究』にそれぞれ再録。本書第一章第六節）、稲賀敬二氏の「大和物語」成立段階における「平中章段追加形態」誕生契機・仮説—大和物語と平中物語の交渉—」（『安田女子大学大学院文学研究科紀要』1号、平成8年3月。後に『国文学年次別論文集 中古2 平成8年』（朋文出版、平成10年3月）、「前期物語の成立と変貌 稲賀敬二 コレクション 2」（『笠間書院』平成19年7月）にそれぞれ再録）、妹尾好信氏の『大和物語』付載説話考—異本『平中物語』添加の経緯について—」（『説話論集 第九集』（清文堂出版、平成11年8月）後に『平安朝歌物語の研究（大和物語篇）』（笠間書院、平成12年10月）に再録）、「物語の成長—『大和物語』附載説話第二類の本文—」（『大和物語』の研究』、本書第一章第七節）、堤和博氏の『平中物語』の原型への一階梯—『平中物語』と『大和物語』附載説話の比較覚書』（『日本文学史論 島津忠夫先生古稀記念論集』世界思想社、平成9年9月）があった。雨海氏の前者は附載説話第一類（宮内庁書陵部蔵桂宮本、大和物語抄などに附載のもの、A類とも言う）と附載説話第二類（御巫本、鈴鹿本に附載のもの、B類とも言う）が密接な関係にあり、これらは同一祖本から別れたからこそ重複現象が起らなかったのではないかと推測されたもの。また後者では、御巫本の原型本となった大和物語証本の書写者が平中物語の残欠本を入手し、これを大和物語の一異本か何かと判断し、かつ連鎖的展開をも考慮して添加し、宇多天皇と関係厚く、大和物語に大きな位置を占める宗子の名が登場という章段になったのではないかと考えておられる。柳田の前者は、これらの章段がここに置かれた理由について、これらは章段の関連を配慮しており、また各章段の冒頭が宗子になっているのは、ここ以外で彼は身の不遇者として登場するから、これとは対照的な章段を配置し、虚構の現れとみたもの。また後者は附載説話第二類の本文を詳しく検討し、前者の論考を補足したものである。稲賀氏と妹尾氏のは大和物語附載説話の成立過程について考察されたものである。堤氏のは平中物語と附載説話第二類を比較し、附載説話第二類の書き換えの可能性が高いことを指摘しておられる。

江戸末期の国学者、井上文雄の著『冠注大和物語』に校異の形でみえる「古本」なる本文が御巫本や鈴鹿本の本文と一致するものが多い。おそらくこれは御巫本や鈴鹿本と同系統であったのであろう。なお、この古本は『校本大和物語とその研究』に校異の形で収められている。

四

第三類系統（高橋氏のQ系統）であるが、この系統に属する伝本は極めて少なく、現在まで知られているのは久曾神昇氏所蔵勝命本と九州大学附属図書館所蔵支子文庫本の二本だけにすぎない。前者は久曾神昇、山本寿恵子の両氏により、「未刊国文資料」の一冊として翻刻と研究がある（『勝命本大和物語と研究』未刊国文資料刊行会、昭和32年8月）し、同じく久曾神氏の解題で影印本も出ている（『大和物語 勝命本』汲古書院、昭和47年1月）。この本の研究については久曾神氏の前掲書に詳しい。即ち、この本は六条家と親交のあった勝命が仁和寺の守覚法親王あたりに献上したものの系統で、六条家の系統と推定され、その原形に近い内容を伝えていて、大和物語の原形を考える上で注目すべき資料とみておられる。このほか待遇表現からその性格を考察されたものに、小沢サト子氏の「大和物語勝命本の性格―待遇表現を中心に―」（『国語国文』44巻7号、昭和50年7月）がある。待遇表現で為家本との間に生じている異文は勝命本の改変によるものが大部分であり、これらは転写の際になされたと考えておられる。なおこの本は阿部氏の『校本大和物語とその研究』の増補版に追加校異され、また氏の『大和物語 校注古典叢書』（明治書院、昭和47年3月）にも為家本との校異が記されている。

一方、後者は一三四段以降の零本で、その存在はかなり早くから知られていたようである（阿部俊子氏「大和物語の伝本に就いて」）。しかし一般の目にふれられるようになったのは、かなり後になってからである。「田村専一郎氏旧蔵支子文庫本『大和物語』について（上）、（中）、（下）」（九州大学「文学研究」74、75、76輯、昭和52年3月、昭和53年3月、昭和54年3月、後に『王朝の物語と漢詩文』（笠間書院、平成2年2月）、『今井源衛著作集』第14巻 平安朝文学文献考』（笠間書院、令和元年5月）にそれぞれ再録）と題して詳しく紹介されたのは今井源衛氏である。即ち、これは先程の久曾神本の祖父本に位置し、現存する大和物語諸本の中で書写年代が最も古いものとのことである。これは零本というものの貴重な資料である。その後、今井氏の編でこれの影印本と解題、釈文とが刊行された（『大和物語（影印）、（解題・釈文）』在九州国文資料影印叢書刊行会、昭和56年5月）。この本についての研究は今井氏のほかに福田哲之氏の「勝命本大和物語考」（『島大國文』10号、昭和56年12月）がある。即ち、久曾神本一三三段以前の本文と勘注は第一類系統中、寛喜本系統の陽明文庫本に近いが、一三四段以降は異なっていることを指摘された。さらに支子文庫本と久曾神本との関係を字形から検討し、支子文庫本が久曾神本（一三四段以降）の直系の親本であることを述べられ、支子文庫本の書写年代について正治二年（一一〇〇）から延応二年（一二四〇）の四〇年間に限定された。この外に、前述した高橋正治氏の「大和物語PQ系統本の性格」があった。なお、日本大学図書館蔵大和物語鈔には勝命本系統の伝本からの校異を記している。これはこの系統の伝本の伝来を知る上で貴重な資料となろう（本書第四章第四節を参照のこと）。なお、本書については翻刻がある（『大和物語の研究』翰林書房、平成6年2月）。

五

最後に古筆切についてふれておきたい。これは非常に少ない。武田祐吉、水野駒雄の両氏の著になる『大和物語詳解』（湯川弘文社、昭和11年5月再版 昭和39年6月）には竹柏園蔵の伝慈鎮筆の断簡が写真版で紹介されている。『日本古典文学大系9 大和物語』（岩波書店、昭和32年10月）の解説には、御巫本、鈴鹿本によく似た本文を持つ二葉が報告されている。久曾神昇氏の「烏丸類切大和物語」（『かな研究』60号、昭和50年7月）は平安時代の大和物語の古写断簡と推定されたものである。この断簡については、同じく氏の著になる『仮名古筆の内容的研究』（ひたく書房、昭和55年2月）でも「伝藤原定頼筆大和物語切」と題して言及されている。本文は流布本に近いとのこと。藤井隆、田中登両氏の編になる『国文学古筆切入門』（和泉書院、昭和60年2月）、『続国文学古筆切入門』（和泉書院、平成元年4月）、『続々国文学古筆切入門』（和泉書院、平成4年5月）が上梓された。前者には伝慈円筆六半切が紹介されている。これは大和物語三九段の後半で、この本文も御巫本や鈴鹿本に近いとのことである。次には伝後二条天皇宸筆六半切が紹介されている。本文は大和物語一七二段の後半の部分で流布本に近いとのことである。また後者には伝石井了派筆四半切が紹介されており、これは室町中期の書写で、本文は蓬左文庫本などに近いと言う。なお、これら三葉はいずれも藤井氏の所蔵になるものである。この外、高橋正治氏が紹介されたものに「北野克氏所蔵大和物語断簡の本文の系統」（『清泉女子大学紀要』34号、昭和61年12月）がある。これもその本文は御巫本、鈴鹿本の系統に属するものとみておられる。伊井春樹氏の編になる『古筆切資料集成 卷四 懐紙・散文・連歌』（思文閣出版、平成2年6月）には後二条天皇大和物語百七十二段六半切（『続国文学古筆切入門』）、後水尾天皇大和物語二十六・二十七段大和物語切（『当市木下家所蔵品第一回入札』）、同四十五段大和物語切（『古今墨林』・同百六十一段大和物語切（『旧姫路藩男爵武井家蔵品入札』）、俊成百二十段大和物語切（『日本の古典』）の五葉が翻刻されている。また、小松茂美氏の著になる『古筆学大成23物語・物語注釈一』（講談社、平成4年6月）には、大和物語の古筆切六葉を写真版（原寸大）で掲載している。即ち伝紀貫之筆大和物語切二葉、筆者未詳大和物語切（近衛家照模写）、伝慈円筆大和物語切、伝覚源筆大和物語切、伝後水尾天皇筆大和物語切各一葉がそれである。氏の解説によると、伝紀貫之筆切の前者は個人蔵で六四段、後者は昭和美術館蔵で一二〇段の、それぞれ一部で定家本、六条家本のいずれにも合致しない本文を有しており、平安時代後期、院政時代における大和物語の本文を伝える希有な資料という。次に筆者未詳切は陽明文庫蔵で一六八段の一部。十二世紀初頭の頃の伝本の存在を示しており、本文研究上の重要な資料とのこと。また、伝慈円筆切は個人蔵で八段の一部、これも十二世紀初頭の一伝本の姿を示し、この切の原本は六条家本、定家本に対立する異本の一つであったという。さらに伝覚源筆切は弥彦神社蔵で

九八段の末尾。十三世紀半ば過ぎの書写で、本文は御巫本、久曾神昇氏蔵勝命本に適合し、当時における六条家本の伝流を考察する上で貴重な資料になるといえる。最後の伝後水尾天皇筆切は個人蔵で一〇三段の一部。室町時代の書写になるといえる。本文は流布本に近いとのこと。久曾神昇氏の編になる『物語古筆断簡集成』（汲古書院、平成14年1月）には氏所蔵の大和物語の断簡が掲載されている。即ち伝藤原有家筆大和物語（甲）、伝藤原有家筆大和物語（乙）、伝津守国冬筆大和物語、伝後水尾天皇宸翰大和物語、伝高階重経筆古今集注（大和物語）の五葉がそれである。いずれも影印のみならず、翻刻、解説が付されている。⁽¹⁵⁾この外、小島孝之氏が紹介されたものに「井上宗雄氏所蔵古筆手鑑について」（立教大学日本文学）68号、平成5年7月）があった。伝石井了派筆で大和物語七八く八一段のもの。本文は流布本に近い。

大和物語の古筆切は少ないというものの、このような形で集成、かつ紹介されたのは貴重である。これらの中には異本に近いものもあり注目される。今日でこそ大和物語の異本は数少ないが、かつては異本が多く存在していたのであろう。今後はこれらを資料にして研究の発展を期待したい。なお『古筆学大成28 釈文三』（講談社、平成5年11月）には釈文が施され読解の便宜がはかられている。

六

大和物語の伝本について、その研究状況をはじめ、影印や翻刻の状況等につき概観してきた。各系統内の伝本の関係はほぼ明らかにされつつあるが、特に定家本内における伝本帰属の問題が残っている。それと第一類、二類、三類の関係となるとほとんど不明である。この解決にはあらゆる角度から研究が必要なことはいうまでもない。と同時に新しい資料の出現が望まれよう。近年、古筆切が見直されつつあるが、その多くの出現を期待し、活用することも研究の進展につながるのではないか。

ともかくその成果は今後に俟つべきであり、そのためには現存の資料と今までの研究成果を基本に置いて一步一步前進すべきであろう。

注(1) 「紫ノ一本ト云ハ大和物語云舒明天皇ノ御時笠清丸ト云モノ武蔵介ニテスミケル時ニ上洛ストテ妻ヲ留テ上リヌ妻アトニテ病死ス夫下テ妻ノ死亡セル

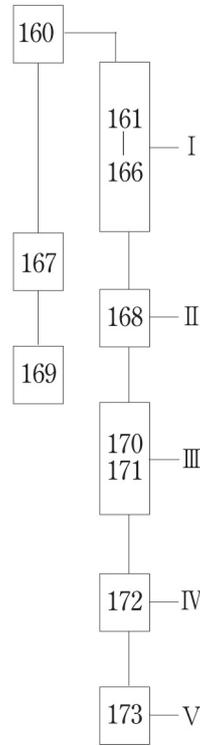
野ヲ見レハ紫ノハカマハカリ有テ主ハナシコキハカマ朽テ紫トナレリコレヨリ紫ノ一本ユヘニ草木マテモ武蔵野中ハナツカシト云リ」〔昆沙門堂本古

今集注〕（片桐洋一氏編 八木書店 平成10年10月）に拠る

(2) 「宇治大納言物語云平仲定文は女のもとにゆきてなくまねをして硯の水入をふところにもちて目をなんぬらしけるを女心えて墨をすりて入たりけるを

しらて又ぬらしければ女かゝみをみせてよめる我にこそつらさは君かみすれとも人にすみつくかほのけしきよ大和物かたりにも此事あり、「伊勢物語むかし男いもうとのおかしきをみおりにうらわかみねよけにみゆる若草を人のむすはんことをしそ思ふときこえける返し初草のなとめつらしきことのも葉そうらなく物を思ひけるかな琴の事伊勢物語には無所見在大和物語うらなくものをといひたる姫君もされて以前返歌也」(『河海抄 伝兼良筆本一、二天理図書館善本叢書70、71』〈解題長崎健氏 八木書店 昭和60年3、5月〉に拠る)

(3) 氏の言われる「和歌二百七十首此内連歌三首」本とは、次の図からI II III IV Vを除いたものであるとのこと。I～Vは成立順序を示す。



(4) 高橋氏の指摘された公忠集と大和物語との関係において見られる連歌の問題をとりあげてその妥当性を考えたもので、氏の考えには納得できないと言われている。

(5) 問題となる「おもふらん」の歌について、この歌は連歌になっていての方が正しいことを論証されている。

(6) このほか、片桐洋一氏は第一類系統をすべて定家本系統と称している。そしてこの中で書写年月を奥書に記さない本は、おおむね初期の書写が軽い気持ちでの書写。研究が進み、自他共に認められるようになったところには、その書写の年号を奥書に記したのではないかと推定されている(『鑑賞 第5巻 日本古典文学』)

伊勢物語・大和物語 角川書店、昭和50年11月。また、迫氏も次のように系統分類されている(『大和物語 永青文庫本』 勉誠社、昭和57年5月)。

第一類 流布本系統

(一) 定家自筆本系統

A 寛喜本系統

B 天福本系統

C 桂宮本系統 (永青文庫本も含む)

(二) 為氏本系統

(三) 為家本系統

第二類 異本系統

(一) 六条家本系統 (御巫本、鈴鹿本)

(二) 勝命本系統 (支子文庫本、久曾神博士所蔵本)

- (7) 為家本を底本としたものに『改造文庫大和物語』(水野駒雄氏校註、改造社、昭和13年1月)、『校本大和物語とその研究』(阿部俊子氏著、三省堂、昭和29年6月、増補版 昭和45年10月)、『日本古典文学大系大和物語』(阿部俊子氏・今井源衛氏校註、岩波書店、昭和32年10月)、『大和物語 校注古典叢書』(阿部俊子氏校註、明治書院、昭和47年3月)、『大和物語の注釈と研究』(柿本獎氏著、武蔵野書院、昭和56年2月)、『校注大和物語』(柳田忠則編、新典社、昭和63年4月)、『大和物語評釈 上巻、下巻』(今井源衛氏著、笠間書院、上巻、平成11年3月 下巻、平成12年2月)がある。また為氏本を底本としたものに『日本古典全書大和物語』(南波浩校註、朝日新聞社、昭和36年10月)、『大和物語 有精堂校注叢書』(雨海博洋氏校註、有精堂出版、昭和63年3月)、『大和物語全釈』(森本茂氏著、大学堂書店、平成5年12月)、『大和物語 (上)、(下) 講談社学術文庫』(雨海博洋氏・岡山美樹氏著 講談社、平成18年1、2月)がある。これらのうち、阿部氏の『大和物語 校注古典叢書』、柿本氏の『大和物語の注釈と研究』、柳田の『校注大和物語』、南波氏の『日本古典全書』、雨海氏の『大和物語 有精堂校注叢書』、森本茂氏の『大和物語全釈』、今井源衛氏の『大和物語評釈 上巻、下巻』、雨海、岡山両氏の『大和物語 (上)、(下) 講談社学術文庫』は先程の複製本に拠っている。
- (8) 片桐洋一氏の『鑑賞 第5巻日本古典文学 伊勢物語・大和物語』、高橋亨氏の『竹取物語・大和物語 日本の文学古典編』(ほるぷ出版、昭和61年9月)もこれを底本にしている。
- (9) 「太宰府天満宮所蔵、近世初期写。墨付七拾七枚、巻頭一葉を欠く。天福元年十二月廿九日、同二年正月十六日の各々の識語、応永廿一年五月十日、文安三年五月四日智蘊の各奥書、巻末に信誠の署名などがある。巖島神社野坂本と同系統の天福本」とある。
- (10) これらのほかに、『訂正 再版国文註釈全書十』(本居豊顕氏・他校訂、皇学書院、大正3年5月)、『大和物語古註大成』(国文名著刊行会、昭和9年11月)、『大和物語古註釈大成』(日本図書センター、昭和54年6月)、『大和物語諸注集成』(桜楓社、昭和58年5月)に収められている。
- (11) 活字化されたものに『群書類従 第十一輯 物語部』(経済雑誌社、明治27年3月)、『校群書類従 第十四巻 物語部』(校訂井野邊茂雄氏、内外書籍株式会社、昭和3年9月)がある。

(12) この外、「玉英堂稀覯本書目」207号(平成4年5月)に「奈良絵本大和物語」が掲載された。その解説によると、絵二十五図、寛文延宝頃の書写で引

かれている本文は尊経閣蔵伝為家筆本にほとんど一致するという。

- (13) 平成8年11月8、9日の東京古典会古典籍下見展観に出品（『古典籍下見展観大入札会目録』平成8年11月 主催東京古典会）
- (14) これ以前に氏により「故田村専一郎名誉教授旧蔵支子文庫本「大和物語」について」（九州大学図書館情報）12巻1号、昭和51年3月、「支子文庫本「大和物語」」（九州大学大学広報）438号、昭和51年6月、「支子文庫本大和物語のことなど」（天理図書館善本叢書月報）29、昭和51年7月に報告されたが、これらをふまえて詳細に考察されたものである。本文について、支子文庫本が六条家本系統であることには違いないが、平安末に存在した六条家本諸本中の位置づけの困難さを説き、この本に存在する校異注記がそのヒントになろうと言われている。また、勝命本原本の面影を残していると言われている勘注について、その全文を翻刻し、人名、出典、書目について検討され、注釈者の慎重な態度を見い出されている。
- (15) この五葉の本文について『校本大和物語とその研究』に対校した（「最近における『大和物語』研究文献（十）」平成十四年一月より平成十七年十二月に至る）（『総合文化研究』12巻1号、平成18年6月 後に『大和物語研究史』（翰林書房、平成18年11月）に再録）。

第二節 伝為氏筆本『大和物語』の研究

大和物語の伝本は大きく二条家本系統と六条家本系統に分けられる。伝為氏筆本大和物語以下、為氏は前者に属し、かつて池田亀鑑氏の解説で「古文学秘籍叢刊」の一冊として複製刊行された。⁽¹⁾それゆえ該本の体裁や伝来等の詳細についてはそれに譲る。ただ、これが刊行されてからかなりの年月を経っており、その間にあつて為氏本自体、所蔵者が変遷し、現在は国立歴史民俗博物館の所蔵となっている。この度、同館の御厚意により為氏本を調査する機会を得たので、池田氏が解説でふれられていないところや、為氏本の変遷を補いつつ改めて簡略に記しておきたい。

為氏本は三条西家旧蔵であるが、永く同家に伝えられてきたものではなく、同家が戦前に本郷の古書肆から購入された由である。⁽²⁾該本は二重の箱に納められている。外箱は杉材で、蓋の中央に「二条家為氏卿大和物語上下二冊」とあり、その下に「大嶋蔵書」の印と、蓋の右下に「大島雅太郎」の名刺が貼付されている。内箱は精巧な金の梨子地、蓋の中央に「大和物語」の四字を金にて題す。該本は縦十五・〇センチの升型本。表紙は緑色の地に金の菊花文様を織る金襴、その上左端に「大和物語上(下)」と題簽を付している。見返しは金銀散らし雲形の模様。本文は一面十一行、和歌は二字下げ二行書き。墨付上冊五十丁・下冊八十三丁で、上冊の見開巻頭の左端上に極札、「為氏卿大和物語一冊(印)」、「大和物語二条為氏卿(印)」を貼付し、見開巻頭の中央真中に「をばま」の印と最後の遊紙の表右下に「をばま」、「青谿書屋」の印がある。また、下冊の見開巻頭の中央に「をばま」の印と最後の八十三枚目表の左下に「をばま」と「青谿書屋」の印がある。その裏は白紙になっている。該本は極札に見えるごとく為氏筆と伝えられているが、にわかには断定できない。ただ、すでに指摘されているように鎌倉時代中期を下らない書写とみてよからう。⁽³⁾戦後、三条西家を出て、小汀利得氏に移り、その後、一誠堂書店を経て、前述したように現在、国立歴史民俗博物館蔵(H-133)になっている。重要文化財に指定されている。なお、

前記の複製本は、今日では稀観本となつてしまつたが、その後、「国立歴史民俗博物館貴重典籍叢書」の一冊として影印刊行された。⁽⁴⁾

大和物語の伝本の多くが室町時代以降の書写になる中で、為氏本は前記のごとく鎌倉時代中期を下らない書写と推定されており、伝為家筆本大和物語⁽⁵⁾以下、⁽⁵⁾為家と並んで重視されてきた。それと、大和物語の伝本には定家本も存在していることから、当然、定家から為家、さらに為氏への相伝が考えられよう。それを探る手立てとして池田亀鑑氏は為家本に定家本、為氏本を対校し校異表を作成された。⁽⁶⁾そして、これら三本間の異同数を次のように集計しておられる。

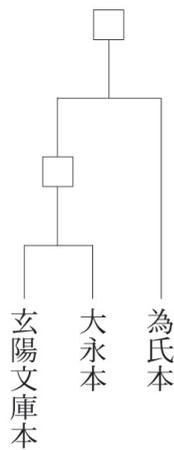
為家本と為氏本との異同数 七二五

為家本と定家本との異同数 二八一

為氏本と定家本との異同数 六六二

この結果、為家本と定家本は比較的近いが、為氏本は両者から離れていることがわかる。

その後、為氏本と同系統の大永本⁽⁷⁾が、さらに玄陽文庫本⁽⁸⁾がそれぞれ出現した。大永本の本文については新藤協三氏による詳細な研究がある。⁽⁹⁾氏は為氏本系統の本文批判を行う上で大永本の意義を述べておられる。また、高橋正治氏は為家本を底本にして大永本と玄陽文庫本を対校された。⁽¹⁰⁾そして、これら三本間の異同を統計処理し、これらの関係を次のように位置づけておられる。



これはこの系統の伝本研究において大きな進展であつた。高橋氏もその中で指摘されているように、これら三本の関係からみても為氏本は特異な存在である。また、鈴木裕史氏は為氏本の敬語表現や語法から、その本文について言及された。⁽¹¹⁾その結果、為氏本の本文には破格のものが散見し、これらは成立時の言語を伝えていないと言われる。この原因として書写当時の言語状況にあることを指摘されている。そして、A系統^(高橋氏の分類による)内諸本は玄陽文庫本が最善本で、その次が大永本、最下位が為氏本という序列を示された。具体的に言及されている点は注目されよう。ただ、氏の言われる「書写当時の言語状況」とはどのような状況を言うのか、より詳しい研究が望まれる。

そこで、本稿においては、先学が指摘された様々な現象はどのようなことに由来するのか、その一端を考察してみようと思う。

さて、その方法であるが、前述した池田氏の校異表に大永本、玄陽文庫本を対校してみた。その際、大和物語の校本類を参照した⁽¹²⁾。その結果、これら三本が共通する箇所は多く、これは当然の結果と言えよう。ただ、そこにはこれら三本のみでなく、他の伝本も共通している場合もある。それも二本の場合、あるいは数本の場合と一定でない。そういうわけで、とりあえず何か特徴的なものを見い出すために為氏本と玄陽文庫本のみと共通する場合、為氏本と大永本のみが共通する場合に分けて考えていきたい。まず前者に該当する箇所をあげてみよう。

| 番号 | 章段 | 為氏本・玄陽文庫本の本文 | 為家本の本文及び異文 |
|-----|-----|-------------------|-------------------|
| (1) | 6 | あさたゝの中將の みちのくの | ナシ みちのくにの |
| (2) | 58 | みちのくの | みちの国の(巫) 国の(鈴) |
| (3) | 92 | くれさらめやと このこともゝ | くれさらめやはと ナシ |
| (4) | 144 | このこともゝ | ナシ |
| (5) | 156 | むかしのことくにあらず | ことくにも |

(注) 「為氏本・玄陽文庫本の本文」は為氏本を底本にした。圏点は異同の対象を、何も付けていない箇所は全体がその対象であることをそれぞれ示している。

伝本略号は以下の通り。巫(御巫本)・鈴(鈴鹿本)。これらは以下も同様。

為氏本と玄陽文庫本のみとはいうものの、今後、新しい資料が出現し改められるかもしれないが、これはあくまでも現段階でのことである。このことは後者や独自異文についても同じである。

為氏本と玄陽文庫本との共通数は少ないが、何らかの関係は認められよう。このうちどれをみてもいづれが妥当であるのか判断できない。ただ、(4)においてこの箇所では共通しているものの、その前を見ると玄陽文庫本は「このことも」とあり意味が異なる。ここは為氏本の誤写か改変であろう。

| 番号 | 章段 | 為氏本・大永本の本文 | 為家本の本文及び異文 |
|------|-----|--------------|-------------|
| (1) | 17 | ナシ | となんいへりければ |
| (2) | 23 | 陽成院の二条のみこ | ナシ |
| (3) | 37 | いつも | いつもかはらから |
| (4) | 44 | たれかきさらんぬれきぬは | ぬれころも |
| (5) | 64 | とうかはり | とはかりありて |
| (6) | 81 | 敦忠のきみおはしけるころ | おはしける |
| (7) | 103 | いろをこのむわさは | おはしけり(玄・図) |
| (8) | 〃 | たれにとあるふみ | いろ |
| (9) | 〃 | 給こともありとも | 色(巫・鈴・衆・図) |
| (10) | 105 | みれはふみなとみえける | ナシ |
| | | | ありとも |
| | | | もあらめ(巫・鈴) |
| | | | ふみなむ |
| | | | 文なん(巫・鈴) |
| | | | ふみなん(抄・類・衆) |

大永本には「イ」として校異が記されている。高橋正治氏は、この校異に依拠した伝本は為氏本系統の一本であること、大永本における校異の本文文化は存在しないことを指摘されている。⁽¹³⁾ 確かに大永本の「イ」には為氏本の本文の多くが共通している。だが、ここにあげた為氏本・玄陽文庫本の本文は大永本の校異に採用されていない。大永本はあれほどまで丹念に多くの校異を記しているのにひとつもないということはどう考えたらよいのか。憶測するに、大永本書写者が校異に依拠した伝本に異同がなかったから記さなかったのか、それともこれらの本文は大永本書写者が校異に依拠した伝本より後に成立したかのいずれかであろう。しかし、ここではいずれとも断定できない。それにしても為氏本が複雑な生成を経ている一面を垣間見ることができよう。これは後者についても同じことが言えよう。

さて、次に後者であるが、その数は多く前者の約十倍になる。今、それらをあげてみることにする。

| (27) | (26) | (25) | (24) | (23) | (22) | (21) | (20) | (19) | (18) | (17) | (16) | (15) | (14) | (13) | (12) | (11) | | | | | | | | | | |
|-------------------------------------|--------------|-----------|---------------|-----------|-----------|-----------|------------------------------------|----------------|----------------------|-----------------|---------|-----------------------------------|---------------------------|---------------|-----------|---------------|-------|---------------|-------------------|-----------|----|-------|----------|----|-------|---------------|
| 148 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 147 | 146 | 145 | 142 | 〃 | 141 | 137 | 134 | 126 | 106 | | | | | | | | | | |
| た。ま。ひ。け。る。ほ。ど。に。〔タダシ大永本ハ 給ひける程に〕 | つ。ぎ。て。あ。け。り。 | さ。め。て。の。ち | い。と。を。そ。ろ。し。と | た。ち。な。ん。と | | | こ。と。く。に。の。ひ。と。〔タダシ大永本ハ こと国の一人ハ〕 | あ。る。い。は。〔ひ〕トアル | を。な。し。や。う。な。り。け。れ。は。 | | | ほ。か。の。た。よ。り。あ。り。て。本ハ〔有て タダシ大永〕 | み。め。く。り。つゝ | 人。に。し。も。し。ら。せ | 野。の。大。貳 | い。つ。も。み。し。か。と | | | | | | | | | | |
| 給。け。り。〔巫・鈴・類・衆〕 | た。ま。ひ。け。り | さ。め。て | ナシ | な。ち。な。と | 人。を。は。〔鈴〕 | 人。は。〔巫・光〕 | ひ。と。の | あ。る。は | ナシ | 七。郎。君。〔巫・鈴・類・図〕 | 七。ら。う。君 | ナシ | な。ら。な。く。に。と。お。も。ひ。て。〔巫・鈴〕 | ナシ | に。も。あ。ら。す | ナシ | た。よ。り | か。た。よ。り。〔巫・鈴〕 | た。よ。り。よ。り。〔抄・類・衆〕 | た。よ。り。〔親〕 | ナシ | た。よ。り | め。く。り。つゝ | ナシ | 野。大。貳 | い。つ。と。み。し。か。と |

| (40) | (39) | (38) | (37) | (36) | (35) | (34) | (33) | (32) | (31) | (30) | (29) | (28) | | | | | |
|--------|----------------------------------|-----------------|--------------------|-----------------------|---|---|---|---------------|---|---|-----------|--------------------------------|--------------------------------|------------------------------|-----------|-------------|----------------------------|
| 165 | 162 | 160 | 158 | 157 | 〃 | 155 | 〃 | 152 | 150 | 149 | 〃 | 148 | | | | | |
| さい中将の。 | うち。に。さ。ふ。ら。ひ。け。る。に | あ。ら。ひ。な。と。す。る。人 | や。ま。と。の。く。に。お。と。こ。 | お。と。こ。に。か。く。と | も。の。な。と。も。く。は。て <small>大永本ハ</small> 「物。な。と。」 | い。て。た。ま。ひ。た。り。け。る <small>大永本ハ</small> 「出。給。ひ。」 | よ。の。な。か。の。人。す。え。を。は <small>大永本ハ</small> 「す。え。を。は。」 | お。ほ。し。め。し。た。る | し。た。ま。は。さ。り。け。れ。は <small>大永本ハ</small> 「給。は。さ。り。」 | こ。ろ。に。は。か。き。り。な。く <small>大永本ハ</small> 「心。に。は。」 | め。を。と。め。て | を。さ。な。き。も。の。な。り。と | | | | | |
| ナシ | さ。ふ。ら。ひ。給。ふ <small>(巫・鈴)</small> | あ。ら。は。ひ | お。と。こ。女 | ナシ <small>(鈴)</small> | お。と。こ。に | 出。た。り。け。る <small>(玄)</small> | い。き。た。り。け。る <small>(巫・鈴)</small> | も。と。を。は | お。ほ。し。た。る | し。け。れ。は | 心。ち。に。は | 心。を。お。さ。め。て <small>(抄)</small> | 心。を。お。さ。め。て <small>(類)</small> | 心。と。め。て <small>(巫・鈴)</small> | 心。を。と。め。て | な。の。や。う。な。る | 給。ひ。け。り <small>(図)</small> |

| | | | | | | | | |
|---|------|------|------|------|------|------|------|------|
| (49) | (48) | (47) | (46) | (45) | (44) | (43) | (42) | (41) |
| 172 | 171 | " | 169 | " | " | " | " | 168 |
| <p>おとにもみゝにも</p> <p>心ちのし侍らざり とはせたまえることに</p> <p>えかくれえてあはてかへりにけり さらになにけてうせにけり やまとのくにゝくたりて</p> <p>おとみゝにも とみにも(巫・鈴) をと(抄一本) も ナシ えかくれあへてあひにけり なしにけてうせぬ けり ける(親) けり<small>るゝ</small>(玄) ち おはしますらん おはしますにやあらん(鈴) 御そう</p> | | | | | | | | |

(注) 「為氏本・大永本の本文」は為氏本を底本にした。伝本略号は以下の通り。類(群書類従本)、玄(玄陽文庫本)、凶(宮内庁書陵部本)、光(光阿弥陀仏本)、親(親長本)、抄(北村季吟の拾穂抄本文)、抄一本(拾穂抄の中で校異に示している一本)。これらは以下も同様。

為氏本と大永本の密接な関係が理解できよう。このうち(1)(4)(28)(31)(33)(36)については新藤氏により指摘されている。⁽¹⁴⁾ただ、問題は、大永本にみられる校異をどう考えるかである。つまり、ここでは密接な関係を示しているのに、前述したように大永本では為氏本系統の一本を「イ」とみているのである。いわばこうした矛盾をどう理解したらよいのか。思うに為氏本と大永本は淵源を同じにして、転写過程で異同を生じていたのであろう。そこでは様々な現象をみる事ができる。目にとまった主な箇所をみていこう。

まず(33)であるが、この前後の本文は「ゆみやなくひたちなどいれてそうつみける」^(傍線は稿者。以下も同様。)とあり、ここは埋葬品を記していることから「たちなど」が正しい。また、(33)(37)(49)において為氏本^{大永本も含めて。以下も同様。}は不自然である。因に(33)は和歌の上句のことであるから当然、「もと」が正しい。(37)はその後に「とし月かきりなく思てすみける」とあるから「おとこ女」とあるのがよい。(49)において、ここは荘園の意であるから「御さう」がよい。また、(14)(31)(34)

は敬語に關した異同である。為氏本には尊敬の意が加わっている。その対象となる人物は順にとしこ、采女、大納言の女で、いずれも女性である。大和物語の敬語に關しては柿本燮氏の研究があり、それによるとこれらの人物はその対象から外れている。事実、としこは他の章段にも登場するが、ここでは使われていない。ここでも為氏本は改めたのであろう。さらに(2)や(5)においても為氏本は改めたのであろう。全体にわたりふれたわけではないので、早急な結論は慎むべきであるが、ただ少なくとも為氏本には転写過程で生じたと思われる後世的な要素を含んでいると言えよう。

こうしてみると、これらの伝本の関係の度合いがそれぞれの共通数にも現れていた。大永本と玄陽文庫本は為氏本と淵源を同じくし、生成していったものと考えられる。と同時にこれらの共通する箇所から為氏本の生成過程における複雑な一面を垣間見ることができよう。

三〇一

為氏本に独自異文が多く存することは以前から指摘されてきた。⁽¹⁷⁾しかし、これがどのような事情によるのかについてはそれほど言及されていない。そこで以下においてはこれを探ってみよう。

為氏本の本文をみると、他の伝本に比べて人物や敬語などで様々な異同がみられる。今、その主な箇所をあげてみる。

| 番号 | 章段 | 為氏本の本文 | 為家本の本文及び異文 |
|-----|----|-------------|---|
| (1) | 11 | たてまつりてはなれ給て | たてまつり給てのちはなれたまひて |
| (2) | 26 | かつらきのみこ | かつらのみこ |
| (3) | 43 | ナシ | 桂のみこ <small>かつらきイ</small> (大) |
| (4) | 81 | 故権中納言敦忠の君 | となむいひたりける となむいひけるは(巫・鈴) となむいひたりける(類・抄) 故権中納言の君 |

| (14) | (13) | (12) | (11) | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) |
|------------------|--------------|-----------|---------------|---------------------------------|-----------|------------|--------------|------------------|--|
| 135 | 125 | 123 | 106 | 103 | 100 | 93 | 91 | 86 | 81 |
| うちの殿上をなんしける | こみきのおとくにまうて | 人のもとに | ものきこえなんとはすれども | すえなはの少将すみ給けるころ おもひさためにおもひけるに | | よはひてたてまつりて | おもひそめてん | ナシ | たてまつりたまひける |
| をなんし給ける(巫・鈴・類・衆) | をなんしたまふける(抄) | をなむしたまひける | 故左のおほいと | 故左の大井殿(巫・鈴) | 故左のおほと(抄) | をなむしたまひける | をなんしたまふける(抄) | をなんし給ける(巫・鈴・類・衆) | たてまつりける たてまつり給 ^給 ける(大) ふとよみたりける ふとよめる(巫・鈴) よせてむ よせけん(鈴) よせてむ(大) たてまつりたまふ たてまつり給(玄・大) すみける 思ひさめて 思ひさめて(大) 思ひてさめて(鈴) なとはすれと なとす(巫・鈴) なとすれと(抄・類・衆・凶・光・玄) なとすれとも(大) 人のもとはしらす 人のもとにはしらす ^{にイイニ無} (大) 故左のおほいと 故左の大井殿(巫・鈴) 故左のおほと(抄) をなむしたまひける をなんしたまふける(抄) をなんし給ける(巫・鈴・類・衆) |

| (20) | (19) | (18) | (17) | (16) | (15) |
|---------|----------------|--------------|------------|-----------|--------------|
| 170 | 168 | 154 | 141 | 〃 | 137 |
| やまひもなん。 | あはれになんなきたまふなる。 | たつたやまいはねをさして | このうはなり。 | かきつけたまひける | しかにまうてたまひける。 |
| ナシ | なきわふるなる(鈴) | なきわふるなる(大) | うはなりこなみ(大) | かきつけたりける | をなんし給ひける(図) |

(注) 伝本略号は以下の通り。衆(為衆本)、大(大永本)。これらは以下も同様。

個々にあたってみることにしよう。(1)(5)(8)(9)(14)(15)(16)(19)は敬語に關した異同である。前述したように大和物語の敬語については柿本獎氏の研究がある。それによると、敬語の付かない人物として上達部に入らない人々、受領階級、僧、女房、無名の人を指摘しておられる。これは全章段にわたり統一されているようである。先程あげた(1)(8)(14)において、為氏本は敬語を用いていない。因にその対象は誰かという点、(1)の場合、故源大納言である。彼のその地位が参議であるから、柿本氏の考えによれば当然、用いてもよいはずである。彼は三段にも登場し、為氏本は敬語を付けている。また、(8)(14)もその対象がそれぞれ故権中納言、堤中納言であるから、敬語を付けてよいはずである。これ以外で二人が登場する九三、一三五段をみると敬語が付けられているのである。やはり敬語を付けて統一しているのが本来の姿であろう。為氏本は手を加えているとみてよからう。

一方、これらとは反対に(5)(9)(15)(16)(19)において、為氏本では敬語を付けている。因に(5)はその対象が季繩の少将の女房達である。この章段のこれ以外のところでも女房達は登場しているが、ここでは敬語を用いていない。ここだけというのも不自然である。(9)はその対象が季繩の少将である。彼は少将^{五位}であるから、柿本氏の考えによると付かない人物になる。事実、彼はこの外、八一、一〇一段に登場しているが、ここでは敬語を付けていない。

(15)と(16)はその対象がいずれもとしこである。彼女については先程の為氏本・大永本の本文のところでも敬語を付けており、ここも為氏本は改めたのであろう。(19)は五条後の供がやつとのこと、良少将を捜し出し、供が五条後の言葉を用いて伝える場面での異同である。この引用文の中で良少将の動作には敬語を使っているが、この対象は良少将の家族になることから用いる必要もあるまい。

人物や地名の異同に関したものに(2)(4)(13)(18)がある。(2)において為氏本は「かつらぎのみこ」とある。大和物語でかつらぎのみこなる人物が登場するのはこのみであるのに対し、桂皇子は七章段に登場している。ここは桂皇子とあるのがよからう。この章段にある「それをだに」の歌は古今集にある読人しらずの作である。それゆえここは虚構の章段と推測される。⁽¹⁸⁾ 憶測の域を出ないが、あるいはそのようなことが為氏本のような本文を生じさせた一因ではないか。(4)において、為氏本は故権中納言が誰かをより具体的にするために敦忠を付加したのであろう。また、(13)において為氏本は「こみきのおと」とある。ここは泉大将、即ち藤原定国が故左大臣邸^{時平邸。為氏は故右大臣。}を訪問する場面である。もし、為氏本のように故右大臣が一二五段に登場する師輔であるとするならば、彼は九〇八年に生まれ、九六〇年に没している。⁽¹⁹⁾ 一方、泉大将は八六七年に生まれ、九〇六年に没していることから二人が接することは考えられない。それゆえここは為家本の方が妥当と考えられる。最後の(18)は和歌における「山」と「川」の違いである。上句に「岩根をさしてゆく水の」とあるから、「川」とあるのがよい。為氏本はこの贈歌に「たつたの山」^{傍点は稿者。以下も同様。}とあるからそれに合わせたのであろうか。確かにここにある贈答歌にはそれぞれ山と川が詠まれ、やや変則的になっている。為氏本をみると、「山」の傍に「川」が記されており、その一面を窺わせよう。

(3)(6)(17)において、為氏本はいずれも本文を欠いている。為家本により(3)と(6)の本文の前後を記してみると次のようになる。

(3) といひやりたりければ
なにはかり……

(6) となむいひたりける横川といふ所にあるなりけり

ふとよみたりける

今日よりは……

とよみたりければになくめてたまひて

傍点を付したように和歌を挟んで前後にはほぼ同じような本文がある。そのために為氏本はいずれか一方を削除したのであろう。(17)は次の本文の中での

異同である。

おとこもきたりけりこのうはなりこなみひとよゝろつことをいひかたらひて

本妻は男(夫)より一足早く山崎に来ており、男は少し遅れてやつて来た。それを「おとこもきたりけり」という本文で示している。この場で三人になったわけであり、しかも「よろつのことをいひかたらひて」とあるから、為氏は二人で語り明かしたととり、「こなみ」を削除したのであろう。しかし、悲痛の中、筑紫へ帰る女の心を最もよく理解していたのは本妻にほかならなかった。そのため、二人になり語り明かしたのである。為氏本のようにだと、文脈にかたよりすぎで、内容そのものにはそれほど踏み込んで考えていないように思われる。

これら以外のところをみることにする。(12)は和歌を贈る相手についての異同である。為氏本のようにだとなく違和感をおぼえる。それはこの章段をみると、人物はもとより、場所さえも記されていないからである。そのために「やれる人のもとはしらす」^{タタシ}「やれる」^{ナシ}という本文になっているであろう。為氏は「やれる人」というところに重きを置き改めたのではあるまいか。(10)は酒を飲んだことと関連していると思われる。ここは文脈から「酔いから覚めてしようと思っていたとき」の意になり、為氏本のようにだと「おもひさためにおもひけるに」となって「おもひ」が連続しており不自然の感をまぬがれない。(20)において、為氏は「やまひもなんつくものになんありけると」となり、「なん」の連続で語法上から考えて不自然である。

以上、様々な例をみてきたが、これらの本文の成立をいかに考えたらよいのか。(2)(7)(10)(17)などをみると、大永本は「イ」と校異を記している。しかもそれには為氏の本文が共通していることから、この限りにおいて大永本の書写者は為氏本系統の伝本をみていたことになる。問題はこれらを除いた本文、即ち為家本と大永本とが共通している本文や(8)(11)のように大永本には「イ」と記されていないのである。後者の場合、ここであげた為氏本文の劣性から考えて、少なくとも大永本の依拠した為氏本系統の伝本よりも後に成立した本文とみてよからう。しかし、前者の場合、ここからだけでは何とも言えない。ともあれ、為氏本生成の複雑な一面をみる事ができたと思う。

III

現存の為氏本は何度かの転写を経て成立したものと推測される。このことは今までの考察からも理解できたと思う。次にその過程で生じたと考えられる現象をみていきたい。まずその用例をあげてみる。

| 番号 | 章段 | 為氏本の本文 | 為家本の本文及び異文 |
|-----|-----|---------------------------------|--|
| (1) | 23 | のち、俊 <small>俊</small> かけの中將のむすめ | のちかけ 千蔭 <small>千</small> (巫・鈴) 俊蔭 <small>俊</small> (大) |
| (2) | 25 | 念明覚 | としかけ <small>抄</small> ・類 後蔭 <small>光</small> ・衆・凶 明 <small>明</small> 念覚 明覚 <small>天</small> (天) |
| (3) | 95 | 式部卿敦実 <small>アツ</small> なんと | ねんかく <small>大</small> 式部卿の宮なむ 式部卿宮 <small>大</small> なん <small>大</small> 式部卿宮 <small>天</small> なん <small>天</small> |
| (4) | 148 | たにものしたまはんそ | なし物給ひそ たにものしたまひそ <small>大</small> ・玄 物し給そ <small>巫</small> ・鈴 |
| (5) | " | ものなといと | 物いと 物なと <small>大</small> |
| (6) | 168 | ゐたるへきところにも | ナシ <small>巫</small> ・鈴 ゐるへくも ゐたるへくも <small>大</small> ならふへくも <small>巫</small> |
| (7) | " | ときたにとてもかくても | 時たにとて母も ときたたとて母も <small>大</small> |

だけで、校異も記されていない。前述したように大永本にある校異は為氏本系統の伝本をもとにしていて考えると考えられるから、当然ここにも校異を記してもよさそうである。あれほど多くの校異が記されていることを考えると、見落としとは考えにくい。かと言ってその理由も詳らかでない。ただ、少なくともこの本文が生じたのは為氏本が転写される過程でもかなり後であることだけは言えるのではなからうか。(3)の場合もほぼこれと同じケースとみてよからう。本来、「式部卿の宮」の説明として傍記してあったもの―天福本のような形―が本文化したものであろう。ただ、これ一例でもって結論を下すのは危険であるが、この外にも為氏本と天福本のみとの共通箇所がみられる。それらをあげてみよう。

| 番号 | 章段 | 為氏本・天福本の本文 | 為家本の本文及び異文 |
|-----|-----|---------------------|---|
| (1) | 12 | しのひてよ。な。く。 | よるく |
| (2) | 163 | 后宮よりきくを。 | ナシ |
| (3) | 165 | いますかりける。 | けるを |
| (4) | 168 | といひやりたる。 | たりける |
| (5) | 171 | い。ま。て。ん。し。や。う。な。と。に | たりければ(巫・鈴) いさ いさ <small>マイ</small> いさ <small>(大)</small> |

それほど多くはないが、両者の関係を示す痕跡を窺い知ることができよう。

これら以外は語句に關したものである。(4)をみると、為氏本と大永本、玄陽文庫本とは「たに」で共通し、また為家本と大永本、玄陽文庫本とは「も」のしたまひそ「漢字と平仮名の違いはあるが」で共通している。このことから為氏本は大永本と玄陽文庫本の親本あたりから派生した本文と言えよう。(6)、(7)において為氏本は為家本にない「とくところにも」、「かくても」を持つている。しかもこれらは大永本の校異となっている。これらのことから為氏本は転写する過程で異文を生じたのであろう。その時期は為氏本の書写過程で比較的に早かったと推測される。(5)において為氏本は為家本と大永本の本文を持つている。ここは為氏本がこれらの本文をとり入れていることを示している。

為氏本が転写されて行く過程で生じた現象の一面をみてきた。その本文の生成は決して単純ではない。様々なものが絡み合って生成していったことは理解できたと思う。そしてここでも大永本に記された「イ」以外の為氏本文はそれより後に成立したものと考えてよからう。

為氏本には明らかに誤写と考えられる箇所がある。それはかなりの数で、新藤氏もそのいくつかをあげられ、その原因を追究されている。⁽²²⁾ここでは氏が指摘された以外のものを例示してみよう。

| 番号 | 章段 | 為氏本の本文 | 為家本の本文及び異文 |
|------|-----|-----------------------------------|--------------------------|
| (1) | 1 | こ。ひ。で。ん。の。か。へ。に | 弘徴殿 |
| (2) | 2 | た。て。ま。つ。ら。れ。て。さ。ふ。ら。ひ。け。る | ナシ |
| (3) | 3 | み。て。あ。け。て。せ。さ。せ。給。け。り | あ。つ。け。て |
| (4) | 18 | と。あ。り。け。る。 | あ。つ。け。て (大) |
| (5) | 40 | う。な。ひ。な。む。の。男。宮。 | け。り |
| (6) | 41 | よ。と。な。ん。な。き。け。り。 | ナシ (巫・鈴) |
| (7) | 42 | と。あ。り。け。る | こ。の。お。と。こ。み。や 此男宮 (大) |
| (8) | 43 | 山。に。い。り。な。ん。す。 | け。る |
| (9) | 54 | む。ね。ゆ。き。の。き。み。に。て。う。に。あ。た。り。け。る。人 | と。な。む。あ。り。け。る |
| (10) | 70 | も。と。に。な。ん。い。く。に。あ。り。け。る | ナシ (巫・鈴) |
| (11) | 86 | を。き。の。や。へ。は。ら。か。き。わ。け。て | と。す |
| (12) | 108 | と。な。ん。あ。り。け。り。 | 三。ら。う |
| | | | も。と。に。い。く。に。な。ん。あ。り。け。る |
| | | | け |
| | | | あ。り。け。る |
| | | | あ。り。け。る ^{リイ} |
| | | | あ。り。け。る (大) |

| (23) | (22) | (21) | (20) | (19) | (18) | (17) | (16) | (15) | (14) | (13) |
|------------------------------------|------|------|---|------|------|-------------------------------------|--|------|------|--|
| 159 | 157 | 155 | 152 | 149 | 145 | 142 | 136 | 135 | 123 | 122 |
| すみ給けるをよくしたまひ しかしながら ともいはずにけて | | | たいくとおほしけしたる いきてなんねにけり あとこそみれ | | | かはらてにほひかと | となんありけり くらのすけまて をなしそうきみ | | | ことほりいとおほく |
| けるものらよくし給(光) ナシ(巫) | | | たいくし たいたいし(大) ともいはずひるともいはずにけて しか | | | かはらすにほひせは かはらすにほひせは あはと ける | となんありける となんはへりける(光) ナシ(巫・鈴・抄) かはらすにほひせは | | | ナシ(巫・鈴) ことはも こと葉も こと葉も(大) そうき君 にて |

ここでは様々な現象をみる事ができる。まず考えられるのは草書体の類似による、為氏本の読み誤りである。(4)(6)(11)(12)(13)(15)(16)がそれに該当しよう。ただ、このうち(19)について鈴木裕史氏は「なむ……けり」の用例をあげられ、これを破格の語法と処理されている。(23)確かに他の作品の用例にあたり、当時の語法を検討する必要がある。しかし、為氏本に誤写の例が多いことを考慮すると、ここもその傾向が強いとみてよいのではあるまいか。この外、(2)(9)(11)も意味上から考えて為氏本は不自然であり、これも読み誤りであろう。

書写する際の不注意という点、(3)(5)(7)(8)(10)(14)(20)(23)もそうであり、為氏本はその一部を欠いている。また、(21)は為氏本の目移りによる誤写と考えられる。これとは反対に為氏本では他の語を付け加えることにより、かえって不自然になっている箇所がある。(22)がそれである。また、文法上から考えて明らかに為氏本の誤写と考えられるのは(10)である。ここは一緒に行くことを強調しているのだから「ともにいくになむありける」が自然な形である。この外、(1)(18)において、為氏本がなぜこのような本文を生じたのかは詳らかではないが、不自然な本文になっている。

以上、見てきた箇所はことごとく為氏本の誤写の例である。ただ、これらの現象が現存の為氏本が書写する際に生じたものなのか、それともその親本の段階ですでに生じていたものなのかを考える必要がある。前にも述べたように大永本は校異に為氏本系統の伝本を採用している。例えば(3)(12)(13)において大永本の校異をみると、誤写の本文まで記している。そうかと思えば、(5)のように大永本の校異に為氏本の本文は一致していない。これは明らかに為氏本の誤写の可能性が高い。こうみてくると、いずれともはつきり区別できるものではなく、この二つが絡み合っただけで成立しているであろう。

二〇四

今までみてきたのは、為氏本の独自異文の中で、誤写、改変と言った、転写過程で主に後世になされた現象であった。しかし、為氏本には今までみてきた例のいずれとも判断できない箇所も多いのである。ここでその例をあげてみよう。

| 番号 | 章段 | 為氏本の本文 | 為家本の本文及び異文 |
|-----|----|-------------|----------------------------------|
| (1) | 2 | たかひてありき給 | つゝ |
| (2) | 9 | かくいひければ | へり |
| (3) | 17 | となむいへりければ | ナシ |
| (4) | 57 | らうあるひとなり。 | といへたりければ(巫・鈴) なりけり |
| (5) | 61 | これかれさかりたにも。 | にてありける(巫・鈴) なりける(図) さかりをたに |

| (23) | (22) | (21) | (20) | (19) | (18) | (17) | (16) | (15) | (14) | (13) | (12) | (11) | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | |
|----------|------|--------|-----------|------------|-----------------|------------------------|---------------|-----------|----------|------------|---------|--------------------|-------|-----------|-----------------|----------|-------------------------|-----------------------|
| 168 | 166 | 156 | 152 | 149 | 148 | 147 | 145 | 141 | 137 | 124 | 112 | 101 | 98 | 96 | 91 | 81 | 65 | |
| ありしとぎのさま | 女の返事 | それよりなん | 心ちしてかしこまり | いといたうちなけきて | わたらひなどもいとわろくなりて | さもせさりけり | しろかよみたりけるうたなり | おやはらからなとも | まうてつる女とも | そのかへしそれよりも | またひくらしに | いひをきてまかりいてぬ | されはおと | このきみむことられ | 三条の右のおとの | おなしわたりひと | おもひかりけり | |
| さまの | かへし | それよりのち | かしこまりて | ナシ | ナシ | さもせずそありける (抄・類・衆・図) | ナシ(巫・鈴) | よみたる | など | 女ともを | ナシ | けふ またイ けふ(大) | まかて | さりければ | かの 右大臣殿(巫・鈴) | の右のおと | 内わたり おなしイ 内わたり(大) | おもふなりけり おもふなりけり(大) |

| (26) | (25) | (24) |
|------------|--|--|
| 173 | 172 | 170 |
| やまむまてはかなくて | おほせことのみたまひければ | ひやうゑのみやうぶ。 |
| ナシ | おほせ事給ひ(巫・鈴) おほせ事給ひ(大) おほせ事給へり(光) の ^イ 給へり(大) | ナシ(巫・鈴) 命婦なむ みやうふなむ ^{イニ無} (大) |

これらはその一部を示したにすぎない。どちらにしても意味が通じるし、いずれが正しいかは判断しかねる。このうち、(6)(7)(12)(24)をみると、大永本は為氏本に共通する本文を校異に記している。このことは大永本が校異に依拠した為氏本系統の伝本でもこのような本文になっていたことを示している。しかし、これらを除いたものはいつの時点での本文を示しているであろうか。ここにあげた箇所を含め、まだ多くあり、大永本はそれらを校異に記していない。このことをどう考えたらよいのか。大永本はあれほど丹念に校異を記しているのに、それを記さない箇所が多すぎはしまいか。見落としはまず考えられない。思うにこれらの本文は大永本が校異に依拠した為氏本系統の伝本よりも後に成立したものなのか、それとも大永本が校異に依拠した為氏本系統の伝本には異質な本文を含んでいたものか、の二つの考えが可能であろう。しかし、ここではいずれとも断定できない。ともあれ、このような例からも為氏本本文の生成の跡を窺い知ることができよう。

四

為氏本の本文を中心に、大永本と玄陽文庫本を介させ考察してきた。前半ではこれら三本の間係を確認できたし、同時に本文生成の跡も窺うことができたと思う。そして、これらの共通本文は為氏本の本文において、早い時点の成立と考えてよからう。また、後半では従来からその多さを指摘されていた、為氏本の独自異文について考察し、様々な現象をみてきた。そして、ここでも為氏本の本文の生成を垣間見ることができたように思う。その多くは末期的な様相を呈していた。

ところで、前述したように鈴木裕史氏はA系統内では玄陽文庫本が最善本で、次いで大永本になり、最下位が為氏本という序列を考えておられる。確かに誤写などを考慮すると、そう言えるかもしれない。しかし、書写年代を考えると、為氏本は他の二本よりもはるかに古く、現在の姿になるまで複雑な生成を経ているようである。その淵源はかなり古かったと言えよう。その意味で鈴木氏の考えには再考を要しよう。

ともあれ、さらなる精細な考察が必要なことはいうまでもないが、今までの考察から為氏本の生成と、その性格の一面を垣間見ることができたのではないかと考えている。

注(1) 古文学秘籍複製会、昭和8年9月。後に解説のみ『大和物語諸本目録 A系統』(高橋正治氏編著、新典社、昭和63年10月)に再録。

(2) 反町茂雄氏『一古書肆の思い出2―賈を待つ者』(平凡社、昭和61年1月)

(3) 注(1)に同じ。

(4) 『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書文学篇 第十六巻 物語一』(解題柳田忠則、臨川書店、平成11年5月)

(5) 文明十年甘露寺親長の奥書を有する伝本。池田氏蔵本の祖父本にあたるのが日本大学蔵本で、ここでは本書も参照した。

(6) 『前田家本大和物語』解説(育徳財団、昭和11年9月)。後に『物語文学II 池田亀鑑選集』(至文堂、昭和43年10月)に再録。

(7) 早く鈴木知太郎氏が「大和物語諸本の系統―特に二条家本及び定家自筆本に関して―」(『文学』4巻1号、昭和9年5月。後に『平安時代文学論叢』(笠間書院、昭和43年1月)に再録)の中でふれられた。その後、高橋正治氏が「群書類従本系統大和物語伝本考」(『清泉女子大学紀要』14号、昭和41年12月)の中で体裁や本文について詳しく述べておられる。同氏の『大和物語の研究^{系統別本文篇上}』(私家版、昭和44年10月。再版 臨川書店、昭和63年10月)に翻刻、及び影印されている。また、同氏により校訂本もある(『大和物語(A系統大永本)』新典社、昭和63年4月)。

(8) 高橋正治氏「大和物語A系統新出本の紹介」(『清泉女子大学紀要』35号、昭和62年12月。後に『大和物語諸本目録 A系統』に再録)

(9) 「大永本大和物語本文考」(『山形大学紀要(人文科学)』8巻4号、昭和52年2月)

(10) 『大和物語諸本目録 A系統』

(11) 『大和物語』伝為氏筆本の本文―敬語表現・語法から見たその性格―(『伝承文学研究』46号、平成9年1月)

(12) 『校本大和物語とその研究 増補版』(三省堂、昭和49年5月)、『大和物語の研究 対校篇』(笠間書院、昭和55年2月)、『大和物語諸本目録 A系統』

(13) 「群書類従本系統大和物語伝本考」

- (14) 注(9)に同じ。
- (15) 『大和物語』雑考(六)―掛詞・敬語―(大阪大学教養部「研究集録 人文・社会科学」26輯、昭和53年2月。後に『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院、昭和56年2月)に再録)
- (16) 3、9、13、25、41、66、67、68の各章段。
- (17) 注(6)に同じ。
- (18) 『大和物語』の宗子関係章段―構成との関わりを中心にして―(『大和物語』の研究) 私家版、平成12年12月)。本書第三章第三節。
- (19) 公卿補任による。
- (20) 尊卑分脈、職事補任、作者部類には俊蔭とあり、古今集目録には後蔭と書かれていて、内容は同一人を指している。
- (21) 念覚と明覚については未詳。
- (22) 注(9)に同じ。
- (23) 注(11)に同じ。

第三節 鈴鹿本大和物語考

歌物語の代表的作品のひとつである大和物語は多くの人々に愛読されてきた。したがって、現在伝わる写本類も少なくない。それらは大きく二条家本系統と六条家本系統異本、別に分けることができるが、その大半が二条家本系統のもので、六条家本系統に属する伝本はきわめて少ない。ここで対象にする鈴鹿本大和物語以下、鈴鹿本と略称する。は後者に属し、数少ない六条家本のひとつということで貴重な伝本である。この本は以前、鈴鹿三七氏が所蔵されていたからこう呼ばれたものである。氏が他界されてこの本の行方はどうなることかと案じていたが、現在は無事、愛媛大学附属図書館の所蔵に帰している。

この本は早く阿部俊子氏の『校本大和物語とその研究⁽¹⁾』に校異の形で載せられたが、字体などのほんとうの姿を知ることは不可能であった。しかし、その後これを解消するかのようになり高橋正治氏の『大和物語の研究系統別下』⁽²⁾に写真版で収められたし、糸井通浩氏の解題で影印本も出た。⁽³⁾これは貴重かつありがたいことであり、両氏に対して心から敬意を表したい。

今後は、これらをもとにして細部にわたって考究すべきであろう。現在の姿になるまで鈴鹿本には読者や書写者の手が多分に入っていると推測される。したがって、ここでは鈴鹿本の性格を知るためのひとつの試みとしていかなる現象を経て現在の姿になったかを校異、ミセケチ、それと本文を通して考えてみたいと思う。

はじめに、今日までの研究成果をふり返ってみよう。

鈴鹿本については何かの研究の付随になされる程度で、これを直接、研究対象にした論考は少ない。まして本文になると皆無である。鈴鹿本についてふれているものを見ていくとつねに御巫本大和物語以下、御巫本と略称する。と関連して考えられてきた。事実、それだけに共通する箇所が多い。

まず阿部俊子氏は大和物語の伝本について詳しく調査検討された。その結果、

二条家本系統と六条家本系統の本との間には、本文・歌の数・話の数・巻末の話の順序等において相当色々な相違が思われる。どうしてこのやうな相違が生じたかを考へてみると、まず二次・三次の物語自体が増補、加筆されたとすれば、その何れの段階のものを原本にとるかによって根本的な相違が生じたかと思ふ。その点、御巫本・鈴鹿本の原型、あるひは古写の残欠本は二条家の系統のものより早い段階のものによってゐるのではないかと考えられる。⁽⁴⁾

と述べられている。ここでは御巫本・鈴鹿本の原型というものを考え、これらは二条家本よりも古いとしているが、裏返せば、現存の両本は増補されているということであろう。

次に高橋正治氏は「別本大和物語の成立に就いて―構成論を基礎とした試論―」⁽⁵⁾という論文で、形態面から為氏本と比較し結論として次のように述べられている。

別本（稿者注、御巫本と鈴鹿本のこと）を為氏本と比較して著しい相違点を指摘し検討した。即ち別本は内容を単位に、一人の語り手が物語るやうに歌説話を展開していった正しく、且純粋な本をもった読者によって、恣意的に更改された本であることがしられた。そして成立した時期は少なくとも鎌倉時代を遡るものではない。

このことから後世の改変を経た伝本とみている。柿本獎氏も御巫本と鈴鹿本について、大和物語の流れゆく姿をたどる上に役立つ本ではないかと言われている。⁽⁶⁾

また南波浩氏は

京都鈴鹿三七氏蔵の鈴鹿本も「基綱写」とのみあるもので、本文は全体的に御巫本にきはめて近いものであるが、両書間にはまだ少なからぬ異同がある。両書ともに室町中期以後、あまり遠くへだたらないころの書写のやうである。この両書はともに「基綱写」とあるが、両書の本文に異同があるところを見ると、親子関係ではなく、ともに「基綱写」書写本を写して分派した二本かと思われる。（中略）とまれ、現在知られるところでは勝命本・御巫本・鈴鹿本は、二条家系流布本に対し古形を示すもので、大和物語の原型を考へる場合の重要な資料である。⁽⁷⁾

と述べられている。御巫本と鈴鹿本との関係を追究し、結局のところ、六条家本系統が大和物語の古形を示すものとみておられる。これには久曾神昇氏も同じ考えのようである。⁽⁸⁾

さらに糸井通浩氏は先程の解題で歌語りの場が鈴鹿本の本文に反映されているとみておられ、享受面からとらえるべきことを指摘された。

以上、述べたような考えに分かれているのが現状である。しかも、これらの多くは個々の伝本にあたっては、六条家本、もしくは別

本ということ、漠然ととらえている。六条家本系統と言われているものをすべて同一視してよいものかどうか。確かに形態的には同じであっても本文になると異同がみられる。現在の姿になるまでさまざまな過程を経ているのであろう。このようなことから細部にわたつての検討が必要であらう。

- 鈴鹿本には校異、ミセケチがみられる。前者はその数が少なく、次の三箇所にすぎない。
- (1) かのたいとこのめらはらにしてはら(四三段)
 - (2) うけたまはりてはなすかちは(一四六段)
 - (3) たてまつりすきやうにしてと(二六八段)

これらは鈴鹿本のみが持つているものである。それにしても(1)(2)の本文はどういう意味か、理解に苦しむ。そこで、もう一度本文にあたってみると、本文と校異本文とは草書体がひじょうによく似ていることに気づく。おそらく書写する際に錯覚を生じたのであろう。すると(3)も似ているから錯覚かもしれない。しかし、校異と本文が同筆か否かは明らかでない。

阿部俊子氏の『校本』をみると(1)(2)は本文のままになっておらず、校異本文を採用している。不自然と思ひこつたのであろうが、それならば、そのことを断るべきであらう。

これに対し、ミセケチは比較的多い。それらをすべて抜き出して一覧表にすると次のようになる。

| 番号 | 章段 | ミセケチ |
|------|-----|---|
| (1) | 5 | 君のみかくれ給ければ |
| (2) | 10 | 家を人 <small>に</small> かりて |
| (3) | 40 | 螢のとふをかれにとりて |
| (4) | 65 | さうしけるえこんと |
| (5) | 78 | なくさめやすき |
| (6) | 93 | くちおし <small>き</small> 男思ける |
| (7) | 101 | みたち <small>り</small> こ <small>ち</small> |
| (8) | 103 | くやし <small>く</small> |
| (9) | 121 | つねのふの少 <small>式</small> 将 |
| (10) | 123 | 身なれ <small>は</small> とも |
| (11) | 133 | 鳴な <small>そ</small> ととひければ |
| (12) | 135 | 返しは上手 <small>あ</small> れば |
| (13) | 142 | よみて給へりける |
| (14) | 143 | 人のありけるお <small>を</small> の女のせうと |
| (15) | 144 | 三河の国より登 <small>上</small> とて |

| | | |
|------|-----|---|
| (16) | 145 | 亭子院の御門 |
| (17) | 148 | 物こそたはんすれと |
| (18) | 149 | うちなきけきつ <small>と</small> |
| (19) | 168 | おやにも似 <small>す</small> |
| (20) | 168 | 白雲のやとれる |
| (21) | G | 名をた <small>の</small> む <small>み</small> |

(注) アルファベットは附載章段を示し、これは高橋氏の『大和物語の研究系統別下』に拠つた。

二一箇所にわたっている。これらが本文と同筆か否かは原本を見る機会がない今、何とも言えない。ただ、これらのミセケチは鈴鹿本と密接な関係にある御巫本と共通しないところから、鈴鹿本の書写者か、もしくは後人によりなされたものであろう。いずれにしてもこの本の欠点を示していることでは異論あるまい。

では、どういふことが原因でこのようなことが生じたのであろうか。(2)(7)(8)(12)(19)(21)の「か」と「う」、「ち」と「り」、「く」と「と」、「あ」と「な」、「す」と「て」、「む」と「み」は草書体がひじょうによく似ており、鈴鹿本の錯覚とみるべきであろう。(5)(6)(16)は書写していく過程で、前の章段に出ていることや本文の理解不足から生じたものか。また、(1)(3)(9)(10)などから鈴鹿本には既定本文を改めようとする意識を窺えるのではなからうか。その他、(4)(11)(13)(14)(15)(17)(18)(20)は鈴鹿本の不注意による誤りであろう。

なお阿部氏の『校本』をみると、先程のミセケチの場合と同じように、(1)(3)(16)は訂正した本文を採らず、そのままにしているのに対し、残りはずべて訂正した本文を採用している。こうした理由は明らかでないが、どちらかに統一するか、あるいはミセケチである旨を断るべきであろう。ともかく、鈴鹿本全体からみると校異、ミセケチはそれほど多くはないが、この本の性格の一端を知ることができよう。

鈴鹿本の成立と考えるとき、見過すことのできないのは御巫本の存在である。先程も述べたように両者は共通するところがあるが、はなはだ多い。しかも、その多くは両者だけで共通しており、鈴鹿本の成立に御巫本が何らかの形で関与していることは疑う余地はない。事実、南波浩氏は前述の如く、同じ祖本から分派した伝本ではないかと言われているし、また阪倉篤義氏も兄弟関係とは考えにくい、同じ基綱の書写本を祖本とするものとみておられる。⁽⁹⁾これらの考えに疑問をさしはさむ余地はなからうが、もう一步内部まで入って調査を進める必要がある。そうすることにより、どのような生成過程を経ているか探り出せるかもしれない。

そこで、論述の便宜上、用例をあげたいが、鈴鹿本と御巫本の共通箇所をすべてあげるとは不可能であるし、また種々の面において厄介な箇所もある。こんなわけで、ある程度、確証をもって言えるところをとり上げていきたい。

| 番号 | 章段 | 為 氏 本 の 本 文 | 鈴鹿本・御巫本の本文 |
|-----|----|--|------------|
| (1) | 3 | しきものゝおり物ともい。ろいろに。そめより。く。み。な。に。か。と。み。な。あ。つ。け。て。せ。さ。せ。た。ま。ひ。け。り。そ。の。も。の。と。も。を。九。月。つ。こ。も。り。に。 | ナシ |

| (23) | (22) | (21) | (20) | (19) | (18) | (17) | (16) | (15) | (14) | (13) | (12) | (11) | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) | (4) | (3) | (2) | | |
|----------------------------------|--|----------|-----------|-----------|---------------------------|---------------------------------------|-------------------------------------|---------------------------------------|-------------------|-----------|----------------------|-----------------|---------------|-------------------------|-------------------------|-----|-------|---------------------------------------|-------------------|--------------------------------|---------------|-----------|----|
| 125 | 113 | 113 | 111 | 111 | 106 | 106 | 106 | 99 | 95 | 71 | 70 | 62 | 60 | 59 | 58 | 42 | 40 | 13 | 11 | 6 | 3 | | |
| に。か。あ。ら。な。む。と。き。こ。え。給。で。み。か。う。し。 | お。と。ろ。ぎ。給。て。い。つ。く。に。物。し。た。ま。へ。る。た。よ。り。 | こ。れ。は。女。 | 兵。衛。の。せ。う | あ。か。た。の。と | 三。に。あ。た。り。け。る。は。備。後。守。 | と。は。る。け。き。心。ち。の。み。し。て | ふ。れ。は。こ。そ。こ。え。も。く。も。ぬ。に。き。こ。え。け。め。い | 返。し | こ。の。女。の。か。ゝ。る。こ。と | 御。と。も。に | き。こ。え。た。ま。う。て。お。く。に。 | つ。ゝ。み。の。中。納。言。の | 大。七。と。い。ひ。け。る | の。う。さ。ん。の。君。と。い。ひ。け。る。人 | 五。條。の。こ。と。い。ふ。人。あ。り。け。り | ナシ | ナシ | と。な。む。あ。り。け。る | こ。の。お。と。こ。み。や。 | あ。ま。た。い。て。き。て。お。も。ひ。て。す。み。け。る。 | と。な。む。あ。り。け。る | ナシ | |
| ナシ | ナシ | み。こ | 子。う。む | ナシ | お。と。こ。の。さ。て。よ。み。て。や。り。け。る | ま。た。か。く。い。ひ。て。の。ち。こ。の。物。い。そ。か。せ。給。け。る | や。ま。ふ。き。の。花。に。つ。け。て。お。と。こ。 | つ。く。し。へ。い。き。た。り。け。る。人。そ。の。も。と。に。お。こ。せ | た。り。け。る。人。 | 故。四。條。の。御 | む。か。し。う。さ。う。の。君 | 大。と。こ | ナシ | か。く。有。け。る | 御。と。き。に | ナシ | 又。み。や | か。り。に。こ。そ。こ。え。は。雲。ぬ。に。き。か。せ。け。れ。い。と。の | は。る。か。に。心。の。み。し。て | 兵。庫。の。か。み | あ。は。た。の。院 | 兵。部。の。せ。う | ナシ |

| (36) | (35) | (34) | (33) | (32) | (31) | (30) | (29) | (28) | (27) | (26) | (25) | (24) |
|--|--|---|---|-----------|-----------|-----------------|----------------------------------|----------------------------------|-----------|--------------------------------|------------------------|------|
| 168 | 168 | 152 | 151 | 150 | 148 | 148 | 148 | 141 | 141 | 139 | 139 | 132 |
| <p>な。き。あ。は。れ。か。り。け。る。宮。の。御。か。へ。り</p> <p>な。き。た。ま。ふ。さ。ふ。ら。ふ。人。く。も。い。ら。な。く。な。む</p> <p>お。も。ふ。に</p> | <p>あ。る。と。き。も。き。こ。え。な。む。身。を。な。け。た。る。へ。し。と</p> <p>身。を。や。な。け。て。け。む。ほ。う。し。に。な。り。た。ら。は。さ。て</p> <p>む。あ。り。け。る</p> | <p>も。と。を。は。と。か。く。つ。け。る。も。と。は。か。く。の。み。な</p> <p>御。ら。む。し。け。る。日。人。ま。ろ</p> | <p>よ。ま。せ。給。か。き。の。も。と。の。人。ま。ろ</p> <p>の。ち。に。は。い。か。く。な。り。に。け。む。し。ら。す</p> | <p>ナシ</p> | <p>ナシ</p> | <p>ナシ</p> | <p>や。ま。さ。き。に。も。ろ。と。も。に。ゆ。き。て</p> | <p>山。と。の。せ。う。と。い。ひ。て。あ。り。け。る</p> | <p>ナシ</p> | <p>承。香。殿。は。い。と。ち。か。き。ほ。と。に</p> | <p>お。ほ。う。ち。か。つ。き。て</p> | |
| ナシ | ナシ | 本に作けるとそ本にかく | ナシ | ナシ | ナシ | いかならむといと哀なる者かなと | て | すむ人なんありけりおとこをなんあひしり | 山前 | やまのかみ | そ行殿と東宮の女御とは | 御 |

(注) 圏点は異なる対象箇所を示す。これは以下も同様。鈴鹿本・御巫本の本文は鈴鹿本を底本にしている。

個々にあたってみることにしよう。まず誤写と思われるものとして(1)(11)(12)(21)(23)(35)(36)があげられる。因に(1)(23)(35)(36)をみると、鈴鹿本と御巫本は「ナシ」となっているが、その前後には同じか、似通った語が来ている。思うにこれらは書写する際に目移りが生じたのであろう。目移りと思われるところは、この外にもみられる。

- (イ) く。に。へ。な。ん。い。き。け。る。さ。て。お。も。ひ。け。る。と。も。た。ち。の。も。と。へ (五四段)
- (ロ) を。こ。し。て。い。ま。う。て。ね。たり。け。る。と。て。せ。う。え。う。し。に (一〇三段)

- (ハ) しもにとをくさふらふかうはるかにさふらふよし (一四五段)
 (ニ) たまうてかしこき御かけにならひておはしまさぬ (一六八段)
 (ホ) たまうてなむとまりて人々に (一七二段)

(注) 本文は為家本に拠り、圈点と傍線は稿者が付したものである。以下も同様。

傍線を引いた部分を鈴鹿本と御巫本は持っていないが、いずれもが圈点を付したように前後に同じ語が来ていることから理解できよう。残りの(11)(12)はどうか。(11)と(12)は草書体の読み誤りから生じたものと思う。(12)は「大七」とあつたのを、「七」を「と」に「と」を「こ」に読み誤ったのである。ここは「と」がないと不自然になる。(11)は少し複雑である。これは「のうさうの君」とあつたのが「の」を「か」と「し」に読み誤り、そうすると「む」がなくては不自然になるから、それを付加したのであろう。これと同じ例として(10)があげられようが、これについては今井源衛氏も指摘されているように連綿のかげんで読み誤つたものである。さらに(20)も原本をみると両者はひじょうに似通っている。これは憶測になるが、おそらく「あかたのると」と平仮名で書かれていたのではないか。「か」を「は」に、「ると」を「えん」に読み誤る可能性は十分考えられる。それを後者の場合、「院」と漢字で書いてしまったのであろう。このように草書体の読み誤りは外にもみられる。それらを列挙してみる。

- (イ) 陽成院の五のみこ (二三段)
 (ロ) この宮の御もとに (七二段)
 (ハ) 亭子のみかとかはしりにおはしましけり (二四五段)
 (ニ) 左近将監にて殿上してありける (一六八段)
 (ホ) この女たうしにいふやう (一六八段)
 (ヘ) 左衛門のちんにくるまをたて (一七一一段)

傍に線を引いて示したのが鈴鹿本、御巫本の本文である。(イ)(ロ)(ハ)については納得できるとしても(ニ)(ホ)には疑問を持つかもしれない。しかし、鈴鹿本、御巫本は意味が明らかでないし、原本にあたってみても鈴鹿本、御巫本は底本の本文に似通っている字体になっている。このことからまず誤写とみて間違いなからう。(2)をみると鈴鹿本、御巫本は「兵部のせう」になっている。この章段には「兵衛のせう」がもう一箇所ある。これは同一人物であるが、鈴鹿本、御巫本は為家本と同じになっている。ここは鈴鹿本、御巫本の誤写であろう。「兵部……」は他の章段にもみられることから、おそらくその錯覚かもしれない。

ともあれ、これらは鈴鹿本、御巫本の欠点と言えるが、注目すべきことは両者のいずれもが訂正しないで、そのまま受け継いでいることである。これは祖本からすでにそうなっていたのであろう。

次にこれらとは反対に意図的になされたものではないかと思われるところを見ていこう。

まず、鈴鹿本と御巫本の付加と思われるところとして(2)(3)(8)(9)(26)(29)(30)があげられよう。事実、(2)は和歌と地文の間にあるし、(3)(8)(9)は作者を補っている。しかし、(9)は前にも「人」があり、かえって不自然である。残りの(26)(29)(30)は語句を補っている。このうち、(26)は「東宮の女御」なる人物が登場するが、この前後は

せんたいの御時に承香殿の宮す所の御さうしに中納言の君といふ人さふらひけりそれを故兵部卿の宮わかおとこにて一宮ときこえていろこのみた
まひけるころ承香殿・と東宮の女御と・・・・・はいとちかきほとになむありける

(注) 黒点は異同の対象箇所、欠けていることを示している。以下も同様。

とあり、何故に、この語句を補ったのか明らかでない。本文をよく理解しないで補ったのであろうか。最後の(30)をみると、鈴鹿本、御巫本は本文がだぶついている感じで通りがよくない。

改作ではないかと思われるところが鈴鹿本、御巫本にはかなり多く見られる。これらの中には部分的に除去しているものや全体的、部分的に改めているもの、あるいは位置を変えているものなど、実にさまざまである。それぞれ具体例にあたってみよう。

(32)(33)をみるに、これは和歌の作者を記したのだが、鈴鹿本と御巫本は作者が明らかではない。ここで注意すべきことは両方とも「人まろ」になっていることである。大和物語において彼が登場するのはこの二箇所であり、しかも「ならの帝」が登場する章段で、このような現象を生じていることは偶然とは言えないだろう。もし、「人」にうたよませ給ふ、「もみちいとおもしろきを御らむしける日」の後に作者名が記されてないとしたら、あまりにも漠然となり不自然すぎよう。おそらく、ここは作者名が「人まろ」と記されていたのであろう。すると何らかの理由でもって除去されたのではなからうか。

大和物語一五〇段から一五三段にかけて「ならの帝」が登場する。このうち一五三段の「ならの帝」は平城天皇であることが確かであるが、残りの一五〇・一五二・一五三段の「ならの帝」は歴代のいずれの帝を指しているかはいろいろと問題にされてきた。とりわけ一五二・一五三段には「人まろ」が登場し、「ならの帝」を平城天皇にとると時代的に合わないし、また文武天皇にとるとまだ都が奈良になかったことになり不自然になる。この現象について、賀茂真淵⁽¹³⁾をはじめとして研究者によりさまざまな角度から追究されてきた。ここでは二、三の説を列挙してみる。

まず、今井源衛氏は

私は、人麿の年代的な把握については、大和物語作者自身にまいまいなものがあったのでないかと思う。(中略)益田氏が指摘されたように「奈良の帝」と「人麿」との安易な結びつけが起こることは十分考えられるだろう。しかしそうした結びつけは、単に大和作者個人の問題ではあるまい。「わぎもこが」の歌の作者を人麿とするものは、大和物語の影響とのみ片付けるわけにはいくまい。これらを含めて、その背後にある伝承の場を想定すべきであろう。⁽¹⁴⁾

と述べられている。そして、一五一段は一五〇段と同じく人麿と帝を合わせるために作されたものと推定されている。その上、氏は一五〇段のところで鈴鹿本と御巫本が「人まろ」を有していないことについて、この歌の作者の人麿説にも浮動性があったとみている。

次に雨海博洋氏は一五〇段から一五三段までについて詳細に検討されて、

一五〇段は采女の入水にまつわる伝説、伝承歌から成り、この段の「ならの帝」は平城天皇を主としながら、桓武帝の要素が采女に関し加わっている。一五一段は前後の平城帝と柿本人麿の組み合わせを受け、『古今和歌集』仮名序、古今歌をもとに両人の歌の唱和の語りとなり、一五二段では「ならの帝」は桓武天皇の鷹に関する史的事実を背景に「いはで思ふ」の歌で平城帝と結びついて「ならの帝」となっているが、桓武帝の占める位置は一番大きい。最後の一五三段は平城帝と嵯峨帝が結びついて「ならの帝」となっているが、桓武帝の占める位置は一番大きい。⁽¹⁵⁾

と結論づけ、これらの章段を歌語りとしてとらえている。

さらに片桐洋一氏は次のように述べられている。

現代の人は、特に判断の基準を、正しいか正しくないかだけに求めたがる。平城天皇が柿本人麿と同時代の人であったということは歴史的事実としては、まったく正しくない。しかし、今、見た「古今集」や「大和物語」はそう信じているのだから仕方がない。やはりわれわれは、それを理解して、その立場から鑑賞しなければならぬのである。⁽¹⁶⁾

氏の考えは前の二人のとはやや異なり、時代的な把握の誤りとみている。

以上のように三者とも微妙な相違がある。これらのいずれが妥当かはまだまだ検討の時間が必要であろう。ただ、鈴鹿本と御巫本が「人まろ」を持っていないことについて、今井氏のみが浮動性としてとらえている。私は一歩進めて、これらは除去されたのではないかと考えている。⁽¹⁷⁾ 鈴鹿本・御巫本の書写者は「ならの帝」を平城天皇と考えていたのではないか。そうするとどうしても矛盾が生じてくるので除去したのである。一五〇段と一五一段に「人まろ」がないことは少なくともそういう考えをいだけせよう。冒頭が「ならの帝」であるのにもまして、一五三段が鈴鹿本・御巫本は「おな

し、ならのみかと」傍点は稿者。以下同様。となつてゐる。このことから一五〇段から一五三段までの「ならの帝」を同じ帝とみていたのであろう。ともかく、ここは鈴鹿本、御巫本の書写者が深くかかわつてゐるところである。

(17)も作者の異同である。これは(18)の和歌の異同にも関連してゐるようだ。鈴鹿本、御巫本は「故兵部卿の宮」になるのに対し、為家本は「女」の作になる。これ以前の歌のやりとりを記してみると次のようになる。

またこの女

わすらるゝときはのやまもねをそなく秋のゝむしのこゑにみたれて

かへし

なくなれとおほつかなくそおもほゆるこゑきくことのいまはなければ

又おなし宮

雲井にてよをふるころはさみたれのあめのしたにそいけるかひなき

又みや
返し

ふれはこそこゑもくもぬにきこえけめいとゝはるけき心ちのみして

もし、最後の歌を宮の作すると彼の歌が三首連続してゐることになりなんとなく不自然である。今井源衛氏は「ふれはこそ」の歌を歌意からみて女の作と推測されている。⁽¹⁸⁾

ところで、(18)の「ふれはこそ」の歌であるが、鈴鹿本と御巫本は一首全体が違つてゐる。おそらく鈴鹿本・御巫本の書写者は、この歌について疑問をいただき「返し」のところが「又みや」とし、歌も「雲ぬにきかせけれ」と宮が詠んだように改めたのであろう。それにしても、この歌の下句は難解である。

このように作者を除去したり、改めてゐるところは他にもみられる。

(1) あはれなることをまらうともあるしもこひけりあさほらけにきりたちわたれけりまらうとサシ

あさきりのなかに君ますものならははるゝまにくうれしからまし

といひけりかいせう返し

ことならばはれすもあらなむ秋きりのまきれにみゆる君とおもはん

まらうとはつらゆきとものりなどになむありける (二八段)

(ロ) 又おなしみかのさい院のみこのおほむもとにきくにつけて

ゆきてみぬ人のためにとおもはずはたれかおらまし我やとのきく

さい院ナシの御かへし

我やとにいろおりとむるきみなくはよそにもきくのはなをみましや (四八段)

(ハ) きむひらかむすめしぬとキ・・て

なかけくもたのめるかな世中をそてになみたのかゝる身をもて (二一六段)

(ニ) 閑院のおほい君大きみに

むかしよりおもふ心はありそうみのはまのまさこはかすもしられず (二一八段)

(イ)は主とまらうどの贈答歌で、まらうどがないと不自然である。返歌の主はかいせんであるが、まらうどは誰かはつきりしない。しかし、後に「まらうとは云々」という本文があるから、それが解消する。ここは二箇所にわたって「まらうと」があり、重複しているために片方を除去したのである。ロも両方の「さい」、「さい院」がないことから、何らかの理由で除かれたものか。

(ハ)、(ニ)とも「きむひらかむすめ」と「閑院のおほい君」が登場する。ともに後撰集時代の女流歌人である。しかし、鈴鹿本、御巫本をみると彼女達の作ではなく、他の誰かの作になっている。これはいずれが正しいのであろうか。詠み手が不明なのは不自然であり、為家本がもとの姿であろう。しかし、鈴鹿本、御巫本のようにした理由は明らかでないが、両方の歌とも詠み手、受け手のいずれの立場にもとれる歌でもある。このようなことも手伝って意図的に改められたのであろう。

さらに鈴鹿本、御巫本は重複するような表現のあるときはいずれか一方を除いたり、改めたりしている。それらをあげてみよう。

(イ) かねもりよみておこせたりける

をちこちの人めまれなるやまさとにいゑるせむとはおもひきや君

とよみてなむおこせたりければいひたりければみて (五七段)

(ロ) 時々めしけりさてのたまはせける

あかてのみゝれはなるへしあはぬよもあふよも人をあはれとぞ思

とのたまはせけるをわらはの心ちにもかきりなくあはれにおほえければ(三四段)

(ハ) このもとのめのもとにふえをなむひきむすひてをこせたりけるみればかくかけり(一四一段)

(ニ) むかしさい中将のみむすこさいし君といふかめなる人なむありける女は山かけの中納言のみひめにて(一四三段)

(ホ) おほむひとへの御そをかつけさせたまへりけりさい中将たまはるまゝに(二六一段)

(ヘ) かのみやにやまといふ人さふらひけるをものなどのたまひければいとわりなくいろこのむ人にて女いとおかしうめてたしとおもひけりさりけれとあふことかたかりけりやまと(一七一段)

(イ)は前に同じような語句があり、後の方を改めている。(ホ)も同様である。(ロ)は前に「のたまはせける」と同じ語句があり、(ハ)は同じ語句ではないが、すぐ前に「をこせたりける」とあるから、いずれか一方は不要であろう。(ニ)をみると鈴鹿本、御巫本は「め」が「人」になっている。「め」、「人」、「女」は同一人物であり、複雑を省くために「め」を「人」に、「なる」を「也ける」にして「人なむありける」を除去したのでであろう。しかしそうしても「さいし君といふ人」もける山かけの中納言の」となつて意味上、不安が残る。

(13)(16)(22)において鈴鹿本、御巫本は「ナシ」となっているが、実はこの「ナシ」の所に該当する本文が他の位置にみられるのである。さらに(15)も同様に考えられる。それらを記してみる。

(13) つゝみの中納言 故兵部卿の宮うせたまひてける時はきさらきのつこもりはなさかりになんありけるつゝみの中納言のよみたまひける

(15) 亭子のみかとの御とおほきおとゝに 御とも つかうまつりたまへるに

(16) 故式部卿の宮この 女のかゝることまたしかりける時

(22) これは女かよひける時に 女

(13)において、鈴鹿本、御巫本は冒頭に「つゝみの中納言」がある。次の章段を見ると「おなし宮おはしましける時」で始まっている。大和物語において、冒頭は同一人物で統一するのが普通である。ここは「つゝみの中納言」を前面に押し出すためにこのようにしたのである。しかし、それがために文章が不自然になっている。(15)も鈴鹿本、御巫本は「御とも」を後に持ってきて、もとのところに「とき」を補い、理解しやすくしたのである。(16)については今井源衛氏もふれておられる。即ち、

巫・鈴では「故兵部卿宮のとかくなりにける女まだしかりける時」とあつて、女は中興女とは別人となるが、国歌大観元良親王御集(31〜36)にも、この段の「萩の葉の」以下「つゝしくも」まで六首が歌調に多少の相違はあるが、この通りの順序で出ており、且つ「萩の葉の」の詞書に「近

江介なほきがむすめどもかたちよく心たかしと聞き給ひて遣しける」とあつて、中興女のこととしているらしい。また巫・鈴は、すぐあとの「萩のはの」の歌から「関川の」の歌の直前、その詞書である「女かへし」まで、脱落しており、こここの「のとかなりにける女」の本文も、何かの誤りと見るべきであろう。⁽¹⁹⁾

と述べられている。むしろ私は改作されたのではないかと思う。「のかゝること」を鈴鹿本、御巫本が持つていない代りに「この」ところへの「のとかなりにける」を持つてきたのであろう。⁽²²⁾は誰の作か混同しがちなので鈴鹿本、御巫本のようにしたのであろう。以上あげたいずれにも該当しないものとして(5)(6)(14)(19)(27)があげられる。因に(5)は

むまのせうふはらのちかぬといふ人のめにはとしといふ人なむありけることもなとあまたいてきておもひてすみける^{子うむ}ほとに
とある部分の異同で、鈴鹿本、御巫本のようにだ前に「こともなとあまたいてきて」とあるから重複している。なぜこうしたかは明らかでないが、鈴鹿本、御巫本は後世のものと言えよう。次に(6)は鈴鹿本と御巫本が「みこ」になっている。いま、前文を記してみると、

かつらのみこに式部卿宮すみ給ける時その宮にさふらひけるうなひなんこのおとこみやを^{みに}いとめてたしとおもひかけたまつりたり
のようになっている。采女が式部卿宮に好意を寄せる話であるが、ここは「おとこ」「みや」を分けるのではなく、「おとこみや」で式部卿宮を受けていると見るべきである。してみると「式部卿宮」とあるから「みや」とあるのが妥当であろう。しかし、鈴鹿本、御巫本のようにした理由は明らかでない。(14)は

おはしまさぬことなときこえたまうておくに

しら山にふりにし雪のあとたえていまはこしちの人もかよはず

となむありけるおほむかへりあれと本になしとあり

となつてゐる。鈴鹿本、御巫本のようにだと後に「となむありける」があるから重複し不自然である。鈴鹿本、御巫本は改作したのであろうが、かえつて欠点をさらけ出している。(19)をみると鈴鹿本、御巫本は「兵庫守」になっている。これも改作であろうが、八七段に「兵庫充」が出てゐるから、これをもとにしたのかもしれない。最後に(27)であるが、鈴鹿本、御巫本は「守」になっている。これと同様な箇所として、一〇三段の「あふみのすけ」が「あふみのかみ」に、一五四段の「やまとのくに」が「大和守」になつてゐるところがあげられる。鈴鹿本、御巫本は身分を上位にしようとして改作したのであろう。

鈴鹿本、御巫本には(24)のようにあて字を用いたり、(25)(26)のようにその意味をよく理解しないで漢字をあててゐるところがみられる。

ところで、鈴鹿本と御巫本において歌の後の本文、これは大方、段末にあるのだが、それが無いのがみられる。これはかなり多い。(4)(7)(31)がその例である。これはいかに考えたらよかろうか。つまり、除去されたものか、それとも本来から持っていないかということである。自然に考えれば、後者となるうが、これを持つていないのが鈴鹿本と御巫本ということになると単純には処理できない。とりあえず、個々にあたってみよう。まず(4)は次のようになっている。

とありければ返し

ひさしくはおもほえねともすみのえのまつやふたゝひおひかはるらむ

となむありける

「となむありける」がなくても前に「返し」とあるから十分に理解できたはずである。次に(7)は

ゑしうといふほうしのある人のおほむつかうまつりけるほとにとかく世中にいふことありければいひける(御巫本)よみたりける

さとはいふ山にはさはくしらくものそらにはかなき身とやなりなむ

となむありける

となっている。御巫本は前の本文に異同があるが、底本と意味の上で変化ない。ここも「となむありける」は不要であろう。

これらと同じような箇所は多い。一、二あげてみる。

(イ) おなしかねもりみちのくに、閑院の三のみこの御むこにありける人くろつかといふ所にすみけりそのむすめともにをこせたりける

みちのくのあたちのはらのくろつかにおにこもれりときくはまことか

といひたりけり (五八段)

(ロ) つくしなりける女京におとこをやりてよみける

人をまつやとはくらくそなりにけるちぎりし月のうちにみえねは

となむいへりける (一二九段)

これらも前に「をこせたりける」、「やりてよみけるただし御巫本は「よみたがあるから段末の本文と重複している感じである。こうみてくると歌の後の本文がなくとも何ら支障がない。

いままでの異同は歌の後にみられたが、最後の(31)は歌の前にある。この前後の本文を記してみよう。

さてかへしはいかゝしたりけむしらすくるまにきたりけるきぬゝきてつゝみてふみなとかきくしてやりけるさてなむかへりける
のちにはいかゝなりナシにけむしらす

あしからしとてこそ人のわかれけめなかなにはのうらもすみうき

となんこれ返しにあなる(御巫本)
といふなんこれ返しにあなる(鈴鹿本)
・・・・・(二四八段)

「のちにはいかゝなり(20)にけむしらす」は除去されたのであろう。こうした理由は「あしからし」の歌にあると思う。この歌は段末に混入したものと推測されている。そうするとこのままでは不自然である。そこで、鈴鹿本と御巫本の書写者は「あしからし」の歌を返し歌にして、「のちにはいかゝなり(20)にけむしらす」を除去し、その後「となんこれ返しにあなる」御巫本は少し異同があるという本文を付加したのであろう。合理的に処理しようとする現われとみることができよう。しかし、前の(4)(7)についてはこのようにはつきりした根拠がみられないが、いままでみてきた鈴鹿本、御巫本の性格から考えて、おそらく除去されたのではあるまいか。

しかしながら、次のような場合はどうか。

先帝の御時に右大臣殿の女御うへの御つほねにまうのほりたまてさふらひ給けるおはしましやすとしたまちたまひけるにおはしまさゝりければ

ひくらしに君まつやまのほとゝきすとはぬときにそこゑもおしまぬ

となむナシきこえける(二四段)

これは歌の前に「よみたりける」とか「返し」というような本文がないのに、鈴鹿本と御巫本は段末の本文がないのである。このような例は他にもみられる。また(4)のように鈴鹿本と御巫本は為家本よりも簡略になっている。これらはどのように処理したらよいのか。はつきりと断定はできないが、ただないことや簡略になっているからものと姿と考えるには一考を要するであろう。

ともあれ、歌の前後にみられる本文の有無は大和物語の享受を知る上で切っても切り離せないと思う。同時に、それがなければ付加されたものと断定するのも危険であろう。なぜなら、前述したようにその多くが鈴鹿本と御巫本だけしか持っていないからである。

鈴鹿本の性格を考えるためのひとつの手段として鈴鹿本と御巫本とが共通する本文をみてきた。両者のみで一致している場合が圧倒的に多いことから、かなり密接な関係にあることが理解できる。しかも、これを検討してみると誤写、改作、付加など実に様々であったが、おおむね理解しやすく

| 番号 | 章段 | 為家本の本文 | 鈴鹿本の本文及び異文 |
|-----|----|--|---|
| (1) | 2 | 少将中将これかれさふらへとてたてまつれ たまひけれとたかひつゝありき | は たつねつゝ御ともにさふらへとてたてまつ り給ければ(巫) そのとし そのよしとし(巫) ナシ |
| (2) | 2 | そのなをなん寛れんたいとくといひて | おもはん 恨ん(巫) 見おとこ 見おとゝ(巫) 色のくすりの よるく よる人(巫) 人の とある人の(巫) |
| (3) | 8 | ひさしくをともし給はさりけるにさかの院 にかりすとてなむひさしくせうそこなとも なにかうからむさかのつらさは | |
| (4) | 8 | 本院の北方のみおとうとの | |
| (5) | 14 | 本院の北方のみおとうとの | |
| (6) | 22 | あたるのたのめわたりしそめかはの | |
| (7) | 32 | このしたはおる人からや | |
| (8) | 44 | とをくやあるいつそといへりければ | |

合理的に処理しようという意識がこれらの本文に現われていたのではなからうか。そして、御巫本が鈴鹿本の生成にある時点で関係していることは確認できた。しかし、具体的にどのように関与しているかは明らかにできなかったが、それには両者の独自異文への追究が必要であらう。

鈴鹿本の本文は御巫本の本文と共通する箇所が多いことからして、両者が近い関係にあることは事実である。ところが、鈴鹿本の本文をさらに詳しく調査してみると独自異文もはなだ多いという結果になるのであるが、むしろ、これは鈴鹿本の複雑な生成過程を示していると考えた方がよさそうだ。そこで、そのことについて為家本、御巫本などと比較して考えていきたい。とりあえず論述の便宜上、主な用例をあげ一覧表にしておこう。

| (20) | (19) | (18) | (17) | (16) | (15) | (14) | (13) | (12) | (11) | (10) | (9) |
|---------------|------|--------------|-----------------|-------------------------------------|-----------------------|------------|---------------------------|-----------------|-------------------|---------------------|-------------|
| 98 | 97 | 94 | 84 | 81 | 81 | 70 | 63 | 57 | 54 | 54 | 51 |
| とてなむ・・なきたまひける | ナシ | となむありける | くりこまのやまにあさたつきし | わすれしとたのめし人はありときくいひし ことのはいつちにいにけむ | すゑなはの少将のむすめ右近 | とよみてなむなきける | しひてえたりけるをおやきゝつけてのゝ しりて | あふみのすけ平のなかきかむすめ | ともたちのもとへ | むねゆきのきみ三らうにあたりける人 | 花の色をみてもしりなむ |
| よみて (巫) | ようて | となんよみ給けり (巫) | となむきこえたまひける (巫) | ナシ | おもはんとたのめし人はそれなから (巫イ) | さこん (巫イ) | 御こん (巫) | こらん | わたりけるをおやきゝつけて (巫) | かき | しらなん |
| | | | | | | | | 近江の守もとのなかき | に (巫) | 太郎にてろうとうといひける人 | 白菊 (巫) |
| | | | | | | | | 近江のすけ本のなかき (巫) | | 太郎にてあくとしといひける人 (巫) | |
| | | | | | | | | ナシ | | 太郎にてめうとうといひける人 (巫イ) | |
| | | | | | | | | | より | | |

| (33) | (32) | (31) | (30) | (29) | (28) | (27) | (26) | (25) | (24) | (23) | (22) | (21) |
|--|--|---|----------------------------------|----------------------|------------|-------------------|--------------------------------|----------|------------------|------------------------------------|-----------------------|-------------------|
| 156 | 155 | 153 | 149 | 147 | 145 | 138 | 125 | 122 | 106 | 103 | 102 | 101 |
| このめの あひそひてあるに…… このめの | あひそひてあるに…… このめの | おる人の心にかよふち はかまむへいろふ かくにほひたりけり いとほつかしとおも ひけり。さてよみたり ける。 | されはこの水あつゆに たきぬれは | とりにあけてなきのし りてはふりす | かつけものたまふ…… | このこやくしといひ ける人は | このたみねかむすめ このこやくしといひ ける人は | そうきのもとより | あふきおとしたまへり ける | 御くしをといひてなく 時に。おとこの | よはくなりて。とはなり ける。いゑに | このゑのみかとにいて たちて |
| かくてこのおとこめま うけてすませけり年 ころあひそひてけるに かくてこのおとこめま うけてすみけり年こ | かくてこのおとこめま うけてすませけり年 ころあひそひてけるに かくてこのおとこめま うけてすみけり年こ | けるにかく けり(巫) | にこの水あつゆに(巫) されはこの水ゆに(光) ナシ | おさめ おさめつ(巫) | しろめ おさめ | やくし くやし(巫) | かくしける やくし | おこし に | おこし に | 見侍れはいとなむいた くといひてなく時に といひて(巫) | てとはすなりにける(巫) ナシ | 此家 家(巫) にける |

| | | | | | | |
|-------------------------------|------|------|--|------|------|------|
| (40) | (39) | (38) | (37) | (36) | (35) | (34) |
| 173 | 171 | 170 | 168 | 164 | 162 | 156 |
| たけはかりならん ^① と見ゆるか・・ | | | このしうとめの・・おいかゝまりて おなしくさを・・・ かくいひやりける このせうとの兵衛のせう | | | |
| かく | | | ろあひそひてあるに(巫) をは わすれとも ナシ 少輔 尉(光) す 給へ 給へる(巫) かく | | | |

(注) 伝本略号は以下の通り。巫(御巫本)、光(勝命本)。

ひとつひとつ検討してみよう。まず誤写と思われるところはひじょうに多い。(1)(3)(8)(13)(22)(23)(30)をみると鈴鹿本はある部分を欠いているか、もしくは簡略になっている。このうち(3)(13)をみるに、前者は「ひさしく」が、また後者は「しのひて」、「きゝつけて」が欠けている箇所を含め、その前後に同じか似通った語が来ている。このことから鈴鹿本は書写する際に目移りを生じたのであろう。しかし、(1)(8)(22)(30)は為家本を見る限り同じか、似通った語はない。ところが、この部分を御巫本にあたってみると、(1)では「御ともには」、「けるは」となって「は」が共通しており目移りの可能性は大きい。また(8)は前文が次のようになっている。

おなし人^①にあるひとやまへのほり給へき日はまたとをくやあるいつそ^②といへりければ

鈴鹿本と御巫本は①が②のところにあるわけだが、為家本とこれらでいずれがもとの姿かは断定できない。ただ、どちらも「あるひと」となっていることは確かであろう。それがおそらく「とおくやあるとある人の」と「ある」が続くために目移りを生じ鈴鹿本のようになったのであろう。(22)もほぼこれに同じであろう。さらに(23)はどうか。これも前後の本文を記してみる。

けすの心ちもいとむねいたくなむさはかりに侍し御くしをと^①ナシ(巫・鈴)
とらひて(巫)
・・・おとこの

(注) 伝本略号は鈴(鈴鹿本)を示し、残りは一覧表の場合に同じ。以下も同様。

「いひてなく時に」を鈴鹿本は欠いているわけであるが、鈴鹿本はこの本文だけではなく御巫本と同じような本文を有していたと推測される。なぜなら鈴鹿本と御巫本は①の本文を持っていない代りに②を持っていてと思われるからである。それは②に「いとむねいたく」があることによっても理解できよう。したがって、ここは御巫本をもとにしてその原因を追究すべきである。それにしても前例のように目移りと思われる要因も見当たらない。思うにここは「て」と「と」の錯覚ではなからうか。最後の(30)も御巫本には「にこの水あつゆに」とあり、「に」の錯覚で目移りが生じたのであろう。(1)(8)(22)(23)(30)から鈴鹿本は御巫本の如き伝本から目移りを生じたものと推測される。目移りと思われるところはこの外にもみられる。それらを列挙しておく。

- (イ) つかうまつりけるほとにとかく世中にいふことありければよみたりける(四二段)
- (ロ) むすめをしのひてえたりけるをおやきつつけてのしりて(六三段)
- (ハ) きさらきのつこもりはなのさかりになんありける(七二段)
- (ニ) あまになりけりつかふ人あつまりてなきけれといふかひもなしと心うき身なれはしなむと思にもしなれすかくたになりておこなひをたにせむかしかましくかくな人いひきはきそとなむいひけるかゝりけるやうは(一〇三段)
- (ホ) なそのふみそとおもひてとりてみれば(一〇五段)
- (ヘ) なきけりこきいていぬれば(一四一段)

傍線を引いた部分を鈴鹿本は持つていないが、これらはいずれも〇印を付けたように前後に同じか、似通った語が来ていることから理解できよう。また草書体がよく似ているためにその読み方を誤っているのがみられる。例えば(9)(24)(27)(38)であるが、(9)は「り」を「ら」に、(17)は「り」を「る」に、(24)は「と」を「こ」に、(38)は「さ」を「す」にそれぞれ読み誤ったものと思われる。ただ、(9)については今井源衛氏が「しらなん↓白南↓白菊」という過程での誤写を想定しておられる。⁽²¹⁾確かに「白南」とある写本でも出現すれば、そう言えるかもしれないが、それよりも現存の資料から何か考えられないか。四九段とこの章段は宇多天皇と齋院についてのことが記されており、しかも四九段には「おほむもとにきくつけて」、「たれかおらまし我やとのきく」、「よそにもきくのはなをみましゃ」というように「菊」の表記があり、御巫本はそれを意識して改めたことも十分予想してよからう。ともかく、ここは鈴鹿本が御巫本よりも古い姿を残していると思われる。さらに(5)(7)(10)(15)(20)も鈴鹿本は草書体の読み誤りと推測される。しかも、これらはいずれも為家本の如き伝本から生じたものでないことは草書体が似ていないことによっても理解できるのである。ではどうして、このようになったのであろうか。(5)は妹の意であるから為家本が正しい。おそらく「みおとうと」を何らかの理由で「見おと」としてしまい、その後、鈴鹿本は「ゝ」

を「こ」と誤ってしまったのであろう。(7)は「しくれのみふるやまさとのこのしたはおる人からやもりすぎぬらむ」とある一部分の異同で、「おる」は「折る」と「居る」の掛詞になっているから、やはり「おる」とあるのが本来の姿なのであろう。御巫本は「よる人」となっているが、これは今井源衛氏も指摘されているように「お」を「よ」と誤ったのであろう。さらに鈴鹿本は「人」を「く」と誤ったのであろう。(10)はどうか。鈴鹿本、御巫本、御巫本イは「ろうとう」、「あくとし」、「めうとう」の違いだけで近い関係にある。これらの関係を考えてみると、鈴鹿本は「め」を「ろ」と読み誤り、御巫本イの如き伝本から生じたものではなからうか。さらに御巫本イは「あ」を「め」と誤り、御巫本の如きものから生じたものであろう。事実、それぞれの原本にあたってみると、これらの草書体は類似している。ここは御巫本から鈴鹿本への過程は考えられない。むしろ、鈴鹿本の親本の存在を暗示させる。(15)はおそらく「右近」を「さこん」と読み誤り、さらに「さ」を「御」と誤ったのであろう。そのうえ「ら」を「こ」と誤り鈴鹿本のようになったものであろう。事実、鈴鹿本と御巫本の原本にあたってみると「御」と「さ」がひじょうによく似ている。なお(10)(15)のように御巫本には「イ」と校異を記したところがかかなりみられる。御巫本の書写者はいかなる伝本を校異に用いたかであるが、これを調査されたのは阪倉篤義氏であった。(23)氏によれば、「イ」には鈴鹿本が一致するものの、すべてが一致するわけではないから鈴鹿本に近い別の一本を見ていたと言われている。このことは(10)(15)で予想した転写過程からも納得できよう。最後に(20)であるが、前文は次のようになっている。

さてよみたまひける

ぬくをのみかなしとおもひしなき人のかたみのいろはまたもありけり

となむ・・・なきたまひける。
よみて(巫)
 ようて(鈴)

御巫本のように「よみて」があると歌の前にも「よみたまひける」とあつて重複するから後の方を除去したとも考えることができよう。しかし、そうとるよりも「なきたまひける」とあるから、そうなる前の動作を示すために、ここは付加されたものではないか。そして、鈴鹿本は「み」を「う」に読み誤ったのであろう。(5)(7)(10)(20)において鈴鹿本の本文の成立を考える場合、御巫本を無視することはできない。御巫本の存在によって、はじめて鈴鹿本の草書体の読み誤りであることが理解できるのである。

この外にも、これと同じような例はみられる。今、それらをあげてみよう。

- (イ) むかしおとこきのくにいく(巫)
いよ(鈴)くたるにさむしとてきぬおこせたりければ(八八段)

- (ロ) おはしまさんとのたまひければけるに(巫)きこえける (九〇段)
- (ハ) とのみかきたりいとあさましくて (一〇二段)
かけり(巫)
かける(鈴)
- (ニ) かむのくたりそうしければみかともかきりなく (二〇一段)
あめ(巫)
あめ(鈴)
- (ホ) あはせさりけれとこのこといきてきにければ (一〇五段)
たてまつられて有けるを(巫)
たてまつりて有けるを(鈴)
- (ヘ) おほいこはきさいの宮に少将のこといひてさふらひけり (一一一段)
大いこ(巫)
大と(鈴)
- (ト) からころもたつをまつまのほとこそは我しきたえのちりもつもれ(巫・光)つもれつもれか(鈴)もらめ (一〇四段)
- (チ) つかのなをはをとめつかとそいひける (一四七段)
男の(巫・光)
果の(鈴)
なんいふなる(巫)
なんいふ也(鈴)
- (リ) おとしゃうはむはらになむありけりける (一四七段)
兵衛ちん(巫)
兵衛先(鈴)
- (ヌ) 左衛門のちん兵衛先(鈴)にくるまをたてゝ (一七一一段)

鈴鹿本はいずれも草書体の読み誤りであつてこれは御巫本の如き伝本(チ・リ)については問題あるが、から生じたものであろう。しかし、この用例から為氏本と御巫本のいずれがもとの姿かについては明らかでない。

単なる誤脱と思われるものは(27)(29)であり、このような箇所は少ない。(27)から鈴鹿本と御巫本は近い関係にある。御巫本は鈴鹿本の本文から錯覚を生じたとも考えられよう。両者が密接であることは疑うべくもない。しかし、鈴鹿本から御巫本への過程を推測できる箇所は、今までの例からはなかつた。むしろここは両者の親本から生じたものとみるべきであらう。(29)において鈴鹿本は今まで述べた例などから御巫本の如き伝本から生じたものであろう。

次にこれらとは反対に意図的になされているのではないかと思われるところをみていこう。

まず鈴鹿本の付加と考えられるものに(19)(28)(33)(34)(40)があげられる。ただ(19)(33)は御巫本もほぼ同じ本文を持っており、前者は物のいとあはれにおほされければ

かくれにし月はめぐりていてくれとかけにも人はみえずそありける

となんよみ給けり(巫)
 ・となんよみ給ける(鈴)
 ・となんよみ給ける(鈴)

となつており、鈴鹿本と御巫本は地の文から歌に移る間が唐突と考えて、歌の後に付加したのであろう。しかも、ここは文法的に考えて鈴鹿本が正しく御巫本は誤っている。するとここから、鈴鹿本から御巫本への過程が考えられるが、これと同様な箇所はほとんどみられず、先程のと同様に考え、鈴鹿本、御巫本の親本で付加されたものが伝流する過程で異同を生じたのであろう。(33)もほぼ同じであらう。(28)は後に「いふうたもこのしろめかよみたる歌なりけり」とあるから、改めてここでいう必要もあるまい。作者を明示するためにこうしたのであろうが、かえって煩雑になってしまう。(34)は強く対象を示すために付加したのであろう。最後に(40)は地の文から歌への続き方をスムーズにするためにこのようにしたのであろう。

これらとは反対に鈴鹿本の除去ではないかと思われるものは(18)(31)(36)である。因に(18)は前文が次のようになってい

宮のおほむかへし

すもりともおもふ心はとゝむれとかひあるへくもなしとこそきけ

ナシ(鈴)
 となむきこえたまひける(巫)
 となむありける

御巫本は「となむきこえたまひける」とあるが、これは宮の歌ということを考慮して改めたのであろう。鈴鹿本は前に「宮のおほむかへし」とあるから歌の後の本文は重視している感じであり、そのために除去したのであろう。これと同じことは(36)についても言える。これは

かへりことにかくいへやりける

あやめかり君はぬまにそまとひける我はののいてゝかるそわひしき

とてきしをなむやりける

となつており、歌の後に「やりける」があるから「いへやりける」を除去したのであろう。ただ、(18)(36)は持っていない方がもとの姿という考えもでき

よう。しかし、今までの鈴鹿本について考察した結果からそのようには考えられない。それに、このような同語の反復は外にもみられ、大和物語の文体のひとつの特色であったようだ。⁽²⁴⁾ (31)は前後の本文が次のようになってい

ならのみかとくらみにおはしましける時さかのみかとははうにおはしましてよみてたてまつれたまうける

みな人のそのかじめつるふちはかまきみのみためとたをりたるけふ

みかと御返し

おる人の心にかよふちかはかまむへいろふかくにほひたりけり

又かへらせ給ひけるに(巫)

・・・・・

萩か花折らんをのゝ露霜にぬれつゝゆかん夜は更ぬとも

鈴鹿本と御巫本は「萩か花」の歌を持っており、両者の関係の密なるを思わせる。ところが「おる人の」の歌は鈴鹿本にはなく、御巫本は持つているのである。一方では共通し、一方では異同があるわけだが、これは何か関連がありそうだ。

鈴鹿本と御巫本に「萩か花」の歌が加わっていることについて今井源衛氏は

この歌は、猿丸大夫集に、「女の許に」と題して、「萩の花散るらん小野の露霜に濡れて行かむさよはふけとも」とあり、家持集にも、この猿丸大夫集と同一の形で(但し結句「ふけぬとも」見えている。やはり、かなり古くからの伝承であろう。内容は猿丸集に言う通り恋歌であり、大和の

本段に附属すべき理由はない。後人が「藤袴」や「折る」の連想から、まことにしやかに「又かへらせ給けるに」などと詞書を添えて、ここに追記したものであろう。⁽²⁵⁾

と述べておられる。氏の言われるように「萩か花」の歌は伝承されていたのを付加されたものであろう。それに「みな人の」と「おる人の」の歌にはそれぞれ「ふぢばかま」、「おる」が詠み込まれているところから贈答歌としての体裁を成しており、もとは為家本のようになっていたのであろう。ただ、氏は鈴鹿本が「おる人」の歌を持つていないことについてふれられていない。鈴鹿本はどうして「おる人」の歌を持つていないのであろうか。思うに「おる人の」の歌から「又かへらせ給けるに」までを欠いていることから意識的に削除されたものであろう。そして、ここは鈴鹿本が御巫本より後の成立と考えてよからう。

鈴鹿本には改作と思われるところも少なくない。これらは実にさまざまな現象がみられる。(4)(6)は歌の一部分の異同である。(4)は前に「おほきは、のいけの水くき」とあるから「うからむ」とあるべきであろう。御巫本は「恨ん」とあつて鈴鹿本との関係は考えられない。むしろここから親本にな

るものの存在が確かめられよう。(6)は「そめかは」とあるがこれは筑前にある川で、歌枕として有名で色好みの話によく出てくる。鈴鹿本は「色のくすり」とより具体的にしたのであろう。(16)は上句全体が異同している場合である。この歌は後撰集巻十、恋二にあるもので、今、後撰集の諸本にあたってみると、

- (イ) おもはむとたのめし人は有とききいひし事のはいつちにけん(天福本)
- (ロ) 思はむとたのめし人は有るとききいひしことのはいつちにけむ(中院本)
- (ハ) 思はむとたのめし人はありとききいひし事のはいつちにけん(貞応二年本)
- (ニ) おもはむとたのめし人はありとききいひしことの葉いつちにけん(堀河本)
- (ホ) おもはむとたのめし人はありとききいひしことのはいつちにけん(二荒山本)
- (ヘ) ワスレシトヲモハムトタノメシ人ハアリトキクイヒシコトノハイツチイニケン(片仮名本)

(注) 本文は『後撰和歌集総索引』(大阪女子大学国文学研究室編 大阪女子大学 昭和40年12月)に拠った。

のようになる。(イ)から(ヘ)までの伝本がすべて初句は「おもはむと」になっている。漢字と仮名の
違えはあるがただ、片仮名本だけが「ワスレシト」と傍に校異の形で記されている。また御巫本には「イ」として「おもはむと」とあるが、御巫本の「イ」については(10)(15)において述べたように、ここでも同様に処理してよからう。ここは鈴鹿本から為家本、御巫本へと変化していったとみるか、それともこの反対にとみるかであるが、今までの考察の結果から後者と考えた方が妥当であろう。ここは鈴鹿本が後撰集の如きものを資料にして改めたのであろう。事実、大和物語と後撰集が共通する歌において鈴鹿本に異同がある時、それに一致する箇所は私の調査した範囲でみられなかった。

次に地の文に目を転じてみよう。(II)(25)は歌の作者が異なる。(III)において、鈴鹿本のようにこの章段の主人公である右京大夫宗子の君三郎にあたりける人が詠んだ歌ではなくなる。そうするといかにも無責任な歌になってしまう。また(26)をみると、

としこかへりなむとしけりそれにそうきのもとよりに鈴

あひみてはわかるゝことのならせはかつく物はおもはさらまし

かへしとしこ

いかなれはかつく物をおもふらむなごりもなくそ我はかなしき

とあって、歌の後に「としこ」とあるから鈴鹿本のようにだと不自然になる。ともかく、両方とも鈴鹿本は後世の本文と言えよう。鈴鹿本の書写者は本

文をよく理解しないでこのようにしてしまったのであろう。その態度は緩慢であったとみななければなるまい。

(21)は前後の本文から考えて「この糸のみかと」とあった方がよい。鈴鹿本のように皇居を「此家」というのは不自然である。ではどうしてこのような現象が生じたのであろうか。これも前後の本文をよく理解しないで改作してしまったのではなからうか。御巫本は「家」となっているが、ここからも両者の親本なるものの存在を垣間見ることができよう。(26)において、鈴鹿本は話の内容をおもしろくするために「かくしける」と改作したのであろう。(12)(37)をみると鈴鹿本は一段と地位が高くなっている。前者は平中興の女の話で、彼女は一〇五・一〇六段にも登場し、このうち一〇五段にも父親の記載がある。それには

なかぎのあふみあふみのかみ(鈴・巫)のすけかむすめ物のけにわつらひて

とあり、為家本は「あふみのすけ」とあるが、鈴鹿本と御巫本は「あふみのかみ」となっている。ところが、(12)をみると為家本、御巫本は「介」とあるのに対し、鈴鹿本のみが「守」となっている。今井源衛氏はこの現象について、

古今集目録によれば、延喜三年正月大内記兼近江権少掾、同四年正月遠江守、延喜十年讃岐守、同十五年近江守となっているが、近江権少掾から翌年直ちに遠江守となるというのも不可解であり、且つその後には美濃権守となったことからみても、これらの「守」は「介」の誤りではなからうか。そうとすれば彼が近江介在任は延喜十五年正月〜延喜廿二年正月の間ということになる。又、鈴鹿本のみ「守」とあるが、やはり他の諸本に「介」とあるのに随うべきだらう。⁽²⁶⁾

と述べておられる。高橋正治氏も同じ考えのようである。⁽²⁷⁾しかし、鈴鹿本のみが「守」となっていることについて、どういうことに起因しているかについてはふれられていない。

一方、前田千代美氏はこの表記の相違を歌語りという観点からとらえ次のように述べておられる。

官職の二つの継承的方法から見ると、「古今和歌集目録」や「今昔物語」では、延喜十年の官職である近江守が採録されたのに対して、「大和物語」では、中興の娘の奔放な恋や零落した情景が歌語りの中で語られる際に、守以前の官職である介がそのまま組み込まれていったものと思われる。六条家本系統に見られる守が、そのことを否定するようにも思われるが、六条家本系統の諸本の方が後世の書写の際に「古今和歌集目録」や「今昔物語」の表記に従ったが為に守と書き直したものだといえないだろうか。⁽²⁸⁾

鈴鹿本、御巫本の「守」の表記を改作とみているが、五七段の場合、鈴鹿本のみが「守」となっていて御巫本は「介」とある。やはりここは複雑な生成過程を認めるべきであらう。

そこで、(12)の鈴鹿本の成立について少し考えてみよう。為家本で「平」のところが御巫本では「本」になっていることに注目したい。これは前田千代美氏も指摘されているように、⁽²⁹⁾「平」を「本」に読み誤ってしまったのであろう。事実、御巫本の原本にあたってみると「本」は「平」とひじょうによく似ている。鈴鹿本は平仮名で「もと」と記し、しかも「守」とある。このことについて憶測するならば、鈴鹿本の書写者は「もと」を以前という意味にとってしまったのではないか。彼は『古今和歌集目録』によると「近江守」を歴任している。これが誤りか否かは別問題として、鈴鹿本の書写者は「守」を歴任したと考えていたのではないか。それと官職を上位に持つて行こうとする意識は前述した鈴鹿本と御巫本の共通本文に現れていたが、ここもその現れとみるべきではなからうか。ともかく、この「守」はこのようなことも手伝って改められたのであろう。それにしても「もと」が官職の下にあることに疑問を持つかもしれないが、鈴鹿本と御巫本において「守」で統一されていないことは少なくともこのような憶測を抱かせよう。ここは鈴鹿本の成立を考える上で、どうしても御巫本を避けて通ることはできない。このような傾向は(17)をみてもわかる。これは勝命本から考えて、もとは「尉」とあったのを鈴鹿本は上位にするために改めたのであろう。

(32)(35)は前後の本文をみると改作であることがはっきりする。前者は

いとほつかしとおもひけりさてよみたりける
けり(巫) けるにかく(鈴)

あさかやまかけさへみゆるやまのゐのあさくは人をおもふものかは

とよみて、木にかきつけていほにきてしにけり

のようになっている。後に「よみて」とあるから重複しており、そのために改作したのであろう。また後者は次のようになっている。

たまへりければ中将

わすれくさおふるのへとはみるらめとこはしのふなりのちもたのまむ

となむありけるおなしくさを
わすれとも(鈴) ナシ(鈴)とも(鈴)・巫・光 わすれくさといへは
ナシ(鈴) わすれとも(巫)

ここで鈴鹿本の成立に関して言えることは歌の前に「わすれくさ」、「しのふくさ」の順に記されており、しかも「おなしくさ」と前にあるから「くさ」を省略したのであろう。御巫本は「しのふくさともわすれとも」となっている。このことから為家本がもとの姿であろう。それが御巫本のようになり、さらに鈴鹿本のように変化したのであろう。

改作と思われるものをあげてみよう。

(イ) あふことはかたはさのみそふたからむひとよめくりの君となれはとをなれは(鈴)は (八段)

(ロ) 兵衛のかみの君(巫)
兵衛のかみの宮(鈴)
兵衛のかむのきみあやきみときこえける時 (一〇八段)

(ハ) おなしそうきやれる(巫)
やとれる(鈴) 人のもとはしらす (二三三段)

(ニ) 泉の大将いつみの右大将(巫)
故左のおほいとにまうてたまへり (二二五段)

(ホ) いたつらみえける物ともなりけりさりける時に女かくいひやりける (一六七段)
返し事女(巫)
返し女(鈴)

これらの中には成立過程でやや異なるものもあるが、おおむね(イ)は先程の(28)(29)と(ロ)(ハ)(ニ)は(33)と、(ホ)は(35)(36)とそれぞれ同じ例と思われる。そして、いずれも鈴鹿本は為家本、御巫本よりも後世の本文と言えよう。

誤写、改作についてみてきたが、誤写かそれとも意図的になされたものか一概に断定できないものもある。例えば(2)(14)(39)がそれである。(2)は「よし」としとあつたのを「し」の錯覚で「とし」としてしまったのかもしれないし、あるいは「とし」と意図的にしたのかもしれない。しかし、この場合、下に「いひて」とあるからいささか不自然になる。(14)も「な」と「か」の草書体の読み誤りともとれるし、また改作としても十分に意味は通じる。(39)も同じである。このように誤写か改作かは不明であっても鈴鹿本は為家本、御巫本より後世の本文と思われる。しかも(2)(39)において御巫本の如き伝本から鈴鹿本への過程が推測できよう。

これらと同じ例をあげておこう。

(イ) おなしおほきおと左大臣(巫)
右大臣(鈴)の御はすかはらの君 (九八段)

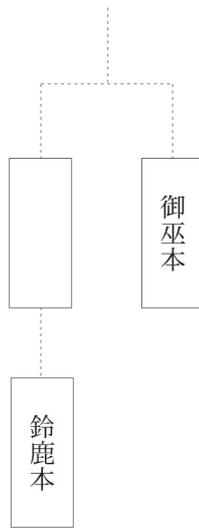
(ロ) 三条右大臣殿(巫・光)
三条左大臣殿(鈴)
三条の右の大殿の女御やかてこれにかきつけたまひける (一二〇段)

(ハ) いまの左のおと右(鈴)少将に物したまうける時に (一七一一段)

ここでも鈴鹿本は為家本、御巫本よりも後世の本文と言えよう。

鈴鹿本の独自異文をみてきたわけであるが、ここでも前に述べた鈴鹿本と御巫本との共通本文とはほぼ同じような現象がみられた。しかも鈴鹿本の独自異文は大きく二つに分けることができる。即ち鈴鹿本のみが異同しているものと、鈴鹿本は異同しているものの御巫本勝命本もこれに共通する場合もあるもそうなっているものである。鈴鹿本はどちらの場合にしても大方が御巫本よりも後世に成る本文が多かったのであるが、特に後者から親本の存在と本文の流れをある程度、把握することができた。このことからして鈴鹿本は御巫本よりも後の成立とみてよからう。

鈴鹿本の校異、ミセケチ、本文について考察してきたが、中でも本稿の中心であった本文についてはくどすぎるくらい詳しく述べたつもりである。鈴鹿本の本文は御巫本と同じであったのが転写する過程で独自の本文を生じていったものと推測される。そして、今まであげた本文を考慮し、強いてその系統を図示すれば、おおむね次の如くなるであろう。



そして、鈴鹿本と御巫本とが共通する場合でも、鈴鹿本独自な場合でもその多くは大和物語の原型から隔てているとみるべきである。この点では、それほど目新しいことでもあるまい。ただ、それぞれの本文が生じた原因、意図を追究し、そこから鈴鹿本の成立過程をわずかながら知ることができたのは意義なしとは言えまい。従来、ややもすると鈴鹿本は御巫本と同等に扱われてきたようである。たしかに同系統であることに異論はないが、この独自の本文が存在し、それがけっこう多きを占めているのである。しかも、この独自異文全体についてはほとんどと言ってよいくらいとりあげられなかった。これは鈴鹿本の性格、ひいては大和物語の伝流を知る上で欠くべからざるものと思われる。

それと、ここで述べてきたことは鈴鹿本と御巫本との共通本文、鈴鹿本の独自異文についてであるが、とくに前者についてはすべてが後世の本文であると言えない面もあるかもしれない。それはこれらと勝命本をはじめ六条家の歌学書類に共通するもので、これらをどう処理するかである。これについては久曾神昇氏のすぐれた研究があり、⁽³⁰⁾ また最近になって今井源衛氏により新資料の提供もなされている。⁽³¹⁾ 今後はこれらを踏まえてなおいっそう考究すべきであろう。

ともあれ、鈴鹿本は総じて六条家の末流本ということからは逃れられないが、大和物語の享受を知る上で、この系統の伝本がきわめて少ないことから重視すべき伝本であると考えられるものである。

- 注(1) 三省堂 昭和29年6月、増補版 昭和45年10月。
- (2) 私家版 昭和45年11月。再版 臨川書店、昭和63年10月。
- (3) 『鈴鹿本大和物語愛媛大学附属図書館蔵』和泉書院 昭和56年10月。
- (4) 注(1)に同じ。
- (5) 『国語と国文学』30巻2号 昭和28年2月。
- (6) 『大和物語の読みについて』(大阪教育大学紀要 I 人文科学) 17巻 昭和43年3月)
- (7) 『日本古典全書大和物語』解説(朝日新聞社 昭和36年10月)
- (8) 『勝命本大和物語と研究』(未刊国文資料刊行会 昭和32年8月)
- (9) 『大和物語天理書館善本叢書29』解題(八木書店 昭和51年7月)
- (10) 『大和物語評釈・六十七五条の御』(『国文学』13巻11号 昭和43年9月 後に『大和物語評釈 上巻』(笠間書院 平成11年3月)に再録)
- (11) 九〇、一〇六、一三七、一三九段など。
- (12) 『類聚国史』(『新訂増補国史大系 第五巻 類聚国史前篇』黒板勝美氏篇(吉川弘文館 昭和8年9月)に拠る。
- (13) 『大和物語直解』(『賀茂真淵全集 第十六巻』解説阿部俊子氏 続群書類従完成会 昭和56年7月)に拠る。
- (14) 『大和物語評釈・四十四猿沢の池』(『国文学』11巻3号 昭和41年3月 後に『大和物語評釈 下巻』(笠間書院 平成12年2月)に再録)
- (15) 『歌語りと歌物語』(桜楓社 昭和51年9月)
- (16) 『鑑賞第5巻 日本古典文学 伊勢物語・大和物語』(角川書店 昭和50年11月)
- (17) 『大和物語の創作方法―いわゆる「ならの帝」の章段をめくって―』(『平安文学研究』76輯 昭和61年12月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和61年』(朋文出版 昭和62年12月)、『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)にそれぞれ再録)。本書第二章第七節。
- (18) 『大和物語評釈・二四 中興の女(下)』(『国文学』9巻5号 昭和39年4月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録)

- (19) 注(18)に同じ。
- (20) 『校注日本文学大系大和物語』頭注、浅井峯治氏『大和物語新釈』、『日本古典文学大系大和物語』頭注など。
- (21) 『大和物語評釈・十三 大空を渡る春日の』(『国文学』 8巻1号 昭和38年1月 後に『大和物語評釈 上巻』に再録)
- (22) 『大和物語評釈・六十四 右京の大夫宗子』(『国文学』 13巻6号 昭和43年5月 後に『大和物語評釈 上巻』に再録)
- (23) 注(9)に同じ。
- (24) 『大和物語評釈・二二 季繩の少将』(『国文学』 9巻3号 昭和39年2月 後に『大和物語評釈 上巻』に再録)
- (25) 『大和物語評釈・四十五 盤手』(『国文学』 11巻4号 昭和41年4月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録)
- (26) 『大和物語評釈・五 兼盛の王(上)』(『国文学』 7巻3号 昭和37年2月 後に『大和物語評釈 上巻』に再録)
- (27) 『日本古典文学全集大和物語』五七段頭注(小学館 昭和47年12月)
- (28) 『中興近江介について』(『大和物語探求』 6号 昭和50年11月)
- (29) 注(28)に同じ。
- (30) 注(8)に同じ。
- (31) 『田村専一郎氏旧蔵支子文庫本『大和物語』について(上)、(中)、(下)』(九州大学「文学研究」74輯 昭和52年3月、75輯 昭和53年3月、76輯 昭和54年3月 後に『王朝の物語と漢詩文』(笠間書院 平成2年2月)、『今井源衛著作集 第14卷 平安朝文学文献考』(笠間書院 令和元年5月)にそれぞれ再録)

第四節 日本大学図書館蔵『大和物語』の伝本

—新資料の紹介を中心にして—

一 寛喜本系統の一伝本

寛喜本系統とは藤原定家が寛喜三年八月十八日に書写した伝本の系統のことである。現在、この系統に属する伝本として、文明十年親長書写本、蓬左文庫蔵為衆本、多和文庫蔵飛鳥井雅俊本、三条西家旧蔵本、竜門文庫蔵本、九州大学蔵本、陽明文庫蔵本などがある。このうち、文明十年親長書写本は高橋正治氏の『大和物語の研究⁽¹⁾』に翻刻されている。三条西家旧蔵本も同じく氏の解説で影印刊行された⁽²⁾。また、陽明文庫蔵本も南波浩氏の解説で影印刊行された⁽³⁾。この本は本多伊平氏の『大和物語本文の研究 対校篇⁽⁴⁾』の底本になっている。さらに、蓬左文庫蔵為衆本は竹鼻績氏の解説で複製刊行された⁽⁵⁾、この本は多和文庫蔵飛鳥井雅俊本とともに阿部俊子氏の『校本大和物語とその研究⁽⁶⁾』に校異の形で収められた。なお、蓬左文庫蔵為衆本も本多氏の前記の著者に校異の形で所収された。

このように寛喜本系統の本文が提供され、それに従って各伝本の研究もなされてきた。高橋正治氏は系統の伝来が正しく、かつ本文も純粹なのは文明十年親長書写本と言われている⁽⁷⁾。これに対して、南波浩氏は陽明文庫蔵本の優位性を指摘されている⁽⁸⁾。ただ、前者の場合、これを翻刻に用いた高橋正治氏蔵本は池田亀鑑氏蔵の転写本の写しによるものであり、使用するにあたってはそれほど不都合を生じないが、書写年代が新しいこともあり、できれば親長自筆本か、もしくはそれに近い伝本の出現を待ち望んでいた。確かに池田亀鑑氏はこの一本を披見されていたようである⁽⁹⁾。しかし、現在それがどうなったかは不明であった。

ところが、日本大学図書館に池田氏の披見されたものと思われる伝本が存在するのである。まず、書誌を記しておこう。

大きさ縦24・3 cm×横16・5 cmの列帖装一冊本。表（裏）紙は藍色墨流し、料紙鳥の子。題簽は中央やや上のほうに「大和物語」と記す。内題なし。

巻頭に「日本大学図書館蔵」(朱)の印記がある。墨付九十二枚。遊紙は前に二枚、後に八枚それぞれあり、前の一枚目の表に「北條殿一睡大和物語一冊

外題同筆」という極めが付され、一睡、即ち北條氏直(10)の書写になるという。二枚目表に「残花書屋」(朱)の印記がある。本文は一枚目の裏から始まり一面十行、歌は一字下げて二行書き。また、朝倉茂人の極札「北条殿一睡 大和物語一冊/外題同筆 極印」を添付する。奥書は、本奥書云

寛喜三年八月十八日辛未未時於北辺蓬屋終書写也功閑居徒然之余也目盲手振不成字推量而染筆許也即校了当初書写物以為無落字為一得毫及之後已落数行書入也可耻可悲

右大和物語以准后御本飛鳥井大納言入道宋雅自筆依仰書写也

于時文明十年九月六日 按察使藤原親長

以京極中納言定家卿自筆本加覆直付了尤可謂証本者也

延徳二年孟夏上旬記之

とある。延徳二年の書写とみてよからう。

この本はまぎれもなく寛喜本系統の一本ということになる。

さて、日本大学図書館蔵本(以下、日大本と略称)と池田亀鑑氏蔵の転写本の写しである高橋氏蔵本との関係であるが、幸い、高橋氏蔵本について氏の御好意により閲覧することができた。調査の結果、両者は行数はもとより、字体までもほとんど一致している。したがって、日大本は池田氏が披見された、親長自筆本の最も厳密なる書写本そのものと断定してよからう。しかしながら、日大本と高橋氏蔵本とを比較してみると細部の点で異同がみられる。まず、本文の異同をあげてみよう。

| 番号 | 章段 | 丁数 | 高橋氏蔵本 | 日大本 |
|----|----|-----|--------------|--------------|
| 1 | 1 | 1ウ | おほそ | 心ほそ |
| 2 | 〃 | 〃 | なにかみさらん | なにかみさらん |
| 3 | 3 | 3ウ | 春日しもそ | 春日しもそ |
| 4 | 4 | 4オ | ことゝもかきりて | ことゝもかきもて |
| 5 | 9 | 6オ | きゝにしものを | きえにしものを |
| 6 | 13 | 7オ | ひとなりける | ひとなりけり |
| 7 | 36 | 13オ | 竹の宮ことなんいひける | 竹の宮となんいひける |
| 8 | 41 | 14オ | あやつこといひてありける | あやつこといひてありけり |
| 9 | 43 | 15オ | ありしはいつくそ | ありしはいつくそ |

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|--------|-------|----------|-------------|----------|-------|-----------|----------|--------------|---------------|
| 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 |
| 137 | 132 | 120 | 108 | 105 | 103 | 93 | 90 | 〃 | 76 | 〃 | 67 | 61 | 58 |
| 49オ | 47ウ | 44ウ | 40オ | 32オ | 36ウ | 30オ | 29オ | 〃 | 25オ | 22ウ | 22オ | 19オ | 18オ |
| 時くおはしましける | しらくものかた | かけおほくなりける | 御方にさふらひける | をこなひける | 涙なりける | あひたまひにける | せうそこなしと給ひける | 涙の川にいる千鳥 | こよひより | いといたくもりける | ちかぬをまちける | のみしてわたらせ給にける | くろつかといふ所にすみける |
| 時くおはしましけり | しらくものこのかた | かけおほくなりけり | 御方にさふらひけり | をこなひけり | 涙なりけり | あひたまひにけり | せうそこなしと給けり | 涙の河にけり千鳥 | こよひこそ | いといたくもりけり | ちかぬをまちけり | のみしてわたらせ給にけり | くろつかといふ所にすみけり |

| | | | | | | | | | | | | |
|---------|-----------|----------|------------|---------|----------|-----------|---------|--------------|---------------|-------|----------|---------|
| 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 |
| 173 | 170 | 169 | 168 | 167 | 166 | 161 | 157 | 〃 | 152 | 〃 | 147 | 140 |
| 88オ | 84ウ | 82ウ | 81ウ | 77オ | 76ウ | 75ウ | 72オ | 〃 | 69オ | 60ウ | 59ウ | 50ウ |
| ひとへとなくや | わつらひたまひけり | このちこのかせの | こしに火うちつけなど | 物ともなりける | いとよくみてける | おかしとおほしける | すみわたりける | こと事ものたまはさりける | いはて思ふそいふにまされり | かしてける | いきたりしおかの | ほかの大納言 |
| ひとくとなくや | わつらひたまひける | このちこのかをの | こしに大うちつけなど | 物ともなりけり | いとよくみてけり | おかしとおほしけり | すみわたりけり | こと事ものたまはさりけり | いはて思ふそいふにまされる | かしてけり | いきたりしおりの | のほるの大納言 |

高橋氏蔵本には誤写が多い。しかもその大半は「り」と「る」の違いである。これは草書体が似通っており、そのために読み誤ったものと思われる。これ以外でも、1、4、5、14、24、25、33、34、36も高橋氏蔵本の誤写と思われる。それは両者を比較してみると字体が似通っていることでも理解できる。さらに2、3、9、22も高橋氏蔵本は不注意による誤写とみてよからう。これに対して、日大本の誤写は15で、おそらく草書体の読み誤りによるのであろう。しかし、7はどう考えたらよからうか。これらは語句の異同であり、一概にどちらが誤りとは断定できないが、先程の例などから日大本のほうが書写態度の厳密さから考えて、日大本がもとの姿を止めているのではなからうか。

次に勘注の異同をみることにする。日大本にあつて、高橋氏蔵本にない勘注は次の六箇所である。

(1) 後撰「数ならぬ」の歌（二五段、7ウ）

(2) 古今無作者 「それをだに」の歌（二六段、10ウ）

(3) 兼盛駿河守從五位下後賜平姓 「かねもり」の注（五六段、17ウ）

(4) 後撰 「物おもふと」の歌（九二段、29ウ）

(5) 清慎公 「左のおとど」の注（九八段、31ウ）

(6) 巨城 「おほき」の注（一〇九段、40才）

（注）「」内の表記は勘注の対象を示す。以下も同様。

共通歌と人物に関するもので、高橋氏蔵本はおそらく不注意により書き落してしまったのであろう。また、両者とも勘注を持つてはいるものの、異同のあるものがある。

(1) 從五位下源重信 重之父（五八段、18才）

(2) 齋宮柔子寛平皇女母同延喜（二〇段、43ウ）

（注）(2)の校異は高橋氏蔵本を示す。

(1)については異同を記さなかったが、転写する際に生じたと思われる微妙な相違がみられる。日大本は「重信」と「重之」との間に空間があり、その傍に「女」と本文と同筆で記し、そこに入る旨を示している。これに対して、高橋氏蔵本は空間がなく、「信」の傍に「女」とこれまた本文と同筆で記している。これは不注意でもって続けてしまったのであろう。(2)も高橋氏蔵本の不注意によるもので「柔」を書き落してしまったのであろう。

親長自筆本を忠実に書写した日大本の出現によって高橋氏蔵本は訂正を余儀なくされた。ただ、これらの誤写が高橋氏蔵本の書写の際によるものは断定できない。ともあれ、高橋氏蔵本の誤写が判明しただけでも日大本の存在意義は十二分にあると思われるが、ここで、日大本と陽明文庫蔵本との関係について、ぜひともふれておかねばなるまい。陽明文庫蔵本については、かなり前に池田氏は披見されていたらしく、概略的にふれておられる⁽¹¹⁾。しかし、一般には公開されていなかった。その意味で今回の影印刊行には意義がある。この本は巻末に宇多法皇の略歴を記し、その後「寛喜三年八月十八日云々」という定家の識語のみで終わっている。この本も寛喜本系統の一本であることに疑いない。ただ、これは南波氏が指摘されたように定家の筆跡ではないから転写本と考えられる。このように日大本と陽明文庫蔵本は識語の一部が共通しているにもかかわらず、異同がみられる。漢字と仮名書きの違いははなはだしい。概して日大本は漢字になっているところが多く、陽明文庫蔵本は仮名書きが多い。これ以外のところでも両者には異同がみられる。今、本文と勘注に分け見ていきたい。

まず、本文の異同は次のようである漢字と仮名書きを除く。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|----------------|--------|------|------|------|---------------|------|----------|------|---------|--------|----------|-------------|------|--------|-------------|------|-------------|----------|--------|
| 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 番号 |
| 139 | 137 | 122 | 106 | 104 | 100 | 88 | 76 | 68 | 64 | 60 | 56 | 55 | 39 | 31 | 20 | 9 | 8 | 〃 | 2 | 章段 |
| あくた河てふ | いとしのひておはしましてけり | もつてたり。 | せき河の | あまの河 | 大井河。 | むろのこほりのうちなから | 涙の河に | ならしはの | ほと也。 | 物にさりける。 | 思〇けるかな | かきりときげと。 | 右京のかみのわひいてゝ | 前斎宮の | む月のなぬか | いとよくしれりけるひと | 亭子〇院 | のちまてさふらひける。 | 備前のせうにて。 | 日大本 |
| 川 | ミセケチニナツテイル | たる | 川 | 川 | 川 | ゆき(タダシ「うち」傍書) | 川 | を(タダシ傍書) | 之 | けり | ひ | は | ナシ | 院 | ナシ | 補入ニナツテイル | の | けり | ナシ | 陽明文庫蔵本 |

(注) 圏点は異同の対象を示す。それが無い場合は、全体がその対象になっている。以下の二、三も同様。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|------|-----|--------|----|----------|-----------|-----------|-----|------|---------|------|------|------|-------|-----|-----------|--------|-----------|--------|---------|--------------------------------|
| 42 | 41 | 40 | 39 | 38 | 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 |
| 169 | 168 | 161 | 158 | 〃 | 156 | 〃 | 155 | 152 | 151 | 150 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 149 | 〃 | 〃 | 148 | 〃 | 147 | 141 |
| このこのしたりける | 給へる事 | 神世。 | めをさまして | 更級 | あそひにけれと | このおとこいぬれは | もちたまうたりける | やまゝ | 龍田河。 | 人々に哥よませ | 給〇けり | 給〇つゝ | 思〇けり | 思〇いてゝ | 思ふに | あしもちたるをのこ | つにくにの。 | とところありけり。 | 河にのそきて | い。まひとりは | とゝめてなんやりけるもとのめなむもるともにありならひにけれは |
| ナシ | ナシ | 代 | め | ま敷 | サラシナ(傍書) | は | ナシ | ナシ | 川 | ナシ | ひ | ひ | ひ | ひ | ナシ | と | ナシ | ける | 川 | ナシ | ナシ |

これらのうち、1、2、7、10、18、21、24、32、34、36、39、41、42において、陽明文庫蔵本は誤写と思われる。因に2、10、18、24、34、39は草書体が似通っており、そのために読み誤ったのであろう。また、21は前後の本文を記してみると、「心かはりにけ。れはとゝめてなんやりけるものめなむもろともになりならひにけ。れはかくて」傍線、圏点は稿者。以下、並びに二三の場合も同様。となっており、圏点を付けたように同じ語がある。このために陽明文庫蔵本は目移りを生じたものと思われる。この外、1、7、32、36、41、42陽明文庫蔵本は不注意による誤写と考えられる。

これに対して、日大本の誤写は8、37で、いずれも「と」と「は」の違いである。おそらく両者にあたってみると、草書体が似通っており、そのために読み誤ったのであろう。これらの結果から日大本のほうが書写態度は厳密であったようだ。

陽明文庫蔵本の書写態度の緩慢さは4、19をみても理解できよう。また、12、14をみると陽明文庫蔵本には傍書があり、後者は日大本に共通している。さらに、38において陽明文庫蔵本にはルビが記されている。これらは定家自筆本に記されていたとみるよりも陽明文庫蔵本の書写者か、もしくはその親本定家自筆本からの直接書写したものとは考えないでの書写者により付されたものとみてよかろう。というのは、日大本と陽明文庫蔵本に共通する傍書が存在するからである。即ち、

- (1) 念覚明といふ法師 (二五段)
- (2) わひかなしかりけれ (一三三段)
- (3) あやの色一本いなせをも (二五九段)
- (4) かさねウトはつらし (二六八段)

がその箇所である。

この外、「河」と「川」、「世」と「代」の違いや送り仮名の有無の現象をいかに考えたらよいのか。また、ここにはあげなかったが、前述の如く漢字と仮名の違いもかなり多い。やはりこれらの現象は、直接関係ということではなく、転写されていく過程で生じたのであろう。

次に勘注の有無についてみていきたい。陽明文庫蔵本になく、日大本にあるのは次のようである。

- (1) 後撰 「玉くしげ」の歌 (四段、4オ)
- (2) 拾遺 「住の江の」の歌 (二一段、6ウ)
- (3) 拾遺 「ひさしくも」の歌 (二一段、6ウ)
- (4) 敦忠中納言母在原棟梁女 「本院の北方」の注 (二六段、7ウ)

- (5) 後撰 「数ならぬ」の歌（一六段、7ウ）
- (6) 兼盛駿河守従五位下後賜平姓 「かねもり」の注（五六段、17ウ）
- (7) 敦慶 「故式部卿宮」の注（七一一段、23ウ）
- (8) 延喜八年二月二十九日薨 「うせ給ひける時」の注（七一一段、23ウ）
- (9) 定方延喜六年三月右中将九年四月参議卅七中将如元 「三条の右のおとぞ々」の注（九一段、29オ）
- (10) 拾遺 「ゆゝしとて」の歌（九一段、29ウ）
- (11) 後撰 「伊勢のうみ」の歌（九三段、30オ）
- (12) 代明 「故中納言」の注（九四段、30ウ）
- (13) 新古今 「こひしさに」の歌（一〇四段、37ウ）
- (14) 後撰 「いかでかく」の歌（一二〇段、43ウ）
- (15) 新古今 「我もしか」の歌（二五八段、73ウ）
- (16) 拾遺 「人心」の歌（二六八段、77ウ）

これに対して、日大本になって陽明文庫蔵本にあるのは次の一箇所だけである。

由性少僧都雲林院別当 「僧都」の注（一六八段、83オ）

ただ、ないとはいうものの、日大本は「雲林院別当」のところだけを有している。

これらの現象をどう考えたらよいのだろうか。前者の場合、同じ系統の三条西家旧蔵本、蓬左文庫蔵為衆本はすべてを有していない。すると、日大本の付加か、もしくは陽明文庫蔵本、三条西家旧蔵本、蓬左文庫蔵為衆本の除去かのいずれかであろう。蓬左文庫蔵為衆本はその奥書によれば、親長自筆本を書写したものであり、これを考える上で参考になろうか。後考を待ちたい。

一方、後者の場合、三条西家旧蔵本、蓬左文庫蔵為衆本も有している。京極の僧都については古くから由性、素性の説があり、⁽¹³⁾それが勘注の有無に及んでいるのか。あるいは「由性少僧都」のところを付加したものか。にわかに断定できない。

前にも述べたようにこれまで、この系統の伝来が正しく、純粋な本文と言われているながらも、本文を調査する場合、高橋正治氏の翻刻本に頼らざるを得なかった。それでもさしたる不都合を生じないものの、勘注は省略されており、また字体を知ることが不可能であった。この度、幸いなことに、

池田氏蔵本の親本高橋氏蔵本からみると祖父本にあたる日大本が出現したのである。その結果、翻刻本での誤りを訂正する必要が生じたことも事実である。また、陽明文庫蔵本の影印刊行もこの系統の研究に光を投げかけた。ただ、日大本の出現により、陽明文庫蔵本の欠陥を補うことができたし、今後、陽明文庫蔵本を使用するに当たってはこのことを考慮すべきである。また、日大本の勘注はその生成に問題を含んでいるように思われる。

ともあれ、日大本は親長自筆本にそれほど時を経ないで厳密に書写され、その面影を最もよく伝えている伝本と思われる。今後、寛喜本系統の伝本を使用する場合、まず第一に日大本を考えるべきである。それにしてもここでは日大本の紹介を中心にして述べてきたため、肝心の寛喜本系統そのものについては言及できなかった。これについては今後の課題にしたいと思っている。

一一 奈良絵本付載の一伝本

大和物語に奈良絵本の存在することは耳にしたことがなかったし、また見たこともなかった。事実、その類の書物にあたってみても掲載されていない。⁽¹⁴⁾ところが、「玉英堂稀覯本書目」⁽¹⁵⁾ 207号に「奈良絵本大和物語」が掲載され、話題を呼んだことは記憶に新しい。その解説によると、絵二十五図、寛文延宝頃の書写で引かれている本文は尊経閣蔵伝藤原為家筆本にほとんど一致するという。しかし、この本がどこに入ったかは詳らかでない。

ところで、日本大学図書館に奈良絵本付載の一伝本がある。ここでは日本大学図書館蔵本（以下、日大本と略称）の紹介を兼ね、本文の性格について考えてみたいと思う。

まず、書誌から始めたい。

大きさ縦17・0 cm×横17・0 cmの列帖装の一冊本。表（裏）紙は薄緑色の草花模様、料紙は茶色鳥斐混漉。題簽は中央やや上のほうに「大和物語」と記す。内題なし。巻頭に「日本大学図書館蔵」（朱）、巻末に「岡田眞之蔵書」（朱）の各印記がある。一枚目の表は白紙でその裏と百二十三枚目の表に絵が各一葉あり、百二十三枚目の裏は白紙で、その後に遊紙一枚がある。本文は二枚目の裏から始まり、百二十二枚目の表で終り、その裏は白紙。本文の墨付百二十二枚、一面十一行、歌は一字下げて二行書き。本文と同筆で校異、ミセケチ及び補入があり、奥書はない。慶長頃の書写。日大本には前記の如く、校異、ミセケチ、補入がみられる。まず、校異は次の箇所にある。

- (1) あることせかいにこしや（六四段）
- (2) 立やのほらんぬい（七七段）

- (3) わかおとゝなりける時(一一一段)
- (4) ちくさのこゑに(一一二段)
- (5) ふかくしつめるわかたまを(一四七段)
- (6) すむ人ありけり○あひしりて(二四八段)

校異本文がいずれの伝本に共通しているかを調べてみると、(1)には大和物語抄が、(2)、(3)、(5)では大方の伝本がそれぞれ一致する。しかし(4)と(6)に一致する伝本は今のところみられない。因に日本本の本文に一致する伝本は、(2)には大和物語抄、為衆本、光阿彌陀仏本が、(5)には光阿彌陀仏本、宮内庁書陵部本がそれぞれ該当する。しかし、(3)に共通する伝本は今のところ存在しない。校異に使用した伝本をひとつにするのか否かは、これからだけでは軽々に言えないが、日本本の本文が毛色の変わったものではないかという予想を抱かせよう。

次にミセケチはかなり多く、次の箇所に見られる。

- (1) こらんすさすとて(四〇段)
- (2) 見てもしりなんはつしもを(五一一段)
- (3) 平のなかきとむすめ(五七段)
- (4) わたるやといてゝこしかと(五九段)
- (5) おもしろくつくられたるけるに(六一一段)
- (6) つゝみなるいゑを(七〇段)
- (7) えまいらぬとこぬ(八九段)
- (8) もとになむわたりわたり給にける(九四段)
- (9) と思けるにせんかし(一〇三段)
- (10) 御くしおろして給て(一〇七段)
- (11) いきけるにおとこ(一一四一段)
- (12) かきつめつれば(一一四四段)
- (13) しろかよみた(一一四五段)

- (14) これかれある中人を（一四八段）
- (15) この道に心ありて（一五二段）
- (16) いたうつくしけにて（一五五段）
- (17) 聞て申してんや（一五七段）
- (18) 秋風をいろとるかせの（一六〇段）
- (19) しのふ草とわすれ草と（一六二段）
- (20) この女とうしにいふやう（一六八段）
- (21) かくれ給と（〃）
- (22) 花山といふ山寺（〃）
- (23) よにいますかりと聞て時（〃）
- (24) このさは連し（〃）
- (25) 式部卿の宮の（一七一一段）
- (26) このことねりわらは（一七三段）
- また、補入は次のところにみられる。
- (1) いたうかはらから（三七七段）
- (2) あな〇かまし（四三三段）
- (3) 人をありく〇（一〇三三）
- (4) 世をふるころ〇（一〇六段）
- (5) む〇つけしと思へと（一四七段）
- (6) むつかしきこと〇（二四八段）
- (7) 奉りけるなど〇中に（〃）
- (8) 夜ふく〇まで（一四九段）

| 番号 | 章段 | 日大本 | 他本 | 日大本に一致する伝本 |
|----|----|------------|-------------------------|------------|
| 1 | 1 | 少将にてくたりけり。 | ける | 抄・巫 |
| 2 | 〃 | かゝるたうはり | かゝいたまはり | 抄 |
| 3 | 8 | さかのつらさを。 | かゝい給はり(衆) かうふり給(巫・鈴) | 巫・鈴 |
| 4 | 15 | 〇〇めしなかりければ | は に(凶) | 鈴 |
| 5 | 17 | 故式部卿〇宮 | 又も また(巫) | またも(衆) |
| 6 | 〃 | むかし見し。 | の またも | 氏・類・巫 |
| 7 | 19 | とありければかへし。 | より みし(類・氏・凶) | 巫・鈴・衆 |
| | | | 御かへし | 抄 |
| | | | 御返し(巫・鈴) | 抄 |

| | | | | |
|----|----|------------|-----------|---------|
| 8 | 19 | よみたまひけるとそ。 | ナシ | 抄 |
| 9 | 23 | みこあしたに | ナシ | 抄 |
| 10 | 25 | よみ〇〇ければ | たり | 抄 |
| 11 | 26 | 〇〇みそかに | いと | 抄 |
| 12 | 30 | 亭子院のみかと | 亭子のみかと | 鈴・古 |
| 13 | 〃 | たてまつりたりける | ナシ | 巫・鈴・凶 |
| 14 | 34 | このはなは | この花に | 抄・類・凶 |
| 15 | 40 | たてまつり〇〇 | この花の巫女 | 抄・類・凶 |
| 16 | 45 | たてまつり〇〇〇ける | たり | 抄・類・凶 |
| 17 | 64 | ものなといれて | たまひ | 抄・類・凶・光 |
| 18 | 〃 | まつほとなりけり。 | つゝみて | 抄 |
| 19 | 67 | 君をおもひ | 君をおもふ | 鈴 |
| | | | 君か思ひ(巫・鈴) | 抄・類 |

なる漢字と仮名、音便、送り仮名は除く。

(9) 出にけるま〇に(一五五段)
 (10) なに〇か見えむ(一六〇段)
 (11) これはなに〇かいふ(一六二段)
 (12) 〇時良少将といふ人(一六八段)

ミセケチ、補入の多くは不注意による誤写を補訂したものである。ただ、中には注意すべきところもみられる。ミセケチの(2)において、「を」とあるのは御巫本と鈴鹿本であるし、また、(7)において、御巫本と鈴鹿本は「まいらぬ」とある。さらに、補入の(6)において、為氏本は「なと」を持つていない。これらは一概に単なる補訂だけでなく、書写者の本文校訂の意識が反映されているのではあるまいか。

さて、日大本の本文はいずれの系統に属するのであろうか。とりあえず日大本と他の伝本とが共通する箇所^{三本}までをすべてあげてみると次表のように

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|------------------------|---|--------------------------|--------|--------------------|---------|-----------------|----------------------|------------------------|---------|---|------------------------------|--------|--------|--------|
| 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | | | |
| 〃 | 113 | 106 | 〃 | 〃 | 105 | 94 | 93 | 89 | 77 | 75 | 74 | 72 | | | |
| | 兵衛督 物みにいてたりける。 | 故兵部卿宮 | いてき〇ければ | いもこひしう | けんさ | なるへきに。 | いせのうみの。 | 人にしらすな。 | たちのほらん。 | しらねとも | とよみ給ける | 物うのたまひ | | | |
| | ひやう糸のすけ(氏) 兵衛尉(衆・図) | 故兵部卿(図) 故兵部卿のみこ(巫・鈴) 故兵部卿の宮 こひやうふきやうの宮(氏) 兵衛のせう | に | いとこひしう | けんさい(鈴) けんしや(衆) | を | ナシ | きかすな | ぬ | す | とよみたりける とよみ給へりける(衆) とよみたまひける(氏・類) | きみをおもひ(氏) 物のたまひ ものう(図) | | | |
| | 類 | 雅・類・衆 | 抄 | 抄イ | 巫・抄・図 | 抄・類・衆 | 衆・光・図 | 巫イ・鈴 | 衆・抄・光 | 抄・類・図 | 図 | 抄 | | | |
| 47 | | 46 | 45 | 43 | 42 | 41 | | 40 | 39 | 38 | 37 | 36 | 35 | 34 | 33 |
| 〃 | | 140 | 139 | 125 | 〃 | 〃 | | 124 | 〃 | 120 | 〃 | 〃 | 119 | 115 | 114 |
| | のたまへりける御返し。 | とありければ御返し。 | たてまつり〇〇ける | ナシ | まへくも | といへりける。 | | 北方のまた帥の。 | 大臣になり給にけり。 | わたりけるそ。 | きしかは。 | 〇〇ゆふつけの | たいめんし。 | 右のおとゝの | 人にしのひて |
| | かへりに 御返しに(図) | 御かへりに 御返しに(氏・衆・類) | 給はり(鈴) 御かへりに 返し(鈴) | たり | さきの(巫・鈴) | まつくも | けり (の)また帥(氏) | のまたそちの (の)また帥の(図) | 給ひにてける(巫) 給ひにてける(鈴) | たまひにける | を | と | ナシ | ナシ | しのひて人に |
| | 巫・鈴 | 衆・光 | 衆・光 | 類・衆 | 巫・鈴 | 類・衆 | 抄・類・図 | 抄・類・衆 | 図・光 | 雅・抄イ | 氏 | 抄・類 | 鈴・類イ・氏 | 氏・類・図 | 氏・類 |

| | | | |
|----|--------------|-------------|-------|
| 69 | ふたりにはいひける。 | けり | 抄・巫・鈴 |
| 70 | 物にもにす | 物にゝす | 光・鈴 |
| 71 | いつち | いつこ | 抄 |
| 72 | させ給ける。 | いつら(衆) | 抄・類・図 |
| 73 | かきりなく | けり | 光 |
| 74 | 中なり。けれは。 | かきりなき | 抄・類 |
| 75 | かきつ。けたる。 | なれは | 巫 |
| 76 | このことも六七はかり | つけゝる | 抄イ |
| 77 | おとこはやうわすれにけり | つけたりける(鈴・光) | 図 |
| | | つゝける(衆) | |
| | | ゝとし | |
| | | とし(抄) | |
| | | としは(光) | |
| | | ナシ | |

| | | | | | | |
|----------|--------|--------------|----------|------|----------|------------------|
| 84 | 83 | 82 | 81 | 80 | 79 | 78 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 173 |
| ふるやのなかに。 | ありしもの〇 | 梅の花のさかり | おほちより〇もり | 見ゆる。 | ならんと見ゆ〇か | 〇〇よきほとなる |
| もとに | は | むめの花(巫) | は | ナシ | る | いと |
| | | 埋めの花を(鈴) | むめの花はな | | | 男ははやわすれにけり(衆) |
| | | むめの花の(衆・抄・類) | | | | おとこはやく忘れにけり(氏・抄) |
| | | | | | | おとこはやう忘れにけり(類) |
| | | | | | | |
| 衆・図 | 抄 | 図 | 抄 | 抄・類 | 類 | 巫・鈴 |

(注) この調査は阿部俊子氏の『校本大和物語とその研究』に日大本を対校したものであり、諸本はそこで扱っているものに限られていることをお断りしておく。伝本略号は以下の通り。氏(伝為氏本)、衆(為衆本)、抄(北村季吟の大和物語抄本文)、類(群書類従本)、雅(飛鳥井雅俊本)、図(宮内庁書陵部本)、古(冠注大和物語に言う古本)、巫(御巫本)、鈴(鈴鹿本)、光(光阿彌陀仏本)、抄イ(大和物語抄にイとあるもの)、類イ(群書類従本にイとあるもの)。なお、この一覧表で「他本」とは『校本大和物語とその研究』の底本である為家本が中心になっている。以下、並びに「三」の場合も同様。

日大本は多岐にわたって共通している。そこで目安をつける意味で、この表から日大本がいずれの伝本と共通しているのか、その数を集計してみよう。

大和物語抄 38

群書類従本 31

宮内庁書陵部本 20

御巫本……………15
 鈴鹿本……………14
 為衆本……………13
 光阿彌陀仏本……………11
 為氏本……………8
 大和物語抄イ……………3
 飛鳥井雅俊本……………2
 冠注大和物語に言う古本……………1
 群書類従本イ……………1

一概にどの本に近いとは断定できないが、強いて言うならば、大和物語抄、群書類従本、宮内庁書陵部に近い。これは三本までの共通数であるから、さらに四、五本までのそれを含めるともっと多くなる。しかも、これらの中で大和物語抄と単独で共通するものは、2、7、8、9、10、11、17、20、29、48、54、65、66、71、81、83の十六箇所にわたり、他の群を抜いている。この結果からこれらの伝本の中でもっとも近いことを暗示しよう。ただ、大和物語抄そのものとは断定できない。それは28、38、76をみると日大本は大和物語抄イに一致しているからである。

大和物語抄、宮内庁書陵部本、為衆本、それに飛鳥井雅俊本は、いわゆる寛喜本から派生したものであり、そのために共通数がみられるのは納得できるが、それにしても飛鳥井雅俊本との共通数が少ない。また、群書類従本も寛喜本から派生したのではないかと言われている。⁽¹⁶⁾この調査の結果から多少なりともその考えを補強できよう。しかし、日大本はこれらの伝本とは系統の異なる御巫本、鈴鹿本、それに光阿彌陀仏本とも共通している。しかも、これらの中には単独で日大本と共通しているところがみられ、これらの伝本との接触が推測できよう。いずれにしても、日大本は多くの伝本と接解し生成していったことが予想できる。このことは次に述べることによっても理解できよう。

日大本は他の伝本と共通する反面、独自異文もかなり多く有している。今、その箇所をすべてあげてみると次表のようになる。

| 番号 | 章段 | 日大本 | 他本 | ナシ(巫・鈴) |
|----|----|------------|----------|----------------|
| 1 | 1 | なひくすゝき | なひくおはな | となんきこえけり(抄・類) |
| 2 | 24 | となんきこえたりける | となむきこえける | となむきこえたまひける(氏) |

| | | | | | | | | | | | | | |
|------|--------------|----------|--------------|----------------------|--------------------|------------------|--------|----------------------|------------------|--------------|--------------|--------------|------------------|
| 47 | 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 | 39 | 38 | 37 | 36 | 35 | 34 |
| 164 | 158 | 157 | 〃 | 156 | 155 | 154 | 〃 | 〃 | 149 | 〃 | 〃 | 〃 | 148 |
| 返。しに | さ。ま。し。て。〇。〇。 | 聞。え。〇。〇。 | わ。さ。す。な。る。を。 | こ。の。〇。〇。〇。い。と。い。た。う。 | 年。月。を。へ。て。あ。り。け。る。 | な。き。け。れ。は。〇。〇。〇。 | な。る。を。 | 〇。〇。〇。に。い。と。か。な。し。う。 | 月。の。〇。〇。い。み。し。う。 | お。も。ふ。ま。ま。に。 | 物。い。と。あ。し。の。 | た。よ。り。に。文。を。 | か。な。し。く。て。よ。め。る。 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|-----------|-------|-----|----|--------------|----|----|-----------|-------------|---------|------|-----|-------|------|-----|----|----------|------|-------|-------------|----------|--------|----|------------------|--------------|-----------|
| ナシ(巫・類) | かへしと(抄・類) | かへりこと | きけは | むは | すなる(抄・類・衆・図) | する | をは | へにけり(巫・鈴) | へてありけり(光・雅) | へてありへける | 男(図) | おとこ | なりけるを | 思(衆) | おもふ | いと | ほとに(巫・鈴) | あひたに | ナシ(光) | 物なといとおほく(氏) | おほく(巫・鈴) | 物いとおほく | ナシ | かなしと思やりてさてよめる(光) | おもひやりける(巫・鈴) | かなしくてよみける |
|---------|-----------|-------|-----|----|--------------|----|----|-----------|-------------|---------|------|-----|-------|------|-----|----|----------|------|-------|-------------|----------|--------|----|------------------|--------------|-----------|

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|-------------|----------------|---------------|-------|---------------|-------------|-------------|-------------------|-------------|-----------|-----------------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------|------------------------------------|---------------------|---------------|
| 66 | 65 | 64 | 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 | 56 | 55 | 54 | 53 | 52 | 51 | 50 | 49 | 48 |
| 〃 | 〃 | 173 | 172 | 171 | 〃 | 169 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 168 | 165 |
| やう。〇。な。く。て | も。り。〇。さ。り。て | 物。も。い。は。す。入。ぬ。 | つ。か。う。ま。つ。わ。り | 清。慎。公 | 六。七。な。り。け。り。 | 〇。〇。か。た。み。に | 〇。〇。す。け。な。く | 〇。〇。あ。は。れ。か。り。け。る | 〇。〇。を。の。小。町 | 〇。〇。い。た。う | さ。ん。な。れ。は。い。と。あ。は。れ。に | ほ。と。に。〇。〇。あ。り。け。る | さ。て。な。ん。と。あ。る。と。も | 法。師。に。や。な。り。た。ら。む | ナシ | み。た。る。ほ。と。に | と。そ。つ。て。や。り。た。り。け。る | た。え。は。て。に。け。り |
| も | ま | なりぬ | けり | ナシ | は。か。り。あ。り。け。り | こ。れ。を | 女。を。も | な。き | こ。の | (いと)氏 | さ。な。れ。は | さ。な。れ。は | な。む | ナシ | ほう。し。に | ほう。し。に。や。な。り。に。け。む。身。を。や。な。け。て。け。む | み。け。る | ナシ |

これらの中には明らかに日大本の誤写と思われるところがある。例えば8、10、13、14、19、31、32、35、36、39、43、46、62、65がそれに該当しよう。因に13、14、19、31、32、48は草書体の読み誤りによると思われるし、8、10、35、36、39、43、46、65はこの部分がないと意味上、不自然になる。不注意による誤脱と思われる。また21、51はそれぞれ「おどろき給ていつくに物したまへるたよりにかあらむなときこえ給てみかうし」、「みゝにも聞えずほうしにやなりにけむ身をやなけてけむ法師にや」とあり、圈点を付したように、前後に同じ語がみられる。そのために目移りを生じたのである。この外、12には「おりに○○○たまへりけりおらせてかきつけたてまつりける」校異ハ
日大本とあって、同じ語が二箇所に見られ、不自然と言えよう。62の場合、日大本は注記であったものが本文に組み入れられたのであろう。また、7と27において日大本は不自然な本文となっているが、これらは他の伝本との関わりが認められ、校訂での一面が本文に及んだのであろう。

しかし、これら以外の本文の存在をいかに考えたらいいのか。これらから改作のみならず、現存しない伝本との関わりを認めるべきであろう。そして、このことは先程の共通本文と相俟って日大本の複雑な生成が推測できる。

日本大学図書館が所蔵する奈良絵本付載の伝本について、その本文の検討をしてきた。各伝本との近似関係を調べた結果、大和物語抄に近い本文を核にして成立したのであろうが、この外にも異本とも共通しているし、さらには独自異文も多く存しており、今の段階では混雑本文とみておきたい。また、奈良絵本の観点からいうと、わずか二葉とはいふものの、現存するものが少なく、しかも成立的にみて日大本のは先に述べた「玉英堂稀観本書目」に掲載されたものよりも古く、大和物語の奈良絵本の生成に示唆を与えてくれよう。

ともあれ、江戸時代初期の本文の流れを探ることはもちろんのこと日大本のような形態の伝本の存在は稀で、しかもその本文が特殊なことから相俟って、奈良絵本と本文との関わりを探る上でも貴重な伝本と言えよう。

三 『大和物語抄』の引く定家本について

北村季吟は、大和物語抄巻一の巻頭において、「いまこゝに用ひ侍しは、定家卿の御自筆をもて、一字をたがへず書写せしとあるのうつしにて侍り。」
 と言つて、その抛り所を明らかにしている。季吟が見た定家自筆本の写しというのは、

本奥書云

寛喜三年八月一四日辛未來時於北辺蓬屋終書写也閑居徒然之余也目盲手振不成字推量而染筆計也即校畢当初書写物以無落字為一得毫及之後已落

数行書入可恥可悲

或本奥書云

此一帖以京極黃門自筆之本不違一字誹人令書但落字等繁多追而猶可勘枝者也

永享三年十月 日 權少僧都在判

又或本奥書云

延徳二年六月十一日以 禁裏御本令書写頗可為証本者歟則校合畢

と、奥書のある本である。この本は寛喜本系統の一本であることには疑いない。しかも、その中で始めから「或本奥書云」の部分までは多和文庫本に共通している。しかし、その後の「又或本奥書云」以下を持っている伝本は明らかでなかった。事実、池田氏は「或本奥書云」、「又或本奥書云」の二つの奥書は大和物語抄の拠った原本にあつたものではなく、他の二種の本に存したのを大和物語抄に転載したものと考えておられる。⁽¹⁷⁾

ところが、大和物語抄のこの奥書と全く同じものを持っている伝本が日本大学図書館に存在するのである。ここでは日本大学図書館蔵本（以下、日大本と略称）の紹介を兼ねつつ、大和物語抄の本文との関係、日大本の本文の性格について考察してみたいと思う。

日大本の書誌は次のようである。

大きさ縦17・0 cm×横18・0 cmの列帖装の一冊本。表（裏）紙は薄緑色の亀甲模様、料紙鳥の子。題簽は左肩やや上のほうに「大和物語」と記されていたようだが、わずかに「大」の字のみが判明できる。内題なし。遊紙一枚あり、その裏に「岡田眞之藏書」（朱）、本文の巻頭に「日本大学図書館蔵」（朱）の各印記がある。一枚目の表は白紙で、その裏から本文が始まる。終りの章段の後に遊紙一枚あり、改訂して二枚にわたり宇多法皇の略歴、さらに改訂して二枚にわたり奥書をそれぞれ記している。これは先程記した季吟の大和物語抄と同じ。その後、改訂して付載説話を八枚にわたって記している。その後に四枚の遊紙がある。墨付百五十三枚、一面十行、歌は一字下げて二行書き。本文と同筆で校異、ミセケチ及び補入がある。延宝頃の書写。

まず、校異からみていこう。

- (1) いまそかりけり（一四段）
すい
- (2) はるけきなからも（一六段）
い無
- (3) 心ゆきてはをかしと（五一一段）
わい

- (4) こやくしくそこイ (一三八段)
 (5) ひとりぬるよそ身イ (一四〇段)
 (6) くれたけのよふかきをなイ (一四七段)
 (7) きりてかりきぬかりきてイ (一四七段)
 (8) はかまえほうしイ無 (一四七段)
 (9) ありわたるをにイ (一四八段)
 (10) 侘しイてさすしイてん (一五六段)
 (11) なをまかせてみけりさい (一五七段)
 (12) そのひとつしはしかしイ (一六八段)

このうち注意したいのは(3)と(11)で、両者ともイに一致するのは大和物語抄であるただし、(3)には群書類従本も一致する。これは日大本が大和物語抄から離れていることを暗示させよう。

次に補入は次の箇所にもられる。

- (1) 内におはしましける時殿上とに (二段)
 (2) 少将中将なと〇 これかれ (二段)
 (3) 宮すところより〇 (三段)
 (4) かのちの〇兵衛佐 (二八段)
 (5) こもり給ひぬと〇ありし (四三段)
 (6) 池のいと〇 おもしろきに (七二段)
 (7) さはかしうてなむ〇 わすれにける (九一段)
 (8) 文もていくとなむ〇 きく給ける (九四段)
 (9) あさましきにえ〇物もきこえず (一〇三段)
 (10) いとおかしうつくり給ふ〇 て (一三七段)

- (11) このおとをのやうくおもひ (一四一段)
- (12) これもかれも (一四一段)
- (13) よくつかうまつりたらむに (一四六段)
- (14) 人ありけりそれなむ (一四六段)
- (15) とよむ時に帝 (一四六段)
- (16) とらせてやりて (一四七段)
- (17) みれは塚の許にちなど (一四七段)
- (18) うちなけきて (一四九段)
- (19) たつたかはの紅葉 (二五一段)
- (20) 御寺なむに侍 (一六八段)

さらにミセケチは次の箇所にもられる。

- (1) ふねにやりしのれる (三段)
- (2) 文をなむりけりもてきたる (四段)
- (3) よろつのおかしき物かたり (四一段)
- (4) とくある所きつきつつ (一四八段)

補入、ミセケチの多くは誤写を補訂しているわけだが、中には単にそれのみでなく、書写者の本文校訂の意識が反映されているのではないかと思われるところがみられる。補入の(6)、(7)をみると、前者において御巫本と鈴鹿本が、また後者においては鈴鹿本がそれぞれ持っている。ミセケチの(1)、(2)をみると、「のれる」と「きたる」は流布本の本文なのである。これらを大和物語抄とのみに一致する「のりし」、「きたりけり」に訂正している。このような現象は先程、「二」の奈良絵本のところでもみられたことであり、そこでの考えを補強することになる。

日大本の奥書と大和物語抄の依拠した伝本の奥書とが共通していることから、両者の何らかの関係を認めるべきであろう。事実、両者の本文を調査してみたところ、両者のみが一致するところがみられる。今、その箇所をあげてみよう。

| 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 番号 | | | | | | | | | | | |
|---------|--------|--------|----------|-------|---------|--------|---------|------------|---------|---------|----------|------|----------|----------|----------|------------|-----------|---------|-------|---|-----|----|
| 24 | 23 | 22 | 16 | 15 | 13 | 7 | 〃 | 〃 | 〃 | 3 | 章段 | | | | | | | | | | | |
| ナシ | え奉り給ふて | よめりければ | はるけきながらも | の給ふける | 〇〇〇〇かなし | はなれにけり | かきておくに | かゝるたうはり | もてきたりけり | ふねにやのりし | 日本・大和物語抄 | | | | | | | | | | | |
| さふらひ給けり | 給(囧) | ナシ | い(へ)(氏) | いへり | 花け(鈴) | はるけ | の給ける(氏) | の給ひける(衆・囧) | のたまひける | かきりなく | りかれと(巫) | にけれと | にかくなむ(囧) | にかくなん(氏) | のかたにかくなん | かうふり給(巫・鈴) | かゝい給はり(衆) | かゝいたまはり | 来る(鈴) | る | のれる | 他本 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|--------|--------|-------------|--------|-----------|-----------|-------------|---------|--------|----|------|--------|-------|----|----|-----------|------------|-----------|--------|---------|---|------------|-----------------|
| 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 44 | 40 | 38 | 32 | 〃 | 29 | 〃 | 26 | 24 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 〇〇とをくやある | すみ給ふける | まかて給ふて | そうつの君に〇〇 | 酔給ふて | あそひなしと給ふて | 〇〇みそかに | をこせ給へりけり | 右大臣〇の女御 | | | | | | | | | | | | | | | |
| いつそまた(鈴) | また | 給 | たてまつり給(巫・鈴) | 給ひて(氏) | たまうて(光) | 給て(巫・鈴・囧) | なん(巫・鈴・衆・類) | なむ | て(鈴・類) | 給て | 給(囧) | たまひ(類) | 給ひ(氏) | ナシ | いと | たまえりける(氏) | 給へりける(衆・囧) | たりける(巫・鈴) | たまへりける | との(巫・鈴) | 殿 | さふらひ〇ける(氏) | さふらひ給ひけり(巫・鈴・囧) |

| | | | | | | | | | |
|-------------------|--------------------|--------------------------|----------------------|--------------------------|----------------------------------|---------------|--------------|---------------|-----------------------------|
| 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 |
| 97 | 96 | 78 | 76 | 72 | 64 | 58 | 57 | 48 | 44 |
| 御わさのこと ○ | たてまつり給ふて | みこみ給ふて | 聞つけ給ふて | うせたまふてのち | ことせかい | 物し給ふ | 中興○ | いてたまふて | ナシ |
| なと (給ひ)て(氏書入レ) | 給ひて(巫) て(鈴) | みこみ給ひて(類) みこみ給ひて(巫・衆) | 給(類・衆・凶・光) たまひ(氏) | うせ給ひて(巫) うせ給ひて(氏・衆・凶) | せかい せかひ(氏・衆) | 給 たまへ(巫・鈴) | か ナシ(巫・鈴) | 給(衆・凶) たまひ | といひけり とおもへはこそいひたりけれ(巫・鈴) |
| 39 | 38 | 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | |
| 142 | 140 | 139 | 133 | 132 | 111 | 〃 | 105 | 98 | |
| いますかりけり | むすめにすみ給ふけるを | 色このみたまふける | ありかせ給ふけり | ほおせたまふ | 備前のかみ | と〇〇いへりける | 世にへしなと | 聞こえ給ふて | |
| ける | 給ひ(衆) 給ひ(巫・鈴・衆) | たまひ 給ひ(凶) | 給 たまひ(氏) | 給ふ(凶) 給う(衆) | 備前守 兵庫のかみ(巫・鈴) 備後のかみ(氏・巫イ) | なん(氏・類・衆) | へしと | 給ひて(巫・鈴) | |

| | | | | |
|---------|--------|------|-------|-------|
| 4 | 3 | 2 | 1 | 番号 |
| 45 | 24 | 18 | 12 | 章段 |
| 歎きたまふけり | のほり給ふて | 奉り給ふ | かよひ給ふ | 日大本 |
| 給ふ | たまふ | たまふ | たまふ | 大和物語抄 |

| | | | | |
|--------|---------|----------|----------|-------|
| 9 | 8 | 7 | 6 | 5 |
| 90 | 〃 | 77 | 76 | 45 |
| の給ふければ | まいりたまふに | まいりたまふそと | 涙の河にゐる千鳥 | みやすん所 |
| たまふ | 給 | 給 | ちとり | 宮すん所 |

日大本と大和物語抄とは音便までも一致している。これは両者の奥書の共通からして当然と言えよう。したがって、両者が同じ系統であることはもちろんのこと、直接関係にあるかのようにである。だが、これに反するかのようには、両者には異同もみられるのである。その箇所を記してみよう。

| | | | | | | | | |
|----------|----------|---------------|-----------|-------------|----------|----------|----------|--------|
| 48 | 47 | 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 |
| 168 | 161 | 157 | 156 | 152 | 150 | 149 | 148 | 145 |
| さうそくなとかく | まうてたまふけり | 申さふらはん | おいかゝまり | 御てたかにしたまふけり | あほりかり給付て | 身のそうそく | 心をおさめて | めてたまふて |
| なとをかく | たまひ | てん(巫・鈴・氏・類・衆) | てむ | したまひ | 給ひ(巫・鈴) | なと(光) | 心をとめて(類) | たまう |
| | | | し給(類・衆・図) | せさせ給(巫・鈴) | 給 | めをとめて(氏) | 心をとめて | ナシ(図) |

| | | | | | |
|-----|--------------|-----------|-----------|---------|------------|
| 54 | 53 | 52 | 51 | 50 | 49 |
| 173 | 〃 | 172 | 171 | 169 | 168 |
| ナシ | とはせたまふければ | かへらせ給ふ | おほえ給ふけり | 〇〇〇このこは | 住給ふけり |
| | いとをかしけなる | 給 | 給ひ | これを | をかく(氏) |
| | いとをかしけに(巫・鈴) | 給(類) | 給ひける(衆・図) | て(巫・鈴) | ともをかく(巫・鈴) |
| | | 給に(巫・鈴・光) | たまひける | 給ひける | をも(光) |

日大本は漢字で記されているのが多く、仮名書きになつてゐるのは、7、8、27、34、43、44の六箇所にすぎない。これらはいずれか一方を漢字か仮名にした結果こうなつたものと思われる。これらはまだしも、意外なのは両者には、これ以外にも対立する本文があることである。まず、日大本のほうからその主なものを記してみよう。

| | | |
|----------|---------|----------|
| 2 | 1 | 番号 |
| 8 | 4 | 章段 |
| おはしまして○○ | かなしくて○○ | 日大本 |
| なん | なん | 大和物語抄、他本 |
| 巫・鈴 | 鈴 | 日大本 |

| | | |
|---|----|------|
| 3 | 29 | かさして |
|---|----|------|

| | |
|--------------|-----------------|
| かさしたまひて | なむ(家・衆・雅・光・巫・鈴) |
| かさしたまひて(巫・氏) | かさして給ふて(抄・類) |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|--------|-----------|----------|---------|--------|---------|-----------|---------|--------|--------|--------|---------|---------|--------|--------|-------|-------|---------|
| 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 |
| 125 | 〃 | 〃 | 120 | 114 | 〃 | 106 | 〃 | 〃 | 〃 | 103 | 100 | 98 | 96 | 〃 | 95 | 94 | 92 | 91 |
| あそひ給ふて | ねかひたまふ | みなひろこり給ふて | かきつけ給ふける | 逢たまへりけり | よみ給ふける | よほひ給ふけり | 御くしおろし給ふて | あしたに文をも | 後に文をなむ | 市に出ける日 | 帝の給ふける | ものし給ふける | みやす所に | きこえ給ふて | 奉給ふけるを | うせ給ふて | よほひ給ふ | かよひ給ふける |
| たまふ | 給ふ | たまふ | たまふ | 給へり | たまふ | たまふ | たまふ | ふみ | ふみ | いちにいて | のたまふ | たまふ | みやすところに | たまふ | たまふ | たまふ | たまふ | たまふ |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|----------|----------|-------------|----------|-------|----------|-------|-----------|---------|-----------|---------|-------------|--------|-------------|-----------|---------|-------|
| 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 | 39 | 38 | 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 |
| 170 | 〃 | 〃 | 168 | 165 | 159 | 156 | 155 | 153 | 〃 | 150 | 147 | 146 | 142 | 〃 | 135 | 130 | 125 |
| うれしくとひ給へる | 住給ふけり俗に | みかとうせたまふ | いみしきことをおもひて | 御くしおろし給ふ | 住給ふける | はらたてける折は | かしき給ふ | たてまつれ給ふける | とよみ給ふけり | おほみゆきし給ふて | 物し給ふけるは | たちねとのたまふければ | よみ給ふける | みやつかへし給ふければ | あひはしめ給ふける | よませ給ふける | 一本すゝき |
| たまへる | たまふけりそくに | 給ふ | 思ひて | たまふ | たまふ | おり | たまふ | たまふ | たまふ | たまふ | たまふ | の給ふ | たまふ | たまふ | たまふ | たまふ | ひとつと |

| 番号 | 章段 | 大和物語抄 | 日大本、他本 | 抄に一致する伝本 |
|----|----|-------------|-----------|---------------|
| 1 | 1 | な。にか見さらむ | など | 鈴 |
| 2 | 3 | なりにければ○○○ | いつ(光) | 雅・類光 |
| 3 | 8 | なにかうらみん | としこ | 氏・類・ 衆・図 |
| 4 | 13 | ことも○○ | うからむ | 衆・図 |
| 5 | 23 | としかけ | など | 衆・雅・ 衆・図・光 |
| 6 | 25 | やとのかれたる | のちかけ | 類 |
| 7 | 48 | よそにのみして | 後藤(衆・図) | 類 |
| 8 | 58 | とよみたりける | に | 類・衆光 |
| | | | なむよみ | 光 |
| 9 | 60 | 物にさりける | なんのみ(衆・類) | 類・図・衆 |
| 10 | 65 | いかかせましと | きこえ(巫・鈴) | |
| 11 | 70 | ○○をこせける | そありけり | |
| 12 | 74 | ナシ | そ有ける(巫・鈴) | |
| 13 | 78 | ま。と。ひ。たまひけり | に | 衆・光 |
| 14 | 79 | 心もにすふるさとは | かき | |
| 15 | 82 | ナシ | とよみたりける | |
| | | | ナシ | |
| | | | ふるさとの | 類 |
| | | | 故郷の(衆) | |
| | | | ふる郷の(衆) | |
| | | | となむいひやりける | 巫・鈴 |

これはその一部にすぎない。中には明らかに日大本の誤写と思われるところがある。例えば、13は「時くおはしましけり。いとしのひておはしましてしまかにまうつる女ともを見たまふ時もありけりおほかたも」とあることから目移りを生じたものと思われるし、25は「る」を「り」に読み違えたものと思われる。29は脱落であろう。また、5の場合、解釈上、問題のあるところであり、⁽¹⁸⁾それが異同に及んでいるのであろうか。さらに、17では「絵に」の位置が変わっているが、これも不注意によるものか。

それにしても、これら以外の本文をいかに考えたらよいのか。注意すべきは、日大本が他本、とりわけ異本と一致していることである。異本を含め、これらの伝本との接触を認めるべきであろう。

これらと同じことは大和物語抄の本文についても言える。その主な用例をあげておこう。

| | | | | |
|----|-----|---------|----------|----------------|
| 29 | 172 | まう。給ひけり | まうて | もとに(家・雅・巫・鈴・光) |
| 30 | 173 | ふるやの内に | まいり(巫・鈴) | なかに(衆・図) |
| | | | したに(抄・類) | 中に(氏) |

(注) 伝本略号で「家」とは為家本を示す。以下も同様。

| | | | | | | | |
|-----------|------------|-----------|-----------|------------|------|------------|--------------|
| 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 |
| 113 | 105 | 〃 | 103 | 98 | 92 | 87 | 86 |
| まゆうと | しのひてありへてのち | きれなるかみを | いちにいてけるひ〇 | 左のおとゝの御はゝ〇 | ことしも | といひたりければ | わかなつまんと |
| まひ人 | ありへて | きれたる | に | の | は | 返しおとこ(巫・鈴) | つみに |
| 舞人(衆・凶・氏) | あふて(巫・鈴) | きりたりける(巫) | きりたる | の(巫) | の(巫) | といひたりければ返し | となんいひやりける(類) |
| | | きりたる(鈴) | | | | | 類イ |
| | | | | | | 鈴・類イ | 類 |
| | | | | | | | 類 |

| | | | | | | | |
|-------|-----------|---------|--------|--------|----------|---------|--------------------------------|
| 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 |
| 173 | 172 | 164 | 155 | 149 | 146 | 132 | 124 |
| とゝめたる | いとおもしろきを | 返し | たまふける〇 | かさりつれば | まことのかか〇は | うちかつきて〇 | ナシ |
| たりける | ナシ | かへりこと | を | け | と | 又 | かくいひひくゝてあひ契ることありける |
| | 返事(氏・衆・凶) | ナシ(巫・鈴) | | | | | かくいひひてあひちきることありける(家・氏・衆・類・雅・光) |
| | | | | | | | かくいひひてあひちきる事ありける(凶) |
| | | | | | 光 | | 巫・鈴 |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |

これもその一部にすぎない。この中にも明らかに大和物語抄の誤写と思われる箇所がある。例えば、21は草書体の読み誤りと思われるし、24は「といへりけり。かくいひひてあひちきることありけり。そのゝち」とあるから目移りによるものと考えられる。しかし、これら以外ではそのように考えられないところや、他本と共通するところもあり、少なくとも他本との接触を認めるべきであろう。

それにしても、両者は同じ奥書を有しているのに、それぞれ異なった本文を持つているのをいかに考えたらいいか。日大本そのものが大和物語抄の依拠したものとはどうして考えられない。ただ、前述したように両者には共通する本文があることから、両者は同じ祖本をもとに派生し、転写する過程で他本と接触し、それぞれ異文を生じたのであろう。したがって、先に見てきた両者の共通本文がもとの姿を残していると思われる。それが漢字と仮名書きの相違や独自異文へと変化していったのであろう。

このように両者の本文が離れていたことは附載説話の本文の異同によっても理解できそうである。漢字と仮名を除いて、両者には次のような異同がみられる。

| 番号 | 章段 | 日大本 | 大和物語抄 |
|-----|----|-----------------------------|-----------------------|
| (1) | 1 | みかと <small>の</small> なめしと | の |
| (2) | 〃 | なとかわか身の | やと |
| (3) | 〃 | なかも <small>の</small> るたりける | て |
| (4) | 2 | うしとわつら <small>ひ</small> けれど | わらひ |
| (5) | 3 | たまさか | たま <small>は</small> こ |

(注) 章段の区分は阿部俊子氏の『大和物語 校注古典叢書』(明治書院 昭和47年3月)に拠った。

このうち(5)をみると、大和物語抄は「さか」と傍書し、これは日大本に共通している。これに(1)から(4)を含めて考えるに、すでに両者は距離を置いていたことが理解できよう。

ところで、南波浩氏は大和物語抄に記されている奥書からその系統を次のように推定されている。⁽¹⁹⁾



ここで言う禁裏御本とは池田氏の言われたように親長自筆本とみるのが妥当であろう。南波氏は雅俊本と大和物語抄との間にみられる異同について、大和物語抄の場合、禁裏御本の影響がかなり加わっていると考えておられる。してみると、先程あげた両者が対立している本文で、とりわけ独自異文はその影響ということをも考えてみなければなるまい。

そこで、先程あげた両者の対立する本文の中で、独自異文になっているところに親長本(日大本で代表させる)を比較してみたところ、親長本に共通するところはみられなかった。ただ、ここでは全部にあたっているわけではないので、早急な結論は慎むべきなのかもしれない。しかし、全体を通して同じ傾向なのである。このようなことから両者にみられる独自異文は転写されるに伴い、後世に生じた本文とみてよからう。

大和物語抄の引いた定家本の存在については今日まで公にされていなかった。その意味でも日大本の出現は貴重といえるべきである。しかし、その本文を調査してみたところ、もちろん大和物語抄との共通するところはあるものの、同時に独自異文もみられるのである。このことから考えて、両者は同じ祖本から派生したと思われる。したがって、日大本そのものは大和物語抄の依拠した伝本とは考えられない。とは言うものの、日大本は大和物語抄の拠った伝本の面影を伝えており、このことは何よりも貴重と言えよう。前述したように、池田氏は大和物語抄にある二つの奥書について他本から

転載したものと考えておられる。しかし、日大本の出現により実はそうではなく、依拠した本にあったのをそのまま転載したことがわかるのである。ともあれ、日大本は大和物語抄の本文を考える上で注目すべき伝本と思われる。

- 注(1) 私家版 昭和44年4月。再版 臨川書店、昭和63年10月。
- (2) 『学習院大学所蔵 三条西家旧蔵本 大和物語 (D系統本)』(東京美術 昭和59年7月)
- (3) 『陽明叢書国書篇 第九輯 大和物語』(思文閣 昭和51年6月)
- (4) 笠間書院 昭和55年2月。
- (5) 『大和物語蓬左文庫本』(解題竹鼻績氏 ほるぷ出版 昭和58年4月)
- (6) 三省堂 昭和29年6月、増補版 昭和45年10月。
- (7) 『日本古典文学全集大和物語』解説(小学館 昭和47年12月)
- (8) 注(3)の解説。
- (9) 「大和物語伝本考」(『国語と国文学』6巻1号 昭和4年1月 後に『物語文学Ⅱ 池田亀鑑選集』(全文章 昭和43年10月)に再録)
- (10) 森繁夫氏『名家伝記資料集成 第3巻 なーほ』(思文閣出版 昭和59年2月)
- (11) 注(9)に同じ。
- (12) 注(3)に同じ。
- (13) 柿本奨氏の『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院 昭和56年2月)に詳しい。
- (14) 例えば『在外奈良絵本』(奈良絵本国際研究会議編 角川書店 昭和56年5月)にはみられない。
- (15) 平成4年5月発行。
- (16) 佐藤友美氏「群書類従本大和物語について」(熊本大学「国語国文学研究」14号 昭和53年12月)
- (17) 注(9)に同じ。
- (18) 猪平直人氏「『大和物語』における章段形成―兼盛章段前後と『伊勢物語』―」(『文芸研究』131集 平成4年9月)
- (19) 『日本古典全書大和物語』解説(朝日新聞社 昭和36年10月)
- (20) 注(9)に同じ。

第五節 三条実起筆『大和物語』小考

一

近世に入つて版本の技術が普及し、多くの古典作品の啓蒙化に大きな役割を果たした。大和物語の場合も本文や注釈書が版行に移され、古典の民衆化に寄与してきたわけである。

その一方で版本が開発される以前から綿々と受け継がれた写本もみられる。本稿で紹介する架蔵の権大納言実起筆大和物語（以下、実起本と略称）もその一本である。実起本は江戸時代中期の書写でそれほど古いわけではないが、後述するようにその装丁や付属品をみると、実に豪華で由緒ある家に伝わってきたことを窺わせる。したがつていずれの本文に拠っているかは興味の抱くところである。

本稿では実起本の本文について、その性格やそれを介して垣間見られることを考えてみたいと思う。

二

まず実起本の書誌から始めたい。

この本は外箱、内箱の二重の箱に収められている。両方とも漆塗りタダシ外箱ノ内側ハ、紙細工ニナツテイル。、それぞれの表箱中央に金色の細工で「大和毛能語」とある。これらは実起本を収めるために特注したものと思われる。大きさ縦23・6cm、横17・5cmの列帖装二冊本。表紙（裏表紙も）は絹布で鳥模様の刺繍が施されている。表紙中央やや上に「大和物語」と題簽を付す。一面十行、和歌は二行書きで上句が本文より二字、下句が本文より三字それぞれ下げて書かれている。勘注、校異はみられない。墨付は上冊一―五八丁（初段―133段）、その後に遊紙三葉あり。下冊一―四八丁（134―173段）。四七

丁は二行で終わり、改めて四八丁才に次の奥書がみられる。

依或人之所望染禿筆

全無正躰漸後嘲而已

天明七年^{丁未}七月

権大納言実起

権大納言実起とは三条実起（一七五六―一八二三）のことで、これによるとこの本はある人の所望により実起が天明七年（一七八七）七月に書写したものである。彼は安永六年（一七七七）に権大納言に叙せられている。⁽¹⁾ 書写年次の天明七年は実起三十二歳の時である。それと注目したのは該本を収めている内箱の蓋の紐をとめる金具に葵の紋の彫金が施されていることである。このことは書写を依頼した「或人」が徳川家に関わる人物ではないかと推測させる。

三

次に実起本と他本との関係を探ってみたい。そのために次のような方法をとった。

| 本文及び校異 | | 初段 | | | 伝本 |
|--------|------|------------------------|--|----------------|----|
| | | 亭子・院 ¹ のみかと | いっ な ³ な ² | ゆきかへりてもなとか見さらむ | |
| 1 | (中略) | 3 | 2 | 1 | |
| × | | × | × | × | 氏 |
| × | | × | × | × | 巫 |
| × | | × | × | ・ | 鈴 |
| × | | × | × | × | 凶 |
| × | | × | × | ・ | 衆 |
| × | | × | ・ | × | 抄 |
| × | | × | × | × | 類 |
| × | | × | × | × | 雅 |
| × | | × | × | × | 光 |
| × | | × | ・ | × | 寛 |
| × | | × | × | ・ | 細 |
| × | | × | × | × | 桂 |
| × | | × | × | × | 急 |
| × | | × | × | ・ | 慶 |
| × | | × | × | ・ | 首 |
| × | | × | × | × | 永 |
| × | | × | × | ・ | 天 |
| × | | × | × | × | 実 |

| | | | | | | | |
|-----|-----------------------------------|---------------------------------|-------------------------|-----------------------------------|----------------------|-------------------------------|---|
| | なる3 たけはかりならんと見ゆるか ² | へりは ⁴ たれも・・・かはほりに | 五条にてありしものは ⁵ | した ⁷ 中 ⁶ | ふるやのもとに ⁸ | ・・・・・ ⁸ となむありける | |
| 共通数 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 |
| 153 | × | × | ・ | × | ・ | × | × |
| 131 | × | × | × | × | ・ | × | × |
| 131 | × | × | × | × | ・ | × | × |
| 175 | × | × | ・ | × | ・ | × | × |
| 173 | × | × | ・ | × | ・ | × | × |
| 125 | × | × | × | × | × | × | × |
| 263 | × | × | × | × | ・ | × | × |
| 33 | × | × | × | × | × | × | × |
| 149 | × | × | × | × | ・ | × | × |
| 181 | × | × | ・ | × | ・ | × | × |
| 263 | × | × | ・ | ・ | ・ | × | × |
| 194 | × | × | ・ | × | ・ | × | × |
| 167 | × | × | ・ | × | ・ | × | × |
| 264 | × | × | ・ | × | ・ | ・ | × |
| 241 | × | × | ・ | × | ・ | × | × |
| 273 | × | × | ・ | ・ | ・ | ・ | × |
| 171 | × | × | ・ | × | ・ | × | × |
| — | ・ | × | ・ | ・ | ・ | × | ・ |

注1 本文は尊経閣文庫蔵伝為家筆本（以下、為家本と略称）を底本に実起本を対校し、校異箇所を「・」で示し、校異に共通する伝本には「・」印を、

共通しない伝本には「×」印を以って示した。

- 2 諸本の調査には『校本大和物語とその研究 増補版』、『大和物語本文の研究 対校篇』を参照した。伝本略号は以下の通り。氏（国立歴史民俗博物館蔵伝為氏筆本）・巫（天理大学附属図書館蔵御巫氏旧蔵本）・鈴（愛媛大学附属図書館蔵鈴鹿三七氏旧蔵本）・図（宮内庁書陵部蔵本）・衆（蓬左文庫蔵為衆筆本）・抄（大和物語抄本）・類（群書類従本）・雅（多和文庫蔵飛鳥井雅俊筆本）・光（九州大学附属図書館蔵支子文庫本）・寛（陽明文庫蔵本）・細（九州大学蔵細川家旧蔵本）・桂（宮内庁書陵部蔵桂宮本）・急（大東急記念文庫蔵本）・慶（慶長元和中刊古活字本）・首（大和物語并首書本）・永（筑波大学蔵大永本）・天（野坂家蔵天福本）・実（実起本）これらは以下も同様。

3 「共通数」とはこの方法で全章段に及ぼした実起本と各伝本との共通数を示している。ただし、平仮名と漢字、音便を除く。

右表の共通数をみると、差はあるものの多くの伝本と共通している。これらの中で類、首、慶、細、永との共通数が比較的多くなっている。次いで図、衆、桂、光、寛、急、天も少なからず関与しており、雅は少なくなっている。これらの中で細と永の存在が注目される。両者は版本として流布し

たものではない。とりわけ永は昭和四一年に紹介されたもので、⁽²⁾ 実起本生成に少なからず関与していることは興味深い。また、少ないとはいえ、異本である巫、鈴、光との共通箇所もみられ、改めて注目される。

実起本は多くの伝本をとり入れて成立しており、いずれの系統にも属さず、今のところ混態本と処理してよからう。

四

実起本の本文について他の伝本との接触状況を具体的にあたってみることにする。論述の便宜上、用例をあげておこう。

| 番号 | 章段 | 為家本 | 実起本及び異文 | 実起本下同文 |
|------|-----|--------------|--------------|-------------------|
| (1) | 2 | 殿上にさぶらひける。 | て | 氏・凶・衆・抄・類・天 |
| (2) | 43 | いつくにかあらむとて。 | といひて と(天) | 抄・類・細・首 |
| (3) | 48 | 刑部の君 | 刑部卿の君 | 氏・巫・鈴・抄・光・寛・慶・永・天 |
| (4) | 48 | くろつか | つか | 類・抄・永 |
| (5) | 71 | さきにほひかせまつほとの | かけ | |
| (6) | 73 | まち。給けるにくるゝまで | いひ | 細・永 |
| (7) | 60 | 物にそありける。 | さりける | 抄・類・凶・細・桂・永 |
| (8) | 67 | さる所に。 | て | 類・細・慶・永 |
| (9) | 68 | をこする | は(巫・鈴) | |
| (10) | 103 | 人をありくゝて。 | せ | 抄・類・鈴・光・雅・慶・首・永・天 |
| (11) | 104 | よ。にいみしきこと | よそに | 慶 |
| (12) | 105 | いみしうをこなひをり | せ | 永 |

| (27) | (26) | (25) | (24) | (23) | (22) | (21) | (20) | (19) | (18) | (17) | (16) | (15) | (14) | (13) |
|------------|-----------|-------------|--------------|--------------|------------|------------|------------|-----------|--------------------|---------|------------|-----------|---------|--------------|
| 152 | 〃 | 〃 | 〃 | 148 | 〃 | 〃 | 147 | 〃 | 146 | 〃 | 144 | 125 | 113 | 106 |
| かりいと。かしくのみ | いとおほつかなく。 | たより人にふみ。つけて | ひとりこちける。 | なをいとかうれひしうては | よなかきをきりて。 | いきたりしおりの女に | いかにまれこのことを | りかるといふたいを | みせ給にさまかたちもきよけなりければ | 又みのはのさと | れ心ほそき所くにては | ちるさきむすめに。 | いてたりけり。 | かきつけてたてまつりける |
| かく | なし | を | ことにうちよみける(光) | かひなく(巫) | かくて(氏・光・永) | ナシ | たれ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | も | ナシ(巫・鈴) | ナシ |
| | 首 | 細・慶・永 | | | | 桂・慶 | 雅・細・慶 | | 衆・雅・細・桂 | 細 | | | 類・細・慶・永 | 慶・細 |

| (44) | (43) | (42) | (41) | (40) | (39) | (38) | (37) | (36) | (35) | (34) | (33) | (32) | (31) | (30) | (29) | (28) | |
|--------------|--------------|-----------|------------|------------|-------------------|----------------------------|-----------------------|-------|---------|--------------------------|-----------|---------|------------|----------|--------------------|--------------------------|-------|
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 168 | 166 | 165 | 161 | 160 | 158 | 157 | 155 | 154 | 152 | |
| このさはかれし女のせうと | ほうしのこしに火うちつけ | をくらさらめやは | しはしありふへき心地 | せうそこのたまはぬ。 | かうみかともおはしまさず | なきあかしけり。(中略)ねむしてなきあかしてあしたに | ほうしにやなりにけむ(中略)をともきこえず | おとろきて | ひゝにありけり | おほむくるまのあたりになまくらきをりにたてりけり | おなし内侍に在中将 | いひもねたまず | けふよりはうき世中を | あやしなにごとそ | あふりをときしきて女をいたきてふせり | きこしめしつけぬにやあらむと(中略)物のたまはず | |
| ナシ | は | さらめや(巫・鈴) | 侍(巫・鈴) | ぬ | を | 見るとも | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | も | ナシ | ナシ | ナシ | かと(慶) |
| 慶 | | 凶・抄・類 | 急・永 | 慶・永 | 衆・抄・類・雅・寛・桂・慶・首・天 | 雅 | 急 | 慶 | 雅・慶 | 氏・光・細 | 細・慶・首 | | | | | | |

| | | | | | | | | | | |
|---------|------------|---------------|---|----------|-----------|------------|-----------------|----------|-------------|---------|
| (55) | (54) | (53) | (52) | (51) | (50) | (49) | (48) | (47) | (46) | (45) |
| 〃 | 〃 | 173 | 〃 | 〃 | 〃 | 171 | 〃 | 〃 | 169 | 168 |
| となむありける | ありしものはめつらし | たけはかりならんと思ゆる。 | れ あつよしのみこ(中略)今さらに思いてし としのふるをこひしきにこそわすれわひぬ | いかさまにせむと | 内にまいりにけり。 | かさるわさはしけむ。 | かいふやう(中略)心ちしければ | みつくむ女とも。 | このこゝとし六七ばかり | このたいとくの |
| ナシ | ナシ | か | ナシ | いかやうに | ける | なむ | ナシ | あなるか(抄) | あなる | ことも |
| | | | | | | | 女のわらはなとか(鈴・光) | あるか(桂・急) | | とく |
| | 抄 | | 急・慶・首・永 | 細 | 類・細・慶 | 細 | | 細・慶 | 慶 | |

(注) 〇印は異同の対象箇所を、これが無い場合は全体がそうなっていることをそれぞれ示している。

個々にあたってみることにしよう。(11)(12)(17)(23)(26)(30)(33)(35)(37)(44)(46)(49)(51)(54)は実起本が他の一本とのみ共通するすべての箇所である。細が五箇所、次いで慶が四箇所と他の伝本よりも多く、あとは永、首、急、雅、抄が各一箇所という状況である。この結果をみても実起本は多くの伝本の本文をとり入れて成立していることが理解できよう。中でも細と慶に注目しておきたい。

実起本と単独で共通しているわけではないが、(4)(6)(13)(18)(20)(21)(22)(25)(29)(31)(32)(39)(41)(42)(47)(50)は実起本と二本、もしくは三本の伝本とが共通する例である。これらの中の大半が先程ふれた実起本とのみ共通する伝本であり、実起本とこれらの伝本が密接な関係にあることを示している。主なものをみていこう。(18)の前後の本文を含め記してみると次のようになる。

(18) 申ければみせ給にさまかたちもきよけなりければあはれかりたまうて(百四十六段)

(注) 底本は為家本に拠る。傍線、波線は稿者。以下も同様。

波線を施したように同じ語句があることから目移りが生じたものと考えられる。ここで注目したいのは一覧表をみるとわかるように雅、細、急が共通していることである。実起本は目移りを継承しており、比較的新しい本文と言えよう。次に(42)は実起本の誤写と思われる、凶、抄、類が近い関係にある。巫、鈴は家に近く、この時点では実起本と対立していたことがわかる。さらに(47)をみると本文の流れを垣間見られよう。即ち抄、桂、急は実起本(細、慶を含めて)のような伝本から派生したのであろう。さらに鈴、光はいずれの伝本からとは断定できないが、抄、桂、急より後のものと言えよう。このような傾向は実起本と四本以上の伝本とが共通する箇所をみても理解できる。(1)(2)(3)(7)(8)(9)(14)(19)(38)(52)がその例である。このうち(8)(14)をみると巫、鈴はこの時点で実起本(共通する伝本を含む)と対立していた。また、(19)(38)は実起本が本文を有しない例である。両者の本文を記してみよう。

(19) とりかるといふたいをみな人々によませたまふやうたまふちはいとらうありてうたなとよくよみきこのとりかるといふたいをよくつかうまつりにしたかひて(百四十六段)

(38) なきあかしけりわかめことものを申すこゑともなきこゆいみしき心ちしけりされとねむしてなきあかしてあしたにみれば(百六十八段)

波線を施したように同じ語句があることから目移りによる誤写と考えられる。ここで注目したいのは実起本以外の伝本も共通していることである。即ち一覧表をみるとわかるように(19)には衆、雅、細、桂が、(38)には衆、抄、類、雅、寛、桂、慶、首、天がそれぞれ共通している。実起本はこれらの伝本との接触により生じたものであろう。それも目移りということからこれも実起本は比較的新しい本文と言えよう。

実起本の独自異文の例として(5)(10)(15)(16)(24)(27)(28)(34)(36)(40)(43)(45)(48)(53)(55)があげられる。この中で(16)(28)(34)(36)(48)(55)は本文が欠けている箇所である。これらが何によるのかを探るために再度、前後を記してみよう。

(16) くにかよひをなむ時くしける心ある物にて人のくにあはれに心ほそき所くにてはうたよみて(百四十四段)

(28) みかと物ものたまはせずきこしめつけぬにやあらむと又そうしたまふにおもてをのみまらせ給うて物ものたまはすたいくしとおほしたるなりけり(百五十二段)

(34) 中将もつかうまつれりおほむくるまのあたりになまくらきをりにたてりけり宮しろおほかたの人く(百六十一段)

(36) 物なといひかはしけりこれもかれもかへりてあしたによみてやりける(中略)といひやりたりけるおとろきてゆめにみゆやとねそすきにける(百六十六―百六十八段)

(48) みつくむ女ともかいふやう(中略)女いといたうまちわひにけりいかなる心ちしければかさるわさはしけむ人にもせらせて(百六十九―百七十一段)

(55)しもゆきのふるやのもとにひとりねのうつふしそめのあさのけさなりとなむありけるナシ (百七十三段)

(16)(28)(34)をみると波線で示したように同じ語、類似した表記がみられる。(36)(48)において実起本は章段間にわたり本文がみられない。これも誤写とみてよい。(55)をみると実起本は段末の本文を欠いている。意図的なものか、それとも不注意によるものかは不明だが、いずれにしても比較的新しく生じたものであろう。これら以外は名詞、動詞、それに助詞の異同である。(5)は「さきにほひかせまつほと山さくら人のよゝりひさしかりけり」新編日本古典文学全集二巻の歌の異同である。風に散る桜は親王の死より長いという意になる。実起本の「かけ」では下句の関わりからみて不自然である。(10)(15)(40)(53)は動詞に関したものである。このうち(40)をみることにする。この前後の本文は次のようである。

なかやまはやしにをこなひたまふとも、ここにたにせうそこのたまはぬ。佐おほむさとありしところにも、をともしたまはさなれはいとあはれになむ泣きわぶなる。

実起本は二つの文章を続けているわけだが、ここは引用した本文のように分けたほうが自然である。というのは、傍線部と波線部は同じことを言っており、そのためにもここで分けた方がよい。実起本はこのようなことを理解せずに改めたものか。(10)(15)(53)については何とも言えない。(27)も同様。

(24)は「ひとりしていかにせましとわひつればそよも前の荻そ答ふる」傍点ハ稿考の歌の「ひとりして」を受けて地文で「となむひとりちちける」と表現したわけである。実起本は女の心情を改めたのであろう。巫、鈴は同じ意を別の表現にしたのではないか。巫、鈴はこの歌の前に「おもひやりける」とあり、これと関係がありそうだ。光は歌の前が「かなしと思やりてきてよめる」とあり、これとほぼ同じであるが「よみける」が重複しており、これまた新しく生じたものであろう。(43)(45)は為家本が本来の姿で、実起本は誤写か否か明らかでないが、これも新しく生じたものと言えよう。

実起本の独自異文の多くは実起本生成の最終段階に生じたものと考えられる。ただ、これらの中には誤写か否か判断のつきかねるところもあり、今後の課題にしたい。

五

実起本は混態本と処理してよからう。それだけ多くの伝本と接触し、何度かの転写を経て成立していることは本文の考察から理解できたと思う。実起本と密接な関係にあるのは類、首、慶、細、永の各伝本であり、これらが実起本成立の基盤となり、そこへこれら以外の伝本が関与していると考えられる。密接な関係のある伝本の中で類、首、慶は江戸時代に版本で流布したのに対し、細、永はそれ以前から伝わっているもので、この二本が実起

本と密接な関係にあることはこの本の生成を考える上で注目される。とりわけ後者は前述のごとく近年、出現したもので実起本を介して近世における大永本の流布状況を垣間見ることができた。

ともあれ、実起本は近世における大和物語本文の享受を考える上で貴重な伝本と言えよう。

注(1) 『公卿人名大事典』(編者野島寿三郎氏 日外アソシエーツ 平成6年7月)

(2) 高橋正治氏「群書類従本系統大和物語伝本考」(清泉女子大学紀要) 14号 昭和41年12月、同氏著『大和物語の研究^{系統別上}』(私家版 昭和44年4月。

再版 臨川書店、昭和63年10月)に影印版で収められている。

第六節 『大和物語』 附載説話第二類をめぐって

一

大和物語についての研究は各方面から考察され、進展の一端を辿っているが、細かい点になると、さまざまな問題を含んでいて解決するのも困難なようである。しかし、だからと言ってあきらめられているわけでもなく、さまざまな試みがなされている。

さて、これから取り上げようとする『大和物語』 附載説話第二類⁽¹⁾以下、附載説話⁽¹⁾第二類と略称も問題を含んでいる一つである。この附載説話第二類とは現存する諸本の中で異本系統に属する御巫本と鈴鹿本にだけみられるもので、通常の二七二段と一七三段の間に入っている九章段をこう呼んでいる。しかも、これらの九章段は平中物語の一九段から二七段までに、段序が一致しているのである。この関係等については後にも述べるように、諸先学により考察されており、私など入り込む余地はまったくと言ってよいほどない。ただ、後述するように諸先学のお考えも一定しているわけではなく、細部の点において諸説入り混じっている。したがって、ここでは特に平中物語との関連ということを主眼に置き、なぜこれらの章段がここにあるのか、附載説話第二類の方法などについて、先学とは別な面から探ってみたいと思う。

二

そもそも何故にこれらの章段がここにあるのであろうか。これに関連して注目すべきは、平中物語と比較してみるに主人公が異なっていることである。附載説話第二類では「右京大夫宗子」になっている。このことは附載説話第二類の、ひいては御巫本、鈴鹿本の本質にかかわってこよう。事実、先学もこの点を中心に追究してきた。今、これとその周辺に関しての先学のお考えを列挙してみよう。

◎萩谷朴氏

恐らく御巫本の原型となった大和物語証本の書写者が平中物語の残欠本を入手して、これを大和の一異本であると判定し、ここに挿入する事となったのであろう。(中略)その冒頭に「右京大夫宗于の君」としたのは何人のさかしらかわからぬが、甚だしい誤解の源となるものである。

〔平中全講〕

◎阿部俊子氏・今井源衛氏

主人公を「右京大夫宗于」としたのは、後人の虚構であり、以下の本文の「この男」はすべて「宗于」のこととなる。

〔日本古典文学大系大和物語〕

◎高橋正治氏

これは、この部分を挿入する時の技巧であり、恐らく平中物語の類からそのままとったことを隠そう為に平中を宗于にかへておいたのであろう。

〔別本大和物語の成立に就いて〕

◎阪倉篤義氏

この御巫本に挿入された九篇の説話は、平中物語と共通の本を素材としながら、別に、大和物語向きの文章で書き直されたものと考えなければならぬ。この九篇の附載説話を持つものは、このように室町時代以後の本しか見当らず、したがって、これらが書き加えられたのは、かなり後の時代のことであろう。けれども、こうした説話が、形式上、何の区別もなしに巻末に増補されているという事実は、大和物語のような説話集が、その原型から次第に成長して来た事情を想定する上に、興味深い示唆を与えるものとして、まことに貴重であると言わなければならない。ここにもまた、この御巫本及び鈴鹿本の持つ重要な意義を認めることができるのである。

〔大和物語^天図書館^善本叢書29〕解題

◎雨海博洋氏

『平中物語』等からとったことを隠すための作意ではなく、萩谷氏が前に述べられたように御巫本の原型本となった『大和物語』書写者が『平中物語』の残欠本を入手して、これを『大和物語』の一異本か何かと判定して添加したとする側にある。(中略)御巫本の方は『平中物語』の中途の一グループが遊離し、誰を主人公とした物語であるかわからなくなってしまったのであろう。

〔歌語りと歌物語〕

◎ 柿本獎氏

必ずや相互に密接な関係があるのであるが、その具体は現在の資料状況では知る由もない。こうした本文が『平中物語』に優る場合もある事は、その都度指摘した通りであつて、こちらが『平中物語』よりも後のものとも言う事ができない。

（『大和物語の注釈と研究』）

このように先学のお考えは一致していない。即ち、宗子に関しては虚構か否かということと、附載説話二類が平中物語の残欠本か否かという点で対立している。さらに、附載説話二類がこの位置にあることについては、二、三の人がふれているにすぎない。また、柿本氏の如く附載説話二類の古形か否かについてふれているのみられる。

以上が附載説話二類の研究に關しての現状であるが、総じて、もう少し具体的に追究する必要があるであろう。

三

これらの問題はそれぞれ関連し合つていられると思われる。もし附載説話二類が平中物語の残欠本から挿入されたとなると、後述するように附載説話二類と前後の章段の一致は、偶然とみるより外はないだろうし、これに附載説話二類の改作という事実をどう結びつけて考えたらよいのか。それにしてても附載説話二類の冒頭が「宗子」になつてゐるのは、これらを解決する上で何か暗示させるものがあるかもしれない。附載説話二類をここに持つてきたことについて雨海氏は一七二段と「帝」、「菊花」、「歌」にまつわる関連性を指摘されている。⁽²⁾ 妥当な見解であろう。ただ、氏が述べられているのは附載説話三までであり、しかもこれは附載説話断片ということだ、こうとらえているのかもしれないが、後述の如く附載説話がある意図をもって挿入されたとする、これら三つの中で、どれに重きが置かれたのであろうか。思うに一七二段の帝、即ち宇多天皇のことが附載者の念頭にあつたのではなかつたのか。だが一七二段には、宗子が登場してゐない。彼をここへ登場させたのは、それなりの意図があつたことであろう。大和物語の作者の宗子への関心の深さについては、すでに指摘されているところである。即ち雨海氏が

宇多天皇を中心にして、醍醐天皇・敦慶親王・元良親王・源宗子が『大和物語』の中心的メンバーであるとする事ができる。特に源宗子は是忠親王の男子であつて、臣籍にあたる身、彼の『大和物語』に於ける位置は注目ししよう。又、宗子は彼のみならず、彼の女といわれる閑院御も四六・一一八・一一九段に取り上げられ、これはよい話ではないが、彼の三男が博奕におぼれ、親兄弟に憎まれ、放浪の旅に出た話が載つてゐる。

このように宗子の家の私事についてまで書かれてゐることなど、『大和物語』編者の源宗子への関心の深さを物語るものとみることができよう。⁽³⁾

と述べておられることに尽きよう。すると附載者もこれと同じように考えていたのであろうか。それとも大和物語作者がそのように思っていたのを察していたのであろうか。いずれにしてもこのような意識が附載者にも反映されていたとみるべきであろう。

だが、平中物語から挿入したならば、主人公はそのまま平中でもよかつたはずである。それゆえ前述したように断片ではあるまいかという考えも生じてくるのである。しかし、後述するように附載説話二類の意図的な改作、各章段などの関連性などを考えると、そう簡単には片付けられないのである。大和物語において宗子が登場する章段は三〇・三一・三二・三三・三四・三九・五四・六三・八〇・一〇八の九章段である。これらの章段のうち注目したいのは三〇・三一・八〇段である。今、それぞれの章段を記してみよう。

三〇段

故右京の大夫宗子の君、なりいづべきほどに、わが身のえなりいでぬことと、思ひたまひけるころほひ、亭子の帝に、紀伊国より石つきたる海松をなむ泰りけるを題にて、人々歌よみけるに、右京の大夫、

沖つ風ふけぬの浦に立つ浪のなごりにさへやわれは沈まむ

三二段

亭子の帝に、右京の大夫のよみて奉りたりける。

あはれてふ人もあるべくむさし野の草とだにこそ生ふべかりけれ
また、

時雨のみ降る山里の木のしたはをる人からやもりすぎぬらむ

とありければ、かへりみたはぬ心ばへなりけり。「帝、御覧して、『なにごとぞ。これを心えぬ』とて僧都の君になむ見せたまひけると聞きしかば、かひなくなむありし」と語りたまひける。

八〇段

宇多院の花おもしろかりけるころ、南院の君達とこれかれ集りて、歌よみなどしけり。右京の大夫宗子
来て見れど心もゆかずふるさとのむかしながらの花は散れども

こと人のもありけらし。

(注) 本文は『日本古典文学全集大和物語』に拠り、傍線は稿者が施した。以下も同様。

これら三章段には宇多天皇と宗干が出ている。大和物語において、宇多天皇の登場する章段は多く、その中で彼と一緒に出てくる人物で一番多いのは齋院で四九・五一・五二の三章段に出てくる。これは宗干が登場する章段と同じ数になる。こうみてくると宗干と宇多天皇の結びつきは特異な存在と言えよう。附載者もおそらくその点を注目したのであろう。さらに注目したいのは三二段と八〇段の傍線を引いた部分が附載説話二類の和歌にほぼ共通していることである。附載説話一、二の和歌に傍点を施した部分 これらの章段をもとに改作したことがわかる。三〇段と三二段は宗干の不遇意識が強く出ているし、また八〇段も社会的に恵まれない状況下での宗干の姿である。⁽⁴⁾ 附載者はこれらの章段に注目し、かつそれをもとに改作しているという事実は、やはり宗干に対する附載者の同情的な面の現れとみるべきであろう。ともかく、これらだけでも附載者は二人が登場する章段をいかに意識していたかが理解できよう。それはまた、附載説話二において、「院の帝」のところが「仁和の帝」、「御前」のところが「御室」となっているが、これは宇多天皇を意識しての改作と思われる。このことによっても、さらに納得できよう。

一方、平中が登場する章段は四六・六四・一〇三・一二四の四章段である。いずれも色好みとしての彼の姿が描かれている。宇多天皇との関連ということでは一〇三段があげられるが、これは回想談の部分で、平中が単にその行幸についていったというだけであって、自分の身を宇多天皇に愁訴している宗干ほど密接な関係はない。ただ、今井源衛氏は六四段に関して次のように述べておられる。

六十三〜六十八段には不如意の恋を主題とした説話が並んでおり、これはその中の第二話である。直前の六十三段は右京大夫源宗干の話であり、つづいてこの平中の登場となる。共に当時喧伝された皇族出の風流才子である。両者がお互にその名によって連想されるような事情でもあったものか、後に附載説話に於いて、平中説話の主人公を宗干と誤っているのも、その辺の事情に基づくものがありはしないだろうか。⁽⁵⁾

確かに二人は氏の言われるように喧伝された風流才子であり、その点においては共通している。附載者はそれを意識していたかもしれない。しかし、それよりも先述したように語句の共通性や改作から考えて、なによりもまず宇多天皇のことが附載者の念頭にあったとみるべきであろう。それは、一七二段には宇多天皇の石山詣が記されており、その後に附載説話二類を置いていることによっても理解できよう。

これらを総合してみると、単に平中とすることよりも宇多天皇を意識し、彼と密接な関係にあった宗干を登場させたとみるべきであろう。これはまた、大和物語においては宗干とするだけの素地が整っていたのであろう。

四

では、これらの附載説話二類はどのように関連しているのであろうか。論述の便宜上、附載説話二類とその前後の一七二、一七三段を列挙してみよう。
章段により必要箇所のみ。
 うとし省略したものもある。

一七二段

亭子の帝、石山につねにまうでたまひけり。国の司、「民疲れ、国ほろびぬべし」となむわぶると聞しめして、こと国々の御庄などにおほせごとたまひければ、もてはこびて、御まうけをつかうまつりて、まうでたまひけり。近江の守、「いかに聞しめしたるにかあらむ」と、嘆きおそれ、また、「むげにきてすぐしたてまつりてむや」とて、かへらせたまふ打出の浜に、世のつねならずめでたき飯屋どもを作りて、菊の花のおもしろきを植ゑて御まうけつかうまつれりけり。国の守も、おぢおそれて、ほかにかくれりて、ただ黒主をなむすゑおきたりける。おはしましすぐるほどに、殿上人、「黒主はなどてさてはさぶらふぞ」と問ひけり。院も御車おさへたまひて、「なにしにここにあるぞ」と問はせたまひければ、人々問ひけるに申しける。

ささら浪まもなく岸を洗ふめりなぎさ清くは君とまれとか
 とよめりければ、これにめでたまうてなむとまりて、人々に物たまひてかへらせたまひける。

附載説話一

右京の大夫宗干の君の家には、前栽をなん、いたうこのみてつくりける。をみなへし、菊などあり。この男のもとへ行きたりける間をうかがひて、月いと明かりけるに、女房あつまりて、群れて、この前栽を見歩いて、いと高き札に歌をかきつけて、その花の中にたてける

きてみれば、昔の人はすだきけり花のゆるある宿にぞ有ける

かかりければ、男、誰とも知らざりけれど、来てとりもやすると、書いて立てたりける。

我宿の花は植ゑしに心あればまもる人のみすだくばかりぞ

と書き付たりける。

さて、「もし取る人もやある」とうかがわせけるに、一夜二よ来ざりければ、たゆみて、まもらざりける間にぞとりてける。くちをしく、え知

らでやみにけんかし。

附載説話二

又、この男、仁和の御門召してけり。「御むろに植ゑさせ給はんに、おもしろき菊奉れ」と仰せ給ひける。うけ給うてまかでければ、又召しかへして、「その奉らん菊に、名つけてまゐらずは、おさめ給はじ」と仰せられければ、かしこまりて、まかでて、菊など調じて奉りける。
時雨ふる時ぞ折りける菊の花うつろふからに色のまされば
とて奉れり。悪しよしもえ知らず。

附載説話三

又、この男のもとに、国経の大納言のもとより、いささかなる事のたまひて、御文をぞ給へりける。御返事きこゆとて、おもしろき菊につけたりければ、いかが見給ひけん。かかる歌をよみ給ひける。

(歌欠)

とぞ有ける。この男おどろきて、とかく思はば、程へんに、かの御つかひの思ふ事もあらんとて、ただとくぞ、ふとはしり書きて奉れりける。

花衣君がきをらばあさぢふにまじれる菊の香にまさりなん

附載説話四

この男、音には聞きならして、まだ物などいひつかぬ所有りけり。いかでと思ふ心ありければ、常にその家の前をわたる。されど、言ひつきたよりもなきを、火などいとあかりける夜、門の前よりわたるに、女どもなど立てり。かかれば、馬よりおりて、物などいひたりけり。(以下略)

附載説話五

又、この同じ男、忍びて知れる人有りけり。久しくはあはぬ事などいひてやれりければ、「ここにもなさん。迎へに人おこせよ」といひければ、いとをかしき友だちをぞ率て行きたりける。(以下略)

附載説話六

又、このおなじ男、親近江なる人に忍びてすみけり。親、気色を見てせちにまもり、日暮るれば門をさしてうかがひければ、女物おもひわびてのみあり。(以下略)

附載説話七

又、この男、志賀に詣でにけり。逢坂の走井に、女どもあまた乗れる車をおろして立てり。男馬よりおりて、とばかり立てりければ、車の人、人きぬとうてみてかけさせて行く。男、かの車の人に、「いづちおはしますぞ」と問ふ。(以下略)

附載説話八

又、女男いとしのびて知れる人あり。人目しげき所なれば、からうじて、又も明けぬさきにぞ帰りける。いとまだ夜深く暗かりければ、かかぐり出でんと思へども、入るもかたく出づるにもかたければ、門の前に渡したる橋の上に立てり。(以下略)

附載説話九

又、この同じ男、はかなき物のたよりにて、雲のよりもなほはるかにて見る人ぞありける。(中略)女の親、さかなき朽女、さすがにいとよう物の気色みて、いとことがましき者なりければ、かかる文通はしける気色ありと見て、はては文をだに、え通はさず、(中略)されば、この友だち、「などか、いと恨めしく、今まで我には言はざりける。人、気色とらぬさきにようたばかりてまし」などいひて、「月のおもしろきを見んとて、端の方に出て、我ことをも、それにまぎれて、簀の子のほどによびよせて、物言へ」などたばかりて、(中略)この女、さらに事のつてをだに、えすまじう、物いはせけるたよりも絶えてよせずなりにければ、言ふかひなくて、

一七三段

良岑の宗貞の少将、ものへゆく道に、五条わたりにて、雨いたう降りければ、荒れたる門に立ちかくれて見入るれば、五間ばかりなる檜皮屋のしもに、土屋倉などあれど、ことに人など見えず。歩み入り見れば、階の間に梅いとをかしう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾のうち

より、薄色の衣、濃き衣、うへに着て、たけだちいとよきほどなる人（中略）簾のうちよりしとねさしいでたり。ひき寄せてみぬ。簾も、へりはかはほりに食はれて、ところどころなし。うちのしつらひ見入るれば、むかしおぼえて畳などよかりけれど、口惜しくなりにけり。日もやうやう暮れぬれば、やをらすべり入りて、この人を奥にも入れず、（中略）日も高うなれば、この女の親、少将にあるじすべき方のなかりければ、（以下略）

（注） 附載説話の本文は『大和物語 校注古典叢書』（明治書院 昭和47年3月）に拠った。なお、これは御巫本を底本にしている。傍点は稿者。以下も同様。

附載説話一は宗子と女房達、附載説話二はこの男と仁和の帝、附載説話三はこの男と国経の大納言がそれぞれ登場している。宗子がここに登場している理由については先程、述べた。これら三章段に共通していることは、「菊」が出てくることである。そして一七二段にも「菊」が出ており、このことについては、前述したように雨海氏が指摘されている。ただ、附載説話一、二の和歌は前述の如く大和物語三二・八〇段の和歌をもとに改作されていることを強調しておきたい。^⑥

ところが、附載説話四、五をみると「菊」なるものは出ていない。次いで附載説話六、七をみると、前者は「近江なる人の女」にこの男が通っている話。後者は「志賀詣」でのこの男とある女との話がそれぞれ記されている。これらはけつして一七二段と無関係ではあるまい。つまり一七二段は、宇多天皇の近江国への石山詣のことが記されているから、この男と参詣する寺とは異なるものの、いずれも近江国の寺ということに関連づけて、この話を持ってきたのであろう。それは本文の異同にも現れているように思う。附載説話七の「浜へゆきけるほどに」のところ、平中物語では「逢坂の関越えて、待つ。来けるあひだに、車より」となっている。やはりこれは、一七二段に「打出の浜」が出てくるから、それにもとづいて改作されたものであろう。しかしながら、次の附載説話八、九をみると近江国の話にはなっていない。では、いかなる理由でもってここに置かれたのであろうか。ただ、このうち附載説話九と一七三段をみると、傍線を施したように登場人物や場面において共通する点がある。即ち、両章段とも高貴な女性とその親が登場していること、簀子、簾のあたりでのあいびきということである。これは偶然の一致ということよりも、ある程度の関連ということを考慮して、こうなされたとみた方が妥当ではあるまいか。このことは平中物語二八段をみると理解できよう。この章段と大和物語一七三段は、登場人物や場面設定の上で、共通点を見い出せない。

こうみてくると、附載者は章段間の関連ということを考えて、これらの章段を配置したのであろう。でも、二段に関連づけるのであるならば、附載説話一、二、三、六、七だけでもよかつたはずである。ここに附載説話四、五、八、九をもっていることは、どのような意味があるのだろうか。まず考えねばならないことは、附載説話二類においてこれらすべての章段が宗子に関した話になっているということである。しかも注目すべきことは、これら

附載説話の始めの部分において異同がみられることである。傍線の部分を平中物語は持っていない。ただ、このうち附載説話九においては、異同がみられないが、「雲居よりもなほはるかにて見る人ぞありける」とあるから附載者は高貴な人とみていたようである。それゆえ、附載説話四、五、八もその相手の女性を高貴な人とみていたのであろう。このように章段を除去することなく、部分的に改作を試み、男は悪条件のもとで会うことに成功するようにしている。これこそ色好みとしての宗于の姿といふべきであり、言い替えれば、附載者は平中物語を素材として色好みとしての宗于を描きたかったのであろう。

では、そうした要因はどこにあったのであろうか。大和物語において、宗于は身の不遇者として描かれていることはすでに指摘されていることである。これに対して、附載説話二類はどちらかというと色好みの宗于として描かれ、恋一筋にうち込んでいる彼の姿が描かれている。これは前にも述べたように大和物語において不遇な話が描かれているから、これらとは対照的に彼の姿を描いたとみるべきであらう。このことから宗于への同情を察せられよう。したがって雨海氏が

『大和物語』本文中に、平中に関する話が、四六・六四・一〇三・一二四段の四箇所に入れられてあり、説話内容も可成詳しく、興味をそそる話（一〇三段）をも持つているのに御巫本附載説話添加者は何故か気付かなかつた。然も附載説話第二類にある歌は『古今和歌集』巻五・秋下に

仁和寺にきくの花めしける時に哥そへてたてまつれとおほせられければよみてたてまつりける

平さだぶん

秋をきて時こそ有けれ菊の花うつろふからに色のまされば

とあり、歌人なれば一応気付いてもよさそうであるのに見逃してしまったようである。⁽⁷⁾

と述べられているが、むしろ附載者は、気づいていたのではなかったか。大和物語において宗于が登場する章段を考慮し創作したのではないか。そして、これは虚構性の現れとみるべきであらう。

それにしてもなぜ平中物語の一九段を附載説話二類のはじめに持ってきたのであろうか。これ以外にも前栽の出てくる章段はみられる。二段と一七段がそれである。しかし、具体的に「菊」とあるのは二段のみである。したがって、「菊」で関連づけようとするならば、二段でもよかつたはずである。それを除外してまでこうしたのは、それなりの理由があつたのであろう。

まず考えられることとしては、附載者が近江国の話を持つてきて、それに一七三段との関連も考慮したかつたことがあげられよう。しかもある程度の連続性をも考えて、これらの条件を満たすには、これら以外の章段になかつたといふべきである。

五

大和物語一六九段は次のような内容である。

むかし、内舎人なりける人、おほうわの御幣使に、大和の国に下りけり。井手といふわたりに、清げなる人の家より、女どもわらはべいで来て、このいく人を見る。きたなげなき女、いとをかしげなる子を抱きて、門のもとに立てり。この児の顔のいとをかしげなりければ、目をとどめて、「その子、こち率て来」といひければ、この女寄り来たり。近くて見るに、いとをかしげなりければ、「ゆめ、こと男したまふな。われにあひたまへ。おほきになりたまはむほどにまゐり来む」といひて、「これをかたみにしたまへ」とて、帯をときてとらせけり。さて、この子のしたりける帯をときてとりて、もたりける文にひき結びてもたせていぬ。この子、とし六、七ばかりありけり。この男、色好みなりける人ならば、いふになむありける。これをこの子は忘れず思ひもたりけり。男ははやう忘れにけり。かくて七、八年ばかりありて、また、おなじ使にさされて大和へいくとて、井手のわたりに宿りゐて見れば、前に井なむありける。それに水くむ女どもあるがいふやう、

この章段を附載者は不合理な章段とみていたようである。それは、この章段には和歌がなく、かつ中断した形で終わっているからである。しかし、だからと言って除去することなく最後に置いている。つまり不自然な章段でも残しているのである。このことを直接、附載説話二類に適用させることは早計かもしれないが、少なくとも不合理な章段でも残そうとする附載者の意識を窺い知ることができるのではあるまいか。このことは、先程、指摘したように附載説話四、五、八において部分的に改作し関連性を持たせ、合理的にして残していることも無関係ではあるまい。

さらに憶測することを許されるならば、附載説話九が中断の形で終わっていることは、この一六九段にヒントを得ているのではあるまいか。⁽⁸⁾ 両者の文末表現を再度、記してみよう。

○それに水くむ女どもあるがいふやう、(一六九段)

○それよりこの女さらに事のつてをだにえすまじう、物いはせけるたよりもたえて、よせずなりにければ、いふかひなくて、(附載説話九)

傍点を施した部分は、意味の上では違っているものの、発想が似通っているのは偶然の一致と言えようか。一六九段を最後に持つていき、附載説話九が附載説話二類の最後の章段であることを思えば、何か意味ありげである。附載説話九があのような形で終わっていることにより、ある断片から挿入されたという考えがなされてきたわけだが、平中物語において附載説話九にない本文は「こと人にあはせてけり。さりければ、男、親さあはすとも、

さやはあるべきとぞ、思ひ憂じてやみにける。」という部分であり、別にこの部分がなくても意味は通じるし、むしろ余韻を持たせた表現になっている。これは意図的になされたとみるべきであろう。そして、こうであれば、やはりここに合った章段を持つてきたと考えた方が妥当ではなからうか。ただ、この中絶の形になっていることについては、高橋正治氏の説かれているところであるが、一六九段が大和物語作者の意図でなされたか否かは今後俟つべき問題である。

六

大和物語一七二段は宇多天皇の石山詣のことが記されているが、この後に附載説話九章段を挿入したのは、あくまでも宇多天皇のことが附載者の念頭にあったものと思われる。それをもとに連想の如く菊に関連づけ、さらに彼と親しい関係にあった宗干を登場させている。そしてここでは好色者としての宗干になりきってしまった。これらの附載説話二類を通して附載者が大和物語をどのように受け止めていたかを知ることができよう。この点において、この附載説話二類は貴重な資料になろう。

それにしても物語創作の方法としてみるならば、他の物語からほぼそっくりそのまま持つてきているという点では、稚拙な方法といえるべきであろう。これは他の本文にも反映されているようだ。附載説話二類の本文はかなり合理的に処理されているが、このことはこれら以外の章段とも無関係ではあるまい。これら以外の本文についてはすでに考えたことがあり、それによると、理解しやすい形に改作しているところが多かった。この附載説話二類はおそらく御巫本と鈴鹿本の親本に挿入されたのであろう。そして、御巫本と鈴鹿本に別かれ、それに伴って両者において異同が生じたのであろう。してみると、附載説話二類は親本の時点で改作されたのであろう。

ただ、附載説話二類と平中物語の異同を通してその関係について雨海氏は次のように述べておられる。

配列順序は合うものの、本文の語句の異同は甚しく、両者間には直接関係はないものと思われる。それ故、御巫本附載説話九篇は『平中物語』の異本の一部分が一塊りとなって遊離したのが『大和物語』に混入したものとおもわれる。⁽¹¹⁾

直接云々は妥当であるにしても、両者の甚だしい本文の異同は御巫本の改作によるところが多いのではないか。また一塊りと言われるが、近江国の話や宇多天皇を意識した異同は一七二段と関係があると思われる。したがって、章段間の一致は、偶然とは考えられないのである。

こうみてくると、私の考えは阿部、今井、高橋、阪倉各氏のお考えと共通していることになるし、雨海氏のお考えとは一部共通している。ただ、こ

ここではこれら先学の考えよりも具体的に一步ふみ込んで考えてきたが、思わぬ考え違いもあろうかと思う。切に御教示をお願いする次第である。

注(1) B類とも言う。なお附載説話第一類(A類)とは『大和物語抄』、『大和物語―秋成本―』等に附載されている歌物語群を言う。

(2) 「御巫本大和物語附載説話冒頭の「右京大夫宗子」について」(『国文学研究』20集 昭和34年9月 後に『歌語りと歌物語』(桜楓社 昭和51年9月)に再録) 注(2)に同じ。

(4) 岡部由文氏「大和物語における源宗子の位置」(『中古文学』20号 昭和52年10月)

(5) 「大和物語評釈・十 平中」(『国文学』7巻11号 昭和37年9月 後に『大和物語評釈 下巻』(笠間書院 平成12年2月)に再録)

(6) この外、附載説話一、二の文末に「え、知ら、で、やみにけんかし」、「悪しよしもえ、知ら、ず」とあるが、後者は附載説話二類だけにみられる本文であり、これは関連つけるために付加された本文であろう。

(7) 注(2)に同じ。

(8) 高橋正治氏は『日本古典文学全集大和物語』(小学館 昭和47年12月)の解説で、附載説話九の文末表現を意図的な中断形式と考えておられる。

(9) 「物語末尾形態に関する試論―切断形式の系譜―」(『平安文学研究』24輯 昭和35年3月)、『大和物語 増選書』(塙書房 昭和37年10月)

(10) 「鈴鹿本大和物語考(上)、(下)」(『語文』46、49輯 昭和53年12月、昭和54年12月 後に『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録)。本書第一章第三節。

(11) 注(2)に同じ。

第七節 物語の成長

―『大和物語』附載説話第二類の本文―

―

大和物語附載説話第二類以下、附載二類と略称とは御巫本と鈴鹿本にみられる章段をこう呼んでいる。附載二類を含む段序は次のようである。

1 168 170 171 172 A 173 169

一七二段と一七三段との間にあるA 173の九章段がそれである。このA 173段は平中物語の一九段から二七段までの段序に一致している。しかし、両者の本文を比較してみると、甚だしい異同がある。さらに附載二類を有している御巫本と鈴鹿本との間でも多くの異同がみられる。前者の場合、どのような事情によるかについては諸説がある。⁽¹⁾ 私自身もその一部について言及し、その結果、これらの章段は意図的に挿入されたものではないかと推測した。⁽²⁾ ただ、その時は附載二類の創作性と章段配列に焦点をあてて考察したこともあり、本文全体については言及できなかった。それゆえここでは前稿を踏まえつつ、物語の成長という観点から附載二類の本文について考えてみたいと思う。

―

本論に入る前に附載二類の研究状況についてふれておきたい。附載二類については前述の如くこれらの章段が御巫本と鈴鹿本にのみみられるものであり、かつこの二本が異本系統ということもあつてか、それほどなされていないことも事実である。注釈では武田祐吉、水野駒雄の両氏の『大和物語詳解』⁽³⁾が嚆矢であり、続いて柿本獎氏の『大和物語の注釈と研究』⁽⁴⁾、阿部俊子氏の『大和物語 校注古典叢書』⁽⁵⁾が刊行された。さらにその後、今井源衛

氏の『大和物語評釈下巻』⁽⁶⁾の刊行を見た。

一方、本文についての研究はこれまで皆無に等しかった。そんな中であつて雨海博洋氏は附載二類の本文を正面に据えて考察された。⁽⁷⁾氏は附載二類の五章段を対象にして、この本文と平中物語の本文とを比較し、その結果、原本『平中物語』⁽⁸⁾ではないから附載一、二類になつて分散したことを推測された。氏の研究は我々、研究する者にとつて大きな指針となることはいうまでもない。ただ、附載二類の本文は前述したように、多くの異同があり、氏はその一部にふれてはいるにすぎない。したがつて、もつと多くの用例にあたり、その異同がどのような理由によるのかを探ることも必要ではあるまいか。その後、前述したように私も雨海氏とは視点を異にし、その創作性について言及した。この外、附載二類の資料としての重要性の指摘もみられる。⁽⁸⁾ともあれ、附載二類についての研究はまだ緒に就いたばかりであり、今後、様々な角度からの考察が必要であらう。

三

附載二類には二五首の和歌がある。その和歌からまず見ていきたい。論述の便宜上、平中物語を底本にして、御巫本と鈴鹿本の本文の異同を記しておこう。

A 段

(1) コノ歌ナシ(鈴)
きてみれば昔の人も(巫)
ゆきかてにむへしも人はすたきけりはなは花なるやとにそありける

(2) わか宿(鈴)
我やと(巫)
わかやとのはなはうゑしに心あれはまもる人なみひとゝなすにて

B 段

(3) 時雨ふるおりそ折ける(鈴)
秋ふかきイ
時雨ふる時そ折ける(巫)
あぎをおきてときこそありけれ菊きくのはな花うつつろふからに色のまされは

C 段

(4) コノ歌ナシ
みよをへてふりたるおきなつゑつきてはなのありかをみるよしもかな

- (5) 花衣きみかきまさは(鈴)
花衣君かきをらは(巫) たまほこにきみしきよらはあさちぶにまされるきくのかはまさりなん菊
に増(鈴)
- (6) 夜なか(鈴)
夜中(巫) さよなかにうきなとりかはわたるとてぬれにしそてにしくれさへふる名とり川(鈴)
名取川(巫)
とてイ(巫)
らん(巫)
袖(巫)
時雨
- (7) 時雨 しくれのみふるやなれはそぬれにけんたちかくれけんことやくちしき屋(鈴)
立
へり(鈴)たる
- (8) 難波 なにはかたおきてもゆかんあしたつこのゑふりいてゝなきもとゝめよた
いそぎ(鈴)
いきて(巫)
- (9) 難波
難波辺(鈴)
なには江(巫) なにはえのしほみつまでになくたつをまたいかなれはおきてゆくらん鳴
の(鈴)又
すきてゆく(鈴)
過て行く(巫)
- (10) み(巫)
立(巫)
婦(巫) 見るめなみたちやかへらむあふみちはに(鈴)
なにのうらなる(鈴)
何の浦なる(巫)
うらみ(鈴)
根(巫) なのみうみなるうらと裏見て
- (11) 関山 せきやまのあらしの風のさむければあらしの風のはけしきに(鈴)
嵐のこゑのあらければ(巫)
君
なのみ成けり きみにあふみはなみのみそたつ
- G段 (12) あふさかのなは名
は名 にたのまれぬせき川関水 のなかれておと音
聞(鈴) にきく人見 をみて
- (13) 名を
み我 なにたのむわれもかよはんあふさか逢坂 をこゆれば君 きみにあふ身み成(鈴) なりけり
- (14) 立
行 たちてゆくゆくぬ ぬもしらすかくのみそ道旅のそらにはとふへかりける(鈴)
旅の空にはとふへかりける(巫) のそらにてまふ へらなる

- (15) かくのみしゆくゑまとは行ふ(鈴)わかたまをたくへやせまし我玉はみちのしるへに旅の空には
- (16) たすくへきくさきならぬとあはれと草木おもふ人のめには見えける哀 物思 時
- (17) 身のうきをいとひすてにときつれともなみたのかはうき 思(鈴)わたるナシ 涙の川はせもなしり(鈴)と
- (18) まことにてわたるせなくはなみたかはなかれてふかきみをとたのまん瀬(鈴)ら 涙川
はやき身とをたのまむ(巫)
はやき身をと頼まん(鈴)
- (19) あぎのよのゆめは秋 夜(鈴) 夢ははかなくあふといふを有(鈴) いへは
- (20) はるにかへりてまさし春かるらむからなん
- (21) ことならはあかしはて衣手(鈴)よころもてにふれるなみたのいろもみす涙 色へく見
- (22) ころもてにふれるなみたのいろみむとあかさは我もあらはれねとや衣手(鈴) らん 涙(巫) 色 んとや(鈴) ねとや(鈴) ぬかな(巫) われ(鈴)
- H 段
- (23) よには出でて夜半にいてて(巫)わたりそかぬる渡(鈴) わふる(巫) 涙川(鈴)なみたかはふちとなかれてふかくみゆれは
- (24) さよなかにおくれてわふるなみたこそきみかわたりのふちとなるらめ夜中 涙(巫) 君 あ 淵 成(鈴)
- I 段

(25) たまさかに玉きけと君としらふることの音に(巫)しらふることのねのあひでもあはぬ恋をこゑのするかな

(注) 伝本略号は以下の通り。巫(御巫本)、鈴(鈴鹿本)。校異本文で伝本略号のないところは、御巫本と鈴鹿本とが一致していることを示している。

附載二類と平中物語とがすべて一致している歌は一首もない。また、御巫本と鈴鹿本が一致している箇所がある反面、御巫本、鈴鹿本がそれぞれ独自異文になっている箇所もみられ、各伝本の複雑な生成が予想できよう。そしてこれらことから附載二類自体が何度かの転写を経ていると考えてよろう。

そこで、その実態を探ってみることにしよう。附載二類には二五首の和歌があることは先に述べたが、これらの和歌は贈答歌になっているものと、単独で詠まれているものとに分けることができる。まず前者から本文生成の糸口を探り出してみたい。そもそも贈答歌とは「相手の言葉尻をとらえ、相手の表現を巧みに用いなおして、機知的にやりこめるといった方法が一般的である」と言われており、これが贈答歌の基本的な形と考えられる。附載二類で贈答歌になっているのは(6)(7)、(8)(9)、(10)(11)、(12)(13)、(14)(15)、(17)(18)、(21)(22)、(23)(24)の八組である。まず(6)(7)からみていこう。前後するが、(7)において平中物語をみると、「けん」が二回出てくる。そして、その箇所が附載二類では異同があるのである。附載二類は重複を避けるために片方を「たる」に改めたのであろう。また、附載二類の中でも異同がみられる。(6)において御巫本は「らん」と、(7)において鈴鹿本は「立かへりたる」とそれぞれなっている。後者の場合、御巫本は「立ちかくれたる」とあつて、平中物語に一致することから、ここは平中物語により近いと言える。ここを「かくる」と表現したのは前の地文に「みな隠れぬ」平中物語とあることから、これを踏まえているのであろう。鈴鹿本は「立ちかへりたる」とあつて男が帰るようにとり詠んでいる。これは少し飛躍していることから御巫本よりも後に成立した本文と言えよう。前者の場合、どちらの本文でも意味が通じるし、いずれが改変したかは断定できない。ただ、御巫本のみが独自異文となっていることから、前者の鈴鹿本のように後の成立と考えてよからう。次に(8)(9)をみることにしよう。(8)において「こゑふり」と「なきも」が意味上、類似している。そのために附載二類は改めたのであろう。ただ、御巫本と鈴鹿本には異同があるが、いずれがもとの姿かは断定できない。強いて言うならば、御巫本の場合、「たてゝいきて」傍点は稿者以下も同様とあつて一首の中で「て」が続いており重複を避けるために鈴鹿本は改めたのではあるまいか。(9)をみると、結句において附載二類は「過ぎて行くらん」ただし鈴鹿本は「すきて行くらん」となっている。ここは贈歌に「おきてもゆかん」とあるから、それを受けて返歌では平中物語のように「おきてゆくらん」となっているわけである。その意味で平中物語の方が附載二類よりも贈答歌としての体裁を成しており、もとの姿とみてよからう。

それを附載二類は見過ごしに行く意味に改めたのであろう。なお、鈴鹿本は「なく鶴の」とあるが、これは「鶴」を男にとりこしたのか。しか

し、ここは贈歌を受けて鶴を「女」にとり統一した方がよい。

このように贈答歌において対応している箇所が異同している例はほかにもみられる。(10)(11)をみることにしよう。(11)の「あらしの風のさむければ」の箇所御巫本、鈴鹿本とも異同がある。御巫本はここを「あらければ」と改めたのである。それは六三段で宗于が詠んだ「さもこそは峰の嵐は荒からめ」の歌がヒントになったのであろう。というのは、附載二類の和歌には大和物語の宗于関係の章段の和歌をもとに改変しているところが見られるからである。⁽¹⁰⁾この六三段も宗于の章段であることを考えると当然あり得ることであらう。それにしても「風のこゑのあらければ」という表現はどうか。その点、鈴鹿本は「あらしの風のはけしさに」として自然な表現になっている。これらの異同から、まず平中物語があり、次いで御巫本、その後鈴鹿本という関係が推測できよう。話が前後するが、⁽¹⁰⁾も大和物語三十段にヒントを得ているのであろう。三十段をみると、地文に「海松」の記述があり、またそこにある宗于が詠んだ「沖の風」の歌には「ふけるの浦」が詠まれている。⁽¹⁰⁾では「みるめ」が詠まれており、それにもない附載二類は「何の浦なる」^{あり異同}と改めたのであろう。なお、⁽¹¹⁾において附載二類は「なのみ成りけり」とあり、これは⁽¹⁰⁾の「なのみうみなる」を受けている。ただ、附載二類ではこの箇所が異なるが、このことを考えると附載二類の改変であることが理解できよう。⁽¹²⁾(¹³)をみると、贈歌に「名にたのまれぬ」とあるから、それを受けて返歌に「なにたのむ」とあるのがもとの姿であろう。それを附載二類は「名をたのみ」と改めたのであろう。⁽¹⁴⁾(¹⁵)をみることにしよう。⁽¹⁵⁾に「かくのみしゆくゑまとは」とあるが、これは⁽¹⁴⁾の「かくのみそ道のそらにてまとは」を受けていると考えられる。それを附載二類は「旅の空にはとふへかりける」^{御巫本による}と改めたのであろう。そして、これに対応させて⁽¹⁶⁾の結句を附載二類は「旅の空には」としたのであろう。それにしても附載二類は⁽¹⁴⁾においてなぜ改変したのであろうか。附載二類は「ゆくへもしらす」ととり、そうすると結句にある「まとは」と重複するので「旅の空には云々」と改めたのであろう。この例からみて附載二類は平中物語よりも後に成立した本文とみてよからう。また、⁽¹⁷⁾(¹⁸)において平中物語は贈歌に「わたるせもなし」とあるからそれを受けて返歌では「わたるせなくは」となっているわけである。附載二類は「わたるせならは」とあり、これは贈答歌と同じことのくり返しを避けるために改めたのであろう。それと⁽¹⁸⁾の四、五句にかけても異同がある。この場合、⁽¹⁷⁾の「わたるせもなし」を受けて⁽¹⁸⁾の「ふかきみをと」という表現になっていると考えられる。これを附載二類は「はやき身をと」と改めたのであろう。なお、⁽¹⁷⁾で鈴鹿本の「わたり」と、⁽¹⁸⁾で御巫本の「身をと」はそれぞれ誤りと考えられる。また、⁽²¹⁾(²²)をみると附載二類は贈歌に対応している「ふれるなみた」のところを「ふらん涙」^{鈴鹿本は「涙」}となっている。これは女がまだ現実的に男の涙を見ていないので、附載二類は推量の形に改変したのであろう。しかし、そうすると「ふらん」と「みん」とが重複し不自然さは否めない。なお、⁽²²⁾の結句において御巫本と鈴鹿本にそれぞれ異同がある。これらは転写過程で生じたものであろう。最後の⁽²³⁾(²⁴)をみると、平中物語は両方にわたって「わたり」とあるが、附載二類は⁽²⁴⁾の方が「あたり」となっている。

これも今までみてきた贈答歌と同じであり、附載二類は改めたのであろう。しかし、その一方で(2)をみると附載二類は「わたりそわふる」^{ありとあり}とあり、(24)の「おくれてわふる」に合わせている。これは附載二類の方針に反するようであるが、男女の心情がともに同じと考えてそうしたのであろうか。しかし、贈答歌としての時間的な隔たりと、二人の心情を考慮すると平中物語の方が自然と言えよう。

次に後者の単独で詠んだ歌についてみていきたい。(1)と(2)において平中物語をみると、「花」、「人」が重複している。そしてその箇所御巫本、鈴鹿本には異同がみられる。このうち(1)については雨海博洋氏が指摘されているように御巫本は整理された本文になっている。(2)についても附載二類は同様に考えられる。このように単独で詠んだ歌でも贈答歌と同じような配慮がみられる。このことはまた贈答歌で述べたことへの補強になると思う。なお(1)の歌を鈴鹿本は持っていないが、これは何らかの理由で脱落したのであろう。(3)は古今集にもみられる。即ち、

仁和寺にきくの花めしける時にうたそへてたてまつれとおほせられければよみてたてまつりける 平さたふん

秋をゝきて時こそ有けれ菊の花うつろふからに色のまされは

(注) 本文は『古今集校本』(西下経一氏・滝沢貞夫氏編 笠間書院 昭和52年9月)に拠る。

とあり、B段の内容とはほぼ共通している。「秋をゝきて」の歌において初句に異同はないことから古今集、平中物語がもとの姿と考えられる。附載二類は初句を改変したのであろう。ただ、この中で「時」、「おり」の異同があるが、古今集や平中物語も「時」^{ただし}とあることから附載二類の中では御巫本が先に成立したのであろう。(4)をみると、附載二類は歌一首を欠いている。これはどのような事情によるのであろうか。今、それを探るために平中物語と附載二類の前後の本文を記しておく。

| 平中物語 | 附載二類 |
|---|---|
| <p>返りごと聞ゆとておもしろき菊にぞついたりける。さりければ、^aいかなることをか書いたりけむ、たち返り又のたまへる、</p> <p>御代を経て古りたつ翁杖つきて花のありかを見る よしもがな</p> <p>^bとありければ、返し</p> | <p>御返事きこゆとて、おもしろき菊につれたりければ、^aいかゞ見給ひけん。かゝる歌をよみ給ひける。 (歌ヲ欠ク)</p> <p>^bとて有ける。この男おどろきて、とかく思はば、程へんに、かの御つかひの思ふ事もあらんとて、たゞとくぞ、ふとはしり書きて奉れりける。</p> |

(注) 傍線、記号は稿者に拠る。

附載二類は歌を欠いているものの、その前後の本文をみると、平中物語に比べて大きな異同がある。この異同は帝の歌の存在感を反映しているようである。aとa'とでは主体が異なる。平中物語では男になり、一方、附載二類では国経になる。しかも平中物語では男が書いた手紙の内容に焦点をあてているのに対して、附載二類では菊に焦点をあてている。そしてaとa'は国経、宗于が歌を詠むきっかけにもなっている。附載二類にも「みよをへて」の歌があったと推定して、その内容から考えて、aの方が歌と地文とは一体になっている。このことは、bからも窺うことができる。bから知られることは一刻も早く帝に自分の気持ちを伝えようということであり、そうしないと使いに申し訳ないと思ひ、即座に歌を詠もうとする宗于の姿である。これは裏返せば、歌人として名を馳せた宗于の姿を表現していると言えよう。このように、aもそうだが、bはより物語化した本文と言える。そして何よりもこれらの表現はここに「みよをへて」の歌があつてこそ理解できるのである。それなのに附載二類はなぜこの歌を持っていないのであろうか。御巫本、鈴鹿本ともこの歌を欠いていることから考えて、既にその親本においても欠いていたのであろう。御巫本、鈴鹿本をみると、一行分、空白になっていることがそれを物語つていよう。そしてその原因を突き詰めてみると、この歌の前後の地文の改変に伴い、歌も改変しようとしたが、そこまで行き届かず、そのまま空白にしてしまったのではないか。附載二類にある歌すべてが改変していることを考えると、当然この歌もそうしたはずである。

(5)は前の「みよをへて」の歌と同じくC段にある。この場合、初句において御巫本、鈴鹿本に異同があり、また結句でも附載二類は「香に」となっている。平中物語では男の家の菊の香がいつそう映えるだろうと国経の来訪を待ち望む気持ちを詠んでいる。御巫本と鈴鹿本はこれを改変したのであろう。ここで「花衣」とは華麗なお召し物の意であり、それが菊の香りにまさっていると詠んでいる。これも国経の来訪を待ち望んでいるわけで、冒頭を「花衣」としたのは、花を好んだいかにも宗于らしいと言おうか、そのことを考慮して御巫本と鈴鹿本は改めたのであろう。ただ、鈴鹿本は「きまさは」と敬意を添えているが、これは改変とみてよからう。ここから鈴鹿本は御巫本よりも後に成立した本文であることが理解できよう。(16)をみると、平中物語の「ものおもふ人の」のところが附載二類では「物思ふ時の」となっている。ここで「物思ふ」のは詠者、即ち男自身である。平中物語のようだと、間接的と言おうか、他人事のように詠んでいる。そのために読者に伝わってくる気持ちが弱い。その点、附載二類はそれを解消している。ここでも附載二類は改めたのであろう。(25)において平中物語と附載二類との根本的な相違は、この歌を詠むに至るまでの状況が異なることである。平中物語では友人が琴を弾いて手引きをする話であるが、附載二類ではそのようなことは一切みられない。平中物語の方がこの歌を詠んだいきさつが自然である。このことでも平中物語がもとの姿であることが理解できよう。また、附載二類では「あひでもあはぬ恋」とあるが、たとえばここが掛詞になつ

ていても上句に「ことのね」とあることから、それに応じて「こゑ(声)」とあるのがよからう。そしてこれは二人の逢瀬を邪魔する「朽女」の言葉を意味していると考えられる。附載二類は「恋」としているが、これは平中物語の内容をあまり考えていなかったたのであろう。なお、御巫本は二句を「君としらふることの音に」とあるが、これだと下句とのつながりが密接になる。御巫本はそれを考えて改めたのであろう。

附載二類における和歌の異同には、これらのほかに特殊な例をあげることができる。(19)(20)をみると、平中物語では連歌になっていて男女がそれぞれ詠んでいるが、附載二類では短歌になり男が詠んでいる。ここは平中物語が本来の姿であろう。(12)ここで前後の本文を加えて比較してみよう。

| 平中物語 | 附載二類 |
|---|---|
| さて、夜、やうやう暁がたになりければ、この女、「いまはいなむ」とて、「ゆめ、今宵だに、また、人にかかりとな。うつつとはさらに」とて、 秋の夜の夢ははかなくあふといふを といへば、男、 春にかへりて正しかるらむ といひけるほどに、すすくとあかくなりければ、 | やうやうあかつきにもなれば、女、「今はいなん。ゆめ此のたびにたたり、人にかくな。すべて忘れじ。うつつとな思ひそ」といひて、かへるに、かく言へりける、 ① 秋のよの夢ははかなくありといへば春にかへりて まさしからなん ② などいひけるほどに、夜あかうなりければ、 |

両者を比べてみて感ずることは、話の展開において平中物語の方が自然であるということである。別な言い方をすれば、地文と和歌とが融合しているわけである。それが附載二類ではどうだろう。もともと連歌であったのを一首の短歌にしたわけである。それに伴って「いふ」を「いへは」として条件を示し、また「正しかるらむ」を「まさしからなん」と願望を込めた表現にしている。それと同時に前後の地文も考えねばならないことは当然である。附載二類は後述するように本文の工夫を試みている。この場合、附載二類は①と②が重複しているし、「かく言へりける」の主体がはっきりしない。(13)②は平中物語にもみられ、後への続きを考えると、どうしても必要な本文であり、そのために残したわけである。また、①の本文も歌を詠む導入の働きをしており、これまた必要な本文であった。このように附載二類は改変したものの、かえって欠点を生じてしまったと言える。

附載二類における和歌の異同を通して様々な現象を見てきた。附載二類は複雑な生成を経ており、そこには作者(編者)の手が加わっていると考えるてよからう。ここではその意図なるものを垣間見ることができたように思う。

四

次に附載二類の地文に目を転じてみよう。ここでも平中物語と比較するに甚だしい異同がある。ただ、それらはおおむね、附載二類の(ア)簡略化・(イ)付加・(ウ)部分的な改変の三つに分類することができそうである。まずは(ア)からみていきたい。論述の便宜上、その主な用例をあげておこう。

| 番号 | 章段 | 平中物語 | 附載二類 |
|-----|----|---|--|
| (1) | D | この男の乗れる馬、ものに驚きて、引き放ちて、走りければ、 ^① わらはべみな馬につきていにければ、 ^② わらは一人ぞ、とどまりて、見えしらがひ歩きける。されば、この男、かたはらいたがりて、招きて、「なにことぞ」といひければ、されば、「早う隠れよ」とて、追ひ込めてけり。それを、女ども、みて「何事ぞ」と問ひければ、 ^① この男、「あなわびしや。さらにもあらず」といひけれど、 ^② さらに聞かず。はては、ものいひふれむ人もなかりければ、よろづの言葉をひとりごちけれど、 ^③ さらに答へする人もなかりければ、いひわびてぞ、いで来にける。「音にのみ聞きつるを、いざ、呼びすゑて、ものいはむ」、「いかがあると聞かむ」とて、「おなじうは、この庭の月をかしきを見せむ」といひければ、 ^① からうじて、築地を越えて、この男入りにけり。つねに、ものいひつたへさする人に、たまさかにあひにけり。さて、 ^② それして、「築地を越えてなむまゐり来る」とい | 「乗れる馬の放れて、いぬらん方知らず」と言へば、「さればなの、ただかくれよ」といひておひかへしてけり。それをこの女ども見て、「何事ぞ」と問ふ。 ^① |
| (2) | 〃 | この男、「あなわびしや。さらにもあらず」といひけれど、 ^② さらに聞かず。はては、ものいひふれむ人もなかりければ、よろづの言葉をひとりごちけれど、 ^③ さらに答へする人もなかりければ、いひわびてぞ、いで来にける。「音にのみ聞きつるを、いざ、呼びすゑて、ものいはむ」、「いかがあると聞かむ」とて、「おなじうは、この庭の月をかしきを見せむ」といひければ、 ^① からうじて、築地を越えて、この男入りにけり。つねに、ものいひつたへさする人に、たまさかにあひにけり。さて、 ^② それして、「築地を越えてなむまゐり来る」とい | 「あなわびしや。死なんや。もはらさには侍らずなん」と言へど、 ^② 絶えて聞かず。はては、物いひつかん人もなくなりけり。あわづらひてぞ逃げにける。 ^① |
| (3) | 〃 | 「音にのみ聞きつるを、いざ、呼びすゑて、ものいはむ」、「いかがあると聞かむ」とて、「おなじうは、この庭の月をかしきを見せむ」といひければ、 ^① からうじて、築地を越えて、この男入りにけり。つねに、ものいひつたへさする人に、たまさかにあひにけり。さて、 ^② それして、「築地を越えてなむまゐり来る」とい | ナシ |
| (4) | F | はせけるを、親気色見て、 | からうじて、「築地こえてなむ来つる」といはせけるに、つたへ人のもとによりて、物言ひけるけしきを親みて、 |

| (8) | (7) | (6) | (5) |
|--|---|---|---|
| <p style="text-align: center;">”</p> <p>と、いひ入れたれば、女も寝でぞ起きたりける。 夜半にいでて……</p> | <p style="text-align: center;">H</p> <p>橋の上に立ちて、いひ入る。 夜も明けぬ先に、人の静まれるをりにとて、帰りいでたるに、</p> | <p style="text-align: center;">”</p> <p>① といひて、この女「いづちぞ」といひければ、男、「志賀へなむまうづる」といひければ、やがて、「さは、もろともに。ここにもさなむ」とて、いきける。 夜も明けぬ先に、人の静まれるをりにとて、帰りいでたるに、</p> | <p style="text-align: center;">G</p> <p>「いとよう知れる人の、憂きことどもありける、いひし、聞きしかば、心憂し。いはじ」といひければ、さらば、これは志賀の人なるべしと思ふに、よになき心地しければ、^①「さなや」と問ひけるに、女、「さぞ」といひて、^②「さなや」といひければ、男、「志賀へなむまうづる」といひければ、やがて、「さは、もろともに。ここにもさなむ」とて、いきける。 夜も明けぬ先に、人の静まれるをりにとて、帰りいでたるに、</p> |
| <p>ナシ</p> | <p>夜も明けぬさきにぞ帰りける。</p> | <p>① といひやる。女、「まめやかには、いづち行くぞ」とはせける。男、「志賀へなまうづる」さらばもろともに。我もなさん」といひて行く。 夜も明けぬさきにぞ帰りける。</p> | <p>「いな、いとなれたりける人ありければ、うき事もこれなりや。しばし」と言ひおこせたり。そのかみ男思ひけるに、世に憂き心ちして、「もし然か」と問ひければ、^②「さぞかし」と女答へけり。</p> |

(注) 本文は先程の「三」の(4)(19)(20)を含めて、平中物語が『日本古典文学全集平中物語』に、附載二類が御巫本を底本にした『大和物語 校注古典叢書』に、

それぞれ拠っている。平仮名を漢字に改めた箇所もある。また、傍線、二重傍線、及び波線は稿者が施した。これらは以下も同様。

個々にあたってみることにする。(3)と(8)において附載二類は傍線部を持つていない。前者の場合、平中物語をみると、傍線部と波線部で同じ内容のことが記されており、附載二類は重複を避けるために片方を除いたものと考えられる。また、後者の場合も傍線部と波線部が重複しており、これも前者と同様に考えてよからう。また、(7)において平中物語をみるに、傍線部と波線部とは表現が異なるものの、同じ内容を言っているにすぎない。そのため附載二類は片方を削除したのであろう。(1)と(2)はともにD段にみられる現象である。前者において、平中物語は文脈がだぶついている。①と言っておきながら、②のようになっており矛盾したような表現である。また、ここには「されば」と「何事ぞといひければ」が二度にわたって出てくる。その点、附載二類はいずれか一方を除き簡潔にしている。また、後者においても附載二類はかなり簡潔になっている。平中物語をみると「さらに」が三箇所に出てくる。それを附載二類では最初の方を残し、②を②に改めている。それと平中物語にみられる波線で示した重複表現で「さらに」を含む後の方の本文を削除している。そしてこれに付随する「よろづの言葉をひとりごちけれど」も必要でなくなるから附載二類は削除したのと考えられ

| 番号 | 章段 | 平中物語 | 附載二類 |
|-----|----|--|---|
| (1) | A | うかがはせけれど、たゆみたるにぞ、 「今宵ばかりは、なほとままりたまひね」、 「あな、むくつけ。こは、なにしに」といふものから、 いひたる。 | うかがはせけるに、一夜二よ来ざりければ、 たゆみて、「こよひばかりは、など、とまれ」といひければ、 「あなむくつけ。こは何事」をいふ物から、 かかる歌をなよみける。 |
| (2) | E | いみじく騒ぎののしりければ、 ^a 「さらに対面すべくもあ らず。はや、帰りね」とぞ、 ^b 「いひたりければ、 はともかくもあはれ、つゆにてもあはれ思はるるもの ならば、今宵帰りね」と、 せちにいひいだしたりける、 帰るとて、男、 | いみじくののしりければ、 ^a 「いな、けしき取りつれば、 あふべくもあらず。早うかへられね」といひ出しけり。 男、「いで、大かたはなどうかうかうしもはいふべき。た だ入りなんよ」とぞ言ひたりける。 ^b 「行先をも、なほ我 を露おもはば、この度ばかりは帰りね」と、 親におぢて切に言ひいだしたりける、 「いとかういふ物を、よし、 こたみばかりかへりなん」とて、 かく言ひ入れける、 |
| (3) | F | | |

る。なおこれは削除ではないが、平中物語をみると、「わびし」、「わびて」という同じ意味の語が出てくる。附載二類では後の方を「わづらひて」と改めている。これも簡潔にするために改変したものと考えられる。

さらに(4)(5)(6)をみることにしよう。(4)については先学により言及されているが、少し別な面から考えてみたい。平中物語では①のことを②で再度繰り返し詳しく記している。これに対して附載二類は②の方を残し、その後平中物語の波線部の本文をとり入れて入れている。このように附載二類は平中物語のように同じことを二度くり返すことはなくなり、話の展開が自然になつていく。(5)において附載二類は簡略になつていく。平中物語には「憂き」と「心憂し」というほぼ同じ意味の語がある。附載二類はその片方を残し、しかも「これ」という代名詞を用いて、「心憂し」の意味を含めている。さらに平中物語では二重傍線部①・②で同じことを記している。それを附載二類では二重傍線部②のように片方を残し簡略にしている。(6)において平中物語は三箇所をわたり「言ふ」が出てくる。附載二類はそのうち「いひやる」のみを残し、②のように「とはせける」と改めている。②よりもその場面に密着した表現と言える。また、附載二類は③を削除している。こうすることが臨場感を出すのに効果的と言えよう。

次にこれとは逆に(4)の附載二類で付加されたところをみていく。その前に主な用例をあげておこう。

| | | | | | | | |
|----------------------------|--------------------------|--|-------------------------|---------------|--------------------------------|--|---|
| (11) | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) | (4) |
| 〃 | 〃 | 〃 | I | 〃 | 〃 | 〃 | G |
| 「あやしくも、いませぬるかな」といへば、男、帰りぬ。 | 男、女いひ語らふに、 | とらぬ先に、月見むとて、 | この女ども、「かゝる人の、 | わらは、は見て来ぬ。 | といへば、この女の入らむところをみむとて、 | 「人もやものしたまふ」とていひたれば、 | 男、帰りきて教へに従ひて、人をやりたれば、 |
| くちおしう思ひて、 | 女も男も、をかしきやうに思ひて言ひ語らひけるに、 | とらぬさきによ ^a うたばかりてまし」などいひて、「月 ^b のおもしろきを見んとて、 | この女、思ひける友だちに、「我なんかかる思ひを | 童、車の入る家は見てけり。 | とせちに言へど、夢にも立しりぞかず。女の入らん家をみむとて、 | 「人やおはしますとてなん、道のおほぢに乗りてうたふ」などいひやりたりければ、 | 男、かの瀬田の方にて逍遙して帰り来て、かの内わたりに教へけるほどに、ありつるやうなど、この男いひやりたりけり。 |

順次みていくことにする。(1)の場合、附載二類は傍線部の下に「たゆみて」とあるからこの傍線部が生きてくるわけで、附載二類の配慮を窺い知ることができよう。(2)において平中物語は会話が続けている。附載二類は会話主を明示するために「と言ひければ」を付加したのであろう。だが、そうするとこの周辺には「言ふ」が三箇所に見られ、煩雑さは否めない。そのために「いひたる」を「かかる歌を詠みける」と改めたのであろう。このようにこれらの異同は連動していると考えてよからう。(3)において平中物語の傍線部 a・b は女の会話で、しかも b は前の内容をくり返し述べている。これだと話の流れに欠けることは否めない。その点、附載二類は波線を施したように男の会話文を付け加えることにより物語の展開が自然に運んでいる。

(4)から(7)まではG段にみられるものである。因に(4)は近江から都に帰つての男の行動を記した本文である。附載二類は傍線部を付加することで具体化し、読者への理解を助けている。さらに附載二類は波線を施したように男が直接、召使いに言つてやったようにしている。これは男の執念を描くことで物語的な効果を考へてのことであろう。(5)においても附載二類は会話の部分に傍線部の本文を付け加えることで、より具体的にしている。(6)において附載二類は女の家を見届けようという男の強い意志を示すために傍線部を付加したのである。しかし、附載二類はその後に「おとこいかざりければ」とあり、かえつて煩雑になっている。(7)においても附載二類は煩雑になっている。ここでも附載二類は読者の理解を助けるために傍線部を付加したものと考へられる。しかし、附載二類はこの前に「この車の入らむところ見て来」とあるから十分に理解できたはずである。このように付加しても、かえつて煩雑になっているところもみられるのである。

(8)から(11)まではI段にみられるものである。(8)は男がぜひとも会いたいと女に言つてきたので、それに応対する場面である。平中物語では女房がそれを知つて女の親族に頼んでいるのに対し、附載二類では意中の女が登場し、「思ひける」友達に相談している。ただ、附載二類はどうやって女が男の様子を知つたのか直接、表現していないが、女を表に出そうという、意図を窺い知ることができよう。(9)は(8)の後に続く本文である。附載二類は傍線部 a・b を付加しているが、a の場合、この会話の後に「この、来たる親族ばかりける」とあるから、これがなくても理解できたはずで、かえつて煩雑になっている。附載二類は二つの会話に分けてはいるが、それでもこのことは否めない。b はその場の雰囲気醸し出すために「おもしろき」を付け加えたのであろう。(10)において附載二類の傍線部も(9)の b と同じような考えで付加したと言えよう。(11)をみると附載二類は傍線部 a で話し手を補い、傍線部 b で女の会話を入れ、さらに傍線部 c の本文で男の心情を加え、話の展開が自然になっている。ただ、波線部の話し手を平中物語では女に、附載二類では朽女にそれぞれなっている。附載二類はひとつの解釈を示したものと見えよう。

最後に(ウ)の部分的な改変をみていく。その主な用例をあげてみる。

| 番号 | 章段 | 平中物語 | 附載二類 |
|-----|----|---|---|
| (1) | B | まかでて、かくなむ。 | まかでて、菊など調じて奉りける、 |
| (2) | D | 「あな、わびしや。さらにさもあらず」といひけれど、さらに聞かず。はては、ものいひふれむ人もなかりければ、よろづの言葉をひとりこちけれど、さらに答へする人もなかりければ、いひわびてぞ、いでて来にける。 | 「あなわびしや。死なんや。もはらさには侍らずなん」と言へど、絶えて聞かず。はては、物いひつかん人もなくなりけり。るわづらひてぞ逃げにける。 |

| (14) | (13) | (12) | (11) | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) | (4) | (3) |
|-----------------------------|---|--------------|--|--------------------------|---------------------------|--------------------------|---------------|--------------------------------------|---------------|--------------|--------------------|
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | G | F | D |
| 見せじと思て、せちに怨じけり。されば、かくなむ、 | この女、「いまはいなむ」とて、「ゆめ、今宵だに、また、人にかかりとな。うつつとはさらに」とて、 | 問はむと思ひて、 | をさをさ答へもせずなりにければ、この男、 | 歌に歌ひゆきけり。かゝるに | 「さなむいひつる」といひければ、案内を知らで、 | 志賀にまうでゝありつるやうなどいひたりける。 | かうぞ。 | かくて、物語などあまた、をかしきやうにかたみにいひければ、をかしと思ふ。 | さすがに来て、男、返し、 | かへるとて、おとこ | 門よりぞ、歩きける。かうありけれど、 |
| 「家を見せじ」と切に思ひて、男、かかる事をぞいひける。 | 女、「今はいなん。ゆめ此のたびにたたり、人にかくな。すべて忘れじ。うつつとは思ひそ」といひてかへるに、かく言へりける、 | なとも言はん」と思ひて、 | をさをさこたへもせで、いとつれなく答へつつ言ひ、 | ふり上げつつ、こひうたにうたひけり。 | し聞きえねば、 | 志賀にてをかしかりつる事などぞ言ひ言ひける。 | かかる事をぞいひたりける。 | 物がたりなど、かたみにおなじやうに思ひなして、いひぞ語らひける。 | さすがにをかしかりければ、 | とて、かく言ひ入れける。 | 前をわたる。されど、 |
| | | | おもひけるやう、「わきてもあやなし。なほ言ひとどめて、物のあるやうも言ひ、誰、かう憂き事はきこえし、 | くおぼえければ、かの女の初めによみたりける歌を、 | 「よるなら」と言ひて、このありける男二人、二条の大 | さ言ひてかへり来たれば、この男あやしがりて、故を | | | | | |

| (22) | (21) | (20) | (19) | (18) | (17) | (16) | (15) |
|--|--|---|---|-----------------------------------|--------------------------|----------------------|------------------------------------|
| 〃 | 〃 | 〃 | I | 〃 | 〃 | 〃 | H |
| <p>といひたれば、この、琴弾きける友だちも「はや返したまへ」といひけるほどに、親聞きつけて、</p> | <p>さてこの、男来て、簾のうちにて、ものいひける。</p> | <p>『かかる人の、制したまへば、雲居にてだにもえ』などいひ聞かせよとてなむ、迎へる」といひければ、</p> | <p>ものいひつくべきたよりなかりければ、いかなるたよりして、気色見せむと思ひて、からうじてたよりたづねて、ものいひはじめてけり。</p> | <p>男、いとあはれと思ひて、またものいひ入れむと思へど、</p> | <p>いとかたかりければ、</p> | <p>いかで帰らむと思へど、</p> | <p>夜も明けぬさきに人の静まれるをりにとて帰りいでたるに、</p> |
| <p>いとをかしきやうに思ひて「はやうかへりしと言へや」などたゆたふほどに、朽女はみそかにのぞきて見をれば、</p> | <p>かのおとこのもとに、「いと忍びて、この實の子のもとに立よれ。おほろけにな思ひそ」などいへりければ、男いつしか待ち暮らして立よりにけり。かの友だち、</p> | <p>「かかる人思ひをする。われはせきある人なり。さなんあるとだに聞かて責むれば、いと難し。ただかういふ人を知る人にてやみね、といふ事ばかりを、いかでたばからむ、とてなん」とぞいひける。</p> | <p>物いはずべきたよりよすががありければ、いかで物いひよらむと思へば、はじめて言ひわたるほどに、程程にければ、</p> | <p>人ぞありける。</p> | <p>入るもかたかく出づるもかたければ、</p> | <p>かかぐり出でんと思へども、</p> | <p>又も明けぬさきにぞ帰りける。</p> |

個々にあたつてみることにしよう。(2)において平中物語は「さらに……ず」を三箇所もつている。このうち波線部は同じことを二度言っているにすぎず蛇足の感なきにしもあらずである。これに対し附載二類は煩雑を避け、不必要なところを除き簡潔にしている。また、(3)において平中物語は傍線部を重複するために、附載二類はそれを避け、その場に適した表現に改めている。また、(6)においても平中物語は「をかし」を同一本文に二度使っており、洗練さに欠ける。それを附載二類は「おなじ心に思ひなして」と改変し、男と女の気持ちをうまく表現している。さらに(19)においても平中物語をみると、三箇所にわたって「たより」がみられる。それを附載二類は一箇所にとまとめている。その代りにこの前に「さは、はるかに見けれど」とい

う本文を付加し、平中物語では否定になつてゐるのを「たよりよすががありければ」と肯定表現に改め簡潔にしている。附載二類で「たよりよすが」としたのはこれを物語つていよう。(14)(15)において、これは同じ語ではないが、平中物語は傍線部と波線部とが類似した表現になつてゐる。それを附載二類は片方を残し簡潔な表現にしている。(18)は今までの例とはやや異なる。確かに平中物語をみると、「おもふ」が重複している。しかし、附載二類はこのいずれの方も残さないで「とぞ有ける」としている。あるいは平中物語の方が改変したのかもしれない。しかし、ここは忍びの恋の話であり、しかも相手の女の周辺は「人目しげき所」であり、男は「からうじて、又も明けぬさきに」やつと帰つて来たわけである。この「からうじて」という語は附載二類のみにみられるものであり、附載二類にとつて重要な働きをしていると考えられる。そのために再び歌を贈る余裕はないと考えて、「とぞ有ける」と改めたのであろう。このように附載二類には簡潔にしている箇所があるかと思えば、この逆になつてゐる箇所もある。(11)をみると、附載二類には「こたへ」という語が二箇所に出てくるのに対して、平中物語では一箇所のみになつてゐる。これは一見、重複しているために平中物語が簡潔にするために改変したように考えられるが、そう考えるより附載二類は「をさをさこたへもせず」の内容をより具体的に表現したのが「いとつれなくこたへつ」とみるべきであらう。これはその場の雰囲気をも考慮した表現になつてゐる。

附載二類の方が詳しくなつてゐる例として(1)(7)をあげることができる。前者において附載二類は「かくなん」の内容を具体的にしている。ただ、こうすると「秋をおきて」の歌の後に「とてたて、まつれり」とあるから重複してしまう。附載二類は今まで述べた例からわかるようにこのような現象を極力さげようとしたはずである。それをあえてこうしたのは、宇多上皇が菊の花を二度も御所望されたことを受けての表現とみてよからう。後者においても附載二類は略さず本来の形にしている。しかし、ここでも附載二類は平中物語で「女かへし」のところが「かくいひければ」とあつて重複している。これはどのような事情によるのであろうか。ここで附載二類のこの周辺の本文を記してみる。

かかる事をかうぞぞいひたりける、

立ちて行く……

女、返しかく言ひければ、

かくのみし……

ナシとぞ有りける。又かへさむとしけるに、

(注) 校異は平中物語の本文。

平中物語は簡略になっている。あたかも歌集のようである。附載二類は具体化したり補足したりしてより物語化を試みたのであろう。「言ひければ」の前に「かく」を付け加えて展開させているのもそのひとつの現れであろう。このほか、(5)(8)(9)(20)(22)において附載二類は「をかし」、「あやし」と言った語を付け加えてその場の雰囲気醸し出している。

附載二類において物語の展開を考えて改変している箇所がある。(10)(13)(16)がそれに該当しよう。(10)において附載二類は平中物語の「もろともいきけり」の様子をより詳しく描写している。また、(13)は女が男の許を去る場面である。附載二類は平中物語にみられる簡略な表現を改めている。さらに(16)(17)においても附載二類はその場の状況を踏まえつつリアルな表現にしている。最後の(20)でも附載二類は男が女に逢うまでの様子を詳しく描写している。

会話文に関する異同として(4)(12)(20)があげられる。まず(4)の場合、平中物語、附載二類ともこの前に女の会話文がある。それを受けて男は女の許を去るわけだが、平中物語では地文で「かへるおとこ」とあるのを、附載二類では男の会話文にし、「かへる」内容を改変し、リアルに表現している。次に(12)は女が返事をしてくれないので、男が尋ねる場面での異同である。平中物語ではこのことを地文で表現している。これに対して附載二類では男の会話文にし、ここでもリアルな表現を試みている。最後の(20)は男が女に逢いたいとせがむので、仲介役の女房が友人に相談する場面である。平中物語は朽女の立場での本文になっている。これに対し附載二類は女房が自分の立場になって複雑な心境を記している。

五

附載二類における和歌と地文の本文について平中物語の本文と比較しつつ考察してきた。両者には甚だしい異同があり、それらを通して附載二類の様々な現象をみる事ができた。その結果、附載二類はひとつの創作意図をもって挿入されたと考えてよからう。ただ、平中物語との関係はきわめて深い、それがどのように関与—直接か間接か—しているかについては今後の研究に委ねたい。また、附載二類を有している御巫本、鈴鹿本の間にも異同がみられ、これらの異同からも本文の流れを知ることができた。

ではそうした附載二類と大和物語本体とはいかなる関わりがあるのだろうか。前述したように附載二類の一部の歌は大和物語本体の宗干関係章段の歌をもとにして改変されていた。附載二類が改変する場合、この主人公が宗干であることを思えば、大和物語本体の宗干関係章段を参考にするのは当然のことと言えよう。こうした改変は単に附載二類のみに止まっていたのであろうか。つまり大和物語本体においてもされていなかったのではな

いかということである。

大和物語において宗子は九章段に登場している。これらの章段において何らかの変化がみられるであろうか。流布本で宗子の表記をみると、名前に「故」を付けている章段がある。三〇、六三段がそれで、この二章段において彼は冒頭を飾っている。これを除いた宗子関係の章段は、この中には彼が冒頭を飾っている章段もあるが、「故」を付けていない。このように流布本を見る限り、章段により「故」の有無があるのである。

ところが、大和物語の諸本にあたってみると、三〇、六三段の「故」を付けていない伝本がある。即ち御巫本と鈴鹿本がそれである。するとこの二本は宗子が登場する全章段にわたり「故」を付けていないことになる。これはこの両本の性格から考えて統一をはかったのではないか。そこには附載二類の存在が大きかったのであろう。このことを裏付けるために宗子以外に「故」を付けている源大納言、権中納言、式部卿宮、后宮について調べてみたところ、わずかに八一段の権中納言のみ、御巫本と鈴鹿本が「故」を付けておらず、残りはすべて「故」を付けている。権中納言の場合、九二段では「故」を付けている。御巫本と鈴鹿本が八一段において「故」を付けていないのはどのような理由によるのかは詳らかでない。これらのことからみても三〇、六四段における「故」の有無は改めて意図的なものであることが理解できよう。附載二類は大和物語の本体を意識して置かれていると考えてよからう。ただ、ここで述べてきたことは宗子関係の章段に限ったことであり、これ以外のところでの御巫本と鈴鹿本の本文についても当然検討すべきであるが、これらについてはかつて言及したことがある。⁽¹⁶⁾ 両者の本文について調べてみると、その多くが意図的に改変されたものであった。しかもそこには附載二類と同じように付加、改変、削除といった現象を随所に見ることができた。そしてこれらは附載二類と一体になってなされたものと考えるのが妥当であろう。しかし、両者の異同の程度をみると、附載二類の方にはるかに大きな異同をみることができる。これは平中を宗子という人物にすり替えて虚構化を目指したのであるからその意識がこのような現象となつていたのであろう。単に挿入するのではなく、様々な工夫を試みており、しかもそれは大和物語本体と連動していると考えられる。本体の本文の性格を探る上でも附載二類は重要な資料になることはいうまでもない。

六

附載二類を有する御巫本と鈴鹿本とは段序が一致していることもあり、かつ同じ親本から派生していると推測されるから、本文でも共通する箇所が多い。しかし、和歌をみてもわかるように両者には多くの異同があった。これは地文においても言えることで、今、漢字と仮名書きを除き、その主な箇所をあげてみると次表のようになる。

| 番号 | 章段 | 附載二類（御巫本） | 附載二類（鈴鹿本） |
|------|----|--|-----------|
| (1) | B | 名つけてまゐらずは、おさめ給はじと | ナシ |
| (2) | C | かの御つかひの思ふ事もあらんとて | つかひ |
| (3) | D | 音には聞きならして、(平) | く |
| (4) | 〃 | 女どもなど立てり | おほく立てり(平) |
| (5) | 〃 | 物などいひたりけり(平) | ける |
| (6) | 〃 | すのうへに集まりて、 | すのこの |
| (7) | 〃 | 心つけていふ事有りけり(平) | 心とけて |
| (8) | 〃 | いざおなじくは、庭の月をみん(平) | 今 |
| (9) | E | いふ物から、かゝる歌をなん(平) | かゝりける |
| (10) | F | 大かたはなどかうしもはいふべき、 | からうじて |
| (11) | G | 浜へ行きおるゝほどに、 | をくるゝ |
| (12) | 〃 | 方ふたがりけり(平) | ける |
| (13) | 〃 | されば女どもゝ、なほあるよりは、「いかゞせん。京にてだにもとぶらへよ」といひて(平) | ナシ |
| (14) | 〃 | この男のもとより、物ども、 | 男(平) |
| (15) | 〃 | そちぞ、此の男はいにける。(平) | めちぞ |
| (16) | 〃 | 言ひ止みにけるぞ、そが中にをりける。 | そらが中に |
| (17) | 〃 | いらへ居りけるほどに、日暮れて(平) | ナシ |
| (18) | H | いとまだ夜深く暗かりければ、 | 深く |
| (19) | I | 思ひけるほどに、(平) | ナシ |
| (20) | 〃 | せめていひわたりけれど、 | ば |
| (21) | 〃 | 友だちに、 | ともどち |
| (22) | 〃 | 「おいや」など言ひてぞ、(平) | おいや |
| (23) | 〃 | たよりも絶えてよせずなりければ、 | 何も |

(注) (平) は平中物語に一致していることを示している。いずれにもこれがない箇所は平中物語に異同がある箇所である。

個々にあたってみることにする。鈴鹿本の誤写として(3)(5)(8)(9)(12)(13)(15)(17)(19)(21)があげられよう。因に(13)はこの前後に「いひて」という同じ語があることから目移りと考えられる。(3)(5)(8)(9)(12)(15)(21)において鈴鹿本は草書体の類似による誤写とみてよからう。(17)(19)においても鈴鹿本は意味上から考えて不自然である。これらも不注意による誤写と考えるとよからう。

このほか様々な異同をみることができる。(1)(2)は敬語に関する例である。前者は仁和帝の行動であるから御巫本の方が妥当と言えよう。また後者は国経の使いということで、「御」を付けていると考えられる。事実、この章段において国経の動作には敬語を付けている。鈴鹿本はそのようなことよりも単なる使いと考えると付けなかったであろう。これも御巫本がもとの姿と考えられよう。(16)において御巫本には「本ノマヽ」という傍記がある。この本文は

このおとこの物などいひけるが、いひやみにけるそ(平)の中そ(鈴)にをりけるナシ平

とある。鈴鹿本は「ヽ」を「良」(ら)に読み誤ったのであろう。御巫本は親本に忠実であったことを示している。附載二類はその場の状況を考えて「いひやみにける」を付け加えたのであろう。しかし、この本文があることで、かえって前の「この男の物などいひけるが」の本文との続き具合がよくない。御巫本の親本の異同はこのことに起因しているのかもしれない。(10)(11)(20)においても御巫本の方が前後の本文や意味上から考えて妥当である。しかし、鈴鹿本の改変か、それとも誤写かは詳らかでない。また、(4)(6)(7)(14)(18)(20)(22)において御巫本、鈴鹿本とも意味が通じる。このうち(4)(14)では鈴鹿本と平中物語が、(7)(20)(22)では御巫本と平中物語がそれぞれ一致しており、残りはそれぞれ独自異文になっている。この現象からいづれかが転写過程で異文を生じていったのであろう。しかし、(6)(18)(23)においては各々が独自異文となっていて、いづれがもとの姿なのか判断しかねるが、このうち(6)について言えば、平中物語は「すのうち」とあって御巫本に近い、この場面は簾を挟んでの男女の対面であり、その点から考えて鈴鹿本は後世の本文と言えよう。するとここは平中物語がもとの姿であり、次いで御巫本、さらに鈴鹿本ということになる。それにしても一箇所だけでは危険であるが、そのような傾向のあることは言えるかと思う。ただ、それらが直接か、間接かの関係は詳らかでない。

一覧表に平中物語がいずれの伝本と共通するかを示しておいた。その一部については先程ふれた。大半が御巫本と共通しているが、鈴鹿本と共通している箇所もある。また、平中物語がいずれとも共通しない箇所もある。これらの現象から附載二類の複雑な生成の一面を知ることができる。附載二類の親本から御巫本、鈴鹿本が転写され、各々、異文を生じていったと考えることができよう。しかし、それらには物語の成長としての要素は少なく、

むしろ衰退の跡を残していたにすぎなかった。

先程もふれたが、かつて「鈴鹿本大和物語考」（本書第一章第三節）と題して鈴鹿本の本文附載二類は除いたを中心に御巫本を含めて考察したことがある。その結果、両者の本文には意図的な改変によるところが多く、いわゆる二次的な本文であることを指摘した。しかも、この二本の中では御巫本の方が鈴鹿本よりもとの姿を止めていると考えられる。前述したように附載二類の本文もこれと同じ結果を見たわけであり、改めて附載二類とその本体とが密接な関係にあることが理解できた。

附載二類は平中物語現存のものか否かは判断できないを素材にして、その主人公である平中を宗子にすり替えたわけであり、かなり大胆な試みであった。しかもその試みは本文にまで波及していた。附載二類各章段での大きな異同がそれを物語っている。

七

附載二類の本文を通して様々な現象をみてきた。それにしても用例の羅列に走った感があるが、附載二類に潜む創作性を探るには多くの用例にあたる必要があった。主人公を宗子にしようとした時点で附載二類の創始者は虚構ということを考えていたと思われる。本文の洗練をはじめとして、理解を助けるための様々な工夫、迫真の描写など多くの方法を試みている。もちろん附載二類そのものにも欠点がないわけではないが、その数は少なかった。ともあれ、附載二類は宗子を主人公にして章段を付加されたわけで、そこには物語としての成長の跡をみることができよう。しかし、附載二類の親本から御巫本、鈴鹿本が転写され、それぞれ独自異文が生じていくにしたがい、その傾向は薄れていった。

注(1) 萩谷朴氏『平中全講』（私家版 昭和34年9月 再版 同朋舎 昭和53年11月）、阿部俊子氏・今井源衛氏『日本古典文学大系大和物語』（岩波書店

昭和32年10月）、高橋正治氏「別本大和物語の成立について—構成論を基礎とした試論—」（『国語と国文学』30巻2号 昭和28年2月）、阪倉篤義氏『大和物語天理書館善本叢書29』解題（八木書店 昭和51年7月）、雨海博洋氏「御巫本大和物語附載説話冒頭の「右京大夫宗子」について」（『国文学研究』

20集 昭和34年9月 後に『歌語りと歌物語』（桜楓社 昭和51年9月）に再録）、柿本奨氏『大和物語の注釈と研究』（武蔵野書院 昭和56年2月）、稲賀敬二氏「『大和物語』成立段階における「平中章段追加形態」誕生契機・仮説」（『安田女子大学大学院紀要』1号 平成8年3月 後に『国文学年次別論文集 中古2 平成8年』（朋文出版 平成10年3月）、『前期物語の成立と変貌稲賀敬二コレクション2』（笠間書院 平成19年7月）にそれぞれ再録）、

- 妹尾好信氏『大和物語』付載説話考―『異本平中物語』添加の経緯について―(『説話論集』9集 清文堂 平成11年8月 後に『平安朝歌物語の研究』(大和物語篇)〔笠間書院 平成12年10月〕に再録)
- (2) 拙稿『大和物語』附載説話第二類をめぐって(『古典論叢』13号 昭和58年11月 後に『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録。本書第一章第六節。
- (3) 湯川弘文社、昭和11年5月、再版 昭和39年6月。
注(1)に同じ。
- (4) 明治書院、昭和47年3月。
- (5) 笠間書院、平成12年2月。
- (6) 『大和物語』附載説話第一類と第二類の性格(『平安朝文学研究』5号 昭和33年4月 後に『歌語りと歌物語』(桜楓社 昭和51年9月)に再録)
- (7) 岡部由文氏『大和物語の附載説話』(『歌語り・歌物語事典』勉誠社 平成9年2月)
- (8) 『和歌大辞典』(明治書院 昭和61年3月)における「贈答歌」の項目(久保木哲夫氏執筆)。
注(2)に同じ。
- (9) 注(7)に同じ。
- (10) 今井源衛氏『大和物語評釈 下巻』
- (11) 男にしているもの―『大和物語詳解』(武田祐吉氏・水野駒雄氏、『大和物語 校注古典叢書』。女にしているもの―『大和物語の注釈と研究』、『大和物語評釈 下巻』
- (12) 注(7)に同じ。
- (13) 拙稿「鈴鹿本大和物語考(上)」、「(下)」(『語文』46輯 昭和53年12月、「語文」47輯 昭和54年12月 後に『大和物語の研究』に再録)。本書第一章第三節。
注(15)に同じ。

第二章 大和物語の創作性

第一節 大和物語における在原業平関係章段について

—

かつて、阿部秋生氏は「伊勢物語と大和物語との関係―物語る部分に就いて―」⁽¹⁾という論文において次のように述べられた。

伊勢物語と同じ歌の話が出て来ることは四五に止まらないが、その大部分の話が大和物語では大げさになっている。又地理的歴史的な記述も精密になっていく。所が結果としては、それだけ却っていかにも作り話し臭くなってしまうといふ逆な結果を生じているのは、作者の腕の不足であらう。一方に、當時の日本では散文で細かな描写をすることにはまださう熟練していないことも考へてやらねばならないのである。然るに話の筋から味を出そうとすると、日本人は、今までまだやったことのない新しい工夫をしなければならなかったのである。

これはかなり以前に発表されたものであるが、私は大和物語という作品に接するたびに、このお考えが私の脳裏を離れなかった。本稿を成そうとしたのも多分にこのことが原因になっている。事実、大和物語の後半の章段は氏のお考えに一致すると思われるところが少なくないようだ。

さて、その後半にある一六〇段から一六六段は在中将、即ち在原業平に関する話を載せている。大和物語の作者がこれらの章段を構成するにあたって、何をもとにしたかは諸説あり、にわかに断定しがたい。ここではそれについて考え、これをもとにして大和物語の在原業平関係章段の性格についても追究したいと思う。⁽²⁾

これらの章段において、大和物語と伊勢物語とが内容上、ほぼ共通しているものとして、一六一・一六二・一六三・一六四の各章段があげられる。今、これらと共通する伊勢物語や古今集と比較してみると次のようになる。

| 古今集 | 伊勢物語 | 大和物語 |
|--|---|--|
| <p>二条のきさきの、まだ東宮のみ やすん所と申しける時に、おほ はらのにまうでたまひける日よ める</p> <p>なりひら朝臣 おほはらやをしほの山もけふこそ は神世のことも思ひいづらめ</p> | <p>むかし、おとこありけり。懸相 じける女のもとに、ひじきものと いふ物をやるとて、 思ひあらば葎の宿に寝もしな んひじきのものには袖をし つゝも</p> <p>二條の後のまだ帝にも仕うまつり 給はで、たゞ人にておはしましけ る時のこと也(三段)</p> <p>昔、二條の後の、まだ春宮の御 息所と申ける時、氏神にまうで給 けるに、近衛府にさぶらひける翁 人々の禄たまはるついでに、御車 よりたまはりて、よみて奉りける。 大原や小塩の山もけふこそは 神世のことも思出づらめ</p> | <p>在中将、二條の後の宮まだ帝に もつかうまつり給はで、たゞ人に おはしましける世に、よばひたて まつりける時、ひじきといふもの をこせて、かくなむ、 おもひあらばむぐらの宿に寝 もしなむひじき物には袖をし つゝも</p> <p>となむのたまへりる。かへしを、 人なむすれにける。 さて、後の宮、春宮の女御とき こえて大原野に詣で給ひけり。御 供に上達部・殿上人いと多くつか うまつりけり。在中将もつかうま つれり。御車のあたりに、なま暗 き折にたてりけり。宮しろにてお</p> |

人のせんざいにきくにむすびつ
けてうへけるうた
在原なりひらの朝臣
うへしうへば秋なき時やさかさ
らん花こそちらめねさへかれめや

昔、おとこ、人の前裁に菊うへ
けるに、
植へし植えば秋なき時や咲か
ざらん花こそ散らめ根さへ枯
れめや (五一 段)

在中将に、後の宮より菊召しけ
れば、奉りけるついでに
植へし植へば秋なき時や咲か
ざらむ花こそちらめ根さへ枯
れめや

とて、心にもかなしとや思ひけ
ん、いかゞ思ひけん、知らずかし。
(七六 段)

ほかたの人々祿たまはりて後なり
けり。御車のしりより、たてまつれ
る御単衣の御衣をかつけさせたま
へりけり。在中将たまはるまゝに、

大原やをしほの山も今日こそ
は神代のことをおもひいづら
め

としのびやかにいひけり。昔をお
ぼしいでておかしとおぼしけり。

(二六一 段)

又、在中将、内にさぶらふに、
宮すん所の御方より、忘れ草をな
む「これは何とかいふ」とてたま
へりければ、中将、

わすれぐさおふる野辺とはみ
るらめどこはしのぶなり後も
たのまむ

となむありける。同じ草を忍ぶ草、
忘れ草といへば、それよりなむよ
みたりける。(二六二 段)

忘れ草生ふる野べとは見ら
めどこは偲ぶなり後もたのま
ん (二〇〇 段)

むかし、おとこ、後涼殿のはさま
を渡りければ、あるやむことなき
人の御局より、「忘れ草を忍ぶ草
とやいふ」とて、いださせ給へり
ければ、たまはりて、

| | | |
|--|---|---|
| | <p>むかしおとこありけり。人のも とよりかざり粽をこせたりける返 事に、 あやめ刈り君は沼にぞまどひ ける我は野に出でてかるぞわ びしき とて、雉をなむやりける。(五二段)</p> | <p>と書いつけて奉りける。(一六三 段) 在中将のもとに、人の飾粽を こせたりけるかへりごとに、かく いひやりける、 あやめかり君は沼にぞまどひ ける我は野にいでてかるぞ わびしき とて、雉をなむやりける。(一六四 段)</p> |
|--|---|---|

(注) 本文はすべて『日本古典文学大系』に拠った。以下も断らない限り同様。

大和物語一六一段には伊勢物語三段と七六段が共通している。この章段の成立や内部の異同についての考察は、今井源衛氏が

伊勢三段の業平と高子との若年の恋と、同七六段の後年の逸話を結びつけて新しい一つの物語を作ろうとする試みは、初期の物語作者として、
 さまありそうなことであり、ために、後半ではむしろ意識的に伊勢に反する形を工夫したのではなからうか。(中略) もともとこの全体の内容は、
 二首の歌を頂点とする男の恋情にあること明らかで、伊勢のような結末こそこれにふさわしいものであるにかかわらず、大和では、この結果によつて、この一段は、
 純粹な情感の物語ではなく、一個の風流の物語に転じている。というよりも、それは貴人の嘆賞によつて話を目出度いものに
 仕立て上げようとする權威主義、あえていえば非文学的な通俗性に基くものというべきであろう。⁽³⁾

と述べられていることに尽きよう。ただ、ここでは氏とは別の面から少し考えてみたい。

前半の「思ひあらば」の歌を贈る場合の表現をみるに、伊勢物語は「やる」となっているのに対し大和物語では「をこせて」となっている。これはすでに指摘されていることであるが、登場人物の主体が誰にあるのかも関連してくるように思う。即ち前者は「やる」ものである「おとこ」にあるが、後者は贈られた二條后の方にある。大和物語の冒頭部分はどうも文脈の通りがよくない。それというのも、あそこに「をこせて」とあるからである。しかし、「思ひあらば」の歌は大和物語でも在中将の歌ととれないこともない。ただ、そうすると、この歌の後に「となむのたまへりける」とあつて尊敬語が用いられており、引つかかる。在中将関係の章段において彼の動作には尊敬語を使用していないからである。

確かに、この歌を在中将の歌とみないとおかしいという意識を他の伝本によつては窺い知ることができる。大和物語の異本である御巫本、鈴鹿本では「をこせて」の部分の部分が次のようになっていいる。

たてまつり給ひて（御巫本）

たてまつりて（鈴鹿本）

御巫本と鈴鹿本は「となむのたまへりける」を持っていない。これらの現象から次のようなことが言えるのではないか。

御巫本と鈴鹿本は「となむのたまへりける」を除去して「をこせて」の部分を作成したのであろう。両本は「たてまつる」という、いかにも高貴な人に差し上げるといふ表現に改めている。しかし、御巫本は表現は多少異なるが「給ひて」とあり、これは「のたまへりける」の尊敬語を残したのであろう。鈴鹿本は在中将に敬語を用いるのはおかしいと思つてか、それをも使用していない。ここは流布本↓御巫本↓鈴鹿本という過程を推測できよう。このように御巫本、鈴鹿本が生成された頃からもここを在中将にとることに疑問を抱いていたようである。

しかし、これらはあくまでも本文の流れであり、大和物語の作者は改変したのである。それは創作意識の現れであり、このことは以下の本文にも波及していると思われる。「かへしを、人なむすれにける」という本文は在中将の返し歌について説明しているものであり、たとえ、返し歌の有無が現在はずきりしないにしても、彼を少しでも注目させようとしたのであろう。後半にいくと、二條后が大原野に詣で、そのお供に上達部や殿上人などがつき従い、そこに在中将も同行し、彼については「在中将もつかうまつれり」（傍点は稿者、以下同様）と何か付け足した表現になっている。その後の「御車のしりより、たてまつれる御単衣の御衣をかげさせたまへりけり」は二條后の行動を示す本文である。さらに段末の本文にいくと、伊勢物語は翁の心中を述べているが、大和物語では在中将の気持を「しのびやかにいひけり」と簡略にし、その後「昔をおぼしいでおかしくおぼしけり」がある。これは二條后の感慨を述べたものである。今井氏は伊勢物語の「いかゞ思ひけん、知らずかし」が大和物語の「かへしを、人なむすれにける」になつたらしいと言われるが、むしろこれは伊勢物語の「心にもかなしと思ひけん、いかゞ思ひけん、知らずかし」が大和物語の「しのびやかにいひけり」となつているのであつて、その後の「昔を云々」は大和物語作者の付加ととりたいたのである。

一六二段は伊勢物語九九段と共通している。両者は内容的にほとんど変わらないが、大和物語は段末に「同じ草を忍ぶ草、忘れ草といへば、それよりになむよみたりける」という本文を持つていいる。この点に關し、今井氏は次のように述べておられる。

大和作者は（中略）「忘れ草を忍ぶ草とやいふ」を女の言葉と誤解したのである。段末の「同じ草をしのぶ草といへば」の文字は、その誤解を正当づける為の強弁だつたのではあるまいか。ともかくそのままに受取るわけにはいかない。⁽⁶⁾

このことから付加されたものであることには疑う余地がない。それにしてもなぜ段末にそのような本文を持つてきたのであろうか。これは前の部分に異同があることと無関係でないようだ。即ち伊勢物語で「忘れ草を忍ぶ草とやいふ」のところが大和物語では「忘れ草をなむこれは何とかいふ」となっている。今井氏の言われたように伊勢物語の「忘れ草を忍ぶ草とやいふ」を女の言葉と誤解したのである。しかも伊勢物語のようだと「忘れ草」の歌と重複している感じで、少し唐突な感じを受ける。その点、大和物語は話の流れがスムーズである。おそらく、このような点を考慮して一部分改めたのであろう。しかし、大和物語の作者が忘れ草と忍ぶ草を同一にみていることは、この物語の欠点と言わねばなるまい。

一六三段をみると、古今集と伊勢物語が近く、大和物語はこれらから離れている。山田清市氏は、古今集が改変し、大和物語の方が原型を伝えているとみておられる。⁽⁷⁾ はたしてそうであろうか。これはここからだけでなく、前後の章段、とりわけ業平関係の章段を考慮して考えるべきであろう。一六三段をみると「後の宮より菊召しければ」とあるから、菊の花を差し上げた時に歌を添えたのである。後の宮は前の章段から考えて二條后を示しているのであろう。しかも、ここは古今集や伊勢物語に比較すると作歌事情が詳しくなっている。これは先程の一六一段なども共通しており、偶然とは言えない面があろう。

しかし、次の一六四段をみると両者はほとんど変わらない。大和物語で在中将の相手も単なる「人」になっている。思うに、これは今井氏が指摘されたように場面状況を考慮してそのままにしたのかもしれない。⁽⁸⁾

一六一、一六二、一六三、一六四の各章段をみてきたが、これらの中では伊勢物語とほとんど変わらないものもあるが、おおむね大和物語の方が人物描写、作歌事情等において詳しくなっていた。これは大和物語の作者により意図的になされたものであろう。そして、一六二段と後述の一六六段は伊勢物語九九、一〇〇段と共通しており、さらに一六三、一六四段も伊勢物語五一、五二段と共通している。ここで注目すべきは伊勢物語において連続している章段が大和物語と共通していることである。これは大和物語の作者が構成するにふさわしい章段を伊勢物語から持つてきたことを証明している。

三

しかしながら、一六五、一六六段についてはどう考えたらよからうか。これらの章段は伊勢物語と部分的に共通しているだけで、一概にこれから大和物語がとり入れたとは言えないのである。事実、これらについても後述するように考えが分かれている。そこで、これから、この二章段をみていくわけであるが、私自身、これを解く鍵は一六六段にあると考えている。それゆえ、まず一六六段を、次いで一六五段をみていく。一六六段は多くの作

品と共通している。問題となる部分に限ってそれらを比較してみると次のようになる。

| | | | | | | | |
|-----|--|---|--|--|--|--|--|
| 古今集 | 在原業平朝臣 見ずもあらず みもせぬ人の こひしくはあ やなくけふや ながめくらさ ん かへし よみ人しらず | 伊勢物語(天福本) | 伊勢物語(為家本) | 大和物語(為家本) | 大和物語(勝命本) | 大和物語(御巫本) | 大和物語(鈴鹿本) |
| | しるしらぬな にかあやなく わきていはん おもひのみこ そしるべなり けれ | 知る知らぬな にかあやなく わきていはん 思ひのみこそ しるべなりけ れ | 見もみずもだ れとしりてか 恋らるゝおぼ つかなみのけ ふのながめや またおとこか へし しりしらすな にかあやなく わきてはん思 ひのみこそし るべなりけれ | 見もみずもだ れとしりてか こひらるるお ぼつかなさの けふのながめ や みもみずも誰 としりてかこ ひらるるおぼ つかなみのけ ふのながめや 古今には返哥 云 | みもみずも誰 としりてかこ ひらるるおぼ つかなみのけ ふのながめや や 見もみずもだ れとしりてか こひらるるお ぼつかなさの けふのながめ や | みもみずも誰 としりてかこ ひらるるおぼ つかなみのけ ふのながめや や 見もみずも誰 としりてかこ ひらるるおぼ つかなみのけ ふのながめや 古今には返哥 と云々 | みもみずも誰 としりてかこ ひらるるおぼ つかなみのけ ふのながめや や 見もみずもだ れとしりてか こひらるるお ぼつかなさの けふのながめ や |

(注) 本文に空白があるのは、比較しやすいように同じ歌の上に記したことによる。

これらを見ると、相互に何等かの関係があることは否定できないだろう。そこで、この章段に関する先学の考えをみることにする。古く、賀茂真淵は『大和物語直解』において、

此女のかへし、古今にも伊勢物語にも有て、いとよき歌なり。こゝに出せるは、歌もよまぬ人のいひたる事にて、わろし。おぼつかなみのとある、みの詞、かゝる所におくべき事ならぬをもわきまへぬこの歌なり。

と述べている。高橋正治氏は顕昭の『古今集註』に「但普通伊勢物語二八、古今ノマヽノ贈答也。普通ナラヌ本二八、此歌ノ返歌ヲ、女ノ返シトテ、ミモミヌモタレトシリテカコヒラルヽオボツカナミノケフノナガメヤ。又オトコ返シ、シルシラヌナニカアヤナクワキテイハムオモヒノミコソシルベナリケレ。」〔続々群書類従(5) 歌文部〕に拠るとあることから、こゝでいう「普通ならぬ本」と大和物語は関係が深く、このような本から移入されたものではないかと推測されている。⁽⁹⁾ また山田清市氏は

六条家本の御巫本によれば、三首目の歌は本文中に折りこまれ、勝命本によれば、三首目の歌の前に「古今には返歌云いずれの本にもなし」と傍注している点を注目するならば、本来の形態は為家本の二首が原型で、しかも大和の二首目の返歌と古今の返歌とは相違しているため、六条家本系は古今の返歌を三首目にならべて附載したのではないかと推定されるのである。二条、六条家本両者の相違はかく考え得るとしても、古今と大和の返歌の本質的な相違は不可解である。両者の原拠のものが同類のもの、業平集に依拠していると考えた場合、返歌が全然相違する二種の業平集を想定することは困難であり、且又、大和物語の作者の創作とも考えにくいとしたら、或いは両者原拠の業平集に返歌が二首存在し、両者はそれぞれ一首を採録したのではないかと考えられてくるであろう。

と述べておられる。⁽¹⁰⁾

さらに今井氏は先程の真淵の説を批判し、古今集や伊勢物語のような贈答では明らかに飛躍があり、むしろ大和物語の方が自然であるとみておられる。そして、これらの関係について次のように述べておられる。

古今集や伊勢物語の形は、中間の女の「見も見ずも」の歌を脱落したのではなからうか。それに対して、大和物語では、男の「みずもあらず」の次に女の「見も見ずも」が続く点では順序は誤っていないが、この場合には、男がさらに言い返した「しるしらぬ」を切り落としてしまったらしい。巫本はたまたま原型を残し、勝命本も同様であるが、注記によれば、親本には「しるしらぬ」の歌はなかったのを、後に古今集を見て付け加えたものと察せられる。⁽¹¹⁾

以上のように大和物語諸本のいずれが原型に近く、何をもとにしてできたかについては対立している。それに大和物語の研究において鈴鹿本はそれほど用いられていないが、これも含めて考えるべきであろう。

さて、この一覧表を見ると古今集、伊勢物語（天福本）、大和物語（為家本）の歌は二首であるのに対し、これらを除いたものはすべて三首になっている。当然のこととして我々は歌数の少ない方をもとの姿と考えがちである。事実、大和物語の勝命本、御巫本、鈴鹿本において「しるしらぬ」の歌はただ漠然と並べられているだけで、あまりにも不自然である。勝命本は山田、今井両氏の如く古今集をみての付加であろう。御巫本はどうか。勝命本のように注記でもあればよいが、実はそれがみられるのである。「古今には返哥と云々」とあるのがそれである。勝命本の注記に近似しているが、どのような関係にあるかは明らかではない。ただ、「…と」とあるから何かあったのを引用したのではなからうか。しかもこの注記は「みもみずも」の歌の前に記されている。これは明らかに誤りであり、書写する際に錯覚が生じたものである。御巫本と鈴鹿本はかなり近似しているが、鈴鹿本には同じ注記が記されていない。ただ、鈴鹿本、御巫本については別稿でも述べたように大和物語の原型を伝えているとは考えられない。むしろ大和物語の伝流を考えて行く上で貴重な伝本というべきであろう。これらのことから勝命本、御巫本、鈴鹿本はいずれも大和物語の原型から離れていると推測してよからう。

ところで、為家本伊勢物語はどうであろうか。これと在中将集が共通していることから、片桐洋一氏は在中将集の出典がこの為家本伊勢物語ではないかと考えておられる。⁽¹³⁾ また今井源衛氏は為家本伊勢物語の方が古今集、流布本伊勢物語よりもこの贈答歌の原型を残し、その原型から伊勢物語、古今集の形と大和物語の形との二つに岐れたと推定されている。⁽¹⁴⁾

一方、山田清市氏によれば、為家本伊勢物語の「しるしらぬ」の歌は古今集では「読人しらず」とあることから、為家本伊勢物語の改変とみておられる。そして、為家本は古今集よりも大和物語と深い関係のあることを指摘され、為家本伊勢物語は大和物語を典拠にして「女」の返し歌を「業平」と誤って構成したものと考えておられる。⁽¹⁵⁾

在中将集の出典が為家本伊勢物語であることは考えられるにしても、この本から流布本伊勢物語や古今集、さらに大和物語ができたというのは納得できない。特に為家本伊勢物語から大和物語ができたなどというのはなおさらのことである。山田氏の指摘されたように「しるしらぬ」の歌が古今集では「読人しらず」となっていて、これが返歌で、女性の歌なのに為家本伊勢物語では「おとこ」となっていることによってもおかしい。ともかく、ここにも限り為家本伊勢物語は後世のものとみなざるを得ないであろう。

こうみてくると、根源的なものとして、ひとつは大和物語（為家本）と古今集・伊勢物語（天福本）の系統が考えられよう。しかしながら古今集は

伊勢物語と近いが、どのような関係にあるかは明らかでない。

それにしても何故に大和物語「見もみずも」の歌になつていたのであろうか。確かに「原撰業平集」なるものを想定すれば、合理的に考えることができる。だが、我々は現在それを見ることのできないし、もしかすると現存しないかもしれない。そこで、視点を変えて一六六段をみると、どうも別の考えができそうなのである。再度、一六六段と伊勢物語九九段を比較してみる。

| 伊勢物語 | 大和物語 |
|--|--|
| <p>むかし、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顔の下簾よりほのかに見えければ、^①中将なりけるおとこのよみてやりける</p> <p>見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日 やながめ暮さん 返し</p> <p>知る知らぬなにかあやなくてわきていはん思ひのみこそしるべなりければ 後は誰と知りにけり。</p> | <p>在中将物見にいでて女のよしある車のもとにたちぬ。下簾のはざまより、この女の顔いとよくみてけり。物などいひかはしけり。これもかれもかへりて、あしたによみてやりける。</p> <p>みずもあらずみもせぬ人の恋しきはあやなく今日 やながめくらさむ とあれば、女、かへし、 見もみずも誰としりてか恋ひらるゝおぼつかなきの今日のながめや とぞいへりける。これらは物語にて世にあることどもなり。</p> |

(注) 傍線と①②は稿者が付したものである。

「知る知らぬ」の歌と「見もみずも」の歌のみならず、細部においても少なからず異同がみられる。まず①をみると伊勢物語で「車」のところが大和物語では「よしある車」となつてゐる。おそらく、これは前の章段から察して二條后を暗示させているのではなからうか。さらに②をみると両者は全く反対になつてゐる。これは次の「見ずもあらず」の歌を考慮すると、女性の正体はつきりと誰であるかわからなかつたために「見ずもあらず云々」と言つたのであろう。そして、伊勢物語では最後にその正体が判明し「後は誰と知りにけり」となつてゐるのであろう。大和物語のようだと、この男

がかなりのやり手で相手に対しからかい半分で詠んだとしか思われない。その点、伊勢物語は中将なりける男の一途さが出ている。

この歌に対して伊勢物語では「知る知らぬ」の歌を、大和物語では「見もみずも」の歌を女が詠んでいる。大和物語のこの歌で注目したいのは二句目に「誰としりてか」とあることである。もちろんこれは前に「いとよくみてけり」とあるからこうなつていても不自然ではないが、これが伊勢物語の段末の本文と共通しているのである。これは偶然とは言えない。何らかの関係を認めるべきであろう。大和物語が伊勢物語と同じように後に「後は誰と知りにけり」という本文を持っていたならば、前に「いとよくみてけり」とあるから内容上、矛盾する。それを解消するために「見もみずも」の歌にしたのであろう。そして、この歌は伊勢物語の「後は誰と知りにけり」の一部を盛り込んで、作者の創作とみてよいのではあるまいか。

そもそも、こうしたのは女をはつきりと表すためにほかならない。こうするために種々の異同を生じているのであろう。大和物語の作者は高貴な女性を明示したかったのであろう。これは前述の一六一段において、大和物語が大きく改変していることも共通している。先程、為家本伊勢物語は後世のものと推測したが、もし、為家本伊勢物語から伊勢物語、大和物語ができたとするならば、「後は誰と知りにけり」は「見もみずも」の歌の一部から地文に持ってきたことになる。しかし、この章段には「いとよくみてけり」、「よしある車」等にみられるように意図的になされたものがあるから、やはり否定すべきであろう。前述したように今井氏は伊勢物語の贈答には飛躍があつて無理とされ、むしろ大和物語の方が自然とみておられる。思うに、これは両者の作者の意図を理解してから発言すべきであるまいか。女性の正体の有無が歌や地文にも反映していると考えるべきであろう。なお、大和物語では伊勢物語の最後の本文を持っていない代わりに「これらは物語にて世にあることどもなり」という本文がある。「物語にて云々」とあること自体、「原撰業平集」なるものをもとにしたのではなく、伊勢物語をもとにして構成したということを実に物語っているのではないか。だが、この「物語」については「原撰業平集」からの発展過程の一段階の伊勢物語という考えがある。⁽¹⁶⁾この考えが妥当であるならば、一六六段での私の考えは否定されよう。しかし、ある意識的な改変は認めるべきであり、まして意図的な改変が多い一六六段の後に置かれていることは、伊勢物語のままではないということを言っているのであろう。前述の一六一段は伊勢物語の三段と七六段が合わされて一章段となったものである。これも正確に言えば、現存の伊勢物語とは異なる。このようなことからこの「物語」は漠然ととらえて言っているのであろう。

ともあれ、以上のようなことから両者が「原撰業平集」から生成したという考えは否定すべきであろう。大和物語は伊勢物語を改変したと推測される。そうすると一六五段はどうか。これと伊勢物語一二五段を比較してみよう。

| 伊勢物語 | 大和物語 |
|--|---|
| <p>むかし、おとこ、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、 つみにゆく道とはかねてきゝしかどきのふ今日とは思はざりしを</p> | <p>水の尾の帝の御時、左大弁のむすめ、弁の宮すん所とていますかりけるを、帝御ぐしおろしたまうて後にひとりいますかりけるを、在中将しのびてかよひけり、中将病いと重くしてわづらひける、もとの妻どももあり、これはいとしのびてあることなれば、え行きも訪ひ給はず、しのびしのびになむとぶらひけること日々ありけり。さるにはぬ日なむありける。病もいと重りて、その日になりけり。中将のもとより、 つれづれといとど心のわびしきに今日とははずてくらしむとや とてをこせたり。弱くなりたりとていといたく泣きさはぎて、かへりごとなどもせむとする程に死にけりと聞きて、いとみじかりけり。死なむとすること今々となりてよみたりける、 つみにゆくみちとはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを とよみてなむ絶えはてにける。</p> |

伊勢物語との共通歌は後の方にあるにすぎない。この章段について今井氏は「つれづれ」との歌を有名な「つみにゆく」の歌とともに一箇所にまとめて業平の死をより哀切に、色どり豊かにするのが作者の意図ではなかったかと述べておられる。⁽¹⁷⁾ 妥当なお考えと思う。それにしても、「つれづれ」との歌をどう考えたらよかろうか。この歌は現存する文献の中で在中将集、雅平本業平集の中にみられるが、これらは大和物語より後の成立であり、かつ伊勢物語や大和物語をもとに編纂されたものと言われている。⁽¹⁸⁾ それゆえ、今の段階では、大和物語が古い姿をとどめると言ってもよからう。

では、この歌は作者の創作によるものか、それとも「原撰業平集」なるものにあつたのを移入されたかであるが、今井氏は在中将集、雅平本業平集での「つれづれと」と「つるにゆく」の歌の位置が離れていることから、同一の原材料が家集と大和物語に流れ込んでそれぞれの形をとつたのではないかと推測された⁽¹⁹⁾。確かにそう考えられるかもしれない。しかし、これは在中将集や雅平本業平集の編纂にも関係することであり、一つの章段にある数首の和歌を分散することは考えられないこともない。それに両者の歌の詞書をみると大和物語を簡略にしたようになってい

それと、この章段を読んでみて感ずることだが、どうも前後の続き具合がすつきりしない。弁の御息所が「かへりごとなどもせむとする程」に在中将は死んでしまったのである。なのに後に「死なむとする今々となりてよみたりける」とある。時間的なだぶつきや場面の移り変わりに不自然さを感じる。これは何に起因しているのであろうか。大和物語の作者はよりいつそう哀切感を出すために付加したのであろうが、それを無理にしたことと作者の創作力の不足が伴い不自然さを生じたのであろう。そして一六一段のように他の章段をもつてきて付加すれば、問題も少ないが、おそらくここは「つれづれと」の歌が創作されたのではなからうか。これは先程の一六六段や後述する一六一段などからも予想されることであらう。

以上のことは憶測の域を出ないものであるが、種々の面においてこの章段は考える余地があると思われる。

四

さらに一六〇段であるが、これは現存の伊勢物語諸本とは共通せず、後撰集とその一部が共通している。両者を比較してみると次のようになる。

| 後撰集 | 大和物語 |
|---|---|
| 女のもとよりふん月許にいひをこせて侍ける よみ人しらず 秋はぎを色どる風の吹きぬればひとの心もうたがはれけり 返し 在原業平朝臣 あき萩を色どる風のふきぬとも心はかれし草はならねば | 同じ内侍に在中将すみける時、中将のもとによみてやりける、 秋はぎを彩る風の吹きぬれば人の心もうたがはれけり とありければ、かへし、 秋の野をいろどる風は吹きぬとも心はかれし草葉ならねば |

となむいへりける。かくて住まずなりて後、中将のもとより衣をなむ、しにをこせたりける。それに「あらはひなどする人なくていとわびしくなむある。なを必ずして給へ」となむありければ、内侍、「御こゝろもであることにこそはあなれ。

大幣になりぬる人のかなしきはよるせともなくしかぞなくなる」

となむいひやりたりける。中将、

ながるともなにかみえむ手にとりてひきけむ人ぞ幣としるらむ

となむいひける。

(注) 後撰集の本文は天福本による。濁点は稿者が施した。

前半の二首が共通しているが、大和物語では、二首目の初句が「秋の野を」となっている⁽²⁰⁾。おそらく、これはともに「秋はぎを」で統一されていたのであろうが、大和物語はそれを改変したのであろう。ただ、これが現存の後撰集からそうしたものか、それとも両者に共通する資料があつて、それからしたものかは明らかではない。しかし、後半の二首は大和物語のみが持つているもので、これが在中将に関したことであるから、「原撰業平集」からとり入れられたという考えが生じるのも当然である。

ところが、今井源衛氏は別の考えを示された。即ち、

この古今集・伊勢の話(稿者注、古今集巻四にある歌と伊勢物語四七段を指す)と本段の「大幣の」の贈答との類似性は明らかであるが、これはやはり、大和物語作者が伊勢物語を模倣したものとみるべきものであろう。「よるせともなくしかぞなくなる」という女の非難のしかたは、古今、伊勢の「つひによる瀬はありてふものを」という業平の返歌をさらに切り返している趣きがある。(中略)古今・伊勢の贈答歌の歌意明白でしかも古樸優雅な声調の中に余情掬すべきものがあるのに対して、本段の二首は歌意も晦渋であり、用語もあいまいで歯ぎれも悪く、「流るとも」の如き情感のゆたかな歌の多い業平のものらしくなく、二番煎じの感が覆い難いのであり、私は大和作者の創作の匂いを感じるのである。⁽²¹⁾

と述べておられる。ここで注目すべきことはこれら二首を創作でないかとしておられることである。実は私もこれに賛成である。このことは前述の

一六六段から考えても当然であり得ることであろう。それとこの一六〇段を読んで感ずることは「かくて住まずなりて」を前後にして二つの話が付け合わされているように思われることである。しかも後半は大和物語二七段の発想に似ている。⁽²⁾ただ、これについては今井氏も指摘されているが、その関係を否定されている。私はこの章段を虚構でとらえるならば、むしろその関係を認めるべきであろうと思う。

そもそも、一六〇段はどのような位置にある章段なのであるか。これの前後の章段の登場人物をみると

一五九段…染殿内侍 能有の大匠

一六〇段…染殿内侍 在中将

一六一段…在中将 二條后

一六二段…在中将 御息所の御方

一六三段…在中将 後の宮

一六四段…在中将 人

一六五段…在中将 弁の御息所

一六六段…在中将 女

のようになる。一五九段が染殿内侍の話、次いで一六〇段が彼女と在中将の話になり、一五九段では、染殿内侍は歌を詠んでいないが、ここは彼女も詠んでいる。さらに一六一段以降は在中将と二條后をはじめ、他の女性の話へ移っていく。このように主人公をもとにして連想でもって章段が構成されている。

大和物語の作者は染殿内侍と在中将に関する話を描きたかったのである。しかも、このあたりは連想によってなされているから、もしも一六〇段がなかったとしたらどうか。章段の移行が唐突すぎはしまいか。連想によって、しかも章段間をスムーズにするためにはどうしても一六〇段が必要だったのである。思うに一六〇段は後撰集とはつきり断定できないにしてもそれらの如きものを資料として前半を、さらに後半は創作によってそれぞれ構成したのであろう。そして、少なくとも「原撰業平集」から移入されたという考えは改めるべきであろう。

五

大和物語の作者は当時を代表する色好みの一人である業平を登場させたかったのである。一六一段から一六六段はその資料を伊勢物語に求め、一括して移入したのである。さらに一六〇段は後撰集の如きものを資料にして、前後の章段を考慮し、移入したのである。ただ、これらの章段の多くはそのままとり入れられているのではなく、細部にわたって潤色を加えている。このことは大和物語の虚構性ということにも関連してこよう。これはまた大和物語が必然的に辿る道であったと思われる。しかし、虚構ということは大和物語のどのあたりまで広げるかは今後に待つべき問題であろうが、少なくともここで述べた業平関係の章段はその方針で構成していったのであろう。

従来、大和物語は歌物語というものの後半は多分に説話的な要素を多く持つていられると言われてきた。業平に関する章段が一括して後半にあつてこのような方法をとっていることは大和物語の性格を探る上で注目すべきことであらう。

注(1) 「国文学解釈と鑑賞」3巻4号 昭和13年4月。

(2) 本稿では在原業平関係章段としたが、彼はこの外、一三三、一四四段にも出てくる。また一四九段も伊勢物語と共通しているが、ここでは対象にしない。これらについては今後の課題にしていきたい。

(3) 「大和物語評釈・五十 在中将」(「国文学」11巻11号 昭和41年10月 後に『大和物語評釈 下巻』(笠間書院 平成12年2月)に再録)

(4) 『鑑賞 第五巻 日本古典文学 伊勢物語・大和物語』(角川書店 昭和50年11月)

(5) 注(3)に同じ。

(6) 「大和物語評釈・五十一 忘れ草」(「国文学」11巻13号 昭和41年11月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録)

(7) 「大和物語における伊勢物語関係章段について」(「平安朝文学研究」9号 昭和38年7月 後に『伊勢物語の成立と伝本の研究』(桜楓社 昭和47年4月)に再録)

(8) 注(6)に同じ。

(9) 『大和物語 塙選書』(塙書房 昭和37年10月)

- (10) 注(7)に同じ。
- (11) 「大和物語評釈・五十二 在中将(続)」(『国文学』11巻14号 昭和41年12月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録)
- (12) 「鈴鹿本大和物語考(上)、(下)」(『語文』46、49輯 昭和53年12月、昭和54年12月 後に『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録。本書第一章第三節。
- (13) 「在中将集成立存疑―藤原定家の王朝文学研究―」(『国語国文』26巻2号 昭和32年2月 後に『伊勢物語の研究(研究篇)』(明治書院 昭和43年2月)に再録)
- (14) 注(11)に同じ。
- (15) 注(7)に同じ。
- (16) 『日本古典文学大系大和物語』補注一六二。
- (17) 注(10)に同じ。
- (18) 鈴木知太郎氏「在中将集の成立について」(『文学』4巻1号 昭和11年1月 後に『平安時代文学論叢』(笠間書院 昭和43年1月)に再録)
- (19) 注(11)に同じ。
- (20) 後撰集の諸本は「あきはぎを」となっている。ただし、天福本は「あき萩を」と異同がある。
- (21) 「大和物語評釈・四十九 染殿の内侍」(『国文学』11巻10号 昭和41年9月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録)
- (22) 「かいせうといふ人、法師になりて、山にすむあひだに、あらはひなどする人のなかりければ、親のもとに衣をなむあらひにをこせたりけるを、いかなる折にかあらむ、むづかりて、「おやはらからのいふこともきかで法師になりぬる人は、かくうるさきこといふものか」といひければ、(以下、省略)」
—大和物語二七段—

第二節 大和物語における虚構の方法

— 一四一・一四二・一五四段を例にして —

—

大和物語についての研究は伊勢物語の華やかさに比べそれほど活発ではなかった。しかし、近年に至り人物考証をはじめとして種々の面から考察され、その価値が見直されるようになってきた。特に大和物語は歌語りの集成と言われ、その内容を前半と後半に分けることができる。⁽¹⁾とりわけ後半は説話的色彩が濃く、著名な伝説もみられる。しかもここには虚構の章段も存在するようである。もしそれが事実であるならば、これらの章段から大和物語生成の一面を見ることが可能かもしれない。

そこで、ここではそれらの章段を創作する場合、どのような方法をとっているのか、特に前後の章段との関係、構成意識、さらにはこれらの章段と語りとの関係等について、後半の中でもいわば無名章段に近い一四一、一四二、一五四の三章段を考察の対象にして一つの問題提起を試みたいと思う。

—

まず、章段の順序からいうと逆になるが、論述の都合で一五四段からみていきたい。今、便宜上、一五五段と比較しておく。

| | |
|----------------------------|------------------------------|
| 一五四段 | 一五五段 |
| 大和の国なりける人のむすめ、いとよらにてありけるを、 | 昔、大納言のむすめいとうつくしうてもちたまふたりけるを、 |

| | |
|---|--|
| <p>京よりきたりける男のかいまみて見けるに、いとおかしげなりければ、ぬすみてかき抱きて馬にうちのせて逃げていにけり。いとあさましうおそろしう思ひけり。日暮れて立田山にやどりぬ。草のなかにあふりをときしきて、女を抱きて臥せり。女、恐しと思ふことかぎりなし。わびしと思ひて、男の物いへど、いらへもせで泣きければ、男、</p> <p>く たがみそぎゆふつけどりか唐衣立田の山におりはえてなく</p> <p>女、かへし、</p> <p>立田川いはねをさしてゆく水の行方もしらぬわがごとやなく</p> <p>とよみて死にけり。いとあさましうてなむ、男抱きもちて泣きけり。</p> | <p>帝にたてまつらむとてかしづきたまひけるを、殿にちかうつかうまつりける内舎人にてありける人、いかでかみけむ、このむすめをみてけり。顔容貌のいとうつくしげなるをみて、よろづのことおぼえず、心にかゝりて、夜昼いとわびしく、やまひになりておぼえければ、「せちにきこえさすべき事なむある」といひわたりければ、「あやし。なにごとぞ」といひていでたりけるを、さる心まうけて、ゆくりもなくかき抱きて馬にのせて、陸奥国へ、よるともいはずひるともいはず逃げて往にけり。安積の郡安積山といふ所に庵をつくりてこの女を据へて、里にいでつゝ物などは求めてきつゝ食はせて、とし月を経てありへけり。この男往ぬれば、たゞ一人物もくはで山中にゐたれば、かぎりなくわびしかりけり。かゝるほどにはらみにけり。この男、物求めいでにけるまゝに三四日ござりければ、まちわびて、たちいでて山の井にいきて、影をみれば、わがありしかたちにもあらず、あやしきやうになりけり。鏡もなければ、顔のなりたらむやうもしらでありけるに、俄にみれば、いと恐しげなりけるを、いとほづかしとおもひけり。さてよみたりける、</p> <p>あさかやま影さへみゆる山の井のあさくは人を思ふものかは</p> <p>とよみて木にかきつけて、庵にきて死にけり。男、物などもとめてもてきて、しにてふせりければ、いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌をみてかへりきて、これをおもひ傍にふせりて死にけり。世のふることになむありける。</p> |
|---|--|

(注) 本文は『日本古典文学大系』に拠る。以下も同様。

この章段が虚構であることはすでに指摘されており、その根拠として「たがみそぎ」の歌が古今集にあることをあげている。もちろんこれは納得すべきことなのであるが、それを含めてここは一五五段との関係から考えるべきではないかと思う。この二つの章段は内容が似通っている。即ち男が人の娘を盗み出し山中に籠り、女は死に男は悲嘆にくれ、あるいはその後を追って死ぬという筋書である。このように類型的な章段は外にもみられるが、一五四段と一五五段はそれ以上に近似している。今、両章段の本文において近似しているものと異なっているものとを一覧表にしてみる。

| 番号 | 一五四段 | 一五五段 |
|------|---------------------|--------------------|
| (1) | 大和国なりける人のむすめ | 大納言のむすめ |
| (2) | いときよらにて | いとうつくしうて |
| (3) | 京よりきたりける男 | 内舎人 |
| (4) | かいまみてけり | いかでかみけむ、このむすめをみてけり |
| (5) | いとおかしげなりければ | いとうつくしげなるをみて |
| (6) | ぬすみてかき抱きて馬にうちのせて | かき抱きて馬にのせて |
| (7) | 立田山にやどりぬ | 安積山といふ所に庵をつくりて |
| (8) | 恐しと思ふことかぎりなしわびしと思ひて | かぎりなくわびしかりけり |
| (9) | いとあさましうてなむ | いとあさましと思ひけり |
| (10) | 男抱きもちて泣きけり | 傍にふせり死にけり |

このうち(6)、(8)、(9)は全くと言ってよいほど似通っているし、(2)、(4)、(5)なども表記は異なっているもほぼ同じ意味になる。その反面、(1)、(3)、(7)、(10)などは両章段、全く異なるが、これはその舞台や内容を考えた上でそうなっているのではないかと思う。この異同については後にふれたい。

それにしても、なぜこのように語句までも近似しているのだろうか。周知のように一五五段は安積山伝説として著名であり、この話はこの外、万葉集をはじめ今昔物語集にもみられる。これに対し一五四段は今のところ他の文献には見出し出せない。それなのに両章段の語句までも近似していることは、おそらく一五四段は一五五段をもとにして作られたのではなからうか。

そこで、その根拠をあげてみたいと思う。一五四段の「たがみそぎ」の歌は古今集にあり、これをもとにして章段が形成されていることは先程述べたが、今、この歌を含めその前後の歌を記してみると次のようになっている。

題しらず　　よみ人しらず

994 風ふけばおきつしらなみたつた山よはにや君がひとりこゆらん

……左注略……

995 たがみそぎゆふつけどりか唐衣たつたのやまにおりはへてなく

996 わすられん時しのべとぞはま千鳥行くゑもしらぬあとをとどむる

(注) 本文は『日本古典文学大系』に拠る。

ここで注目したいのはこの歌の前にある「風吹けば」の歌が大和物語一四九段にあるということである。しかも「たがみそぎ」の歌はその後にあって、これには立田山が詠み込まれており、後述するように構成の上でも都合な歌であったと思われる。⁽³⁾ただ「たがみそぎ」の歌は古今集において単独で用いられているが、大和物語では返し歌がみられる。これはいずれかが除去かもしくは付加したものと考えられる。「立田川」と「安積山」の歌はともに女が詠んだもので、これを詠んで二人とも死んでしまう。いわばこれらは辞世の歌と言える。しかも両者は語法、用語、修辞の点で似通っている。再度、これらの歌を記してみる。

立田川いはねをさしてゆく水の行方もしらぬわがごとやなく(一五四段)

あさかやまかげさへみゆる山の井のあさくは人を思ものかは(一五五段)

両方の歌から次のようなことが言えるのではなからうか。

- (1) 両歌とも波線を施したように序詞を用いていること。序詞の中に水に関したものの「立田川、山の井、が含まれている。
- (2) 二重傍線を施した下句において表現方法——「行方もしらぬ」、「あさくは人を思ふものかは」(いずれもが限らない)が似ていること。
- (3) 係助詞「や」、「かは」を用いていること。

これほどまで似通っていることから、やはり「立田川」の歌は有名な「安積山」の歌をもとにして作られたとみてよいのではあるまいか。したがって古今集の如く単独で用いられているのがもとの姿と思われる。

以上のような理由から一五四段は「たがみそぎ」の歌を古今集から持ってくるだけでなく、一五五段の話の展開、語句、和歌をもとにして創作され

たものと考えられる。

それではなぜこのような章段をここに置いたのであろうか。やはりこれは大和物語の構成にも関連してくるようだ。大和物語の後半は都と地方の話が交互に並べられており、しかも都から地方へ話が進む場合には都に近い国から遠い国へ、また都に近づく場合は都に近い国をその前に持ってきている。⁽⁴⁾一五四段の場合はどうかというところ、

一五三段―都

一五四段―大和国 立田山

一五五段―岩代田 安積山

一五六段―信濃国 姨捨山

一五七段―下野国

一五八段―大和国

一五九段―都

となっており、もし一五四段がないとしたら一気に都から安積山まで飛んでいってしまい、あまりにも唐突すぎる。それを考えて一五四段を創作したのではあるまいか。このことから一五四段は後からの増補ということではなく、構成を考え、大和物語作者によって創作されたものと考えられる。したがって、先程一覧表で示したように異同を生じているのは当然の結果と思われる。例えば(1)は登場人物に関してであるが、一五四段は大和国の話であるからその国の娘が出てくるのは当然予想されることであり、前の一五三段が都の話であるから、そこから下ってきた男を据えている。また(4)の場合は女性を見る時の描写であるが、一五五段は身分の高い人の娘を見るわけだから、見るのがいかにも困難なように表現している。さらに(2)や(5)のように表現を替えているのはおそらく一五五段を意識したからではなからうか。それは(10)も同様ではないだろうか。一五五段が男女とも死んでしまうのに対し、一五四段は女だけが死んでしまう。悲劇の程度を考えてからか、これも章段を創作する上での一つの配慮からと思われる。

ともあれ一五四段は種々の面で大和物語作者の配慮がみられた。即ち、

(1)大和の国の話を持って来ようとした(構成の上で)。

(2)立田山が詠み込まれている「たがみそぎ」の歌を利用した(一四九段の「風吹けば」の歌の近くにあった)。

(3)「安積山」の歌を真似て「立田川」の歌を作った(一五五段が念頭にあった)。

というようなことが骨子になっていると思う。このように一段を創作するにしても充分な配慮がなされているのである。

三

このように古歌を章段の一部に利用している例として一四二段がある。この章段ではどのような現象がみられるであろうか。論述の便宜上、一四一段と比較しておこう。

| 一四一段 | 一四二段 |
|--|--|
| <p>よしいえといひける宰相のはらから、大和の掾といひてありけり。それ、もとの妻のもとに筑紫より女を率てきてすへたりけり。本の妻もいとよく、今のものにくき心もなく、いとよく語らひてゐたりけり。かくて、この男は、こゝかしこの国がちにのみ歩きければ、二人のみなむるたりける。この筑紫のめ忍びて男したりけり。それを人のとかくいひければ、よみたりける、</p> <p>(イ)よはにい^{A1}でて月だにみずはあふことを知らず顔にもいはましものを</p> <p>となむ。かゝるわざをすれど、本の妻いと心よき人なれば、男にもいはでのみなむありわたりけれども、ほかのたより、かく男すなりときゝて、おもひたりけれど、心にもいれで、たゞさる物にて置きたりけり。さてこの男、女、異人に物いふときゝて、「その人と我といづれかを思ふ」ととひければ、女、</p> | <p>故宮すんどころの御姉、おほいこにあたり給ひけるなむ、いとらうくじく、うたよみたまふことも、おとうとたち宮すむ所よりもまさりてなむいますかりける。若き時に女親はうせ給ひにけり。継母の手にかゝりていますかりければ、心に物のかなはぬ時もありけり。さてよみたまひける、</p> <p>(ホ)ありはてぬ命まつまのほどばかりうきことしげく嘆かずもがな</p> <p>となむよみ給ひける。</p> <p>梅の花を折りて又、</p> <p>(カ)かゝる香の秋もかはらずにほひせば春恋してふながめせましや</p> <p>とよみたまひける、いとよしづきておかしくいますかりければ、よばふ人もいと多かりけれど、かへりこともせざりけり。「女といふもの、つるにかくてはて給ふべきにもあらず、時々は返り事し給へ」と親も継母</p> |

(口)はなすゝき君が方にぞなびくめるおもはぬ山の

風は吹けども

となむいひける。よばふ男もありけり。「世の中心うし。なを男せじ」などいひけるものなむ、この男をやうく思ひやつきけむ、この男の返りごとなどしてやりて、この本の妻のもとに、文をなむひき結びておこせたりける。見ればかく書けり。

(ハ)身をうしとおもふ心のこりねば^Cや人をあはれと

思ひそむらむ

となむこりずまによみたりける。かくて心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれとおもふほどに、男は心ばかりにければ、ありし如もあらねば、かの筑紫に親同胞などありければいきけるを、男も心かほりにければ、とゞめでなむやりける。本の妻なむ、もろとももありならひにければ、かく行くことをかなしとおもひける。山崎に、もろともに行きてなむ、舟にのせなどしける。男もきたりけり。このうはなりこなみ、一日一夜よろづのことを語らひて、つとめて舟にのりぬ。今は男本の妻とはかへりなむとて、車にのりぬ。これもかれもいとかなしと思ふほどに、舟にのり給ひぬる文をなむもてきたる。かくのみなむありける。

(ニ)二人来しみちともみえぬ波のうへ^Dをおもひかけ
でもかへすめるかな

もいひければ、せめられてかくいひやりける。

(ト)おもへどもかひなかるへみ忍ぶればつれなきと

もや人の見るらむ

とばかりいひやりて、物もいはざりけり。かくいひける心ばへは、親など「男あはせむ」といひけれど、「一生に男せでやみなむ」といふことを、よとともにいひける、さいひけるもしく、男もせで、廿九にてなむ、うせたまひける。

といへりければ、おとも本の妻もいいたうあはれ
 がり泣きけり。漕ぎいでていぬれば、えかへりごと
 せず。車は舟の行くを見てえ行かず、舟に乗りたる
 人は、車をみると面をさしいで、遠くなるまゝに、
 顔はいと小さくなるまでみおこせければ、いとかなし
 かりけり。

(注) 二重傍線、符号は稿者に拠る。以下も同様。

一四二段の(ホ)の「ありはてぬ」の歌は古今集にある平貞文の歌であることから、この章段が虚構であることはすでに先学より指摘されている。⁽⁵⁾
 さて、一四二段の最後には次に掲げるような本文を持っている伝本がある。

○この歌どもみなふる事になりけり(御巫本、鈴鹿本)

○この歌どもみなふる事に成にたることゞもなり(勝命本)

○このうたどもみなふる事になりたることになんありける(為氏本、大永本)

(注) 濁点は稿者が施した。以下も同様。

御巫本と鈴鹿本が一致している以外は異同がみられる。この本文が大和物語の原本の姿を伝えているのか、それとも後人の付加になるのかは問題になる。もし前者だとすると一四二段にある和歌がすべて古歌になるからである。たしかに「ありはてぬ」の歌は古今集にある平貞文の歌であるから古歌と言える。しかし、残りの「かゝる香の」と「おもへども」の歌はわからない。第一この本文を持っている伝本が限られていることは問題になると思う。今、これと同じような本文を捜し出してみると次のようなものがあつた。

○いまはみな古歌になりたることなり(一四三段)

○世のふることになむありける(一五五段)

○これらは物語にて世にあることどもなり(一六六段)

この中で一四三段と似ていることが注目される。ただ、一四三段のを鈴鹿本と御巫本が持っていない。これ以外はすべての伝本が持っている。一四二段の末尾本文を持っているのが原形であるとするならば、なぜ為家本は持っていないのであろうか。除去してしまったと考えればそれまでであるが、

なぜそうする必要があるのか。御巫本と鈴鹿本は一四三段の末尾本文を欠いているが、これはおそらく一四二段の末尾本文と似ているために片方を除去したのではないかと思われる。このように一四二段と一四三段の末尾は似ているから為家本などは一四二段の方を除去してしまったとも考えられるが、それよりも内容の面から考えて付加されたものと処理した方がよさそうである。その理由を考えてみたいと思う。一四二段の「故御息所」が女流歌人の伊勢を暗示していることは疑いのないところである。事実、勝命本をはじめ御巫本、鈴鹿本は「伊勢のかみのむすめ」勝命本によるとある。たとえ、その姉なる人が架空の人物であったとしても、大和物語の作者としてはその姉であるから歌を詠むのも上手であった、そういう意識でもって彼女を据えていると思われる。一方、一四三段は「在中将のみむすこ在次君」で冒頭が始まっている。これは一四二段と同じであり、末尾本文は先に示した如くである。つまりいずれもが著名な歌人の姉か子という点で共通しており、文末の本文も一四三段に合わせて付加されたのではないかと思う。

いずれにしても、この本文をもとにして古歌云々を論ずるのは妥当ではない。しかし、この本文がないからと言っても「ありはてぬ」の歌を除いた二首は古歌であるかもしれないし、そう簡単には決められないが、注意したいのは一四二段は一四一段と和歌の表現やその内容が似通っていることである。(イ)の「かゝる香」の歌と(ハ)の「身をうしと」の歌をみると語法の上で両方とも「ば」、「や」を用いているし、前者は別人を恋し始めたこと、後者は春(もとの母)への恋しさというようにこれらは別なものへのあこがれを詠んでいる。さらに(ト)の「おもへども」の歌と(ニ)の「二人来し」の歌をみると二重傍線を引いたように「おもひかけでも」、「おもへども」傍点は稿者と以下も同様と同じ語を用いており、その内容も男への冷淡さを詠んでいる。

このように共通していることは偶然の一致と言えようか。一四二、一四二段と連続しているのであるから、やはり関連を認めるべきであろう。このことは(イ)の「よはにいでて」の歌と(ロ)の「はなすゝき」の歌についても言える。一四一段において歌を詠んでいるのは筑紫の女だけである。彼女が登場するのは一四一段以外に次に掲げる一二九、一三〇段である。

一二九段

筑紫なりける女、京に男をやりてよみける、

人を待つ宿は暗くぞなりにける契りし月のうちにみえねば^A

となむいへりける。

一三〇段

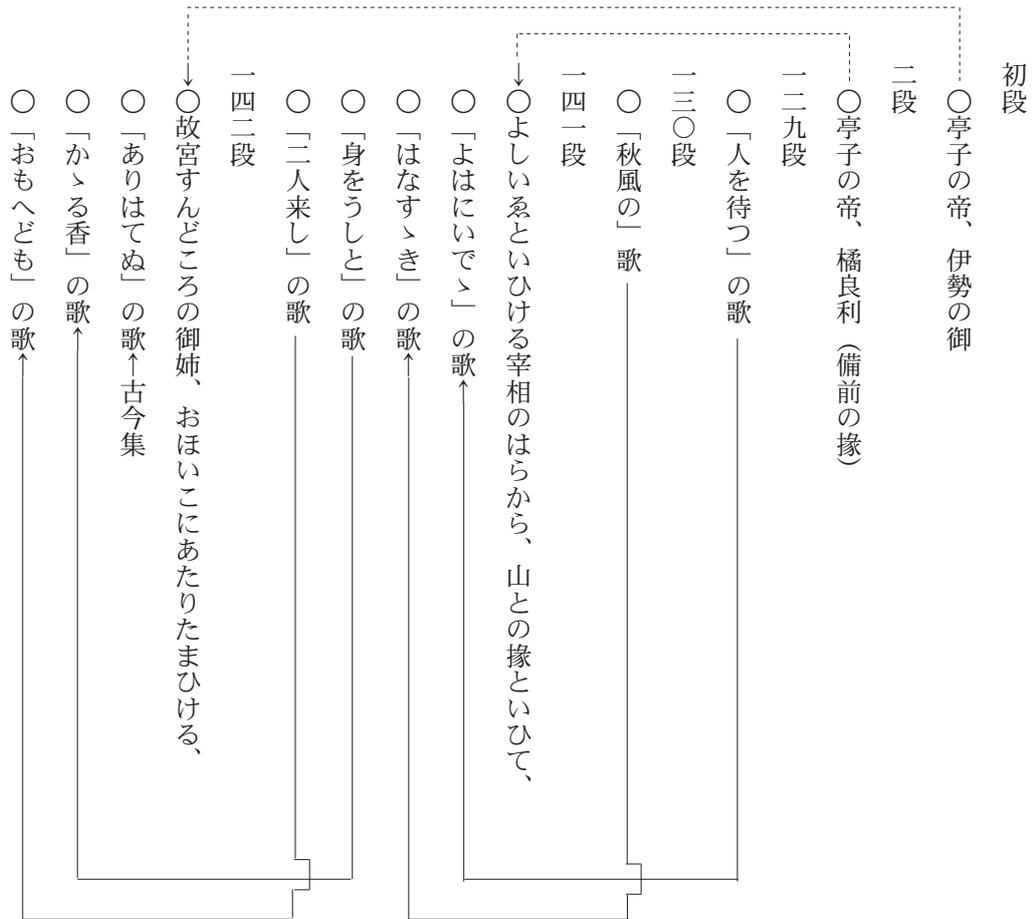
これも、筑紫なりける女、

秋風のこゝろやつらき花薄吹きくる方をまつそむくらむ^B

これらの章段と先程の一四一段とにおいて二重傍線を引いたA「月のうちにみえねば」とA'「月だにみずは」、B「花薄吹きくる方をぞまつそむくらむ」とB'「はなすゝき君が方にぞなびくめる」は意味の上では異なるが、それぞれ「月」、「花薄」を詠み込んでいる。これは一二九、一三〇段をもとにして作られたとみてよいのではなからうか。⁽⁶⁾

それに一四一段と一四二段は冒頭が似通っている。「よしいゑといひける宰相のはらから」、「故御息所の御姉おほいこ」とあつて兄弟、姉妹で始まっている。ただ一四一段は冒頭の人物が歌を詠んでいるわけではなく筑紫女である。大和物語の作者としてみれば歌の詠み手としてはあくまでも二人の女性を描きたかつたのである。そして、冒頭の表記をいわばぼかしているようになってはいるが、こゝら辺にも虚構の意識が現れているのかもしれない。また、一四一段と一四二段は語句の上でほとんど一致しないが、両章段とも対照的な女性を描きつつも筑紫女は夫と別れて国に帰るし、故御息所の御姉おほいこは死んでしまうというように、いずれも不幸な結末になってしまう。このことから類型的な章段を描きたかつたものと思われる。そしてここも先程の一五四、一五五段のように悲しみの程度の深い方を後にもってきている。

ともかく一四一、一四二段はほぼ同じ内容のことが描かれ、すべて一定ではないが、前の歌の語句や語法などをもとにして成立していると思われる。なおこれは単なる臆測にすぎないが、「よしいゑ」なる人物について述べておく。「よしいゑ」について一体だれを指しているかについては諸説がありはつきりしない。他の章段には同じ人物名がみられない。ここはおそらく架空の人物かもしれない。思うにここに持ってきたのは一四二段の「故御息所」と無関係ではないようだ。「故御息所」が女流歌人伊勢を暗示していることは疑いのないところであり、彼女はこの外に初段と一四七段に登場している。ここでは初段に注目してみたい。初段は宇多帝と彼女との唱和で、次の二段は宇多帝が橘良利を伴つての山歩きのこと記されている。ここの表記に注目したいのは「備前の掾にて橘良利といひける人」とあることである。人物名で「よし」と「掾」が同一章段にでてくるのはこの章段だけである。大和物語の作者は一四一、一四二段を創作する場合、初段と二段が頭の中にあつたのではないだろうか。一四一段の「よしいゑ」と「掾」は二段の一部にあやかつてあのような人物名と官職にしたのではあるまいか。一四二段が「故御息所の御姉おほいこ」とぼかしているように「よし」とそのまま用いるよりも一四二段に合わせるために「よしいゑ」としたのではないだろうか。これと同じ例を見出すことによりこの考えは有力になるかと思うが、そこまで調査が行き届いていない。一つの臆測としておく。ともあれ、今まで述べてきたことを図式化すると次のようになりうろ。



四

これら三章段の考察の結果に付随して一、二点述べておこう。そのひとつは大和物語前半と後半の分け方であるが、それをどの章段で分けるかについては諸説あり、中でも有力なのは一四一段から後半というのと一四七段から後半というのがある。例えば雨海博洋氏は後者の立場をとっておられる。⁽¹¹⁾その理由のひとつとして一四五、一四六段が亭子院と白女の話であることからこの二人は寛平から天曆にかけての人で大和物語前半がおおむねその時期の人々を扱っていることから、そこまでを前半とされたのである。

私はこのお考えに疑問を持っている。その理由のひとつとして氏は一四五、一四六段が寛平から天曆頃の人を扱っているとされるが、例えば一四七段を見ると、この章段は蘆刈伝説を扱っているが、この中には伝説にもとづいての詠作があり、この詠作者も寛平から天曆頃にかけての人々である。⁽¹²⁾そのふたつめは一四一段の「よしいゑといひける宰相のはらから」と一四二段の「故御息所の御姉おほひこ」は私見によるとそれぞれ架空の人物と考えられることから寛平から天曆頃の人を扱っているとは言い難い。むしろ虚構ということを重視すべきである。それに一四〇段は

故兵部卿の宮、昇の大納言のむすめにすみ給ひけるを、例のおまし所にはあらで、廂におまし敷きて、かへりたまうていと久しうおはしまさざりけり。かくてのたまへりける。「かの廂にしかれたりし物はさながらありや。とりたてやしたまひてし」とのたまへりければ、御かへりごとに、

しきかへずありしながらに草枕鹿のみぞゐるはらふ人なみ

とありければ、御かへりに、

草枕ちりはらひには唐衣袂ゆたかに裁つをまてかし

とあれば、

からごろもたつを待つ間のほどこそは我しきたえの塵もつもらめ

となむありければ、おはしまして又「宇治へ狩りしになんいく」と宣ひける御かへりに、女、

みかりする栗駒山の鹿よりもひとりぬる身ぞわびしかりける

という内容であり、故兵部卿の宮と昇の大納言のむすめという実在人物にまつわる話である。一四一段に比べると地の文も少なくなっている。これを見ても一四一段とは異なっていると思われる。

ともかく一五四段をはじめ一四一、一四二段が以前の章段と比べ別な意識がみられることはその分かれ目を考える上で一助になろう。

次に歌語りということについてである。歌語りという概念を益田勝実氏が提唱されて久しい⁽¹³⁾。それ以来、歌語りは多くの研究者に認められてきた。このことは研究の進展にもつながり喜ばしい現象なのであるが、あまりにも飛躍しすぎて考えている方もあるようである。確かに大和物語は歌語りの集成である。しかし、大和物語がすべてにわたってそれを載せたものかという点と必ずしもそうとは言えない面があろう。それよりも作者の創作による章段も存在するかもしれない。どのあたりにそれが及んでいるのか。その目安を大和物語前半と後半とは創作意識の上で多少なりとも異なっているところに置き、その上で内容の検討から推し進めるべきである。

ここで考察してきた章段はどうか。一五四段の場合であるが、私見によるとこの章段は一五五段にもとづき創作されたものであり、このことは歌語りということよりもむしろ大和物語作者の創作性を認めるべきではなからうか。また一四二段については高橋正治氏が次のように述べておられる。

一四二段の場合、「ありはてぬ」といふ平中の歌を出せば人々はすぐ平中の歌と分るはずであるが、この話は故御息所の姉君といふ人の貞操についての物語であるので、好色と貞操が二重うつしとなり、この話を聞く人はそのくすぐりを感じるのであるといふことが考へられる。そして、その和かさは社交的な場のものである。庚申の夜その他における人の会合の場で、つれづれを慰めるのに手頃のものであったらう。⁽¹⁴⁾

「ありはてぬ」の歌は語られていたかもしれないが、その主人公まで違えてこのようになされていたものか、どうも納得できかねる。この一四二段や一四一段も形成の方法等を考慮すると、やはり一五四段と同じように創作の意識が強かったとみるべきではなからうか。⁽¹⁵⁾

ともかく今までは虚構とは言われてきてもその受け止め方にあいまいな点があり、またその虚構ということが歌語りに関連づけて考えられてきた。しかし、これら三章段は歌語りということを紹介させることなく、純然たる創作とみてよからう。

五

大和物語については、徐々に各方面から考察されるようになり、それなりの成果もみられるようになった。ここでは諸先学の成果に導かれながら虚構の章段と言われてきた一四一、一四二、一五四の三章段を対象にして考察してきた。そして改めてこれらの章段が大和物語作者によつて創作された虚構の章段であることを確認した。

しかもこれらを見るに構成面での配慮もみられたし、内容的には大和物語作者の完全なる独創ではなく古歌や前の歌をもとにして歌を作り典型的な

話を作っていた。ただ古歌を利用する場合、その歌だけではなく一首ないし二首有していた。即ち一四二段の場合、「かゝる香」と「おもへども」の歌を持っていたし、一五四段の場合も「立田川」の歌を持っていた。ましてこれらの歌が大和物語作者によって創作されたものとするや章段形成の上で注目すべきことであろう。思うに古歌を利用するだけではなく他の歌を付け加えることにより大和物語作者の創作性の発展をみることはあるまいか。ただ一四一段の場合は古歌を利用しているわけではないが、前段にある歌にもとづき歌を作っており、しかもこのみで終わっているのではなく、これら以外に和歌を添えている。これは先の一五四段や一四二段の場合と共通していると言つてよからう。さらに和歌だけでなく地の文において、片寄りはあるものの近似した表現を用いている。これは大和物語作者の力量を知る上での手がかりになると思う。

この外、歌語りということに関しては、私自身、歌語りが多少の潤色を加えられていることは認めるものの、これら三章段をみてきた限り、歌語りされていたのをそのまま載せたのではなく、むしろ大和物語作者の創作性を認めるべきではあるまいか。それと大和物語の前半と後半は各章段の考察の結果を考慮して一四一段から後半とするのが妥当ではなからうか、などについて述べてきた。

ともあれ、大和物語の中で著名でもないこれらの些細な章段にも大和物語成立上の秘密があるのかもしれない。従来、このような章段はそれほど深く追究されて来なかつた。今後はこのような章段にもメスを入れるべきであろう。ただ、ここで扱ってきたのは大和物語一七三章段中、わずかに三章段であり、もし他にも虚構の章段があるとすれば、ここでの虚構の方法がそれらに適用できるとは限らない。あくまでも大和物語の中での一つの方法として理解していただけたら幸いである。それにしても推論も多かつたし、思わぬ誤りもあろうかと思う。御教示をお願いする次第である。

注(1) その分かれ目については諸説あるが、一往ここでは一四一段から後半とする考えに従う。

- (2) 今井源衛氏「大和物語評釈・四十六 安積山」(『国文学』11巻5号 昭和41年5月 後に『大和物語評釈 下巻』(笠間書院 平成12年2月)に再録)、柿本奨氏『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院 昭和56年2月)
- (3) 柿本氏も『大和物語の注釈と研究』の中でつながらりのあることを指摘されている。
- (4) 拙稿「大和物語の構成について——後半の章段を考察の対象として——」(『語文』39輯 昭和49年3月 後に『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録)。本書第三章第四節。
- (5) 高橋正治氏「大和物語の位相」(『国語と国文学』33巻9号 昭和31年9月 後に『大和物語 塙選書』(塙書房 昭和37年10月)に再録)、今井源衛氏「大和物語評釈・三六 ありはてぬ命まつ問の」(『国文学』10巻7号 昭和40年6月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録)

- (6) 一四一段の後半は土佐日記の影響を受けていると言われている。これについては福井貞助氏が「歌物語は土佐日記から何を得たか」(『文経論叢』11巻3号 昭和51年3月 後に『歌物語の研究』(風間書房 昭和61年4月)に再録)という論考において詳しく考察されている。
- (7) 近似しているのは「よばふ男もありけり」(一四一段)、「よばふ人もいと多かりけれど」(一四二段)だけである。
- (8) 詳しくは本書第二章第五節を参照のこと。
- (9) 橘良植説(井上覚蔵氏・栗島山之助氏『大和物語詳解』、浅井肇治氏『大和物語新釈』、吉澤義則氏『大和物語新講』、武田祐吉氏・水野駒雄氏『大和物語詳解』など)、架空人物説(高橋正治氏『日本古典文学全集大和物語』)
- (10) 勝命本、御巫本、鈴鹿本は「いせのかみのむすめ」となっている。
- (11) 「大和物語の成立」(『国文学研究』復刊2輯 昭和25年5月 後に『歌語りと歌物語』(桜楓社 昭和51年9月)に再録)
- (12) 伊勢、均子内親王、兵衛の命婦、春澄治子など。
- (13) 「上代文学史稿」案(二)(『日本文学史研究』4号 昭和25年)、「歌語りの世界」(『季刊国文』4号 昭和28年3月)
- (14) 注(5)に同じ。
- (15) 工藤重矩氏も直接、これらの章段とは関係ないが、「大和物語の史実と虚構―第二・三十五段をめぐって―」(『福岡教育大学国語国文学会誌』18号 昭和50年11月)という論考において「大和物語が事実にもとづいている事は明らかだが、それが「物語」に定着する場合の方法は、歌語りそのままの採録のみではないようで、歴史資料としても用いられることの多い大和物語であるが、その点も注意が必要であろう。」と述べておられる。

第三節 『古今』『伊勢』『大和』

—ひとつの共通話をめぐって—

最初の勅撰集である古今集は後世の勅撰集の規範となり、その影響は測り知れないものがある。それだけに多くの人々に愛読されて来た。しかもこれは伊勢物語と共通しているところが多く、その関係等についてはこれもまた多くの人々により論議されている。そして伊勢物語もまた古来より愛読され、特に歌道必見の書として重視されてきた。

一方、大和物語は伊勢物語と同じ歌物語に属し、伊勢物語よりも後に成立したものである。だが大和物語は伊勢物語に比べると、それほどはやされなかつたようである。その原因についてはいくつか考えられるが、伊勢物語の陰に隠れてしまったこともひとつの要因と思われる。

ともかく、これら三つの作品は相前後して成立し、いずれも平安時代を代表するものであるが、注目すべきことはこれら三つの作品には、共通している話が見られることである。ここでは、そのひとつである古今集巻十一 476・477 番歌、伊勢物語九九段、大和物語一六六段をとり上げてみたいが、これらについては、かつて「大和物語における在原業平関係章段について」⁽¹⁾と題した論文の中で少しふれたことがある。したがって、ここでは前稿で述べたことを前提にし、やや視点を換え、かつ前稿の補遺をも兼ねて、各作品の流れを通し、その性格、生成の一面を探り、引いてはその周辺の問題についてもふれてみたい。

今、論述の便宜上、古今集卷十一476・477番歌と伊勢物語九九段、それに大和物語二八六段を比較してみると次表のようになる。

| 古今集 | 伊勢物語 | 大和物語 |
|---|---|---|
| <p>右近のむまばのひをりの日、むかひにたてたりけるくるまのしたすだれより、女のかほのほのかにみえければ、よむでつかはしける</p> <p>在原なりひらの朝臣 見ずもあらずみもせぬ人のこひしくはあやなくけふやながめくらさん</p> <p>返し　よみ人しらず しるしらぬなにかあやなくわきていはんおもひのみこそしるべなりけれ</p> | <p>むかし、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顔の下簾よりほのかに見えければ、中将なりけるおとこのよみてやりける。</p> <p>見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめくらさん</p> <p>返し 知る知らぬなにかあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりけれ 後は誰と知りにけり。</p> | <p>在中将物見にいでて女のよしある車のもとにたちぬ下簾のはざまより、この女の顔いとよくみてけり。物などいひかはしけり。これもかれもかへりて、あしたによみてやりける、</p> <p>みずもあらずみもせぬ人の恋しきはあやなく今日やながめくらさむ</p> <p>とあれば、女、かへし、 見もみずも誰としりてか恋ひらるるおぼつかなさの今日のながめや とぞいへりける。これらは物語にて世にあることどもなり。</p> |

(注) 本文は三者とも『日本古典文学大系』に拠っている。傍線は稿者が付したものである。これらは以下も同様。

古今集にはおのずと勅撰集としての制約があり、女が「しるしらぬ」の歌を詠んだ後、二人はどうなったのか知る由もない。それゆえ女は歌をやり返し、男の求婚を断ったというような解釈も生ずる²⁾。でも考えてみるに、これらの歌は恋の部にあり、恋の部はおおむねその進行状態に配列されてい

る。しかもこの歌は初期の段階を対象にしている「恋一」に収められている。このことから純粹な男女の気持ちというものを汲みとつてもよいのではないか。事実、松田武夫氏はこれらの前にある「世の中は」の歌を含めて「この三首が言い表わしていることは、よく目で見ない人を、心で思う恋心である」⁽³⁾と述べておられることによつても理解できよう。

古今集のこの二首は伊勢物語と共通しているが、ただ伊勢物語には文末に「後は誰と知りにけり」という本文がある。伊勢物語の作者は、この一文を付加することにより、古今集での不安を解消し、より印象的にしている。

ところで、森本茂氏はこの章段について次のように述べておられる。

「見ずもあらず」の歌は、こういう場に即した歌として上手によんでいる。ところが「知る知らぬ」の返歌は、贈歌を受けるものとしては、やや不調和であり、大和物語に見える「見も見ずも」の歌の方が調和する。本来「見も見ずも」が返歌であったのに、そののち「知る知らぬ」の歌にすり替えられたのかもしれない。⁽⁴⁾

大和物語の方が本来の姿とみておられるが、大和物語が伊勢物語の方を不調和とみて修正したかもしれないであろう。だが、賀茂真淵は大和物語の「見もみずも」の歌を下手な歌と評している。⁽⁵⁾ 私は、むしろこの歌は大和物語の作者により伊勢物語をもとにして創作されたものと考えている。⁽⁶⁾ それに「知る知らぬ」の歌にすり替えたというのも、なぜそうしたのか、説得力に乏しい。

この「後は誰と知りにけり」という一文から察する限り、「知る知らぬ」の歌は相手に対する拒否ということよりも、むしろ「知らなくてもいいんですよ。あなたの思いさえあれば」という女の気持ちであり、それがかなって二人は会うことができたのであろう。このような意味合いでもって付け加えられた本文とみるべきであろう。このようなことから考えると、贈答歌として自然な姿になっている。

伊勢物語の作者は、なぜこの歌をもとにした章段をこの位置に持つてきたのであろうか。これは伊勢物語の構成にも関連してくると思われる。これについては諸先学の考察があるが、それぞれ一定しているわけではない。ただ少なくとも、ある単位と言おうか、ひとつの塊になっていることは指摘できると思う。この周辺の章段をみると、藤原一族という高貴な人物にまつわる話を持つてこようにとする作者の意識を窺い知ることができる。即ち九七段では「堀河のおほいまうちぎみ」^{藤原基経}、九八段では「おほきおほいまうちぎみ」^{藤原良房}がそれぞれ登場し、しかも業平を暗示している「中将なりける翁」、「おとこ」はこの高貴な二人について賞讃した歌を詠んでいる。さらに九九段では車に乗っている女性ということで高貴な女性を暗示させている。これは次の一〇〇段も同じで、ここでははっきり「やむごとなき人」と表現している。これら四章段は、主人公は変わらないものの、その相手とする人は九七・九八段が男、九九・一〇〇段が女というように対照的になっている。これは意図的になされたものであろう。これらの章段を創作する

にあたっては、おおむね古今集を素材にしていると思われる。九七・九八・九九段にある歌はいずれも古今集と共通している。しかし、一〇〇段にある「忘れ草」の歌は古今集をはじめとして、いずれの文献にも見い出せない。したがって現存しない資料から素材を得ているのかもしれない。だが、そのようなものは望めそうにもない。臆測になるが、おそらくこの章段は作者により創作されたのではないか。というのは、一〇〇段には九九段に類似した表現がみられるからである。今、両章段を記してみよう。

九九段

むかし、^A右近の馬場のひをりの日、^Bむかひに立てたりける車に、女顔の下簾よりほのかに見えければ、中将なりけるおとこのよみてやりける。

^C見ずあもらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さん

返し

知る知らぬなにかあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりけれ

^D後は誰と知りにけり。

一〇〇段

むかし、おとこ、^A後涼殿のはさまを渡りければ、^Bあるやむごとなき人の御局より、「^C忘れ草を忍ぶ草とやいふ」とて、いださせ給へりければ、
たまはりて、

忘れ草生ふる野べとは見るらめどこは忍ぶなり後^Dもたのまん

(注) 記号は稿者。

傍線を施したように、AとA'は場面設定の上でいずれも高貴な感じを抱かせる。BとB'は高貴な女性で、CとC'は反対の語で、DとD'はうまくいったということ、それぞれ共通している。九九段と一〇〇段とがこれほど共通しているのは偶然の一致と言えようか。やはり九九段をもとにして一〇〇段を創作したとみるべきであろう。次の一〇一段では「おほきおとど」^{藤原良房}が登場している。この章段はまさに藤原氏讚美を描いている。

こうみてくると九七・九八・一〇一段は藤原氏讚美を描写している。しかも、その間にある九九・一〇〇段は、宮中行事、宮中を描き、これまた高貴な女性を暗示している。作者にとつては、藤原氏讚美の一群に入れたのであるからその意識は強かったと思われる。そして女性を描こうとした最初の章段である九九段は古今集をもとにして創作されたのであろう。なお九九段には「中将なりけるおとこ」とあるが、業平は右近衛権中将^{傍点以下も同様}の官位についたことがある。これは本文に「右近の馬場の云々」とあるから、これに関連づけてこのような人物表記にしたのであろう。

このようなことから、九九段は宮中行事とそれを車に乗って見物する高貴な女性ということで、伊勢物語の作者にとってみれば、その意図に十分なう話であったと思われる。しかも次の一〇〇段とも密接な関係があるうかとも思われ、その生成に一役買った章段ではなかったかと考えるのである。古今集と伊勢物語の本文によると、男は女の顔をはつきりと見ることができなかった。このことはこれらの作品を理解する上でひとつの前提になっているように思われる。「みずもあらず」と「しるしらず」の歌は前述したように二人の純粋な気持ちを詠んでいる。そしてこのことは伊勢物語の場合、段末に「後は誰と知りにけり」とあることによつて、二人は心が通じ合い、やつと会うことができたということに連なっていると思う。

ただ、問題なのは塗籠本がこの本文を持っていないということである。それゆえ後人の付加とも考えられ、今一方では塗籠本の脱落とも考えられている。⁽⁹⁾もし、後人の付加ということになると、私が今まで述べてきたことは成り立たなくなる。この二つの考え方からこの本文の成立について二つの過程が考えられよう。即ち塗籠本原型説をとると、

塗籠本…↓「後は誰と知りにけり」を付加した伝本…↓大和物語

となる。塗籠本の除去、もしくは脱落説をとると、

「後は誰と知りにけり」を有した伝本…↓大和物語

……↓塗籠本

というふう考えられる。大和物語を記したのは「見もみずも」の歌が「後は誰と知りにけり」という本文をもとにして作られたと考えられるからである。⁽¹⁰⁾さて、このいずれが妥当であろうか。古今集と塗籠本の本文を比べてみて際立った異同でもあれば、何か意図なるものを見い出せようが、両者はほとんど変わらない。それよりも「後は誰と知りにけり」という本文を付け加えて物語的效果をねらったと考えた方がよいのではないか。これは前述したように古今集、伊勢物語についての考察の結果からすれば、どうしても必要不可欠な本文であった。それにこれを持つていないのが塗籠本一本であるということも引掛かる。この本についてはかつて詳細に論じたことがあり、⁽¹¹⁾それによると塗籠本は改作が多くかつ合理的に処理されているところが多いということであった。このようなことから後者のように除去、もしくは脱落と考えた方が妥当であろう。もし、除去とするとその理由ということになるが、それについては明らかでない。

これに対して大和物語の場合はどうか。地文をみると「女のよしある車」とあって、より高貴な女性を暗示させている。しかも古今集、伊勢物語と何よりも異なることは、在中将が女の顔をよくみてしまったという点にある。そして二人は「物などいひかはしけり。これもかれもかへりて、あしたによみてやりける」とあるから、言葉を交わし「見もみずも」の歌は翌朝に贈ったふうになっている。これは大和物語独自の表現であり、大和物語作

者の創作とみてよかろう。こんな状態でもって「みずもあらず」の歌を詠んだわけであるから、その解釈には苦勞しているようである。例えば『大和物語抄』は「猶あかぬ心をかくよみ給へりにや」と解釈し、さらに『大和物語直解』では「こは古今集にも伊勢物語にもみゆしかるを今のはし書はかきそこなひし也歌に見ずもあらずみもせぬと有をはしにかほいとよくみてげりといふべきものか」と述べている。また『大和物語虚静抄』は「慥にみたれとも世に憚る心にてかく読とも可見にや」と述べている。⁽¹²⁾このように、いわば矛盾した本文をいかに理解しようとしていたかを知ることができよう。下つて明治時代以降に成つた注釈書に至つてはそれほど問題にされていないようである。例えば池田亀鑑氏は

「この女の顔よく見てけり」とあるのは、歌の「見ずもあらず見もせぬ」とあるのはよく合わない。この物語（稿者云、伊勢物語のこと）や古今集の「ほのかに見えければ」の方がよいであろう。或いは、よく見えたのが、わざと見ぬふりをして歌をよんだという事になろう。⁽¹³⁾

と述べられているが、その意図までは追究されていない。また柿本獎氏はこの部分について『大和物語抄』、『大和物語虚静抄』の解釈に賛同されている。⁽¹⁴⁾確かにこれらの考えには一理あると思うが、大和物語作者の意図という観点から別の考えができないだろうか。前述の如く「見もみずも」の歌は大和物語の作者により創作されたものと思われるから、そうしたからにはこの章段全体を考えてしたと思われる。大和物語の場合、伊勢物語とは異なり、在中将が女の顔をよく見てしまったということが、この章段を理解する上での前提になっていると思われる。そうすると在中将の「みずもあらず」の歌は相手をからかい半分に詠んだ歌としか考えられない。そこには余裕さえ感じられる。これは在中将ということを作者は考慮しているのであろう。そして女も黙ってはいない。それにやり返している。この二人は、もはや古今集や伊勢物語のように純粹さはなくなっている。二人とも相当のやり手のように映ってくる。もし、大和物語の「見もみずも」の歌の位置に「しるしらぬ」の歌があつたとしたらどうであろうか。「しるしらぬ」の歌は純粹そのもので、この女はあまりにも純情しすぎるとしか言いようがない。「見もみずも」の歌に対応させるには物足りなきを感じる。そのために大和物語の「見もみずも」の歌の中に、地文の「よしある女」、「いとよくみてけり」と呼応させて「誰と知りてか」という表現を用いたものを思われる。この歌は開き直っている感であり、当然、知っているんだという含みもあるようだ。それは柿本氏の指摘されたように二条后意識であろう。⁽¹⁵⁾これは在中将に対応させているのかもしれない。ともかく大和物語には高貴意識というものが底辺に流れている。伊勢物語の場合も、先程述べたようにその意識は見られるわけだが、ここでは女の姿がよく見えないわけであるから、「しるしらぬ」の歌はまさにこの場面に適応している。

なお、これらの話の場についてみると、古今集と伊勢物語は「右近の馬場のひをりの日」であるのに対して、大和物語はただ漠然と「物見」となっている。大和物語の作者の関心は行事などどうでもよく、男女の話をより詳しく記すことにあつた。これは登場人物についても言えることで、古今集はともかく伊勢物語では「中将なりけるおとこ」、「女」が登場する。ただ、この女については車に乗っているということ、高貴な女性を暗示して

いることについては先述した。「中将なりけるおとこ」という表現は、伊勢物語は業平の物語ということで彼の官職でもってぼかしたものと思われる。これが大和物語になると、「女のよしある車」とあり、よりいっそう高貴な人を暗示させているし、男の方も「在中将」とあるから、だれでも業平とわかる。このことは、大和物語においてこの章段を含め伊勢物語一〇〇段をも持ってきているわけだが、大和物語の作者がこれらの章段を選んだ理由のひとつに高貴な女性を描こうとして、それにふさわしい章段を選び、ここに持ってきたのであろう。

それに問題になるのは段末にある「これらは物語にて世にあることどもなり」という本文についてである。ここで言っている物語について、今井源衛氏は「異本伊勢物語といふべきもの」と考えておられる。⁽¹⁶⁾確かにこのような考えもできよう。でも別の考えも可能ではないか。この本文は大和物語一六一段から一六六段までを受けていると思われるから、異本伊勢物語がもしも天理大学図書館に所蔵されている為家本伊勢物語^{以下、天理為家本と略称}の巻末に付載されているような伝本だとしてみると――ましてそれが特異なところをのみ抄出したのであれば――共通する章段があってもおかしくない。そんなことを考えて大和物語をみると、一六五段では登場人物や現存の伊勢物語にはみられない「つれづれと」の歌がある。さらに一六一段も物語の展開がかなり伊勢物語と違っている。しかしこれらは、異本伊勢物語にはみられないのである。こんなことから、一六五段の「つれづれと」の歌や一六一段の話の展開については、私自身、作者により創作されたものと考えている。⁽¹⁸⁾このことからして、異本伊勢物語から持ってきたという考えは否定してよからう。そして大和物語があのように古今集や伊勢物語と違っているのは、ひとつの創作欲の現れとみるべきであらう。

それにしても、こんなに異同があるのに大和物語の作者はなぜ「物語にてあることども」などと書いたのであろうか。思うにもとになった物語というくらいの意味で付記したのではなかったのか。書かないですむことならそれにこしたことはないが、大和物語の作者にとってみれば、著名な伊勢物語に素材を得たのであり、模倣と言われたいためにも必要だったのではあるまいか。大和物語において先行作品、それも物語から素材を得ているのは在中将関係の章段だけであることを思えば、このような意識は強かったと思われる。⁽¹⁹⁾

三

天理為家本の巻末には小式部内侍本の断片ではないかと言われている十八章段がある。その中に次のような章段がある。

みずもあらずみもせぬ人の恋しくはあやなくけふやながめくらさん

女かへし

見もみずもだれとしりてか恋らるるおぼつかなみのけふのながめや
またおとこかへし

しりしらずなにかあやなくわきていはん思のみこそしるべなりけれ

(注) 本文は『伊勢物語諸本集一天理善本叢書3』(解題片桐洋一氏 八木書店 昭和48年1月)に拠り、濁点は稿者が施した。以下も同様。

この本は特異な箇所のみを記載したものらしく、地文は必要最小限を記し、大方欠いている。この章段は伊勢物語九九段と大和物語一六六段の両方を合わせ持っている。このような伊勢物語の存在を暗示させるのは、顕昭の『古今集註』の記事である。即ち、

又伊勢物語ノ中二八、事外二歌次第モカハリ、広略ハベル中二普通本トオボシキニハ、右近ノムマバノヒヨリノ日トカキテ、中将ナリケルヲトコトカケリ。普通ニタガヒタル本ニハ、右近ノ馬場ノテツガヒトカキテ中将ナリケル人トカケリ。

但普通伊勢物語ニハ、古今ノマノ贈答也。普通ナラヌ本ニハ、此歌ノ返歌ヲ、女ノカヘシトテ、ミモミヌモタレトシリテカコヒラルトオボツカナミノケフノナガメヤ。又オトコ返シ、シルシラヌナニカアヤナクワキテイハムオモヒノミコソシルベナリケレ。

(注) 本文は『続々群書類従 第十五 歌文部』(編輯市島謙吉氏 国書刊行会 明治40年7月)に拠る。句読点は稿者。
とあり、天理為家本のこの章段はまさしく顕昭の言う「普通ナラヌ本」の形態を示していることになる。

かつて私は、「見もみずも」の歌は大和物語の作者によつて創作されたものであり、しかもそうしたのは地文において、在中将が女の顔をよく見てしまったことに無関係でないことを指摘したことがある。⁽²⁾ それにしても残念なことに天理為家本のこの章段は、はじめの方の地文を省略しているから、本来どのような本文を備えていたか明らかでない。というのはその本文こそ、古い姿かそれとも後世に改作されたものかを知る一助にもなると思うからである。ただ、幸いなことにこの「普通ナラヌ本」からとられたと言われている前田家本在中将集では次のようになっている。⁽²⁾

右近のむまばの手つがひにむかひにたてりけるくるまのしたすだれより、
はつかに女の見えければ、つかはしける。

見ずもあらず見もせぬ人のこいしくはあやなくけふやながめくらさむ
返し

見も見ずもだれとしりてかこひらるゝおぼつかなみのけふのながめや
又

しるしらぬなにかあやなくわきていはむおもひのみこそしるべなりけれ

(注) 本文は山田清市氏編『伊勢物語 在中将集』(白帝社 昭和42年4月)に拠る。圏点、波線は稿者。

圏点を付したところが顕昭の言う「普通ナラヌ本」とほぼ一致している。このことから「普通ナラヌ本」からとられたということを裏付けていよう。ただ、『古今集註』では、圏点以下の本文は記されておらず、どうなっていたか明らかでない。思うに「右近ノムマバノヒヲリノ日トカキテ中将ナリケルヲトコ」、「テツガヒトカキテ中将ナリケルヲトコ」という書き方からすると、『古今集註』では「テツガヒ」、「ヒヨリ」の違いを示したかったのであり、あとは相違ないから略式にしたのであろう。ともかく「普通ナラヌ本」も前田家本在中将集と同じようになっていたと考えてよいのではないかと。してみると天理為家本のもとなった本も波線を施したようになっていたのであろう。するとこれは大和物語と異なり、伊勢物語の流布本定家本のこと以下も同様以下も同様に近かったことになる。

そこで問題になるのが、この異本伊勢物語顕昭の言う「普通ナラヌ本」のこと、これは今井氏の呼び方に拠る。以下も同様。は、はたして伊勢物語の原型か否かということである。例えば今井源衛氏は贈答歌の形を検討された結果、この異本伊勢物語の方が伊勢物語流布本のことや古今集よりも贈答歌の原型を残していると考えられた。そして、この中から一首脱落して古今集、伊勢物語の形となり、いま一方は大和物語のようになったと推測しておられる。しかもこの異本伊勢物語の材料は古今集以前にさかのぼることができる(2)とされ、それは現存しない業平家集ではないかと考えられた。山本登朗氏はこの考えに賛同されている(2)。

今井氏は贈答歌の形をもとにしてこのような結論を下されたわけであるが、氏の解釈は歌のみに終始しているきらいがある。地文も考慮すべきではないか。というのは前述したように古今集、伊勢物語と大和物語とは異なっており、このことが歌の異同に微妙な影響を及ぼしていると思われるからである。それと異本伊勢物語から一首脱落して伊勢物語、大和物語になったと考えるおられるが、その脱落の理由が明らかでない。氏の言われるように、あれほどスムーズであった異本伊勢物語から飛躍があると言われる古今集や伊勢物語の形になぜしたかである。

このようなことから考えて、納得できない点も少なくない。そしてむしろこの異本伊勢物語なるものは後世の作になったという念が強いのである。その理由をあげてみよう。

大和物語の場合、異本伊勢物語からとられたとすると、地文に「いとよくみてけり」とあるから「見ずもあらず」の歌は、在中将が女の顔を知って詠んでおり、その返し歌として女が、「見もみずも」の歌をやり返したわけである。女も在中将の顔をよく知っており、そのために「誰としりてか」という表現を用いたものと考えられる。これに対して異本伊勢物語では「しるしらず」天理為家本では「しりしらず」とあるが、統一して記した。以下も同様。の歌でやり返すわけだが、前の歌の「だれとしりてか」を受けて「しるしらず」と表現したという先学のお考えもあるが、そうしたにしては、この歌はあまりにも純粹すぎるのではないか、

つまり「だれとしりてか」を受けるにはどうも内容的にみて合致していないということである。「しるしらず」の歌は、男が女の顔をはつきり見えなかつたということ以外に何の気持も含まれていないいわば純粋な気持ちの吐露にすぎない。

異本伊勢物語において、先程推測したように地文には伊勢物語の流布本とほとんど変わりない文句が連ねてあつたと思われる。それは女の姿をはつきりと見ることができなかつたことであり、それに対応できるのは「しるしらず」の歌以外にはない。「見もみずも」の歌はお互によく知って詠んだ歌である。こうみると、この異本伊勢物語は、地文の「ほのかに見えければ」、「いとよくみてけり」という両方を持ち備えていることになる。こんな不自然なことはない。たとえ、異本伊勢物語の地文が大和物語と同じであつたにしても結果は同じである。異本伊勢物語が不自然で、大和物語が自然であるという、成立的に言っても矛盾した結果になってしまうのである。それに異本伊勢物語によると「しるしらず」の歌は男の作になる。この歌と「見もみずも」の歌には「あやなく」という語を用いている。別人がこうしているのなら話は別だが、同一人が同じ語を使用していることに何か引つ掛かるものがある。

それと顕昭の言う「普通ナラヌ本」の性格である。これと密接な関係があると言われる天理為家本の十八章段は、福井貞助氏によると、雑纂本である小式部内侍本から抄出されたものだと言う。⁽²⁴⁾ このお考えに異論ない。ただ、問題はそれが伊勢物語の原型を留めているか否かである。それは伊勢物語の流布本や大和物語の成立に関して根本的に土台を揺るがせかねない問題になるからである。福井氏はこの十八章段が伊勢物語の原型か否かについてはふれておられない。氏以外でも追究されている人は少ない。⁽²⁵⁾ もちろん、この本体ともいうべき小式部内侍本そのものに関しては研究がみられる。例えば池田亀鑑氏や中田武司氏は原型に近いとされているのに対し、山田清市氏は後世の改作と考えておられる。⁽²⁷⁾ いずれが妥当であるかは、今後の研究に俟つべきであるが、さしあたって、ここで問題になっているこの十八章段に限り考察を進めてみることにしよう。そうすることが今まで述べてきたことを解決する糸口になるかもしれない。

今、先程とり上げた章段を除いた十七章段を論述の便宜上、列挙してみることにしよう。

83 うた、わすれてはゆめかと思おもひきや雪ふみわけて君をみんとは

返哥

ゆめかともなにかおもはむうきよをはそむかさりけんほとそくやしき

59 むかしおとこ京をいかゝおもひけんふかきやまに

ありわひぬいまはかきりの山里につまきこるへきやともとめてん

かくなんいといたうやみてしにいたりければおもてに水をそゝきなんとしたりければいきいてゝ

我うへに露そおくなるあまの川とわたるふねのかひのしつくか

といひていきいてたりける

御神現形シ繪テ

117 むつまじと君はしらなくみつかきのひさしきよゝりいはるそめてき

この哥をぎゝて在原業平すみよしにまうてたりける

すみよしのきしのひめ松人ならはいくよかへしとゝはましものを

とよめるにおきななりあしきいてゐてめてゝかへし

ころもたにふたつありせはあかはたの山にひとつはかさましものを

とよみてきえうせにげりいま思えは御神になんおはしましける

9 なにしほはゝいさことゝはん宮ことりわか思人はありやなしやと

といひければふな人こそりてなきにけりそのかはのわたりすきて京にみし人あひてものかたりなとしてことつてやなといひければ

宮こ人いかにとゝはゝみねたかみはれぬおもひにわふとこたへよ

4 月やあらぬ春やむかしのはるならぬわか身ひとつはもとの身にして

といひてこのはなのもとにたちよりて

梅花かをのみ袖にとゝめきてわか思人はおとつれもせず

H むかしおとこ女のうゐもきけるに釵子を心さしてよみてやりける

あまたあらはさしわするともたましくけあけんおりくおもひいてなん

D むかし西院といふ所にすむ人ありけりその人いちになんいてたりけるに女くるまありけるをいひもていきて御すみかはいつこそといひをこせたりける

わかやとは雲井のみねにたかければをしふともこんものならなくに

といへりければおとこ

かりそめにそふる心しふかければなとか雲井もたつねさるへき

といひてこれもかれもわかれにけり

99 (省略)

74 むかしおとこ女をいたくうらみて

いはねふみかさなる山はとをけれとあかぬおほくもこひわたるかな

あまのすむみちのしるへにあらぬ身をうらみんとのみ人のいふらん

G むかしならの京にしりたる人とふらひにいきたりけるにともたちのもとにせうそこをはしめてうらみてふみおこせたりける人のもとに

はるのいろのいたりいたらぬさとはあらしさけるさかさる花のみゆるか

I むかしえうましかりける人をこひわひて

わかやとにまきてなてしこいつしかもはなにさかなんあしたくみん

B むかしおとこ女をぬすみて行水ある所にておとこのまんやとふにうなつきければてにむすひてのますさていてのほりにけりおとくけなく

なりにければもとの所へかへりゆくは水のみし所にて

おほはらやせかるの水をむすひあけてあくやとひし人はいつらは

L むかし在原行平といふ人いましかりけり女のもとに

思つゝをれはすへなしむはたまのよるになりなはわれこそ行め

をんな

こぬ人をいまもやくるとまちし夜のなこりはいまもいねかてにする

M むかしをとこありけりわかなきこと思いてある所にやりける

ゆふつくよあか月かたのあさかけにわか身はなりぬ恋のしけきに

とありけれといとかたくなりけり

N むかしもの思おとこめをさましてとのかたを見いたしてふしたるにせんさいのなかにむしのなきければ

かしかましのもせにすたくむしのねやわれたにものはいはてこそおもへ

92 むかし恋しさにきてかへれとせうそくもせてある

あしへこくたなゝしをふねいくそたひこきかへるらんしる人なしに

P むかしすきものともあつまりて譚よみけるにかはたけをあるをとこ

さよふけてなかはたけ行ひさかたの月ふきかへせあきの山風

Q むかしをとこはるかなるほとをゆきたりけるにつくしの人こひけるにいろかはやるとて

所名ナルヘシ
つくしよりこゝまてくれはつともなしたちのをかはのはしのみそある

(注) 定家本にない章段の記号は『伊勢物語に就きての研究 補遺篇』(大津有一氏編 有精堂出版 昭和36年12月)にあるアルファベットに拠っている。

これらの章段をみてまず感じることは、流布本にはみられない返歌があることである。八三・九・四・七四段がそれである。もしこれらが伊勢物語の原型を伝えているとするならば、その後で成立した流布本はこれらの返歌を除去したか、あるいは脱落と考えられよう。このうち九段をみてみよう。これは例の東下りの一節を担っているものである。それにしても流布本にないこの部分をみると前に出てくる表現と似通っているところがある。即ち「京にみし人」、「わぶ」という語がそれである。また、「京にみし人」に会って話をした後、その人が「言つてはないですか」と言っているのにも前にある「京にその人の御もとにとて文かきてつく」という本文を真似たように思える。このように同じようなことをくり返しているところに、いわば付加されたという念が強い。

これと同じようなことは一七段についても言える。業平が詠んだ「すみよしの」の歌は前にある「我見ても」の歌と似通っている。いずれも住吉の松の年代の古さが詠まれている。それに「すみよしの」の歌と「ころもだに」の歌も内容的には違っているものの、いずれも反実仮想を示す「……ば……まし」を用いている。これは偶然の一致と言えようか。「ころもだに」の歌が出典不明ということを考えて、おそらく増補者^{後述するよつに}「この歌をきき」により創作されたものであろう。以下を増補した者のこと

次に他の作品との共通歌についてみると、Iの「わがやどに」、Lの「思つゝ」、Mの「ゆふづくよ」の歌が万葉集に共通している。またNの「かしがまし」の歌が宇津保物語藤原君の巻に、Pの「さよふけて」の歌が古今集にそれぞれ共通している。万葉集が多く古今集が少ない。異本伊勢物語の作者はこれらをもとにして各々の章段を創作したのであろう。伊勢物語が当初から在原業平をモデルにしようという考えでもって創作されたなら、この現象はそれに反していることになる。もちろん流布本でも万葉集と共通している歌はあるが、その骨子となっているのは何と言っても古今集にある業平の歌なのである。

さらに興味深いことは流布本にある章段と表現の上で似通っている章段があることである。すなわち、Dと三九段、Gと初段、Lと一一一段、Qと

六一段がそれである。Dと三九段をみると三九段では西院の帝、Dでは西院という場所になっているが、いずれも西院ということでは共通している。しかもDには「女くるま」が出て来て歌には「雲井」が詠み込まれている。これは三九段の帝と女車にも関連している。Gと初段は、いずれも「ならの京」が舞台になっているし、Lと一一一段は「行平」の登場という点で共通している。業平の兄ということ、一一一段に登場しており、しかも前述したように「思つゝ」の歌は万葉集に共通している。これをもとにして創作したのである。最後のQと六一段はすでに指摘されているように⁽²⁸⁾いづれも筑紫が舞台となり、歌に染河か、それを暗示する河(川)がそれぞれ詠まれている。

これらの用例から考えて、流布本にある章段をもとにして作られた可能性が強いと思われる。そしてそのことを決定的にしているのが先程も述べた一一七段ではないかと思う。この章段には「在原業平」と実名で記されている。伊勢物語において、これを除いたすべてが「男」とか「中将なりける男」とかいうふうにはぼかして記されている。それが実名で記されているのは一一七段の「この哥をきゝて」以下の本文は後世の増補とみるべきであろう。この一一七段というのは伊勢物語の主人公である男が登場せず、帝と住吉神が出てくる特異な章段である。伊勢物語は業平の物語という意識が強く、そのためにこのように増補されたのであろう。

まだまだ検討しなければならない章段もあるわけだが、今まで検討してきた章段から察する限り、これらを伊勢物語の原型とみるにはあまりにもその条件に反することが多かった。やはりこれらは流布本よりも後世のものとするのが穏当であろう。そして、ここで問題にしている九九段もこの中に含まれており、これまた後世のものとしてよからう。

以上のことから考えて大和物語の流布本^{為氏本、為家本など}のような形こそ自然というべきである。大和物語の作者は地文と「見もみずも」の歌とを合致させ、話の展開をスムーズにさせたわけだが、異本伊勢物語の作者はこうした大和物語作者の意図なるものを察し得なかったようである。もちろん、伊勢物語をもとにして別な章段を作ったわけで、その点では創作性というものを認めてよからう。しかし、この本を伊勢物語の原型云々ということにはやはり慎重を期すべきであろう。

四

古今集、伊勢物語、大和物語に共通するひとつの話を見てきた。結論として、古今集476・477番歌、伊勢物語九九段、大和物語一六六段は密接な関係、つまり直接関係があると考えた方がよさそうである。そして天理為家本、それと密接な関係にある異本伊勢物語は後世の作になるとみてよからう。

古今集、伊勢物語、大和物語の中では、古今集がもとの姿であり、そこには恋一の範疇としての男女の純粹さが現れていた。それをもとにして伊勢物語ができ、後に本文を付加することにより物語としての特色を少しずつではあるが、出していった。しかも古今集のこの話は伊勢物語のこの位置に適するものであった。それが大和物語になると全体的に物語的效果を表出していた。時間的な広がりを見せ、女の顔を「いとよくみてけり」と表現し、それに呼応して歌の方においても伊勢物語とは別なものを作り上げていた。そして大和物語にあっても高貴な女性ということ、それに適する章段を伊勢物語から持ってきたのであろう。この高貴意識は、大和物語と伊勢物語が共通する他の章段でも言えることであり、この一六六段は高貴意識という点で伊勢物語よりも一段と輪をかけた形にしている。

ともかく、成立時期においてそれほど隔たりのない、これら三つの作品は複雑な成立をしている。中でもより異なつた面を出そうとしたのは大和物語であった。大和物語と伊勢物語はこれ以外のところでも共通しており、中には両者を比較してみると大きな違いがみられる。もしかすると一六六段の相違が他の章段にも及んでいるのかもしれない。それらを検討してこそ、ここでの結論が確かなものにならう。それゆえ、ここで述べてきたことはひとつの試論としておき、これ以外については今後、さらに考究していきたいと思つている。

注(1) 「解釈」24巻4号 昭和53年4月 後に『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録。

(2) 秋山虔氏・堀内秀晃氏『伊勢物語』(昇龍堂 昭和45年12月)

(3) 『古今集の構造に関する研究』(風間書房 昭和40年9月)

(4) 『伊勢物語全釈』(大学堂書店 昭和48年7月)

(5) 『伊勢物語古意』(『賀茂真淵全集 第十六巻』解説井上豊氏 続群類従完成会 昭和56年7月)に拠る。

(6) 注(1)に同じ。

(7) 鷺山樹心氏「伊勢物語の構成」(『国語教育』5号 昭和35年7月)、武藤悦堂氏「伊勢物語の構成」(『名古屋大学国語国文学』8号 昭和36年3月)、高橋正治氏「天福本伊勢物語構成図表」(『清泉女子大学紀要』16号 昭和43年12月)、山田清市氏「伊勢物語構成論」(『日本文学』23巻6号 昭和49年6月 後に『伊勢物語校本と研究』(桜楓社 昭和52年10月)に再録)などがある。

(8) 『三代実録』(『新訂増補国史大系 第四巻 日本三代実録』(黒板勝美氏篇 吉川弘文館 昭和9年7月)に拠る)

(9) 例えば『勢語臆断』(契沖)では「塗籠本になきは脱ちたるべし」とあり、『詳注伊勢物語』(次田潤氏著 明治書院 昭和27年9月)では後人の加筆

とみておられる。

- (10) 注(1)に同じ。
- (11) 拙著『伊勢物語異本に関する研究』（桜楓社 昭和58年4月）
- (12) 古注の本文は雨海博洋氏の『大和物語諸注集成』（桜楓社 昭和58年5月）より引用させていただいた。
- (13) 『伊勢物語精講』（学燈社 昭和36年4月）
- (14) 『大和物語の注釈と研究』（武蔵野書院 昭和56年2月）
- (15) 注(14)に同じ。
- (16) 「大和物語評釈・五十二 在中将（続）」（『国文学』11巻14号 昭和41年12月 後に『大和物語評釈 下巻』（笠間書院 平成12年2月）に再録）
- (17) 福井貞助氏「勢語小式部内侍本考」（『国語と国文学』35巻5号 昭和33年5月 後に『伊勢物語生成論』（有精堂出版 昭和40年4月、増補版 パルスト社 昭和60年1月）に再録）
- (18) 注(1)に同じ。
- (19) 妹尾好信氏も『伊勢物語』との共通話を六章段も続けて書き記し、満足を覚えたのであるが、やはり既存の物語と同じような話を並べてしまったことには『大和物語』全体から見ると違和感を禁じ難くて少々弁解する気になり、第一六六段の末尾に「これらは物語にて世にあることどもなり」と断り書きを付したのである。という考えを述べておられる（『大和物語』第2部の成立試論―章段追加成長過程の想定― 『広島大学文学部紀要』44巻 昭和59年12月 後に『平安朝歌物語の研究（大和物語篇）』（笠間書院 平成12年10月）に再録）。
- (20) 注(1)に同じ。
- (21) 片桐洋一氏「在中将集成立存疑―藤原定家の王朝文学研究―」（『国語国文』26巻2号 昭和32年2月 後に『伊勢物語の研究（研究篇）』（明治書院 昭和43年2月）に再録）
- (22) 注(16)に同じ。
- (23) 「右近の馬場の恋―伊勢物語の主人公―」（『恋のかたち 日本文学の恋愛像』（笠間書院 平成8年12月 後に『伊勢物語 文体・主題・享受』（笠間書院 平成13年5月）に再録）
- (24) 注(17)に同じ。

- (25) 例えば林美朗氏は「伝為氏筆本伊勢物語の構成と識語をめぐって—幻の異本・小式部内侍本論への一視角—」(『平安文学研究』72輯 昭和59年12月)後に『狩使本伊勢物語 復元と研究』(和泉書院 平成10年9月)に再録)という論文の中で、後世のものともみとみられる。
- (26) 池田亀鑑氏『伊勢物語に就きての研究 研究篇』(大岡山書店 昭和9年5月、再版 有精堂出版 昭和33年3月)、中田武司氏「伊勢物語異本章段攷」(『王朝物語とその周辺』笠間書院 昭和59年12月)
- (27) 「伊勢物語小式部内侍本の成立について」(『平安朝文学研究』7号 昭和37年1月)、「伊勢物語^{初冠本}原初形態に関する考察」(『亜細亜大学教養部紀要』1号 昭和41年11月)。両者とも後に『伊勢物語の成立と伝本の研究』(桜楓社 昭和47年4月)に再録。
- (28) 『日本古典文学全集伊勢物語』(福井貞助氏校注・訳 小学館 昭和47年12月)の頭注。
- (29) 一二七段の「我見ても」の歌をお供の人、即ち業平の作としている注釈書もある。『伊勢物語肖聞抄』(肖柏)、『伊勢物語宗長聞書』(宗長)、『伊勢物語闕疑抄』(細川幽齋)、『勢語臆断』(契沖)、『伊勢物語新釈』(川口白浦氏著)、『評釈伊勢物語大成』(新井無二郎氏著)、『伊勢物語新解』(西下経一氏著)、『伊勢物語全釈』(中野幸一氏・春田裕之氏著)などがそれである。

第四節 歌語りから創作へ

―『大和物語』第一四九段をめぐって―

―

大和物語という作品の性格を考える時、歌語りという概念を避けて通ることはできない。これは益田勝実氏により提唱されて以来、今日では定説化された。しかし、その発言状況をみてみると、はたして歌語りの本質をとらえてそうしているのかと思われる点も少なくない。中にはあたかも大和物語全体をそのように考えて、その概念を使用している感さえある。私は歌語りを否定しているのではない。ただ、ここで強調しておきたいのは、大和物語が単に歌語りのみではなく、中には創作されているところもみられるのではないかということである。換言すれば、大和物語の作者が歌語り（私にはこれに伝承を含めている）をもとにして作品を成す場合、そこに創作性が深く関与しているのではないかということである。そこでは当然、それに肉付けをしたり、あるいはもつと進んで虚構という方法をとる可能性も十分に考えられよう。事実、このことについては先学の御指摘があるし、私自身も二、三述べたことがある。⁽³⁾

そういうわけで、ここではその一環として大和物語一四九段を対象にして、この章段の生成とこれを大和物語の後半にどう位置づけたらよいかについて考えてみたいと思う。

―

大和物語一四九段は立田山伝説として著名である。この話は古今集をはじめ、伊勢物語にもみられ、またここにある「風吹けば」の歌は古今和歌六

帖、新撰和歌集にもとられ、秀歌としての評価を得ていたようである。しかも、これらのうち古今和歌六帖、新撰和歌集を除けば、それぞれの作品の生成を考える上で興味深いものがある。

そこで、論述の便宜上、これら三つの作品を比較してみると次のようになる。

| 古今集 | 伊勢物語 | 大和物語 |
|-----|--|------|
| | <p>(A)むかし、ゐなかわたらひしける 人の子ども、井のもとにいでて遊 びけるを、おとなになりければ、 男も女もぢかはしてありけれど、 男はこの女をこそ得めと思ふ。女 はこの男をと思ひつつ、親のあは すれども聞かでないむありける。さ て、このとなりの男のもとより、 かくなむ</p> <p>筒井つの井筒にかけしまろが たけ過ぎにけらしな妹見ざる まに</p> <p>女、返し、 くらべこしふりわけ髪も肩す ぎぬ君ならずしてたれかあぐ べき</p> <p>などいひいひて、つひに本意のご とくあひにけり。</p> | |

題しらず 読人しらず

風吹けば沖つ白波たつた山夜半に
や君がひとり越ゆらむ

ある人、この歌は、「昔大和国
なりける人の女に、ある人住
みわたりけり。この女、親も
なくなりて家もわるくなりゆ
くあひだに、この男、河内国
にあひ知りて通ひつつ、離れ
やうにのみなりゆきけり。さ
りけれども、つらげなる気色
も見えで、河内へいくごとに
男の心のごとくしつつかい
やりければ、あやしと思ひて
もしなき間に異心やあると疑

(B)さて年ごろふるほどに、女、親
なく、頼りなくなるままに、もろ
ともにいふかひなくてあらむやは
とて、河内の国、高安の郡に、い
き通ふ所いできにけり。さりけれ
ど、このもとの女、あしと思へる
けしきもなく、いだしやりけれ
ば、男、こと心ありてかかるにや
あらむと思ひうたがひて、前裁の
なかにかくれあて、河内へいぬる
かほにて見れば、この女、いとよ
う化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つしら浪たつた山
夜半にや君がひとりこゆらむ

とよみけるを聞きて、かぎりなく
かなしと思ひて、河内へもいかず
なりにけり。

(C)¹まれまれかの高安に来てみれば、
はじめこそ心にくもつくりけれ、
いまはうちとけて、手づから飯匙
とりて、筒子のうつはものにもり
けるを見て、心憂がりて、いかず
なりにけり。(C)²さりければ、かの

むかし、大和の園、葛城の郡にす
む男女ありけり。この女、顔か
たちいと清らなり。年ごろ思ひか
はしてすむに、この女、いとわる
くなりければ、思ひわづらひて、
かぎりなく思ひながら妻をまうけ
てけり。この今の妻は、富みたる
女になむありける。ことに思はね
ど、いけばいみじういたはり、身
の装束もいと清らにせさせけり。
かくにぎははしき所にならひて、
来たれば、この女、いとわるげに
てゐて、かくほかにありけど、さ
らにねたげにも見えずなどあれば、
いとあはれと思ひけり。心地に
はかぎりなくねたく心憂く思ふを、
しのぶるになむありける。とどま
りなむと思ふ夜も、なほ「いね」
といひければ、わがかく歩きする
をねたまで、ことわざするにやあ
らむ。さるわざせずは、恨むるこ
ともありなむなど、心のうちに思
ひけり。さて、いでていくと見え

ひて、月のおもしろかりける
 夜、河内へいくまねにて前裁
 の中に隠れて見ければ、夜
 ふくるまで琴をかき鳴らしつ
 つうち歎きて、この歌をよみ
 て寝にければ、これを聞きて、
 それよりまたほかへもまから
 ずなりにけり」となむ言ひ伝
 へたる。

(巻第十八雑歌下)

女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らむ生
 駒山雲なくしそ雨はふると
 も

といひて見いだすにからうじて大
 和人、「来む」といへり。よろこ
 びて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むといひし夜ごとに過ぎ
 ぬれば頼まぬものの恋ひつつ

ぞ経る

といひけれど、男すまずなりにけ
 り。

(二三段)

て、前裁の中にかくれて、男や
 来ると、見れば、はしにいでゐ
 て、月のいとおもしろき
 に、かしらかいけづりなどしてを
 り。夜ふくるまで寝ず。いといた
 ううち嘆きてながめければ、「人
 待つなめり」と見るに、使ふ人の
 前なりけるにいひける。

風吹けば沖つしらなみたつた

山夜半にや君がひとりこゆら

む

とよみければ、わがうへを思ふな
 りけりと思ふにいと悲しうなり
 ぬ。この今の妻の家は、龍田山を
 こえていく道になむありける。^①か
 くてなほ見をりければ、この女
 うち泣きてふして、かなまりに水
 を入れて、胸になむすゑたりける。
 あやし、いかにするにかあらむと
 て、なほ見る。さればこの水、熱
 湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。ま
 た水を入れる。見るにいと悲しくて、
 走りいでて、「いかなる心地したま
 へば、かくはしたまふぞ」といひて、

かき抱きてなむ寝にける。か[Ⓢ]く
てほかへもさらにかで、つとゑ
にけり。か[Ⓡ]くて月日おほく経て
思ひやるやう、つれなき顔なれど、
女の思ふこと、いとみじきこと
なりけるを、かくいかぬをいかに
思ふらむと思ひいでて、ありし女
のがりいきたりけり。久しくいか
ざりければ、つつましくて立てり
ける。さてかいまめば、われには
よくて見えしかど、いとあしきさ
まなる衣を着て、大櫛を面櫛にさ
しかけてをり、手づから飯もりを
りける。いとみじと思ひて、来
けるままに、いかずなりにけり。
この男はおほきみなりけり。

(一四九段)

(注) 本文はすべて『日本古典文学全集』に拠った。傍線(A)、(B)、(C)₁、(C)₂及び①、②、③は稿者が施した。

伊勢物語の内容を(A)、(B)、(C)₁、(C)₂と区分したが、このうち大和物語は(A)、(B)、(C)₁と共通し、(B)が主になっている。また、古今集は(B)と共通している。結局、三者が共通しているのは(B)のみということになり、これが根源的な姿とみてよからう。即ち、ある男女が生業を営んでいたが、生活が苦しくなり、男は今の女の許に通うようになる。男は元の女が快く送り出すことに疑いを抱き前裁に隠れて様子をうかがっている、元の女は「風吹けば」の歌を詠んだ。すると、男はその歌に感動し、今の女の所へ行かなくなってしまった、いうことになる。したがって、本来このようなことを核にして伝承され

ていたのであろう。すると、古今集が根源的なものに近く、伊勢物語と大和物語は二次的な色彩が濃いと考えられる。

さて、大和物語一四九段の生成については古今集、伊勢物語と比較し、多くの人に研究されてきた。中でも松尾聰氏は詳細に分析されている。⁽⁴⁾ 其の要点を今井源衛氏は九項目にまとめられておられる。⁽⁵⁾ これについても、論述の過程でふれていきたいので記しておこう。

- 1 大和は伊勢の説話の中、はじめの幼少の部分(A)と高安の女の歌を除き、(B)の部分に叙述を集中し、もとの女の可憐な愛情を強調して、読者の感動をそそろうとした。
 - 2 女主人公は伊勢では幼友達という心のつながりがあるが、大和では成熟した美人という設定で、官能的なものが、男とのつながりの上で、表立っている。
 - 3 伊勢では、男が新しい女の許へ通うのは、経済的な事情に基づくもので、もとの女に対するいたわりに発しているが、大和では、男の行動は利己的な理由による。
 - 4 大和では「(男が)留まりなむと思ふ夜も(女は)なほ『往ね』といひければ」とあり、女の忍従の強調が度を過ぎて、不自然となっている。
 - 5 端居する女の行為は、伊勢では「いとよくけさうじて」、出てゆく男に対する身づくろいをさせて、女の可憐さを感じさせるが、大和では「頭かいけづりなどしてをり」とあって、意味がぼやけている。
 - 6 「風吹けば」の歌の前後、ことに胸のほむらを云う為に、鏡の水が煮え立つというおろかな誇張をするところ、大和作者が外面的な叙事をのみ事とすることを示す。
 - 7 男が新しい女に引かれた動機は、伊勢では明白でないが、大和では女の財産が目当てだった。
 - 8 男が新しい女を垣間見るところ、伊勢では手盛で飯を食べる要点のみ記して印象ぶかいのに対して、大和では、みすばらしい着物や、面櫛などの道具を並べたてて、かえって効果を減じている。
 - 9 大和の末尾の「この男は王なりけり」とは、男が、いくじなく自ら勤勞するでだてを知らず、富家の女にのりかえてしゃあくとしていたことを読者に納得させるための注記か。
- 以上のようになる。ただ、今井氏は、このうちの9について疑義をはさまれ、これは作者がここに登場する男を業平と考えていたあかしとみておられる。私も疑問なところがあり、随時ふれていきたい。なお、今井氏は成立過程について、古今↓伊勢↓大和の順に考えておられる。⁽⁶⁾
- 次に、阪倉篤義氏は三者を比較し、語りから物語への過程を考察し、大和物語の創作性を指摘されている。⁽⁶⁾ さらに、柿本獎氏は『大和物語の注釈と

研究』において、伊勢物語と大和物語を比較し、次のように結論づけておられる。

この（稿者注、大和物語の）作者は舞台の隅々までライトを当てないと気がすまない。文学が陰翳とか含蓄とかを尊ぶなら、このフラットさは本段にとつてプラスではない。しかし(B)や左注の先行を受ける本段としては、そのような方向を取つて(B)や左注にない新しさを打出そうとしたのだと言えよう。以上のように三氏は大和物語の創作性ということに重きを置いている。

一方、高橋正治氏は三者を比較し、

大和物語の場合も、伊勢物語の場合も、主題は同一であるのに、大和物語の場合は、「語り」の拡散的性格から、伊勢物語よりさらに部分々々が拡大されたので、文字となつて作品として見る場合は散漫になる。これは一四九段全体にわたつていえることである。かくして、古今、伊勢、大和の三つの相違は、作者の「人間」の相違としてとらえるだけですませることができるとはなく、「語り」と「文字文芸」との性格の相違として見るべきである。⁽⁸⁾

と述べられ、歌語りということを強調しておられる。また、雨海博洋氏も「歌語りはストーリーの展開に傾くのではなく、より話を具体的に色付け、話に厚味を加えるといった特色がある。」と述べられ、これまた歌語りということを強調されている。⁽⁹⁾ また、野村重碩氏もどちらかという両氏のおおえに近いようである。⁽¹⁰⁾

以上のように、この章段については多方面から考察されており、やり尽くされたと言っても過言ではない。ただ先学の考えが全く一致しているわけではないし、また、先学のふれておられないところや、それに納得しかねるところもある。そのようなわけで、別の視点に立つての追究も必要のように思う。

三

前述したように伊勢物語の(A)、(B)、(C)¹が大和物語と共通しているところから、少なくとも両者の関係を認めることができよう。とは言うものの、一体、大和物語一四九段は創作なのか、あるいはどこまでがそうなのか、それを判別するのは難しい。ただ、これら三つの作品の中で、大和物語は成立的にみて後に成るものであり、共通する語句を調べることにより、何らかの手がかりを得ることができるかもしれない。今、古今集、伊勢物語、大和物語の本文がいずれに共通しているかを調べてみると次表のようになる。

| 番号 | 作品 |
|-----|------|
| (9) | 古今集 |
| (8) | 伊勢物語 |
| (7) | 大和物語 |
| (6) | 古今集 |
| (5) | 伊勢物語 |
| (4) | 大和物語 |
| (3) | 古今集 |
| (2) | 伊勢物語 |
| (1) | 大和物語 |

この表をみて意外なのは、大和物語は伊勢物語のみではなく、古今集とも共通していることである。大和物語と伊勢物語が共通するのは(3)、(6)、(9)だけである。これらとて全く一致しているわけではない。⁽¹¹⁾中でも(3)は除いた方がよいかもしれない。ただ、これは伊勢物語と大和物語のみが持っているものであり、大和物語は伊勢物語をもとにして、より具体的な表現にしたのであろう。松尾氏は先程記した5のように考えておられるが、大和物語において、伊勢物語との異同箇所をみると、かなり詳しく記しているところが見られる。このこととも無関係ではあるまい。例えば、男が今の女の許へ行くのを元の女は何ら不平不満を言うことなく送り出すが、その後の本文は次のようになっていいる。

- あやしと思ひて、もしなき間に異心あると疑ひて、—古今集—
- 男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、—伊勢物語—
- わがかく歩きするをねたまで、ことわざするにやあらむ。さるわざせずは、恨むることもありなむなど、心のうちに思ひけり。—大和物語—

古今集と伊勢物語はほぼ共通しているが、大和物語ではさらに詳しく心情面をも記している。これに対して、(1)、(2)、(4)、(7)では大和物語が古今集とほぼ共通している。ただ(1)の場合、伊勢物語の(C)²のところに「かの女、大和の方を」傍点は稿者とあり以下も同様とあり、少し異同はあるものの、伊勢物語も持っている。したがって三者とも共通していることになるが、翻つて考えてみるに、古今集と大和物語は冒頭部分にみられるのに対して、伊勢物語は章段の終わりのほうにある。しかも、伊勢物語の場合、その舞台がどこかはつきりせず、かろうじてこの表記により、男は大和の国の人であることがわかるのである。伊勢物語は古今集にある「大和の国なりける人」をもとにして、後のほうに記したのである。大和物語の場合、伊勢物語の表記からと考えるのではなく、ここは場面や状況から考えて古今集をもとにしたとみるのがよからう。次に(4)をみることにしよう。古今集では「夜ふくるまで、琴をかき鳴らしつつうち嘆きて」とあつて、歌を詠むわけである。そして、その後に「寝にければ」と続いている。大和物語と古今集は「夜ふくるまで」は共通するが、その後の「寝ず」は共通していない。古今集のように歌を詠んでから寝ることを考えると、大和物語は「かき抱きてなむ寝にける」に生かしているのであろう。それ以前の「かくてなを云々」からここまでは後述するように創作と考えれば、そのように考えるのが妥当であろう。そしてここでも大和物語は古今集を利用したとみるべきであろう。このことは(5)、(8)をみるといっそうその感が強い。(5)、(8)に共通するのは、大和物語が古今集と伊勢物語の語句を持っているということである。これは何を意味しようか。少なくとも大和物語は両者をもとにしたことを示していよう。このようにして、大和物語の作者は改作していったわけであるが、欠点もみられる。その一面について、(2)を例にその原因を探ってみることにしよう。男が元の女の許から離れていった理由を大和物語では「この女いとわろくなりければ」とあつて、古今集や伊勢物語のように女の親がなくなったという記述はみられない。そして、この箇所を諸注釈書は次のように解釈している。

- この女は大層貧しくなったから（武田祐吉氏・水野駒雄氏『大和物語詳解』）
- その女が大層貧乏になったから（浅井峯治氏『大和物語新釈』）
- この女は、家計が貧しくなったから（吉澤義則氏『大和物語新講』）
- この女はたいそう貧しくなつてしまいましたので（今井源衛氏「大和物語評釈・四三 立田山」）
- この女がたいそう貧しくなつたので（高橋正治氏『日本古典文学全集』）
- この女が大層貧しくなつてしまったので（柿本燮氏『大和物語の注釈と研究』）
- この女はたいそう貧しくなつたので（森本茂氏『大和物語全釈』）
- この女は、たいそう暮らし向きが貧しくなつてきたので（雨海博洋氏・岡山美樹氏『大和物語（下） 講談社学術文庫』）

明治時代以降に刊行されたすべての注釈書が「わろく」を「貧しい」と解釈しており、とりたてて問題にしているわけでもない。事実、ここは古今集、伊勢物語をみると十分に理解できるところである。

ところが、この部分を古注にあたってみると次のように解釈している。

○おとろへたる也(『大和物語鈔』)

○次の詞に此いまのめはとみたる女とあればこれは少しまつしきにそへて姿なともよからす見えきたれるにや(『大和物語抄』)

○今の女は富たるといふに對すれば貧きをいふ歎まつしければおのつから容もよからす見えしなるへし(『大和物語虚静抄』)

○次の詞に此今のめはとみたる女とあれば少しまつしきにそへて姿なともよからす見えきたれるにや(『大和物語錦繡抄』)

○後のめは富たるとあるをみればいとわろくは女の家貧しく成行てはみめ作るにももとの如くなきをいへるなり(『大和物語管窺抄』)

(注) 本文は『大和物語諸注集成』に拠った。

「わろく」について大和物語鈔を除き、古注では女の容姿にまで及んでいる。これはおそらく、その前に「この女、顔かたちいと清らなり」とあって、その後に「この女いとわろく云々」と続いていることによるのではないか。両者は対応しているかのである。古注はそれを見逃がさなかったのである。初めのほうに古今集や伊勢物語のように、親が死んで生活のあてがなくなったと記述されていれば、後の「富みたる女」という表現が生きてこよう。それと、どうもこの冒頭部分は「むかし……(中略)……男女ありけり。この女、顔かたちいと清らなり」とあって、すっきりしない。第一、結婚の形態がはつきりしない。これに該当する古今集、伊勢物語の箇所をみると、ともに文章の通りがよい。大和物語の作者は、松尾氏が先程の2で指摘されたように成熟した美人を設定するためにこのような表現にしたのであろう。しかし、そうしたことがかえって文脈上、不自然な結果となってしまうたのである。このようなあいまいな点を生じたのは大和物語の表現不足ということに尽きよう。そしてその要因を尽きつめてみると、大和物語作者の文章力によるのであろう。

ところで、これは素朴な疑問のだが、大和物語一六〇段から一六六段にかけて、いわゆる在中将関係の章段群があり、なぜ、この中に一四九段を含めなかったかである。まして、この章段の末尾には「この男はおほきみなりけり」という本文があり、ここで「おほきみ」とは業平を暗示していることを思えば、なおさらそう考えざるをえない。在中将関係の章段は私見によると、伊勢物語をもとにして創作されたものと考えられる。⁽¹³⁾

一方、一四九段は、前述の如く伊勢物語だけでなく古今集をもとにして潤色されていた。この章段は伝承性をも有しており、立田山伝説と言われている所以でもある。しかもこの周辺には生田川、蘆刈、猿沢池といった著名な伝説があり、これらの章段は前後を考えて意図的に配置されている。⁽¹⁴⁾

その一角にこの立田山伝説があるのである。すると、大和物語の作者はあくまでも伝説ということの主眼にしてあそこに置いたわけである。そのために、伊勢物語と共通していることは知りつつも、その伝説の根源を残している古今集をもその資料にしたのではないか。しかし、著名な歌人である業平をモデルにしている伊勢物語に共通し、かつそれを資料にしていることを避けて通ることはできなかった。そのために「この男はおほきみなりけり」という本文を段末に付記したのであろう。この注記には大和物語作者の苦渋に満ちた言い訳めいたことが含まれているように思われる。そう言えば、在中将関係章段の最後の章段にも「これらは物語にあることどもなり」という注記めいた本文がみられる。これらの章段を伊勢物語と比べてみると、かなり異なっている。そのために様々な考えが生じていることも事実である。⁽¹⁵⁾ 私見によると、これらの章段は前述したように伊勢物語をもとにして虚構化されたものと思われ、あまりにも著名な伊勢物語を利用したからこそことわらざるをえなかったのである。このことは一四九段の注記と共通するものがある。それぞれの注記には各章段の成立を考える上で深い意味を含んでいた。松尾聰氏は前掲の1のように述べられている。私もこの考えに賛成であるが、ここではあくまでも立田山伝説が中心になっており、それをもとに脚色したわけで、このことが氏の言われるような面に表出しているわけである。したがって、氏が指摘された2のようになるのは1との絡みで考えるべきで、当然の成り行きであった。

ところで、今まで述べてきたことと多少なりとも関連するが、安田薫氏は大和物語が伊勢物語の(A)の部分をもたないことについて次のように述べておられる。

「むかし、おとこの「在中将」業平と読んだ大和作者にとつて勢語二三段第一部（稿者注(A)のこと）はどうしても矛盾を感じたに違いない表現を含んでいたのである。それは「昔、あなかわたらひしける人のこども」という冒頭の登場人物を紹介する箇所であった。平城天皇を祖父に持ち、阿保親王を父とする「在中将」業平と「あなかわたらひしける人のこども」を同一人物とすることに無理があつたのである。かかる理由により大和の勢語世界に対する〈拒絶〉があつたと考えるのはどうであろうか。⁽¹⁶⁾

確かに作者の心の一隅にはこのようなことも考えていたであろう。しかし、あくまでも中心的なことは別なところにあつたのである。それは前述したように伝説ということを主流に考えていたわけで、もし、(A)を含めていたならば、在中将関係の章段の中に入れていたであろう。

ともあれ、大まかには伝説と物語ということを念頭に入れて、それぞれの位置にあると思われる。その裏には大和物語作者の創作欲が深く関わっていたことも事実である。

大和物語と古今集、伊勢物語との語句の共通箇所を手がかりにして大和物語の生成の一面を探ってきた。その結果、大和物語は古今集、伊勢物語をもとにして意図的になされていた。そこには伝説ということを根底に置きつつ一歩進んで創作意識というものを窺い知ることができた。

四

古今集、伊勢物語、それに大和物語を読んで、まず気付くのは、前二つの作品は文章が整然としていることである。第一、重複したり、複雑な表現はほとんどみられず簡潔そのものである。これに対して、大和物語はどうもまわりくどい文章が目につく。それと同一語や同義語が多用されている。もちろん、これらの中にはその用例からみて当然、その場に使用してしかるべきものもあるが、それにしても目につくのである。今、二回以上、使用している主な語を抜き出してみよう。

| | |
|----------------------|---|
| ○さらに…………… | 2 |
| ○清らなり…………… | 2 |
| ○ねたげに(ねたまで、ねたく)…………… | 3 |
| ○わざ(ことわざ)…………… | 2 |
| ○わろく(わろげ)…………… | 2 |
| ○かく…………… | 5 |
| ○かくて…………… | 3 |

これらは「わろく」を除いていずれも古今集、伊勢物語にはみられないものばかりである。これだけの文章内容から、このように同じ語が使われているのは何を意味しているのであろうか。

同一語の多用はこれ以外の章段、例えばならの帝の章段のひとつである一五二段などにもみることができる。このことについて私は作者の文章力に問題があるのではないかと指摘したところ、早速、反論を受け、これは語りの口調であつて、まさに歌語りそのものを示しているという。したがって、この論からすれば、この一四九段もまさにそれを示していることになる。しかし、翻つて考えてみるに、大和物語一四九段は前述したように、古今集の左注と伊勢物語の(A)、(B)、(C)₁の部分をもとにして作られていることには異論あるまい。しかも、注目すべきは前述の如く、先程挙げた語は「わろく」を除いて古今集の左注や伊勢物語の(A)、(B)、(C)₁にはみられないということである。やはりこのことは大和物語の作者が文章を書いて行く過程で、同一語を何度も使用したとしか考えられない。事実、伊佐山潤子氏も一四九段を語法の面から考察され、すべてが語りそのものとみることに疑問を投げか

けておられる。⁽¹⁹⁾ このことは重複表現の存在によつても理解できよう。その箇所をあげてみる。

○前裁の中にかくれて、男や来ると、見れば、(中略) いたいたううち嘆きてながめければ、「人待つなめり」と見るに、
○使ふ人の前なりけるにいひける。(歌省略) とよみければ、

(注) 傍線、波線は稿者が施した。これは以下も同様。

傍線部と波線部がそうなっている箇所だが、これらと該当するところを伊勢物語、古今集にあたつてみると、片方しか有していない。このことから大和物語の作者は文章力に劣ると言わざるを得ないのである。また、次のようなところもみられる。

○かくにぎはしき所にならひて、来たれば、この女、いとわろげにてゐて、かくほかにありけど、さらにねたげにも見えずなどあれば、

両者は同じような表現を用いているわけではないが、内容的には同じことを言っているにすぎない。しかも「わろげ」と「ねたげ」と同じ品詞を使用している。作者はそれぞれ別な表現方法をとつたのであるが、結局は同じことをくり返しているわけである。

さらに、私の考えを補強するために、先程挙げた語の中で、とくに「かくて」に注目したい。これは三箇所にわたつて使われている。大和物語において「かくて」が創作に密接な関係があることは既に指摘されているところである。⁽²⁰⁾

そこで、実際に本文にあたつてみよう。①の「かくて」以下の本文、即ち「なほ見をりければ」から「かき抱きてなむ寝にける」までは古今集、伊勢物語にはみられないものである。次に②の「かくて」以下の本文は、表現はやや異なるが、古今集と伊勢物語にもみられる表現である。さらに③の「かくて」が続く。それほど離れていないところに用いている。このことも前述したことを証拠づけるひとつとなろう。しかも、④の「かくて」も①の「かくて」のように伊勢物語にはみられない本文の冒頭に使用している。

ここで注目したいのは、ほぼ連続的と言つてよいくらいに「かくて」を使用していることである。やはり、これは作者にとつて文章を書き継いで行くのに都合のよい語であつた。このことは裏返せば創作されたことを暗示している。しかも、伊勢物語、古今集とほぼ共通する本文の冒頭にある「かくて」を挟んで①と②の「かくて」を使用していることからみて、前後に創作の本文を付け加えていったことが窺えよう。そして、同じ語をほぼ連続して用いていることは作者の文章力の一面をみる事ができる。このことは先程、一四九段の冒頭の本文について指摘したことを補強せしめよう。

一方、重複して用いられている語ではなく、古今集、伊勢物語にみられず、大和物語のみに使われている語に「あはれ」がある。一箇所とはいうものの注目すべき語ではないかと思う。というのは大和物語にあつて「あはれ」は基調をなす語であり、⁽²¹⁾ この物語の本質を探る上で見逃すことのできない語であると思われるからである。この「あはれ」はどのような場面に使われているのかというと、

かくにぎははしき所にならひて、来たれば、この女、いとわろげにてゐて、かくほかにありけど、さらにねたげにも見えずなどあれば、いとあはれと思ひけり。

という箇所に使われている。この部分が伊勢物語では簡潔に記されている。しかも、先程ふれたようにここには重複表現がみられる。このようなことから作者は意図的に使用したのであろう。この「あはれ」は男が元の女に用いたものである。これは作者が彼女に心を注いでいた証であり、同時に彼女がこの章段の中心人物として設定されたことを示している。彼女はあたかも一四一段に出て来る本妻のようである。二人とも夫と別な女の間にあつて苦悩している。ともあれ、元の女のこういう生き様にあつて、一人の女を感動的に作者はこう表現したわけである。

大和物語の作者は古今集、伊勢物語をもとにして新しい面を開拓しようとしたのである。そこには創作意識を顕著に窺うことができたし、当然のことながら、その努力は認められるが、文章力ということになると、それほど長けていたとは思われない。

五

「風吹けば」の歌は古今集をみると、「題しらず」、「読人しらず」とあるが、左注を持っておりこの歌が詠まれたいきさつを長々と記している。しかもこの最後に「いへ伝へたる」とあるから、この歌は人々の間で語り伝えられていたのであろう。

それでも、この歌を一部に持っている伊勢物語や大和物語がこれまた伝承性の強いものとはばかり言えないことは前述した通りである。伊勢物語について見ると、(A)、(B)に加えて(C)¹、(C)²を持っている。(A)は詳しく記されているが、これは松尾氏が先程の1で指摘されたように二人のなれ初めから大人になるまで、話の幅を広げたものと思われる。この傾向は、(C)¹、(C)²の中でも見られる。この(C)の部分は蛇足の感なきにしもあらずである。第一、「行かずなりにけり」、「住まずなりにけり」とあつて、結局、行かなくなつてしまつたということを二度くり返しているにすぎない。

多少なりとも傍道にされるが、それではなぜ(C)を付け加える必要があつたのか。もちろん、読者の興味ということも考えてそうしたのであろうが、注目したいのは(C)²に「大和の方」とか「大和人」という語がみられることである。これは男についてのもので、ここではじめて男が大和の国の人であることがわかるのである。(C)¹で話が終わつてしまつと、男はこの国の人であるのかわからない。伊勢物語の素材になつたと思われる古今集の左注には「昔、大和国なりける人の女に云々」とあるから、作者はそれを生かそうと考えたのであろう。それを(C)²に持つてきたわけである。

大和物語の場合、伊勢物語の(A)、(B)、(C)¹と共通しており、(B)がその大半を占めている。しかも、これらは前述したように伝承されたままではなく、

作者により意図的になされていると予想される。それを本文に即して辿ってみよう。

大和物語を読んで気付くのは、古今集や伊勢物語にみられない表現が散見することである。元の女の描写をみると、「顔かたちと清らなり」とあるから、かなりの美人として設定されている。松尾氏は先程記した2において、男とのつながりで官能的な面が際立っていると言われている。これには異論ないが、このようにした要因を探ってみよう。大和物語において、「きよらなり」「きよら」も含める」という語がどれくらい使われているかを調べてみると次のようになる。

- (1) 色などもといと清らなる扇の、香などもいとかうばしくておこせたる。(九一段)
- (2) 大臣いと清らに蘇芳がさねなど着たまひて、後の宮にまゐりたまうて、(九八段)
- (3) 昔、ならの帝につかうまつるうねべありげり。顔かたちいみじう清らにて、(二五〇段)
- (4) 大和の国なりける人のむすめ、いと清らにてありけるを、(二五四段)

これに一四九段の二つを含めると六箇所に出てくる。いずれも第一級の美しさの意味で用いられている。(1)では定方、(2)では実頼、さらに(3)ではならの帝といった高貴な人物が登場する章段で、それに対応させて用いているかのようである。ところが、(4)の場合、高貴な人物が登場するわけではない。「京よりきたりける男」である。そして、その相手となる女は「いときよら」な人であった。この一五四段というのは虚構化された章段であり、ここに登場するのは架空の人物である。⁽²³⁾ その人物を「京よりきたりける男」としたのは多少なりとも「みやび」という意識があったのであろう。その男の相手であるから「きよら」と表現したのではないか。

ところで、この一四九段の場合、一章段の中にこの語が二箇所に出てくる。これは他の章段にはみられない。それだけに作者は気を配ったのであろう。では、どうしてこの章段でこのような表現をしたのか。これは段末にある「この男はおほきみなりけり」という表現に関係があろう。つまり「おほきみ」とは業平を暗示しているから、彼にふさわしい女性と、彼の衣装にこのような表現にしたのであろう。ここからも作者の創作意図の一面を見ることができよう。

さて、この男はとうとう女の許を離れることになってしまった。その動機について松尾氏は先程の7のように考えておられる。確かに大和物語には「今の妻は、富みたる女になむありける」とあることからそう考えられる。しかし、伊勢物語の場合も明白でないとみるよりも、むしろ「親なく、頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやは」とあるから、生活の頼り所を求めるわけであり、それにはどうしても裕福な所に頼らざるを得なかった。したがって、これとて大和物語と同じことになるわけで、あの本文の中にこのことが含まれているとみるべきであろう。大和物語はそのことを具体

的に示したにすぎなかったのである。さらに、男が今の女の許に通う事情について、松尾氏は前記の3のように考えておられる。しかし、大和物語の場合、多少は男の利己的な面もあるが、単にそうとばかりきめつけるのではなく、伊勢物語のように女へのいたわりの気持ちが大和物語の「思ひわづらひて」という表現になったと思われる。そのために、男は今の女に対し「ことに思はねど」程度の愛情しか抱いていなかったわけである。これは元の女への「かぎりなく思ひながら」に対応させている。その代り、今の女は男に対して「身の装束もいと清らに」させて男をいたわっている。すると、

男
 元の女—財産なし・かぎりなく思ひ
 今の女—財産あり・ことに思はねど

という関係になり、元の女と今の女とは対照的に描かれており、人物面でも配慮していることが理解できる。

男は元の女への未練が募ったのか、そこに戻ってくる。しかし、元の女は表面上、何らねたみや嫉妬を持たない。男はそうした女の行動に不審を抱く。この場面での女の心情について、古今集、伊勢物語では何も示されていないが、大和物語では草子地として「心地にはかぎりなくねたく心憂く思ふをしのぶるになむありける」とある。この表現は野村重碩氏の指摘されているように、後の物語の展開を考慮してのものとされる。また、安田薫氏はこの表現を作者の感情移入とみて、

大和作者はその女の心情を正に「かぎりなく心うしとおもふをしの」んでいると読んだのである。⁽²⁵⁾

と述べておられる。妥当なお考えと思われる。ただ、氏は人物描写について伊勢物語が男の目を通してのものであるのに対して、大和物語は女の目を通してのものとみておられる。しかし、そうとばかり一概には言えないのではないか。というのは男に関した表現も散見するからである。即ち、

○さるわざせずは、恨むることもありなむなど、心のうちに思ひけり。

○あやし、いかにするにかあらむとて、なほ見る。

○見るにいと悲しくて、走りいでて、「いかなる心地したまへば、かくはしたまふぞ」といひて、

○かくて月日おほく経て思ひやるやう、つれなき顔なれど、女の思ふこと、いとみじきことなりけるを、かくいかぬをいかに思ふらむと思ひいでて、などがその例である。この一四九段の場合、男が後手く回っていることは否めないが、これは作者の創作意欲がこのような表現となったのであろう。

元の女は「心憂くねたく思ふ」気持ちを胸に秘めつつ男には「なほ「往ね」「云々」と言う。この行動に対し男は「ねたまでことわざする」のか、あるいは「恨むることもありなむ」と不審に思っている。この場面は古今集、伊勢物語にもみられるが、大和物語は男の心情をより細かく表現している。松尾氏は先程の4に記したように度を過ぎて不自然と言われている。確かに表現自体はぎこちなく、誇張すぎるかもしれないが、ここは元の女の前に

ある心理描写を受けて、作者にとつてはどうしても必要な表現であった。これはまた後になって元の女の気持ちが一気に爆発することへの伏線になっている。端居する場面については先にふれたが、補足の意味で少し述べておこう。大和物語の場合、注目すべきは「使ふ人」が登場していることである。これはどのような事情によるのであろうか。伊勢物語の場合、元の女は男が隠れていることを知って歌を詠んだものなのか、それともそのことを知らずに歌を詠んだものなのか明らかでない。どちらにしても説明がほしいところである。それと、元の女の身分を考慮したのではないか。このことは文末の「この男はおほきみなりけり」という一文にも通じているように思われる。

元の女は召使いに向つて「風吹けば」の歌を詠むわけであるが、大和物語ではその後「この今の妻の家は、立田山をこえていく道になむありける」という本文があり、この歌に立田山が詠み込まれたわけを説明している。野村重碩氏はこの本文がなくても立田山に不審な点はなく不要な説明と言われている。⁽²⁶⁾確かにそうかもしれないが、この本文を設けたのは伊勢物語のように「高安の云々」という本文がないので、今の女の素性が今ひとつはつきりしない。そのために歌に詠んだ立田山を引き説明したわけである。大和物語はこれで話が終っているのではなく、伊勢物語の「河内へもいかずなりにけり」にあたる部分を大和物語では「かくてほかへもさらにかで、つとめにけり」とし、いかにもこの男の妻へのわびる気持ちを本文にしたためているかのである。前後するが、前に述べたようにその前の「かくてなほ見をりければ」から「かき抱きてなむ寝にける」までは大和物語独自の本文である。特に金鏡に水を入れ、それを胸に据えて沸騰する場面は今まで耐え忍んでいた、元の女の心情が一気に爆発したことを示している。このように伊勢物語にはみられない女の心情を時間を追って表現している。松尾氏は前記の6で外面的云々とされているが、その方法はどうかあれ、大和物語は元の女の心理状態というものを徐々に深化させているのである。このように深化させる方法は何も元の女の行動に限ったことではなく、この男の側にもみることができ。伊勢物語の(C)¹にあたる部分を大和物語では「かくて月日おほく経て思ひやるやう、つれなき顔なれど、女の思ふこと、いとみじきことなりける」と、男が今までの経過からわかり得た心情を記している。これは草子地や金鏡にみられた女の心情がもとでこうなったのであり、それゆえひとつの心情の経過としてみれば、自然な表現と言えよう。伊勢物語の場合、このような表現はなく、「まれまれの高安に云々」とあり、簡潔とも言えようが、やはり読者の側に立つと、唐突さは免れない。このことに関して菊地靖彦氏は次のように述べておられる。

そもそも『伊勢物語』は(B)から(C)（稿者注(C)¹、(C)を含める。以下も同様）への移りゆきもなかなか落着かない。（中略）(B)はそれだけでこれ以上にならぬほど完結しているのである。もとの妻との間にあれ程痛切な体験をもつたはずの男が、なぜまたのこのこと高安に出向いて行くのだろう。それはひとたび語った歌の効用を、自ら否定することになるはずである。にもかかわらず『伊勢物語』が(C)部分をもつのは、作者の意図を越えた要因、つまり伝承そのものがそういうかたちであったことによるのではなからうか。とすれば、「伝承の基本形」は『伊勢物語』と『大和物語』に共通

する(B)―(C)までであったのかもしれない。

はたしてそうであろうか。もし、古今集の左注にもそれらしきことが記されていれば、そうも考えられようが、それがみられないことを留意すべきである。伊勢物語の(B)から(C)¹へ移る繋ぎの部分を大和物語では次のようにしている。「かくて月日おほく……(中略)……いとみじきことなりける」は(B)を受けており、また「かくいかぬを……(中略)……ありし女のがりいきたりけり」は(C)¹の方へ続けている。このように両方に文章を係わせることによって自然な展開を計っているわけである。さらに、大和物語のみにある「久しくいかざりければ、つつましく立てりける。」という、この男に関しての文章も続きの文としては適切なものと言える。ともあれ、大和物語はその唐突きを解消するために自然な展開を試みたのである。多少なりとも本題からそれるが、すると伊勢物語が(C)¹、(C)²を付加したのはどのような意図があつたのであろうか。先程、(C)²については読者への興味と男の素性を示すために付加されたのではないかと述べたが、さらにこれら以外の理由が考えられそうである。ここに描かれているのは今の女の上品な姿とその行為である。そしてそのことを嫌いこの男は訪れなかつた。伊勢物語の作者にとつてみれば、この男はみやびな男であり、それを示そうとしたのであろう。これは伊勢物語全編に流れる思想でもある。その展開に唐突さは否めないにしても、作者の意図したみやびな男を浮き立たせるためにも(C)¹、(C)²は必要であつた。これに多少なりとも関連するが、男が今の女を垣間見たときの描写について、松尾氏は前記の8のように言われているが、大和物語では概して誇張な表現が多い。これは伊勢物語と少しでも異つた面を描こうとした創作意欲の現れとみるべきであらう。

なお、ここに登場する二人の女の描き方をみると、元の女は内面的に、今の女は外面的に描かれている。これは伊勢物語にあつても同じことであるが、大和物語にあつてはそれをさらに詳細に描いている。即ち、元の女は忍耐し、それが爆発している。今の女は男によく身づくろいしているが、賤しき様から脱け出ることができなかった。このように内面と外面という、いわば対照的に描くためにも心理描写は必要であつた。

松尾氏のお考えに啓発され、またそれに対する批判を申し述べ、本文を辿りつつ作者の意図なるものを探り出そうと試みて来た。その結果、大和物語の作者は叙述そのものにたけていたと思われぬが、創作意欲は旺盛であり、それが古今集や伊勢物語にはみられない表現となつたのであらう。

六

大和物語一四九段は伝承されていたそのものを採録したとみるよりも古今集、伊勢物語をもとに肉付けしたとみるのが妥当のようである。とりわけ心理描写は詳しく描写されていた。しかし、欠点となつているところもみられた。また一方では自然な展開になつているところもあつた。その原因を

つきつめてみると、ひとつには作者の文章力をあげることができよう。

この一四九段は立田山伝説をとり上げようという考えが根底にあるものの、それは純粹そのものではなく、作者の手が加わっていると思われる。こ
うしたのは後半にみられる虚構の章段や構成と無関係であるまい。そうした意識がこの章段にも及んでいるのであろう。

大和物語という作品は歌語りの集成と言われ、後半は伝説が主になっている。しかし、この一四九段をみると、一概に伝説そのものとは処理できず、
そこには肉付け程度にすぎないが、創作意識がみられたことは注目すべきである。その意識はやがて長編物語を生む芽生えと言ってもよからう。

ここでは多少なりとも先学のお考えとは視点を變えて考察してきたが、結果的には先学のそれと同じになってしまったことも否めない。その上、論
述の過程での考え過ぎ、果ては思わぬ誤りも多いことと思う。大方の御叱正を切に願う次第である。

注(1) 「上代文学史稿」案(二)〔日本文学史研究〕4号 昭和25年、「歌語りの世界」〔季刊国文〕4号 昭和28年3月)

(2) 高橋正治氏「大和物語の位相」〔国語と国文学〕33巻9号 昭和31年9月 後に『大和物語 塙遺書』(塙書房 昭和37年10月)に再録、今井源衛氏

「大和物語評釈・三六 ありはてぬ命まつ間の」〔国文学〕10巻7号 昭和40年6月 後に『大和物語評釈 下巻』(笠間書院 平成12年2月)に再録、

雨海博洋氏『大和物語』に於ける「歌語り」の文学的発想について(二)松学舎大学論集(昭和四十五年度)昭和46年3月 後に『歌語りと歌物語』

(桜楓社 昭和51年9月)に再録、工藤重矩氏「大和物語の史実と虚構―第二・三五段をめぐって―」〔福岡教育大学国語国文学会誌〕18号 昭和50

年11月)、菊地靖彦氏『大和物語』における「大和」をめぐって―一四九段を発端として―〔文芸研究〕103集 昭和58年5月 後に『国文学年次別

論文集 古2 昭和58年』(朋文出版 昭和59年11月)、『伊勢物語・大和物語論攷』(鼎書房 平成12年9月)にそれぞれ再録)など。

(3) 「大和物語における在原業平関係章段について」〔解釈〕24巻4号 昭和53年4月、「大和物語における虚構の方法―一四一・一四二・一五四段を例に
して―」(中古文学)30号 昭和57年10月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和57年』(朋文出版 昭和58年11月)に再録、『古今』『伊勢』『大

和』―ひとつの共通話をめぐって―〔平安文学研究〕73輯 昭和60年6月 後に『国文学年次別論文集 中古1 昭和60年』(朋文出版 昭和61年10月)

に所収)、「大和物語の創作方法―いわゆる「ならの帝」の章段をめぐって―」〔平安文学研究〕76輯 昭和61年12月 後に『国文学年次別論文集 中

古2 昭和61年』(朋文出版 昭和62年11月)に再録、「大和物語の創作方法―伊勢関係の章段―」〔古典論叢〕18号 昭和52年8月)。これらの論考

は『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録。本書第二章第一節・第二節・第三節・第七節・第八節。

(4) 『伊勢物語 アテネ文庫』(弘文堂 昭和38年8月 後に『校註伊勢物語』(笠間書院 昭和40年4月)に再録)

- (5) 「大和物語評釈・四十三 立田山」(『国文学』11巻1号 昭和41年1月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録)
- (6) 「物語の文章—会話文による考察」(京都大学教養部「人文」6集 昭和34年11月 後に『文章と表現』(角川書店 昭和50年6月)に再録)
- (7) 武蔵野書院 昭和56年2月。
- (8) 『大和物語 増訂書』
- (9) 「歌語りと説話」(『日本の説話 2 古代』東京美術 昭和48年10月 後に『歌語りと歌物語』(桜楓社 昭和51年9月)に再録)
- (10) 「筒井筒」(『若杉研究所紀要』20集 昭和58年3月)
- (11) (6)の場合、大和物語では「悲しう」と漢字をあてている(原本では「いとかなしう」と平仮名で記されている)。ここは場面状況から考えていとしいという意味が妥当であろう。それゆえ、平仮名かもしくは「愛し」と漢字で記すべきである。因に諸注釈書において、いずれに訳しているかを調べてみると、
- 「いとしい」と訳しているもの—『日本古典文学大系大和物語』、『日本古典全書大和物語』、『古典文学選 別巻』、『大和物語評釈 下巻』、『大和物語の注釈と研究』、『大和物語全釈』
- 「悲しい」と訳しているもの—『大和物語詳解』(井上覚蔵氏・栗島山之助氏)、『大和物語新釈』、『大和物語詳解』(武田祐吉氏・水野駒雄氏)、『大和物語新講』、『物語日本文学』
- のようになる。これらのことからあいまいな点があつたようである。
- (12) この箇所が御巫本、鈴鹿本では「在中将の事とそきこえし」となっている。また勝命本では「在中将のこととそほんに侍る」とある。
- (13) 「大和物語の創作方法—在中将関係の章段を中心にして—」(『大和物語の研究』)。本書第二章第九節。
- (14) 拙稿「大和物語の構成について—後半の章段を考察の対象として—」(『語文』39輯 昭和49年3月 後に『大和物語の研究』に再録)。本書第三章第四節。
- (15) これらについては、注(13)と同じ論考の中で紹介しておいた。
- (16) 「物語の登場人物と作者—『大和物語』一四九段と『伊勢物語』二三段を中心に—」(『大和物語・平中物語探求』17号 昭和63年3月)
- (17) 「大和物語の創作方法—いわゆる「ならの帝」の章段をめぐる—」(『平安文学研究』76輯 昭和61年12月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和61年』(朋文出版 昭和62年11月)、『大和物語の研究』にそれぞれ再録)。本書第二章第七節。
- (18) 森本茂氏「大和物語の「ならの帝」考」(『平安文学研究』77輯 昭和62年5月 後に『大和物語の考証的研究』(和泉書院 平成2年10月)に再録)。

野村重碩氏も同じ考えのようである(注(10)参照のこと)。

- (19) 『大和物語』一四九段の文章」(『鹿児島女子短期大学紀要』19号 昭和59年1月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和59年』(朋文出版 昭和60年11月)に再録)
- (20) 大木恵美子氏「大和物語における「かくて」の考察」(『二松学舎大学人文論叢』9輯 昭和51年9月)、糸井通浩氏『大和物語』の文章―その「なりけり」表現と歌語り―(『愛媛国文研究』29号 昭和54年12月 後に『語り』言説の研究』(和泉書院 平成30年1月)に再録)
- (21) 南波浩氏「大和物語の特質」(『日本古典全書大和物語』朝日新聞社 昭和36年10月)
- (22) 拙稿「心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに」考―『大和物語』第百四十一段―(『語文』78輯 平成2年11月 後に『大和物語の研究』に再録)。本書第四章第二節。
- (23) 拙稿「大和物語における虚構の方法―一四二・一四二・一五四段を例にして―」(『中古文学』30号 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和57年』(朋文出版 昭和58年11月)、『大和物語の研究』にそれぞれ再録)。本書第二章第二節。
- (24) 注(10)に同じ。
- (25) 注(16)に同じ。
- (26) 注(10)に同じ。
- (27) 注(2)の菊地氏の論文に同じ。

第五節 都の女と地方の女

—『大和物語』における対照性の問題—

大和物語には高貴な人から庶民に至るまで多くの人物が登場し、その喜怒哀楽が描かれている。この作品は歌語りを素材にしているとされているが、中には虚構の章段も見られるようである。また、各章段を連続させる場合、単なる羅列ではなく、意図的にしている箇所もみられる。そのひとつに対照性があげられよう。ここではこの対照性について、一四一、一四二段を対象にして考えてみたい。そして作者が目指したものは何か、いわば作者の胸の内に迫りたいと思う。

一

大和物語の対照性について言及した論考は少ない。管見に入ったものに星野一郎氏の『大和物語』の対照的構成法について—僧侶章段を通して—⁽¹⁾があった。前半の二段から五〇段までの僧侶関係章段と、後半の六二段から一七三段までの僧侶関係章段とが対照的に配置されていると言われている。即ち、僧の僧たる生活態度を記した章段と、僧らしからぬ破戒僧の章段とを、前半部、後半部に分けてその状態を対比し配置されており、これらの話を織り込むことにより、物語の中に変化を作り、単純一律な世界から脱することに成功していることを述べておられる。従来、このような視点からの考察はみられず、その意味でも注目される。私も構成に絡ませ、対照性について言及したことがある。⁽²⁾ただ、私の場合は連続している章段と一章段内での対照性を指摘したもので、星野氏のそれとは視点を異にしている。とは言うものの、大和物語の本質を究明するためにも、この方面からの追究も

望まれる。しかも大和物語に虚構性が指摘されていることを考えると、作者は当然、対照性を考慮したことは十分に予想できよう。⁽³⁾

三

さて、ここで考察の対象にする二章段は連続しているものである。しかもこの一四一段というのは大和物語の前半と後半を分ける上で、ひとつの説⁽⁴⁾となっており、その意味でも注目される。まずは論述の便宜上、両章段を比較しておこう。

| 一四一段 | 一四二段 |
|---|--|
| <p>よしいゑといひける宰相のはらから大和の掾といひてありけり。これがもとの妻のもとに、筑紫より女を率て来てすゑたりけり。もとの妻も、心いとよく、今の妻もにくき心なく、いとよく語らひてゐたりけり。かくてこの男は、ここかしこ人の国がちにのみ歩きければ、ふたりのみなむるたりける。この筑紫の妻、しのびて男したりける。それを、人のとかくいひければ、よみたりける。</p> <p>夜はにいいでて月だに見ずはあふことを知らず顔にもいはましものを</p> <p>となむ。かかるわざをすれど、もとの妻、いと心よき人なれば、男にもいはでのみありわたりけれども、ほかのたよりより、「かく男すなり」と聞きて、この男思ひたりけれども、心にもいれで、たださるものにておきたりけり。</p> <p>さて、この男、「女、こと人にもいふ」と聞きて、「その人とわれと、いづれをか思ふ」と問ひければ、女、</p> <p>花すすき君がかたにぞなびくめる思はぬ山の風は吹けども</p> | <p>故御息所の御姉、おほいこにあたりたまひけるなむ、いとらうらうじく、歌よみたまふことも、おとうとたち御息所よりもまさりてなむいますかりける。わかき時に、女親はうせたまひにけり。まま母の手にいますかりければ、心にもものかなはぬ時もあり。さてよみたまひける。</p> <p>ありはてぬ命待つまのほどばかり憂きことしげく嘆かずもがな</p> <p>となむよみたまひける。梅の花を折りてまた、</p> <p>かかる香の秋もかはらずにほひせば春恋してふながめせましや</p> <p>とよみたまへりける。いとよしづきてをかしくいますかりければ、よばふ人もいとおほかりけれども、返りごともせざりけり。「女といふもの、つひにかくて果てたまふべきにもあらず。ときどきは返りごとしたまへ」と、親もまま母もいひければ、せめられてかくなむいひやりける。</p> <p>思へどもかひなかるべみしのぶればつれなきともや人の見</p> |

となむいひける。

よばふ男もありけり。「世の中心憂し。なほ男せじ」などいひけるものなむ、この男をやうやう思ひやつきけむ、この男の返りごとなどしてやりて、このもとの妻のもとに、文をなむひき結びておこせたりける。見ればかく書けり。

身を憂しと思ふ心のこりねばや人をあはれと思ひそむらむとなむ、こりずまによみたりける。

かくて、心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに、男は心かはりにければ、ありしごとあらねば、かの筑紫に親はらからなどありければいきけるを、男も心かはりにければ、とどめでなむありける。もとの妻なむもろともになりひにければ、かくていくことを、「いと悲し」と思ひける。山崎にもろともいきてなむ、舟に乗せなどしける。男も来たりけり。このうはなりこなみ、ひと日ひと夜、よろづのことをいひ語らひて、つとめて舟に乗りぬ。いまは男もとの妻は帰りなむとて車に乗りぬ。これもかれも、いと悲しと思ふほどに、舟に乗りたまひぬる人の文をなむもて来たる。かくのみなむありける。

ふたり来し道とも見えぬ浪の上を思ひかけでもかへすめる
かな

といへりければ、男も、もとの妻も、いといたうあはれがり泣きけり。漕ぎいでていぬれば、え返りごとせせず。車は舟のゆくを見てえいかず、舟に乗りたる人は、車を見るとおもてをさしいでて、漕ぎゆけば、遠くなるままに、顔はいとちひさくなるまで見おこせければ、いと悲しかりけり。

るらむ

とばかりいひやりて、ものもいはざりけり。かくいひける心ばへは、親など、「男あはせむ」といひけれど、「一生に男せでやみなむ」といふことを、よとともにいひけるもしるく、男もせで二十九にてなむうせたまひにける。

(注) 本文は『新編日本古典文学全集大和物語』に拠る。ただし、傍線、波線、二重傍線は稿者。

一四一段の冒頭を飾る「よしいゑ」なる人物については従来、実在の人物があてられていたが、あえてそう考える必要もないという考えが現在には有力になつてゐる。したがつて大和の掾なる人物も架空の人物になるわけである。そしてこの章段自体も虚構と考えられる。また、一四二段の「故御息所」については伊勢を指し、その姉は架空の人物と言われている⁽⁷⁾。そしてこの章段も虚構であることが指摘されている⁽⁸⁾。このように、これら二章段は虚構と考えてよからう。

大和物語の作者は両章段を関連するように意識している節がある。まず、両章段の冒頭である。男女の違いはあるものの、兄弟、姉妹を持ってきてゐる。次に、言い寄る男への対応の場面が両章段にみられる。しかもここには「よばふ」、「男す」、「返りごと」と言った語がみられる。これらのことから意識していることは疑うべくもあるまい。

一四一段では冒頭に「よしいゑといひける宰相のはらから大和の掾といひてありけり」とあるから、彼がこの章段の中心人物と考えられないこともない。しかし、この章段にある四首の歌はすべて筑紫の女が詠んでおり、このことから彼女がここでの中心人物と考えてよからう。すると、この冒頭文は筑紫の女を上京させるに際し、その相手として設定した本文と考えられる。また、本妻が中心人物という考えもあるが、彼女は一首も詠んでいないことから否定してよからう。この章段での焦点のあて方が常に筑紫の女になつてゐることも理解できよう。一方、一四二段の中心人物は故御息所の御姉として問題あるまい。これは一四一段であげた中心人物の条件にすべてあてはまることでも理解できよう。

二人は地方の女と都の女ということで連続しており、かつ虚構を目指したからには、作者がそれだけに工夫を凝らしているのではないかと考えられる。

四

両章段に登場する人物についてみるに、一四一段ではすべての人が「心よき人」で仲よく描かれている。これに対して、一四二段では故御息所の御姉と両親とは不仲に描かれている。では、細部の点で中心人物である二人の女性はどのように描かれているであろうか。

まず敬語の使用についてみると、波線を付したように故御息所の御姉の動作には使われているが、筑紫の女の動作には使われていない。これは都の女と、一方は地方の女という身分的なことを考慮してのことであろう。ただ、すべてが統一されているわけではない。故御息所の御姉に敬語を用いていない箇所もあるし、反対にただ一箇所、二重傍線を付したように筑紫の女に用いられているところもみられる。これはその場面における登場人物への作者の心情の表れとも考えられるが、後考を待ちたい。ともあれ、敬語の使用は大筋において変わらない。これを通して作者の意図を窺い知ること

ができよう。

次に性格の面からみると、筑紫の女は浮気心が強いが、故御息所の御姉にはそうした面が少しもみられない。これらのことが伏線となつて、筑紫の女は「よばふ男もありけり……（中略）……男の返りごとなどしてやりて」という行動に、故御息所の御姉は「よばふ人もいとおほかりけれど、返りごとせざりけり」という行動にそれぞれ現われている。しかも、この後、故御息所の御姉は親にせきたてられ返歌し冷淡にあしらっている。筑紫の女にはそのようなことはない。故御息所の御姉は「一生に男せでやみなむ」という信念を抱き、かたくななまでに男との関わりを拒み続けたのである。さらに故御息所の御姉の才能については「いとらうらうじく、歌よみたまふことも……（中略）……まさりてなむいますかりける」とあり、また彼女の才気や容姿についても「いとよしづきてをかしくいますかり」とある。因に「らうらうじ」、「よしづく」という語は大和物語にあつてここだけにしかみられない。それだけに作者はここで才気ある人物を描きたかつたものと思われる。一方、筑紫の女はどうか。才気に関する描写はみられない。しかし、あれだけの和歌を詠んでいるのだから、才能の持ち主とも考えられる。ただ、このことが表現されていない。むしろここでは故御息所の御姉の方が才気あふれる女性として描かれていることに注意を払うべきであろう。ここでは都の女としての彼女を際立たせているのである。これはひとつの対照化を目指したものと考えてよからう。

このほか、兩章段をみて注意すべきこととして、「あはれ」と「をかし」の違いがある。一四一段には「あはれ」（「あはれなり」、「あはれがり」を含む。以下も同じ。）が三例みられるが、「をかし」は一例もみられない。一方、一四二段には「あはれ」の用例はひとつもみられないが、「をかし」は一箇所だけにみられる（「あはれ」と「をかし」については本文に傍線で示した。「あはれ」と「をかし」について、神尾暢子氏は

「あはれなり」は、主体が対象を同質と認定したところに成立する感動であり、主体が対象を同質と認定しないところに成立する感動が「をかし」である。⁽¹⁰⁾

と述べておられる。このことから「あはれ」と「をかし」は対照的な語と考えられる。大和物語において「あはれ」は多用されており、ひとつの基調を成す語である。⁽¹¹⁾ それなのに一四一段にはひとつも用いられていないのである。これはひとつに登場人物の描き方によるのではないか。一四一段の場合、前述の如く、登場人物のすべてが心よき人であり、このことが「あはれ」という表現になっているのであろう。ところが、一四二段の場合、父親と継母は故御息所の御姉に対してよくもてなしていなかったようである。これは「心にものかなはぬ時もありけり」、「せめられてかくなむいひける」とあることによつても理解できよう。このことから父親と継母はどうてい「あはれなる人物」から程遠い。だが、故御息所の御姉にも「あはれ」という語を用いていない。彼女には「をかし」を用いている。これは彼女の容姿についての語である。そして彼女にはこれ以外に前述したように「らうら

うじ」「よしづく」という語を用いて、才気ある人物として描かれている。いわば「あはれ」の代わりにこれらの語を用いたと言ってもよからう。こ
うみてくると、意図的に「あはれ」と「をかし」を使用していると考えられる。

一四一、一四二段における様々な描写をみてきた。その結果、すべてが対照的になっていた。これはこれらの章段を創作するにあたっての手法と言っ
てよからう。

五

一四一、一四二段と連続させ、それぞれの中心人物を筑紫の女、故御息所の御姉としたのは都の女と地方の女ということで対照化を狙ったのである
う。しかも二人の女を筑紫の女、故御息所の御姉としたのは作者の意識の中に実在の人物がモデルになっているのではないか。一四一段にある和歌が
一二九、一三〇段の和歌をもとに創作されたことはすでに指摘した。⁽¹²⁾ 一二九、一三〇段には「筑紫なりける女」が登場する。注目したいのはその前の
一二六段から一二八段までが檜垣の御の話になっていることである。作者が一四一段の和歌を創作する際に檜垣の御の歌を利用しないのはその素材に
もよろうが、具体的な人物の名を避けたのではないか。その実、「筑紫なりける女」が登場する一二九、一三〇段を利用しつつも、この前にある檜垣の
御の章段を軽視できず、意識下に檜垣の御があつたのであろう。一四二段の「故御息所」が伊勢をモデルにしていることを考えると、彼女に対抗でき
る地方の女流歌人としては檜垣の御しか考えられなかった。あれだけの和歌を詠んでいることでも彼女をモデルにしているのであろう。このことは故
御息所の御姉についても言えるのではないか。伊勢は初段と一四七段に登場し、特に初段では宇多天皇と和歌を詠み交わしている。しかし、大和物語
の作者は創作に際し、これらの章段を利用しているわけではない。先程の一四一段のように他の作品を資料にしている。⁽¹³⁾

二人の女性を対照化させる中で、前にもふれたが、特に容姿や才気の描写では故御息所の御姉の方が詳しくあった。筑紫の女は「心よき人」とあるだ
けであった。このことを含めて作者の意図するところは何であつたのか。それはみやびな女とひなびな女を描こうとしたのではないか。確かに伊勢物
語の「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」(初段)、「さるさがなきえびす心を見ては、いかがはせんは」(十五段)と言った本文がみられる
わけではない。しかし、筑紫の女と故御息所の御姉とその名が示すように地方の女と都の女とをそれぞれ二章段の主人公にしたのはその意図があつて
のことであろう。前にも述べたように作者は故御息所の御姉の容姿や才気について詳しく記述している。これはみやびに重きを置こうとした表れであ
らう。故御息所の御姉は両親と不仲であつたが、ひとつのかたい信念を持ち続け、都を離れることなく、この地で臨終を迎えている。一方、筑紫の女

は自分で犯した罪がもとで都に留まることができず、筑紫へ帰って行かざるを得なかった。結局、ひなびの地から上京した者はそこへ帰って行ったのである。二人とも不幸な結末となるが、みやびの地で二九歳で死んだ故御息所の御姉の方が一段と悲しみの度合が強かった。これも都に重きを置いている作者の意図するところであった。

六

大和物語一四一、一四二段の主人公に関することを中心に比較しながら考えて来た。二人の女性は対照的に描かれていた。筑紫の女は外なる人であった。とにかく外に目を向け、行動的な女性と言えよう。これに対して故御息所の御姉は内なる人であり、慎み深く、控え目な女性と言えよう。二人はそれぞれ地方から上京した女と都の女であり、言わばひなびな女とみやびな女であった。作者の意図したものはこのことにあつたと考えてよからう。前にも述べたように大和物語の後半を何段からとするかについては諸説ある。そのひとつに一四一段説がある。大和物語の作者は一四一、一四二段と虚構の章段を連続させ、かつ対照化を試みており、かなりの力の入れようである。これは大和物語の後半説を考える上で一石を投じるかもしれない。

注(1) 「大和物語探求」7号、昭和51年9月。

(2) 『大和物語』小考—構成意識をめぐっての一試論—(『商学集志 人文科学編』25巻6号、平成5年9月。後に『大和物語の研究』(翰林書房、平成6年2月)に再録)。本書第三章第一節。

(3) 高橋正治氏「大和物語の位相」(『国語と国文学』32巻9号、昭和31年9月、後に『大和物語 壙選書』(壙書房、昭和37年10月)に再録)、今井源衛氏「大和物語評釈・三六 ありはてぬ命まつ間の」(『国文学』10巻7号、昭和40年6月。後に『大和物語評釈 下巻』(笠間書院、平成12年2月)に再録)、拙稿「大和物語における虚構の方法—一四一・一四二・一五四段を例にして—」(『中古文学』30号、昭和57年10月。後に『大和物語の研究』に再録 本書第二章第二節)

(4) 今井源衛氏「大和物語評釈・三四 松の葉にふる白雪」(『国文学』10巻5号、昭和40年4月、後に『大和物語評釈 下巻』に再録)、松尾拾氏「大和物語文体試論」(『語文』24輯、昭和41年6月)、高橋正治氏『日本古典文学全集大和物語』(小学館、昭和47年12月)、柿本獎氏『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院、昭和56年2月)、高橋亨氏「大和物語」(大曾根章介氏・他編集『研究資料日本古典文学』①物語文学)明治書院、昭和58年9月)など。

- (5) 橘良殖ヨシタケ（大和物語鈔、大和物語抄、大和物語詳解など）
- (6) 高橋正治氏『日本古典文学全集大和物語』、拙稿「大和物語における虚構の方法―一四一・一四二・一五四段を例にして―」。本書第二章第二節。
- (7) 今井源衛氏「大和物語評釈・三六 ありはてぬ命まつ間の」。注(3)参照。
- (8) 高橋正治氏「大和物語の位相」。注(3)参照。
- (9) 高橋正治氏『日本古典文学全集大和物語』。注(4)参照。
- (10) 「大和物語と平中物語―「あはれ」と「をかし」を中心として―」（『物語の方法 語りの意味論』（世界思想社、平成4年4月）
- (11) 南波浩氏「大和物語の特質」（『日本古典全書大和物語』、朝日新聞社、昭和36年10月）、拙稿「心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに」考―『大和物語』第四百十一段―」（『語文』78輯、平成2年11月、後に『大和物語の研究』に再録）。本書第四章第二節。
- (12) 注(6)の拙稿に同じ。
- (13) 一四二段にある「ありはてぬ」の歌は『古今集』に平貞文の歌とみえ、また、『伊勢集』（西本願寺本、群書類従本）にもみられる。

第六節 大和物語の創作方法

— 第三段を考察の対象として —

—

益田勝実氏が「上代文学史稿」案(二)（『日本文学史研究』4号、昭和25年）においてはじめて「歌語り」という概念を提唱されて久しい。これは貴族社会における口承文芸で和歌とゴシップの複合したものをいう。歌語りは『大和物語』形成の基盤になっており、それゆえ『大和物語』は歌語り集と言われている。この提唱により、『大和物語』の生成について再考せざるをえなくなった。以後、歌語りをめぐる研究は本格的に展開されることになり、現在では学界共有の概念となっている。

ただ、益田氏の論文では理論が先行し、『大和物語』の中の歌語りについて具体的に言及しているわけではない。確かに前述の如く歌語りは『大和物語』形成の基盤になっており、そこに色濃く反映していると思われる。が、その一方で文章化するにあたり、それに肉付けをする場合もあるだろうし、あるいは一歩進んで創作意識をめぐらし、虚構化へと進むことも考えられよう。とりわけ後者の場合、物語の創作方法という点で注目される。事実、そのような観点からの研究も見られる。⁽¹⁾ 私自身も驥尾に付しその観点から報告してきたが、⁽²⁾ まだまだ不十分なことは否めない。そこで、ここでは拙論を補足する意味で、『大和物語』第三段を取り上げ、そこにみられる創作性について考察してみたいと思う。

—

『大和物語』第三段は次のような内容である。

故源大納言、宰相におはしける時、京極の御息所、亭子院の御賀つかうまつりたまふとて、「かかることなむせむと思ふ。ささげ物ひと枝ふた枝せさせてたまへ」と聞えたまひければ、鬚籠をあまたせさせたまうて、としこにいろいろに染めさせたまひけり。敷物の織物ども、いろいろに染め、縊り、組み、なにかとみなあづけてせさせたまひけり。その物どもを、九月つごもりに、みな急ぎはててけり。さて、その十月ついたちの日、この物急ぎたまひける人のもとにおこせたりける。

ちぢの色にいそぎし秋はずぎにけりいまは時雨になにを染めまし

その物急ぎたまひける時は、まもなく、これよりもかれよりも、いひかはしたまひけるを、それよりのちは、そのことやなかりけむ、消息もいはで、十二月つごもりになりにければ、としこ、

かたかけの舟にや乗れる白浪のさわぐ時のみ思ひいづる君

となむいへりけるを、その返しをもせで、年こえにけり。さて、二月ばかりに、柳のしなひ、物よりけに長きなむ、この家にありけるを折りて、

あをやぎの糸うちはへてのどかなる春日しもこそ思ひいでけれ

とてなむやりたまへりければ、いとにくくめでて、のちまでなむ語りける。

(注) 本文は『新編日本古典文学全集』(小学館、平成6年12月)に拠る。以下も同様。

『大和物語』にあつて著名な章段ではないが、この物語が描く宇多帝サロンの一翼を担っており、その意味でも軽視できないように思われる。その内容は宇多上皇六十賀にまつわる話である。これは『貞信公記』の延長四年九月二十八日の条に「壬午、亭子院有法皇御賀事」とあり、また、『日本紀略』同日条に「京極御息所奉賀法皇六十御賀」と、同じく十二月十九日条に「公家奉賀太上法皇六十御賀」とある。『日本紀略』では前者が該当する。つまり、延長四年(九二六)九月二十八日に催されたことになる。その御祝いに献上の品を京極の御息所が源大納言を介して、としこに依頼し、彼女はそれを急いで仕上げ、これを契機にとしこ源大納言が歌のやりとりをするという話である。

では、この章段について先学はどのように考えているのであろうか。今井源衛氏は本段が初段、二段に続き宇多帝の連想によって取り上げられ、その主題は上皇ではなく源大納言としこの優雅な和歌に転じていると述べている。そして本段の描写について

日常道徳の次元を忘れ去る芸術至上主義的な当事者たちの享樂のしかたであり、またこの一段の立場なのである。和歌の功德やすばらしさを讃えることで一篇を完結する点、典型的な歌物語といつてよい。⁽³⁾

と評している。次に柿本獎氏は

第二段落（稿者云「その物急ぎたまひける」以下）は第一段落の展開であり、源大納言の詠歌における心憎い風流の話となる。二段に対する異趣は、第一段落においては、二段の歌の痛切の声が算賀を背景とする明るい趣味に遊ぶ声に変わる。それが第二段落では更に延びて、詠歌における時節勘当の妙、趣味、遊びの精神を語る。

とこの章段の話の展開について述べている。⁽⁴⁾

さらに、高橋正治氏もこの章段の性格を

二段の亭子の帝の連想による副次的段章は、第一義段章の話が内容的に「あはれ」なものであるのに対し、歌の機知性に重点が置かれている傾向があり、「をかし」の性格が強い。⁽⁵⁾

ととらえている。このように、この章段の内容や性格等について言及している。

一方、この章段の生成に関してふれたものに島津忠夫氏の「大和物語ノート（1）歌と歌語り」⁽⁶⁾と中島和歌子氏の「大和物語」第三段をめぐって—清蔭歌の特徴と地の文の貢献—⁽⁷⁾がある。両氏とも示唆に富んだ考えを提示しており、詳しくは後にふれることにする。

以上みてきたように、三段をめぐっては諸先学により種々の面から考察され成果を上げている。これらは今後の研究への指標になることはいうまでもない。

三

この章段には三首の歌がある。最初にとしこが詠んだ「ちぢの色に」の歌の類似歌が『古今和歌六帖』（以下、古今六帖と略称）にあり、このことについてはすでに指摘されていたもの⁽⁸⁾、その関係については注目されなかつたようである。そんな中であつて、両者の関係について言及したのは島津忠夫氏で、氏は前にふれた論文で次のように述べている。

『古今和歌六帖』の巻一、時雨の歌を集めたところに、作者名はなく、ちぢのいろにう、つり、し、秋は過ぎにけり、今日、日のしぐれになにをそめましとあることは特に注意を要する。この六帖との異同並びに、大和物語の本文が、この三句のところ動いている事などから、果たして、としこの歌であつたかどうか疑問である。というよりは、六帖の歌に都合よく手を入れて、この話に結びつけたのではないかと思われる。つまり、この六帖にとられている歌から見ると、もともとこの歌は、ただの初冬の時雨を詠んだだけの歌で、こんな語りをともなつていなかった。それを巧みにとら

えて「うつりし」を「いそぎし」とかえる事によって、この場の歌として生かされてきたのではないかと思う。

以下の拙論の指針となるため引用が長くなつたが、要するに『大和物語』が『古今六帖』歌を利用し、としこが詠んだふうに変更したのではないかと考えている。ただ、発表誌の性格上、結論のみに終始しているが、注目すべき考えを提起している。また、中島和歌子氏も先程の論文の中で次のように述べている。

前者（稿者云「ちぢの色に」の歌のこと）については、『全書』『評釈』『全釈』は異伝扱いではあるが、この読み人知らずの古歌を本歌として、としこが、自分に合うよう、「移りし秋」を「急ぎし秋」と変えたと考えられることでもできるのではないか。

としこが『古今六帖』の古歌を利用し、それを改変して詠んだのではないかと考えている。両氏の考えはこの歌を『大和物語』作者の改変か、それともとしこがこの歌を利用したのではないかという点で相違するものの、『大和物語』が『古今六帖』歌を利用したのではないかという点では一致している。『古今六帖』歌に異同があることと『大和物語』との関係は否定しがたいものがある。

そこで、このことを確認するためにこれ以外の『大和物語』と『古今六帖』の共通歌をみていこう。両者の共通歌は四十首にのぼる。このうち両者の直接関係が予想される、共通する歌は六首（三段を除く）みられ、今、これらの章段をあげ、『古今六帖』歌の異同を記しておく。なお、百十三段には異同が見られないので除いた。

(ア) 二十八段 古今六帖二、きり

おなじ人、かの父の兵衛の佐うせにける年の秋、家にこれかれ集りて、宵より酒飲みなどす。いますからぬことのははれなることを、まらうどもあるじも恋ひけり。あさぼらけに霧立ちわたりけり。まらうど、

朝霧あさぎりのなかに君ますものならば晴るるまにまにうれしからまし

といひけり。かいせう、返し、

ことならば晴れずもあらなむ秋霧のまぎれに見えぬ君と思はむ

まらうどは、貫之・友則などになむありける。

(イ) 八十二段 古今六帖二、きり

おなじ女のもとに、さらに音もせて、雉をなむおこせたまへりける。返りことに、

われをばかりにおもひけるかな

栗駒の山に朝たつ雉よりもかりにあはじと思ひしものを

となむいひやりける。

(ウ) 百十段 古今六帖四、かなしび

おなじ女、人に、

大空はくもらずながらながめつゝ神無月年のふるにぞそではぬれけり

(エ) 百三十五段 古今六帖五、ひとり

三条の右の大臣のむすめ、堤の中納言にあひはじめたまひけるあひだは、内蔵の助にて、内の殿上をなむしたまひける。女はあはむの心やなかりけむ、心もゆかずなむいますかりける。男も宮仕へしたまひければ、えつねにはいませざりけるころ、女

たき物のくゆる心はありしかどひとりいかで君にしらせんはたえて寝られざりけり

返し、上手なればよかりけめど、え聞かねば書かず。

(注) 『古今六帖』の本文は『古今和歌六帖 上巻 本文編』（養徳社、昭和42年3月）に拠り、異同に関しては『古今和歌六帖 下巻 校異編』（養徳社、昭和44年3月）を参照した。また、波線、傍線及び濁点は稿者が施した。これらは以下も同様。

まず、(ア)の二十八段からみていくことにする。『古今六帖』では贈答歌の体裁をとっておらず、しかも『大和物語』とは逆の配置になっていて作者名もみられない。また、異同に関しては『大和物語』で「朝霧」のところは『古今六帖』では「川霧」になっている。もし、『古今六帖』が『大和物語』から取ったとすると、なぜ逆に配置し、「朝霧」を「川霧」としたのか、さらに作者名を記さなかったのかという問題が生じてくる。

一方、この逆はどうであろうか。地文と和歌の関わりをみると、「あさばらけに霧立ちわたりけり」と地文にあり、これを受けて歌で「朝霧の…」となつて、両者の緊密度が増している。また、その返し歌も「秋霧のまぎれ云々」とあつて、地文にみられる「秋」「霧立ち」に照応している。

こうみてくると、『大和物語』の方がより物語的になっている。だからと言つて、『大和物語』二十六段が『古今六帖』をもとにしていないとは断定できない。ただ、注目すべきは元方集の断簡と言われている「部類名家集切元方集」の中にこの歌が含まれていることである。元方と戒仙は同一人物の可能性が高い。⁽⁹⁾元方は業平の孫にあたる。『大和物語』には在中将（業平）関係の章段が六章段連続してみられ、また百四十九段もその影響が強い。⁽¹⁰⁾作者が『伊勢物語』に関心を抱いていたのは確かであろう。ここではこれらのことが創作の一因にあつたのではなからうか。ともあれ、ここは『古今六帖』を利用したとは断定できないにしても、『大和物語』の方に手が加わっていることは疑いあるまい。

次に(イ)をみていこう。ここは波線で示したように雉を贈ってきたので、それを受けて返歌で「かり」を詠み込んでいると思われる。しかし、歌の異同をみると意味上、微妙に違ってくる。『古今六帖』は「いいかげんな気持ちに思っているのですね」の意味になり、文末を感動表現にして男へのかすかな望みに期待を寄せている。これをそのまま『大和物語』に適用させると不具合が生じる。それは地文に「さらに音もせで、雉をなむおこせたまへりける。」とあるからである。ふだん消息もくれない上にたまたま「雉」（「来ない」の意を含める）を贈って来たわけで、女にとっては二重の苦しみを味わうことになる。そのために歌で「かりにはあはじと思ひしものを」と一段と強い表現になっており、まさにこの地文と歌の表現は照応している。その反面、両者を見て『古今六帖』が『大和物語』をもとに改変する理由は見当たらない。ここは、もともと『古今六帖』のように単独で詠まれ、感動をともなつたものなのであろう。それを『大和物語』は物語化するにあたりその一部を改変したのではなからうか。両者の歌が意味上、正反対になつていることはそれを暗示させるものがある。

さらに(ウ)をみると、ここでは三句に異同がある。『古今六帖』で「ながめつゝ」のところは『大和物語』では「神無月」とある。いずれも地文と照応しているわけではない。『古今六帖』のこの歌の前後にある歌を列挙してみると次のようである。

- 511 さためなきよをきくころのなみたこそそてのうへなるふちせなりけれ
 512 やまのみなうつりてけふにあふことははるのわかれをとふとなりけり
 513 きみまさてあれたるやとのいたまより月のもるにもそてはぬれけり
 514 おほそらはくもらすなからなかつゝとしのふるにこそてはぬれけり
 515 なくなみたあめとふらなんわたりかはみちまさりなはかへりくるかた
 516 ふか草のやまへのさくらし心あらはことしはかりはすみそめにさけ
 517 はなよりも人こそあたになりにつれいつれをさきにこひんとかみし

これらの歌は「かなしび」の項に見られ、傍線等で示したように語句や心情面で関連している。問題となる514番歌をみると、前歌の513番歌の「月のもるにも」とこの「としのふる」と類似的な表現を用い、両歌とも「そてはぬれけり」で終わっている。さらに「ながめ（長雨）」は前の歌の「そてはぬれけり」と後の歌の「あめ」ともそれぞれ関連している。また、516・517番歌は「桜」を詠んでいるが、「すみそめにさけ」、「あたになりにつれ」とあつて、悲しみにくれ、心情的に515番歌に近く、「かなしび」の項にふさわしい歌となつている。このように語句の上で前後を関連させ、配列している。『大和物語』のようにここに「神無月」とあると、たとえば、そこから時雨を連想させるにしても『古今六帖』のような関連性は薄い。

もちろん『古今六帖』の改変ということも考えねばなるまい。もしそうだとすると、なぜこの歌を『古今六帖』の「時雨」、もしくは「神無月」の項に入れなかったかが疑問である。ここは「ながめつゝ」とあることを含めて『古今六帖』歌の方が「かなしび」の項にふさわしい歌となっており、それを『大和物語』は改変したと考えるのが妥当であろう。なぜ、こうしたかは詳らかではないが、強いて憶測すると、この章段と前の章段は主人公が同一人物であり、前の章段の歌に「草にかかれる露の命」という表現があることからこれに関連づけたのであろうか。

最後に(エ)をみることにする。今井源衛氏は両者の関係を考えるに際し、『古今六帖』「ひとり」の項に見える次の四首をあげている。

たきものゝかはかり思ふこの此のひとりはいかて君にしらせん

たきものゝこのしたけふりふすふ共われひとりをはしなすましやは

このしたにひとりやわひしたきものゝそれもおもひにたへてとかきく

わかためはねふたきものをひとりしもおきあかさしとおもほゆる哉

これらの歌を含め、『大和物語』との関係を次のように述べている。

『大和物語』の「たきものの」の歌とこれらの歌との時間的な前後関係はどうかという点が気になるが、それを明らかにすることは困難であろう。おそらくは、十世紀の中葉に於いてもっとも流行した類型的修辞であったと思われる。この歌もそれであり、はたして、本段のような事実があったか否か、ひよつとすると「くゆる」に「慣ゆる」を掛けるという新趣向を披露したさいの作り話ではないかの疑いを禁じえない。⁽¹¹⁾

氏は四首との関わりから類型的修辞ととらえ両者の関係を否定している。確かにこれらに四首には「たきもの」、「ひとり」が詠み込まれており、そう考えられるかもしれない。しかしこの歌の中で、『大和物語』の歌と、その類似歌としてあげた「たきものゝかはかり思ふ云々」の歌は語句の上でもっとも関係が深い。また異同箇所において『古今六帖』の「かはかり思ふこの此の」が『大和物語』では「くゆる心はありしかど」とあって、より具体化されている。そして、下句でこれらを受け、『古今六帖』が「ひとりはいかて君にしらせん」と、『大和物語』が「ひとりはたえて寝られざりけり」とそれぞれ連動させている。『古今六帖』では女が単にその思いをどう知らせようかとなるのに対し、『大和物語』では感情を表出させ一人では寝られなかったと悲痛な叫びになっている。また地文をみると女の心情を「心もゆかずなむいますかりける」と記しており、これを受けて歌で「くゆる心はありしかど」という表現になっている。さらに言えば、地文に「えつねにはいませざりける」とあるが、これを受けて歌で「ひとりはたえて寝られざりけり」という表現になっていると思われる。ここでも歌が地文に照応している。このように「たき物のくゆる心は…」の歌と地文との密接な関わりを認めることができた。これらは意図的になされたものと思われ、ここから『大和物語』の創作性を窺えよう。

以上、(ア) (エ)をみてきたように『大和物語』と『古今六帖』との直接関係は、いまひとつはつきりしないものの、総じて『古今六帖』の方が古い姿を残していると言えよう。『大和物語』は歌を改変することで地文と歌を照応させたり、またある箇所では内容に合わせて改変したりしていた。これらのことから、少なくとも『大和物語』の方が創作的であることは否めない。このような現象は島津、中島両氏の考えを補強することができよう。

このことは三段にある「ちぢの色」の歌の「いまは」の異同にも波及しているようだ。これは『古今六帖』で「今日の」とあったのが「いまは」となっているだけで、それほど変わらないが、この章段の性格を考える上で見逃せないように思う。この語は『大和物語』にあつて十六例みられる。使われている箇所が地文と歌との違いはあるものの、そのなかでかつて考察した初段では「亭子の帝、いまは、おりあさせたまひなむとすること」とあつて、初段の資料になつたと考えられる『伊勢集』にはこの語がみられないことから、意図的改変と考えられる。ここではこの語を使用することで、帝の讓位という場面に緊張感を表出させている。また百四十一段をみると、ここも「いまは、男もとの妻は帰りなむとて車に乗りぬ」とある。筑紫の女との別れという張りつめた場面にこの語を用いている。しかもこの章段が虚構化されていることを考えると、意図的にこの語を用いたことは否めない。まだまだ他の用例を検討しなければならないが、少なくともある効果を考慮し意図的に用いていることは理解できよう。このように「今は」という語は『大和物語』の創作と密接に関わっていると考えられる。三段でも「いまは」としたのは決して偶然ではない。こうすることとしこの心情をより強く表出させたわけである。ともあれ、ここでも『古今六帖』歌を改変したと考えてよからう。

ここでは『大和物語』と『古今六帖』との関わり、「今は」の異同を通して、としこが詠んだ「ちぢの色」の歌は、島津氏が指摘したように『古今六帖』歌をもとにしているという事実を確認した。一体これは何を意味しているのであろうか。歌語り云々ではもはや説明できない。そこから一歩抜け出て、ここには『大和物語』作者の創作意識を垣間見ることができるとはあるまいか。もちろんこれ一首だけでの推論は差し控えるべきであるが、後述するとしこが詠んだ「かたかけの」の歌をみると、その思いがいっそう強くなる。

四

前述したように宇多上皇六十賀は『貞信公記』によると延長四年(九二六)九月二十八日に催された。その日に間に合わせるように京極御息所は源大納言を介してとしこに献上の品の染色を依頼したわけである。としこは「ちぢの色」の歌を十月一日に源大納言に届けているから、六十賀の後にこうしたことになる。しかし、その一方で献上の品にこの歌を添えて贈り届けたという考えがある⁽¹⁴⁾。もしそうだとした場合にも六十賀後のことには変わりな

い。また、『大和物語追考』には宇多上皇六十賀に関して次のような記述がある。

案此段亭子の御賀の事勘物には延長四年丙戌十二月十九日京極御息所賀法皇六十算有行幸など侍り（中略）御賀の日は十二月十九日にも侍るへし此の段に御賀の折のしきものの織物をなかつきつこもりとしこのせしことありしかれば九月廿八日より後にこの賀のありし事しれたり

〔注〕 本文は本多伊平氏編著『北村季吟大和物語抄付大和物語別勘』（和泉書院、昭和58年1月）に拠る。

『大和物語追考』も献上の品に歌を添えて贈ったとみて十二月二十八日を支持している。ただ『大和物語追考』のいう勘物は前記の『日本紀略』十二月十九日条の「公家奉賀太上法皇六十御賀」に拠っているのではないか。たとえ、そうだとしても十二月十九日はあくまでも「公家奉賀」にほかならなかった。これらの記述から九月二十八日はうごかないと思われる。ここは御祝の品を献上した日と「ちぢの色に」の歌を贈った日とを区別すべきではないか。それというのも御祝いの品を宇多上皇六十賀の数日前か、もしくは当日までに贈り届けるのが普通だからである。したがって、実質的には、この章段の前半は「みな急ぎはててけり」で終わっていると考えられる。それゆえ「ちぢの色に」の歌は六十賀が済んだ後に詠んで贈ったと思われる。

さて、そうするとここで問題になるのは「ちぢの色に」の歌の下旬の「いまは時雨になにを染めまし」が何を意味しているかである。今、このことにふれている注釈書類にあたってみよう。

(ア) としこ歌也心は秋の色々に染まる野山をいそぎの糸に添ていひ過し秋をしたひ今は時雨になにを染ましと時刻の移り行きまをよめり（『大和物語抄』）

(イ) かくさまぐの色を染尽して秋を過しかば今よりは時雨のそむる物もあらじとはかなくよめる也（『大和物語直解』）

(ウ) 今神無月に成て時雨する時節なれとちゝの色に急ぎし秋も過ぬればそのかひもなしいまはしくれに何を染ましと読り（『大和物語虚静抄』）

(エ) おのれあつらへし品を、全く染め果てたるよしをたとへていへるなり。（『大和物語詳解』井上覚蔵氏・栗島山之助氏 誠之堂書店、明治34年8月）

(オ) 御賀の設備に色々と支度したる秋も過ぎて、木葉を染むるといふ時雨のこの折になりては、何をそめてよからむそむるものもあるまじきことをはかなしみたる意。（『国文叢書 第十八冊—大和物語—』編者池邊義象氏 博文館 大正4年11月）

(カ) 昨日までは秋にて、木々の梢も様々に染められたるが今より後は冬の日とて最早染むべき物もなしと也、托せられたる染物の出来果てしを云ひし也。（『新釈日本文学叢書 第四卷—大和物語—』編者物集高量氏 日本文学叢書刊行会 大正11年7月）

(キ) あつらへられし品々は取り急いで全部染め終へました。これからはどうしませう。（『大和物語新釈』浅井峯治氏 大同館書店、昭和6年9月）

(ク) 「いまはしくれに何を染めまし」の下半句が、言裏に何を相手にうったえようとしているのか。（中略）時雨でふかく染めようかとは、おそらく

男との交情について求める所があるのではなからうか。(『大和物語評釈・十四 としこ』今井源衛氏「国文学」8巻4号、昭和38年3月)

(ケ) いそいでいろいろ染めてあげたけれども、又何かあつたらおやりしますは、という素直な取り方が自然のような気がする。(鈴木佳與子氏「としこ」『大和物語の人々』雨海博洋氏・他 笠間書院、昭和54年3月)

(コ) 心を染める対象を清蔭に求める女の慕情が、折から時雨に託して上品により上げられている。(『大和物語全釈』森本茂氏 大学堂書店、平成5年12月)

(サ) 下句はねぎらいの言葉ひとつない清蔭に時雨の季節になった今、何を染めましょうかと、やや恨みをこめた催促の歌となっている。(『大和物語』)

(上) 講談社学術文庫『雨海博洋氏・岡山美樹氏 講談社、平成18年1月』

(注) (ア)・(イ)・(ウ)の注釈書は『大和物語諸注集成』(雨海博洋氏編著 桜楓社、昭和58・5)に拠った。

それぞれの内容を分類するとおおよそ次のようになる(下の記号は各注釈書等に付した記号を示す)。

時の経過 ……………(ア)
 はかなさ ……………(イ)・(オ)
 仕事の完了 ……(ウ)・(エ)・(カ)
 交情を求める ……(ク)・(コ)
 仕事の催促 ……………(ケ)・(サ)

このように先学は様々な解釈をしており、それだけに難解なところでもある。

そこで、三段の地文と歌を分析し、いずれが妥当であるかを考えてみたい。前述したように「ちぢの色に」の歌が『古今六帖』をもとに改変していることを考えると、それに伴い「さて云々」以下にも創作意識が及んでいるとみてよからう。としこは依頼された髭籠の染色を終えた後「ちぢの色に」の歌を源大納言のもとに贈ったわけである。この歌の上句は地文の「敷物の織物ども(中略)みな急ぎはててけり」を受けている。下句は、それ以下を受けているのかはつきりしない。作者は再度この歌の意味することをその後の地文で説明を加えている。即ち「その物急ぎたまひける時は」から「いひかはしたまひけるを」まではこの歌の上句を、「それよりのちは、そのこととやなかりけむ」はその下句をそれぞれ説明していると思われる。ここで問題になるのは「そのこととやなかりけむ」が何を意味しているかである。これは「これよりもかれよりも、いひかはし」を受けており、「いひかはし」はとしこと源大納言がそうすることだからここは、多くの注釈書が「としこのことを思い出すことがなかったのであろうか」と解釈している通りである。するとこれ以降は、下句をもとに話が展開するわけだから、ここにはとしこの源大納言への思いが詠まれているとみてよからう。事実、これから

述べる「かたかけの」と「あをやぎの」の歌には「思ひ」の語が詠み込まれており、このことを裏付けている。だが、このように「ちぢの色に」の歌で、としこが源大納言に呼びかけても何ら反応を示すことはなかった。そこで、としこはいたたまれず「かたかけの」の歌を贈り、その中で「さわぐ時のみ思ひいづる君」と恨みを込めて詠んだわけである。これは「ちぢの色に」の歌と内容的に類似しており、いわば前のことをくり返すことで彼女の心情を高揚させている。それでも源大納言は返事もせず、そうこうしているうちに年を越してしまった。そうして春うらかな三月のある日、突然、源大納言はとしこへ柳の枝に「あをやぎの」の歌を添えて贈ってきた。この章段にある三首の歌の関連性についてはすでに中島氏が指摘しているところだが、ここで注目したいのは、としこのくすぶり続けていた心情が徐々に高揚し、「青柳の」の歌を機に、一気に晴れるといういわば漸層的な手法を用いていることである。こうした手法は次の四段にもみられ、しかもこの四段は創作性が強い章段であり、それを考えると偶然の一致とは考えられない。ともあれ、『古今六帖』歌を利用し、かつ前述の如くとしこ源大納言の贈答歌の中に「思ひ」の語が見られることや「そのこと」が「いいかはす」を受けており、これはまた「ちぢの色に」の歌の説明にもなっている。これらのことから考えて「そのことやなかりけむ」は交情を求める意に考えた方が妥当であろう。その一環として前述のように「今は」と改変することで、としこの源大納言へのひたむきな心情を吐露しているということができよう。

「さて、その十月ついたちの日」から後半と考えると、「みな急ぎはててけり」と「さて」との間には時間的な隔たりがあるわけだが、どうもその移り方が唐突であることは否めない。事実、「みな急ぎはててけり」の後に「清蔭に届けたことは省略」としている注釈書もみられる。⁽¹⁷⁾これを契機にとしこ源大納言の歌の贈答になるわけだから、少なくとも「さて」以前に何らかの説明があつて然るべきである。詳しくは後述するが、作者は「さて」以降について、季節の推移を考慮しつつとしこ源大納言の歌の贈答を創作していったと思われる。これは前述したようにここに三首の歌が密接に関連しあっていることでも理解できよう。それにしてもなぜこのように唐突なのであろうか。実はこのような箇所は他にも見ることができる。⁽¹⁸⁾この周りは六十賀という史実と「ちぢの色に」の歌の創作とがうまく絡み合っていない。これはひとつに作者の表現力に起因しているのではないか。このことは裏返せば、「さて云々」以下には作者の創作意識が及んでいることを暗示させよう。冬と春に入る本文の冒頭に「さて」という語を置き、それぞれの季節に入ることを明示している。これだけ季節の推移を意識した章段は『大和物語』の中でここだけである。

五

としこが詠んだ「かたかけの」の歌については、これまでその類似歌として『躬恒集』にある

かたかけの舟にや乗れる白波の立つはわびしくおもほゆるかな

が早くから指摘されてきた。⁽¹⁹⁾しかし、両者の関係については『大和物語追考』のみが「みつねの家集にかたかけの船にやのりししらなみもたつはわびしとおもほゆるかなとあるを少ひきなをしてよめるにや」と言及しているにすぎない。⁽²⁰⁾ただ、その関係について詳しく説明しているわけではない。「かたかけ」なる語を中古の和歌から検索してみたところ、勅撰集をはじめ、私家集（『躬恒集』を除いて）、歌合にはみられず、わずかに一首、私撰集の『古今六帖』「ふね」の項の中に次の歌がみられる。

しほせこくかたかけを舟なかるともいたくなわひそかちとりゆかん

ここでは第二句に詠まれているにすぎず、より類似しているのは今のところ『躬恒集』にあるこれ一首のみということになり、両者の関係は否定できないように思われる。事実、中島和歌子氏も「立つ（出発する）」を「いそぎし秋」という事柄に合わせて、「さわぐ」と置き換えたのではないかと考えている。⁽²¹⁾妥当な考えであろう。少し補足すると、置き換えたのは「さわぐ」だけでなく「さわぐ時のみ思ひいづる君」と四、五句全体に及んでいる。ここの「思ふ」は「思ほゆ」にもとづいているのであろうが、それだけではなくとしこの源大納言への強い意思表示になっている。ただ、中島氏はこの歌を本歌取りして、ここでもとしこが実際に詠んだものとみている。しかし、この章段の「さて、その十月ついたちの」以下は後述するように創作された可能性が大きいことを考えると、この歌も躬恒の歌をもとに改変し、としこが詠んだふうに仕立てたとみるのが自然ではなからうか。

もちろん『躬恒集』が『大和物語』から取り入れたということも考えておかねばなるまい。事実、躬恒の歌には他の歌の表現を取り入れてるのが多いという。⁽²²⁾だが、この場合、両歌は上句が共通しており、しかも『古今集』の撰者の一人でもある躬恒が他人の歌を利用して下句を改めてまで歌を詠んだのであろうか。下句は地文と照応し密接な関係が窺われる。やはりここの『大和物語』の改変と考えるのが穏当であろう。

ここで、両者の関係を確認するために『躬恒集』についてふれておく必要がある。現存の『躬恒集』は五系統に分けられる。⁽²³⁾その中でこの歌は第四類の西本願寺本系統と第五類の正保版本系統にみられる。このうち後者は後世の成立になることが島田良二氏により明らかにされており、⁽²⁴⁾ここでは対象外にする。すると両者の関わりを考える場合、第四類本の成立が問題になる。『躬恒集』の中でこの系統は歌数が最も多く、四八二首をかぞえる。

それらを島田氏は、D (1～254)・E (255～328)・漢詩連歌 (329～348)・B (349～482) に分けられ、D群の終わりに「これにはすゑにかゝれぬこと本のすゑあるをかける」と記されていることから、E群以下を増補と考えている。そして、氏はこの系統の成立について次のように述べている。

第四類本はすでに院政期には成立していたのであるから、いわゆるD群の躬恒集はかなり古くから成立していたことが分かるとともに、Eおよび漢詩連歌も単独で存在していた事から、これも拾遺集頃には成立していたのであろう。

このようにD群は『躬恒集』の中で成立的にみて最も古いと考えてよからう。「かたかけ」の歌は「わかれのうた」として、D群の中で四番目にみられる。しかもこのD群の成立は、前述の如く少なくとも『拾遺集』以前と推測されていることから『大和物語』の作者が『躬恒集』にあるこの歌を利用したことは十分に考えられよう。

最後にある「あをやぎの」の歌については、その例歌に『大和物語虚静抄』が

七夕にかしつる糸のうちはへて年の緒なく恋やわたらん

(注) 『大和物語諸注集成』(雨海博洋氏編著 桜楓社、昭和58年5月)に拠る。

を引いている。この歌は『古今集』秋歌上にある躬恒の作であることから中島和歌子氏は先程の「かたかけ」の歌との関連で注目しつつもその関わりについては言及していない。

前述のごとく前の二首は『大和物語』第三段の内容に合わせて改変した可能性が高いことを考慮すると、それは「あをやぎの」の歌にも及んでいるのではないか。それにしても両者が共通するのは「糸のうちはへて」という表現のみで前の二首とはやや異なっている(伝本により「の」の有無はあるが)。はたして本歌としてよいのか不安も残るが、実際、両方の歌を比較してみると、『大和物語』では地文を受け季節にあわせた表現になっている。即ち初句では秋の景物を示す「七夕のかしつる糸」を『大和物語』の地文の春の景物「柳のしなひ」を受け「あをやぎの」に、次いで時を示す「年の緒ながく」を春の場面に相応しく「のどかなる春日しもこそ」に、さらに結句で「かたかけ」の歌の「思ひいづる君」を受けて「思ひいでけれ」に、それぞれ照応していると考えられる。こうみてくると表現上、共通するのはわずか一箇所とはいふものの、躬恒の歌を利用するに際して、地文や前歌を踏まえて、その場に合わせて改変したと考えてよからう。さらに注目したいのはこの歌も『躬恒集』にみられるということである。これとの関係についてはこれまで指摘されなかったが、前述のように「かたかけ」の歌が『躬恒集』と密接な関係にあることを考えると、ここも『躬恒集』を資料にした可能性もあると考えておかねばなるまい。この歌は『躬恒集』のいずれの系統の伝本にみられるかという点、

躬恒集Ⅰ二〇五

躬恒集Ⅱ一二二

躬恒集Ⅲ一〇六

躬恒集Ⅳ四五六

(注) 『私家集大成第一巻 中古Ⅰ』(明治書院、昭和48年11月)に拠る。

四系統の伝本にみられる。先程の「かたかけの」の歌もⅣ系統にみられ、その点ではこの歌もⅣ系統の『躬恒集』を資料にした可能性がある。しかしながら、この歌が属するⅣ系統のB群は島田良二氏により「第三類本プロパーのB群からの転写増補された」⁽²⁶⁾ことが明らかにされており、この系統を資料にした可能性は低い。ただ、「七夕に」の歌は『躬恒集』の祖本の姿を留めていると言われているⅠ系統をはじめⅡ系統にもみられ、その祖本には存在していたと考えられる。その祖本から各系統の伝本がどのように分派していったかは不詳である。また、『古今集』か『躬恒集』のいずれを拠り所としているかは断定できない。この章段はとしこと源大納言との歌の贈答を介し季節を追って叙述され、同時にとしこの感情が徐々に高揚している。それも「ちぢの色に」と「かたかけの」の歌の存在によってこそ「あをやぎの」の歌の表現効果を上げている。としこは多くの章段に登場するが、源大納言との贈答歌はここのみである。二人の親密な関係を背景に他の資料をもとにして贈答歌に仕立てたのであろう。

六

『大和物語』の作者は「かたかけの」の歌と「あをやぎの」の歌を、躬恒の歌をもとに改変したのではないかと考えたわけであるが、作者はこの章段を創作するにあたり、ひとつの章段の中に躬恒の歌を二首も利用したのはどのような理由によるのであろうか。少なくとも『大和物語』の作者が躬恒に関心を抱いていたのであろう。ではその痕跡めいたものを『大和物語』から見出せるであろうか。

『大和物語』にあつて躬恒は三十三、百二十一の二章段に登場する。決して多いとは言えない。まず三十三段を見ていくが、論述の便宜上、この章段とその前後の章段を記しておこう。

三十段

故右京の大夫宗子の君、なりいづべきほどに、わが身のえなりいでぬことと、思ひたまひけるころほひ、亭子の帝に、紀伊国より石つきたる海

松をなむ奉りけるを題にて、人々歌よみけるに、右京の大夫、

沖つ風ふけるの浦に立つ浪のなごりにさへやわれはしづまむ

三十一段

おなじ右京の大夫、監の命婦に、

よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

三十二段

亭子の帝に、右京の大夫のよみて奉りたりける。

あはれてふ人もあるべくむさし野の草とだにこそ生ふべかりけれ

また、

時雨のみ降る山里の木のしたはをる人からやもりすぎぬらむ

とありければ、かへりみたまはぬ心ばへなりけり。「帝、御覧して、『なにごとぞ。これを心えぬ』とて僧都の君になむ見せたまひけると聞きしかば、かひなくなむありし」と語りたまひける。

三十三段

躬恒が院によみて奉りける。

立ち寄らむ木のもともなきつたの身はときはながらに秋ぞかなしき

三十四段

右京の大夫のもとに、女

色ぞとはおもほえずともこの花は時につけつつ思ひいでなむ

前後が宗于関係の章段に囲まれた一章段に躬恒は登場する。『大和物語』の場合、その多くは同一人物や同一内容の章段が連続している。ところが、ここはそのようになっていない。どうみてもこれは無意識に配置されているとは考えにくい。ではなぜ三十三段に宗于ではなく躬恒の章段を置いたのであろうか。このことについて『新編日本古典文学全集大和物語』の頭注では「三十二段に草木に関する歌があることから、宗于以外の人の話が入ったのであろう。」と説明している。確かに『大和物語』の場合、各章段が景物で関連しているところがありここもそうしたのかもしれない。しか

し、問題はることよりもなぜ躬恒の章段をここに置いたかにあるのではないか。これは前後の章段を含めて考えるべきであろう。『大和物語』の場合、ところどころ前後の章段のつながりがみられ、それが重要な働きを担っていると考えられるからである。三十二、三十三段では宗于が身の不遇を帝に訴えている。次いで三十四段では宗于が登場するものの、その内容は恋の話に移っている。しかもここで宗于は歌を詠んでいない。三十三段は主人公が異なるものの三十二段と身の不遇という内容が同じである。同じ内容の章段を連続させるために躬恒の話をもってきている。こうすることで、ひとつの変化をもたせているのであろう。こうしたのは作者の躬恒への関心の表われとみるべきであろう。

なお、三十一段は主人公が前段と同じでも内容をみると、前後の章段と異なり恋の話になっている。これは先程の三十一・三十三段と逆になっている。三十一段にある宗于が詠んだ「よそながら」の歌は『後撰集』の読み人しらず歌で、これをもとに創作した可能性が高い。⁽⁷⁾ここでは、宗于の恋の相手に監命婦が登場させ、かつ恋の話にして変化をもたせたのであろう。『大和物語』にあつて監命婦はここを含めて十章段に登場し、作者の関心の高さを理解できよう。

このようなことから三十一段と三十三段の配置の意図については連動して考えるべきであろう。しかも、これら一連の章段も身の不遇（三十段）―恋（三十一段）―身の不遇（三十二段）―身の不遇（三十三段）―恋（三十四段）というように恋と身の不遇とがほぼ交互に配置されており、これもそのような意図があつてのことである。この一環として利用したとみてよからう。

次に、百三十二段をみることにする。ここでも論述の便宜上、この前後の章段を記しておく。

百三十一段

先帝の御時、四月のついたちの日、鶯の鳴かぬをよませたまひける。公忠、

春はただ昨日ばかりをうぐひすのかぎれることも鳴かぬ今日かな

となむよみたりける。

百三十二段

おなじ帝の御時、躬恒を召して、月のいとおもしろき夜、御遊びなどありて、「月を弓はりといふは、なにの心ぞ。そのよしつかうまつれ」とおほせたまうければ、御階のもとにさぶらひて、つかうまつりける。

照る月を弓はりとしもいふことは山べをさしていればなりけり

祿に大桂かづきて、また、

白雲のこのかたしもおりゐるは天つ風こそ吹きてきつらし

百三十三段

おなじ帝、月のおもしろき夜、みそかに御息所たちの御曹司どもを見歩かせたまひけり。御ともに公忠さぶらひけり。それにある御曹司より、こき桂ひとかさね着たる女の、いと清げなる、いで来て、いみじう泣きけり。公忠をちかく召して、見せたまひければ、髪をふりおほひていみじう泣く。「などてかくなくぞ」といへど、いらへもせず。帝もいみじうあやしがりたまひけり。公忠、

思ふらむ心のうちは知らねども泣くを見るこそ悲しかりけれ

とよめりければ、いとにくめでたまひけり。

百三十四段

先帝の御時に、ある御曹司に、きたなげなき童ありけり。帝御覽して、みそかに召してけり。これを人にも知らせたまはで時々召しけり。さて、のたまはせける。

あかでのみ経ればなるべしあはぬ夜もあふ夜も人をあはれと思ふ

とのたまはせけるを、童の心地にも、かぎりなくあはれにおぼえければ、しのびあへで友だちに、「さなむのたまひし」と語りければ、この主なる御息所聞きて、追ひいでたまひけるものか、いみじう。

百三十一段から百三十四段までは先帝関係の章段でまとめられている。その内、百三十四段を除けば帝とともに公忠、もしくは躬恒という著名な歌人が登場している。即ち、帝を除いて百三十一段では公忠、百三十二段では躬恒、百三十三段では公忠、最後の百三十四段では童という人物配置である。躬恒の登場する章段は、その前後に公忠が登場する章段に挟まれている。この配置は先程の三十三段と類似する。

また、これらの章段の中で百三十二、百三十三段は「月のおもしろき夜」、「月のおもしろき夜」という場面で躬恒、公忠がそれぞれ帝に召されて歌を詠み、賞賛されるということが共通する。ここでも内容的には同じでも登場人物を別人にすることで変化をもたせているのであろう。これは三十二、三十三段の内容にも類似する。いずれも不遇な身の上を訴えている。構成上、要所に躬恒を据えたのは作者が彼に関心を抱いていた証にほかならまい。ともあれここでも三十三段で述べたことと同じことを指摘することができ、先程の考えがより確かなものとなろう。

『大和物語』作者の躬恒への関心はすこぶる高かった。このことは作者の意図する章段の配置—変化をもたせる—に及んでいると考えられる。

このように前後が同一人物の章段の中に別人が組み込まれている箇所は躬恒以外の章段にもみられる。ここではその類似例を含め、三例を取りあげ、

躬恒の章段にみられた『大和物語』作者の意図するところを多少なりとも補っていききたい。今、それらにおいて登場人物のみを記してみると次のようになる。

(1) 25段 明覚

◎ 26段 桂皇女

27段 戒仙

28段 戒仙

(2) 137段 元良親王

◎ 138段 こやくし

139段 元良親王

140段 元良親王

(3) 76段 桂皇女 嘉種

77段 桂皇女 嘉種

78段 監命婦 元平親王

79段 監命婦 元平親王

◎ 80段 宗干

81段 右近 故后宮

82段 右近 故后宮

83段 右近 蔵人頭

84段 右近 男

85段 右近 桃園宰相

◎を付けたのがその人物に該当する。(1)の場合、必ずしも先程の躬恒の章段と同じではないし、内容的にみて前後の章段と類似しているわけでもない。二十六段の前後が僧侶関係の章段であり、ここはその関係で連続させてもよかつたはずである。ではなぜこうしたのか。二十六段では桂皇女が登場する。しかもここで彼女が詠んだ「それをだに」の歌は、『古今集』では「読み人しらず」になっている。このことに関して雨海博洋氏は歌語り文学的発想と

とらえ、二十六段を虚構とされた。⁽²⁸⁾これに対して今井源衛氏は事実か虚構かの判断は困難とされ、それに否定的である。⁽²⁹⁾その判断は今後に待つとしてここでは前段と「宿」という語で関連させつつ、⁽³⁰⁾作者にとつて関心のある桂皇女という、『大和物語』で多くの章段に登場する著名な人物を置くことで変化をもたせたのであろう。このことは(2)をみると理解できよう。ここでは元良親王関係の章段の中にこやくしなる人物の章段を置いているが、かつて考察したようにこれらの章段は恋の進行を考慮し内容的に関連させ配置されていると考えられる。その中にこやくしなる人物の章段を置いたのは変化をもたせるためと思われる。しかし、こやくしは著名な人物でもなく、『大和物語』にあつて、ここにもみ登場する。これは(1)とは異なるが、斬新な方法を試みたのであろう。そのためにも『伊勢集』にある贈答歌をもとにこやくしという架空の人物にし虚構化したのであろう。⁽³¹⁾これはまた、創作力の表われであり先程の二十六段の虚構か否かを考える上で参考にならう。それはそれとして、ここでも前述した三十三、百三十二段の方法に類似している。

最後の(3)の場合は今までの例とは異なる。ここでは桂皇女、監命婦関係の章段がそれぞれ二章段ずつ続いている。その後には宗子関係の一章段が、さらにその後には右近関係の五章段がそれぞれ続く。『大和物語』にあつて、桂皇女、監命婦、右近という著名な女性達が登場する中に宗子が登場する一章段があるのである。しかも、この前後の章段は恋の話であるが、ここは宗子が亡き宇多上皇をしのぶ話で内容的にも異なる。これらのことをいかに考えたらよいか。八十段について『新編日本古典文学全集大和物語』の頭注では「恋の内容ではなく、また前後の人物とも関係なく孤立した章段」と解説している。確かに、この前後の章段は前述の如く同一人物で連続し、宗子の章段が孤立している感じではある。しかし、見方を変えてこの前後に著名な女性達を配置し、その間に宗子の章段があるのは、どう見ても単なる羅列と考えるよりも何かしらの意図があつたとみるのが自然ではないか。このようなことを考慮し前段の七十九段をみると、そこには監命婦が詠んだ「こりずまの浦にかづかむうきみ、は浪さわがしくありこそはせめ」という歌がある。この歌を読んで思い起こすのは、前にふれた三十段にある「沖つ風ふけるの浦に立つ浪のなごりにさへやわれはしづまむ」という歌である。この歌は「紀伊国より石つきたる海松をなむ奉りける」という題で宗子が思うようにならない我が身を海松に託して詠んだものである。いわば海松は宗子を象徴するものであつた。「沖つ風」の歌と「こりずまの」の歌をみると「ふけるの浦」、「須磨の浦」と海が、さらに「浪」、「海松」がそれぞれ詠まれている。このように語句の類似性、とりわけ宗子を象徴する海松ということ、いわば連想の如く八十段を配置したと思われる。また、この次の八十一段をみると、「宮にまゐること絶えて、里にありけるに、さらにとひたまはざりけり」とあるが、これと八十段の歌に「来て見れど心もゆかずふるさとの云々」とあつて両者は「ふるさと」、「里」が関連している。こうした章段間の語句の関連は他の章段にもみられるところで、『大和物語』の特色のひとつになっている。こうしてみてみると八十段は前後の章段に関連しており、女性の章段が続くのを二つに分け、いわば中継ぎの働きをしていると言えよう。と同時に著名な女性達の中に宗子の章段を配置することで変化をもたせているのであろう。宗子は『大和物語』にあつて九章段に

登場し作者にとって関心のある人物の一人であった。

前後に同一人物、もしくはそれに類した人物の中に別人が置かれている章段をみてきた。その結果は一定ではないが、ここでも別人になる章段は作者にとって関心のある人物が登場し、しかも単なる羅列ではなく意図的に配置していた。これらの例から前述した三十三、百三十三段での考えを補強できたように思う。

躬恒の「かたかけの」の歌を利用するに至った背景を探ってみた。これらを通して、ひとつの方針を認めることができよう。実際、躬恒が登場するのは二段段にしか過ぎないが、そこには不遇な身の嘆きと歌人としての誉れが描かれていた。その彼を著名な歌人の章段の前後に設置している。こうしたのは変化をもたせようという意図があり、そのために作者にとって関心のあつた人物を据えたと考えられる。このことは三段を創作するに際し、躬恒の歌を利用したことと決して無関係ではあるまい。そして作者が『大和物語』第三段を通して、文学的趣向、いわば虚構を目指していたヒントが窺えよう。

七

『大和物語』第三段は宇多上皇六十賀のことを記しているが、これは表向きに過ぎず、話の中心はあくまでも源大納言としこの歌の贈答にあることに疑う余地はあるまい。としこは『大和物語』にあつてこの三段を含めて十章段に登場する。女性では一位を占めている。次いで多いのが監命婦の九章段である。二人は『大和物語』にあつて双壁と言えよう。としこの章段を見ていく場合、監命婦の存在は無視できない。もちろん、それぞれが相前後することなく単独で登場する章段もあるが、意外としこの章段は監命婦の章段と相前後している場合が多い。そこで、としこ監命婦が相前後して登場する章段としこが単独で登場する章段を通して三段を創作するに至った背景を人物面から探ってみることにしよう。

二人が登場する章段は次のようである。

3 (8) 9 (10) 13 (21) (22) (25) (31) 41 (注) ① 66 67 68 (69) (70) (78) (79) 122 137

(注) ()で囲んだのは監命婦が登場する章段を示している。

まずこれらの章段の中で二人が相前後して登場する章段に傍線部①・②の章段がある。①はとしこの章段が監命婦の章段に挟まれている場合であり、②はとしこと夫の千兼が登場する章段の後に監命婦と忠文の息子が登場する章段が続く場合である。①をみると八・十段と同一人物が登場しているわけだから何もその間に別人の章段を置く必要もなく、直接続けてしまつてもよかつたはずである。では、なぜこうなっているのか。ただ、単に配置し

ているにすぎないのか。それよりこれらの章段に「監命婦」として登場することは何らかの意図があるのではないか。ましてや今までみてきたこれと類似する章段から考えてもその可能性は高い。このようなことを念頭に置きこれらの章段をみると

八段 大沢の池の水くき絶えぬとも

九段 桃園の兵部卿うせたまひて

十段 淵瀬ありとはむべもいひけり

のような表現がみられ、傍線部分が内容的に関連している。つまり、八段で「絶えぬ」ということから九段での「うせたまひ（死）」を連想させ、さらに十段ではその連想から「ふるさとを」の歌に『古今集』歌の「淵瀬あり」を引用しつつこの世の無常へと導いている。無常へ自然に展開させるためには「死」の話が必要であった。そのためにとしこの章段を置いたのである。別な人物で変化をもたせ、かつ内容を考えて配置しており、これは先程みてきた元良親王関係の百三十七段をはじめ、宗子や躬恒の章段に類似している⁽³²⁾。ともあれ九段は話を展開する上で一役を担っている。そのために監命婦と双璧ともいふべきとしこの章段を置いたということができよう。

②の場合、としこの章段が六十六、六十七、六十八と三章段連続するが、このうち六十八段は内容的にやや前の二章段と異なっている。即ち六十六段と六十七段では、としこがひたすら夫の千兼の帰りを待っているが、それもかなわず悲しみにくれている。ところが次の六十八段では、話が一変して枇杷殿がとしこの家の柏木を御所望になり、それを贈る話である。ここにはとしこの悲しみはみられない。

一方、監命婦が登場する六十九段では、忠文の息子が親と一緒に陸奥国へ下る際、監命婦がその息子に餞別を贈り別れの悲しみにくれている。次の七十段の前半でも監命婦が離れ離れになった忠文の息子への切なる思いにかけられている。後半では監命婦が陸奥国へ下る途中で、忠文の息子の死を知り前半での悲しみに追い打ちをかけている。このように前後の章段の内容から、六十八段はどうみても異質である。それにもかかわらず六十八段をここに据えたのはなぜであろうか。この六十八段は『後撰集』と共通しており、両者を比較してみると次のようになる。

| 後撰集 雑二 | 大和物語第六十八段 |
|--|---|
| 枇杷左大臣、よう侍てならの葉をもとめ侍りければ、千兼があひしりて侍りけるにとりにつかはしければ 俊子 我が宿をいつならしか櫛の葉をならし顔には折りに | 枇杷殿より、としこが家に柏木のありけるを、折りにたまへりけり。折らせて書きつけて奉りける。 わが宿をいつかは君がならし葉のならし顔には折りにおこする |

| | |
|---|--|
| <p>おこする 返し 檜の葉の葉守の神のましけるを知らでぞ折りしたたりなさるな</p> | <p>御返し 柏木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りしたたりなさるな</p> |
|---|--|

(注) 『後撰集』の本文は『後撰和歌集総索引』(大阪女子大学、昭和40年12月)所収の天福本に拠り、句点、濁点、漢字は稿者が施した。以下も同様。

『後撰集』をみると、贈答歌に「檜の葉」が詠み込まれているのに対して、『大和物語』では贈歌に「ならし葉」、答歌に「柏木」とそれぞれ別なものとあることによると思われる。また、贈歌の三句目が「ならし葉」としたのは「ならし」を引き出すためであり、これは柏木のことをそう呼ぶことからこれも地文に照応させたものと考えられる。それと『後撰集』に登場する千兼は、『大和物語』にはみられない。このことに関し『日本古典文学全集・大和物語』の頭注には「地の文に千兼のことが書かれていないのは、六十六・六十七段を前提にしているであろう。副次的章段」とあるが、はたしてそれだけであろうか。これはこの章段の生成にも関わってくるのではないか。事実、このことについて、菊地靖彦氏が「としこの存在をクローズアップするところに『大和物語』の特徴がある。(中略)『大和物語』はやはり作為を通さなければそのねらいは語れない。」と述べ、『大和物語』の作為を指摘している。⁽³⁾ 納得できる考えである。

それにしてもこれほどまでしたのはなぜか。これはこの前後の章段を含めて考えるべきであろう。それというのも六十六・六十八段がとしこ、その後の六十九、七十段は監命婦がそれぞれ登場することによるのではないか。『大和物語』の作者は意図的に二人の話を連続させたものと考えられる。これは今まで見てきた、二人が登場する章段をみても理解できることである。とにかく、としこと監命婦は作者にとつて関心のあつた人物であつた。これらの章段の内容は、前述のごとく六十六、六十七段で夫、千兼を待つとしこの悲しみが描かれている。六十九、七十段で監命婦の悲しみが描かれている。これらは内容的に通ずるものがある。ところが、六十八段をみるとここでとしこの贈答の相手は枇杷殿である。しかも、ここには悲しみは見られず、二人ののどかな光景を描きあくまでも二人の話になっている。ここは『後撰集』をもとに改作したのであろう。こうしたのは、前段と内容的に異質な章段を置くことでひとつの変化をもたせようと考えたのではないか。六十八段が前述の如く手を加えていることはそれを暗示させよう。

一方、としこが登場する章段において、人物の点で前後に監命婦の章段と関連がなく、彼女のみが登場する章段に百二十二段がある。ここも『後撰集』と共通している。両者を比較してみると次のようになる。

| | |
|--|--|
| <p>後撰集恋三</p> <p>あひ語らひける人これもかれもつつむことありて、 はなれぬべく侍りければつかはしける 読み人知らず あひ見てもわかるることのなかりせばかつがつもの は思はざらまし</p> | <p>大和物語第二百二十二段</p> <p>としこが、志賀にまうでたりけるに、増喜君といふ法師ありけり。それは比叡にすむ、院の殿上もする法師になむありける。それ、このとしこ、まうでたる日、志賀にまうであひにけり。橋殿に局をしてゐて、よろづのことをいひかはしけり。いまはとしこ、かへりなむとしけり。それに増喜のもとより、 あひ見ではわかるることのなかりせばかつがつものは思はざらまし 返し、としこ、 いかなればかつがつものを思ふらむなごりもな くぞわれは悲しき となむありける。ことばもいとおほくなむありける。</p> |
|--|--|

『後撰集』では「読み人知らず」の歌が『大和物語』では増喜の歌になっている。この章段はとしこ僧の恋愛を主題にしており、今井源衛氏はその異常性とこの物語作者のそれに対する嗜女癖を指摘している。⁽³⁴⁾そして『後撰集』が僧の名を隠したと考え、大和物語が増喜に託して話を作り上げたということではなからうか。⁽³⁵⁾と述べ、創作性を推測している。これに菊地靖彦氏は賛同している。

次に高橋正治氏は

『後撰集』では、「読み人知らず」になっているが、詞書の内容も少し違うので、もともと増喜の歌ではなく、歌語りの過程で増喜、としこの組合せになっていったのである。⁽³⁶⁾

と述べている。歌語りの過程で二人の組合せになったのではないかと考えているが、なぜそうだったのか、その説明がほしいところである。さらに柿本奨氏は

異伝と認めるにとどめておくべきものと考ええる。(中略)本段はとしこの歌の方に重点があり、その手練の返歌の仕方を紹介する。⁽³⁷⁾と述べ、異伝ととらえている。ただここもどうして異伝となったのか、具体性に欠けることは否めない。

このように百二十二段の生成については意見が対立しているわけであるが、少なくとも『大和物語』の方に創作性を認めてもよいのではないか。『後撰集』において「読み人知らず」になっていることがそれを物語ってはいやしまいか。しかも『後撰集』の詞書と和歌をみると、

あひ語らひける人これかかれも↑あひ見ても

はなれぬべく侍りければ↑わかるることのなかりせば

のようになり、詞書が上句と照応している。そしてこれを受け下句で詠作者の心情を吐露している。しかもここには地文の「これかかれもつつむことありて」という心情が「かつがつものは思はざらまし」という表現に含まれていると思われる。まさに詞書と和歌とが一体になり臨場感を醸し出している。一方、『大和物語』は『後撰集』のように語句の上で明白に照応しているわけではない。これらの点を考慮し両者の関係について考えてみると少なくとも『後撰集』の方がもとの形を残しているとみるべきで、『大和物語』の方には作為の手が加わっていると考えてよかろう。『大和物語』の作者はこの章段を創作するにあたり、としこのことが念頭にあり、そのために『後撰集』に資料を求め、僧侶との恋ということで、読み人しらずの歌を利用し増喜との贈答歌を考えたのであろう。そのために増喜の歌を「あひみては」として彼一人の心情を表出させたのではないか。⁽³⁸⁾これは返歌を想定していたからにはかならない。『後撰集』の場合、贈答歌の形をとっておらず、一首のみで詞書に「これかかれもつつむことありて云々」とあり、これを受けて歌で「あひ見ても」となっているわけである。このことから、この章段は意図的に創作されている可能性が高い。「あひ見ては」の歌を増喜の詠作にしたとすると、その返し歌の「いかなれば」の歌も創作とみるのが妥当であろう。これを裏付けることとして注目したいのは「いまは」としこかへりなむとしけり。」という本文である。これは二人が別れる場面である。と同時に和歌の詠作を尊く契機となるもので重要な働きを担っている。とりわけここにある「いまは」という語については以前、創作と深く関わっていることを指摘した。⁽³⁹⁾そのひとつに初段をあげることができる。初段は次のようである。

亭子の帝、いまはおりゐさせたまひなむとするころ（中略）伊勢の御の書きつけける。

わかるれど……

とありければ、帝、（中略）

身ひとつに……

傍線部で「いまは」と表現することで亭子の帝の譲位の場面の緊張感を醸し出している。それを受けて伊勢の御が別れの悲しみの歌を詠み、その返しに帝がなだめるという場面である。一方、この百二十二段には「いまは、としこ、かへりなむとしけり」とある。これは『大和物語』のみにみられる

ものであり、今まきとしこが増喜と別れる場面で、二人にとって悲しみがピークに達する。このような状況を表現するために「いまは」という語を使っている。これは初段でも「別れ」の場面にみられ偶然とは言えまい。「いまは」という語を介して創作の一端を窺い知ることができよう。

前後に同一人物か、もしくは別人で連続し、その中にこれらとは別人のひとつの章段を捉えたのは、章段間を展開させる上で変化をもたせるためであった。しかも、別人の一章段は『大和物語』で多くの章段に登場する人物であり、作者にとって関心を寄せた人物であったと考えられる。また、著名な歌人の歌を利用し、虚構化を試みている章段もみられた。これとて深く関心を寄せた人物の歌を利用したわけである。このことは単独の章段にも及んでいた。ここでは虚構化を試み、その冒頭を「としこが志賀に云々」とし、その存在感を示しているようである。ともあれこれらの章段を通して作者のとしこへの関心の高さを理解することができた。これらのことはまた三段の創作性を考える上でひとつの示唆を与えることになる。としこは作者にとって特別な存在であったのである。

八

『大和物語』第三段はどのような位置にあるのであろうか。初段から四段までは

初段—宇多帝讓位

二段—宇多帝出家

三段—宇多帝六十賀

四段—野大式

というように初段、二段、三段と宇多上皇のことが歳を追って配置している。ただ、初段と二段はあくまでも宇多上皇が話の中心になっているが、三段は前述のごとく前半は宇多上皇六十賀のことが、後半はとしこと源大納言の歌の贈答のことがそれぞれ記され、後半が話の中心になり、初段、二段に比べ描写の視点が異なっている。そして四段では宇多上皇の話から離れ、追討使としての野大式の話に移っている。こうしたのはこれを含め、前後の章段の展開を考えていたのではなからうか。つまり、三段の前半—「みな急ぎはててけり」まで—を宇多上皇のことで初段、二段に、後半—「さて、十月のついたち」以下—を四段の野大式と、三段の源大納言、としこと言った宇多上皇以外の人物ということとそれぞれ関連しており、そのために、このような内容にしたのではあるまいか。いわば三段は前段を継承し、同時に四段以降へ展開しているわけである。三段の冒頭を初段、二段のように「亭

子帝云々」とせざるにいきなり「故源大納言云々」で始めたのは話の中心が宇多上皇から別の人物に移ることを暗示しているかのようである。ただ、柿本獎氏は二段と三段の関わりについて

二段とどの点でつながるのか、二段の後半では既に良利と心の通い合った主従、良利を忠実な臣として描いた。そのような親密の間柄、打てば響く心の通いを本段第一段落では源大納言としこという近親者間に見、その似かよいで二段に続けたのであろう。⁽⁴⁰⁾

と述べている。確かにこのようなことも作者の脳裏にあつたかもしれない。しかし、もう少し広い視点から考えると、前述の如く初段から三段までは宇多天皇の譲位とその後の出来事が歳を追って配置されている。作者はこのことをまず念頭に置いたのであろう。そして四段は野大式の話になり、前述の如くここではもはや宇多上皇は登場していない。これ以降、三十段まで宇多上皇自身が登場することはない。このように『大和物語』の作者はその展開を考え、三段をこのような内容にして配置したと考えてよかろう。

これを裏付けることとして、初段、二段、四段は創作された可能性の大きいことがあげられる。これについてはすでに先学が指摘しており、私自身も言及したことがある。⁽⁴²⁾ 詳細については各論に譲るとして、ここでは再度、その要点のみにふれ三段の創作性を補強しておきたい。論述の便宜上、これらの章段と共通する家集等とを比較しておこう。

| 伊勢集 | 大和物語初段 |
|---|---|
| <p>亭子のみかどの、をりさせたまひける年の秋^① 白露のおきてかゝれるもゝしきのうつろふあきのこ とぞかなしき わかれるれどあひもおしまぬもゝしきをみざらんこ とのなにかゝなしき ^②と、こき殿のかべにかきたるを、^③みかど御覽 じてかたはらに みひとつあらぬばかりぞおしなべてゆきかへりても などかみざらん</p> | <p>亭子の帝いまはおりぬさせたまひなむとする^① ろ、^②弘徽殿の壁に伊勢御のかきつけける。 わかれるれどあひも惜しまぬもゝしきを見ざらん ことのなにか悲しき とありければ、^③帝、御覽じて、そのかたはらに書き つけさせたまうける。 身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきかへ りてもなどか見ざらむ となむありける。</p> |

| | |
|---|---|
| <p>伊勢集</p> | <p>大和物語第二段</p> |
| <p>かくてみかどおりさせたまひて二年といふに、御ぐしおろさせたまひて、仁和寺といふところにすませたまふ（以下略）</p> | <p>帝、おりゐたまひて、またの年の秋、御ぐしおろしたまひて、ところどころ山ぶみしたまひて行ひたまひけり。（以下略）</p> |
| <p>後撰集雑一</p> | <p>大和物語第四段</p> |
| <p>小野好古朝臣、西の国の討手の使にまかりて、二年といふ年、四位には必ずまかりなるべかりけるをさもあらずなりければ、かかる事にもさされにける事のやすからぬよしをうれへ送りに侍りける文の、返事のうらに書きつけてつかはしける。</p> <p>源公忠朝臣</p> <p>玉くしげふたとせあはぬ君が身をあけながらやはあらむと思ひし</p> <p>返し</p> <p>あけながら年経ることは玉くしげ身のいたづらになればなりけり</p> | <p>野大弐、純友がさわぎの時、討手の使にさされて、少将にて下りける。おほやけにも仕うまつる、四位にもなるべき年にあたりければ、正月の加階賜りのこと、いとゆかしうおぼえけれど、京より下る人もをさをさ聞えず。ある人に問へば、「四位になりたり」ともいふ。ある人は、「さもあらず」ともいふ。さだかなること、いかで聞かむと思ふほどに、京のたよりあるに、近江の守公忠の君の文をなむもて来たる。いと、ゆかしう、うれしうて、あけて見れば、よろづのことども書きもていきて、月日など書きて、奥の方にかくなむ。</p> <p>玉くしげふたとせあはぬ君が身をあけながらやはあらむと思ひし</p> <p>はあらむと思ひし</p> <p>これを見てなむ、かぎりなく悲しくてなむ、泣きける。四位にならぬよし、文のことばにはなくて、ただかなむありける。</p> |

(注) 伊勢集は『校註伊勢集』(関根慶子氏・他不昧堂書店、昭和27年9月)に拠る。

順次、みていくことにする。初段は『後撰集』にも共通しているが、『伊勢集』の方が、深い関係にある。それというのも『伊勢集』では、伊勢の詠んだ二首があつたのを『大和物語』では一首にして、それにもない地文で①の「秋」を①の「ころ」とし、その上「いまは」を付加し物語化を狙っている。⁽⁴³⁾これは他のところをみても理解できる。即ち『伊勢集』では②、③が一文になっているのを『大和物語』では②、③と分散させ、さらに「書きつけさせたまうける」、「となむありける」という本文を付け加えている。これは重複した表現であるが、『大和物語』の他の章段にもみられる現象である。次に二段では、宇多帝の出家が実際には讓位した二年後であつたのを『大和物語』ではその一年後にすることで緊迫した状況を作り出し物語化をはかっている。これは『伊勢集』にも二年後とあることから理解できる。

さらに四段であるが、この章段については菊地靖彦氏が虚構であることを詳細に論じておりそれに尽きる。⁽⁴⁴⁾ただ、一言付け加えておくと、前述したように虚構の方法として『大和物語』では、主人公である野大式的心情が徐々に高揚していくという漸層法的な叙述になっている。これは虚構化するにあつての手法と言えよう。

以上、みてきたように三段を挟んでその前後の章段にも創作性を窺うことができた。このことは三段の創作性と決して無関係とは言えない。ただ、三段の場合、前述したようにとしこと源大納言の贈答歌に『古今六帖』歌や躬恒の歌を利用していると思われる。こうした方法はこの前後の章段にはみられず、ひとつの創作方法として注目される。ともあれ、これら四章段は事実をもとにしつつ脚色されており、作者の創作上のひとつの方針を窺い知ることができよう。

九

島津忠夫、中島和歌子両氏の論に啓発され『大和物語』第三段の創作性について考えてきた。その結果、改めてここは宇多上皇六十賀の史実をもとに創作されたものと思われる。それは史実への単なる肉付けというよりも一歩進んで虚構化を目指していた。具体的には、「故源大納言云々」から「みな急ぎはててけり」までは史実にもとづいていると思われる。これ以降はとしこと親しい関係にあつた源大納言の話にして、二人の歌のやりとりを季節の推移を考慮しつつ創作していったと考えられる。創作するに至った要因は何よりもまず作者の、としこへの関心の高さにあつた。このことはこれ以外の章段をみても理解できるところで、そこでは意図的な配置や創作性を知ることができた。創作する際、資料を『古今六帖』や『躬恒集』に求め、

それらをその場面に適応させるために改変していったものと考えられる。とりわけ躬恒の歌を利用したのは『大和物語』作者の、彼への関心の高さの表われ以外の何物でもない。これは躬恒が登場する章段からも窺い知ることができた。また、三段はその前後の章段の展開を考慮し配置しているのではないかと思われる。

従来、『大和物語』、即歌語りという考えが大勢を占めていたためもあつてか、この物語の創作性についてはあまり追究されて来なかつた。しかし、『大和物語』の性格を探るためにも新たな視点からの考察が必要であり、それが研究の進展につながるのではなからうか。ここでは三段のみを考察の対象としたが、今後はここでの考えを裏付けるためにも、これ以外の他の章段も視野に入れ、さらなる研究が必要であることはいうまでもない。

- 注(1) 難波喜造氏「歌語り」の世界（『日本文学』13巻8号、昭和39年8月）。雨海博洋氏『大和物語』における「歌語り」の文学的発想について（『二松学舎大学論集（昭和四十五年度）』昭和46年3月。後に『歌語りと歌物語』（桜楓社、昭和51年9月）に再録）。菊地靖彦氏『大和物語』在中将章段をめぐって（『一関工業高等専門学校研究紀要』17号、昭和57年12月。後に『伊勢物語・大和物語論攷』（鼎書房、平成12年9月）に再録）。同氏『大和物語』の『後撰集』歌章段をめぐって（『米沢国語国文』14号、昭和62年4月。後に『伊勢物語・大和物語論攷』に再録）などがみられる。
- (2) 拙稿①「大和物語における在原業平関係章段について」（『解釈』24巻4号、昭和53年4月）②「大和物語における虚構の方法——四一・一四二・一五四段を例にして——」（『中古文学』30号、昭和57年10月）③「古今」『伊勢』『大和』——ひとつの共通話をめぐって——（『平安文学研究』73輯、昭和60年6月）④「大和物語の創作方法——いわゆる「ならの帝」の章段をめぐって——」（『平安文学研究』76輯、昭和61年12月）⑤「大和物語の創作方法——伊勢関係の章段——」（『古典論叢』18号、昭和62年8月）これらは後に拙著『大和物語の研究』（翰林書房、平成6年2月）に再録。⑥『大和物語』覚書——『後撰集』との関わり的一面——（『歌語りと説話』新典社、平成8年10月。後に『大和物語』の研究』（私家版、平成12年12月）に再録）。本書第二章第一節・第二節・第三節・第七節・第八節・第十節。
- (3) 『大和物語評釈・十四』としこ（『国文学』8巻4号、昭和38年3月。後に『大和物語評釈 上巻』（笠間書院、平成11年3月）に再録）
- (4) 『大和物語の注釈と研究』（武蔵野書院、昭和56年2月）
- (5) 『新編日本古典文学全集大和物語』（小学館、昭和47年12月）
- (6) 「しきなみ」14巻7号、昭和34年7月。
- (7) 『大和物語研究』1号、平成12年9月。

- (8) 阿部俊子氏『大和物語 校注古典叢書』（明治書院、昭和47年3月）、雨海博洋氏『大和物語 有精堂校注叢書』（有精堂出版、昭和63年3月）など。
- (9) 久保木哲夫氏「在原元方について」（『和歌史研究会会報』33号、昭和44年3月。後に『平安時代私家集の研究』（笠間書院、昭和60年12月）に再録）
- (10) 拙稿「歌語りから創作へ―『大和物語』第百四十九段をめぐって―」（『大和物語の研究』。本書第二章第四節。
- (11) 『大和物語評釈 下巻』（笠間書院、平成12年2月）
- (12) 注(2)の拙稿⑤に同じ。
- (13) 注(2)の拙稿②に同じ。
- (14) 吉澤義則氏『全訳王朝文学叢書 第一巻』（王朝文学叢書刊行会、大正13年6月）、武田祐吉氏・水野駒雄氏『大和物語詳解』（湯川弘文社、昭和11年5月 再版 昭和39年6月）、浅井峯治氏『大和物語新釈』（大同館書店、昭和6年9月）
- (15) 注(7)に同じ。
- (16) 注(1)の菊地氏論文『『大和物語』の『後撰集』歌章段をめぐって』に同じ。
- (17) 注(4)に同じ。
- (18) 注(2)の拙稿②、③に同じ。
- (19) 『大和物語錦繡抄』（前田夏蔭）、『冠注大和物語』（井上文雄）
- (20) 本多伊平氏編著『北村季吟大和物語抄付大和物語別勘』（和泉書院、昭和58年1月）
- (21) 注(7)に同じ。
- (22) 片桐洋一氏「躬恒歌作りの一面」（『和歌文学新論』明治書院、昭和57年5月）
- (23) 「躬恒集解題―片野達郎氏」（『私家集大成 第一巻 中古Ⅰ』明治書院、昭和48年11月）
- (24) 「凡河内躬恒集」（『平安前期私家集の研究』桜楓社、昭和43年4月）
- (25) 注(7)に同じ。
- (26) 注(24)に同じ。
- (27) 雨海博洋氏「大和物語の監命婦」（『岡一男博士頌寿記念論集平安朝文学研究 作家と作品』（有精堂出版、昭和46年3月。後に『歌語りと歌物語』（桜楓社、昭和51年9月）に再録）ただ、今井源衛氏は『大和物語評釈 上巻』において虚構の判断の困難なことを述べている。

- (28) 注(1)の雨海博洋氏の論文に同じ。
- (29) 『大和物語評釈・八 桂の御子』(『国文学』7巻9号、昭和37年6月。後に『大和物語評釈 上巻』(笠間書院、平成11年3月)に再録)
- (30) 『大和物語評釈 上巻』
- (31) 注(2)の⑤に同じ。
- (32) 137段〜140段は、単に人物を並べているのではなく、各章段の内容、つまり恋の進行状況という観点から配置されていると考えられる。詳しくは注(2)の拙稿⑤を参照のこと。
- (33) 注(1)の『大和物語』の『後撰集』歌章段をめぐって」に同じ。
- (34) 『大和物語評釈 下巻』
- (35) 注(1)の『大和物語』の『後撰集』歌章段をめぐって」に同じ。
- (36) 『日本古典文学全集』頭注。
- (37) 注(4)に同じ。
- (38) ただし拾穂抄本文のみが「あひみても」となっている。
- (39) 注(2)の拙稿⑤に同じ。
- (40) 注(4)に同じ。
- (41) 主な研究として以下のようなものがある。初段については、今井源衛氏「大和物語評釈・一 亭子の院」(『国文学』6巻11号、昭和36年7月。後に『大和物語評釈 上巻』に再録)、菊地靖彦氏『大和物語』の『後撰集』歌章段をめぐって」(『米沢国語国文』14号、昭和62年4月。後に『伊勢物語・大和物語論攷』に再録)、二段については工藤重矩氏「大和物語の史実と虚構―第二・三五段をめぐって―」(『福岡教育大学国語国文学会誌』18号、昭和50年11月)、四段については菊地靖彦氏『大和物語』の『後撰集』歌章段をめぐって」などがみられる。
- (42) 注(2)の拙稿⑤に同じ。
- (43) 注(2)の拙稿⑤に同じ。
- (44) 注(1)の菊地氏の論文に同じ。

第七節 大和物語の創作方法

—いわゆる「ならの帝」の章段をめぐって—

—

大和物語一五〇段から一五三段にかけて、「ならの帝」に関する話が載っている。この「ならの帝」を歴代いずれの帝ととるかは一五三段を除き諸説あり一定していない。しかも前半に比べ意図的になされていると思われ後半にあつて、帝に関する章段が四章段も連続しているのは注目すべきことである。そこから大和物語作者の物語創作上の意図を探り出せるかもしれない。そんな意味で、ここでは「ならの帝」の章段をめぐって、ひとつの考えを提示してみたいと思う。

—

一五〇段から一五三段に登場する「ならの帝」とは一体、いずれの帝を指すのか。それと人麿が登場していることをどう考えたらよいのか、という観点から多くの先学により考えられてきた。以下、その主なものを紹介してみよう。

(1) 勝命本勘注〔『支子文庫本大和物語』(在九州国文資料影印叢書)に拠る〕

聖武天皇也

(2) 『袋草紙』(『袋草紙注釈 上』(小沢正夫氏・後藤重郎氏・島津忠夫氏・樋口芳麻呂氏著 塙書房 昭和49年3月)に拠る)

今案二三反八同帝卜書_レ之。其後更奈良帝卜書。已各別帝卜見。ハテノ蘭ノ歌ハ無_レ疑大同帝歌也。嵯峨帝、坊ノ時之故也。初三首者以往ノ奈良帝也。

人丸相伴之故也。

『大和物語の注釈と研究』

(3) 『大和物語鈔』(『大和物語諸注集成』に拠る)

文武天皇也文武天皇は奈良七代一代前也此朝は藤原の宮なれ共と先なら開き給ひ藤原におはします故にならの帝と申すと也

『大和物語抄』、『天福本大和物語』 勘注⁽³⁾

(4) 『大和物語直解』(『賀茂真淵全集 第十六卷』〈解説阿部俊子氏 続群書類従完成会 昭和56年7月〉に拠る)

此条はことに後の人の作事也、先ならのみかど、有て人丸の歌とある事もたがへり、ならのみかど、は平城天皇を申也、人丸は藤原宮慶雲中に石見にて死ていと古へなるを、此比あやまりて書しものにもあらず、物語にいつはり作れる也、さるを諸説は古の事をもしらず、強てその偽をかざらんとする故に皆笑ふべき事のみ、(以下略)

『大和物語錦繡抄』、『大和物語管窺抄』、今井源衛氏「大和物語評釈・四十四 猿沢の池」、『大和物語全釈』

(5) 『大和物語詳解』(井上覚蔵氏・栗島山之助氏)

奈良の大和に都し給ひし帝といふ意。

萩野由之氏・小中村義象氏・落合直文氏『日本文学全書 第六編 大和物語』(博文館 明治23年9月)、浅井峯治氏『大和物語新釈』、吉澤義則氏『大和物語新講』、阿部俊子氏『大和物語 校注古典叢書』、高橋正治氏『日本古典文学全集大和物語』

(6) 『歌語りと歌物語』(雨海博洋氏)

一五〇段は采女の入水にまつわる伝説、伝承歌から成り、この段の「ならの帝」は平城帝を主としながら桓武帝の要素が采女に関して加わっている。一五一段は前段の平城帝と柿本人麿の組み合わせを受け、『古今和歌集』仮名序、古今歌をもとに両人の歌の唱和の語りとなり、一五二段では「ならの帝」は桓武帝の鷹に関する史的事実を背景に「いはで思ふ」の歌で平城帝と結びついて「ならの帝」となっているが、桓武帝の占める位置は一番大きい。最後の一五三段は平城帝と嵯峨帝との唱和で、これこそ史実そのもので、「ならの帝」は即平城帝となっている。

(注) 後に記した注釈書類は同じ考えのものを示す。

以上のように様々な考えがある。それでもおおよそ三つに分類できる。即ち、

(A) 特定せず——(2)、(5)

- (B) 各帝 —— (1)、(3)、(4)
 (C) 歌語り —— (6)

となる。こうなっているひとつの要因は、人麿が登場していることによる。それゆえ(A)は特定しなかつたのであるし、(B)は一定しないのである。古注(勘注も含めて)において別の帝とする考えが大半を占めている。それも文武、平城、聖武という説に分かれている。ただ、これらの中でも『大和物語直解』は大和物語作者による虚構とみていることは注目すべきである。下って明治時代以降の注釈書は奈良の大和の都を定めた帝と考えているものが多い。このような中であつて、雨海博洋氏は各章段の背景等を詳細に考察された。氏はこれらの章段を歌語りという観点でとらえておられる。

このように「ならの帝」の章段については、個々の帝を指すという考えから、虚構、歌語りという観点で考察されてきたわけである。

三

それにしても、大和物語の作者はどのような意図でもってここに「ならの帝」の章段を置いたのか。それを突き止めることが、これらの章段を理解するひとつの方法であるように思う。

そこで、論述の便宜上、一五〇段から一五三段までを記してみる。

一五〇段

むかし、ならの帝に仕うまつるうねべありけり。顔かたちいみじう清らにて、人々よばひ、殿上人などもよばひけれど、あはざりけり。そのあはぬ心は、帝をかぎりなくめでたきものになむ思ひたてまつりける。帝召してけり。さてのち、またも召さざりければ、かぎりなく心憂しと、思ひけり。夜昼、心にかかりておぼえたまひつつ、恋しう、わびしうおぼえたまひけり。帝は召ししかど、こととおぼさず。さすがに、つねに見えたてまつる。なほ世に経まじき心地しければ、夜、みそかにいでて猿沢の池に身を投げてけり。かく投げつとも、帝はえしろしめさざりけるを、ことのついでありて、人の奏しければ、聞しめてけり。いといたうあはれがりたまひて、池のほとりにおほみゆきしたまひて、人々に歌よませたまふ。かきのもとの人麻呂、

わぎもこがねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき

とよめる時に、帝、

猿沢の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひなまし

とよみたまひけり。さて、この池に墓せさせたまひてなむ、かへらせおはしましけるとなむ。

一五一段

おなじ帝、竜田川の紅葉、いとおもしろきを御覧じける日、

人麻呂、

竜田川もみち葉流る神なびのみむろの山にしぐれ降るらし

帝、

竜田川もみちみだれてながるめりわたらば錦なかや絶えなむ

とぞあそばしたりける。

一五二段

おなじ帝、狩いとかしこく好みたまひりけり。陸奥の国、磐手の郡より奉れる御鷹、世になくかしこかりければ、になうおほして御手鷹にしたまひけり。名をば磐手となむつけたまへける。それを、かの道に心ありて、あづかり仕うまつりける大納言にあづけたまへりける。夜昼、これをあづかりて、とりかひたまふほどに、いかがしたまひけむ、そらしたまひてけり。心ぎもをまどはしてもとむるに、さらにえ見いせず。山々に人をやりつつもとめさすれど、さらになし。みづからも深き山に入りて、まどひ歩きたまへどかひもなし。このことを奏せで、しばしもあるべけれど、二三日あげず御覧せぬ日なし。いかがせむとて、内にまゐりて、御鷹のうせたるよし奏したまふ時に、帝、ものものたまはせず。聞しめしつけぬにやあらむとて、また奏したまふに、おもてをのみまもらせたまうて、ものものたまはず。たいだいしとおほしたるなりけりと、われにもあらぬ心地して、かしこまりていますかりて、「この御鷹の、もとむるに、侍らぬことを、いかさまにかしはべらむ。などかおほせごともたまはぬ」と奏したまふ時に、

帝、

いはで思ふぞいふにまされる

とのたまひけり。かくのみのたまはせて、こと事ものたまはざりけり。御心にいといふかひなく、惜しくおぼさるるになむありける。これをなむ、

世の中の人、もとをばとかくつけける。もとはかくのみなむありける。

一五三段

ならの帝、位におはしましける時、嵯峨の帝は坊におはしまして、よみてたてまつりたまうける。

みな人のその香にめづるふじばかま君のみためと手折りたる今日

帝、御返し、

折る人の心にかよふふじばかまむべ色ことにほひたりけり

(注) 本文は『日本古典文学全集』に拠る。以下、作品の引用はこれに拠っている。

大和物語において、同一人物の章段が続くとき、その冒頭は次のような表記をとっている。

八一段 季繩の少将のむすめ右近、

八二段 おなじ女のもとに、

八三段 おなじ女、

八四段 おなじ女、

八五段 おなじ右近、

一三一段 先帝の御時、四月のついたちの日、

一三二段 おなじ帝の御時、躬恒を召して、

一三三段 おなじ帝、月のおもしろき夜、

一三四段 先帝の御時に、

つまり最初と終わりの章段には実名を記し、その間の章段は「おなじ云々」と略している。してみると、一五〇段から一五三段の場合もこれらと同様に考えてよいのではないか。一五三段が平城帝であるから、これ以外の一五〇・一五一・一五二段に登場する「ならの帝」を、大和物語の作者の意識には平城帝がこの根底にあったとみてよからう。それが人麿の登場ということもあつて矛盾を生じているのである。ただこれらの章段が、後半の創作性

の強い所にあることを思えば、この面でも、基本的には他の章段と同じようにしつつも、大和物語作者の別な意識が働いていたとみるのがよいのではあるまいか。

大和物語の後半において、同一人物の話で連続する章段に、これ以外に在中将に関する話があげられる。これらの章段の冒頭は次のようになっている。

一六〇段 おなじ内侍に、在中将すみける時、

一六一段 在中将、二条の後の宮、

一六二段 また、在中将、内にさぶらふに、

一六三段 在中将に、後の宮より菊を召しければ、

一六四段 在中将のもとに、人のかざりちまきおこせたりける返しに、

一六五段 水尾の帝の御時、左大弁のむすめ…(中略)…在中将しのびて通ひけり。

一六六段 在中将、物見にいでて、女のよしある車のもとに立ちぬ。

(注) 傍線は稿者が施した。以下も同様。

これを見ると、中にある章段は省略されていない。一六〇・一六五段は問題あるにしても、傍線を施したあたりは「おなじ云々」となっているもよさそうである。これについては先学の説もあるが、思うにこれらの章段は大和物語の後半にあり、前述の如くここは創作性が強く、そのために前半にあるものとは異なった記載方法をとったのではなかったか。事実、在中将関係の章段には、意図的になされたところが多いのである。⁽⁵⁾

では、なぜ「ならの帝」の章段も、その冒頭を在中将関係の章段と同じようにしなかったのであろうか。大和物語の後半において、同一人物で三章段以上、連続しているのは、「ならの帝」と在中将関係の章段だけであり、後者は前述の如く意図的なところがみられた。したがって、「ならの帝」の章段においても意図的な方法を講じたことは当然、予想できる。内部においての矛盾と考えるよりも、虚構の現れとみてよかろう。ともかくこれらの章段は表記上、異なるものの虚構という点で共通していよう。

四

大和物語の作者は虚構ということ、一五〇段と一五一段に人麿を登場させたと思われるが、それはこれのみで済ませたものか、それとも内容にお

いてもそれが及んでいいるのかが問題になろう。以下、この点について考えてみたい。

一五〇段を読んでみて感じること、重複する語があまりにも多いということである。それらを抜き出してみると、

- ① 人々よ**ば**ひ、殿上人などもよ**ば**ひけれど、
- ② あはざりけり。そのあはぬ心は、
- ③ 帝召してけり。さてのち、またも召さざりければ、
- ④ 帝をかきなりくめでたきものに…(中略) …かきなりく心憂しと、思ひけり。
- ⑤ 心にかかりておぼえたまひつつ、恋しう、わびしうおぼえたまひけり。
- ⑥ 身を投げてけり。かく投げつとも、

(注) 波線は稿者に拠る。以下も同様。

のような結果になる。それほど長くもない章段の中にこれだけの数であるから注目すべきことである。これは何を意味するのであろうか。ごてごてとしてどうみても洗練された文章とは言えない。思うにこれは作者の文章力の稚拙さに起因しているのではないか。それと文章の続き方において不自然なところがある。即ち「帝召してけり。さてのち、またも召さざれば…(中略) …帝は召ししかど」のところで、二度と召さなかつたわけであるが、その後に「召ししかど」とある。このままだと理解に苦しむ。でなければ、これを解決する、なんらかの理由めいた本文がほしいところである。このことも作者の文章に対する稚拙さの一面を吐露しているように思う。ただ、森本茂氏は重複語の多用が創作意識の証しになることについて疑問を投げかけられた。そして「なむ」の多用から歌語りをほとんどそのままの形で文字化したと考える⁽⁷⁾。確かに歌語りの要素は多いと思われる。しかし、それをもとにして作者は綴っていくのであるからそこには文章力というものも反映するであろう。事実、重複語の多用はこれ以外でもみることができるし、作者の文章力の稚拙さも散見する⁽⁸⁾。これはやはり作者の文章力以外の何物でもあるまい。

それと、この章段には二首の歌がある。このうち前者、即ち人麿が詠んだ「わぎもこが」の歌は拾遺集に人麿の作として見えている。その関係はともかくとして、この歌は人麿の作として伝承されていたのであろう⁽⁹⁾。ところが、後者の帝の詠んだ「猿沢の」の歌であるが、これは現在のところ出典不明である。ただ、この歌の類似歌は指摘されている⁽¹⁰⁾。雨海博洋氏はこの類似歌から派生したのではないかと推測しておられる⁽¹¹⁾。しかし、具体的にどうなったのかについては言及されていない。私見によると、これらは密接な関係があるように思われる。今、人麿の「わぎもこが」の歌を含め、これらを記してみる。

わぎもこがねくれた髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき

猿沢の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひなまし

耳無の池し恨めし我妹子が来つつ潜かば水は涸れなむ（万葉集）

万葉集にある「耳無の」の歌と「猿沢の」の歌はあまりにも似通っている。これは単に伝承と考えるよりも万葉集の歌をもとにして創作したと考えた方がよいのではないか。即ち「耳無の池」を「猿沢の池」にし「恨めし」を「しらしな」に改めたのであろう。また「来つつ」のところを「玉藻」になっているが、これは返歌ということで人麿の「わぎもこが」の歌の一部をとり入れ、さらに「かづかば」という部分も万葉集から持ってきたものと思われる。これら以外に付随的なことをあげると、両方とも二句切れで、係り結びになっていることも共通している。このようなことから、帝の「猿沢の」の歌は大和物語の作者によって創作されたものとみてよからう。これと類似した例は他の章段にもみられることから、大和物語の作者にとってひとつの方法であったのであろう。

「猿沢の」の歌が大和物語の作者によって作られたということになれば、それはとりもなおさず虚構ということになる。それにしても虚構となると、この章段全体がそうなのか、あるいは素材みたいなものがあって、それをもとにして創作されたのが問題になる。猿沢の池の話が、最も古いのは大和物語一五〇段の記事であり、これより古い文献があれば、はつきりするわけだが、大和物語より後に成立した作品にも類似した話がみられることは、かなり伝承されていたとみてよいのではないか。このことから後者が妥当と思われる。

ともかく、大和物語の作者にとって年代的な矛盾など考慮せず、伝承をもとにしてひとつの創作を試みたとみるべきであろう。

五

一五〇段はある事件がもとで、その場に行幸し帝と人麿が悲しみに暮れているのに対して、次の一五一段はそのような事件的な背景はなく、立田川に行幸し、そこでの紅葉の美しさを詠んでいる。ここにみられる二首は古今集にあり、それには次のようになっている。

題しらず

読人しらず

竜田川紅葉乱れて流るめりわたらば綿なかや絶えなむ

この歌は、ある人、「奈良帝の御歌なり」となむ申す。

竜田川もみぢ葉ながる神奈備の三室の山に時雨降るらし

又は「飛鳥川もみぢ葉ながる」

大和物語と比較してみると、古今集では両方とも読人しらずの歌で、順序が逆になっている。しかも贈答歌の形をなしていない。これはすでに指摘されているように前段に合わせるために作為されたものであろう。大和物語の作者がこれらの歌を用いようとしたのは「竜田川紅葉乱れて」の歌の左注にみられるように平城帝の歌として伝承されていたことによるのであろう。そして次の「竜田川もみぢ葉ながる」の歌も竜田川の紅葉を詠んだものであり、贈答歌にするのには好都合な歌であった。事実、この歌を古今集の伝本で奈良帝の作としているのもあるが、大和物語のみが人麿としており、この点でも作爲的なものがある。

だが、虚構ということに関しては異見がないわけではない。「ならの帝」と人麿の結びつきについて、今井源衛氏は次のように述べておられる。

私は、人麿の年代的な把握については、大和物語作者自身にあまりないものがあったのではないかと思う。平安中期に出来たと思われる柿本集がいかにも実在の人麿からかけ離れたものであるかを考えても、また顕昭の「柿本朝臣人麿勘文」などの考証が現れたのも、逆に、平安末期における人麿の年代把握が一般にあまりないものであったことを物語るであろう。古今集の序などによって、赤人と同様に漠然と奈良時代の歌人とは知っていたであろうが、それ以上のことは知らず、益田氏が指摘されたように、「奈良の帝」と「人麿」との安易な結びつきが起こるとは十分に考えられるであろう。(真淵の虚構作為説は、いささか言い過ぎと云うべきであろう。)⁽¹⁶⁾

確かにこのような考えもできようが、「安易な結びつき」というところがどうも引つかかる。何度も述べたように「ならの帝」は平城帝と考えられるから、「ならの帝」を漠然ととらえていれば、話は別であるが、ここはそのように考えられない。年代的な把握はできたはずである。顕昭の『柿本朝臣人麿勘文』が成立したのも、人麿が奈良時代前期の人であるからこそこのような考証も生じたのであろう。それゆえ大方どの帝の御代かぐらひは、大和物語の作者は理解していたはずである。ともかく「ならの帝」と人麿の結びつきを年代的なあまりいと考えるよりも、真淵の如く虚構と考えた方がよいのではあるまいか。

一五〇段もそうであったように、一五一段の「ならの帝」と人麿の結びつきはどのような理由によるのであろうか。雨海氏は先程記したような考えをなされている。その根拠の一部とされているのが「古今集仮名序」である。確かにそのような考えも可能であろう。しかし、次のような考えもでき

るのではないか。「古今集仮名序」には

古よりかく伝はるうちにも、ならの御時よりぞひろまりにける。かの御代や歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、正三位柿本人麿なむ歌の聖なりける。これは身も人を合はせたりといふなるべし。秋の夕、竜田川に流るる紅葉をば帝の御目に錦と見たまひ、(以下略)

と記されている。この記事と深い係わりがあるのではないか。ここに登場する帝は、「竜田川」の歌を詠んだとあることから「ならの帝」とみてよい。これは一五一段にみられる歌であり、前述の如く古今集の左注には「奈良帝云々」とあることから、この記事と一致している。また一五〇段の方であるが、ここにある歌が「古今仮名序」にみられるわけではない。しかし、翻つて考えてみるに一五〇・一五一段に「ならの帝」と人麿を持つてきていることは、何らかの関連を考えるべきであろう。一五〇段において、人麿の歌をまず持つて来て、それに合わせるために、前述の如く「ならの帝」の歌は創作されたものと思われる。ともかく人麿と「ならの帝」が登場すること自体、偶然の一致とは考えられないのである。

六

一五〇・一五一段は伝承をもとにして、物語が創作されたと思われるわけだが、次の一五二段はどうか。その背景となるものが考えられようか。例えば伝為氏筆本には⁽¹⁷⁾

文武朝大納言大宝元年石上朝臣麿淡海公紀朝臣麿三人三月任慶雲二年大伴安麿八月任十一月大宰輔

というような勘注がみられる。これによると「ならの帝」を文武帝とみており、また大納言にはそこに記された人物が該当するとみている。しかしこの記事が何にもとづくのかは明らかではない。

一方、今井源衛氏は鷹狩りに関する文献を検討された。その結果、桓武・嵯峨両朝はその記事が多く、平城朝にはそれがなく、平城朝にはそれがなく、平城朝に関する事実としては不安が残るとされ、結局は平安初・中期の宮廷における鷹狩りの流行の間に発生した歌語りとしてみるべきと考えておられる。⁽¹⁸⁾ さらに雨海氏も文献を詳細に検討され、ここ「ならの帝」は桓武帝と平城帝の二重映像、大納言は藤原朝臣継繩ではないかと推測されている。⁽¹⁹⁾

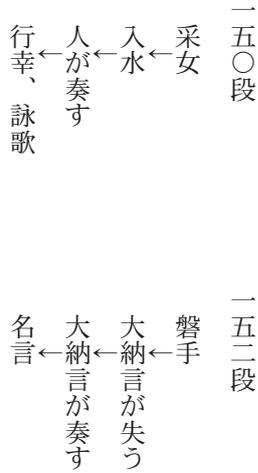
これら先学の努力には敬意を表したいが、問題は一五二段の内容そのものが他の文献に見い出せないことである。このことから一五二段の背景となった話は伝承されていたのかもしれないが、それをもとにしての大和物語作者の創作欲を認めてもよいのではないか。

先程の一五〇段には重複する語が多かった。それを創作性の一端とみたわけだが、実はこの一五二段にもそれがみられるのである。即ち、

- ① あづかり仕うまつりける大納言にあづけたまへりける。
- ② いかがしたまひけむ、…(中略)…いかがせむとて、内にまゐりて、
- ③ さらにえ見いせず。山々に人をやりつつもとめさすれど、さらになし。
- ④ 帝、ものものたまはせず。…(中略)…ものものたまはず。
- ⑤ のたまひけり。かくのみのたまはせて、こと事ものたまはざりけり。
- ⑥ 心ぎもをまどはしてもとむるに、…(中略)…まどひ歩きたまへどかひもなし。
- ⑦ さらになし…(中略)…歩きたまへどかひもなし。…(中略)…御覽ぜぬ日なし。

がそれである。この章段は一五〇段に比べると、地文も長いが、それにしても多すぎる。このあたりにも作者の文章に対する稚拙さの一面が出ていよう。さらに「心ぎもをまどはしてもとむるにさらにえ見いせず。山々に人をやりつつもとめさすれど、さらになし。みづからも深き山に入りて、まどひ歩きたまへどかひもなし。」の部分において、波線と傍線のところがだぶついている。このことによってもそれを物語っていよう。ともかく一五〇段での推論をここでも補強できよう。

また一五〇段と一五二段を比べてみると、修辭的な面で共通している。つまり漸層法的手法を用いているということである。采女の心情と大納言の心情が徐々に高まっていくのである。しかもその原因を作っているのは帝である。両者の内容を辿ってみると、



というようになる。つまりこれらは、対象↓いなくなる↓報告↓歌が生まれるとなり、共通している。これは偶然の一致と言えようか。同じ「ならの帝」の章段においてこうなっており、作者が表現の上で努力したことを思えば、なおさらのことであろう。

一五〇段と同じように、この話は当時かなり流布していたようである。それは枕草子や古今六帖等から窺える。その素材源はあつたにしても、それをもとに活字に移すにあたっては、作者はそれなりの努力をし、わずかながら潤色を加えていったものと思われる。

七

一五三段は前にも述べたように、史実にもとづいている。即ち『類聚国史』三十一・天皇行幸下には

幸^二神泉苑^一、琴歌間奏四位已上、共挿^二菊花^一、于^レ時皇太弟頌歌去、美耶比度乃 曾能可邇米豆留 布智波賀麻、岐美能於保母能 多乎利太流祢布。上和^レ之曰、袁理比度能 己^レ乃麻丹真布智波賀麻 宇倍伊邑布賀久 爾保比多理介利。群臣俱称^二万歳^一、賜^二五位以上衣被^一。

(注) 本文は『^{増補}新訂国史大系 第五卷 類聚国史前篇』(黒板勝美氏篇 吉川弘文館 昭和8年9月)に拠る。句読点、返り点は稿者が施した。

とある。両者を比較してみると大和物語の方は、かなり簡略になっている。場所、作歌事情等は一切省略されている。こうしたのは大和物語作者の何らかの意図があつたのであろう。一五三段からみる限り、二人の今の立場と、その贈答歌のみを記したことは兄弟愛を描こうとしたのであろう。今までみてきた一五一・一五二段がそうであつたように、伝承されていたのをもとに創作していったのに対し、一五三段は史実ではあるが、全く同じではなく作者の意向に添っている。いわば一種の創作である。これらの章段は、創作という点において共通しているのである。そして、ここでは「ならの帝」とは真正正銘の平城帝であることを示している。この章段を除いても一五〇段から一五二段の「ならの帝」は平城帝を意識していると思われる。それほどまでに、なぜ「ならの帝」の章段をここに置いたのであろうか。

一四九段は在中将を意識しているから、その祖父にあたる平城帝の話を持つてきているとの考えがある。⁽²⁾確かに大和物語の作者にとってみれば、連想ということである。そのようなことを考えたのかもしれない。しかし、後半全体からみると、別の見方もできそうである。一五〇段から一五三段までは平城帝が作者の意識下にあり、この時の都は京にあつた。したがって、私がすでに指摘したように、大和物語の後半は都の話と地方の話とが交互に並べられており、そして都から地方へ移る場合、都に近い国を持つてきて、次第に遠い国を配置している。一五四段もそんな意味で大和の国の話を持つてきている。しかも大和物語の後半は対称的技法を用いていると思われる。その頂点に位置しているのが一五〇段から一五三段の「ならの帝」の章段である。ここでは「ならの帝」の章段が頂点に位置し、作者の何らかの考えが反映されているのではないかということを目指しておきたい。

八

大和物語の「ならの帝」の章段について考察してきたわけであるが、「ならの帝」はあくまでも平城帝を指すという意識で置かれていると思われる。そしてここには伝承（歌語りを含めて）ということから一步進んで創作意識を窺うことができた。これらの章段を創作するにあたっては、ある材料をもとになされていた。しかしその表現をみるに、決してすぐれているものではなく、中には稚拙とさえ思えるところもあった。したがって、その方法は独自性という点では当然、乏しいが、「ならの帝」に関する章段を創作しようという、大和物語作者の意欲をわずかながら窺い知ることができよう。それを少しでも認めたいのである。

それにしても、従来の考えとは別な観点から考えてきたが、思わぬ誤り、果ては考え過ぎも多いことと思う。多くの方々の御叱正をいただけたら幸いである。

- 注(1) 拙稿「大和物語の構成について―後半の章段を考察の対象として―」(『語文』39輯 昭和49年3月)、「大和物語における在原業平関係章段について」(『解釈』24巻4号 昭和53年4月)、「大和物語における虚構の方法―一四・一四二・一五四段を考察の対象として―」(『中古文学』30号 昭和57年10月) 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和57年』(朋文出版 昭和58年11月)に再録、「古今」『伊勢』『大和』―ひとつの共通話をめぐって―」(『平安文学研究』73輯 昭和60年6月 後に『国文学年次別論文集 中古1 昭和60年』(朋文出版 昭和61年10月)に再録)。これらの論考は『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録。本書第二章第一節・第三節、本書第三章第四節。
- (2) 一四一段以降。その妥当性については、拙稿「大和物語」小考―前半と後半の分け方―(『解釈』32巻9号 昭和61年6月 後に『大和物語の研究』に再録)を参照のこと。本書第三章第二節。
- (3) 『大和物語』野坂元定氏蔵
天福本『解説高橋正治氏 新典社 昭和46年10月』
- (4) 『類聚国史』三十一・天皇行幸下。
- (5) 雨海博洋氏「大和物語の伊勢物語意識―大和一六〇段・一六五段を中心とした考察―」(『論叢王朝文学』笠間書院 昭和53年12月 後に『物語文学の史的論考』(桜楓社 平成3年10月)に再録)

- (6) 拙稿「大和物語における在原業平関係章段について」(「解釈」24巻4号、昭和53年4月)、『古今』『伊勢』『大和』—ひとつの共通話をめぐって—(「平安文学研究」73輯、昭和60年6月、後に『国文学年次別論文集 中古1 昭和60年』(朋文出版、昭和61年10月)、『大和物語の研究』にそれぞれ再録)。
本書第二章第一節・第三節。
- (7) 「大和物語の「ならの帝」考」(「平安文学研究」77輯、昭和62年5月、後に『大和物語の考証的研究』(和泉書院、平成2年10月)に再録)。
- (8) 「大和物語の創作方法—在中将関係の章段を中心にして—」(『大和物語の研究』)。本書第二章第九節。
- (9) 「大和物語評釈・四十四 猿沢の池」(「国文学」11巻3号、昭和41年3月、後に『大和物語評釈 下巻』(笠間書院、平成12年2月)に再録)。
- (10) 『大和物語虚静抄』、『大和物語詳解』(武田祐吉氏・水野駒雄氏)。
- (11) 雨海博洋氏『歌語りと歌物語』(桜楓社、昭和51年9月)。
注(8)に同じ。
- (12) 『七大寺巡礼私記』(編者・発行者 奈良国立文化財研究所、昭和57年3月)。
注(9)に同じ。
- (13) 元永本、筋切。
注(7)に同じ。
- (14) 古文学秘籍複製会より複製本が刊行された(解説池田亀鑑氏、昭和8年9月)。現在、国立歴史民俗博物館所蔵で影印本がある(『国立歴史民俗博物館所蔵貴重典籍叢書文学篇 第十六巻 物語一』解題柳田忠則、臨川書店、平成11年5月)。なおこの本は高橋正治氏の『大和物語の研究』系統別本文篇上』(私家版、昭和44年4月、再版、臨川書店、昭和63年10月)に翻刻もされている。
- (15) 「大和物語評釈・四十五 盤手」(「国文学」11巻4号、昭和41年4月、後に『大和物語評釈 下巻』に再録)。
注(9)に同じ。
- (16) 「故殿などおはしまさで」の段(『日本古典文学全集枕草子』(松尾聰氏・永井和子氏校注・訳、小学館、昭和47年8月)一四六段)。
- (17) 『古今和歌六帖 上巻 本文篇』(宮内庁書陵部編、養徳社、昭和44年10月)には「いはて思」の項目がある。
注(9)に同じ。
- (18) 拙稿「大和物語の構成について—後半の章段を考察の対象として—」(「語文」39輯、昭和49年3月、後に『大和物語の研究』に再録)。本書第三章第四節。

第八節 大和物語の創作方法

―伊勢関係の章段―

一

大和物語は歌語りの集成と言われている。確かにそのようなところもみられるが、中には大和物語の作者によって、虚構という意識でもって創作されたと思われる章段が存在するようである。事実、このことについては先学により指摘されているし、私もふれたことがある⁽¹⁾。しかし、今まで指摘された章段は大和物語全体からみると、いかにも少なく、出来ればそのような章段をより多く探りあてることによって、説得力が増してこよう。

そんなことで、ここでは三十六歌仙の一人である伊勢の関係する章段をとり上げて、章段を形成する場合、どのような方法をとっているかについて考えてみたい。

二

そもそもここで彼女に関する章段をとり上げたのは宇多法皇圏を描いた大和物語の冒頭にあつて、宇多天皇とともに彼女が登場しており、大和物語の作者にとつては関心を持った人物の一人ではないかと思われるからである。

さて、彼女はこの初段をはじめ、三〇・一一九・一三八・一四二・一四七の六章段に関係している家集にみられる彼女の歌、別人の歌を利用してゐる場合を含めて。これまでにこれらの章段については、今井源衛⁽³⁾、高橋正治⁽⁴⁾、柿本奨⁽⁵⁾、雨海博洋⁽⁶⁾、山崎正伸等⁽⁷⁾の各氏により、詳細かつ有益な研究がなされてきた。これらの御論については随時、論述の過程でふれていきたいが、思うにこれまでの研究は各章段ごとになされてきたきらいがある。確かに伊勢関係の章段は大和物語

全体からみれば、そんなに多いわけではないし、個々にみても、全体からみてもさほど違いはなからう。ただ注意しておきたいことは、彼女がさまざまな形で登場しているということである。伊勢という同じ人物の章段がこのような形になっているのであるから、彼女の関係する章段全体を通してみることがその意図を探る上で必要なのではあるまいか。

三

伊勢の関係する章段⁽⁸⁾とは言っても、前述の如く様々な方法をとっている。そのうちはつきり「伊勢」と記されて登場するのは初段と一四七段だけである。先程も述べたように初段は宇多天皇と彼女の唱和で、宇多天皇を冒頭に置いたのは、この物語がその御代を中心に描かれていることを示している。伊勢は女流歌人として著名で勅撰集に数多くの歌が入集している。また宮中にあつては宇多天皇の中宮である温子の許に出仕したのをはじめ、宇多天皇の寵愛を受け一子をもうけた。⁽⁹⁾こんなことで、彼女は宇多天皇と深いつながりを持っていた。

一方、一四七段での伊勢はどうか。この章段は他の章段と異なり、三部構成になっている。即ち生田川伝説、次いでそれに基づいての詠作、最後が後日譚となっている。伊勢は第二部の詠作の最初に「かげとのみ水のしたにてあひ見れど魂なきがらはかひなかりけり」本文は『日本古典文学全集』に拠る。以下も同様。という歌を詠んでいる。しかもその場は宮廷サロンというところであり、第二部の冒頭は「かかるとどものむかしありけるを、絵にみな書きて、故後の宮に人の奉りたりければ、これがうへを、みな人々この人にかはりてよみける」とある。ここに登場する「故後の宮」とは先程述べた温子中宮のことで、彼女に伊勢は献身的に仕えた。したがって、歌を詠んでいることもうなづけよう。しかもトップを切つて詠んでおり、歌人としての位置の高さを知ることが出来る。その彼女をここに記載していることは、少なくとも大和物語の作者が彼女に何らかの形で関心を抱いていたのであろう。

このように一方では宇多天皇との贈答をし、また一方ではその中宮である温子のもとで献歌をするというように、彼女はこの上ない名譽に浴している。これらの出来事は、当時、人々の間で話題になっていたと思われる。大和物語の作者はそれを記載したと考えられるが、それは語られたままか、それとも脚色されているかが問題にならう。それを探る手立てとして彼女の家集である伊勢集が参考になる。ただ、伊勢集はその成立過程が複雑であり、⁽¹⁰⁾大和物語と現存伊勢集がどのような関係にあるかは、自撰伊勢集とも絡んで明らかではない。しかし、これらが共通しているということは、現存のそれだけでなく、その生成過程のいずれかと関係があつたことにならう。以下、伊勢集とは言っても、このような含みでもって述べていることをあらかじめ断っておきたい。

さて、初段は伊勢集と共通している。今両者を比較してみると次のようになる。

| 伊勢集 | 大和物語 |
|---|---|
| <p>亭子のみかどの、をりさせたまはむとせさせたまひし時の秋。 白露のおきてかゝれるもゝしきのうつろふあきのことぞかなしき わかるれどあひもおもはぬもゝしきをみざらんこと のなにかゝなしき と、こき殿のかべにかきたるを、みかど御覧じて かたわらに みひとつにあらぬばかりぞおしなべてゆきかへりて もなかみざらん</p> | <p>亭子の帝、いまはおりあさせたまひなむとするころ、弘徽殿の壁に、伊勢の御の書きつけける。 わかるれどあひも惜しまぬももしきを見ざらむ ことのなら悲しき とありければ、帝、御覧じて、そのかたはらに書きつけさせたまうける。 身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもなかみざらむ となむありける。</p> |

(注) 伊勢集の本文は西本願寺本を底本にした『校註伊勢集』(関根慶子氏・村上治氏・小松登美氏著 不昧堂書店 昭和27年9月)に拠った。これは以下も同様。

伊勢集と大和物語の相違は、本文の小さな異同はともかくとして、大和物語は「白露の」の歌を持っていないことである。これは今井源衛氏が指摘しておられるように、⁽¹²⁾ バランスや歌の内容等から考えて「白露は」の歌を除去し、伊勢集をもとにして大和物語ができたのであろう。それは大和物語の本文をみても理解できる。大和物語には「いまは」とあって、伊勢集にはみられない。⁽¹³⁾ これを加えることによって緊迫感を出し、物語的な効果を考えてたのであろう。さらに伊勢集には「をりさせたまはむとせさせたまひし時の秋」⁽¹⁴⁾ であるが、大和物語にはそれがみられず、単に「おりなさせたまひなむとするころ」となっている。⁽¹⁴⁾ 伊勢集にみられる「白露は」の歌は秋の歌であり、しかも大和物語ではこの歌を削去したわけであるから、それにともないこの語をもなくし、あのような表現にしたのであろう。それは、「わかるれど」と「みひとつに」の歌には秋を示す景物がみられないことによっても理解できよう。ともかく大和物語初段は伊勢集をもとに脚色を加え、より人物本位に仕立てている。

しかしながら、一四七段の「かげとのみ」の歌は現存の伊勢集から見い出せず、それとの関係は考えられない。それにしても、前述したようにこの章段は三部構成になっているが、一、三部だけで物語としては十分だったはずである。しかしそうはせずにこのような構成にして、第二部には伊勢をはじめ、多くの人物を登場させ、他には見られない特殊な章段を構成している。これはひとつの創作欲の現れとみるべきではないか。⁽¹⁵⁾

ともあれ、初段と一四七段において「伊勢」と名をそのまま用いていても大和物語の作者はその内部において、工夫を試みており、いわば創作性を発揮していたのである。

四

伊勢関係の章段の生成について考える時、伊勢集がその章段のすべてに資料になっているかは問題であるが、すんなりとは軽視できない。例えば一一九段をみてみよう。まず両者を比較してみると次のようになる。

| 伊勢集 | 大和物語 |
|--|---|
| <p>にはとりにあらぬねにてもきこえけりあけゆく時は 我もなきにき かへし。 あか月のねざめのみゝにきゝしかどとりよりほかに こゑもきこえず</p> | <p>おなじ女に、陸奥の国の守にて死にし藤原のさね きがよみておこせたりける。病いとおもくしておこ たりけるころなり。「いかで対面たまはらむ」とて、 からくして惜しみとめたる命もてあふことをさ へやまむとやす といへりければ、おほいきみ、返し もろともにいざとはいはで死出の山などかはひ とりこえむとはせし といひたりけり。さて来たりける夜もえあふまじき ことやありけむ、えあはざりければ、かへりにけり。 さて、朝に男のもとよりいひおこせたりける。 あかつきはなくゆふつけのわび声におとらぬ音 をぞなきてかへりし おほいきみ、返し あかつきのねざめの耳に聞きしかど鳥よりほか の声はせざりき</p> |

前段からの続きの章段で、冒頭の「おなじ女」とは閑院大君のことで、彼女が詠んだ、最後にある「あかつきの」の歌が伊勢集と共通している。⁽¹⁶⁾ この章段についても今井源衛氏が

大和作者の作為性も参加していると見た方がよいと思われるのである。大和の作者が当然すでに伊勢の御にまつわる談話であることを承知しながらそれを閑院の大君と藤原さねきの話に作りかえたのではあるまいか。⁽¹⁷⁾

と述べておられる。氏のお考えは動かないと思われるが、少しその内部について検討を加えてみたい。

この章段は「さて来たりける云々」を境にその内容から前半と後半に分けることができる。前半にある「もろともに」の歌は後撰集に閑院大君の歌としてみられるもので、その詞書も大和物語の内容にほぼ合致している。ただ、「からくして」の歌はここ以外にはみられず、どのような資料にもとづいているのか明らかでない。この章段の前半は閑院大君の、相手へのいたわりの気持ちで終わっており、大和物語の作者にしてみれば、ここで終わることに満足しなかったであろう。そこで、伊勢集にある歌を利用したものと考えられる。だが、そこには欠点もみられる。まず地文であるが、伊勢集には詞書がないから、ここは創作と思われるが、「さて」と「え…」という表現を短い箇所重複して用いている。もちろんこれは伊勢集から歌をとり入れた時点で、その歌意に合わせるためにこのような表現にしたのであろう。とはいっても洗練された本文とは思われない。⁽¹⁸⁾

次に和歌の方では小異あるものの、両者は返歌が共通していて贈歌が違っている。ただ違っている点、その意味上では、男すなわちさねき自身が泣いたということで共通しているのである。こんな点を考慮して伊勢集をみると、上句、下句で同じことを二度くり返している。その点、大和物語の方は整っている。思うにこれは贈歌の方を改作したのであろう。冒頭を返歌に合わせて贈答歌としての形を整え、さらに伊勢集にはみられない「わび声」、「かへり」という、男の行動に密着した表現にしている。

それにしても一方では洗練されており、また一方ではそうでないところがあるというのは何を意味しているのだろうか。大和物語の作者は、前述したように前半のみで終わることに満足せず、創作欲を發揮し後半を付加したわけであるが、そのつなぎの部分はあのような抽象的な表現にならざるを得なかった。裏返せばそれは大和物語作者の技量にも関連していると思われる。

なお大和物語二九・三〇段は閑院大君に関する話であり、大和物語の作者はそれに適する歌を伊勢集から持つてきたと思われる。そして閑院大君の章段に付加したのは、もちろん彼女に関心があったからであろうが、彼女の父親は右京大夫宗干であり、⁽²⁰⁾ その存在も無視できないように思われる。

五

伊勢集と共通している章段とえば、この外に一三八段がある。これについても両者を比較してみる。

| 伊勢集 | 大和物語 |
|--|--|
| <p>かくれぬのそこのしたくさみがくれてしられぬこひはくるしかりけり かへし。 みがくれてかくるばかりのしたくさをながらじともおもほゆるかな</p> | <p>こやくしくそといひける人、ある人をよばひておこせたりける。 かくれ沼の底の下草みがくれて知られぬ恋はくるしかりけり 返し、女 みがくれにかくるばかりの下草は長からじともおもほゆるかな このこやくしといひける人は、たけなむいとみじかりける。</p> |

大和物語一三八段が虚構であることはすでに指摘されている。例えば高橋正治氏は

二首の贈答歌だけで内容的に完結しているが「こやくしくそ」「たけなむいとみじかりける」と前後につけて、女の歌の「長からじともおもほゆるかな」と滑稽化している。⁽²¹⁾

と述べておられる。そしてこの章段は一四二段と考え合わせるべきものとされている。これは虚構ということの意味しているであろう。また山崎正伸氏もここは伊勢集による虚構であり、群書類従本によると贈歌の作者が仲平とあることから二人の恋をもとにこうなされていると考えられた。⁽²²⁾そして短い恋の心を知り、このような表現が出来るのは伊勢に近い人物ではないかとみておられ、その作者にまで言及されている。

このように細部の点では相違あるものの、一三八段は伊勢集をもとにして創作された章段であるという点では動かないと思われる。それにしてもなぜこのように虚構化された章段をこの位置に持ってきたのであろうか。この点について今井源衛氏は不詳とされているし、⁽²³⁾また柿本奨氏は

本段の中心は返歌にあり「知られぬ恋」を詠む懸歌はその前提を成すのであろう。返歌は「かりそめのえにし」を諷する。その主題も諷を詠歌法も前段に共通する。その意味で前段に続くのであろう。俳諧が新しい要素である。本段の年次を知る手がかりがない。⁽²⁴⁾

と述べておられる。大和物語はその多くが連想の如く配列されている。その点からみると柿本氏の言われるように、前段とは「かりそめのえにし」ということで共通している。ただ、ここで注目しておきたいことは元良親王関係の章段の中に、これが置かれているという事実である。大和物語一三七、一三九、一四〇段はいずれも元良親王に関する章段である。同一人物の章段なのであるから、一三八段のような何も別人のものを入れないで、すべて元良親王関係の章段で統一してもよかつたはずである。確かに柿本氏の如く前段との関連ということも考えられようが、同一人物の中にあるかには元良親王関係の章段全体を通して、その関係をも考慮すべきではないか。つまり作者にとつては別の意図があつたのではないか。天下の色好みと聞こえた元良親王⁽²⁵⁾に関することだからなおさらそう考えざるを得ない。

そこで、それを考えるために長くなると思うが、元良親王に關係の章段を引用してみよう。

一三七段

志賀の山越の道に、いはえといふ所に故兵部卿の宮、家をいとをかしうつくりたまうて、ときどきおはしましけり。いとしのびておはしまして志賀にまうづる女どもをも見たまふ時もありけり。おほかたもいとおもしろう家もいとをかしうなむありける。としこ志賀にもうづるついでにこの家に来てめぐりつつ見てあはれがりめでなどして書きつけたりける。

かりにのみ来る君待つとふりいでつつ鳴くしが山は秋ぞ悲しき
となむ書きつけていにける。

一三九段

先帝の御時に、承香殿の御息所の御曹司に、中納言の君といふ人さぶらひけり。それを故兵部卿の宮、わか男にて一の宮と聞えて色好みたまひけるころ承香殿はいとちかきほどになむありける。らうあり、をかしき人々ありと聞きたまうてもなどのたまひかはしけり。さりけるころほひ、この中納言の君に、しのびて寝たまひそめてけり。ときどきおはしましてのち、この宮をさをさとひたまはざりけり。さるころ、女のもとよりよみて奉りける。

人をとくあくた川てふ津の国のなにはたがはぬ君にぞありける

かくて物も食はで泣く泣く病になりて恋ひたてまつりける。かの承香殿の前の松に雪の降りかかりけるを折りてかくなむ聞こえたてまつりける。来ぬ人をまつ葉にふる白雪の消えこそかへれあはぬ思ひにとてなむ、「ゆめこの雪おとすな」と使にいひてなむ奉りける。

一四〇段

故兵部卿の宮、昇の大納言のむすめにすみたまうけるを例のおまし所にはあらで廂におまししきて、おほとのごもりなどしてかへりたまうて、いと久しうおはしまさざりけり。かくて、のたまへりける。「かの廂にしかれたりし物はさながらありや。とりたてやしたまひてし」とのたまへりければ、御返りごとに、

しきかへずありしながらに草枕ちりのみぞゐるはらふ人なみ

とありければ、御返しに

草枕ちりはらひにはからごろもたもとゆたかに裁つを待てかし

とあれば、また、

からごろも裁つを待つまのほどこそはわがしきたへのちりもつもらめ

となむありければ、おはしまして、また、「宇治へ狩しになむいく」とのたまひける御返しに、

み狩する栗駒山の鹿よりもひとり寝る身ぞわびしかりける

(注) 傍線は稿者。以下も同様。

元良親王の女性遍歴が記されているわけだが、元良親王の対象とする人物は異なるものの、よくみると心情や行動の面で変化がみられるようである。一三七段では、元良親王が登場しているものの、「いとしのびておはしまして、志賀にまうづる女どもを見たまふ時もありけり」とあるから人目を忍んでいわば物色している。これは恋の進行状況からみると初期のものといえることができそうである。としこも「かりにのみ」の歌を一方的に詠んでいるにすぎない。これが一三八段へ移ると、その冒頭に「ある人をよばひて」とあり、歌の贈答をしている。これは前段に比べ、心情的、行動的に一歩進んでいる。しかし、結局は実らぬ恋なのである。ところが、次の一三九段になると「この中納言の君に、しのびて寝たまひそめてけり」とあることから、二人は会うことができ、このような行動となったわけである。これはその過程において前段よりもさらに一歩進んでいる。こうして二人は契りを結ん

だものの、その後、元良親王はどうしたわけか女の許へ訪れなくなり、そのため女は病に伏し、切ない気持ちに歌に託し訴えている。しかし、男からは何の反応もなかった。そして最後の「四〇段も元良親王は女と交際しているわけであるが、ここには今までのように忍んで通うというような表現は一切なく、いきなり「故兵部卿の宮、昇の大納言のむすめにすみたまうける」とあり、恋の進行状況からみると前段よりも進んでいる。そしてここでも一三九段と同じように元良親王は女の許から帰ったきり、長い間、女のところへ行かなかつた。しかしここでは、その後、歌の贈答をして元良親王は再びやって来るといふふうに、このような部分は前段にみられない。この点で前段より、恋の進行状況という点で進んでいる。

こうみてくると、これらは単に人物を並べるといふのではなく、各章段の内容、つまり恋の進行という観点で配置されているとみるべきではないか。これらの章段の中で、もしも一三八段がなかったとしたらどうであろうか。一三七段から一三九段へいきなり行ってしまうと、恋の進行状況からみて、あまりにも極端すぎる。思うに大和物語の作者は元良親王関係の話を持つてくるにあたって、スムーズな恋の進行ということを考え、一三八段をあつた位置に持つてきたであろう。この外にも元良親王に(20)関した話はあるが、ここに三つの章段がかたまつてみられることは、元良親王関係の話でまとめようとするのはもちろんだが、それよりもここには、恋の進行ということの主眼にして置かれたのではないか。そのためには別な人物を持つてきても差しつかえなかつたのであろう。

それにしても問題になるのは元良親王関係の章段の中になぜ伊勢集の歌を持つてきたのか、しかも虚構までしたのはなぜかということである。少なくともここで言えることは、どちらにも大和物語の作者は関心を寄せていたことである。元良親王は天下の色好みとして聞こえ、また著名な歌人でもあつた。そこに著名な女流歌人、伊勢の歌を用いて物語の展開を計つたのであろう。

だが、この一例のみでこのような結論は慎むべきかもしれない。しかし、大和物語には、これと同じか、似通つたところが意外と多いのである。例えば四九・五〇・五一段をみてみよう。

四九段

おなじ帝、齋院のみこの御もとに菊につけて

ゆきて見ぬ人のためにと思はずはたれか折らましわが宿の菊

齋院の御返し

わが宿に色をりとむる君なくはよそにもきくの花を見ましや

五〇段

かいせん、山にのぼりて

雲ならで木高き峰にゐるものは憂き世をそむくわが身なりけり

五一一段

齋院より内に

おなじえをわきてしもおく秋なれば光もつらくおもほゆるかな

御返し

花の色見ても知りなむ初霜の心わきてはおかじとぞ思ふ

宇多天皇と齋院のことであるから、五一一段を四九段に続けてしまつてもよかつたはずである。では、なぜその間にかいせんの話を持つてきたのであるうか。四九段では齋院が菊の花を贈つてくれた父君への感謝の気持ち、五一一段では齋院が父君への愛情のものたりなさをそれぞれ詠んでいる。いわばこれら二章段は喜びと悲しみとで対照的である。しかも齋院は俗世間を離れ別世界に仕える身であり、この二章段には世のあわれの感情も漂っている。一方、五〇段もその内容は世のあわれである。これは四九・五一一段にも通じる心情である。このように四九段と五一一段とは対照的であまりにも極端なことから、その中継ぎの働きをしているのが五〇段と思われる。それにかいせん⁽²⁷⁾という世捨人を置いたのは四九・五〇段に齋院が登場していることも無関係ではあるまい。いずれも同じ境遇の者になるからである。この外にも八・九・一〇段をはじめ、一五・二六・二七段等においても、ほぼこれらと似たような現象をみることができ⁽²⁸⁾。こうみてくると、大和物語の作者は章段の移行に関して、特に配慮を払つていたと考えられる⁽²⁹⁾。これはまた、一三八段の傍証となるであろう。

一三八段にもどつて、大和物語には前後に伊勢集にみられない地文があるわけだが、これがあることによつて、解釈の上でどのような変化がみられようか。段末で作者は、こやくしという人の丈は短かつたと説明を加えている。そのために「みがくれて」の歌にある「ながからじ」には丈が長いという意味も含まれているというわけである。伊勢集には、このような本文が見られないわけだから、丈が長いという意味は含まれていなかったはずである。単に下草が長くないとそれに掛けて長続きしないという意味にしかすぎなかつた。この方が結婚ということに対して真剣に考えている、この男のいちずさが出ているように思う。大和物語には、前記の如く高橋正治氏が指摘されているように滑稽さが出ている。もちろんこうしたのは大

和物語作者の意図によるものであろう。そしてこの段末の本文に対して、冒頭で「こやくし」という人物を設定したのは、丈が短いということを考慮しての表現ではなかったのかと考えるのである。

六

大和物語の作者は、このように部分的とは言え、様々な工夫を試みてその創作性を発揮していた。

ところで、次の一四二段は別人にしているとは言え、興味のある方法をとっている。とりあえず一四二段を記してみる。

故御息所の御姉おほいこにあたりたまひけるなむいとらうらうじく、歌よみたまふことも、おとうとたち御息所よりもまさりてなむいますかりける。わかき時に女親はうせたまひにけり。まま母の手にいますかりければ、心にものかなはぬ時もありけり。さてよみたまひける。

ありはてぬ命待つまのほどばかり憂きことしげく嘆かずもがな

となむよみたまひける。梅の花を折りてまた、

かかる香の秋もかはらずにほひせば春恋してふながめせましや

とよみたまへりける。いとよしづきてをかしくいますかりければ、よばふ人もいとおほかりけれど、返りごともせざりけり。「女といふもの、つひにかくて果てたまふべきにもあらず。ときどきは返りごとしたまへ」と、親もまま母もいひければ、せめられてかくなむ。

思へどもかひなかるべみしのぶればつれなきともや人の見るらむ

とばかりいひやりてものもいはざりけり。かくなむいひける心ばへは、親など、「男あはせむ」といひけれど、「一生に男せでやみなむ」といふことを、よとともいひけるもしく、男もせで二十九にてなむうせたまひにける。

この章段が虚構であることはすでに指摘されており、私もふれたことがある。⁽³⁰⁾ここに登場する「故御息所」であるが、これは伊勢を指すことに疑いがないところである。⁽³²⁾それは後述することからも理解できるが、ここでひとつ付け加えておこう。

大和物語において、御息所として登場しているのは九四・九五・一四七の三章段である。このうち九四・九五段は藤原能子のことであり一四七段は前述したように伊勢のことである。しかも歌人としては、伊勢のほうが著名である。ここは漠然と「御息所」として登場しているわけであるが、この本文を辿ってみるに、その姉は「歌よみたまふことも、おとうとたち御息所よりもまさりてなむいますかりける」とあり、かなりの歌の詠み手であった。

これは伊勢を意識しての本文と思われる。ただ、ここは彼女の姉であるから、伊勢は御息所という名称を利用してにすぎない。しかし彼女に姉がいたかどうかはわからない。⁽³³⁾ 大和物語の本文によると、その姉なる人は伊勢よりも上手な歌の詠み手であったようだ。もしそうだとすると、その歌は勅撰集などにとられていてもよさそうである。しかし、私が調査した範囲ではいずれの文献にも見い出せない。このようなことから考えて、はたしてその姉なる人物が存在したかどうか疑問である。たとえばそれが架空の人物であったとしても、伊勢の姉ということから「歌よみたまふことも、おとらとたち御息所よりもまさりてなむいますかりける」という設定に読者は納得したことであろう。しかも御息所の御姉が詠んでいる「ありはてぬ」の歌は古今集とも共通し、それによると平仲の歌なのである。⁽³⁴⁾ 一四二段は伊勢関係の章段の中で他の章段と違いその姉のことを描いている。そのため、伊勢自身の歌をここに用いることに作者ははばかりを感じていたのではないか。とはいうものの彼女はかなりの歌の詠み手なのであるから、著名な歌人の歌を利用せざるを得なかったであろう。

ただ、「ありはてぬ」の歌は伊勢集にもみられる。しかも注目すべきことはこの歌の前にあるのが前に述べた一一九段の「あかつきの」の歌なのである。したがって伊勢集をもとにして大和物語の章段が創作されたとも考えられよう。事実、今井源衛氏は伊勢集に並んでいたからこそ、これらを利用したのではないかと考えておられる。⁽³⁵⁾ それにしても、この歌が平仲の作であるということがどうも引つかかる。それは当然、伊勢集の成立とも絡んでくるわけで、前述したようにこの家集の成立は複雑で何度かの増補があり、その過程で他人の歌をも掲載したようである。⁽³⁶⁾ この平仲の歌に限つてみると、大和物語と伊勢集が関係あったとして、後世の伊勢集と接触したことになる。それはすでに大和物語が成立した後ということになる。このようなことが可能かどうか。また、前述したように彼女の家集には自撰のものも存在したようである。これが現存のそれとどのような関係にあるかは明らかではない。たとえばそれと大和物語が関係あったとしても、平仲のこの歌が載っていたかどうか疑問である。というのは伊勢の家集であるから、彼女との贈答歌はともかくとして、単独で他人の歌を載せる可能性は少ないと考えられるからである。以上のことからこの場合、大和物語は古今集をもとにしてしていると推測しておきたい。これ以外の二首の歌は、現在のところいずれの作品にも見い出せない。私はこの二首を創作されたものと考えている。⁽³⁷⁾

このようにこの章段において、伊勢は御息所という名称を使われているにすぎないが、前述したように彼女は大和物語の初段に宇多天皇とともに登場し、大和物語作者にとって関心を持った人物であった。そしてここでその姉についての話にしたのは、大和物語後半⁽³⁸⁾というところと相俟って、伊勢関係の章段の中でもむしろ思い切った特殊な方法を用いたというべきであろう。すると、作者の意図はどんな点にあったのであろうか。

かつて私は大和物語の虚構ということについて、一四一・一四二・一五四の三章段を例にして論じたことがあった。⁽³⁹⁾ そこでは、一四一・一四二段が初段、

二段と密接な関係のあることを指摘した。即ち一四一段の「よしいゑ」なる人物は二段の「よしとし」をもじったものであり、また一四二段の故御息所の姉なる人物は初段に登場する伊勢に関連させたのではないかと考えたのである。とりもなおさずこのことは、大和物語の作者が少なくとも別な意識でもってなされた結果ではないか。それは虚構ということになる。確かに一九段のようにこれ以前にもその根拠はある。しかし、それ以上にその意識は強かった。そのためにこのような架空の人物を設定したのである。そして一四一段と一四二段とは成立の上で密接な関係があると思われる。即ち一四一段ではよしいゑの外に筑紫なる人が登場し、彼女一人が歌を詠んでいる。読者は「筑紫云々」とあるから槍垣御を思い浮かべる。⁽⁴⁰⁾ 彼女もまた著名な歌人であり、これは一四二段の伊勢の姉に対応させたものではあるまいか。いずれも「筑紫なりける人」、「故御息所の姉」とし、その背後に著名な女流歌人を暗示させている。

ともかく以上のような意図でもって創作されたものと推測されるから、改めて一四一段以降を大和物語の後半とみるのが妥当であろう。そして一四二段の成立を考えてみると、初段の存在があまりにも大きかったのである。

七

伊勢関係の章段を考える場合、伊勢集の存在を無視できない。大和物語三〇段も伊勢集に共通しているが、この章段もその関係ということになると問題を含んでいる。両者を比較してみる。

| 伊勢集 | 大和物語 |
|------------------------------------|---|
| おきつかぜふけるのうらにたつなみのなごりにさへ や我はしづまむ | 故右京の大夫宗子の君、なりいつべきほどに、わが身のえなりいでぬことと、思ひたまひけるころほひ、亭子の帝に、紀伊国より石つきたる海松をなむ奉りけるを題にて、人々歌よみけるに、右京の大夫、沖つ風ふけるの浦に立つ浪のなごりにさへやわれはしづまむ |

伊勢集には詞書がなく、どんな事情で詠まれた歌かはつきりしない。その点、大和物語ではそれがよくわかる。

さて、両者の関係であるが、伊勢集から大和物語という考えと、その逆の考えがある。⁽⁴¹⁾さらには両者とも直接関係なく、別の資料からという考えも可能であろう。いずれが妥当であろうか。伊勢集との関係において、これまで考察してきた初段、一一九段は伊勢集から大和物語への過程が考えられた。したがって、ここもそう考えるのが自然であろう。だが、そう考えると矛盾する点が出てくる。伊勢集のこの周辺の歌を記してみると、

- 381 おもひいづやみのゝをやまのひとつまつちぎりしことはまたもわすれず
 382 おほよどのまつはつらくもあらなくにうらみでのみもかへるなみかな
 383 風吹げばいはうつなみのおのれのみくだけてもものをおもふころかな
 384 おきつかぜふけるのうらにたつなみのなごりにさへや我はしづまむ
 385 あまぶねのかよひこしよりしほがまのほのほいたますおもひつきに

(注) 番号は『校註伊勢集』の通し番号。波線、二重傍線は稿者が施した。

のようになっている。この歌の周辺は種々の線で示したように語句の上で関連しており、そのような意図をもって配列したのであろう。しかも注目すべきことは、382の歌は伊勢物語七二段に、383の歌は源重之集にそれぞれみられるという事実である。これは他の作品から持ってきたことを示している。事実、現存の伊勢集には他人の歌が混入しているようである。この点について片桐洋一氏は次のように述べておられる。

この部分(稿者云、定家本の第四三二番から第四八八番までを指す。先程記した「おほよどの」の歌を除き、定家本ではこの中に含まれている)は明らかに伊勢の作でない歌を数多く含んでいる。特に四三二から四六七までは諸国の歌枕をよみこんだ古歌を集めたものである。また最末尾の「卯の花」にはほふさかりの月清みいねず聞けとや鳴くほととぎす」が『家持集』に見られるのをはじめ、古歌が多く含まれている。古歌を中心とした秀歌撰の類が混入したとみられるし、伊勢が編纂した古歌集成が『伊勢集』と一体になって伝わったと見ることが出来る。一五九番の「難波瀉みじかき声のふしの間もあはでこの世を過ぐしてよとか」がこの部分の四七六番に重出していることを思うと、みずからの歌をも含めた秀歌撰であったと考える方がよさそうである。⁽⁴²⁾

納得できる御見解である。

また、歌人として著名な宗于の話を、他人の歌を借りてまで創作するのかということである。大和物語において彼は身の不遇者として描かれている。この歌もまさにそれにマッチしており、大和物語のような地文があつてこそ内容が理解できる。こうみてくると、第一の考えは否定されるべきであり、結局のところ、第二、三の考えということになる。しかしこのいずれかは判断できない。

八

伊勢関係の章段をひとつひとつ検証してきたのであるが、このうち三〇段は大和物語か、もしくは他の資料から伊勢集に組み入れられたことを確認した。これ以外の章段は、大和物語において創作性が加わっていると思われる。言い替えば、そのいずれにおいても何らかの点で改めているということである。即ち初段では伊勢集の一首を除去し、それにもない部分的に表現を改めているし、一四七段にあつては三部構成をとっており、異色な章段であつた。もちろんこれらは当時の人々の間で語られていたのであるが、それをもとにしての大和物語作者の脚色ということ認めてよいのではないか。さらにこのことはこれらを除いた三章段において顕著に窺うことができた。これら三章段はいずれも伊勢としてではなく別人にしている。一一九段にあつては最後の方に、いわば話を増長するために伊勢集から持ってきているし、一三八段はそれをもとに全体を全く別の話にしていた。しかもこの章段は前後の章段の内容を考慮して置かれたものと思われる。さらに一四二段になると、伊勢の姉の話にし、彼女はその名称を使われているにすぎないが、このようになされているのは歌人としての伊勢の存在が大きかつたことを示しているよう。

ともかくこうみると三〇段を除いて伊勢関係の章段は、単に歌語りと考えるよりも一歩進んで、創作意識という観点でとらえた方が妥当ではあるまいか。ただ全体からみると伊勢関係の章段は少ないかもしれないが、そのすべてが脚色されていることからみて、大和物語の創作性を考える場合、無視できまい。

それにしても三〇段を除き、他の章段の多くが、伊勢集との関係が考えられようが、その場合、現存の伊勢集との関係を考えたらよいのか、それとも一四七段を含め現存しない、いわゆる自撰伊勢集との関係を考えたらよいのかの問題も残る。さらに、伊勢関係の章段は前述したように全体からみるといかにも少ない。出来たらこれらと同じか、似通つた章段をひとつでも多く見出すことにより、大和物語全体の構想が徐々に判明してくるかもしれない。これらについては今後の課題にして考えていきたいと思つている。

注(1) 賀茂真淵『大和物語直解』、高橋正治氏「大和物語の位相」(『国語と国文学』33巻9号 昭和31年9月 後に『大和物語 壙選書』(壙書房 昭和37年10月)に再録)、今井源衛氏「大和物語評釈・三六 ありはてぬ命まつ間の」(『国文学』10巻7号 昭和40年6月 後に『大和物語評釈 下巻』(笠間書院 平成12年2月)に再録)、雨海博洋氏『大和物語』に於ける「歌語り」の文学的発想について」(『二松学舎大学論集(昭和四十五年度)』昭和46

- 年3月 後に『歌語りと歌物語』（桜楓社 昭和51年9月）に再録、工藤重矩氏「大和物語の史実と虚構—第二・三十五段をめぐって—」（福岡教育大学国語国文学会誌）18号 昭和50年11月）など。
- (2) 「大和物語における在原業平関係章段について」（『解釈』24巻4号 昭和53年4月）、「大和物語における虚構の方法—一四一・一四二・一五四段を例にして—」（『中古文学』30号 昭和57年10月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和57年』（朋文出版 昭和58年11月）に再録）、「古今』『伊勢』『大和』—ひとつの共通話をめぐって—」（『平安文学研究』73輯 昭和60年6月 後に『国文学年次別論文集 中古1 昭和60年』（朋文出版 昭和61年10月）に再録）。これらの論考は『大和物語の研究』（翰林書房 平成6年2月）に再録。本書第二章第一節・第二節・第三節。
- (3) 『大和物語評釈・一 亭子の院』（『国文学』6巻11号 昭和36年8月 後に『大和物語評釈 上巻』（笠間書院 平成11年3月）に再録）、「大和物語評釈・三九 二十七 閑院の大君」（『国文学』9巻9号 昭和39年7月 後に『大和物語評釈 下巻』（笠間書院 平成12年2月）に再録）、「大和物語評釈・三九 処女塚（上）」（『国文学』10巻11号 昭和40年9月 後に『大和物語評釈 下巻』（笠間書院 平成12年2月）に再録）、「大和物語評釈・四十 処女塚（下）」（『国文学』10巻12号 昭和40年10月 後に『大和物語評釈 下巻』（笠間書院 平成12年2月）に再録）、「大和物語評釈・六十四 右京の大夫宗子」（『国文学』13巻6号 昭和43年5月 後に『大和物語評釈 上巻』（笠間書院 平成12年2月）に再録）。
- (4) 注(1)に同じ。
- (5) 『大和物語の注釈と研究』（武蔵野書院 昭和56年2月）
- (6) 注(1)に同じ。
- (7) 『大和物語』作者試論（『和歌文学研究』32号 昭和50年5月 後に『大和物語の人々』（笠間書院 昭和54年3月）に再録）
- (8) 先程記した六章段の外に、18段（森本茂氏「大和物語『二条御息所』考」（『解釈』30巻3号 昭和59年3月） 後に『大和物語の考証的研究』（和泉書院 平成2年10月）に再録）、147段の連作五首（吉田達氏「『大和物語』一四七段の文体と方法（中）—「生田川処女伝説」題詠一首を考える—」（『平安文学研究』65輯 昭和56年6月） 後に『伊勢物語・大和物語 その心とかたち』（九州大学出版会 昭和63年7月）に再録）を伊勢の作と考えておられるが、これらについては今後の課題としておき、ここでは除いておく。
- (9) 『校註伊勢集』二〇、二一番歌。
- (10) 島田良二氏『平安私家集の研究』（桜楓社 昭和43年4月）に詳しい。なお伊勢集の成立時期について、氏は「現存伊勢集の共通祖本は後撰・古今の影響から、後撰と拾遺集の間に成立したと推定するのであるがもちろん、伊勢日記も関根慶子氏の説と同じく、歌物語の隆成期後撰成立後と推定するも

のである。」と述べておられる。

- (11) 拾遺集や村上天皇御集によると、彼女の自撰家集が存在したらしい。
- (12) 注(3)の「大和物語評釈・一 亭子の院」に同じ。
- (13) 西本願寺本以外の伝本にもみられない。
- (14) 大和物語の伝本もすべて「ころ」となっている。
- (15) 山本登朗氏も「物語の発生」(伊井春樹氏編『物語文学の系譜』世界思想社 昭和61年9月)で同じような見解を述べておられる。
- (16) ただし、伊勢集の桂宮本、歌仙家集、群書類従本は第五句が「せさりき」となっている。
- (17) 注(3)の「大和物語評釈・二七 閑院の大君」に同じ。
- (18) 「人のもとよりひさしう心地わつらひてほとくしくなんありつるといひて侍ければ」とある(『後撰和歌集総索引』所収の天福本に拠る)。
- (19) このような現象は他の章段にもみられる。そのひとつの例として、拙稿「大和物語の創作方法―いわゆる「ならの帝」の章段をめぐって―」(『平安文学研究』76輯 昭和61年12月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和61年』(朋文出版 昭和62年11月)、『大和物語の研究』にそれぞれ再録)で述べたことがある。本書第二章第七節。
- (20) 森本茂氏は、「大和物語の「閑院の大君」考―源宗子女説批判―」(『国語と国文学』63巻2号 昭和61年2月 後に『大和物語の考証的研究』に再録)という論考を発表され、閑院大君について、従来の宗于説を批判された。そして、彼女は清和天皇の皇子貞元親王(閑院)の長女ではないかと考えられた。注目すべき見解と思われるが、今後の検討課題としておきたい。
- (21) 『日本古典文学全集大和物語』(小学館 昭和47年11月) 頭注。
- (22) 注(7)に同じ。
- (23) 『大和物語評釈・三四 松の葉にふる白雪の』(『国文学』10巻5号 昭和40年4月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録)
- (24) 注(5)に同じ。
- (25) 元良親王御集の冒頭に「陽成院の一宮もとよしのみこいみしきいろこのみにおはしましければ云々」とある(「元良親王御集―解題高橋正治氏―」『私家集大成 第1巻 中古I』(明治書院 昭和48年11月)に拠る)。

- (27) かいせんについては、在原元方と同一人物という説（久保木哲夫氏「在原元方について」『和歌史研究会会報』33号 昭和44年3月）後に『平安時代私家集の研究』（笠間書院 昭和60年12月）に再録）と在原棟梁の子供という説（今井源衛氏「戒仙について—業平から貫之へ—」（九州大学「文学研究」66輯 昭和44年9月）後に『王朝文学の研究』（角川書店 昭和45年10月 再版 パルトス社 平成7年4月）、『今井源衛著作集 第7巻 在原業平と伊勢物語』（笠間書院 平成16年6月）にそれぞれ再録）とがある。
- (28) 8・9・10段であるが、8段と10段は監の命婦のことであるから、10段を8段に続けてしまってもよかつたはずである。なのに、どうして9段が入っているのだろうか。8段は監の命婦が中務の宮へ愛想が尽きたことを、いわば別れのことを記されている。10段はこの世の無常のことが記されている。これらは関連しないこともないが、9段は桃園兵部卿宮の死についての話である。つまり9段があることによつて章段の関連がよりスムーズに移行している。別れ↓無常よりも別れ↓死↓無常とした方が心情的にみてスムーズであるということである。次に25・26・27段であるが25段に明覚という法師が登場しているのだから、27段のかいせんの話もそれに続けてもよさそうなのに、なぜ26段に桂皇子の話が入っているのだろうか。25段は明覚という徳を積んだ僧の死から無常迅速の思いを述べた。27段は、これとは対照的に家族に迷惑をかけているかいせんの話。この両章段の中継ぎの働きをしているのが26段ではないか。つまり26段にある「あふまじき人」とは誰を連想させようか。ここでは桂のみこが「いとみそかにあふまじき」人であるから、この前後の章段から考えて、出家した人、僧侶が考えられる。出家した人、僧侶の側からみても、その戒律からしても、一般の女性はもちろんのこと、皇女となるとなおさらのことである。しかも桂のみこが詠んでいる「それをだに」の歌は古今集に「読人しらず」としてみられるもので、これは高橋正治氏が指摘されている（『日本古典文学全集大和物語』頭注）ようにもとは「読人しらず」の歌でそれをもとにして26段を創作したのであろう。ともかくこれらことからしても意図的になされていると考えられる。
- (29) 例えば在中将関係の章段についても言える。本書第二章第九節。
- (30) 注(1)にある高橋、雨海氏の論考と、今井氏の「大和物語評釈・三六」に同じ。
- (31) 注(2)の「大和物語における虚構の方法」に同じ。本書第二章第二節。
- (32) 142段の冒頭「故御息所の御姉」の次に御巫本、鈴鹿本、勝命本、支子文庫本は「伊勢のかみのむすめ」（ただし、御巫本と鈴鹿本は「伊勢」が平仮名になっている）とある。
- (33) 伊勢集152番歌の詞書に「はらからのなくなりたるを恋て」とあるが、これ以外は一切不明。
- (34) 卷第十八雑歌下に「つかさとけて侍ける時よめる」（『古今集校本』（西下経一氏・滝沢貞夫氏編 笠間書院 昭和52年9月）に拠る）と詞書がある。

- (35) 注(3)の「大和物語評釈・二七」に同じ。
- (36) 注(10)の外、片桐洋一氏『恋に生き伊勢』(新典社 昭和60年8月)、『日本古典文学大辞典 第一巻』(岩波書店 昭和60年10月)の「伊勢」の項(片桐氏執筆)など。
- (37) 注(2)の「大和物語における虚構の方法」に同じ。本書第二章第二節。
- (38) 創作意識が顕著である。詳しくは拙稿「大和物語の構成について―後半の章段を考察の対象として―」(語文)39輯 昭和49年3月 後に『大和物語の研究』に再録)、『大和物語の研究』に再録)、『大和物語』小考―前半と後半の分け方―(「解釈」32巻9号 昭和61年9月 後に『大和物語の研究』に再録)を参照のこと。本書第三章第二節・第四節。
- (39) 注(2)の「大和物語における虚構の方法」に同じ。本書第二章第二節。
- (40) 後人の編になると言われている檜垣姫集には、この章段の歌が取り入れられている。このことから「筑紫なる人」を檜垣姫とみていたことがわかる。
- (41) 小林美智子氏『大和物語』における『伊勢集』との重複歌について(「大和物語探求」4号 昭和48年10月)
- (42) 注(5)に同じ。
- (43) 『恋に生き伊勢』(新典社 昭和60年8月)

第九節 大和物語の創作方法

—在中将関係の章段を中心にして—

—

一人の作者が作品を創作していく上で種々の面に努力を払うことは言うまでもない。ましてそれが実録のみでなく、虚構でもって作品を創作する場合はなおさらのことであろう。

周知のように益田勝実氏が「歌語り」という概念を提唱されて久しい。⁽¹⁾ 大和物語はまさにその集成と言われている。確かにそのような要素もあると思われるが、その反面、例えば後半の章段は説話的な色彩が濃く、中には単に歌語りを集めたとみるよりも大和物語の作者の手によって、虚構という意識で創作されたと思われる章段がみられるようである。そのひとつの例として在中将に関する章段があげられるように思う。彼に關した話は一六〇段から一六六段までの七章段に及び、大和物語にあつて同一人物を扱い、かつ連続している章段の中では一番多い。それだけに彼に寄せた作者の関心の高さを推察できる。

これらの章段については、先学により実にさまざまな角度から考察されており、私達は多くの恩恵を受けている。⁽³⁾ 私も驥尾に付してその一部について考えたことがあつた。⁽⁴⁾ しかし、ここでは力不足もあつて十分に追究することができなかった。また拙稿発表後、有益な御論⁽⁵⁾に接し啓発される点が多くなかつた。そこで改めて別な視点から考えてみようとするのが本稿の目的である。

在中将関係の章段の生成を考える時、なんとと言っても伊勢物語は切っても切れない資料と言える。事実、一六〇段から一六六段までの大半が伊勢物語と共通している。だが、これらの中には、現存の伊勢物語にはみられない章段がある。一六〇段がそれである。一六〇段がそのような内容である。

おなじ内侍に、在中将すみける時、中将のもとによりてやりける。

秋萩を色どる風の吹きぬれば人のころもうたがはれけり

とありければ

秋の野を色どる風は吹きぬともころはかれじ草葉ならねば

となむいへりける。かくてすまずなりてのち、中将のもとより、衣をなむ、しにおこせたりける。それに、「あらはひなどする人なくて、いとわびしくなむある。なほかならずしてたまへ」となむありければ、内侍、「御心もてあることにこそあなれ。

大幣になりぬる人の悲しきはよるせともなくしかぞなくなる」

となむいひやりける。中将、

ながるともなにか見えむ手にとりてひきけむ人ぞ幣と知るらむ

となむいひける。

(注) 本文は『日本古典文学全集』に拠った。以下も同様。なお以下、引用する「古今集」、「伊勢物語」も同書に拠る。

この章段は「かくてすまずなりて云々」を境に前半と後半に分けることができる。前半の二首は後撰集と共通しているが、後半の二首は現在のところ、これ以外のいずれの文献にも見い出せない。そのためこの章段の典拠について、山田清市氏は佚書の原撰業平集なるものを想定されている。⁽⁶⁾ また、片桐洋一氏も、⁽⁷⁾

伊勢の資料にも大和の資料にもなつた別種の業平説話が存在し、伊勢はそれを資料に物語を膨張させ、また大和も同じくその資料をもとに一六〇段から一六六段までの業平説話をまとめたのではないか。(中略) そうでなくても、伊勢と大和に直接関係ありとすれば、大和物語一六〇段のごとく伊勢物語に全く存在しない章段や一六五段の「つれづれといとど心の」のごとく伊勢物語に存在しない和歌が含まれている事実が説明出来ぬ

ばかりか、数ある伊勢物語の章段の中から、何故この七章段だけをとりだして大和物語に付加したのか説明が出来なくなるのである。⁽⁸⁾
と述べられ、その資料として業平説話なるものを想定されている。このお二人の考えはこのみでなく、在中将関係章段すべてに関わっている。佐藤高明氏もほぼこの考えに同じようである。⁽⁹⁾

一方、雨海博洋氏は

「染殿内侍」とするのは大和物語独自となる。これは大和編者が恣意的に創作したと見るよりは、伊勢物語またはその資料となつた業平の歌説話などが、人々の歌語りで語られてゆくうちに、自然と歌語りから派生したものと見るべきであろう。⁽¹⁰⁾
と述べられ、この章段全体に渡つて歌語り性ということを強調されている。森本茂氏も同じ考えである。⁽¹¹⁾

これに対して、菊地靖彦氏は、後撰集で「読人しらず」の歌が大和物語では染殿内侍の歌になっていることから大和物語の虚構であるとされ、前半の二首が後撰集と共通していることについて、

在中将の登場のしかたで、もう一つ注目したいのは、それが『後撰集』歌とのからみで、『伊勢物語』からではないことである。即ち『大和物語』の作者にあつては、在中将は、『伊勢物語』というすでに出来上がった作品の主人公としてではなく、また作品世界に形象化されていないところから呼び出されるのである。⁽¹²⁾
と述べられている。

以上みてきたように、種々の面から考察されてきたわけである。確かに原撰業平集、業平説話はその成立を考える上で合理的な資料と言える。ただ、ここで問題になるのはこれらの資料が現存しないという事実である。また、歌語りということも都合な考えと思われる。しかも、これは大和物語即歌語りということを前提にしている。それにしてもその実体がいまひとつはつきりせず、具体性に欠けることも否めない。それと、もしそうであるならば、歌語りそのものなのか、それともそれをもとに創作されたのかということも問題になって来よう。かつて考察したように、在中将関係の章段の一部には虚構の跡がみられた。⁽¹³⁾ ただその時は力不足も手伝い在中将関係の全章段にまで言及できなかったが、在中将に関する話が七章段に及び、かつそれらが連続していることを考慮すると、大和物語作者のひとつの方針と言おうか、その意図なるものが個々の章段に及んでいることは十分予想できることである。すると後撰集で「読人しらず」の歌が大和物語で染殿内侍の作になっていることは、こちら辺にもその片鱗が窺われるのではないか。ともかく後撰集と共通しているから、少なくともそれとの関係ということを考えてみる必要がある。⁽¹⁴⁾ こうみてくると、一六〇段に関しては菊地氏の考えが有力ということになる。ただ、これ以外の一六二、一六三、一六四段は伊勢物語と共通しているし、また一六五、一六六段もその一部が伊勢物

語と共通している。このようになっていくことと、氏の言われるように伊勢物語からではないということはどう関連つけて考えたらいのか。それと、なぜ後撰集から登場させたのか、その理由なるものについてはふれていない。

後撰集のこの歌をここに利用したのはどのような理由によるのであろうか。大和物語の作者は一六一段の前半を創作するにあたり、伊勢物語以外に資料を求めたわけだが、その場面に少なくとも業平の歌をもとにしようと考えた。その資料としてまず考えられるのは古今集である。しかし、彼は後撰集に資料を求めた。その理由は定かでないが、臆測するに、古今集にある業平の歌はすべて伊勢物語と共通しているためであろうか。ただ、「秋萩を」の歌が業平の作ではないという考えがある。雨海博洋氏は

『後撰集』に載せられた贈答歌は染殿内侍でも、在原業平朝臣のものでもなかったのであるが、それが何時の間にか業平のロマンスの中に取り入れられた、或いは自然とロマンスと歌とが歌語りの中で結びついたかしたわけである。⁽¹⁵⁾

と述べられている。でもこの章段の生成について考える時、作者不詳の歌を利用するよりも、はっきり業平とわかっていたものを利用した方が資料として使いやすいかと思われる。まして、伊勢物語以外のものを資料としていくのであり、しかも在中将関係の章段は、すべて「在中将」と銘打っているのだから、彼の詠作を使用するのは当然の結果と思われる。したがって、一六〇段の生成については大和物語と後撰集との結びつきを認めるべきである。

さて、後撰集にある業平の歌は先程の一首を含め、十一首になる。今、一六〇段にあるのを除き十首について、返し歌も含め記してみる。

題しらず

業平朝臣

252 ゆく螢雲のうへまでいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ

人のもとにしば／＼まかりけれど、あひがたく侍ければ、

物にかきつけ侍ける

在原業平朝臣

629 くれぬとてねてゆくべくもあらなくにたどる／＼もかへるまされり

題しらず

在原業平朝臣

892 伊勢の海に遊あまともなりにしか浪かきわけて見るめかづかむ

返し

伊勢

893 おぼろげのあまやはかづくいせの海の浪高き浦におふる見るめは

ひさしくいひわたり侍けるに、つれなくのみ侍ければ

業平朝臣

968 たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなん

返し

伊勢

969 夏虫のしるゝ迷おもひをばこりぬかなしとたれか見ざらん

世中を思うじて侍けるころ

業平朝臣

1084 すみわびぬ今は限と山ざとにつま木こるべきやどもとめてん

おもふ所ありて前太政大臣によせて侍ける 在原業平朝臣

1126 たのまれぬうき世中を歎つゝ日かげにおふる身を如何せん

大井なる所にて人々さけたうべけるついでに なりひらの朝臣

1232 大井河うかべる舟のかぶり火にをぐらの山も名のみなりけり

身のうれへ侍ける時、つづくにゝまかりてすみはじめ侍けるに

業平朝臣

1245 なにはつをけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる舟

あづまへまかりけるに、すぎぬる方こひしくおぼえけるほどに、

河をわたりけるに、なみのたちけるを見て 業平朝臣

1353 いとゞしくすぎゆく方のこひしきにうら山しくも帰浪哉

(注) 本文は『後撰和歌集総索引』(大阪女子大学国文学研究室編 大阪女子大学 昭和40年12月)所収の天福本に拠り、句読点、濁点は稿者が施した。

このうち252、1084、1245、1353の四首は伊勢物語にみられるから、大和物語の作者は先に述べた理由からこれら以外の歌を利用しようと考えた。その場合、単独の歌を利用するのではなく、贈答歌を用いたわけである。もちろんこうしたのは話の展開を考慮してのことと思われるが、それにしても単独の歌を利用するとなると、返歌かもしくは贈答歌をどこからか持つてくるか、あるいは創作しなければならぬ。しかも、創作するとなると、大和物語の作者はその技量においてそれほどたけていたとも思われない。その点、既成の贈答歌を利用すれば、比較的簡単に事が運ぶ。すると、この条件を満た

している業平の歌は224（稿者注「秋の野を」の歌を指す）、892、968の三首ということになる。これら三首のうちで、どの歌がこの場面に適しているか。この章段の内容を検討してみると、ここは恋愛の進行状況によって話が展開している。この前半に歌を持つてくる場合、892、986は、後撰集では恋五にあることからわかるように、冷え切った二人の仲を詠んでおり、おおよそこの場面には適していない。これらに対して、224は女が業平に疑いを持ち始めた頃を詠んでいて、後半への話の展開を考慮すると、まさに適している。

それにしても、在中将関係の章段を描くにあたって伊勢物語は第一の資料と思われるが、この場面になぜこれを資料としなかったのであろうか。作者は在中将関係の章段において彼の女性遍歴を描いていたと思われる。後述する一六二、一六三段は二条后を意識した章段であり、二人にまつわる話は伊勢物語に多く見ることができ、かなり有名であったようだ。大和物語の作者も二人の華やかな話を伝え聞いていたのではないか。そうして二人の話にふさわしい章段を伊勢物語から抄出し、在中将関係の章段を構築していったのであろう。ところが、在中将と染殿内侍との関係となると、二条后との場合より華やかさに欠ける。事実、伊勢物語において彼女の名が出てくるのは、六五段のみで、それも彼女は脇役的な存在として登場しているにすぎない。⁽¹⁶⁾ たとえ、この六五段をもとにひとつの章段を創作しようとしてもこの章段自体、伊勢物語の中でかなり長文な章段であり、かつ作者の力量から考えて、この章段をうまく利用できるとは思われない。そのために染殿内侍に関する話は伊勢物語以外に資料を求め、創作したのではなかろうか。以上のような理由でもって後撰集に資料を求めたものと思われる。と同時に改めて両者の結びつきを確認しておきたい。そして、この章段の働きについて歌語りということには疑問があるものの、雨海博洋氏が

大和編者の伊勢物語にも収められていないこの一六〇段の歌語りを二条后高子と業平とのプレ恋物語として在中将章段の冒頭に配列したものとみることができ⁽¹⁷⁾。

と述べられており、まさに同感である。

だが、大和物語の作者は一六〇段を創作していく過程で伊勢物語を資料とせざるを得なかった。別な言い方をすれば、それをもとにして別な世界を描くことを試みたのである。というのは、先程、後半の二首はどの作品にも見い出せない歌であると言ったが、実は伊勢物語四七段にある歌と近似しているのである。このことはすでに古注の『大和物語鈔』の中で、

此贈答伊勢におほぬさの引手あまたに云々おほぬさと名にこそたてれ云々と女とよみかはしたるを今内侍大ぬさとなりぬる人のかなしきはといひつかはしたる成べし。⁽¹⁸⁾

と指摘している。さらに吉川理吉⁽¹⁹⁾、今井源衛の両氏も両者の関係を認めておられる。例えば今井氏は

この古今集・伊勢の話と、本段の「大幣」の贈答との類似性は明らかであるが、これはやはり、大和物語作者が伊勢物語を模倣したものと見るべきであろう。

と述べておられる。

事実両方の歌を比べてみると、語法や意味の上でも共通点が見られる。今、それについて両者を比較し確認しておこう。

- (a) 大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ
 (a) 大幣になりぬる人の悲しきはよるせともなくしかぞなくなる
 (b) 大幣と名にこそ立てれ流れてもつひによる瀬はありといふものを
 (b) ながるともなにか見えむ手にとりてひきけむ人を幣と知るらむ

(a)、(b)は伊勢物語四七段に、「ダッシュ」を付けたほうが大和物語一六〇段にそれぞれみられるものである。(a)の「大幣になりぬる」という表現は吉川理吉氏も指摘されているように、(a)の「大幣の引く手あまたになりぬれば」という表現があつてこそ理解できるのである。しかも勅撰集において「大幣」という語が用いられている和歌を検索してみたところ、その数はひじょうに少ない。⁽²¹⁾ その中でもっとも早い時期に詠まれたのが古今集にある(a)と(b)の歌である。それをもとにして伊勢物語四七段が成立したと思われる。⁽²²⁾ ここでは歌に異同がなく、そのままになっており、その関係は十分納得できる。しかし、何も資料とせずに大和物語のような表現が可能かどうか疑問である。またその用例が少ないことから考えて、「大幣」という語自体、歌語として何を意味するのかはまだ完全に定着していなかったと思われる。ただ、私の調査が勅撰集に限っており、これ以外の私撰集をはじめ、私家集にまで当然その範囲を広げるべきである。そうした暁に結論を下すべきであろうが、勅撰集という、当世きつての代表的な歌集であるから、当時の歌語の使用状況などはおおよそそこに反映されているとみてよからう。このようなことから、「大幣になりぬる人」という表現は、やはり何かをもとにしたものと考えられる。ずばり言って、それは伊勢物語からとみてよい。この外、両者に共通する付随的なものを挙げると、「なりぬれ」と「なりぬる」の近似性、係り結びを用いていることである。これらのことも両者の関係を考える上でのひとつの目安にならう。

一方、(b)と(b)はどうか。先程の(a)、(a)の歌に比べて共通点も少ない。表現の上で類似しているのは「流れても」と「ながるとも」だけである。返し歌は贈歌の内容に依じて詠まれていくわけであり、そのことが返し歌の表現に及んでいる。(b)では、大幣がはじめから流れており、その行き着くところはあつたと締めくくっている。(b)では、ななが流れているかわからないが、それを手にとってみて幣であることがわかると結んでいる。このように両者は最終的に行き着くところはあつたという点で共通しているわけだが、感情の面でより深刻さが表出されているのは(b)である。

では、このことは何に起因しているのでしょうか。大和物語と伊勢物語の表面上の違いは、歌において前者が四首、後者が二首であるということである。このことは、当然そのストーリーの展開に相違が生じてくるわけで、伊勢物語四七段をみると、女は男を浮気者ときめつけている。男はそれを受け、単にうわさにすぎないと弁明している。そして下句をみると、(a)では思いを寄せてはいるものの頼りにならないという複雑な気持ちで詠まれている。これに対応して(b)では、最後には頼りになるところがあると、暗に男は女に期待を寄せている。これは(a)の「思へども」の心境に似ている。このように内容からみても贈答歌としての体裁を整えているのは(a)、(b)ということになる。しかもこれらの歌の前には

むかし、男、ねむごろに、いかでと思ふ女ありけり。されどこの男を、あだなりと聞きて、つれなさのみまさりつついへる。

という地文がある。この中で「ねむごろに、いかでと思ふ」、「あだなり」の部分は、女の歌の「思えど」、「たのまさりけれ」のところと対応しており、まさにこれは歌の内容と融合している。これに対して(a)と(b)はどうか。これらの歌に共通していることは、前にもふれたように先程の(a)、(b)に比べ感情の面でより深刻になっていることである。もちろんこれらの歌は二人の中に亀裂が生じた後に詠まれたものであり、当然の結果と言える。このことは話の展開に関係してくるわけで、大和物語の作者は時間的な流れを考慮し、このように改作したものと考えられる。そしてその深刻さは「よるせともなくしかぞなくなる」とか、男の歌では「ひきけむ人ぞ幣と知るらむ」という表現から窺うことができる。特に前者は女の詠作であるが、下句をみると男のことを詠んでいる。これは(a)にはみられない現象である。このことも顕著にそのことを示しているよう。

それにこれらはいずれも贈答歌になっているわけで、(a)と(b)はともに「大幣」という語を冒頭に置きその体裁を整えている。しかし、(a)と(b)はそのようになっていないし、特に(b)になると、表記されてはいないが、上句に「大幣」のことが想定され、下句にも「大幣」とあるから重複していることになる。これは歌全体の構成、ひいてはそのリズムにまで支障をきたしている。大和物語においてある歌の一部を利用し、歌を創作しているところはこの外にもみられる。⁽²³⁾しかもそれはその章段の虚構化の一端としてなされており、この点でも類似している。これは偶然の一致とは言えない面がある。このように大和物語の作者は、その場面に応じて伊勢物語の歌を改作していったわけであるが、贈答歌としてみた時、表現の上で今一步というところもみられた。また在中将を描くにあたって、その一部を伊勢物語に頼らざるを得なかった。それだけ在中将と伊勢物語の結びつきが作者の脳裏に深く刻み込まれていたのである。

ともあれ先学が指摘されたように私も(a)、(b)の歌を伊勢物語の模倣と考えたわけであるが、前述の如くこれらの歌は古今集にもみられる。そのために大和物語の作者は古今集をもとにしたかもしれないということも一応考えてみる必要がある。古今集の詞書には

ある女のなりひらの朝臣をとこさだめずありきすとおもひてよみてつかはしける

とあり、伊勢物語と類似した表現になっており、大和物語のこの場面にすぐに利用できそうである。しかし翻って考えてみるに、この章段は大和物語において在中将一連の中にみられるものであり、後述するようにこれらの章段が伊勢物語を意識してここに置かれたことを思えば、この章段のみを古今集からとり入れたとは考えにくい。事実、それを証明するかのよう⁽²⁴⁾にこれ以外の在中将関係の章段で古今集、伊勢物語、大和物語の三者が共通しているところを見ると、そこでも大和物語は伊勢物語をもとにして脚色されていた。こ⁽²⁴⁾うみてくると古今集からとはまず考えられず、やはり大和物語一六〇段の後半の二首は伊勢物語四七段をもとにして創作されたと考えるのが妥当のようである。

なお、一六〇段にみられる「在中将のもとより衣をなむ、しにをこせたりける⁽²⁵⁾」という表現は雨海博洋氏が指摘されているように、一五九段に「物をよくしたまひければ、御衣どもをなむ預けさせ給ひけるに」とある表現と無関係ではないようだ。このように、いわば連想の如く語句の上で関連させているところは他にもみられ、大和物語のひとつの特色でもある。これは章段間を関連づけるためになされた表現と思われる。

ところで、この章段の後半は次のような本文で始まる。

かくて住まずなりて後、中将のもとより衣をなむ、^①しにをこせたりける。それに「^②あらはひなどする人なくて、いとわびしくなむある。なを必ずして給へ」となむありければ、内侍、「御ころもてあることにこそはあなれ（以下略）」

この本文を読んで、まず疑問に思うのは①と②をどのように解釈したらよいのかということである。例えば『日本古典文学全集大和物語』では

着物を仕立ててもらいによこした。それに、「洗濯などする人がいなくて、たいそう困っております。やはりかならずしていただきとうございます」と解釈している。それにしても「仕立てる」ということと「洗濯する」ということをいかに関連づけて解釈したらよいのか。もちろん、洗濯してから仕立てるという意を含ませているのであれば話は別である。しかし、これだけの本文からは、何か補足でもしない限り、不自然さは否めない。その点、柿本奨氏の『大和物語の注釈と研究⁽²⁶⁾』では次のように解釈している。

中将の許から、着物を仕立ててよこして来た。それに付けた手紙に、「洗濯などする人がいなくて、とてもわびしい気持ちだ。これまでのように、きつと仕立てて下さい」とあったので（以下略）、

これだと氏が「しに」について「ほどいて洗濯して縫い直す仕立て直し」と語釈しているから、①と②とがうまく関連している。

このように、微妙に違った解釈を生じさせた原因はどこにあるのであろうか。ここではいずれが正しいかを判断することよりも、そこにはこのような解釈を生じさせてしまった、作者の文章力が反映されているように思う。もし、ほんとうに柿本氏が解釈されたように作者が考えていたのであれば、だががみてもそれと判断できる本文にしていたはずである。しかも、興味深いことは後半の冒頭を「かくて」で始めていることである。「かくて」と

いう語が大和物語の創作に深く関与していることはすでに指摘されており、後半がこれで始まっていることは創作されたということとその態度を窺い知る抛り所にもなる。

それと、これは単なる臆測の域を出ないのであるが、一六〇段は一五九段と全体にわたって、構成上での類似点が見い出せるのである。前述したごとと多少重複するところがあると思うが、今、論述の便宜上、両者を比較してみよう。

| | |
|------------------|---|
| <p>大和物語 一五九段</p> | <p>染殿の内侍といふ、いますかりけり。それを能有の大臣と申すなむ、ときどきすみたまひける。ものをよくしたまひければ、御衣どもをなむあづけさせたまひけるに、綾どもをおほくつかはしたりければ、「雲鳥の紋の綾をや染むべき」と聞えたりしを、ともかくものたまはせねば、「えなむ仕うまつらぬ。さだめうけたまはらむ」と申したてまつりければ、大臣の御返しに、</p> <p>雲鳥のあやの色をもおもほえず人をあひ見で年の経ぬれば となむのたまへりける。</p> |
| <p>大和物語 一六〇段</p> | <p>おなじ内侍に、在中将すみける時、中将のもとによみてやりける。</p> <p>秋萩を色どる風の吹きぬれば人のこころもうたがはれけり とありければ、</p> <p>秋の野を色どる風は吹きぬともこころはかれじ 草葉ならねば となむいへりける。かくてすまずなりてのち、中将のもとより、衣をなむ、しにおこせたりける。それに、「あらはひなどする人なくて、いとわびしくなむある。なほかならずしてたまへ」となむありければ、内侍、「御心もてあることにこそはあなれ。</p> <p>大幣になりぬる人の悲しきはよるせともなくしかぞなくなる」 となむいひやりける。中将、 ながるともなにか見えむ手にとりてひきけむ 人ぞ幣と知るらむ となむいひける。</p> |

それぞれの内容をみるに、おおむね一六〇段の内容は一五九段のそれを拡大したようになっていゝ。即ち染殿内侍のもとに男が通つていたこと。次いで男が染殿内侍に仕事を依頼し、彼女は困惑してしまい、その旨を相手に伝えること。そして結局、愛する人はあなた以外にいないと男が女に伝えること。以上のような骨子で類似している。こうみてくると、両章段は創作する上で密接な関連があつたと考えてよからう。一六〇段は在中将関係の最初の章段で、この前半は後撰集をもとにし、また後半の二首は伊勢物語を模倣したものであつた。

このようにある作品を資料にし、虚構化されていた。しかもここでは素材をいわば寄せ集め的にして、前の章段を参考にしたりすることは十分に考えられることであらう。前後の章段をもとに創作されている章段として一五四段があげられる。この章段は次の一五五段と内容が類似しており、そこには虚構の跡がみられた。⁽²⁹⁾それは構成をも考慮してのものであつた。一五九、一六〇段がともに後半にあることを思えば、このような類似性は偶然とは言えない。

以上、在中将関係の章段に染殿内侍が登場させるに至つた背景、そしてその資料を後撰集からとつた理由、さらには一六〇段の後半の二首が伊勢物語四七段からの模倣であることの再確認、そのようにした意図等について述べてきた。

三

伊勢物語にみられない章段といへば一六〇段に準じて一六五段をあげることができよう。それは次のような内容である。

水の尾の帝の御時、左大弁のむすめ、弁の御息所とていますかりけるを、帝御くしおろしたまうてのちにひとりいますかりけるを、在中将のびて通ひけり。中将、病いとおもくてわづらひけるを、もとの妻どももあり、これはいとしのびであることなれば、えいきもとぶらひたまはず、しのびのびになむとぶらひけること日々でありけり。さるに、とはぬ日なむありけるに、病もいとおもりて、その日なりにけり。中将のもとより、

つれづれといとど心のわびしきにけふとはずて暮してむとや

とておこせたり。「よはくなりにたり」とて、いといたく泣きさわぎて、返りごとなどもせむとするほどに、「死にけり」と聞きて、いとみじかりけり。死なむとすること、今々となりてよみたりける。

つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

とよみてなむ絶えはてにける。

先に準じてと断つたのは、この章段にある「つひにゆく」の歌は伊勢物語一二五段にみえるが、もう一首の「つれづれと」の歌は今のところいずれの作品にも見い出せないからである。そのためこの章段の典拠についても、先程の一六〇段の場合と同じような考えがなされているのである。

ここで問題になる「つれづれと」の歌は在中将が詠んだわけだが、賀茂真淵はこの歌について『大和物語直解』の中で「かくつたなきが業平の歌ならんや作りごとなるべし」と一蹴している。加えてこの歌がこの章段全体から考えて不自然であるとも言っている。ただ、もしこの歌が作られたものであるならば、何をもとにしているのか、さらにどんな点で不自然なのかについては具体的に言及していない。

そこで、『大和物語直解』の考えを自分なりに発展させてみたいわけであるが、この「つれづれと」の歌をよくみると、次の一六六段の「見ずもあらず」の歌に表現や内容の点でよく似ているのである。今、両方の歌を比較してみよう。

(c) 見ずもあらず見もせぬ人の恋しきはあやなく今日やながめ暮さむ（一六六段）

(c)′ つれづれといとど心のわびしきにけふはとはずて暮してむとや（一六五段）

上句は両方とも在中将がその切なる心境を詠んでいる。即ち(c)では高貴な人に逢った後のやるせなさを詠み、それが「恋しき」に凝集されている。(c)′では病気の身となり、恋人も訪ねて来てくれない悲しみを詠み、それが「わびしき」に凝集されている。表現の上で「人の恋しき」、「心のわびしき」と同じ品詞を用いている。だが、下句をみると(c)は在中将自身のことを、(c)′は恋人（弁御息所）のことをそれぞれ対象に詠んでいて上句とは趣を異にしている。思うに先程の一六〇段でもみられたように(c)はその場面に応じてこのような表現にしたのではないか。このことは(c)が後朝の歌であり、今日の逢瀬のせつなさを詠んでいるのに対して、(c)′は忍ぶ恋のため相手が訪ねてきてくれないことへの嘆きが詠まれていることによっても理解できよう。このように下句は詠む対象が異なっているものの、両者は用法や語句の点で共通している。即ち両者とも疑問形を用いていること。次いで「今日」、「暮す」という日常語を用いていること。さらに「あやなく」と「とはずて」は心情的にみて類似していること。そして下句においてではないが、「ながめ」と「つれづれ」も心境を示す語として類似した表現であること。こうした現象は何を意味するのであろうか。大和物語の場合、その多くは連想の如く書き継がれている章段が多いのであるが、(c)と(c)′の歌においてこれだけの共通点を見い出せるのは、もはやそれだけでは処理できない。ずばり言って(c)の歌は(c)′の歌をもとにして創作されたとみてよいのではあるまいか。

ところで、今井源衛氏は大和物語一六五段と在中将集との関係について言及され、両者は直接関係なく、両者に共通したもの（同一の原材料）の存在を想定されている⁽²⁸⁾。しかし、私の今までの考察からすると、この「つれづれと」の歌は作者の創作と考えられるから、同一の原材料の存在は考えら

れず、むしろ両者の関係を認めるべきではないか。そして、「つるにゆく」の歌と「つれづれと」の歌が在中将集で離れて、配列されているのはこの家集の編纂意図によるのであろう。

さて、そうすると、大和物語の作者はこの章段を創作するにあたって、どのような点を念頭に置いたのであろうか。まず考えられることは、伊勢物語とは別な世界を創り上げようということが根底にあったのではないか。それは今井氏の言われるように「業平の死をより哀切に、色どり豊かにする」のが、作者の意図だったのではあるまいか」ということにもなる。このことは当然、創作意識ということにも関係してくるわけで、それは具体的に次のような面からも窺えよう。一六六段にある「見ずもあらず」の歌は古今集と共通しているが、返し歌の「見も見ずも」の歌は創作されたものである。⁽³⁰⁾すると(c)は大和物語作者の創作歌ではない歌をもとにして創作されたことがわかる。このようにひとつの章段にあつて一首はもとのままで、他の一首は創作されており、この点でも一六五段と一六六段は似通っている。だが作者はこのように伊勢物語と別の世界を描こうと思いつつも伊勢物語のことが脳裏から離れなかった。登場人物において伊勢物語からヒントを得なければならなかった。この章段の冒頭を「水の尾の帝」としたのは一六〇段とこの章段を除くとすべて「在中将云々」で始まっており、単調になりすぎること懸念してこのような表現にしたものと考えられる。これは裏返せば、冒頭を「在中将」で始めていること自体、それなりの意図があつたことを示している。そして「水の尾の帝の云々」と冒頭に持ってきたのは作者の力量から言って、何かをもとにした可能性が強い。それにはまず伊勢物語が考えられよう。事実、伊勢物語にはこれと似た表現がみられるのである。六五段がそれで、今その本文と大和物語の冒頭文を比べてみる。

水、尾、の帝の御時、左大弁のむすめ、弁の御息所とていますかりけるを（大和物語）

水、の尾、の御時なるべし。大御息所も染殿の後なり。五条の後とも（伊勢物語）

最初の「水尾」が共通し、また人物は異なるものの「御息所」とあることでも類似している。これは偶然の一致と言えようか。前述の如く在中将関係の章段が伊勢物語をもとにしていることを思えば、これらの関係を認めるべきではないか。このような方法は大和物語作者の使う手であつたようだ。⁽³¹⁾このことはここに登場する左大弁なる人物についても言えそうだ。左大弁について注釈書にあたってみると、未詳としているもの、あるいは藤原良近をあげている。⁽³²⁾後者の場合、彼がこの官職にあつたという記事は見当らず、問題がないわけではない。この場合、その根拠をどこに求めているのかというと、おそらく伊勢物語一〇一段に「左中弁藤原良近云々」とあることによつていのではないか。私はむしろそれとの関係からここを考えるべきではないかと思う。実在の人物である藤原良近とするのではなく、少しもじつて架空の人物に仕立てあげたのではないか。というのは大和物語一六二、一六六段は伊勢物語において九九、一〇〇段と連続しており、これらの章段は後の考察からわかるように伊勢物語からとられ、章段の構成を考

えて分散したと思われる。しかもその後の伊勢物語一〇一段は在中将の兄である行平のことが記されており、作者が注意を引いていたことは十分予想できよう。ともかくここは無理を押しついで実在人物の良近とするのではなく、架空の人物と考え、作者の創作とみておきたい。

大和物語の作者は資料を駆使し創作していったわけであるが、地文に目を転じてみると欠点が見られるようである。その箇所を抜き出してみよう。

これはいとしのびてあることなれば、え行きもとぶらひ給はず、しのびのびになむとぶらひけること日々①にありけり。さるにはぬ日なむありけるに……この箇所に「訪ふ」が二箇所、「とぶらふ」が一箇所それぞれみられる。それらに傍線を施し①、②、③と番号を付しておいたが、このうち解釈上、①については問題ないが、②と③については問題があるように思う。というのは「訪ふ」、「とぶらふ」が「これは……(中略)……給はず」という本文で限定されており、その後②と③がみられるからである。そのために②と③について、(イ)単に訪問する。(ロ)手紙を出すという意に解釈が分かれている。ただ古注ではどうしたわけか取り上げていないが、これは大和物語の創作性を考えていく上で無視できない箇所と思われる。その点、明治時代以降に刊行をみた注釈書は先程のように二つの解釈に分かれている。今、それぞれの注釈書をあげてみると、

(イ)に解釈しているもの……『日本古典文学全集大和物語』、『大和物語の注釈と研究』

(ロ)に解釈しているもの……『大和物語新釈』、『大和物語新講』、『大和物語詳解』(武田祐吉氏・水野駒雄氏)、『全訳王朝文学叢書 第一巻』、『大和物語全釈』、『大和物語(下) 講談社学術文庫』

と言った状況である。さらに今井源衛氏の「大和物語評釈・五十二 在中将(続)」(『国文学』11巻14号)では「人目を忍んで手紙だけを遺されることが、日々②にありました。といつてもお見舞いのない日③もあつたのでした」④と分けて解釈しており、これはいわば(イ)と(ロ)の中間的な解釈である。以上のようにこの部分の解釈について、先学はひじょうに苦勞されているわけだが、先程、古注ではふれていないと言ったが、実は伊勢物語と大和物語を資料にして編纂され、鎌倉時代の成立と言われている『前田家本在中将集』④からもその片鱗を窺うことができる。

いとしのびて語らひけるほどに、わづらふことありければ、しのびて女、日々とぶらひけるを、いかなる事にかありけむ、せうそこ、おこせざりける日、心地もいとよはうなりにければ、いひやりける。

(注) 山田清市氏著『伊勢物語 在中将集』(白帝社 昭和42年4月)に拠り、句読点、及び濁点は稿者が施した。

在中将集は大和物語の「え行きとぶらひ給はず」にあたることを持つていない。そしてここでも先程の今井氏と同じように②、③にあたることを区別し解釈上、自然な本文にしているただし、今井氏とは逆の解釈になつてゐる。これはひとつの解釈の仕方を示したものと見えよう。

それにしても、なぜこのように区別された解釈になつてしまつたのか。思うにこれは作者の文章力と言おうか、創作力に起因しているのではないか。

確かに執筆する前にはこうしようという構想を抱いたのであろう。だが、いざ執筆してみると思うようにいかなかったというのが真相でなかったのか。ともかく解釈の上でこのようなあいまいさを残しているのは、やはりそれを物語つてみよう。

それでは、作者の真意はどうだったのか。それに迫る意味で本文を辿ってみると、「これはいとしのびであることなれば、え行きとぶらひ給はず」とあるから弁御息所は在中将の許に忍んで通っており、彼のところに行けないことが多かったのである。にもかかわらず、それを押しつけて訪問されることがあった。それが「しのびしのびになむとぶらひけること日々ありけり」という表現になったのである。特に「しのぶ」という語を二度くり返していることによっても理解できよう。それと「つれづれと」の歌に「とはずて」という表現があるが、これはその前の地文に「さるにとはぬ日なむありける」を受けていると思われる。病弱の身ではあるが、最後に弁御息所にひと目でも会いたいという在中将の切なる願いが「とはずて」という表現になったのであろう。したがって、この時の弁御息所の心情を察してみるに、この歌の「とぶらふ」について手紙を出す意に解してしまうと、その緊迫感に欠けるし、なにも「忍ぶ」を二度もくり返す必要はあるまい。以上のようなことからここは弁御息所の切なる願いを込めて、実際に訪れる意に理解し、少なくとも大和物語の作者はそのような意図でもってここを表現したと考えたい。

大和物語作者の文章力の不足さと言えば、「つゐにゆく」の歌の前後にもみることができると、このことについては以前に指摘したことがあるので、詳しくはそれに譲るとして、ここでは特に創作ということに関して別の面から少し述べておこう。それは「死」についての表記の部分である。即ち「死にけるときゝて」、「死なむとする」、「絶えはてにける」という三箇所が解釈上、どうもすつきりしない。それはここでも「返りごとなどもせむとするほどに、……(中略)……いとみじかりけり」という本文で限定されており、その後「死」についての表記がみられるからである。これは先程の「訪ふ」の場合とよく似ている。しかも後の表記を見ると、「死なむとすること今々となりて」とあり、これまた意味上、異なるもののその表現方法では先程の「しのびく」という表現によく似ている。そして「絶えはてにける」と最後にあることから、これで完全に息絶えたわけである。これらの本文は伊勢物語や古今集と比較してみるとかけ離れており、大和物語の作者によって創作された本文と思われる。これらは言ってみれば、在中将への哀傷感を醸し出すためになされたものであり、作者にとっては精一杯、努力した結果であった。

四

前述したように一六六段も形態上、一六五段と似ている。それは次のような内容である。

在中将、物見にいでて、女のよしある車のもとに立ちぬ。下簾のはざまより、この女の顔いとよく見てけり。
ものなどいひかはしけり。これもかれもかへりて、朝にのみてやりける。

見ずもあらず見もせぬ人の恋しきはあやなく今日やながめ暮さむ
とあれば、女、かへし、

見も見ずもたれと知りてか恋ひらるるおぼつかなきの今日のながめや
とぞいへりける。これらは物語にて世にあることどもなり。

この章段は伊勢物語九九段と共通しているが、ただ、「見も見ずも」の歌は、伊勢物語には見られず、別の歌になつてゐる。この現象について、従来、現存とは別の伊勢物語、いわゆる異本伊勢物語の如きものからとられたとか、あるいは業平集ただし現存のものではない、業平説話からとられたとか、さらには歌語りされてこのように変化していったものとか考えられて来た。しかし、この「見も見ずも」の歌は大和物語の作者によつて創作されたものと考えた方がよさそうである。詳細は拙稿(39)に譲るが、その主とする理由は、伊勢物語のこの章段の最後にある「後は誰と知り、にけり」という本文を、大和物語の「見も見ずも」の歌の中にとり入れてゐることによる。私のこの考えに対しては一部の賛同を得られたが、それでもまたこの現象を歌語りということに固執なされてゐる方もおいでになる。(40) そんなことで、自分の考えを少し補強しておきたい。

私が創作と考へた「見も見ずも」の歌は、贈歌である「見ずもあらず」の歌に表現上、近似している。もちろん両方の歌は贈答歌として存在するのであるから、そうなつてゐるのは当然の結果なのかもしれない。しかし、それにしてもあまりにも似通つてゐる。今、両方の歌を比較してみよう。

見ずもあらず見もせぬ人の恋しきはあやなく今日やながめ暮さむ(1)

見も見ずもたれと知りてか恋ひらるるおぼつかなきの今日のながめや(2)

それぞれ似通つた箇所傍線及び波線を施し、番号を付けておいたが、この中で①と①、③と③は他のところに比べるとやや違つてゐる。ただ前者は違つてはゐるものの、「見ずもあらず見もせぬ」と「見も見ずも」は同じことを言つており、また「誰と知りてか」も①の「人」をもとにしてこの章段の内容を考え、このような表現にしたものと思われる。後者の③と③は贈答歌ということから同じ表現にするのではなく、それぞれ別な表現にしたのではないか。しかも各章段の内容がこれらの歌の表現に反映されてゐるように思われる。伊勢物語九九段には女の純粹でひたむきなところがみられ、それが「あやなし」という表現になつたのであろう。これに対して大和物語一六六段には女の高貴意識が窺われ、それが「おぼつかなし」という表現

になつたのであろう。事実、大和物語一六六段には伊勢物語九九段に比べ女の感情の激しさが読みとれる。「誰と知りてか」と切り出し、続けて「おぼつかなき」と在中将を一蹴している。このように多少なりとも趣向の上では違っているものの、表現の点からみると、「あやなし」と、「おぼつかなし」は同じ品詞で、ともに対象がはっきりしないということを原義にしており、大和物語の作者は改作する場合、このようなことを考慮し、似通った語を用いたのであろう。これら以外は文法的な違いはあるものの、両方とも同じ語を用いている。さらに、いずれの方にも「や」という係助詞を用いている。

このように贈歌、返歌の違いはあっても、使用している語がこれほど近似していることは何を意味しているのであろうか。やはりこれは前歌をもとにして創作したとしか考えられない。そして、その方法は贈歌にある類似語を用いており、単純といふべきである。このことは今まで見てきた章段の地文でも表現の不備なところがあり、そのことと無関係ではあるまい。それとこの章段でも、歌において出典の明らかなものと、そうでないものという配置になつている。このような現象は、すでに見てきた一六〇、一六五段と共通していることである。そこでも指摘したように、このことは伊勢物語と別な世界、言い換えれば作者の創作欲に関係しているように思われる。そしてこれらの現象は、もはや歌語りという概念だけでは処理できない。

ところで、一六六段の末尾には「これらは物語にあることどもなり」という注記めいた本文がある。これは一六〇段から一六六段を受けており、「物語」が伊勢物語を指していることは疑いない。それにしても現存の伊勢物語と内容がかなり異なっている。このことについては、かつて漠然と言っているのではないかと述べたことがある。⁽⁴⁾ここで別の面から少し補足しておこう。

この本文があることによつてどのような意味を持つのであろうか。典拠を示すことももちろんだが、それにしてもあまりにも現存のものと違いすぎる。するとこれ以外にどんな働きが考えられようか。これを考える目安としてこれ以外の在中将関係の章段にみられる同じような本文と比べてみよう。それは、この外に「かへしを人なむ忘れにける」(一六一段)と「同じ草を忍ぶ草、忘れ草といへば、それによりてなむよみたりける」(二六二段)がある。前者からはたして返し歌が存在したかどうか疑問である。というのは後述する「思ひあらば」の歌は古今集と共通しているが、そこには返歌がみられないし、またこれ以外の文献などにもその存在を記したものがみられないからである。このことから考えて、むしろ別の意図があつたのではないか。また後者はその内容に誤りがあると言われているが、前述の如くこれはその内容の展開を考えてこの本文を付加した可能性が強い。こうみてくると、一六六段のそれを含めこれら三者に共通していることは、言っていることの真実そのものよりも別の意図を含んでいるということである。それは正確を期するということよりも、むしろ話の展開に重きを置いて記されたのであろう。特に一六六段の場合は段末の本文の一部を歌に組み入れ、そ

の代わりに「これらは物語に云々」の本文を付加していることを思えば、なおさらそう考えざるを得ない。しかもわざわざこれを付加した意味は、伊勢物語なる作品があまりにも著名であり、大和物語の在中将関係の章段は伊勢物語と共通していることに読者は気づいていたはずである。大和物語の作者はこれらの章段を改作したけれど、それは伊勢物語をもとにしたことをいわばことわりの気持ちで記したのである。なお、鈴鹿本、御巫本によるとこの本文に異同がある。「これは物語にあるほかのことどもなり」とある。これはすでに指摘されているように一六六段のみを指した本文である。思うに、鈴鹿本、御巫本は流布本にある本文を書いた意図を理解せず、むしろ誤りと考えて書き改めたのであろう。

五

一六〇、一六五、一六六の三章段は在中将を描いているものの、伊勢物語と比較してみるに、そこには全く見られないところや部分的にそうなつているところがあつた。なぜそうなつているかを突き詰めてみると、結局のところ大和物語作者の創作欲に起因していると考えられる。そこには、伊勢物語とは別な面を描いていこうという作者の意図を垣間見ることができた。その努力は確かに認められるが、おおむねその方法はある歌をもとにしたり、伊勢物語の一部を利用したりしていた。したがつてその方法は寄せ集めであり、また本文自体にもぎこちなさがみられ、創作された歌や本文がけつしてすぐれたものとは思われない。

六

この外にも在中将関係の章段はみられるが、その内容は大筋において伊勢物語とほとんど変わらない。これは先程の一六五段などに比べると趣を異にしている。ただ、在中将関係の章段は六章段連続しており、大和物語の中で最も多い。これだけを集中させていることからして、先程の三章段でもそうであつたように、これら以外でも何らかの方法を講じていることは当然予想できよう。

そこで、まず大和物語二六一段からみていくことにする。この章段は伊勢物語三段と七六段が一緒になっている。論述の便宜上、両者を比較しておく。

| | |
|-------------------|---|
| <p>伊勢物語 三・七六段</p> | <p>むかし、男ありけり。懸想じける女のもとにひじき藻といふものをやるとて、 思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも 二条の後の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人にておはしましける時のことなり。 むかし、二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうでたまひけるに、近衛司にさぶらひけるおきな、人々の祿たまはるついでに、御車よりたまはりて、よみて奉りける。 大原や小塩の山も今日こそは神代のこともおもひいづらめ とて、心にもかなしと思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。</p> |
| <p>大和物語 一六一段</p> | <p>在中将、二条の後の宮、まだ、帝にも仕うまつりたまはで、ただ人におはしましける世に、よばひたてまつりける時、ひじきといふ物おこせて、かくなむ、思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじき物には袖をしつゝも となむのたまへりける。返しを人なむ忘れにける。 さて、後の宮、春宮の女御と聞えて大原野にまうでたまひけり。御ともに上達部・殿上人、いとおほく仕うまつりけり。在中将も仕うまつれり。御車のあたりに、なま暗きをりに立てりけり。御社にて、おほかたの人々祿たまはりてのちなりけり。御車のしりより、奉れる御単衣の御衣をかげさせたまへりけり。在中将、たまはるまに、 大原や小塩の山も今日こそは神代のことをおもひいづらめ と、しのびやかにいひけり。むかしをおぼしいでて、をかしとおぼしける。</p> |

大和物語一六一段の成立については、第一に伊勢物語をもとにして大和物語が出来たという考え、第二に現存しない業平集、あるいは業平説話をもとにして出来たという考え、第三に大和物語から伊勢物語が出来たという考えがある。第一の考えは先人の説であり、また第二の考えは確かに合理的に説明できるものの資料的な面で問題がある。したがって説得力に欠けることは否めない。しかも、先程考察した伊勢物語に見られない話は、私見によると大和物語作者の創作と考えられるから、もし在中将関係の章段が伊勢物語等をもとにし、各々の章段が創作されて、かつ全体の構成をも配慮されていったとするならば、もはやこの考えは成り立たなくなる。最後の「大和物語から伊勢物語」という考えについては、少し説明を加える必要がある。

これは昭和五四年に発表された吉山裕樹氏の説である。⁽⁴⁵⁾氏は伊勢物語七六段の末尾本文「とて心にもかなしとや思ひけん、いかが思ひけん、知らずかし」という箇所が、伝本により異同がみられ、流動的になっていったのではないかと考えられ、塗籠本が有していないことに注目された。即ち七六段の主人公「翁」は他の章段―七九・八一一段―において、晴れの歌、寿の歌を詠む専門歌人として登場するから、七六段も先程の末尾本文を取り去れば、寿の歌になり、この末尾本文を本来、持っていないかつたとみて、その成立過程を塗籠本↓大和物語一六一一段↓伊勢物語（末尾本文を付加）のように考えておられる。そこで、第一、三の考えのうちいずれが妥当であるかを考え、あわせて大和物語作者の、この章段を創作するにあたっての意図なるものを探ってみたい。それにはまず「大原や」の歌と「思ひあらば」の歌とそれに付随することをいかに考えたらよいかの問題になって来よう。というのは、この歌は伊勢物語、大和物語だけでなく古今集にもみられるからである。古今集の詞書は次のようになってい

二条後のまだ春宮の御息所と申ける時に、大原野にまうで給ひける日よめる

（注）本文は『日本古典文学全集古今和歌集』に拠った。以下も同様。

これをもとにして伊勢物語七六段が成立したと思われる。両者の関係については、すでに森本茂氏によつて要を得た見解が発表されている。今、それを引用してみよう。

「大原や」の歌は、古今集では高子が大原野に参拜された時、業平のよんだ歌であるから、この段は、古今集によつて物語化されたと思われる。「近衛司にさぶらひける翁」は業平を暗示する。（中略）古今集の詞書とこの段の地の文とを比較してみると、古今集では、行啓にお伴した業平が、翁の立場にいて高子の参詣をお祝いするという形であるが、この段では、禄をいただいて歌をよみ、心にも「かなし」と思ったようだから、私的な立場から高子への追慕をあらわしている。すでに三段の「余説」（稿者注、森本氏の『伊勢物語全釈』の「余説」のこと）⁽⁴⁶⁾でのべたように、業平と高子の恋は世間でも公然の秘密であつたらしいが、この段はこういう事実をふまえて物語化が進められたと考えられる。

このお考えによつて言い尽くされていると思われるが、少し補足させていただく。森本氏が伊勢物語では私的な立場から高子を追慕云々と指摘されているが、それは「近衛司にさぶらひける翁」を登場させ、かつての二人の間を暗示させているわけである。このことは、「大原や」の歌の中に「神代のこと」という表現があるが、ここには藤原氏の祖先である天児屋根命のことだけでなく、『大和物語鈔』が指摘しているように、かつての華やかな二人の間を思い起こし、それを含ませて詠んでいるのではないか。そう理解することによつて、段末の「心にもかなしとや云々」という本文が生きてくると思われる。⁽⁴⁷⁾これは伊勢物語の創作性にも関わってくることで、歌集から物語へのひとつの流れをみることで、このことから段末の本文とこの章段の内容とは切っても切れない関係にあることがわかる。塗籠本のように、確かに古今集に近いわけで、その点では、古い姿を止めている

とも考えられないこともない。しかし、先程述べたようにこの歌を段末の本文との関わりや伊勢物語というひとつの洗練された作品内容等からみると、どうもこうは考えられないのである。以上のことから吉山氏のお考えには納得できかねる。ここは伊勢物語三、七六段をもとにして成立したと主張する第一の考えを支持したい。

では、大和物語の内容にはどのような変化がみられるであろうか。ここでは後述するように内容的にみてより幅を持たせている。それも伊勢物語をもとにしたとなると、そこには当然、作者の意図も関わってくると思われる。この点に関しては、第一の考えをされている藤田徳太郎氏は次のように述べておられる。

大和物語で、此の話の直ぐ次に、二條の後の大原野参詣の事を記して、両者の間に、内容的関連を持たせてるが、伊勢物語では、年代的に、説話が排列してある為め、此一の両方の話の間には、可成りの隔たりが出来て、直接の連想が浮はず、殊に、前記の注記を、もし欠くとすれば、一層両者の間に連関はつけられないわけである。此の点、大和物語が、多分、伊勢物語から、此の條をピックアップして、かくアレンジした方法は賢明で、伊勢物語の敷衍的態度としては、妥当な方法であると言はなければならない。内容的には、さしたる発展はなく、たゞ大和物語の方は、あくまでも伊勢物語の語脚に甘んずる態度であつて、それ以上の創作態度は認められない。⁽⁴⁸⁾

この考えは昭和十年代に発表されたものであり、当時にあつてはかなり具体的に述べられ、特に両者の関係を認めていることは注目される。ただ、氏が言われているように内容的に発展がないということに関しては、以下の考察からして受け入れ難い。また、昭和四一年に至りこの章段の作者の意図するところについては、今井源衛氏の研究がある。⁽⁴⁹⁾氏は、後にも述べるが、伊勢物語から大和物語への過程を前提として詳細な分析をされている。このように両者の研究に尽くされており、私の及ぶところではないが、少し別な面から述べてみたい。

大和物語をみると、冒頭の部分が伊勢物語に比べ異なっている。大和物語では伊勢物語の段末にある説明的な本文を冒頭に置いている。しかもこの説明的な本文は七六段の冒頭文「むかし、二條の後の、まだ春宮の御息所と申しける時」とその書式が似通っている。大和物語の作者はこれらの章段をひとつにする過程において、三段の説明的な本文を冒頭に据え、七六段のそれをそのままにしている。ただ、そのままにしているといつても後述するように異同があり、これも章段の内容と深く関わっていると思われる。たしかに「二條后云々」と冒頭に置いたのは意図的になされたものであるが、それは単に冒頭に移動させたということではなく、彼女を顕示させたものと思われる。それは、すでに指摘されているように、この場合、この歌の作者は二條后になる。このことと先の冒頭に移動させたことは関連があろう。これは、創作意識と密接に関連しているわけで、このことはこのみならず他の本文にも現れている。両者の本文を比較してみると少なからず異同がみられる。今、その主なものをあげてみよう。

| 番号 | 伊勢物語 三・七六段 | 大和物語 一六一段 |
|-------------|---|---|
| (1) (2) (3) | 懸想じける女 氏神 人々の禄たまはるついでに | よばひてたてまつる時 大原野 御ともに上達部・殿上人いとおほく仕うまつり けり。在中将もつかうまつれり。御社にておほ かたの人々禄たまはりてのちなりけり。御車の しりより奉れる御単衣の御衣をかげさせたま へりけり。 |
| (4) (5) (6) | ナシ 春宮の御息所 とて、心にもかなしと思ひけむ、いかが思ひ けむ、知らずかし。 | 返しを人なむ忘れにける。 春宮の女御 とてしのびやかにいひけり。むかしをおぼしい でてをかしとおぼしけり。 |

(1)、(2)、(5)は一見それほど違わないようだが、よく見ると大和物語の方がより具体的な表現になっている。即ち(1)では恋愛の過程からみると一歩進んだ表現になっているし、(2)においても大和物語は氏神が何であるかを示している。さらに(5)をみると伊勢物語の場合、「御息所」とあるから女御、更衣のいずれともとれ、いわば漠然とした表現になっている。これに対して大和物語では「女御」とあり、具体的になっている。これは大和物語が二段であったのを一章段にしたことと無関係ではあるまい。一章段にすることによって時間的な流れがより密接になるわけであり、それにもない彼女の地位を具体的に示し、その場に即した表現にしたのである。このように大和物語の具体性は、これら以外のところでも顕著に窺うことができる。(3)をみると、大和物語の方はかなり詳しくなっている。御供の表現は二条后の威厳を持たせるためと思われる。その後の表現は在中将が被け物をいただく場面である。彼は一般の人々への下賜が終って、その後にはいただいている。このことについて今井源衛氏は

はじめから一魂胆あつて最後に残つた業平が、望み通りすばらしいものを得たというものであろうか。⁽⁵⁾

と述べておられるが、そうとるよりも「なま暗き」ときに「御車のしりより」とあるからいかにも人目を避けている様子を表現したのではないか。このような表現にしたのは、ひとつに在中将と二条后の仲はあまりにも有名な話であり、そのことが伏線となっているのであろう。そして、それが(6)で示した大和物語のような表現に絡み合っていくのであろう。(6)は「大原や」の歌の後にみられる草子地である。伊勢物語では前述したように男の心情だけを記して

いる。これに対し大和物語では、「とてしのびやかにいひけり」までが在中将の心情を、これ以降が二条後の心情をそれぞれ記している。大和物語は明らかに二人の間を意識しての本文と言えよう。したがって「大原や」の歌の「神代」という表現には若き日の二人の情事をも含めていることをより鮮明に打ち出していることになる。(4)において、大和物語は「返しを人なむ忘れにける」という本文を持つているが、このことについては以前、話の展開を考えて付加されたものではないかと述べたが、もう少し詳しくこの本文を付加した事情を探ってみよう。大和物語の作者は伊勢物語三、七六段を合わせて大和物語一六一段を創作したわけである。ただ単に一緒にするのではなく、本文の上で工夫していることは前述した通りである。このことは「返しを人なむ忘れにける」という本文にも及んでるように思う。単に大和物語が伊勢物語のままにすると、前に述べたように三段の末尾にある「二条の後のまだ云々」と七六段の最初にある「むかし、二条の後の、まだ云々」とは同じ書式になっており、不自然さを免れない。それを避けるために三段の末尾本文を大和物語一六一段の冒頭に持ってきたわけである。その代わりに「返しを人なむ忘れにける」の本文をあそこに置いたと思われる。そもそも時間的な隔たりがある二章段を一章段にするのであるから、それを埋め合わせるためにはどうしても必要な本文であった。これは在中将の返歌についての記述であり、すると前にも述べたように「思ひあらば」の歌の作者が二条后になるわけである。このようにしたのは後述するように作者の、二条后に対する高貴意識があったからではないか。そうすると在中将の歌は無くなってしまうわけである。在中将が歌人として、また色好者として一世を風靡していたことは予想できる。まして二条後の歌となってしまった「思ひあらば」の歌に、返歌をする立場にある在中将にそれがないと、彼の威厳が損なわれる。かと言って、作者にはそれを創作する力もさほどなかったようである。そこで思いついたのがこの表現であった。このことにより、在中将の立場というものがかるうじて保たれたことになる。この外、大和物語は「さて後の宮」の次に「まだ」を持つていない。さしたる異同ではないが、実を言うとこのことは章段の成立に深く関わっているように思われる。伊勢物語七六段の冒頭をみると、「昔、二条の後の、まだ、春宮の御息所と申しける時」とあって、三段の末尾本文に表記が類似している。しかも「まだ」が重複している。大和物語は二章段であったのを一章段にしたのであるから、時間的な配慮をするには不自然になるため、伊勢物語七六段の方の「まだ」を除去し、さらに「御息所」を「女御」に改めたのであろう。このように伊勢物語三、七六段が「まだ」を持つていることと、大和物語一六一段の後半にそれが深い関係があると思われる。このことは、大和物語一六一段が伊勢物語三、七六段をもとに形成されたことを示している。

以上みてきたように大和物語の作者は単に伊勢物語三、七六段を一緒にするだけでなく、創作意識を持ち様々な改作を試みたわけである。その裏には伊勢物語とは別の世界を描こうという考えがあったのであろう。そのために細かい描写は大和物語の方がまさっているという考えもあるが、なにも努力したことがすばらしい文章を生む結果につながるとは限らない。例えば次の箇所はどうか。

在中将も仕うまつれり。御車のあたりに、なま暗きをりに立てりけり。御社にておほかたの人々禄たまはりてのちなりけり。御車のしりより奉れ

る御単衣の御衣をかげさせたまへりけり。

これを読んでみると、どうも説明的になりすぎ、ごてごてとして複雑しすぎはしまいか。この本文は先程の一覧表の(3)とも一部共通しており、しかも伊勢物語にはみられないことから、大和物語の作者によって作られたものと思われる。こちら辺にも作者の文章力の一面をのぞかせていよう。

七

次に一六二段をみることにする。これは伊勢物語一〇〇段と共通している。まず両者を比較してみよう。

| 伊勢物語 一〇〇段 | 大和物語 一六二段 |
|--|---|
| <p>むかし、男、後涼殿のはざまを渡りければ、あるやむことなき人の御局より、「忘れ草を忍ぶ草とやいふ」とて、いださせ給へりければ、たまはりて、忘れ草生ふる野べとは見るらめどこは忍ぶなり 後も頼まむ</p> | <p>又、在中将、内にさぶらふに、御息所の御方より、忘れ草をなむ「これはなにかいふ」とてたまへりければ、中将、忘れ草生ふる野辺とは見るらめどこはしのぶなり りのちも頼まむ となむありける。同じ草を忍ぶ草、忘れ草といへば、それによりなむ、よみたりける。</p> |

伊勢物語は会話の部分に問題がある。⁽⁵⁴⁾そして大和物語ではその部分に異同がみられる。この章段について菊地靖彦氏は、大和物語がいかに伊勢物語を読み切れていなかったかとされ、

「これは、なにかいふ」といわせるとき、「大和物語」は「伊勢物語」の叙述をなんとか合理的に整理しようとしていることがうかがえる。⁽⁵⁵⁾

と述べておられる。確かにその通りであろう。ここは伊勢物語をもとに手を加えているわけだが、翻って考えてみるにこうした意図はどんなところにあつたのであろうか。氏とは別の面からそれを探ってみよう。

両者の大きな違いというと、大和物語は段末に「同じ草を忍ぶ草、忘れ草といへば云々」の本文を持っているが、伊勢物語にはそれが無いことである。この本文の有無が話の展開に微妙に関係してくるように思われる。両者を読んでみると、話の展開において大和物語の方が自然である。伊勢物語

では前述の如く会話の部分に問題あるとしても、ある高貴な女性が局から「忘れ草を忍ぶ草というのですか。」と突然尋ねて、それに応じ男は自分の気持ちを全く同感と言わんばかりに歌に詠んでいる。それにしても、ここは話の展開において唐突さを否定できまい。その点、大和物語の方は御息所の御方と、人物をより具体的にし、彼女が忘れ草を「なんと言うのですか。」と尋ね、それに応じ在中将が歌を詠み、その後でこう詠んだ理由を説明している。伊勢物語では、いわば半強制的になっていて歌で答える前にすでにそれが用意されている感じである。その点、大和物語にはそんな唐突さはなく話が自然に展開している。即ち、これを解消するために、「忘れ草をなむ、『これは何とかいふ』と改めたわけだが、これだけだと、なぜ、歌の中に「忘れ草」と「しのぶ草」が詠まれているのか理解しにくくなる。そのために文末に「同じ草を云々」の本文を付加したのであろう。この本文は言ってみれば、伊勢物語の「忘れ草を忍ぶ草とやいふ」を移行したわけである。忍ぶ草と忘れ草を同じにみている点では問題あるにしても、合理的に話を進めようという作者の考えは十分に察することができよう。

ともかくこれらの章段は伊勢物語において九九、一〇〇段と連続し、かつその内容からみても在中将関係の章段を構成して行く上で好都合な章段であった。大和物語の作者はそれらをもとに創作意識を持ち部分的な改作を試みたわけである。

八

これ以外に伊勢物語と共通しているのは一六三段と一六四段である。この二章段には、それほど大きな異同はみられない。一六三段は古今集とも共通している。三者を比較してみよう。

| | | |
|---|--|--|
| <p>古今集・秋下</p> <p>人の前栽に、菊に結びつけて 植ゑける歌</p> <p>在原業平朝臣</p> <p>植ゑし植ゑは秋なきときや咲かさ らむ花こそ散らめ根さへ枯れめや</p> | <p>伊勢物語 五一 段</p> <p>むかし、男、人の前栽に菊植へ けるに、</p> <p>植ゑし植ゑは秋なき時や咲か ざらむ花こそ散らめ根さへ枯 れめや</p> | <p>大和物語 一六 三段</p> <p>在中将に、後の宮より菊召しけ れば、奉りけるついでに、</p> <p>植ゑし植ゑは秋なき時や咲か ざらむ花こそ散らめ根さへ枯 れめや</p> <p>と書いつけて奉りける。</p> |
|---|--|--|

古今集と伊勢物語は、単に男がある家の植え込みに菊を植えた折に詠んだ歌になっている。それだけに両者が深い関係にあることを窺わせる。ただ、古今集によると、この歌は「秋下」の部立に入集しているから、菊という景物そのものを詠んだ可能性が高い。⁽⁵⁶⁾伊勢物語の場合はどうか。地文の内容が古今集と変わらないわけだから、それと同じように考えてよいだろうが、伊勢物語という作品そのものの性格を考慮すると、恋の要素も多少は含まれているようにも思われるのだが、はつきりしない。

これに対し大和物語では、後の宮から菊を御所望になった折、在中将がそれを差し上げる際に詠んだもので、その状況がかなり具体的に記されている。このような表現は古今集、伊勢物語にはみられず、大和物語の作者によって創作されたものと思われる。そしてこれは在中将関係の章段の中であって、その相手は「後の宮」とあるから、二条后を暗示させている。⁽⁵⁷⁾したがって「植ゑし植ゑば」の歌は、祝いの歌というものの、二人の背景を考えて、ここには恋の要素を含ませようという、作者の意図があつたのであろう。

以上のように三つの作品を比較してみると、その変遷に伴って作意する上での意図なるものを理解できた。とりわけ大和物語はほぼ全面的に改めており、創作への意欲が顕著であつた。このことからして大和物語から伊勢物語への過程はまず考えられない。ただ、この歌と詞書、地文からみる限り、古今集と伊勢物語の方が自然である。それは詞書に「菊に結びつけて植ゑける歌」とあり、また地文に「菊、植ゑけるに」とあつて、歌で「根さへかれめや」と詠んでおり、まさに両者が呼応し一体となつているからである。大和物語では「菊召しければ」とあり、「植ゑける」というような表現はなく、古今集や伊勢物語のような呼応関係はみられない。あくまでも菊を差し上げるということを主眼にしている。これは後の宮を設定するに伴い「菊を召しければ」というような表現に改めたのであろう。大和物語では場所よりもむしろ人物に焦点をあてている。

しかしながら次の一六四段には、このような形跡は少しもみられない。それは次のような内容である。

在中将のもとに、人のかざりちまきおこせたる返しに、かくいひやりける。

あやめ刈り君は沼にぞまどひけるわれは野にいでてかるぞわびしき
とて、雉をなむやりける。

これに共通する伊勢物語五二段を比較してみると、両者はほとんど異同がない。そして在中将の相手は後の宮でも御息所でもなく、単に「人」となっている。この現象について先学はその場面状況や前後の展開を考慮し、伊勢物語と同じように「人」としたと考えておられる。⁽⁵⁸⁾これに対し、菊田茂男氏は『大和物語』の記述は「在中将のもとに」といきなり著名な実在の人物を登場させて、物語の背景となつた時代やそこで活躍する主人公を具体的に指摘している。虚構化への方をおしすすめるのではなく、むしろ説話化の徹底を指向する。このことは、歌をめぐる口誦の説話、つまり歌語

りの精神や営為が発想の根底に深く張っていることを示すものである。⁽⁵⁹⁾

と述べておられる。いずれが妥当であろうか。菊田氏は口誦性ということを強調されている。しかし、一六四段だけならいざ知らず、これ以外の在中将関係の章段をみると口誦性だけでは説明しきれない面があったことは今までの考察から理解できよう。それと氏が一六四段だけをとり上げていられるからである。あくまでも在中将関係章段の全体の中でとらえるべきである。それだけに、これらの章段は意図的な構成がなされていると考えられるからである。その点、前者の考えは在中将関係章段の中での結論であり、説得力がある。このことから前者の考えが妥当ではあるまいか。

でもそういう考えでもって伊勢物語の章段を配置するのであれば、なにもこれとは限らず、伊勢物語の別の章段でもよかつたはずである。思うに、こうしたのは大和物語一六三、一六四段は伊勢物語でも五一、五二段と連続しており、後述するようにこれらの章段において用意周到な展開がなされており、そのためにも好都合な章段であったからであろう。それと、これはすでに指摘されていることだが、大和物語一六二段（忘れ草）、一六三段（菊一六四段（あやめ）と植物で関連しており、このことも考慮したものと思われる。なお、在中将関係の章段の中で、この章段と同じような働きをしている章段がこれ以外にも存在するようだ。詳しくは後の章で述べたい。

九

伊勢物語とおおむね共通している一六一段から一六四段までの四章段をみてきた。これらの章段においても大和物語の作者は、つとめて伊勢物語とは違った面を描き出そうとしていた。当然、このことは作者の創作意識にも関わるわけだが、中には表現の上でもう一步のところもあつた。そしてなによりもここで注目しておきたいことは一六四段を除けば、すべて二条后関係—あるいは彼女を意識して—の章段であるということである。それだけに作者の胸—当時の人々にとつても—の内に在中将と二条后との結びつきが強く植えつけられていたのであり、それがこれらの章段に反映されていた。

十

在中将関係の章段について、ひととおり考察してきたわけであるが、その結果、伊勢物語をもとにある章段では全面的に改作したり、またある章段では部分的に改作していた。そこで、今までの考察結果をもとにして、伊勢物語を資料に創作していく場合、大和物語の作者はどのような点を考慮し

ていったのであろうか。

一六〇、一六一、一六五の各章段はその内容を前半と後半に分けることができる。今、それぞれの和歌の典拠、登場人物(女性)等を一覧表にしてみる。

| 章段 事項 | 前 半 | 後 半 | 登場人物(女性) |
|----------|-----------|----------|----------|
| 一六〇段 | *後撰集 | 伊勢物語(虚構) | *染殿内侍 |
| 一六一段 | 伊勢物語 | 伊勢物語 | 二条后 |
| 一六五段 | *大和物語(虚構) | 伊勢物語 | *弁御息所 |

(注) *印は私見によると虚構化されている箇所。

伊勢物語で「男」と表記されているのを大和物語ではすべて「在中将」となっている。これは当時にあっても伊勢物語のモデルは在中将と考えられており、問題なくこのようにしたものと思われる。しかし、その相手についてはすべて二条后とばかりいかなかった。伊勢物語と同じなのは一六一段だけにすぎない。残りの二章段は前半か、もしくは後半において和歌や人物が創作されている。これはどのような事情によるのであろうか。一六一段と共通している伊勢物語三、七六段をみると、そこでははつきり「二条后」として登場している。これに対して、一六〇、一六五段と共通している伊勢物語四七、一二五段では、単に「女」とあり、具体的に誰であるかはつきりしない。このことから大和物語の作者は伊勢物語での表記にもつき「二条后」と表記していることがわかる。ただ「女」と記されている場合は架空の人物を設定している。これは根拠にした作品に、ある面では忠実であったことを示している。この考えは人物のみならず和歌にも及んでいる。即ち、一六〇段では後半の歌が大和物語作者によって創作されているし、また一六五段でも前半の歌がそのようなになっている。これは虚構の意識が歌にも及んだものとみるべきであろう。このように大和物語の作者は資料に忠実であった。この傾向はこれら以外の章段からも窺える。一六二段は「御息所」、一六三段は「后の宮」、一六六段は「女のよしある車」とあるが、これらと共通する伊勢物語一〇〇、五一、九九段では「やむごとなき人」、「人」、「女」とそれぞれなっていて「二条后云々」とは記されていない。ただ、大和物語一六四段とそれに共通する伊勢物語五二段はともに「人」となっているが、この場合、大和物語は前述したように章段の移行を考慮しこのようにしたものと思われる。

以上みてきたように大和物語の作者は伊勢物語をもとにしつつ、ある章段では後撰集の歌を加え、伊勢物語とは趣きの異なる世界を構築していった。そして、その資料操作の面をみるに、人物表記ひとつをとり上げてみても、大和物語の作者は資料に忠実であったし、それは大和物語の歌の作者や創

作にも及んでいた。

十一

大和物語における在中将関係の章段は一六四段を除けば、伊勢物語と同じではなく、異同の大小はあるものなにかの手が加えられていた。このようにいわば個々の章段は意図的になされていたわけだが、はたして大和物語の作者は在中将関係章段全体にわたってひとつの構想を抱いていたのであろうか。この点につき菊地靖彦氏は

作者ははじめから全体を見通した構想で話を進めているのではない。やはり一段ずつ、思いつくままに積み重ねていくのである。⁽⁶¹⁾

と述べておられる。おおむねこれと同じような考えに落ちついているのが現状のようである。でも在中将関係の章段は大和物語の中で最も多く、七章段に及んでいること。しかもこれらは大和物語の中で創作意識の濃い後半に見られること。さらに今まで考察してきたように各章段の多くが虚構という意識で創作されていたこと等を考え合わせると、たとえそれは理路整然とまではいなくとも、そこには何らかの意図なるものを見い出せないだろうか。

大和物語の作者は在中将関係の最初の章段である一六〇段を一五九段の連想から配置したわけである。そうして以下の各章段において在中将の女性遍歴ということで、おのおのの女性を登場させていったものと思われる。雨海博洋氏はこの一六〇段に対応するのが一六五段であると考えておられる。即ち、氏は

一六五段の弁の御息所との歌語りは在中将の晩年の情話となる。即ち二条后との恋の後、中将の最後を飾る恋であったのだろう。では、在中将と二条后との恋の語りの前に位置する一六〇段の染殿内侍との恋は二条后より先にあった恋と見てよいであろう。⁽⁶²⁾

と述べられている。私も一六〇段に対応するのが一六五段という考えそのものには賛成であるが、どうもその理由がこの文章から判然としない。あるいは在中将関係の章段が時間的な配列をしているとみて、その境目にあることからこのように考えておられるのであろうか。たとえ時間的になされているとしても、一六六段をどうとらえるかが問題として残る。それは臨終の後にあるからである。

そこで、一六〇段に対応するのが一六五段という考えに賛成とする理由を述べておく。兩章段とも他の章段（他の人物との関係に入る）の前にあつて、話の展開をスムーズにし、いわば導入的な働きをしていると考えられる。これは冒頭の人物配置の面からも言える。それを記してみると、

- 染殿内侍 在中将（一六〇段）
- ×在中将 二条后（一六一一段）
- 弁御息所 在中将（一六五段）

×在中将 女（一六六段）

のようになり、一六〇段、一六五段において人物の登場順序をみると、在中将は二番目になっている。それが次の章段になると、冒頭に在中将が登場している。このことは前述した一五九段と一六〇段についても言えたことで、いわばしり取り式になっている。これは章段間の展開を考えてなされたと言つてよい。このように章段の移行に関して、大和物語の作者はかなり気を配つたようである。当然このことは作者の創作ということにも関連してこよう。それと一六五段に関して言えば、これは構成上、一六一段と同じような働きをしているのではなからうか。というのは一六二、一六三段と一六六段は前者が一六一段を、後者が一六五段をそれぞれ中心にしてその後配置されていると思われるからである。一六一段は二条后と在中将との若き日と晩年になってからの話であり、その後により以前の二人の話の章段を置いているし、また一六五段は在中将の辞世のことが記され、人生での区切りでもある。ただ、こう考えられるにしても一六三段をみると、「後の宮」と表記されており、また一六一段にもそうあることから、なぜそうしたかが問題になってこよう。一六二、一六三段はいずれも女性の表記の上で問題を生じているわけだが、大和物語一六二、一六三段の女性の表記は伊勢物語において「あるやんごとなき人」、「人」となっており、違いがみられる。大和物語のほうが具体的な表記になっている。ひとつにこれは一六一段に二条后が登場しているから、それに関連づけようという意識の現れであろう。もし、その相手が単なる女性であったならば、伊勢物語の表記のままでもよかつたはずである。もちろん一六二、一六三、一六四段は前述の如く「忘れ草」、「菊」、「あやめ」という、植物に関連させているのだから、それ以上にこのように改作していることは前の章段を考慮しているからに外なるまい。そして「後の宮」、「御息所」とも作者は二条后を指すという意識でもって表記したとみてよからう。⁽⁶³⁾ それにしても一六二段では「御息所」とし、また一六三段では「後の宮」と区別しているのは何か意図があつたのであろうか。無意識のうちになされたと考えるのには何となく釈然としないのである。というのは各章段があればほど意図的になされ、かつ前述の如く伊勢物語と人物表記が異なっていることを思うと、なおさらそう考えざるを得ない。この点につき、吉山裕樹氏は

一六二段で「御息所」時代、一六三段で「後の宮」時代と、入内後、二人の交流は連続と続いた事を描こうとしているのである。⁽⁶⁴⁾

と述べておられる。はたしてそうであらうか。

先程も述べたように、彼女に関した話は在中将関係の章段の中で三章段に及び、これらの中でも一番多く登場している。こうしたのは二条后と在中

将の結びつきをそれだけ強く受け止めていたからこそ書き留めたのであろう。一六一段は二条後の入内前と入内後の話で、彼女が「ただ人」の時から「女御」の頃までのことが記されている。そして、この章段の最後に「むかしをおぼしいでて、をかしとおぼしける」とあって、往時を忍ぶ二条後の気持が記されている。それに続く一六二段は冒頭が「又」で始まり、その内容は彼女が「内にさぶらふ時」のことで、その時の地位は「御息所」とあるから少なくとも一六三段の「後の宮」の時期よりも以前の話にしている。これらは往時を忍ぶということ、一六一段の末尾の本文を受け、「春宮の女御」に関連づけているのであろう。そうして次の一六三段では後の宮としており、これは結局、一六一段の「二条后」に戻るわけであり、同時に彼女の現在の地位でもある。これは前段の御息所から昇進しているわけである。このように彼女の地位からみても各章段の展開をスムーズにしている。そして、一六四段から在中将与別の人物との話が始まる。ここで相手の女性を単に「人」としたのは章段の移行を考慮していることは前述した通りである。以上のように、在中将与二条後の華やかさを描きながら、その一方では章段間のスムーズな展開を考えており、用意周到な作者の配慮を窺い知ることができると思うのである。このことは一六五段についても言える。

一六五段は在中将の臨終についての話である。伊勢物語ではそのことが最後の章段にあるが、大和物語の在中将関係の章段では異なり、この後に一六六段が続く。思うに大和物語の作者が在中将の臨終の章段の後に一六六段を配置したのは、先程の一六二段の場合とほぼ同じようなことを考えてそうしたのではないか。つまり一六五段は在中将の晩年のことを描いており、その後の一六六段はそれをもとにしての、いわば回想的な章段と見えよう。ただ一六六段の場合、在中将の相手を見ると、一六二、一六三段のようにより具体的な人物を配置して一六五段と統一されているわけではない。しかも伊勢物語では「むかひに立たりける車に女の顔の下簾よりほのかに見えければ」とあるところを大和物語では「女、のよしある車のもとにたちぬ。下簾のはざまより、この女の顔いとよくみてけり。物などいひかはしけり。」と部分的に改めている。大和物語では伊勢物語に比べ女性に関していかにも由緒ありげに、しかも詳しく描写している。また在中将についても、いかにも色好みらしく大胆な表現にしている。大和物語の作者は一六二、一六三段の「御息所」、「後の宮」と同じように、かなり高貴な女性を設定している。ともかくここでも場所そのものよりも人物本位を目指した大和物語作者の一面を窺い知ることができよう。

一六四段は前述したように話の展開をスムーズにするために置かれた章段であると言われている。これと同じような働きをしているのはこの章段以外にも存在するようだ。一六七段がそれではないかと思われる。一六六段を最後に在中将関係の章段は終わるのであるが、先程の一五九段から一六〇段へ移行する場合、展開の上で配慮の跡がみられたように、在中将関係の章段から他の章段へ移る場合も当然そのことが考えられよう。これはすでにみてきたように、在中将関係の章段においてその構成に関しかなり配慮していることを思えばなおさらのことである。

さて一六七段では男と女が、その後の一六八段は良少将がそれぞれ登場している。一六八段には小野小町も登場し、良少将と彼女は在中将と同じく六歌仙に数えられている。このようにこの周辺には当代の一流歌人が登場している。もしそのことで関連させようとするならば、なにも無名の一六七段など必要でなく、一六六段を一六八段に直接続けてしまってもよかつたはずである。いわばそれに反してまで一六七段をここに持つて来たのはどのような理由によるものであろうか。この章段は著名な章段でないこともあつてか、古注ではそのことについてふれていない。また現代の注釈書でもほとんど言つてよいくらい取り上げられていない。そんな中にあつて高橋正治氏は

一五九段、一六〇段、一六七段は男が異女するということの連想によつて生まれた段章であるが、異女した男のわがままを主題としており、第二部の主題に合致しないので副次的章段と見るべきである。⁽⁶⁶⁾

と述べておられる。氏のお考えは在中将関係の章段を後世に付加されたものであるということが前提になつてゐる。もしこれらの章段が付加されたとするならば、付加した者はその前後の章段との関連等を考慮してそうしたとみるべきではないか。というのは何度も述べたように在中将関係の章段は用意周到な構成がなされているからである。もし、そうされたとするならば、はたしてこのようなことが可能であらうか。それと氏は一六八段との関係についてはふれていないが、それについても考えるべきである。

一方、これとは別にひとつの出来上つた作品としての観点から柿本奨氏は次のように述べておられる。

前段（稿者注一六六段のこと）の歌が「長雨」を物名として詠み込むと見えて来、そのため雨中の騎射見物になつてはいけないから、歌のやりとりを雨の翌朝にした、そのような伝えを前段は記す、と受け取る事ができよう。即ち、前段の歌を物名歌と据え、その詠歌法の似かよいで本段を続けたと見る。⁽⁶⁶⁾

そして次の一六八段との関連についても、一六七段の物名が一六八段の前半にある「人心」の歌の「うしみつ」に関連づけたとみておられる。このように詠歌法や物名歌との関連でとらえているわけである。大和物語一六六段が伊勢物語九九段をもとにして創作されたものであることはかつて述べた通りで、ここでは伊勢物語よりも話の幅を持たせている。ただ伊勢物語九九段もそうだが、「ながめ」をはたして物名ととつてよいものか。地文に「ながめ」とでもあれば話は別である。ともかくここはその要素は少ないと思われる。柿本氏は「そのため雨中の云々」と言われているが、はたしてそこまで拡大して考えてよいか疑問である。

次に雨海博洋氏は

この段（稿者注一六七段のこと）は無名章段の一つで、固有名詞章段群の間にあつて、場面転換の役を果す。ここでは、一六〇〜一六六段の在中

将章段から、一六八段の良少将章段に転換させる位置にある。⁽⁶⁸⁾

と述べておられる。氏の言われるように場面の転換を考慮し登場人物を「男女」とした章段を持つてきたということには注目すべきである。ただこの章段の次から別の話が始まることからして、前述の如く一五九段が一六〇段と関連があつたようにここでも前後の章段と何らかの関連がみられまいか。一六七段は次のような内容である。

男、女の衣を借り着て、今の妻のがりいきで、さらに見えず。この衣をみな着破りて、返しをこすとて、それに雉、雁、鴨をくはへておこす。人の国にいたづらに見えける物どもなりけり。さりける時に、女、かくいひやりける。

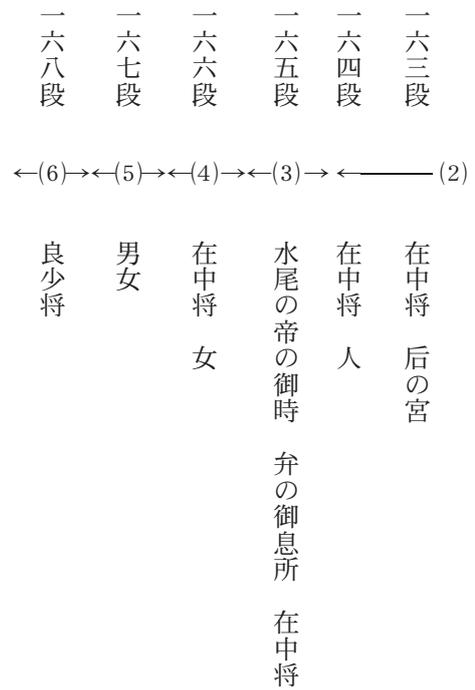
いやなきじ人にならせるかり衣わが身に触ればうきかもぞつく

この章段と一六六段とは事がうまく運ばないということでも共通している。次の一六八段は前述したように在中将と同じく六歌仙の一人である良少将の話。内容は良少将が寝過ごしてしまい、相手の女性に会えなかつた話で、これも一六六、一六七段と同じように事がうまく運ばなかつたということになる。しかもこれら三章段でその原因を作っているのはすべて男のほうである。それと一六七段には「衣」の表記があり、これは一六八段にもみられること⁽⁶⁹⁾から、偶然の一致ということではなく関連させているのであろう。このように内容の上で関連づけ、さらに語句の上でも関連づけて、一六六段と一六八段の中継ぎをしているのが一六七段ということになろう。それと、ここには「人の国にはいたづら云々」とあるから、その舞台は都ということになる。事実、この周辺には都の話が集められているから、そのことを考えて配置したものとと思われる。なお、これはまったくの臆測の域を出ないものだが、先程、一六七段と一六四段は構成上、同じ働きをしていると述べたが、「雉をなむやりける」(一六四段)、「雉、雁、鴨」(一六七段)という共通した語がみられる。一六七段は現在のところ、その典拠が明らかでない。もし、この章段が作者によって創作されたとするならば一六四段と同じような働きというものを考慮し、それにヒントを得たのかもしれない。

先程も一部ふれたが、在中将関係の章段は人物の面からもスムーズな展開をしているように思われる。今、各章段の登場人物を登場順に従って列挙してみると次のようになる。

| | | |
|------|------|--------|
| 一五九段 | 染殿内侍 | 能有大臣 |
| 一六〇段 | 染殿后 | 在中将 |
| 一六一段 | 在中将 | 二条后 |
| 一六二段 | 在中将 | 御息所の御方 |

←(1)→



一五九段、一六七、一六八段についても記したのは在中将関係の章段を考える場合、今までの考察からして、密接な関係があると思われるからである。それとこれらを六つに区分してみたが、これは人物配置に注目しこうしたわけである。このような配置は無意識のうちになされたわけではなく、少なくとも大和物語の作者はひとつの方針を貫いているように思われる。即ち各章段での人物配置の展開に注目してみると、おおよそ次のようなことが言えるのではないかと思う。各区分の最後の章段（一章段の場合も同様）において登場順で二番目、もしくは三番目に在中将がくると次の区分の最初に在中将が登場している。これに対し彼以外の人物だと次の区分の最初の章段の、はじめに彼以外の人物が登場している。例えば展開の上でも同じ働きをしていると思われる一六四段と一六七段をみてみよう。一六四段では、次の一六五段の二番目に在中将がでてくるから、二番目に人を登場させている。また、一六七段の場合は、次の一六八段が在中将でなくて別人になっており、そのために「男女」の話をもってきたのである。この現象を偶然の一致と考えられようか。思うに、いわばしり取り式に人物を配置することにより、章段間の展開——人物上での唐突をなくすというところで——をスムーズにするために意図的になされたものとみてよからう。ともあれ、大和物語の作者はつとめて章段間の展開に注意を払ったようである。ところで、大和物語において同一人物が連続する場合、最初と最後には人名が記されているが、その間にある章段の冒頭は「同じ云々」と省略されているのが普通である。しかし、在中将に関してはみてきたようにそうなっていない。先学はこの現象をどのように考えているのであろうか。まず高橋正治氏は

大和物語では大体同一人物が主人公とする章段の続く時は、あとの章段は「おなじ人」と受けるのが普通である。ここでは一六五段以外はすべて

「在中将」ではじまるのは、「昔男ありけり」などの本文を、そのまま置き換えたような形跡とも見られる。⁽⁷⁰⁾と述べておられる。次いで雨海博洋氏は

「在中将」を「おなじ男」「おなじ人」などでは代用がきかないほど、その呼称は親しまれ、浸透していったとみるべきであろう。⁽⁷¹⁾と述べられている。さらに菊地靖彦氏は次のように述べておられる。

在中将章段では、それぞれの章段ごとに「在中将」とあらためて呼び出して始まっている。例えば「おなじ男」といったいい方をしない。それは一段一段が独立して形成されて付加されていったことを思わせる。すくなくとも全体的な構想があったとは思われない。⁽⁷²⁾

このようにその見方については異なっている。高橋氏は置き換えたのではないかと言われているが、もしそれならば一六五段をどう処理するかが問題となつてこよう。というのは、前述したように私見によると一六五段は虚構化された章段であり、単に置き換えただけなら、そのままこも冒頭を「在中将」としてもよかつたはずだからである。しかし、そうしていいことは、むしろ別の意図があつたからと考えるべきではないか。雨海氏は代用がきかないからと考えておられるが、単純に考えて前後の章段に「在中将」とあれば、だれのことかわかるはずである。したがって「在中将」「同じ云々」とあつてもそれほど変わるものでもあるまい。また菊地氏のごとく一つ一つ独立して付加され、全体的な構想はないことであるが、前述した如く章段間の関連も行き届いており全体の構想は見い出せる。

以上のようなことから諸先学の考えには納得しかねるところがある。ではこの現象をいかに考えたらよいのか。これら以外に考えが可能であろうか。大和物語の後半は前半に比べ、整然とした構成意識を窺うことができる。⁽⁷³⁾もしそこにこれと類似した章段を検討することにより、何らかのヒントが得られるのではないか。これに該当するところとして、一五〇段から一五三段までの「ならの帝」の章段があげられる。これらの章段をみるに、確かに大和物語の前半にみられる章段と同じような書式をとっている。しかし、「ならの帝」の章段の内容を検討してみると、中には虚構の跡を窺うことができる。⁽⁷⁴⁾これは前半の同じような書式をとっている章段にはみられないことであり、いわば形の上で前半の章段と同じにしているにすぎないのである。これに対して在中将関係の章段は、その大半が「在中将云々」で始まるが、その内容において虚構のところもみられた。両者は冒頭の人物表記の点で異なるものの、虚構化ということ共通している。このように、在中将関係の章段において前半にみられるような書式を用いなかった。換言すれば、それから一步抜け出して別の方法をとつたということになる。してみると在中将関係の章段で冒頭をそろえたのは意図的な考えがあつたことである。

大和物語の中で、他の作品、とりわけ物語に素材を求めているのは、伊勢物語と共通している在中将関係の章段である。しかもこれらの章段は連続

しており、今、大和物語と共通している伊勢物語各章段の冒頭の部分を再度、記してみると、

三段 むかしおとこありけり↓在中将

五一段 むかしおとこ↓在中将

七六段 昔、二条後の……近衛司にさぶらひける翁↓在中将

九九段 むかし、右近の馬場の……中将なりける男↓在中将

一〇〇段 むかし、おとこ、後涼殿の↓在中将

一二五段 むかし、おとこ↓水の尾の帝の御時、左大弁のむすめ……帝御ぐしおろしたまひてひとりいますかりけるを在中将

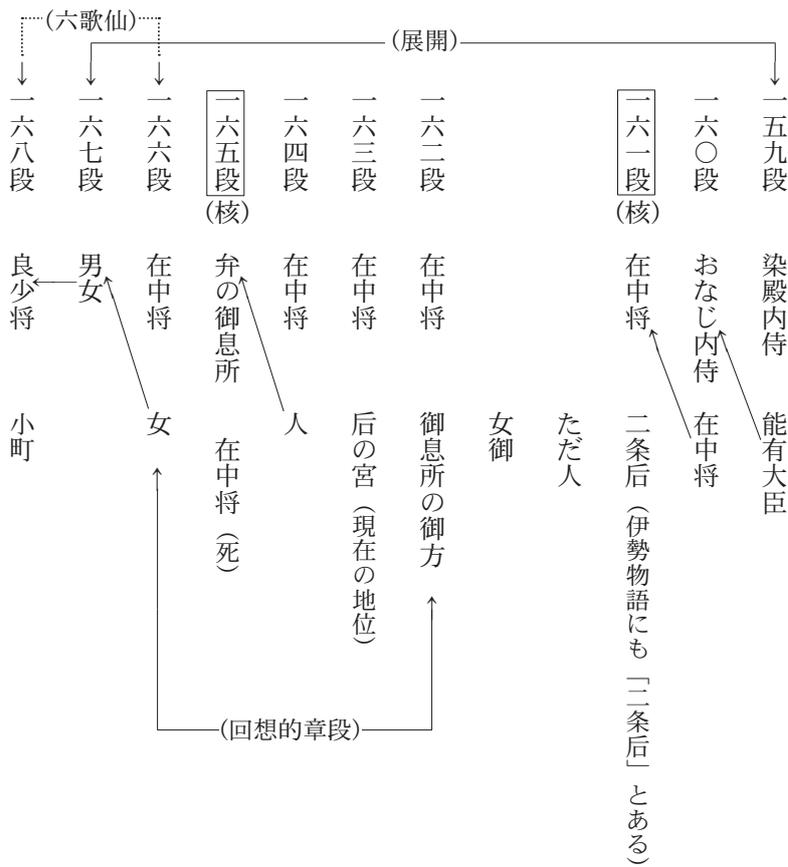
のようになる。これを見ると高橋氏の言われるごとく、おおむね「むかし、おとこ」を「在中将」に置き換えたようになっていいる。しかし、すべてがそうなのかと言うと、例えば伊勢物語七六段、九九段は「むかし、おとこ」となっていない。その代り前者は後のほうに「近衛司にさぶらひける翁」とあるし、また後者も「中将なりける男云々」とあつて、これらはいずれも在中将を暗示させている。したがって、それを置き換えたとき、とれないこともない。しかし七六、九九段はこう処理できるが、一六五段はそうはいかない。この章段は「水の尾の帝云々」で始まり、伊勢物語に比べ、地文がかなり長文にわたっており、他の章段と異にしている。——高橋氏も疑問を指摘されているが⁽⁷⁵⁾——ただ、この一六五段は前述したように在中将関係の章段の中で大段的に改作を加えていた。それは「つれづれと」の歌はもちろんのこと地文にも及んでいた。それゆえ「在中将」と後の方に記されているが、冒頭を他の章段と異にしているのはその一端を物語つていよう。

以上みてきたように大和物語の作者は、つとめて伊勢物語とは違った面を描こうとしていた。それは言うならば対抗意識であり、そうするために創作性を示したのである。伊勢物語というと、私達はすでに「昔、男」とか「昔、男ありけり」ということを思い浮かべる。大和物語の作者はそれに対抗してこのような表記をとったのではないか。それは在中将を顕示させるためのひとつの方法でもあつた。置き換えたと言え、そういうことになるが、こうした要因をさらに突き詰めると、そこには創作意識が深く関与していると思われる。こう考えると、高橋氏の考えと抵触することになるが、そこに大和物語作者の創作意識というものを少しでも認めておきたいのである。ともあれ冒頭の表記ひとつをとってみても、そこには作者の意図が深く関わっていることを指摘しておきたい。

在中将関係の章段を通して大和物語の創作方法について考察してきた。大和物語の作者は在中将を登場させるにあたり、まず念頭に浮かんだのは伊勢物語であった。在中将とさえば天下の色好みとして著名であり、それを反映して、その相手は二条后をはじめ染殿内侍、弁御息所等にまで及んでいた。しかもこれらの人物は各章段の展開を考慮して配置されていた。ただ、これらの中には伊勢物語に見られない章段や歌があったが、それらをよく調べてみると、実は勅撰集や前後の章段をもとにして創作されたものであった。それと在中将関係の章段について、特に注目しておきたいことは一六四段を除くと、すべて伊勢物語のままではないということである。両者の相違は大小に及んでいるが、このことは少なくとも大和物語の作者が伊勢物語とは別な面を描こうとしたために外ならない。これは創作意識の現れであり、同時に伊勢物語への対抗意識でもあった。一六四段は伊勢物語とほとんど変わらなかったが、こうしたのは構成を考えてのことであり、これも創作という枠の中で考えるべきである。

このように大和物語の作者は伊勢物語をもとに新しい方法を試みたわけである。確かにその努力は認められるものの、その内容は決してすぐれたものとは言えない。それと先程、伊勢物語に対抗云々と言ったが、対抗ということには疑問を持つ人がいよう。それは伊勢物語全章段に比べ、大和物語に取られた章段はひじょうに少なく、はたしてこういう表現が妥当かということである。思うにこれは大和物語後半の構成という枠の中で、在中将関係章段の位置を考えるべきではないか。もう少し詳しく言うならば、前述の如く大和物語の後半は、私見によるとある程度、整然とした構成がなされており、この現象は前半ではみることのできないものである。このようなことから、創作意識を持ち、かつ全体の構成をも考えてとり入れられたのが在中将関係の章段ということになる。

ところで、前にも少しふれたが、高橋正治氏はこの在中将関係の章段について、もとは一六〇段から直接一六七段へ続いており、その間にある在中将関係の章段は後に付加されたものという考えを提出されている。これが例の、『袋草紙』にみえる「大和物語 和歌二百七十首此中連歌三首但本々不同」本に關連させているわけである。もし、高橋氏の考えが妥当であるならば、それを付加した者は、私が今まで述べたようなことを念頭に置き、各々の章段を構成していったことになる。しかしながら、大和物語で虚構と思われる章段は大和物語にある歌をもとにして歌を作っていた。それは語句のみならず、修辞や文法的な面でも参考にしていた。さらに何度も言うように大和物語の後半は整然とした構成になっていた。これらの現象は偶然の結果と言えようか。大和物語の作者と付加した人物とが同一人か、もしくはその内容に通じていた人でなければ、とうてい考えられないことである。このようなこ



とはまずもって無理なことで、ここは同一人物の手になるからこそこのような現象がみられるのではないか。してみると、やはり大和物語の作者によって在中将関係の章段は書き継がれていったと考えるのが妥当のようである。ともあれ、在中将関係の章段が後になって付加されたということにはなお検討する余地が残されているように思う。

それにしても在中将関係の章段は、大和物語全体からするとあまりにも少ない。したがって、その中での結論であるから、当然、説得力に欠けることは否めない。でも、今までの考察結果からして個々の面からの考察も大和物語の生成を考える上で無視できない。むしろそれを累積していつこそ、大和物語全体の性格、引いては構想が見い出せるのではないかと念願している。それが今後の自分の方向である。

最後に今まで述べたことを図式化すると次のようになる。

注(1) 「上代文学史稿」案(二)〔日本文学史研究〕4号 昭和25年)

- (2) 諸説あるが、ここでは一四一段以降をそのように考えていく。詳しくは拙稿『大和物語』小考—前半と後半の分け方—〔解釈〕32巻9号 昭和61年9月 後に『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録)を参照のこと。本書第三章第二節。
- (3) ⑦阿部秋生氏「伊勢物語と大和物語との関係—物語る部分の關係に就いて—」〔国文学解釈と鑑賞〕3巻4号 昭和13年4月)
 ①藤田徳太郎氏「大和物語と伊勢物語」〔古典研究〕4巻1号 昭和14年1月 後に『日本小説史論』(至文堂 昭和14年11月 覆刻版 クレス出版 平成11年9月)に再録)
- ②吉川理吉氏「平安末期をさかひとする伊勢物語の説」(龍谷大学「国文学論叢」7輯 昭和35年1月)
 ⑤高橋正治氏「大和物語の原初形態」〔大和物語 塙選書〕塙書房 昭和37年10月)
 ④福井貞助氏「伊勢御編作説と大和物語」〔伊勢物語生成論〕有精堂出版 昭和40年4月 増補版 パルトス社 昭和60年1月)
 ⑥今井源衛氏「大和物語評釈・四十九 染殿内侍」〔国文学〕11巻10号 昭和41年9月 後に『大和物語評釈 下巻』(笠間書院 平成12年2月)に再録。「大和物語評釈・五十一〜五十二」も同様)
- ⑧今井源衛氏「大和物語評釈・五十 在中将」〔国文学〕11巻11号 昭和41年10月)
 ⑨今井源衛氏「大和物語評釈・五十一 忘れ草」〔国文学〕11巻13号 昭和41年11月)
 ⑩今井源衛氏「大和物語評釈・五十二 在中将(続)」〔国文学〕11巻14号 昭和41年12月)
 ③片桐洋一氏「在中将集と雅平本業平集の比較考察」〔伊勢物語の研究〔研究篇〕〕明治書院 昭和43年2月)
 ④山田清市氏「大和物語における伊勢物語関係章段について」〔平安朝文学研究〕9号 昭和38年7月 後に『伊勢物語の成立と伝本の研究』(桜楓社 昭和47年4月)に再録)
- ⑤佐藤高明氏「後撰集と大和物語との關係についての考察」〔後撰和歌集の研究〕日本學術振興會 昭和45年2月)
 ②妹尾好信氏『大和物語』在中将関連章段群の成立と『伊勢物語』〔広島大学文学部紀要〕45巻 昭和61年2月 後に『国文学年次別論文集 中古 2 昭和61年』(朋文出版 昭和62年11月)、『平安朝歌物語の研究〔大和物語篇〕』(笠間書院 平成12年10月)にそれぞれ再録)
- ⑦秋沢瓦氏『大和物語』在中将章段群の考察—『二条后』の描かれ方をめぐって—〔國學院大學大学院紀要—文学研究科—〕21輯 平成2年3月 後に『国文学年次別論文集 中古 2 平成2年』(朋文出版 平成3年11月)、『源氏物語の準拠と諸相』(おうふう 平成19年3月)にそれぞれ再録)

- ㉞ 『大和物語』 在中將諸段の構成―第一六〇―一六六段―（『論究日本文学』 53号 平成2年5月 後に『大和物語の考証的研究』（和泉書院 平成2年10月）に再録）
- ㉟ 山本登朗氏「右近の馬場の恋―伊勢物語の主人公像―」（『恋のかたち 日本文学の恋愛像』（和泉書院 平成8年12月） 後に『伊勢物語 文体・主題・享受』（笠間書院 平成13年5月）に再録）
- ㊱ 猪平直人氏『大和物語』 在中將章段考―「在中將」像の再検討―（『文芸研究』 151集 平成13年3月）
- ㊲ 拙稿「大和物語における在原業平関係章段について」（『解釈』 24巻4号 昭和53年4月）。本書第二章第一節。
- ㊳ 拙稿『古今』『伊勢』『大和』―ひとつの共通話をめぐって―（『平安文学研究』 73輯 昭和60年6月 後に『国文学年次別論文集 中古1 昭和60年』（朋文出版 昭和61年10月）に再録。㊴㊵とも『大和物語の研究』に再録。本書第二章第三節。
- ㊴ 雨海博洋氏「大和物語の伊勢物語意識―大和物語一六〇・一六五段を中心とした考察―」（『論叢王朝文学』 笠間書院 昭和53年12月 後に『物語文学の史的論考』（桜楓社 平成3年10月）に再録）
- ㊵ 菊地靖彦氏『大和物語』 在中將章段をめぐって（『二関工業高等専門学校研究紀要』 17号 昭和57年12月 後に『伊勢物語・大和物語論攷』（鼎書房 平成12年9月）に再録）
- ㊶ 吉山裕樹氏「大和物語における在中將・二条后説話と伊勢物語」（『広島大学文学部紀要』 39巻 昭和54年12月）
- ただし、後撰集をみると返し歌の方は初句に異同がある。天福本「あき萩を」、中院本「秋萩を」となっている。
- (6) 注(3)の㊶に同じ。
- (7) 注(3)の㊷に同じ。
- (8) 注(3)の㊸に同じ。
- (9) 注(3)の㊹に同じ。
- (10) 注(5)の㊺に同じ。
- (11) 注(3)の㊻に同じ。
- (12) 注(5)の㊼に同じ。
- (13) 注(4)の㊽、㊾に同じ。
- (14) 菊地靖彦氏『大和物語』の『後撰集』歌章段をめぐって（『米沢国語国文』 14号 昭和62年4月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和62年』（朋

- 文出版 昭和63年11月)、『伊勢物語・大和物語論攷』にそれぞれ再録)
- (15) 注(5)の㉞に同じ。
- (16) 「むかし、おほやけ思してつかうたまふ女の、色ゆるされたるありけり。大御息所とていすがりけるとこなりけり。」「この女のいとこの御息所、女をばまかでさせて」
- (17) 注(5)の㉟に同じ。
- (18) 『大和物語諸注集成』(雨海博洋氏編著 桜楓社 昭和58年5月)に拠る。以下も同様。
- (19) 注(3)の㉡に同じ。
- (20) 注(3)の㉢に同じ。
- (21) 因に『新編国歌大観 第一巻 勅撰集編 索引』(『新編国歌大観』編集委員会 角川書店 昭和58年8月)によって、初句に用いられているのを検索してみると次のようである。
- おほぬさのいくせになかす 新後拾 281
- つひによるせは 新千載 307
- よるせはかみの 新後拾遺 819
- よるせもしらぬ 新統古 1189
- おほぬさは 新統古 1188
- おほぬさや 新拾遺 307
- おほぬさと 新葉 773
- (22) 森本茂氏『伊勢物語全釈』(大学堂書店 昭和48年7月)
- (23) 拙稿「大和物語における虚構の方法——四一・二四二・二五二段を例にして——」(『中古文学』30号 昭和57年10月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和57年』(朋文出版 昭和58年11月)、『大和物語の研究』にそれぞれ再録)。本書第二章第二節。
- (24) 注(4)の㉠に同じ。
- (25) 「梁殿内侍考」(『二松学舎大学東洋学研究所集刊』8集 昭和53年3月 後に『大和物語の人々』(笠間書院 昭和54年3月)、『物語文学の史的論考』

にそれぞれ再録)

- (26) 武蔵野書院 昭和56年2月。
- (27) 大木恵美子氏「大和物語における「かくて」の考察」(『二松学舎大学人文論叢』9輯 昭和51年4月)、糸井通浩氏『大和物語』の文章―その「なりけり」表現と歌語り―(『愛媛国文研究』29号 昭和54年12月 後に『語り』言説の研究(『和泉書院』平成30年1月)に再録) 注(22)に同じ。
- (28) 注(22)に同じ。
- (29) 注(3)の㊦に同じ。
- (30) 注(4)の㊦に同じ。
- (31) 注(23)に同じ。
- (32) 「大和物語評釈・五十二 在中将(続)」後に『大和物語評釈 下巻』に再録、『日本古典文学全集大和物語』
- (33) 『大和物語鈔』
- (34) 鈴木知太郎氏「在中将集の成立について」(『文学』4巻1号 昭和11年1月 後に『平安時代文学論叢』(笠間書院 昭和43年1月)に再録)。この反論として片桐洋一氏の「在中将集成立存疑―藤原定家の王朝文学研究―」(『国語国文』26巻2号 昭和32年2月 後に『伊勢物語の研究(研究篇)』(明治書院 昭和43年2月)に再録)がある。私も部分的にふれ、鈴木説の妥当性を指摘した(注(4)の㊦に同じ)。
- (35) 注(4)の㊦に同じ。
- (36) 注(3)の㊦に同じ。
- (37) 注(3)の㊦に同じ。
- (38) 注(5)の㊦に同じ。
- (39) 注(4)の㊦に同じ。
- (40) 高橋亨氏「歌物語はなぜ一時期の所産でしかなかったのか」(『国文学』29巻14号 昭和59年11月) 注(4)の㊦に同じ。
- (41) 注(4)の㊦に同じ。
- (42) 注(3)の㊦に同じ。
- (43) 『大和物語鈔』、『冠注大和物語』

- (44) 注(3)の㊦、㊧に同じ。
- (45) 注(5)のウに同じ。
- (46) 『伊勢物語全釈』（大学堂書店 昭和48年7月）
- (47) 福井貞助氏も『日本古典文学全集伊勢物語』の頭注において、「裏に、自分と后との語らいのことをこめているとも解される。それゆえ、「心にも」以下の評が加わる。」と述べておられる。
- (48) 注(3)の①に同じ。
- (49) 注(3)の㊦に同じ。
- (50) 片桐洋一氏 『鑑賞^{第5巻}日本古典文学 伊勢物語・大和物語』（角川書店 昭和50年11月）
- (51) 注(3)の㊦に同じ。
- (52) 注(4)の㊦に同じ。
- (53) 注(3)の㊦に同じ。
- (54) 「忘れ草を」からとするか、「忍ぶ草を」からとするか、二つの説がある。
- (55) 注(5)の①に同じ。
- (56) 松田武夫氏 『古今集の構造に関する研究』（風間書房 昭和40年9月）
- (57) 注(3)の㊦に同じ。
- (58) 注(3)の㊦に同じ。
- (59) 『土佐日記』歌物語存疑—『伊勢物語』と『大和物語』の視座から—（『月刊国語教育』7巻2号 昭和62年5月）
- (60) 注(3)の㊦に同じ。
- (61) 注(5)の①に同じ。
- (62) 注(5)の㊦に同じ。
- (63) 注(3)の㊦に同じ。
- (64) 注(5)のウに同じ。

- (65) 高橋正治氏「大和物語の構成」(『大和物語 塙選書』)
- (66) 注(25)に同じ。
- (67) 注(4)の㉞に同じ。
- (68) 『大和物語 有精堂校注叢書』(有精堂出版 昭和63年3月)
- (69) 「装束」、「花の衣」、「苔の衣」、「御衣」と言った語がみられる。
- (70) 注(3)の㉞に同じ。
- (71) 注(5)の㉞に同じ。
- (72) 注(5)の㉞に同じ。
- (73) 拙稿「大和物語の構成について―後半の章段を考察の対象として―」(『語文』39輯 昭和49年3月 後に『大和物語の研究』に再録)。本書第三章第四節。
- (74) 拙稿「大和物語の創作方法―いわゆる「ならの帝」の章段をめぐって―」(『平安文学研究』76輯 昭和61年12月 後に『国文学年次別論文集 中古2
昭和61年』(朋文出版 昭和62年11月)、『大和物語の研究』にそれぞれ再録)。本書第二章第七節。
- (75) 注(3)の㉞に同じ。

第十節 大和物語の創作方法

—『後撰集』との関わり的一面—

『大和物語』には『後撰集』との共通歌がある。ただ、共通歌とはいうものの両者の間には語句の異同のみられる場合が多く、引いては贈歌や返歌の有無、詠歌事情の相違などもみられる。これらは『大和物語』の成立事情を探る上で見逃すことができない。事実、これらについては先学により言及されてきた。早く益田勝実氏は歌語りという概念を提唱され、『大和物語』はまさにそれを素材にしたものと言われている。⁽¹⁾ 南波浩氏も『大和物語』の素材について考察し、益田氏の説を継承されている。⁽²⁾ これらの考えを発展させたのが妹尾好信氏の論である。氏は『大和物語』の作者は『後撰集』撰集の際に和歌所に集められた歌語り資料の中から、その時採用されなかった異伝資料や、『後撰集』に載せなかった他の数々の歌語りを選んで『大和物語』製作の中心的な素材にしたのではないかと述べられている。⁽³⁾ また、柿本奨氏は歌語りをそのまま「事実として記述する姿勢」を保持していたとされ、『後撰集』との違いを異伝として処理されている。⁽⁴⁾

次に、両者の間に共通した資料を介する考えがある。阿部俊子氏は「両者に親子関係はないが、きわめて近い資料によって、それぞれの立場で記載されたもの」と考えておられる。⁽⁵⁾ 中田武司氏も両者の間に私家集などの資料を介してそれぞれの成立を考えておられる。⁽⁶⁾ さらに、これらの考えから一步発展させて『大和物語』の虚構性を認める考えがある。菊地靖彦氏は両者が共通する全章段にわたって考察され、虚構の可能性を指摘しておられる。⁽⁷⁾ また、今井源衛氏もところどころにおいて、『大和物語』の作為性を認めておられる。⁽⁸⁾ 私もこれに近い考えを述べたことがある。⁽⁹⁾

以上、きわめて粗雑に俯瞰してきたが、言えることは、『大和物語』の生成は複雑で、『大和物語』と『後撰集』との関係ひとつをみても様々な考え

があるということである。ここではそれを考えるひとつの手だてとして、少し視点を変え、五つの章段を対象にして考えてみたいと思う。

—

まず和歌の有無に關した章段のひとつに五七段がある。両者を比較してみると次のようになる。

| 『後撰集』 | 『大和物語』 |
|---|---|
| <p>むかしおなじ所に宮つかへし侍りしける女の、を ところにつきて人のくにおちるたりけるをききつ けて、心ありける人なれば、いひつかはしける をちこちの人めまれなる山里に家るせんとは思ひき や君 返し 身をうしと人しれぬ世を尋ねこし雲のやへ立つ山に やはあらぬ</p> | <p>近江の介平の中興が、むすめをいたうかしづ きけるを、親なくてなりてのち、とかくはふれて、 人の国のはかなき所にすみけるを、あはれがりて、 兼盛がよみておこせたりける。 をちこちの人目まれなる山里に家居せむとはお もひきや君 とよみておこせたりければ、見て返りこともせで、 よよとぞ泣きける。女もいみじうらうある人なり けり。</p> |

(注) 本文は『後撰集』が『新編国歌大観』に、『大和物語』が『新編日本古典文学全集』にそれぞれ拠っている。以下も同様。

『大和物語』は返歌を持っていないが、『後撰集』はそれを持っていて贈答歌の形を成している。高橋正治氏は「後撰集の中には短い歌物語で人々に語り馴らされた作り物語から歌をとり入れてある場合があるのである」と述べておられる。⁽¹⁰⁾ また、同氏の編著になる『新編日本古典文学全集大和物語』の頭注には「この歌が物語化されたとき、返し歌がつけられ、『後撰集』に入れられたのであろう」と記されている。

一方、今井源衛氏は『後撰集』における兼盛歌の特殊性を認めながらも『大和物語』の作為性を指摘しておられる。⁽¹²⁾ この立場だと、『大和物語』の作者はこれが兼盛と中興がむすめの詠作だとわかつていたことになる。菊地靖彦氏は『後撰集』の「よみ人しらず」歌を兼盛に仮託したのではないか

とされ、今井氏とは微妙な違いがある。また、猪平直人氏は『大和物語』五六〜五八段に『伊勢物語』の影響があるとされ、そこに虚構性を指摘しておられる⁽¹³⁾。さらに柿本燹氏は同じ源泉に発する異伝と考えておられる。

『後撰集』における兼盛歌の取り扱いについては特異なものがあるようである⁽¹⁴⁾。それはともかくとして、『大和物語』の作為性は単に歌語りとか、源泉云々だけでは処理できまい。ここから『大和物語』作者の創作性を窺うことができよう。そして、ここは『後撰集』から『大和物語』へと考えるのが妥当ではなからうか。

そこで、まず返歌の有無がいかなる意味を持つのかを考えねばなるまい。例えば今井源衛氏は両者を詳細に比較し、『後撰集』では「同情を拒否し、鋭く相手を切りかえして女のはげしい気性」が『大和物語』では「運命に弄れるか弱い女の哀話と化している」と言われる。けだし卓見というべきで、返歌を削除することでのような効果をねらっているであろう。しかも、女の感情は兼盛の歌をもらって後、「よゝとぞ泣きける」と高揚している。四段においても『大和物語』は返歌を持っていない。その代わりここでも「これを見てなむ、かぎりなく悲しくてなむ泣きける」とある。四段の作為性については指摘されており⁽¹⁵⁾、心情の高揚や結末に同じ表現を用いていることは偶然とは言えまい。『大和物語』作者にとつて共通した、ひとつの方針めいたものがあつたというべきであろう。

次に両者の詞書と地文に目を転じてみよう。『大和物語』のほうの詳細である。これは作品の性格から言っても当然のことのだが、そこには創作性を垣間見られるように思う。『大和物語』には「あはれがり」という語がある。これは『大和物語』において多用されており、この作品の基調を成す語である⁽¹⁶⁾。ここはその一面の現れであろう。また、「をちこちの」の歌の前後をみると、「よみておこせたりける」、「とよみておこせたりければ」という重複表現がある。『大和物語』にはこのような表現が多い。これは『大和物語』作者の文章力に起因しているであろう。さらに『大和物語』には「い」というかしづきけるを、親なくなりて」という本文がある。これは中興のむすめについて記したところで、彼女はこの外、一五、一〇六段にも登場している。このうち、後にも述べる一〇五段は『後撰集』と共通している。しかもこの章段の段末に「この女はになくかしづきて、みこたち、上達部よばひたまへど、帝に奉らむとではせざりけれど、このこといできにければ、親も見ずなりにけり」とあって、ここにも「かしづく」、「親」という語がみられる。これは偶然ということではなく、先程の四、五七段と同じく考えるべきであろう。ともあれ、創作する上で章段間でも気配りをした一面を知ることができよう。また、段末の「女もいみじうある人なりけり」という本文の中に「らうあり」という語がある。この語は『大和物語』において五例みられる。今、五七段を除いて、その箇所を抜き出してみると次のようになる。

(1) 筑紫にありける檜垣の御といひけるは、いとらうあり、をかしくて（二二六段）

- (2) 承香殿はいとちかきほどになむありける、らうあり、をかしき人々ありと、(一三九段)
 (3) 玉淵はいとらうありて、歌などよくよみき。(二四六段)
 (4) かくて世にもらうあるものにおぼえ、仕うまつる帝、かぎりなくおぼされてあるほどに、(二六八段)

(注) 傍点は稿者。以下も同様。

このうち注目したいのは(1)、(2)、(4)である。それはこれらの本文を含む章段には『後撰集』との共通歌がみられるからである。ただ一六八段については後考を待ちたいが、一三九段は後述するように虚構化が推測できるし、また一二六段も先学が指摘されているようにかなり脚色されていると言⁽¹⁷⁾う。そしてこの二箇所においても「らうあり」なる語は『後撰集』の詞書には見られず(一六八段も同様)、作者が意図的に使用した感がある。

それにしても兼盛と中興のむすめの結びつきはどのようなことに起因するのであろうか。『後撰集』では「よみ人しらず」とあるが、実は二人の贈答歌であることを作者が知っていたのか、それとも『後撰集』の「よみ人しらず」歌を兼盛と中興がむすめに仮託したのかについては今の段階では何とも言えない。

以上の如く五七段を分析した限りにおいて、『大和物語』の作者は『後撰集』をもとに創作したと考えるのが妥当であろう。

三

『大和物語』と『後撰集』とが共通しているものの歌の配置の異なるところがある。九二段がその例である。

| 『後撰集』 | 『大和物語』 |
|---|---|
| <p>みくしげどの別当にとしをへていひわたり侍りけるを、えあはずして、そのとしのしはずのつごもりの日つかはしける 藤原敦忠朝臣 物思ふとすぐる月日もしらぬまにことしはけふにはてぬとかきく(冬)</p> | <p>故権中納言、左のおほいどのの君をよばひたまうける年の十二月のつごもりに、 もの思ふと月日のゆくも知らぬまに今年は今日にはてぬとか聞く となむありける。また、かくなむ</p> |

| | |
|--|--|
| <p>しのびてみくしげどののべたうにあひかたらふ とききて、ちちの左大臣のせいし侍りければ あつただの朝臣 如何してかく思ふてふ事をだに人づてならで君にか たらん(恋五)</p> <p>みくしげどにはじめてつかはしける あつただの朝臣 けふそへにくれざらめやはとおもへどもたへぬは人 の心なりけり(恋四)</p> | <p>いかにしてかく思ふてふことをだに人づてなら で君に聞かせむ かくいひひて、つひにあひにける朝に、 今日そへに暮れざらめやと思へどもたへぬは 人の心なりけり</p> |
|--|--|

(注) 『後撰集』の(冬)、(恋四)、(恋五)は稿者が付したものである。

『大和物語』にある三首すべてが『後撰集』と共通している⁽¹⁸⁾。しかし、その詞書や地文をみると時間的にはかなり異なっている。この章段について菊地靖彦氏は『大和物語』はその三首を一括して一つの段にとりこむ。そして三首の配列順に工夫をこらして、恋の初めから成就までを示す⁽¹⁹⁾と言われ、『大和物語』の物語的構想を指摘しておられる。もとより妥当な考えと言えよう。

そこで驥尾に付して別な視点から少し述べてみたい。『大和物語』作者がここで描きたかったのは御匣殿の別当と敦忠のことにあつたことは言うまでもない。そのために『後撰集』に素材を求めたのである。しかし、『後撰集』においてこれらの歌は冬、恋四、恋五と分散しているため、作者はこれらを一章段にまとめようと考えたわけである。二人の恋にまつわる話であるから、菊地靖彦氏が述べられたようにその初めから成就までを描こうとしたのである。確かに『大和物語』ではそのようなになっている。だが、『後撰集』をみるとどうか。恋の展開からすると、「けふそへに」の歌、「物思ふと」の歌、「如何して」の歌の順序になるのが、それぞれの詞書からみて妥当と言えよう。これを『大和物語』のような配置にしたわけである。当然、そこには創作意識を窺うことができるが、それを『大和物語』の作者は「けふそへに」の歌に集中させたと云ってよからう。この歌は『後撰集』の詞書に「みくしげどにはじめてつかはしける」とあり、また『大和物語』の地文に「かくいひひて、つひにあひにける朝に」とあって、時間的にみて両者は正反対になっている。しかし、そうはいうものの、心情的にみると両者ともはじめての行為であり心情的には同じと言ってよい。作者はそれ

を見逃さなかつたのである。これはひとつの虚構意識の現れと言つてよからう。

「物思ふと」の歌と「如何して」の歌をみると異同がある。即ち、「すぐる月日」↓「月日のゆく」、「君にかたらん」↓「君に聞かせむ」となっている。前者をみると、『大和物語』は月を擬人化し、地文に融合させ物語的にしている。また、後者をみると、『後撰集』は詞書に「あひかたらふ」とあるからそれを受けて「君にかたらん」と詠んだわけである。『大和物語』には『後撰集』のような本文がない。この前にある「もの思ふと」の歌に「はてぬとか聞く」とあるから、それを受けて改めたものか。しかし「けふそへに」の歌には異同がない。この歌は前述の如く普遍性を有しており、あつた場に配置するにあつて好都合な歌であつたと言えよう。

九二段は地文が少なく、『後撰集』の詞書と変わらない。ここは和歌を操作することにより、ひとつの創作を試みたのであろう。

四

先程の例でもわかるように和歌の異同にまで『大和物語』の作者は注意を払っていた。そこで和歌の異同に関して顕著な例をみていきたい。九三段をとり上げてみよう。

| 『後撰集』 | 『大和物語』 |
|---|--|
| <p>西四条の齋宮まだみこにものし給ひし時、心ざしありておもふ事侍りけるあひだに、齋宮にさだまりたまひにければ、そのあくるあしたにさか木の枝にさしてさしおかせ侍りける</p> <p style="text-align: center;">あつただの朝臣</p> <p>伊勢の海のちひろのはまにひろふとも今は何てふかひかあるべき</p> | <p>これもおなじ中納言、齋宮のみこを年ごろよばひたてまつりたまうて、今日明日あひなむとしけるほどに、伊勢の齋宮の御占にあひたまひにけり。「いふかひなくくちをし」と思ひたまうけり。さてよみて奉りたまひける。</p> <p>伊勢の海の千尋の浜にひろふとも今はかひなくおもほゆるかな となむありける。</p> |

この章段は先程の九二段の続きで、同じ主人公が登場する。しかも「よばふ」、「あふ」なる語は九二、九三段にみられる。これらは『後撰集』にはな

いことから『大和物語』の作者が意図的に用いたものと思われる。両者を読んで気付くことは菊地靖彦氏が指摘されているように『大和物語』は漸層的な手法を用い切迫した状況を創り出している。

さて、両者の歌をみると、下句に異同がある。『後撰集』は「何てふかひかあるべき」とあり、『大和物語』は「かひなくおもほゆるかな」となっている。⁽¹⁹⁾『後撰集』の「何てふかひかあるべき」を、『大和物語』は「かひなく」という一語に凝縮させている。そして「おもほゆるかな」という心情表現を加えている。これはこの面の強化を図っており、これも物語化の一環と言えよう。ただ、和歌の修辭ということでは、『後撰集』の方が自然である。それは「伊勢の海のちひろのはま」に対応させて「かひ」（貝）と表現していることにより理解できよう。これを『大和物語』は改めることで先程のような効果をねらったものと思われる。

ともあれ、和歌の中のひとつの異同も『大和物語』の作者の創作意識を探る上で無視できない。そして、『大和物語』の地文や和歌の異同は『後撰集』があつてこそ作為性であることが理解できるのである。

五

ひとつの章段の中に『後撰集』だけでなく、『拾遺集』との共通歌を有する章段がある。例えば一三九段は次のようである。

| 『後撰集』 『拾遺集』 | 『大和物語』 |
|-------------|---|
| | <p>先帝の御時に、承香殿の御息所の御曹司に、中納言の君といふ人さぶらひけり。それを、故兵部卿の宮、わか男にて、一の宮と聞えて、色好みたまひけるころ、承香殿はいとちかきほどになむありける。らうあり、をかしき人々ありと、聞きたまうて、ものなどのたまひかはしけり。さりけるころほひ、この中納言の君に、しのびて寝たまひそめてけり。と</p> |

| | |
|--|---|
| <p>延喜の御時、承香殿女御の方なりける女に、もとよしのみこまかりかよひ侍りける、たえてのちいひつかはしける 承香殿中納言 人をとくあくた河てふつのくにの名にはたがはぬ物にぞありける わすれがたになり侍りけるをとこにつかはしける 承香殿中納言 こぬ人を松のえにふる白雪のきえこそかへれくゆる思ひに</p> | <p>きどきおはしましてのち、この宮、をさをさとひたまはざりけり。さるころ、女のもとよりみて奉りける。人をとくあくた川てふ津の国のなにはたがはぬ君にぞありける かくて物も食はで、泣く泣く病になりて恋ひたてまつりける。かの承香殿の前の松に雪の降りかかりけるを祈りて、かくなむ聞えたてまつりける。 来ぬ人をまつの葉にふる白雪の消えこそかへれ あはぬ思ひに とてなむ、「ゆめこの雪おとすな」と、使にいひてなむ、奉りける。</p> |
|--|---|

(注) 『拾遺集』の本文は『新編国歌大観』に拠る。

「人をとく」の歌は『拾遺集』に、「来ぬ人を」の歌は『後撰集』にそれぞれみられるものである。両者の詞書を見ると、「たえてのちいひつかはしける」、「わすれがたになり侍りける」とあつて時間的な前後が明らかでない。また、『大和物語』では元良親王と承香殿中納言のことが記されているが、『後撰集』の場合、「こぬ人を」の歌はだれに贈ったのか明らかでない。

一方、『大和物語』はかなり詳しく記している。これは『後撰集』と『拾遺集』をもとに付加したような本文である。しかも、ここでは時間的な展開をしている。とりわけ、後半の冒頭に「かくて」を用いていることは注意してよからう。「かくて」という語は『大和物語』の作者が創作する上で多用した語であり、⁽²⁰⁾ここが意図的になされていることを暗示していよう。

この外にも両者を見ると多くの異同がみられる。まず和歌の異同であるが、「人をとく」の歌において「物」と「君」の異同がある。前者の場合、「物」とは芥川のことであり、後者の場合、「君」とは元良親王を示している。そして「なには」には掛詞を用いており、『拾遺集』は「難波」を、『大和物語』は「名には」をそれぞれの意味の上で生かすべきであろう。ただ、『大和物語』の方が「君」とあることから直接的に表現されている。また、「来ぬ人を」の歌についてであるが、「え」(枝)と「葉」はそれほど問題でない。問題になるのは「くゆる」と「あはぬ」である。前者は歌の中に「消え」と

あり、それに対応させて「くゆる」と表現したものと思われる。後者は物語の展開を考えて、「くゆる」というような状況になく、元良親王は来てく
れず、そのために中納言の君は病になってしまったという気持ち「あはぬ」という表現になったのであろう。

和歌の異同ひとつを見ても物語の創作の上で重要な働きを担っていると見える。これは前に述べたことと共通する。もはやこの現象は『大和物語』
の作者が意図的にしたとしか考えられないのである。そこで、この考えを補強するために、もう少しこの章段から気づいたことを述べておきたい。そ
のひとつは、この章段に「らうあり」という語がみられることである。この語については前にも述べたが、『大和物語』が『後撰集』をもとに創作さ
れているのではないかと考えられる章段にみられる。これは偶然とは考えられない。もうひとつは重複表現がみられることである。即ち、「かくなむ
聞えたてまつりける」、「ゆめこの雪おとすな」と、使に「いひてなむ、奉りける」がその箇所である。ここから『大和物語』作者の文章力を垣間見る
ことができよう。ただ、これらの現象はけつしてすぐれているとは言えないが、『大和物語』作者の、物語創作するにあたっての努力の一面を知るこ
とができよう。

一三九段も先程の九二段のように、いわば寄せ集めてひとつの章段を成したと考えることができよう。ただ、中田武司氏は一三九段について、『元
良親王御集』を第一資料とし、それに『拾遺集』を加えて構成したものと考えておられ、⁽²¹⁾『後撰集』を除いている。しかし、先程の考察からもわかる
ように『後撰集』との関わりは否定できないし、それに『拾遺集』を加えて一章段を成したと考えるとよからう。そして『拾遺集』の関与は『大和物語』
の成立を考える上でひとつの示唆を与えることになるかもしれない。

六

『大和物語』と『後撰集』が共通しているものの、歌の詠まれた時点で隔たりのみられるところがある。例えば一〇五段は次のようである。

| 『後撰集』 | 『大和物語』 |
|-------|--|
| | <p>中興の近江の介のむすめ、ものけにわづらひて、 浄藏大徳を驗者にしけるほどに、人とかくいひけり。 なほしもはたあらざりけり。しのびてあり経て、人</p> |

浄蔵くらまの山へなんいるといへりければ

平なかきがむすめ

すみぞめのくらまの山にいる人はたどるたどるも帰
りきななん

ものいひなどもうたてあり。なほ世にあり経じと
思ひてうせにけり。鞍馬といふ所にこもりていみじ
う行ひをり。さすがにいと恋しうおぼえけり。京を
思ひやりつつ、よろづのこといとあはれにおぼえて
行ひけり。泣く泣くうちふして、かたはらを見れば
文なむ見えける。なぞの文ぞと、思ひてとりて見れ
ば、このわが思ふ人の文なり。書けることは、

すみぞめのくらまの山に入る人はたどるたどる
もかへり来ななむ

と書けり。いとあやしく、たれしておこせつらむと
思ひをり。もて来べきたよりもおぼえず、いとあや
しかりければ、またひとりまどひ来にけり。かくて
山に入りにけり。さておこせたりける。

からくして思ひわする恋しさをうたて鳴きつ
るうぐひすの声

返し、

さても君わすれけりかしうぐひすの鳴くをりの
みや思ひいづべき

となむいへりける。また、浄蔵大徳、

わがためにつらき人をばおきながらなにの罪な
き世をや恨みむ

ともいひけり。この女はになくかしづきて、みこた
ち、上達部よばひたまへど、帝に奉らむとてあはせ
ざりけれど、このこといできにければ、親も見ずな
りにけり。

中興のむすめの詠んだ「すみぞめの」の歌は、『後撰集』の場合、浄蔵が山に入る前に詠んだのに対して、『大和物語』の場合、浄蔵が山に入ってから詠んだものである。この現象について伝承されて行く過程で異同が生じたという考えがある。⁽²⁾このような考えも可能であろうが、それよりもむしろ私は『大和物語』作者が創作したのではないかと考えている。

『大和物語』をみると、いくつかの特色を見い出すことができる。そのひとつは、浄蔵の心情が徐々に高揚し、「すみぞめの」の歌でそれはピークに達していることである。これは漸層法的な叙述効果をねらったのであろう。このような方法は前述した四段をはじめ他の章段においてもみられた。ふたつめは重複表現が多くみられることである。主な箇所を抜出してみると、「なほしも」「なほ世に」「あり経て」「あり経じ」「いとあやししく」「いとあやしかりければ」「書けることは」「と書けり」「恋しうおぼえけり」「いとあはれにおぼえて」「たよりもおぼえず」などがその例である。この現象については前にも指摘したが、『大和物語』作者の文章力によることが確かなものとなろう。

それにしても浄蔵が手紙を見つける場面が何とも不自然である。もちろんこうした場合に超自然的な意味を強調されている方もいる。⁽²⁾また、菊地靖彦氏も和歌のもつ不可思議な力を指摘しておられる。確かにこのような考えも可能であろう。ただ、視点を変えて別の考えもできるのではないか。本文に即して考えると、手紙の存在の不可思議を多少なりとも解消するために、「すみぞめの」の歌の後に「いとあやししく、たれしておこせつらむと思ひをり。もて来べきたよりもおぼえず、いとあやしかりければ、またひとりまどひ来にけり」という本文を記したのではなからうか。この箇所をみると、先程もふれたが、「いとあやししく、たれしておこせつらむ」と「もて来べきたよりもおぼえず、いとあやしかりければ」は同じことを言っているにすぎない。これは重複した表現であると同時に手紙の存在の不可思議さを強調している。

先程述べたように、『大和物語』において「すみぞめの」の歌は浄蔵が山に入った後に、中興のむすめが詠んだふうになっている。こうしたのは物語の展開を考えたからではなかったか。浄蔵が山に入る前に中興のむすめが詠んだのでは手紙の不可思議な存在は表現しにくいだろうし、「すみぞめの」の歌の後の本文もそれほど効果的なものとならなかったであろう。もはや、これは歌語りされて変化が生じたのではなく、『大和物語』の作者が物語の展開を考えて意図的にしたと考えるべきであろう。

この章段の地文をみると、「あはれに」「かくて」という語がある。これらは『後撰集』の詞書にみえない。この二つの語は前述したように『大和物語』にあつて特異な語である。この二語の存在によつてもこの章段が意図的になされていることを暗示していよう。それにしても「かくて」から後半に入るわけだが、何となく唐突である。それになるまでの詳しい説明がなされるべきである。やはりここら辺りにも『大和物語』作者の文章力があらわれているのであろう。なお、後半の三首についてはその素材が何にもとづくのか、今の段階では何も言えない。

ともあれ、一〇五段は『後撰集』にある「すみぞめの」の歌をもとにして時間的な幅を持たせ、物語的展開をさせたものとみてよからう。

七

『大和物語』と『後撰集』との関わりを考えるために、両者の共通する章段について考えてきた。ただ、共通する全章段にわたっていないので、早急な結論を慎むべきであるが、ここで対象として来た章段を通してひとつの傾向を探ることはできたと思う。

ここで強調しておきたいことは、『大和物語』には作為性が見られ、しかもそれは『後撰集』があつてこそ可能であるということである。和歌や地文に見られる異同も実は各章段の生成を考える上で重要な働きを担っており、見逃すことのできない事実である。

『大和物語』と『後撰集』との共通歌は、『大和物語』全体から見るとそんなに多いわけではないが、『大和物語』の創作性を探る上で貴重な資料と言えよう。『大和物語』は歌語りの集成であるとか、あるいは『大和物語』と『後撰集』の関係を考える場合、両者の間にいわゆる第三の資料の存在が言われてきた。しかし、細部を検討してみると、一概にそれだけではすまされない面があるのである。本稿では覚書ふうには、その一面を探ってきたにすぎない。

- 注(1) 「上代文学史稿」案(二)、「日本文学史研究」4号、昭和25年)、「歌語りの世界」(「季刊国文」4号、昭和28年3月)。また、難波喜造氏も「大和物語の素材―私家集との関係―」(「日本文学史研究」13号、昭和26年8月)という論考で益田氏と同様の考えを述べておられる。
- (2) 『日本古典全書大和物語』(朝日新聞社 昭和36年4月)
- (3) 『大和物語』成立試論―『後撰集』との関わりを通して―(「国文学攷」95号、昭和57年9月 後に『平安朝歌物語の研究(大和物語篇)』(笠間書院 平成10年10月)に再録)
- (4) 『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院 昭和56年2月)。以下、特に断わらない限り、引用は本書に拠っている。
- (5) 『校本大和物語とその研究』(三省堂 昭和29年6月 増補版 昭和45年10月)
- (6) 『王朝歌物語の研究と新資料』(桜楓社 昭和46年11月)
- (7) 『大和物語』の『後撰集』歌章段をめぐって(「米沢国語国文」14号、昭和62年4月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和62年』(朋文出版 昭和63年11月)、『伊勢物語・大和物語論攷』(鼎書房 平成12年9月)にそれぞれ再録)。以下の引用は特に断わらない限り、この論文に拠っている。

- (8) 「大和物語評釈・一〇六十七」(『国文学』連載、昭和36年8月〜昭和43年9月)、「大和物語評釈(六十八回)」(梅光女学院大学「日本文学研究」25号、平成元年11月)後に『大和物語評釈 上巻』(笠間書院 平成11年3月)、『大和物語評釈 下巻』(笠間書院 平成12年2月)にそれぞれ再録。
- (9) 「大和物語における在原業平関係章段について」(『解釈』24巻4号、昭和53年4月 後に『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録) 本書第二章第一節。
- (10) 「後撰集における平兼盛の歌」(『清泉女子大学紀要』9号、昭和37年3月) 小学館、平成6年12月。
- (11) 「大和物語評釈・六 兼盛の王(上)」(『国文学』7巻2号、昭和37年2月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録)
- (12) 『大和物語』における章段形成—兼盛章段前後と『伊勢物語』—(『文芸研究』131集、平成4年9月)
- (13) 藤岡忠美氏「後撰集の構造—その二、平兼盛と「梨壺の五人」とのちがいについて—」(北海道大学「国語国文研究」12号、昭和34年2月 後に『平安和歌史論—三代集時代の基調—』(桜楓社 昭和41年2月)に再録)
- (14) 今井源衛氏「大和物語評釈・二 朱ながらやは」(『国文学』6巻12号、昭和36年10月 後に『大和物語評釈 上巻』に再録)
- (15) 南波浩氏「大和物語の特質」(『日本古典全書大和物語』朝日新聞社 昭和36年10月)、拙稿「心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに」考—『大和物語』第四百四十一段—(『語文』78輯、平成2年11月 後に『大和物語の研究』に再録)。本書第四章第二節。
- (16) 今井源衛氏「大和物語評釈・三二 檜垣の御(上)」(『国文学』10巻1号、昭和40年1月 後に『大和物語評釈 上巻』に再録)
- (17) 「如何にして」の歌は『拾遺集』にも共通している。初句「いかてかは」(定家本、北野天満宮本)、「いかてなを」(堀河宰相具世筆本)、五句「きみにしらせむ」(定家本、堀河宰相具世筆本、北野天満宮本)の異同がある。この異同を見ても『大和物語』は『後撰集』に近い。
- (18) 『後撰集』の諸本にあたって見たところ、異同は見られない。
- (19) 糸井通浩氏「『大和物語』の文章—その「なりけり」表現と歌語り—」(『愛媛国文研究』29号、昭和54年12月 後に『語り』言説の研究』(和泉書院 平成30年1月)に再録)
- (20) 高橋正治氏「新編日本古典文学全集大和物語」(小学館 平成6年12月)の頭注。
- (21) 注(6)に同じ。
- (22) 今井源衛氏「大和物語評釈・二二 中興が女(上)」(『国文学』9巻4号、昭和39年3月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録)

第三章 大和物語の構成

第一節 『大和物語』小考

—構成意識をめぐっての一試論—

—

伊勢物語がある男のほぼ一代記風の体裁をとっているのに対し、同じジャンルに属しながら大和物語には多くの人々が登場し、統一性に欠ける。そういうこともあつてか、大和物語の構成については、従来ほとんど言つてよいほどふれられなかったが、近年その方面の研究も徐々になされるようになった。その先駆は高橋正治氏で、氏独特の論を展開されている。⁽¹⁾その後、柿本獎氏をはじめ、諸氏の論が発表された。⁽²⁾私もこの物語の後半を対象にして考えたことがある。⁽⁴⁾

さて、本稿では先学のお考えに導かれて、細部の点、即ち四七段から五三段までと、八九段を取り上げて、そこにみられる構成意識を探ってみたいと思う。前者は数章段にわたつての場合であり、また後者は一章段のみの場合である。ただ、両者に共通するのは拾遺集との共通歌を含んでいる点である。このことがどのような意味を持つているのかは興味深い。それにしても、これらの章段は大和物語の前半にあり、そこは歌語り的な色彩の濃い章段が多いようで、はたして構成意識というものを見い出せるかが問題となろう。

—

まず、四七段から五三段までをみていきたい。論述の便宜上、これらの章段を記しておこう。

四七段

陽成院の一条の君

おく山に心をいれてたづねずはふかきもみぢの色を見ましや

四八段

先帝の御時、刑部の君とてさぶらひたまひける更衣の、里にまかりいでたまひて、久しうまゐりたまはざりけるにつかはしける。

大空をわたる春日の影なれやよそにのみしてのどけかるらむ

四九段

おなじ帝、齋院のみこの御もとに、菊につけて、

ゆきて見ぬ人のためにと思はずはたれか折らましわが宿の菊

齋院の御返し、

わが宿に色をりとむる君なくはよそにもきくの花を見ましや

五〇段

かいせん、山にのぼりて、

雲ならで木高き峰にゐるものは憂き世をそむくわが身なりけり

五一段

齋院より内に、

おなじえをわきてしもおく秋なれば光もつらくおもほゆるかな
御返し、

花の色を見ても知りなむ初霜の心わきてはおかじとぞ思ふ

五二段

これも内の御返し。

わたつみのふかき心はおきながらうらみられぬるものにぞありける

五三段

陽成院にありける坂上とほみちといふ男、おなじ院にありける女、「きはることあり」とてあはざりければ、

秋の野をわくらむ鹿もわがごとやしげきはりに音をばなくらむ

(注) 本文は『日本古典文学全集大和物語』に拠る。以下も同様。

そもそもここで四七段から五三段までを取り上げたのは四七、五三段がともに「陽成院云々」で始まっており、しかもこの二章段に挟まれた章段が五〇段を除いて先帝に關したものであり、人物面からみて意図的に配置されたのではないかと思われるからである。事実、先学もその点について注目されている。まず、今井源衛氏は構成面から考察されている。長くなるが、それを引用してみよう。

四十八段より五十二段まで、中間に挟まった五十段以外は、すべて宇多天皇に關する説話である。その章段配列のしかたを見ると、四十八段は、先行の四十六・四十七兩段が男女の恋を扱ったものであり、それと主題を同じくして採られたものであろう。四十九段は恋の主題を離れて、四十八段の宇多天皇という人物の連想を軸として、天皇とその皇女との親子の贈答に転じ、さらに五十段では、親子関係の連想から、すでに二十七段において、親に別れて比叡山に登っていたとあった戒仙の話が持ち出される。続く五十一段は再び宇多天皇と齋院との贈答に戻り、五十二段もまた、天皇の親心の述懐という形でつづき、この一連の章段はまとまっている。⁽⁶⁾

章段の関連を主にしして、具体的に言及されていることは注目されよう。次に雨海博洋氏は人物面から考察され、次のように結論づけておられる。

四七段から五三段にかけては清和・陽成に關する歌語りから成っているとみてよからう。そうみる方が『大和物語』の連鎖的展開といった性格に適合しているとも言えよう。⁽⁷⁾

また、糸井通浩氏は

五十二段はそういう娘への思いを込めた父宇多帝の嘆息となっているのである。「おなじえをわきてしもをく」の「をく」をうけて、「深き心はをきながら」とひびかせている。そして、「うらみられぬモノ」と齋院の境遇というものへの、帝の「モノ」志向があり、その上に、歌の技巧の点でも巧みなことばの文が形成されている。⁽⁸⁾

と述べられ、その上、四八段から五三段までがひとつの「歌語り↓歌物語」を目指していた姿も読み取れることを指摘された。

以上のように、その関連性やそれが何を意味するかについて考察されてきたわけである。⁽⁹⁾ただ、今井、糸井の両氏が対象にされている四八〜五二段のほかにも、雨海氏のように四七、五三段をも含めて考えるべきではないか。その理由は前述の如く、両章段とも「陽成院云々」で始まっているからである。それと、先学のお考えで、関連性ということでは示唆を受けること大なのであるが、このことを踏まえて部分的にどのような意図をもって構成しているのかを探る必要があるのではないか。というのは大和物語において、同一人物の章段が連続する場合、意図的な方法をとっているところがあり、⁽¹⁰⁾これもそれに類似しており、同じようなことが見い出されるのではないかと思うからである。

では、これらの章段はどのような意図をもって構成していったのであろうか。その中で拾遺集との共通歌を含む五二段はどのような働きをしているのか。

四七段から五三段までは、おおむね「会えない」ということで関連し、そこに感情の程度が付随している。まず四七段の場合、二人は初めてなのか、それとも何度か会ったのかははっきりしないが、どうも男は会うことへの真剣さに欠けていたようだ。そのためにも女は男の許へなじる気持ちの歌を詠んだわけである。その歌には「たずねずは」傍点は稿者。以下も同様。とあって、条件的に詠んでいることから、この歌は以下の章段の、いわば導入の働きをしていると言えよう。そうして次の四八段は更衣が里へ帰り、長い間、帝は会うことができず、恨みの気持ちを遠回しに詠んで贈っている。ここは前の四七段より時間的に一歩進んで、現実になつたことが記されている。さらに四九段は四八段と同じ帝の話であるが、ここはその娘の、齋院という境遇からして、会えないということには運命的なものがある。その立場で歌の贈答をしている。即ち、「ゆきて見ぬ」の歌には帝の、齋院への思いやりが、またその返し歌である「わが宿に」の歌には齋院の、帝への感謝の気持ちがそれぞれ詠まれている。こうみてもくると、四七、四八、四九段というのは「会えない」ということに関連させ、こうしないと会えないという、その心掛け、次いで実際に会えなかったこと、さらに運命的に会えなかったことと配置されている。そして、これらの章段は「会えない」ということを記しているものの、そこから生じる感情は穏やかである。

この四九段と次の五〇段はどう関連していようか。今井氏は前記の如く述べておられる。また、高橋正治氏は

四十九段で齋院が帝の御所を思う気持ちを書いて、連想しておかれた段であろう。⁽¹¹⁾

と述べられている。雨海氏は高橋氏の考えに賛同しつつ、賀茂齋院に対して比叡山の僧侶といった対照的関連を指摘されている。⁽¹²⁾ さらに糸井氏は戒仙と賀茂齋院の置かれた共通性を問題にすべきことを説かれている。⁽¹³⁾ 確かに親子ということや、その境遇面で類似している。ただ、ここで注目したいのは五一段も帝と齋院の話であり、これは次の五二段まで続いているということである。このような章段配列からみると、なにも五〇段などを置く必要はなく、この前後が同一人物なのだから、四九段をそのまま五一段に続けてしまってもよかつたはずである。事実、大和物語にはそうなっているとこゝろが多い。しかし、そのようになっていないことは、作者が意図的にそうした可能性を物語っていないよう。そして、そのことと五〇段とを関連づけて論ずるべきではないか。問題はなぜ別人の章段をここに持ってきたかである。こうしたのは作者の構成意識によるのではないか。つまり前述したように、四九段では、まず帝から齋院へ歌を贈り、次いでその返し歌を齋院から帝へ贈っている。それぞれの歌の内容は思いやりと感謝の気持ちである。これに対して五一段をみると、まず齋院から帝へ歌を贈り、次にその返し歌を帝から齋院に贈っている。それぞれの内容はこのような立場に置かれたことへの恨みとその言い訳である。このように四九段と五一段は歌のやりとり、またその内容からみると、対照的になっている。そのため四九段から直ちに五一段へ続けてしまうと唐突なので、四九、五一段のいずれにも共通する—先学の指摘された境遇面⁽¹⁴⁾—章段を置き、両者の中継ぎの働きをしているのである。⁽¹⁵⁾ あくまでも四九段のみではなく、少なくとも五一段をも考慮して五〇段は置かれているということである。すると、この後に続く章段も意図的に配置されていることは当然、予想できよう。

さて、その次の五二段であるが、ここにある「わたつみの」の歌は拾遺集卷十五、恋五にみられ、作者は「よみ人しらず」とある。⁽¹⁶⁾ この五二段というのは大和物語にあつて最も短い章段のひとつである。両者の関係やこの章段が大和物語にあつていかなる意味を持つかについては先学により言及されている。今井源衛氏は次のように述べておられる。

いかにも相手の余裕をもって上から見下している感がふかく、男女の恋を親子のやりとりすりかえるにふさわしい歌詞の変化といえよう。しかし、この歌調の変化が、はたして大和物語の作者自身の手によるものであるのか、あるいは歌語りの過程で種々の異伝が生れ、それに伴う歌詞の変化が生じていったものか、否かは何とも決し難いことである。⁽¹⁷⁾

氏は共通していることに注目されているが、それが何に起因しているかについては断定を避けておられる。また、糸井通浩氏は前記したように、「をく」を「深き心はをきながら」に響かせていることを指摘されている。鋭い読みというべきである。さらに、青木賜鶴子氏はそれぞれ異なる伝承をもとに採録したことを述べておられる。⁽¹⁸⁾ これら先学のお考えには傾聴すべき点が多いが、それ以上にもっと重要なことは今まで述べてきた、四七〜五一段

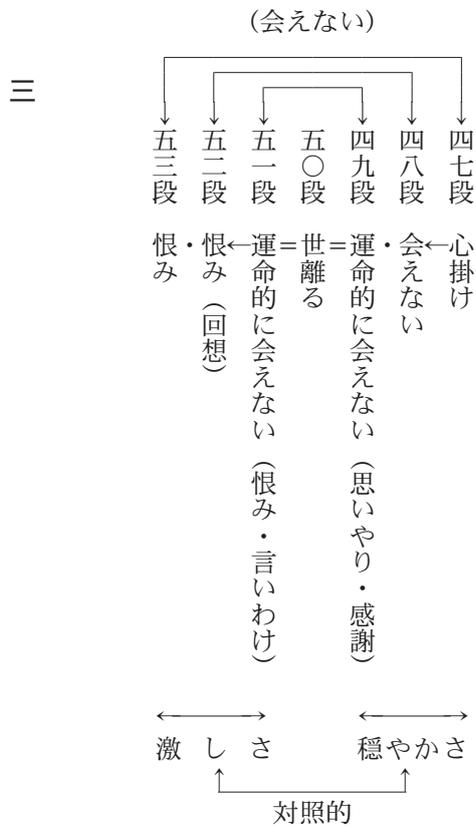
と後述する五三段を含めて、その中でこの章段の位置づけをすべきである。というのは、結論を先に述べることになるが、四七段から五三段までは意図的に構成されており、その構成意識の中でとらえるべきであると考えらるからである。この中で五二段は五一段と同じ帝にして、その内容の上でも関連させている。これは四八、四九段と類似しているが、むしろそうするために五二段を持つてきたのであろう。五二段の「わたつみの」の歌は、四八段でもそうであったようにいかにも帝の歌にふさわしく、大らかな調べであり、齋院に恨まれたことを回想している。これは前段を受けて時間的なことを考慮しているのであろう。

それにしても、五二段にある「わたつみの」の歌は帝の返し歌になっているが、これを前段の齋院への、直接の返し歌にみると、どうも不自然のよう思う。というのは、この歌はどうみても齋院以外の知人か、もしくは彼のお側にいる人への贈歌とみただけがその意味から考えてふさわしいからである。この歌は前に述べたように拾遺集の恋部にあるもので、その関係について、前に記したように青木賜鶴子氏は、拾遺集と大和物語はそれぞれ異なる伝承をもとに採録したのではないかと推測しておられる。はたしてそうであろうか。私は直接、関係あるとみたい。それをあの位置に持つてきたために、先程のような不自然さを生じたのではないか。それというのも、五二段の地文は「これも内の御返し」⁽¹⁹⁾とあるだけで、もう少し工夫さえすれば、このようなことは生じなかったのかもしれない。ここには、大和物語作者の創作力が反映されているとみてよからう。⁽²⁰⁾さらに、拾遺集からここに持つてきたことを決定づける根拠は、この「わたつみの」の歌の異同を調べてみると、大和物語で「おきながら」のところが拾遺集では「有ながら」になっていることである。これは大和物語の改作とみるべきであろう。それは前に記したように糸井通浩氏が「をく」の関連性を指摘されており、そうするため大和物語は改めたのであろう。

最後の五三段は陽成院のもとに仕えていた坂上のとをみちという男に、同じ院に仕えていた女が逢ってくれなかった話。四七段も陽成院に仕えていた一条の君の話で、男と女の違いはあるものの、類似した表現になっている。しかし、両章段は感情の面では対照的になっており、五三段の場合、五二段に「うらみられぬる」とあるから、それを受けて恨みの心情が詠まれていると思われる。さらに、四七段は会えないことを記しているものの、前述したように仮定条件を用い、時間的にみて初期の段階であるのに対して、五三段はかなり経過してからのことである。このような点を考慮し配置したのであろう。

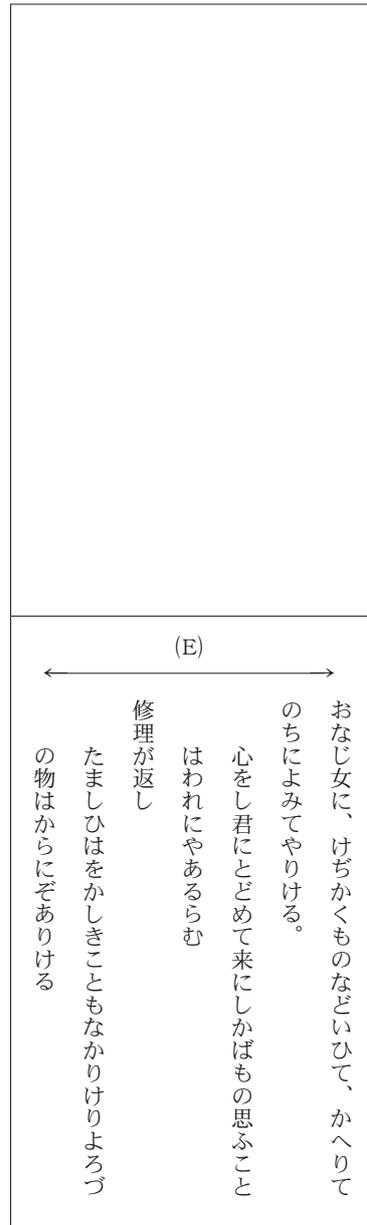
こうみてくると、五一・五二・五三段は運命的に会えないこと、前段の、恨まれたことへの回想、恨みと配置している。なお、先程、感情面での対照性を四九、五一段でふれたが、このことは前後の章段を含めても言えることである。即ち、五〇段を中心にして四七〜四九段と五一〜五三段を比較してみると、前者は穏やかであるのに対し、後者は激しくなっている。

以上の考察から四七く五三段は五〇段を中心にして左右にほぼ同じ人物を配置し、しかも四七、四八段は心情面での時間的経過を考慮し、四八、四九段は人物面で関連させている。これは五一、五二段を人物面で関連させ、五二く五三段が心情面での時間的経過を考慮しており、これまた五〇段を心に同じようにしていることに気づく。でも考えようでは五三、五二、五一段と逆に配置してもよかつたはずである。しかし、そうすると作者の意図した、五〇段を中心にして左右にほぼ同じ人物の章段を配置し、かつ時間的なことをも考慮するということを打ち出せなくなる。また、これらの章段にその前後の章段を含めてその構成を考えたかもしれない。例えば柿本獎氏は四六段と四七段とは「薄き心」で、五三段と五四段とは「恨み、疎まる」でそれぞれ関連していると説かれる⁽²⁾。確かにそのような連想でもって書き継がれていたのであろう。しかし、それ以上に四七段から五三段までは密接な関係があるように思う。それは人物面からも理解できよう。大和物語の作者は連想の如く書き綴っていったわけであるが、その過程で四七段から五三段まではそれを越えて、意図的に構成したものと考えてよからう。そして、その一端を担うために拾遺集にある「わたつみの」の歌を利用したと言ってもよからう。今まで述べたことを図式化すると次のようになる。



次に八九段を取り上げてみよう。この八九段というのは、大和物語にあって一章段の中では歌数が一四七段に次いで多く、その大半は贈答歌の連続である。しかも、この中にも前述したように拾遺集との共通歌がある。そこで、まず両者を比較してみよう。

| | |
|------|--|
| 拾遺集 | <p style="text-align: center;">藏人所にさぶらひける人の氷魚のつかひにまかりて、京に侍りながらおともし侍らざりければ、修理 いかでなほ網代の氷魚にこととはむなによりてかわれをとほぬと</p> |
| 大和物語 | <p style="text-align: center;">(A) ← 修理の君に、右馬の頭すみける時、「方のふたがりければ、方がへにまかるとてなむえまゐり来ぬ」といへりければ、 これならぬことをもおほくたがふれば恨みむ方もなきぞわびしき かくて、右馬の頭いかずなりにけるころ、よみておこせたりける。 いかでなほ網代の氷魚にこととはむなによりてかわれをとほぬと といへりければ、返し、 網代よりほかには氷魚のよるものか知らずは宇治の人に問へかし また、おなじ女に通ひける時、つとめてよんだりける。 (C) ← あけぬとて急ぎもぞする逢坂のきり立ちぬとも人に聞かすな 男、はじめごろよんだりける。 いかにしてわれは消えなむ白露のかへりてのちのものは思はじ 返し、 (D) ← 垣ほなる君が朝顔見てしがなかへりてのちはものや思ふと</p> |



(注) 拾遺集の本文は『拾遺和歌集の研究校本』(片桐洋一氏著 大学堂書店 昭和45年12月)の底本となっている中院通茂筆本に拠り、記号、線、句

読点は稿者が施した。

この章段には修理の君と右馬の頭が登場する。ここにある八首の歌と他の文献との共通歌は(B)にある「いかでなほ」の歌のみが拾遺集と共通している。⁽²²⁾ 残りの歌は今の時点で、大和物語独自のものである。「いかでなほ」の歌について両者を比較し、まず気付くのは登場人物で、男のほうが異なっていることである。即ち、拾遺集では「蔵人所にさぶらひける人」とあるのに対して大和物語では「右馬の頭」とあって一段と高い地位になっている。この右馬の頭という表記は大和物語にあつてここだけにみられるものであるが、具体的にだれのことであるかはわからない。

次に両者において、「いかでなほ」の歌を詠んだいきさつが異なっている。大和物語の場合、「網代の氷魚」が突如として詠まれている。前の地文にそのことについての記述があれば問題ないが、それについてはひとこともふれていない。ともかく大和物語のようだとあまりにも唐突すぎて不自然としか言いようがない。その点、拾遺集をみると、詞書と歌とが一体になっており、高橋正治氏も指摘されているように、なぜ修理の君が網代の氷魚にものを尋ねるのがよく理解できる。

大和物語のこの唐突さについて『大和物語管窺抄』では大和物語の脱文とみている。⁽²⁴⁾ また、柿本奨氏もこの考えを受けて次のように述べておられる。地の文に氷魚に関する記述がないので、脱文であろうと疑う。その如く本段の叙述が不完全だという事になりそうであるが、これは下の句をきかした歌で、上の句はそのためのものにすぎず、その下の句は地文は「行かずなりにける頃」に対応するのであるから、「管窺抄」の如く言うには及ばないのではないか。本段も拾遺集も、それぞれのまま成立し得るのであって、小異にすぎないが、これも異伝に属しよう。⁽²⁵⁾

氏は両者の成立にまで言及されており、興味深いものがある。確かに「行かずなりにける頃」と対応させているのであるが、それにしてもその唐突さ

は避けられない。また、高橋正治氏も両者において作者が異なっていることにふれ、

おそらく、たずねてくれなかつた男を恨むときの女の歌として引用されたり語られていたのであろう。⁽²⁷⁾

と述べておられる。確かに蜻蛉日記をみると、その一部が引用されているが、ここをもしそのように考えると、一首全体が引用されたことになるし、しかも前述の如く登場人物をみると、男のほうが異なっており、修理の君は蔵人所にさぶらひける人と右馬の頭に同じ歌を贈ったことになる。このよ
うな不自然なことはまずあり得ない。このことから考えて、大和物語のほうは後の成立の要素が濃く、ここは拾遺集がもとの姿を残しているとみてよ
かろう。しかし、だからと言って大和物語が拾遺集そのものをもとにしているとは断定できない。それは、拾遺集には大和物語にあるような返し歌が
みられないからである。返し歌を大和物語の作者が創作したならば、拾遺集からとつたとも考えられようが、今、それを証拠たてるものはない。ただ、
少なくとも大和物語には改作の手が加わっていることは言えると思う。

それと(B)の冒頭が「かくて」で始まっているが、この「かくて」という接続詞は大和物語の創作性と深く関わっているようである。⁽²⁸⁾それを拾遺集と
共通する歌の地文に用いていることは創作であることを暗示しているように思う。先程、この地文は唐突であると言ったが、これは作者の創作力に
もよるのではないか。資料のままではなく、少なくとも地文に工夫を凝らせば、あのような結果にはならなかつたであろう。このような現象は先程の
五二段にもみられたことである。ともあれ、「いかでなほ」の歌が意図的になされていることは、この章段全体がそのようになされている可能性を抱
かせよう。

では、いかなる理由でもって「いかでなほ」の歌はここに置かれたのか。それにはまずこの章段全体がどのような構成をしているかを考えていかねば
なるまい。これについては先学により考察されている。今井源衛氏は、話の展開は語句の連想や歌意の類似によつており、そしてこの章段の構成について、
本段の構成はまことに拙い。作者は一首々の和歌と、それにまつわる話の興味にのみとられて、より大きな時間的延長を持ち、しかも統一性を
持った物語的世界を発見することがこの一段ではまだできていなかったのである。⁽²⁹⁾

と述べておられる。また、柿本奨氏も次のように述べておられる。

(A)の「これならぬ」の歌の結句が、『評釈』（稿者注、今井氏の「大和物語評釈・十八 魂はをかしきことも」のこと）に指摘した通り前段の最後の結
句と同様「なきぞわびしき」である所から見ると、その似かよいで(A)を続けたのであろう。(A)が「住みける時」の話であるのに対し、「行かざる
りにける頃」の話として(B)を続けた。(A)は約束が果たせざり行かなかつた話でもあるから、(D)へ流れる要素を(A)は含んでいたのである。(B)の季節は
初冬の交であり、網代、氷魚の風物に因み、地名宇治を点出する。それを受けて(C)は秋露で(B)につながり、「かよひける時」で情況が変り、逢坂

を点出して変化をもたらす。(D)は(C)を受けて違いの「初の頃」の話になり、秋、雪、朝顔でつながる。そこに現れた(「歸りてのちのこと」)を受けて(E)になり、(E)には季節の風物がなく、いつの季節とも分らない。開結を無季とし、中に秋冬の話を三つ並べた組立てである⁽³⁰⁾。引用が長くなってしまうが、氏は先の今井氏よりも一歩進めて構成面から具体的に言及されている。

そこで、両氏の驥尾に付して別の視点から検討を加えてみよう。八九段と八八段との関連は柿本氏が指摘された通りであろう。(A)を見ると、地文に「右馬の頭すみける時」「方のふたがりければ、方たがへにまかるとてなむえまゐり来ぬ云々」とあるから、右馬の頭は修理の君の許に通っていたのであるが、ある日、突然行けなくなった。しかし、修理の君が詠んだ「これならぬ」の歌によると、このようなことは今回だけでなく、以前にも何度かあったようである。このようなわけで、完全に仲が絶えたのではなく、行けないことが多かったであろう。次の(B)は柿本氏が指摘されたように(A)を受けて「いかずなりにけるころ」とあるから、右馬の頭は修理の君の許へ行かなくなってしまった。そのために彼女は「いかでなほ」の歌を贈り、その理由をたずねている。そして、その返し歌で右馬の頭は内心、彼女を愛していることを詠んでいる。このように心情的にみると、完全に仲が絶えたのではない。これは次の(C)への関わりを考慮してのことと思われる。

その(C)であるが、柿本氏は前記したように「秋・露」で前につながることを述べておられる。ただ、氏も指摘されているように(A)と(E)にはそれがない。してみると、季節ということにはそれほどこだわっていなかったのではないか。さらに、氏は(C)で情況の変化をもたらしていると考えておられるが、次の(D)も通っていた頃の話で(C)と同じことになり、単に情況の変化ということだけでは処理できないのではないか。

この(C)から後は(A)、(B)と違って右馬の頭が修理の君の許に通っていた頃の話が記されている。その最初の(C)にある「あけぬとて」の歌については以前にふれたことがあり、右馬の頭は修理の君の許に通ってはいるものの、二人が倦怠期に入ってから話のようである。ただ、(C)については今井氏が(C)の「又」を「かよひける」の修飾語と限定すれば、一旦、疎くなったのが、再び通ひ始めた、との意となつて、(C)は最後に来ることになる。要するに、(D)(E)(C)(A)(B)もしくは(D)(E)(A)(C)の順である。⁽³²⁾

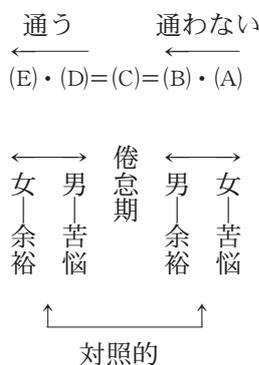
と述べられ、二つの見方があることを指摘されている。ここは(C)の位置とその働きによって解決できるように思う。(D)と(E)は時間的にみて、今井氏の言われる通りで、それは地文の表記からも理解できよう。しかも、(D)の場合、地文のみならず、歌の内容をみても(E)のように男には女の許に心を残してくるような余裕はなく、ただただ夢中でその深刻さがにじみ出ている。このようなことから考えてみても(D)のほうが(E)よりも早い時期とみてよい。(E)の女の歌ではそういう男の深刻さをあたかも一蹴している感じがする。もちろん、この歌をそう解釈するのではなく、この女の苦悩を詠んだともとれないこともない。しかし、考えてみるに、(D)と(E)の時間的な流れからみてこの歌は(D)の「垣ほなる」の歌の延長にあるとみるべきであろう。かくし

て、(D)と(E)をみると、そこには右馬の頭の苦悩がみられるのに対し、修理の君は意外と冷淡で余裕すら感じとれる。そう言えば、(A)と(B)では修理の君が贈歌を、右馬の頭が返歌をしているただし(A)は贈歌のみのに対して、(D)と(E)はこの反対になっている。このことも両者の心情に微妙な影響を与えていよう。

さて、そうすると、(C)の倦怠期ということに絡ませて考えると(同時に(A)、(B)も時間的経過を考えて配置されていると考えて)、時間的にみてこれに近いのは(E)ということになる。つまり、時間的経過からみると、(E)の順になるのが自然と言えよう。それなのに(D)、(E)の順にしたのはどのような理由によるのであろうか。このことは(A)、(B)それに(C)を抜きにして考えることができない。つまり、(A)と(B)は右馬の頭が修理の君の許へ通わなかった頃のこと、また(D)と(E)は右馬の頭が修理の君の許へ通っていた頃のことそれぞれ記されている。しかも、これらは時間的経過を考えて配置されている。このように(C)を中心にして、通わぬ、ということと通う、ということを時間的に配置したわけである。(C)は倦怠期ということ、右馬の頭が修理の君の許に通っていることでは(D)、(E)に通じている。また、(A)、(B)の場合もたとえ一方通行とは言え、完全に二人の仲が絶えたわけではなく、これも心情的には(C)に近い面を持っている。すると(C)は(A)、(B)と(D)、(E)の中継ぎの如き働きをしていると言えよう。これは唐突さをなくすためでもあった。このように(A)、(B)と(D)、(E)とは「通わぬ」と「通う」ということを時間的に配置し、その上、右馬の頭と修理の君の感情面からも対照的にしている。このように意図的な構成をとっていることからみて、(C)は(A)、(B)と(D)、(E)の間にあるのが妥当というべきである。

それにしても、「通わぬ」と「通う」ということを逆に配置するのが自然の成り行きと言えよう。まして、八九段は時間的経過を考慮していれば当然のことと思われる。それなのにこうしたのは先程、柿本奨氏が指摘されたように、八八段の「紀の国のむろのこほりにゆきながら君とふすまのなきぞわびしき」の歌と、八九段の(A)にある「これならぬことをもおほくたがふれば恨みむ方もなきぞわびしき」の歌とにおける結句の似かよいで、連想の如く続けようとしたためであろう。そうして八九段に筆が進み、今度は連想から一歩進んで斬新な構成を試みたのであろう。

この八九段というのは地文が少なく歌が連続していた。歌を含む各グループは雑然と並べられているのではなく、少なくともその展開において意図的に配置されていた。八九段の構成を図式化すると次のようになる。



四

以上、四七く五三段と八九段という、ひとつは数章段を、もうひとつは一章段をそれぞれ対象にして大和物語と拾遺集との共通歌を考慮しつつ、これらの章段をどのように構成していったか、作者の意識を探ってみた。

大和物語五二段の「わたつみの」の歌は拾遺集からとられたと考えられる。しかもそれは単にその章段のみということではなく、少なくとも四七段から五三段までの構成を考えて、あのところに置かれたとみてよい。前記の如く、糸井氏は四八段から五二段までに創作性を指摘され、示唆に富む論を発表された。私はこれに四七、五三の二章段を含ませて考えてきたわけである。その結果、ここには、はっきりとした、ひとつの構成意識を窺うことができた。即ち、五〇段を中心にして、左右に同じような人物を配置し、かつ部分的に時間の経過をも考慮していたが、いざ内容面からみると対照的になっていた。また、八九段の場合は五二段の如く拾遺集からは断定できなかつたけれど、右馬の頭と修理の君との話が雑然と並べられているのではなく、(C)を中心にして左右の章段は時間を追って叙述され、さらにまた二人の心情をもとに対照的に配置されていた。ここでも構成意識を認めることができた。

もちろん、これらの章段には従来、言われてきたように語句の上での関連も認められるが、そこから一步進んで部分的に、また一方では章段内でまとめあげようという、ひとつの構成意識を認めることができた。それは斬新な方法というべきで、その点でも作者の意欲的な一面を知ることができよう。とりわけ両者にみられた対照性は注目される。これは二つの箇所でも偶然にも一致するわけだが、このようなところは他にもみることができ、大和物語の作者が好んだ方法のひとつであつたのだろう。⁽³⁾

大和物語四七く五三段、八九段はともに前半の、いわゆる歌語りの色彩が濃い章段群にあるわけだが、これら二つの箇所には、そこから発展して、少なくともひとつの文学的な発想を認めることができよう。そして、その一端を担うために、「わたつみの」の歌と「いかでなほ」の歌を利用したと言えよう。大和物語は全体的にみると統一性に欠けるが、数章段を通して、また一章段内において意図的になされていることは留意すべきである。その意味で大和物語は複雑な問題を抱えている作品と言えるし、その方面からの考察はこの作品の本質を探る上で有効なひとつの方法と言えよう。

- 注(1) 「別本大和物語の成立に就いて―構成論を基礎とした試論―」(『国語と国文学』30巻2号 昭和28年2月 後に『大和物語 塙選書』(塙書房 昭和37年9月)に再録)
- (2) 『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院 昭和56年2月)
- (3) 富田貴子氏 「『試論大和物語』前半の構成―Not to be, that is the question―」(『大和物語探求』8号 昭和52年10月)、小杉ひとみ氏 「『大和物語』の章段の配列について」(長崎大学「国語と教育」14号 平成元年12月)、猪平直人氏 「『大和物語』における章段形成―業平章段前後と『伊勢物語』―」(『文芸研究』131集 平成4年9月)
- (4) 「大和物語の構成について―後半の章段を考察の対象として―」(『語文』39輯 昭和49年3月 後に『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録。本書第三章第四節。
- (5) この「先帝」に関しては、宇多天皇説(大和物語鈔、日本古典全書、日本古典文学全集など) 清和天皇説(雨海博洋氏)、醍醐天皇説(青木賜鶴子氏)がある。
- (6) 『大和物語評釈・十三 大空を渡る春日の』(『国文学』8巻1号 昭和38年1月 後に『大和物語評釈 上巻』(笠間書院 平成11年8月)に再録)
- (7) 『大和物語』の「先帝」考(『中古文学』18号 昭和51年9月 後に『物語文学の史的論考』(桜楓社 平成3年10月)に再録)
- (8) 『大和物語』の文章―その「なりけり」表現と歌語り―(『愛媛国文研究』29号 昭和54年12月 後に『語り』言説の研究』(和泉書院 平成30年1月)に再録)
- (9) この外、柿本獎氏は各章段の関連性ということを視点に入れて、次のように考えておられる(注(2)に同じ)。
- 47段 薄き心
- 48段 薄き心 「よそ」
- 49段 「よそ」 世離る
- 50段 世離る
- 51段 世離る 恨み
- 52段 恨み
- 53段 恨み 疎まる

- (10) 拙稿「大和物語の創作方法—いわゆる「ならの帝」の章段をめぐって—」(『平安文学研究』76輯 昭和61年12月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和61年』(朋文出版 昭和62年11月)、『大和物語の研究』にそれぞれ再録、「大和物語の創作方法—在中将関係の章段を中心にして—」(『大和物語の研究』)。本書第二章第七節・第九節。
- (11) 『日本古典文学全集大和物語』(小学館 昭和47年12月)
- (12) 注(7)に同じ。
- (13) 注(8)に同じ。
- (14) 注(2)、(8)に同じ。
- (15) これに類似している章段として、138段をあげることができる。詳しくは拙稿「大和物語の創作方法—伊勢関係の章段—」(『古典論叢』18号 昭和62年8月 後に『大和物語の研究』に再録)を参照のこと。本書第二章第八節。
- (16) 『拾遺和歌集の研究^{校本篇}』で諸本にあたってみたところ、第三句はすべて「有ながら」になっている。ただし、異本第二系統の北野天満宮本は「ありながら」とある。また、異本第一系統の天理図書館甲本の結句が「ものにさりける」になっている。
- (17) 注(6)に同じ。
- (18) 「大和物語の「先帝」をめぐって」(『女子大文学』(国文篇) 43号 平成4年3月 後に『国文学年次別論文集 中古2 平成4年』(朋文出版 平成5年11月)に再録)
- (19) 諸本にあたってみたところ、「おほむ」のところが「御返し」となっているくらいで、ほとんど異同はみられない。
- (20) 大和物語作者の創作力については「心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに」考—『大和物語』第四百一段—(『語文』78輯 平成2年11月 後に『大和物語の研究』に再録)、「大和物語の創作方法—在中将関係の章段を中心にして—」(『大和物語の研究』)において論じた。本書第四章第二節、本書第二章第九節。
- (21) 注(9)に同じ。
- (22) 卷十七雑秋にあり、歌の本文に異同はみられない。
- (23) 注(11)に同じ。
- (24) 「拾遺集雑冬 藏人所にさふらひける人の氷魚のつかひにまかりけるとて京に侍なからおともし侍らさりければ修理」と有拾遺集の調書にてはひをは

あしろによるものなれば我にうまのかみのおとつれもせぬは何事によりてかとはぬといかにしてかはとひみむといへるをこの詞にてはひをの縁なれば歌の意とけかたし脱文あるへし」(『大和物語諸注集成』に拠る)

(25) 注(2)に同じ。

(26) 注(1)に同じ。

(27) 品川和子氏の『蜻蛉日記の世界形成』(武蔵野書院 平成2年7月)に詳しい。

(28) 注(8)に同じ。大木恵美子氏「大和物語における「かくて」の考察」(二松学舎大学人文論叢 9輯 昭和51年4月)、拙稿「心のへだてもなくあはれなれば、

いとあはれと思ふほどに」考―『大和物語』第百四十一段―」(『語文』78輯 平成2年11月 後に『大和物語の研究』に再録)。本書第四章第二節。

(29) 「大和物語評釈・十八 魂はをかしきことも」(『国文学』8巻10号 昭和38年8月 後に『大和物語評釈 上巻』に再録)

(30) 注(2)に同じ。なお、氏は著書の中で(1)、(2)、(3)…を使用しているが、本稿では煩雑を避けるために(A)、(B)、(C)…に改めた。

(31) 拙稿「大和物語についての一考察―「あけぬとていそぎもぞする逢坂の霧たちぬとも人に聞かすな」歌考―」(『平安文学研究』60輯 昭和53年11月 後に『大和物語の研究』に再録)

(32) 注(29)に同じ。

(33) 大和物語の対照性については、雨海博洋氏が注(7)にあげた論考の中で、また星野一郎氏が『大和物語』の対照的構成法について―僧侶章段を通して―」

「大和物語探求」7号 昭和51年9月)の中でそれぞれふれておられる。私も「都の女と地方の女―『大和物語』における対照性の問題―」(『解釈』49巻3・4号 平成15年4月)と題して述べたことがある。本書第二章第五節。

第二節 『大和物語』小考

―前半と後半の分け方についての一試論―

―

大和物語は、その内容の上から前半と後半に分けることができる。即ち、おおむね前半は宇多法皇につながるサロンの関係をもつ人物たちの歌にまつわる事実物語の世界を描いているのに対して、後半は昔物語というべき歌を核とした古伝承などを含み、かなり説話性に富んでいる。

ところで、大和物語の前半と後半との境目であるが、現在では大きく三つの考えがあるようである。ひとつは一四一段からという考えであり、次は一四三段からという考え、そしてもうひとつは一四七段からという考えである。これらの考えには、それなりの根拠が示されており、納得させられる点も少なくない。しかし、大和物語の作者にとってみれば、これら三つの考えをすべて考えていなかったはずであり、もしこれらの中に作者の意図していたものがあれば、いずれかひとつを考えていたと思われる。したがってここでは、作者の意図に迫る意味でいずれの考えがより妥当であるかを考えてみたいと思う。

―

そこで、まず後半がいずれの章段からかを主張されている方と、その根拠とを紹介しておこう。

一四三段説

◎藤岡作太郎氏

この物語の半ば少し過ぎたるところにて、この書の体裁は一変す、その境に滋春のことを記したるところ二箇條あり。その條の後に、「仮初のゆきかひ路とそ思ひしを今はかぎりの門出なりけり」といふ辞世の詠をよみて遠逝せりといふは、頗る伊勢物語の結末に似たり。〔国文学全史平安朝編〕

一四七段説

◎雨海博洋氏

一四七段からは、物語の形態材料に於て、一四六段以前との相違があり、この段を分割線として前後に分つ事が出来る。藤岡博士は一四三段に滋春に関する説話があり、辞世の歌も記され、伊勢物語の結末と類似してゐるので、この段をもって、その境目ではあるまいかとのべられてゐる。然し私は、更に一四五段、一四六段まで延長して考えたい。その理由は兩段とも亭子院（宇多帝）と遊女白（玉淵女）とに關したもので、寛平より天曆の事柄をあつかった前編の部に入る資格があり、一四四段の滋春が「心あるものにて」歌をよくした事に関連して一四五段、一四六段は(3)の(イ)（稿者注、同一人物の同意継承ということ）の前段と同じ意味合をもつて連絡してゐるとみることが出来るからである。〔歌語りと歌物語〕

◎南波浩氏

大和物語を通観すると、一段から一四六段あたりまでは、おほむね「歌がたり」から取材し、一四七段以降には九段ほど伝説からの取材とみられる段をふくんでいるが、その他の残りの段は伝説からの取材内容ではない。〔日本古典全書大和物語〕

◎片桐洋一氏

いわゆる第一部の第一段から第一四六段あたりまでは、第一段の亭子院（宇多天皇 讓位（寛平九年、八九七））から、『大和物語』の成立まで五十年あまりの事を描いているのである。それに対して、第一四七段以後の、いわゆる第二部は「昔…ありけり」という形で始まる章段を多く含み、奈良時代以前かと思われる物語もあつて第一部とはまったく性質を異にする。〔鑑賞 第5巻 日本古典文学 伊勢物語・大和物語〕

◎妹尾好信氏

第一四六段をもつて第一部のわりとする南波氏らの意見に従いたい。第一四一段からそれまでの章段よりも若干古い時代の出来事を扱うようになってゐるのは確かだが、以後も登場人物名は実名や官職名で表すという原則はくずれておらず、逆に「男」「女」の呼称を主体とする第一四七段以降の古伝説に取材した章段群とは一線を画していることを否定できないと思われるからである。

〔「大和物語」第2部の成立試論—章段追加成長過程の想定—〕（広島大学文学部紀要）44巻

一四一段説

◎高橋正治氏

全体は大きく二部に分けることができる。第一部は古今集時代から後撰集時代にわたる現実の人間像のさまざまな様相を描き、(中略)第二部はそのような現実にあつて常に人の心をとらえ、ともしびとなつてゐるその昔の純愛に生きる人間の清純な姿が描かれている。第一部で現実に対する姿勢が消極的で、浮き草のようにただよう人間の姿が描かれていただけに、第二部の浪漫性が月のようにさやかで遠く、もの悲しい。

〔日本古典文学全集大和物語〕

◎今井源衛氏

巻頭より以上の一四〇段までと、一四一段下巻末までとは、内容上に大きな差があり、高橋氏は、それを第一部「藤原摂関政治下の現実における人間像のさまざまな様相」を描いたものと、第二部「その昔の純愛に生きる人間の清純な姿」が描かれたものとに区別されている(『大和物語』塙選書)。私は、この二部の境界がこの線にあることは、氏の説に賛成であるが、第一部の内容は「藤原摂関政治下」という一般的な把え方よりは、むしろ延喜天曆という時期の特殊性によつて把えるべきかと思う。それは、律令体制の中に摂関制が進展していく過渡的な時代であり、事実上も天皇親政が一時的に実現した時代であつた。宇多・醍醐朝の特に皇族を中心に据えた大和物語の歌語り集団の据え方は、冷泉期以後の摂関制確立期とは自ら異なるものがあるはずであろう。

〔大和物語評釈・三四 松の葉にふる白雪の〕〔国文学〕10巻5号

◎柿本奨氏

本段(稿者注、一四一段のこと)は、いつの事とも知れぬ昔物語のこれまでの諸段中最も長文にわたる説話章段である。その意味で前段との間に格差があり、変貌の観があるので、本段以下を本物語第二部と見る。しかし前段とは断絶して「淡いえにしに泣く女」という主題のつながりは認められ、前段は相当多く説話的背景を持つに拘らず、それを刈り込んだが、本段では豊富な細部を積極的に織り込んだのであると思う。(『大和物語の注釈と研究』)

◎高橋亨氏

ふつう、一四〇段までの前半を第一部、一四一段以降を第二部と見なす。(中略)その両者も明確に区分されているのではなく、一四一段から一四六段までが媒介的な位置を占めて連続している。

〔研究資料日本古典文学①物語文学〕

◎松尾拾氏

いちばん性格が似ていないのは、伊勢物語と大和物語一四一段以降である。こうして、大和物語一四一段以降の特異性がいよいよ注目されることとなつた。

〔大和物語文体試論〕〔語文〕24輯

羅列に走った感があるが、それぞれの根拠も様々である。そしてこれらの中では、一四一段説と一四七段説とがその大半を占めている。⁽¹⁾

三

それぞれの説を検討してみよう。まず一四三段説であるが、これは藤岡作太郎氏が主張されたものである。ただ、ここで言われる「体裁一変す」とは何を意味するのであろうか。一四三段の冒頭が「むかし云々」で始まっているからか。これを受けているとみると、確かにこれ以前の章段で「むかし云々」で始まっている章段はない。しかも、一四三段以降の章段の多くが「むかし」で始まっているれば、その説得力も増してこよう。しかしながらそうになっているのは三三章段中、九章段にすぎない。やはりこれは少ないと言わざるを得ない。このようなことから「むかし云々」で始まること自体、それほど大きな意味を持つものでもあるまい。

次に一四七段説に移って、まず雨海氏のお考えであるが、これについては、私自身かつて部分的にふれたことがあるので、それを引用してみる。

私はこのお考え（稿者注、雨海氏のお考え）に疑問を持っている。その理由のひとつとして氏は一四五、一四六段が寛平から天暦頃の人を扱っていると言われているが、例えば一四七段をみると、この章段は芦刈伝説を扱っているが、この中には伝説にもとづいての詠作があり、この詠作者も寛平から天暦にかけての人々である。そのふたつめは一四一段の「よしい糸といひける宰相のはらから」と一四二段の「故御息所の御姉おほひこ」は私見によると、それぞれの架空人物と考えられることから寛平から天暦頃の人を扱っているとは言い難い。⁽²⁾

このような理由で、一四七段説に疑義をさしはさんだわけである。この考えは今でも変わっていない。次いで南波氏のお考えであるが、初段から一四六段あたりまでもおおむね歌語りというよりも虚構の章段もみられるし、一四七段については先程引用した私見の通りである。確かに氏はおおむねと断っているが、あいまいさを残していることは否めない。また妹尾氏は南波氏のお考えに従っているが、氏は一四一段以降がそれ以前よりも古い時代の出来事云々と言われる。しかし、一四一段と一四二段は虚構と思われるからそのお考えは妥当ではない。そして結局は「男」、「女」の名称を主題とする一四七段以降を後半とみておられる。確かに後半には、その名称は多くなっている。しかもその多くは伝説的な章段に見られる。⁽⁵⁾ これはその性格からして、しごく当然のことである。伝説的な章段をここに置いたのは後述するように構成を考えてそうしたものと考えられる。したがって、「男」、「女」を主体云々と言われるが、それらとその前後の章段を含めて考えるべきではないか。それにこのような名称はこれ以前の章段にもみられる。⁽⁶⁾ もかくこのようなことからして、その根拠としては乏しいと言わざるを得ない。さらに片桐氏のお考えもほぼこれと同じで漠然と区別しているにすぎ

ない。しかも氏は五十年云々と言われているが、一四七段以前には虚構の章段も含まれているから、それをどう処理して考えたらよいのかという問題も残る。⁽⁷⁾

最後に一四一段説であるが、高橋正治氏は第1部を古今集時代から後撰集時代にわたる云々と言われている。事実そのような章段は多い。しかしこれと同じ章段は第2部からも見い出せる。⁽⁸⁾ また第2部を「昔の純愛に生きる人間の清純な姿」と見ておられる。確かに一四一、一四二段をはじめ伝説的な章段はそう考えるにしても、例えば在中将関係の章段などはそのように考えられない。このようにその根拠に無理が生じている。むしろその例外になる章段を含め前半と後半の分け方に生かしていくべきではないか。

今井氏のお考えは高橋氏のそれにもとづいたものであり、境目についてはここでも高橋氏への疑問とほぼ同じになる。ただ第1部については、解釈が異なっているが、氏のお考えに立つて、第1部にみられる虚構の章段をどう処理するかが問題になる。柿本氏も一四一段説を採用されているわけだが、氏はその理由に、一四一段の長文になることをあげておられる。しかし、その長文なる基準というものをどこに置いたらよいのか。一四一段以前にも、例えば一〇三、一〇五、一〇六段等もそのように考えられる。それに一四一段を「いつも知れぬ昔話体」と言われているが、ここは虚構と思われるから、そのような面からとらえるべきであろう。さらに高橋亨氏も一四一段説を採用しているものの明確に区分されているのではなく一四一〜一四六段を媒介的な位置を占めているとみている。これは橋渡しという意味なのであるが、具体的にはどういうことなのであるか。私はここだけでなく、後述するように一四一段以降全体を含めての構成を考えている。

このような中であつて、松尾氏は文体の面から考察され、一四一段を境に前半と後半の段層を認められた。これは注目すべきことであり、一四一段以降がそれ以前とは異なつた意識でもつてなされた章段である可能性を示したと言えよう。

以上みてきたように、いずれの考えにも例外が存し、はたしてそれが妥当かとなると判断しかねるが、強いて言うならば、一四一段説と一四七段説が有力になろう。このうちどちらかとなると困難を伴う。数字の如くきっぱり割り切れればよいが、そう簡単にはいかない。ただ、従来の考えは、ひとつひとつの章段をもとにしてなされたものであるが、全体を通して、別の観点から探ってみるのもひとつの方法であろう。

四

大和物語の前半と後半の境目をどこに置くかということは難しい問題である。たしかに大和物語の後半は前半と異なり、かなり説話性に富んでいる。

| (2) | | | (1) | | | | | | 区分 |
|---------------------------|-----|-----|---|-----|-----|-----|-----|-----|------------|
| 149 | 148 | 147 | 146 | 145 | 144 | 143 | 142 | 141 | 章段 |
| 大和の国 | 津の国 | 津の国 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 場所 |
| 立田山伝説……この男はおほきみ(業平)なりけり | | | よしいゑといひける宰相のはらから 故御息所(伊勢の御)の御姉 在次君……伊勢の守の妻にて 在次君 亭子の帝 しろ(遊女、大江の玉淵の女) 亭子の帝 大江の玉淵がむすめ 兄弟、姉妹 一族 | | | | | | 登場人物及び関連事項 |
| 三部構成(生田川伝説、宮廷サロンでの詠歌、後日譚) | | | | | | | | | |
| 蘆刈伝説 | | | | | | | | | |

しかもそこには単に伝説を集めたということではなく、作者により虚構という意識でもって創作されたと思われる章段がみられる。⁽¹¹⁾ もちろんこのような章段は前半にもみられるわけで、例えば伊勢関係の章段をみると、初段をはじめ一一九、一三八段にその根拠を認めることができる。初段では伊勢集の一首を除去し、一一九段では彼女の歌を利用して物語を延長させている。一三八段は天下の色好みとして名を馳せた元良親王関係の章段の中に置かれ、その章段は一四〇段まで続いている。しかもこれらの章段では恋愛の進行状況によって並べられているようだ。これらの章段で、特に注目したのは後半に近い方で思い切った方法をとっているということである。それだけに虚構の意識は一段と強かった。

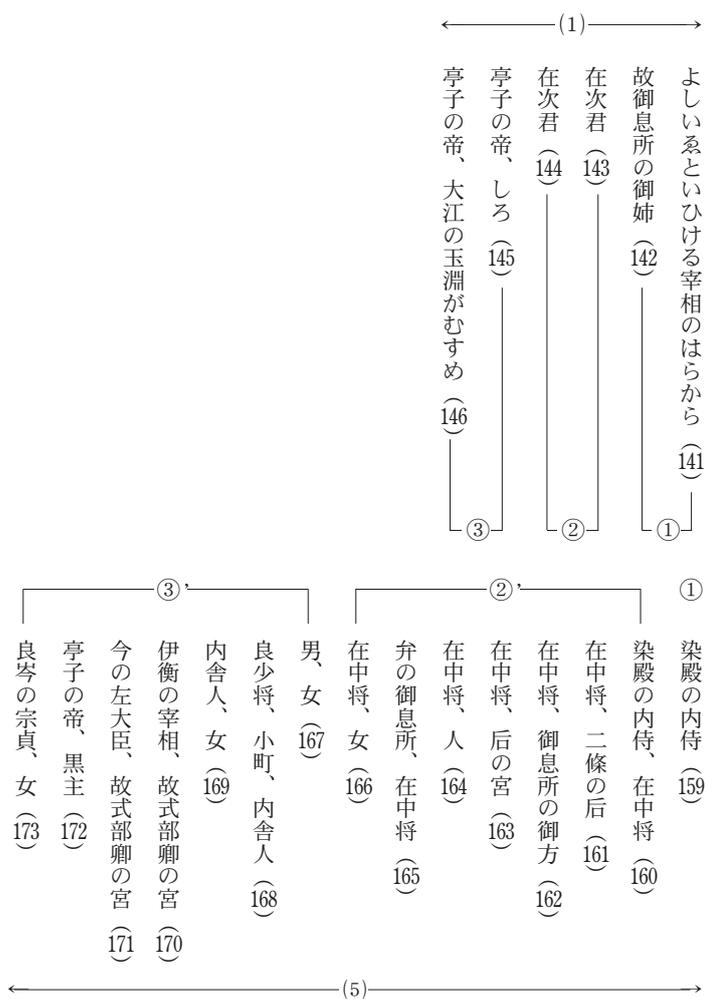
高橋正治氏などが問題にされている一四一段は、人物設定や和歌の上で、前半の章段をもとにして創作されていると思われる。⁽¹²⁾ ここは他の作品に抛らず大和物語そのものに素材を仰いでいる。そして次の一四二段もほぼ同じであり、和歌は一四一段のをもとにしていると思われる。このように虚構の章段が二章段も続くことは特筆すべきことである。それだけに虚構の章段を創作しようという意識は強かった。そうかと言って一四二段以降の章段のすべてが虚構とは言えない。そこには実録もあり、また伝説もあるというように複雑になっている。ただそこには虚構と思われる章段が前半よりも多くみられるようである。⁽¹⁴⁾ そして何よりも強調しておきたいことは一四一段以降においてはつきりとした構成意識がみられるということである。このことについては、すでに指摘したことがあるが、少し補足することがあるのでもう一度みていきたい。とりあえず一四一段以降の構成を図式化すると次のように

| (5) | | | | | | | | | | | | | (4) | | | | | (3) | | | | | | |
|---------------|-------------|--------------|--------------|-------|--------------|--------------|-------|-----------|-------|---------|------------|----------|-----------|-------------|-------|-------|-------|-------|--------------------|-----|----------------------|---------|------------|-----------------|
| 173 | 172 | 171 | 170 | 169 | 168 | 167 | 166 | 165 | 164 | 163 | 162 | 161 | 160 | 159 | 158 | 157 | 156 | 155 | 154 | 153 | 152 | 151 | 150 | |
| 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 都 | 大和の国 | 下野の国 | 信濃の国 | 陸奥の国 | 大和の国 | 都 | 都 | 都 | 都 | |
| 良岑の宗貞(遍昭) 六歌仙 | 亭子の帝、黒主 六歌仙 | 今の左大臣、故式部卿の宮 | 伊衡の宰相、故式部卿の宮 | 内舎人、女 | 良少将、小野小町、内舎人 | 男、女……橋渡し 六歌仙 | 在中将、女 | 弁の御息所、在中将 | 在中将、人 | 在中将、后の宮 | 在中将、御息所の御方 | 在中将、二條の後 | 染殿の内侍、在中将 | 染殿の内侍、能有の大臣 | 幸福になる | 幸福になる | 幸福になる | 姨捨山伝説 | 安積山伝説 男が女を盗み、女は死ぬ。 | 立田山 | ならの帝(平城帝) 嵯峨の帝↓史実の合致 | 磐手(御手鷹) | ならの帝 立田川行幸 | ならの帝 猿沢の池の伝説 行幸 |

なる。

(注) 人物表記は『日本古典文学全集大和物語』に拠った。

この表をみるとわかるように都と地方の話が交互に並べられている。そして都から地方へ移る場合、都に近い国から遠い国へと配列されている。地方から都へ移る場合も同じである。しかも(3)のグループを中心に左右対称になっている。しかもその対称になっているグループをみると、同じ類と言



おうか、同じようなことをくり返している。即ち(1)と(5)をみると

のようになる。(3)において問題が残るが、そのことについては後述するとして、全体的にみると(5)は(1)のくり返しとみてよいのではあるまいか。

(5)においては(1)を増加させたようになっていいる。(1)の在次君を(5)ではその父君である在中将の話にしている。在中将関係の章段は、かなり意図的な方法をとっていると思われる。(16) その点からも(1)を意識し意図的になされていることがわかる。ただ、(3)における一六七段は登場人物が「男、女」とあり、問題がありそうだが、これは在中将関係の章段から別な章段へ移る橋渡しをしていると思われる。(17) また一六八段は、在中将が前に登場していることから、

六歌仙ということに関連して遍昭の話を持ってきたのであろう。同様に一七三段も一七二段に黒主が登場していることからこれに関連させて遍昭の話を持ってきたのであろう。⁽¹⁹⁾ なおこの章段は後世の成立になると言われ、⁽²⁰⁾ 原本にはなかったようである。事実、勝命本はこの章段を持っていない。ともかくこれらを除けば、③は一七二段の亭子の帝に至るまで貴族社会のことが描かれ、その頂点に帝を据えている。つまりこれは③の世界を増加させているわけである。そして最後の方の章段である一四六、一七二段が行幸の話になっているのは、偶然の一致とは言えまい。

(2)と(4)も対称的になっている。それというのもこれらのグループは地方の話になっており、各グループへの移行に関しては前述の如くかなり配慮している。そして(5)の方が陸奥、信濃、下野と幅広く収めている。これは先程の(1)と(5)の場合に共通している。

ともあれ、一六八、一七三段のように連想めいたところもあるが、それ以上にはつきりと構成意識というものを窺い知ることができた。このようなことは一四一段以前に見られなかった。なお構成意識ということに関しては、各グループの境目をみるとよりいっそう明らかになると思われる。即ち一四一、一四二、一四七、一五〇の各章段をみると、いずれも虚構か特殊な章段を置いている。ただ、(5)のグループの一五九段はそのようになっているが、この章段は在中将関係の章段への導入の働きをしていると思われ、⁽²¹⁾ その点でこれらに準じて考えてよかろう。それにしても(3)のグループを中心に左右対称にしているわけだが、なぜ(3)のグループをその中心に据えたのであろうか。無意識にそうしたのであろうか。しかし整然とした構成を考えると何か意図があったのではないか。そして少なくとも大和物語の作者は「ならの帝」に崇敬の念を抱いていたのであろう。

大和物語一四一、一四二段が虚構の章段であることは早くから指摘されていた。そして今までは個々の章段ごとに考えられ、処理されていた。しかし、今までの考えからこれを含め、これ以降の章段は整然とした構成を形作っていた。これは大和物語の作者が一四一段以降をそう考えていたことの証しである。そしてこのことこそ大和物語の前半と後半をどこで分けるのかということに反映させるべきではないか。そうすると一四三段説、一四七段説は成り立たなくなり、結局のところ一四一段説に落ち着く。

五

私はここで大和物語の前半と後半の境目をどこに置くべきかということについて、作者の創作意識という観点から考えてきたわけである。その結果、前半では部分的にみられた創作意識を後半に集中させたというべきである。一四一段以降には、それ以前にはみられなかった整然とした構成を窺い知ることができた。そして結果的には高橋正治氏と同じく一四一段説を採用したわけだが、今までのお考えはどうも説得力に乏しく、今一步のものが多

かったように思う。本稿ではその点を考慮し、今までの成果を踏まえて別の観点から考察したが、特に大和物語の後半については段階的な成立を主張しておられる方もあることである⁽²⁾。今まで述べてきた中には考え違い、果ては誤りも多かるうと思う。大方の御叱正をいただけたら幸いである。

注(1) この外に一〇三段説として大野普氏の説がある。即ち、「辛島稔子さんの研究によると百二段と百三段とを境として、前半と後半とに分けることができ。前半には形容詞のウ音便形が少なく、後半には形容詞のウ音便形が多い。また前半にはソレ系の代名詞が多く、後半にはコレ系の代名詞が急激に増加している。そして、そこに使われている副詞の数は、前半にはきわめて少なく、副詞は後半に多い。百二段と百三段とを、もし分かれ目として

見るならば、明らかに後半は増補であり、文章もきわめて説明的で複雑になっており、また物語化の意図が濃厚である。」(『王朝文学と言葉』新潮社昭和36年5月)と述べられている。これは辛島氏の考えを氏の論文に引用されたものである。それにしても大胆な説である。音便、代名詞、副詞を分析されたの考察であるが、これらでくつきりと分かれているわけではないし、語彙の傾向はわかるにしても、これらでもって分けてよいものかどうか不安も残る。また、渡辺輝道氏は表現論の立場から第1部(一〇九九段)、第2部(二〇〇〇〜一四六段)、第3部(一四七〇〜一七三段)に分けられることを提唱された(『大和物語の構成と表現』「高知大國文」25号 平成6年12月)。

(2) 「大和物語における虚構の方法——一四一・二四二段を例にして——」(『中古文学』30号 昭和57年10月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和57年』(朋文出版 昭和58年11月)、『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)にそれぞれ再録)。本書第二章第二節。

(3) 注(2)に同じ。拙稿「大和物語の創作方法——伊勢関係の章段——」(『古典論叢』18号 昭和62年8月 後に『大和物語の研究』に再録)。本書第二章第八節。注(2)に同じ。

(4) 注(2)に同じ。

(5) 147、148、149、154、155、156、157、158段。

(6) 7、55段。

(7) 注(3)に同じ。

(8) 159〜166、168、170〜172の各章段。

(9) 注(3)に同じ。

(10) 注(2)に同じ。

(11) 注(2)の外に「大和物語における在原業平関係章段について」(『解釈』24巻4号 昭和53年4月)、『古今』『伊勢』『大和』—ひとつの共通話をめぐって—

- (11) 「平安文学研究」73輯 昭和60年6月 後に『国文学年次別論文集 中古1 昭和60年』(朋文出版 昭和61年10月)に再録)において指摘したことがある。これらの論考は後に『大和物語の研究』に再録。本書第二章第一節・第三節。
- (12) 拙稿「大和物語の創作方法—伊勢関係の章段—」(『古典論叢』18号 昭和62年8月 後に『大和物語の研究』に再録)。本書第二章第八節。注(2)に同じ。
- (13) 注(2)に同じ。
- (14) 注(11)に同じ。
- (15) 「大和物語の構成について—後半の章段を考察の対象として—」(『語文』39輯 昭和49年3月 後に『大和物語の研究』に再録)。本書第三章第四節。「大和物語の創作方法—在中将関係の章段を中心にして—」(『大和物語の研究』)。本書第二章第九節。
- (16) 注(15)に同じ。
- (17) 注(15)に同じ。
- (18) 注(15)に同じ。
- (19) 注(15)に同じ。
- (20) 高橋正治氏『大和物語 塙選書』(塙書房 昭和37年10月)、今井源衛氏「大和物語一七三段と花山院」(『花山院の生涯』桜楓社 昭和43年7月。改訂版 昭和46年12月 後に『今井源衛著作集 第9巻 花山院と清少納言』(笠間書院 平成19年3月)に再録)
- (21) 雨海博洋氏「大和物語の伊勢物語意識—大和一六〇・一六五段を中心とした考察—」(『論叢王朝文学』笠間書院 昭和53年12月 後に『物語文学の史的論考』(桜楓社 平成3年10月)に再録)
- (22) 高橋正治氏「大和物語の原初形態に関する試論—清輔のいふ「和歌二百七十首其内連歌三首」本をめぐつて—」(『国語と国文学』32巻6号 昭和30年6月 後に『大和物語 塙選書』に再録)

第三節 『大和物語』の宗于関係章段

—構成との関わりを中心にして—

—

大和物語には帝から庶民に至るまで、多くの人物が登場している。ただ、登場する回数を見ると人物により差がある。これはひとつに作者の人物への関心の程度にもよるのであろう。その人物配置をみるに大きく、連続させている場合と単独で置かれている場合とに分けることができる。これらの中には単にこうしているのではなく、何らかの意図でもってそうしているものもあるのではないか。つまりそこには構成意識をみることができるとはないかということである。もとより大和物語の構成や人物考証については今日まで諸先学により言及され、多くの成果をあげている。ただ、構成に関しているなら、その多くが各章段の内容面からの考察であり、人物に焦点をあてた考察は少ない。こちら辺で人物が構成にどう関わっているか考えてみるのもよいのではないか。そういうことで、本稿においては宗于関係の章段を対象にして考えてみたいと思う。

—

さて、源宗于は三十六歌仙の一人で、その歌は百人一首にとられており、かなりの評価を得た歌人である。また、彼は大和物語の御巫本と鈴鹿本にみられる附載説話の主人公にもなっており、注目されていたことがわかる。^①しかし、その境遇はさほど恵まれなかったようである。大和物語において彼に関連する章段は三〇〇三三二、三四、三九、五四、六三、八〇、一〇八〇一〇、一一八、一一九の十三章段に及んでいる。これは大和物語にあつて上位に入る。ただ、これらの中には五四、一〇八段のように彼の名を使っているにすぎず、その内容は彼の息子や娘が主人公になっている章段もあ

る。さらに、一一八、一一九段に至っては彼の娘の話になり、ここには宗子の名もみられない。その意味ではこれらの章段を除外すべきかもしれないが、彼の名をもとに息子や娘を紹介しており、また彼の名がみられなくても、その娘をとり上げていること自体、宗子の存在がいかに大きかったかを示している。このようなことからこれらの章段も無視できないように思われる。

ともあれ、宗子は大和物語の中で比較的、多くの章段に登場していることから、作者が注目していた人物の一人ではなかったかと思われる。このことは大和物語の成立事情を探る上で興味深いものがある。

各章段の考察に入る前に、宗子関係の章段について現在までの研究状況を俯瞰しておきたい。

まず評伝として白田甚五郎氏の「源公忠と源宗子―その人―」⁽²⁾という論がある。数少ない資料を詳細に検討されて宗子の生涯を浮き彫りにしておられる。彼の伝としては唯一のものである。次に岡部由文氏に「大和物語における源宗子の位置」⁽³⁾という論がある。氏は主題論に迫るひとつの方法として宗子関係章段について言及されている。その結果、大和物語には宗子の華やかな時代が描かれているのではなく、世界から取り残された不遇時代を描いていると言われる。そして主題的にみると、悲哀感に満ちたあはれの心情を描き出していると考えておられる。この論考は宗子の登場する章段を全体にわたって考察した唯一のものと言ってよい。また個々の章段を対象にしたものに柳田の「詠み手の心―『大和物語』第三十段―」⁽⁴⁾は三〇段にある宗子が詠んだ「沖つ風」の歌について、ひとつの解釈方法を示したものである。これは従来の解釈を批判したもので、歌の中で詠んだ「海松」を一般の海松と献上の海松とに分け、前者に宗子、後者に宗子の願いを込められているとみて、それを解釈に生かしたわけである。この外、部分的に言及しているものもあり、これらについてはその都度ふれていきたい。

宗子は、かなり多くの章段に登場する割合に、本格的にそれを追究した論は少ない。事実、『歌語り・歌物語事典』⁽⁵⁾には宗子関係の章段の項を設けていない。その意味で先程の岡部氏の論考は注目されよう。ただ、氏は―これはテーマからして当然なことかもしれない―章段が置かれた理由やこれらの章段と構成との関わりについては言及されていない。今後は宗子という人物を考える上でこの方面からの考察も必要であろう。

三

前述したように、宗子関係の章段は連続する場合、単独の場合、彼の子息といった、三つの形でみられる。これと同じような形で登場するのは外に亭子院関係の章段だけである。これは宇多法皇亭子院と同一人物を描く大和物語にあってみれば、しごく当然のことと言える。してみるとこういう形をとる

のは亭子院関係の章段を除けば、宗子関係の章段だけとなり、ますます彼の存在は注目してよからう。

そこで、まず宗子が連続して登場する章段についてみていきたい。論述の便宜上、三三段を含め、三〇段から三四段までを記しておく。

三〇段

故右京の大夫宗子の君、なりいづべきほどに、わが身のえなりいでぬことと、思ひたまひけるころほひ、亭子の帝に、紀伊国より石つきたる海松をなむ奉りけるを題にて、人々歌よみけるに、右京の大夫、

沖つ風ふけぬの浦に立つ浪のなごりにさへやわれはしづまむ

三一 段

おなじ右京の大夫、監の命婦に、

よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

三二 段

亭子の帝に、右京の大夫のよみて奉りたりける。

あはれてふ人もあるべくむさし野の草とだにこそ生ふべかりけれ

また、

時雨のみ降る山里の木のしたはをる人からやもりすぎぬらむ

とありければ、かへりみたまはぬ心ばへなりけり。「帝、御覧して、『なにごとぞ。これを心えぬ』とて僧都の君になむ見せたまひけると聞きしかば、かひなくなむありし」と語りたまひける。

三三 段

躬恒が院によみて奉りける。

立ち寄らむ木のもともなきつたの身はときはながらに秋ぞかなしき

三四段

右京の大夫のもとに、女、

色ぞとはおもほえずともこの花は時につけつつ思ひいでなむ

(注) 本文は『日本古典文学全集大和物語』に拠る。以下も同様。

三三段が躬恒になつてゐる以外は宗子で統一されている。高橋正治氏は「三十段から三十七段までは「官位のがらないことを嘆く」という内容の群である。「憂き世のあはれ」に含まれると考えてよい。」と述べておられる。⁽⁶⁾確かに大きくはこの内容に含まれる。しかし、三二、三四段は官位に関したことはない。その意味でもっと細かく分析する必要があるように思われる。

その三一段であるが、ここにある「よそながら」の歌は後撰集にもみられる。即ち、

あひしりて侍りける中の、彼もこれも志はありながら包む事ありてえあはざりければ、
読人しらず

よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

(注) 本文は『新編国歌大観』に拠る。

とあつて、後撰集巻四の夏部に入つてゐる。とはいうものの、この歌は恋の色彩が濃いものである。しかも、注目すべきは詠作者が「読人しらず」になつてゐることである。この点に関し、先学はどのように考へてゐるのであろうか。

まず今井源衛氏は宗子と監の命婦との、年の差を二十一―三十歳ぐらいとみておられ、二人の間に恋愛関係を生ずるにさしたる不都合はないと言われている。⁽⁷⁾しかし、後撰集との関わりについては言及されていない。次に柿本奨氏は後撰集の方を詠伝とみておられる。⁽⁸⁾一方、雨海博洋氏は歌語りの過程で読み人しらずの歌が宗子の歌に仮託されたと言われる。⁽⁹⁾また、菊地靖彦氏は先学の考へを検討されて、後撰集をもとにしての虚構と言われる。⁽¹⁰⁾さらに森本茂氏は読み人しらずの「よそながら」の歌が宗子作に付会されたものかもしれないと言われている。⁽¹¹⁾

このようにこの章段をめぐる様々な考へがある。では、ここをどのように考へたらよいか。後撰集の詞書がかなり詳しく詠作事情を記しているのに比べて、大和物語は地文に二人の人物のみを記し簡略になつてゐる。このことから後撰集の詞書の方が詠作事情を正しく伝えてゐるとみてよからう。それによると、二人は何度か会つたきり、その後、何らかの事情で会うことができず、ある人が詠んだ歌である。思うようにならない詠み手の心情が伝わってくる。大和物語の場合、歌意は明らかだが、この歌を詠んだ詳しい事情はわからない。このことから「よそながら」の歌を理解するに

はまずもつて後撰集の詞書に拠るべきである。ともあれ、ここは後撰集の史実性を考慮して雨海氏歌語りには問題あるがや菊地氏の考えに従っておきたい。

それにしてもなぜこのような章段をここに置いたのであろうか。「見はてぬ夢」とは最後まで見ないうちに覚めてしまう夢であり、三〇、三二段がともに官位の上がないことを嘆く内容で心情的にみて三一段に共通する面がある。それにしても三〇、三二段は同じことが記され、しかも同一人物なのだから、なぜ連続して配置しなかったのか。これとほぼ類似した章段に二六、五〇段がある。例えば二六段の場合、二五段に明覚、二八段に戒仙というように僧侶が登場する。したがって僧侶関係の章段ということで、ここも続けてしまつてよかつたはずである。なのに二六段に別な人物を配置しているのである。二六段は次のような内容である。

桂のみこ、いとみそかに、あふまじき人にあひたまひたりけり。男のもとによみておこせたまへりける。

それをだに思ふこととてわが宿を見きとないひそ人の聞かくに
となむありける。

「それをだに」の歌は古今集恋五に「読人しらず」とある。高橋正治氏は『日本古典文学全集大和物語』の頭注で指摘されているように、もともと桂の皇子の歌ではなく、読人しらずの歌であつたのであろう。ここはそれを桂の皇子の歌にすりかえたわけで、虚構化とみてよかろう。この章段をここに置いた理由について私自身、以前にふれたことがある。⁽¹²⁾つまり地文に「あふまじき人」とあることから、ここは恋の話を扱っていることから僧侶を連想させる。そのために二五段と二七、二八段に共通する話を配置したのではないか。このことは僧侶関係の章段の連続を避けたのであろう。これはまたひとつの変化をもたせる意味もあつたのかもしれない。

さて、そうすると三一段を置いた理由は身の不遇の連続ということよりも変化をもたせるために、恋の話の三二段を置いたとみてよかろう。また、三四段も宗于の話であるから、三二段に続けてしまつてもよかつたはずである。それなのに三三段を置いたのはどのような理由からであろうか。高橋正治氏は「三二段に草木に関する歌があることから宗于以外の人の話が入つたのであろう。」と述べておられる。⁽¹³⁾確かにそのことも考えられるが、そのことよりもここは「昇進」ということで関連づけようとしたのではないか。つまり人物よりも話の内容で関連させたわけである。三四段が恋の話になっていることを思えばなおさらである。これと同じ例として一三七、一四〇段をあげられよう。このうち一三七、一三九、一四〇段には元良親王が登場しているのに、その間にある一三八段だけは「こやくし」という別人を置いている。どうしてこうなっているかという点、ここは恋の展開を踏まえて章段が配置されており、そのために人物よりも内容に力点を置いたためにこのような配置にしたわけである。⁽¹⁴⁾このこともひとつの傍証になるであろう。

四

次に単独で配置している三九、六三、八〇段の各章段についてみていきたい。まず三九段は次のような内容である。

伊勢の守もろみちのむすめを、ただあきらの中將の君にあはせたりける時に、そこなりけるうなゐを、右京の大夫よびいでて、語らひて、朝によみておこせたりける。

おく露のほどをも待たぬあさがほは見ずぞなかなかあるべかりける

宗子がうなると契りを交わした話である。次の四〇段は式部卿宮に淡い恋を寄せるうなゐの話である。⁽¹⁵⁾ 両章段にうなゐが登場しており、その関連で置かれたのであろう。しかも両章段とも恋の話で、それ以前の章段とは主題が異なる。⁽¹⁶⁾ その最初に宗子の章段を置いている。主題を改めるにあたり彼を⁽¹⁶⁾持ってきたことは、やはり作者の宗子への関心の高さによるのであろう。確かに主題的にみるとそう言えるかもしれないが、突如として宗子の章段を置いているわけではなさそうである。前にある章段の内容を継承しつつ、いわば連想のごとく章段の配置がされているようである。今、前の章段の内容をまとめてみると次のようになる。

三三段 昇進、躬恒、院、常緑

三四段 恋、宗子、色

三五段 堤中納言、勅使、院

三六段 堤中納言、勅使、前齋宮

三七段 昇進、身の不遇、「ひとりは殿上して、われはえせさりける」

三八段 「よくもあらぬこと、身の不遇、「わたの原嘆き」

三九段 宗子

三三、三四段については前に述べたので、これ以降の章段からみていく。三五、三六段には勅使としての堤中納言が登場する。これは三三段に院が登場することから、その連想で置かれているのであろう。その意味では三三段に続けてしまってもよかつたはずである。ただそうすると院に関する話が三章段つづくところから、ここでも変化を持たせる意味で三四段を置いたのであろう。堤中納言は院と彼の娘への勅使という、この上ない恩恵に浴している。その次の三七段は兄弟でありながら殿上のことで明暗を分けた話である。殿上を許されたことでは前段に続くのであろうし、一方、そうでないことでは次の三八段へ続くのであろう。その三八段というのは一条君なる人物が「よくもあらぬこと」が生じ主君のもとを去り、壹岐の守の妻となつて下つて行つた話である。いわば悲しみを背負つての都落ちと言つてもよからう。この身の不遇ということが三九段の宗子を呼び起こしているのであろう。しかも彼女が壹岐に下る時に詠んだ「たまさかに」の歌には「わたの原嘆きほにあげて云々」と海と嘆きが詠まれている。これは前述した三〇段で宗子が詠んだ「沖つ風」の歌と素材の点で類似している。大和物語の作者にとつて宗子という人物は不遇者という意識―これには三〇段が根底にある―が強かつたわけである。このように三九段から主題的には変わるものの、その裏では連想的な配置を認めることができる。よう。

次に六三段に移る。六三段は次のようである。

故右京の大夫、人のむすめをしのびてえたりけるを、親聞きつけて、ののしりてあはせざりければ、わびてかへりけり。さて、朝によみてやりける。
 さもこそは峰の嵐は荒からめなびきし枝をうらみてぞ来し

右京の大夫が人の娘をひそかにわがものにしたものの親が聞きつけて逢わせなかつたので親になびいた娘へ恨みの歌を贈つた話である。この章段をここに置いたのは次の六四段と無関係ではあるまい。その六四段というのは平中が家に愛人を連れてきて、妻が口やかましく言つてその愛人を追い出してしまい、平中と愛人は思うように逢えない話である。両章段とも第三者が介在し、二人が思うように逢えないということ類似している。しかもここで先程の三九段と同じように宗子の登場する章段を最初に置いている。六四段には平中という好色者が登場しており、宗子と平中とを並べているのは作者の二人に対する評価を垣間見ることができるところであろう。この宗子の存在は六五段を呼び起こしているようだ。それは「南院の五郎、三河の守にしてありける云々」で始まり、宗子一族の話になつていくからである。

ところで、六三段は前段と関係なく置かれているのであろうか。実はそうではなく自然な展開が計られているように思う。今、この周辺の章段の登場人物や内容を記してみると、

六一段 昨日のふぢの (無常)

六二段 浄蔵、のうさんの君

六三段 右京の大夫宗子、人のむすめ 恋

六四段 平中、若き女

のようになる。六一段は無常が主題になっており、その関連で次の六二段に浄蔵という僧侶が登場しているのである。しかもこの内容は僧侶の恋の話である。六一段の内容を含みつつも恋の話になっていることは次の六三段が恋の話であるから、それに関連づけているのであろう。つまり「無常↓僧侶・恋↓恋」という過程を踏んでおり、自然な展開を計っているわけである。こうみてくると、六三段も先程の三九段と同じように主題的にみると六四段に類似し、と同時に連想的な配置がされていると考えられる。

さらに八〇段をみることにしよう。論述の便宜上、この前後の章段も記しておく。

七九段

また、おなじ親王に、おなじ女、

こりずまの浦にかづかむうきみるは浪さわがしくありこそはせめ

八〇段

宇多院の花おもしろかりけるころ、南院の君達とこれかれ集りて、歌よみなどしけり。右京の大夫宗子、

来て見れど心もゆかずふるさとのむかしながらの花は散れども

こと人のもありけらし。

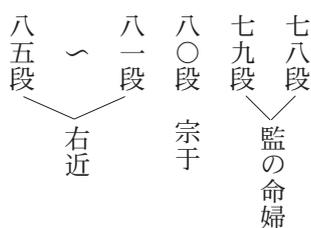
八一 段

季繩の少将のむすめ右近、故後の宮にさぶらひけるころ、故権中納言の君おはしける、頼めたまふことなどありけるを、宮にまゐること絶えて、里にありけるに、さらにとひたまはさりけり。内わたりの人來たりけるに、「いかにぞ。まゐりたまふや」と、問ひければ、御文奉りける。

忘れじと頼めし人はありと聞くいひし言の葉いづちいにけむ
となむありける。

八〇段について、高橋正治氏は「恋の章段ではなく、また前後の人物とも関係なく孤立した段章」と言われている。⁽¹⁷⁾確かに内容的にみるとそうかもしれない。しかし、景物面から考えると、七八、八〇段は前述の三〇段のことが作者の脳裏にあったのではないか。三〇段には宗子と、彼の不遇な身を託した海松がみられる。作者としては七九段に海松が詠まれているから、三〇段のことが脳裏にあり、その後の八〇段に宗子の話を持ってきたであろう。これはひとつの連想と言ってよかろう。海松は宗子を象徴するような景物であった。

次の八一段と、八〇段はどのような関係があるのだろうか。七九、八〇段のようにはつきりとしたものがみられない。強いてあげるならば、「ふるさと」と「里にありけるに」と関連しており、それと両章段は心情的に類似している面がある。また、八〇段は人物面からみると、



のような位置にある。監の命婦、右近という女性に挟まれている。この二人は大和物語の中であって多くの章段に登場し、作者にとって関心のあった人物であったようだ。ただ、女性だけを連続させるのではなく、その間に宗子の章段を置き、変化を持たせ、いわば橋渡しの働きをしているのが八〇段と言えよう。

ともあれ、八〇段は「孤立章段」ということではなく、前後の章段を考慮し、複雑な要素が絡みあって置かれていると考えられる。

五

最後に五四、一〇八、一〇九、一一八、一一九の各章段についてみていこう。前述したように、このうち五四、一〇八、一一〇段は宗子が主人公になっているわけではない。彼は主人公を引き出すために使われているにすぎない。また、一一八、一一九段には彼の名は見られず、その娘の話になっている。このようにこれらの章段にあって宗子の影は薄い。しかしこれらの章段を置いたのは父親としての宗子の存在が大きかったというべきである。このこ

とは今までみてきた章段からも理解できよう。

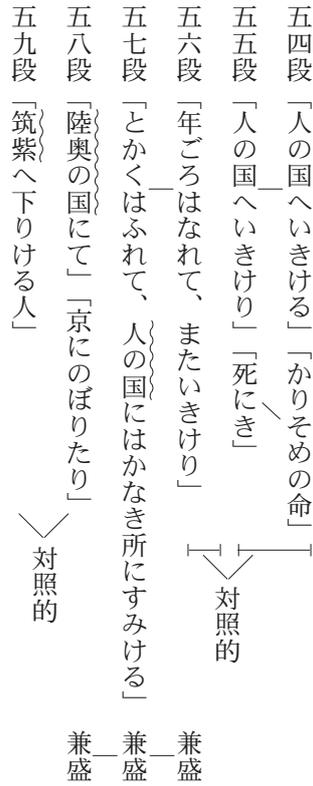
そこで、まず五四段からみていくことにする。これは次のような内容である。

右京の大夫宗子の君、三郎にあたりける人、博奕をして、親にもはらからにもくまれければ、足のむかむ方へゆかむとて、人の国へいきける。さて、思ひける友だちのもとへよみておこせたりける。

しをりしてゆく旅なれどかりそめの命知らねばかへりしもせじ

宗子の三男が賭け事をして親や兄弟にも憎まれ家を出るといふ話である。この前の五三段が恋の話で、しかも四七段から五三段までは部分的とは言え、構成意識のみられるところである。⁽¹⁸⁾ その意味で五四段から別の話の内容になるわけである。

では、五四段以降の章段はどのような配置になっているのであろうか。関連する事項を拾ってみると次のようになる。



ここには離別の諸相が描かれている。これらの章段にはひとつの構成意識を窺うことができる。五四、五五段は地方へ下ったら死んでも帰らないといふ強い意志と、地方へ下りそこで死んだという悲劇的な話とが描かれている。ところが、その後の五六、五七段は別れたものの、もとにもどったり、地方から歌を贈ったりしている。さらに五八段は前段に「人の国」とあり、これが「陸奥の国」と関連し、五六段から五八段は兼盛が主人公になっている。ただ、五八段では兼盛の「心かけしむすめ」が上京している。しかし、五九段では男が地方へ下ったままになっている。このように五四、五五段と五六段、五八段と五九段はそれぞれ内容からみると対照的になっている。そしてこの両者を結んでいるのが五七段ということになる。ともあれ、これらの章段の最初にあるのが宗子関係の章段ということになる。五四段にある宗子の息子の歌は、悲嘆にくれ、明日に望みのない心情の吐露である。ここには父宗子の姿が透影されているかのようである。

次に一〇八、一〇九、一一〇段は宗子の娘の話である。その内容は次のようである。

一〇八段

南院のいま君といふは、右京の大夫宗于の君のむすめなり。それ、おほきおとどの内侍の督の君の御方にさぶらひけり。それを兵衛の督の君、あや君と聞えける時、曹司にしはしばおはしけり。おはし絶えにければ、常夏の枯れたるにつけて、かくなむ、かりそめに君がふし見し常夏のねもかれにしをいかで咲きけむとなむありける。

一〇九段

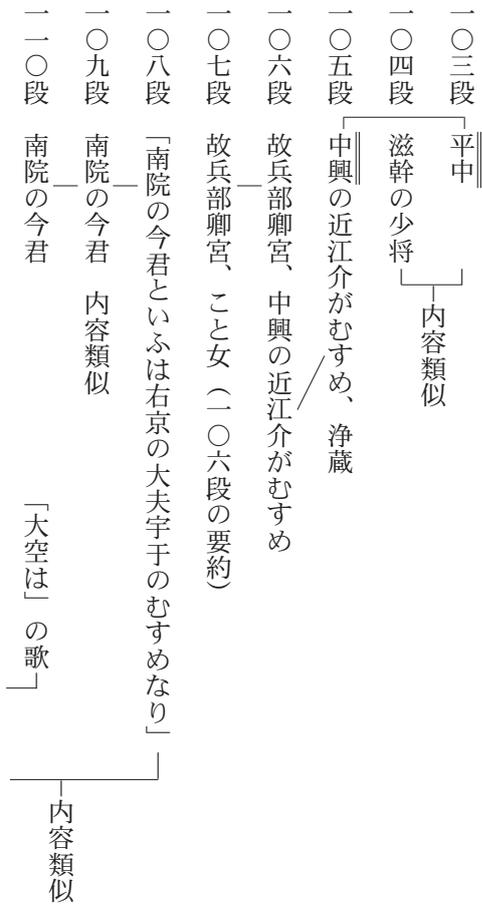
おなじ女、巨城が牛を借りて、またのちに借りたりければ、「奉りたりし牛は死にき」といひたりける返しに、わが乗りしことをやうしとや消えにけむ草にかかれる露の命は

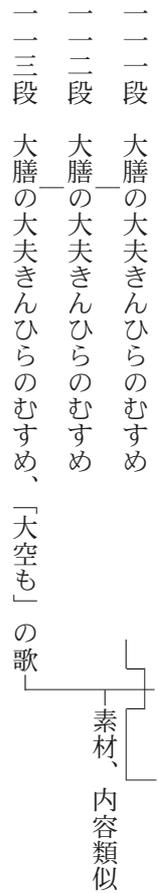
一一〇段

おなじ女、人に、

大空はくもらずながら神無月年のふるにもそではぬれけり

宗于の娘の話が三章段つづいていいる。作者の関心の高さを物語つていよう。今、これらの章段の前後の章段における登場人物、内容等を記してみる。





この周辺は恋の話になっている。南院の今君の章段がなぜここに配置されたかについては前後の章段から考えねばなるまい。一〇三段で平中が登場する。以下、内容や人物で関連し一〇七段まで続いている。

ところが、一〇八段から人物では前段と関わりがない。南院の今君の話は一〇段まで続いている。その後の一一一段から一一三段までは「大膳の大夫きんひらのむすめ」の話になる。このように一〇八〜一一〇段と一一一〜一一三段とは「大夫の娘」ということで類似している。また、一〇八段と一一一段は内容の点で、一一〇、一一三段にある歌は素材や内容の点でそれぞれ類似している⁽¹⁹⁾。このようなことから、大和物語の作者は意図的にこれらの章段を配置したのであろう。そして、南院の今君の話新たな構想で始まる最初に置いたのは父宗子の存在が大きかったとみるべきであろう。これはまた、一〇三段の平中の存在と合わせ、改めて大和物語の作者の宗子への評価の高さをみることができよう。最後に一一八、一一九段は次のような内容である。

一一八段

閑院のおほいきみ、

むかしより思ふ心はありそ海の浜のまさごはかずも知られず

一一九段

おなじ女に、陸奥の国の守にて死にし藤原のさねきがよみておこせたりける。病いとおもくしておこたりけるころなり。「いかで対面たまはらむ」とて、

からくして惜しみとめたる命もてあふことをさへやまむとやする

といへりければおほいきみ、返し、

もろともにいざとはいはで死出の山などはひとりこえむとはせし

といひたりけり。さて来たりける夜も、えあふまじきことやありけむ、えあはざりければ、かへりにけり。さて、朝に、男のもとよりいひおこせ

たりける。

あかつきはなくゆふつけのわび声におとらぬ音をぞなきてかへりし

おほいきみ、返し

あかつきのねざめの耳に聞きしかど鳥よりほかの声はせざりき

一一八、一一九段はこれ以前の章段を意識して配置しているように思われる。先程の一〇八〜一一〇段が宗于の娘である南院の今君の話。一一八、一一九段も彼の娘の閑院の大君の話である。⁽²⁰⁾ 前述のごとく一〇八〜一一三段には意図的な配置がみられたし、しかも宗于の娘の話ということで、一一八、一一九段をもっと近くに置いてもよかつたはずである。しかし、そうはせずにその間に一一四〜一一七段を置いている。しかもここには内容の上で関連する点がみられる。今、関連する事項を記してみると次のようになる。

一一三段 公平女

「ねこそなかるれ」

一一四段 桂のみこ

「ひちにけるかな」

「七夕のころ」

一一五段 右の大臣 少式のめのと

「露のはかなさ」

「秋の夜」

一一六段 公平女

「死ぬとて」

「なみだ」

一一七段 桂のみこ

「音のみなく」

待つ恋

一一八段 閑院の大君
一一九段 閑院の大君

一一三段から一一七段まで語句の上で関連がみられる。その中で一一六段の公平女の話を一三三段の直後に置いているのではなく、その間に一一四、一一五段を置き、彼女の死に至るまでの雰囲気を作っている。また、一一四、一一七段に桂の皇子の話も置いている。特に一一七段は一一六段の公平女の死の後に置き、一一八段への中継ぎの働きをしている。一一九段には虚構化がみられ、これは前述の宗于の章段にもみられたこと、宗于への作者の関心の高さがそうさせたのであろう。なお蛇足になるが、一二〇段は忠平、仲平の出世についての話で、これを配置した背景には不遇な身にあつた宗于のことがその背景にあるのであろう。

一一八、一一九段は南院の今君の章段を考慮に入れてここに置かれていると思われる。ただ、二人を連続させるのではなく、その間に様々な章段を配置することで変化を持たせ、その後に閑院の大君を登場させている。そして一一八、一一九段から新たな主題で始まるわけでもなく、その位置も宗

于の章段からかなり離れている。

六

大和物語における宗子関係の章段について先学とはやや異なる視点から考察してきた。これらの章段から単なる羅列ということではなく、ひとつの構成意識を窺い知ることができた。章段が連続する場合はもちろんのこと、単独の場合、宗子の息子や娘の場合も構成を考えて配置しているというところである。これらの章段は主として話の内容が変わる最初に置かれたり、橋渡しの働きをしたり、重きを成していた。そこには作者の宗子への関心の高さが反映されているようである。ただ、ここでは宗子関係の章段だけを対象にして考察してきたが、できれば彼一人ではなく、他の主要な人物について調査し、検討する必要がある。これについては今後の課題にしたい。

大和物語の登場人物がその構成にどう関わっているかについては今までそれほどなされて来なかったようである。今後はこのような方面からの考察も必要ではないか。そして、このような考察を積み重ねていくことにより、作者の創作意図が徐々に見えてくるのではなからうか。

注(1) 拙稿『大和物語』附載説話第二類をめぐって(『古典論叢』13号 昭和58年11月 後に『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録)。本書第一章第六節。

- (2) 『國學院雜誌』57巻6号 昭和31年12月 後に『平安歌人研究』(三弥井書店 昭和51年7月)に再録。
- (3) 『中古文学』20号 昭和52年10月。
- (4) 『商学集志 人文科学編』24巻3号 平成5年3月 後に『国文学年次別論文集 中古2 平成5年』(朋文出版 平成5年11月)、『大和物語の研究』にそれぞれ再録。本書第四章第一節。
- (5) 勉誠社 平成9年2月。
- (6) 『新編日本古典文学全集大和物語』(小学館 平成6年12月) 頭注。
- (7) 『大和物語評釈・六十四 右京の大夫宗子』(『国文学』13巻6号 昭和43年5月 後に『大和物語評釈 上巻』(笠間書院 平成11年3月)に再録)
- (8) 『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院 昭和56年2月)

- (9) 『大和物語』の監の命婦（『阿闍梨一男博士平安朝文学研究 作家と作品』有精堂出版 昭和46年3月 後に『歌語りと歌物語』〈桜楓社 昭和51年5月〉に再録）
- (10) 『大和物語』の『後撰集』歌章段をめぐって（『米沢国語国文』14号 昭和62年4月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和62年』〈朋文出版 昭和63年11月〉、『伊勢物語・大和物語論攷』〈鼎書房 平成12年9月〉にそれぞれ再録）
- (11) 『大和物語全釈』〈大学堂書店 平成5年12月〉
- (12) 拙稿「大和物語の創作方法―伊勢関係の章段―」〈『古典論叢』18号 昭和62年8月 後に『大和物語の研究』に再録〉。本書第二章第八節。注(6)に同じ。
- (13) 注(6)に同じ。
- (14) 注(12)に同じ。
- (15) 「桂のみこに、式部卿の宮すみたまひける時、その宮にさぶらひけるうなるなむ……」とある。
- (16) 高橋正治氏は「三十段から三十七段までは「官位のががらないことを嘆く」という内容の群である。」と述べられ、38段を含めていない。しかしここには「一条の君といひて、京極の御息所の御もとにさぶらひたまひけり。よくもあらぬことありて、まかだたまひて、壹岐の守の妻にいますかりて云々」という本文があり、内容が前の章段に類似している。このことからこの章段もこの群に含めてよからう。
- (17) 注(6)に同じ。
- (18) 拙稿『大和物語』小考―構成意識をめぐっての一試論―（『商学集志 人文科学編』25巻1号 平成5年9月 後に『国文学年次別論文集 中古2 平成5年』〈朋文出版 平成6年11月〉、『大和物語の研究』にそれぞれ再録。本書第三章第一節。
- (19) 一〇八、一一一段は「絶ゆる恋」で、一一〇、一一二段は「時雨」が素材になり、内容は時雨を思わせるように涙を流すということで、それぞれ類似している。
- (20) 森本茂氏は「閑院の大君―源宗于女説批判―」（『国語と国文学』62巻2号 昭和61年2月 後に『大和物語の考証的研究』〈和泉書院 平成2年10月〉に再録）という論考で、閑院の大君について宗于女ではなく、貞元親王の長女であるという説を提出された。今後、検討すべき説であるが、ここでは従来の説に従って宗于女ととり論を進めていきたい。
- (21) 注(12)に同じ。

第四節 大和物語の構成について

―後半の章段を考察の対象として―

―

歌物語の代表的作品のひとつに数えられている大和物語は、つねに伊勢物語と並び称せられている。しかし、どちらかという大和物語は伊勢物語の陰に隠れてしまい、あまり重視されなかつたようである。その原因には種々のことが考えられるが、ひとつには伊勢物語が在原業平の物語とされ、歌道必見の書として重視されて来たのに対し、大和物語はこのようにことに乏しかったこともあげられよう。このような傾向は、江戸時代はもちろんのこと、つい近年までと言っても過言ではない。

しかしながら、最近になって種々の面から考察が加えられ、それなりの評価がなされているように思う。⁽¹⁾特に大和物語は歌物語から長編物語へ移行する過渡期の作品に属し、複雑な面をも有している作品と言える。とりわけ、大和物語後半の章段は大方伝承的に昔話に素材を得ており、そのような傾向は著しい。この現象については世俗的、散文的精神が自らを文芸的世界へ高めて行こうとするあらわれと諸家が等しく認めている。したがって、後半の章段に焦点をあて、大和物語の作者がどのような意図をもって構成していったかを探ることは興味ある事柄であると思う。

―

先程、大和物語の研究は最近、種々の面から考察が加えられるようになったと述べたが、こと構成に関した論考は必ずしも多いとは言えない

注釈書や校注書に載っている簡単なものはあるが

そこで、今まで構成を扱った論考をみていくことにしよう。まず高橋正治氏による「別本大和物語の成立に就いて―構成論を基礎とした試論―」⁽²⁾があった。扱っているのは別本⁽³⁾であるが、大和物語全体の構成についてもふれておられる。即ち、全章段を第一義的章段と副次的章段に分類されている。そして、この論をさらに発展させたのが「大和物語の構成」⁽⁴⁾である。ここでは各章段の関連性、そこに置かれた理由について言及されている。

次に、南波浩氏は

大和物語の構成ならびに構想は、けっして無統一な恣意のままの雑纂ではなく、その配列や取材範囲において、当初から一往の目やすとなるものを持つていた事が察知されるのである。⁽⁵⁾

と述べておられる。ただ、この考えで実際に引用している章段は初段から二四段までで、最後まで扱っていないのが惜しまれる。

また、中田武司氏は「大和物語の構成形態」⁽⁶⁾で、後半にある長編の章段の出現理由、大和物語の発想について考察されている。さらに、稲村雅敏氏は「百四十一段以降に於ける構想について」⁽⁷⁾において、説話の発生年代、個人説話、伝承的説話に分け、これらのことから次のように分類されている。

- 一四一段～一四六段 載録者と隔たりのない時代
- 一四七段～一四九段 伝承的部分
- 一五〇段～一五三段 載録者より上代の時代
- 一五四段～一五八段 伝承的部分
- 一五九段～一六六段 載録より一世代位前の時代
- 一六七段～一六九段 伝承的部分

氏は一六九段までしか扱っておられないが、もし一六九段以降が後から増補されたとするならば、そこまで、どのような意図でもってなされたかを考えるべきではあるまいか。この外、構成を直接、扱ったものではないが、柿本奨氏の「章段別内容一覧表」⁽⁸⁾があり、構成を考える上で貴重な資料である。

ともかく、今までの構成に関する論考は、おおまかになされており、何故、そこに置かれているのかや、各章段との関連などについては比較的希薄のように思われる。

後半の章段を考察の対象とするわけであるが、それをどこで区分したらよいかがまず問題になる。後半の章段は漠然と伝承的な昔話から素材を得ているとはいうものの、どの辺からそうなっているのかという点必ずしも一定していなかった。例えば順徳院の『八雲御抄』第一に「大和上下」とあるが、古写本等で二帖分断が一定かという点ではない。また、藤岡作太郎氏は『国文学全史平安朝編』で、「この書の体裁は一変ず、その境に滋春のことを記したるところ二箇条あり。その條の後に、「仮初のゆきかひ路とぞ思ひしを今はかぎりの門出なりけり」という辞世の詠をよみて遠逝せりといふは、頗る伊勢物語の結末に似たり」と述べ、一四三段あたりを境とみているようである。これとてその構成や内容から考えて納得できるものではない。⁽⁹⁾

このような中であつて、一四一段説、一四七段が提出された。これらは、その内容から検討されたものである。その詳細については『大和物語』小考—前半と後半の分け方についての「一試論—」（本書第三章第二節）に譲るが、私もその中で、先学とは別の視点から考察し、一四一段説を妥当と考へた。なお松尾拾氏は「大和物語文体試論」⁽¹⁰⁾において、大和物語がどのような資料に基づいて成立したかを考えるために、大和物語における「時」を表わす語を取り出し詳細に検討された。その結果、一四一段を境として構成上の断層が形態面にも反映していることを指摘された。これは実証的に文体を扱うことにより得た結果であり、信頼に値するものと思う。

以上のようなことから、一住⁽¹¹⁾ここでは一四一段以降を後半の章段として考えていきたい。そこで、論を進める便宜上、次のような一覧表を作成してみた。

| 区分 | 章段 | 場所 | 登場人物 |
|-----|-------------------------|--------------------------------|---|
| (1) | 146 145 144 143 142 141 | 都 都(行幸) 都 都 都 都 | 大和の掾 △筑紫の女 妻 よばふ男 △故御息所の御姉 継母 父親 △在次君 五条の御 △在次君 亭子の帝 △しろ 供人 亭子の帝 △大江玉淵女 浮かれ女 |

| (5) | (4) | (3) | (2) |
|--|---|--|--|
| 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161 160 159 | 158 157 156 155 154 | 153 152 151 150 | 149 148 147 |
| 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 | 大和の国 下野の国 信濃の国 陸奥の国 大和の国 | 都 都 都(行幸) 都(行幸) | 大和の国 津の国 津の国 |
| <p>△良岑宗貞 △女</p> <p>亭子の帝 △黒主</p> <p>△今の左大臣 △大和 故式部卿宮</p> <p>△伊衡宰相 故式部卿宮 △兵衛命婦</p> <p>内舎人 女</p> <p>△良少将 △小野小町 △京極の僧都 女</p> <p>男 △女</p> <p>△在中将 △女</p> <p>弁の御息所 △在中将</p> <p>△在中将 人</p> <p>△在中将 後の宮</p> <p>△在中将 御息所の御方</p> <p>△在中将 二条后</p> <p>△染殿内侍 △在中将</p> <p>染殿内侍 △能有大臣</p> | <p>男 △女</p> <p>△下野の女 男 真楳</p> <p>△大納言の女 △内舎人</p> <p>△更級の男 妻 姫</p> <p>△大和の女 △京の男</p> | <p>△ならの帝 △人麿</p> <p>△ならの帝 大納言</p> <p>△ならの帝 △嵯峨の帝</p> | <p>男 △女 故后宮 △伊勢 その他女房 旅人</p> <p>△蘆刈の男 △難波の女</p> <p>男 △葛城の女 今の妻</p> |

(注) △印は、その章段で歌を詠んでいる人物を示す。

一四一段以降の章段を(1)から(5)のグループに分けたが、これは場所を基準にしたのである。そうすると都と地方とが交互になっていることに気づく(ただし一四四段は東の国になり矛盾をきたす。これについては後述)。これは先程の稲村氏の分類に一部を除き一致している。ただ、氏の分類の方法には年代不明の章段も含まれており、矛盾な点がでてくる。私自身としては両者が交互に織り混ぜられているとみたい。

(1)

まず(1)のグループについて検討してみよう。一四一段に登場するのは大和の掾、その妻、筑紫から連れて来た女、よぼう男の四人である。この中で中心的な役割をはたしているのは筑紫の女であろう。それはこの章段にある和歌がすべて彼女の詠作であることから窺うことができよう。

ところで、この章段にある和歌は、いずれも檜垣姫集にあるところから、両者の関係が考えられるが、これについては檜垣姫集にあつて大和物語と共通する部分は大和物語からとられ、かつ増補されたものであることが立証されている⁽¹¹⁾。そうすると、筑紫から連れて来た女は一概に檜垣姫とは断定できなくなる。それにしても片田舎にあつて、これだけの歌を詠むのであるから、かなり名の知れた女性であつたことがわかる。また「筑紫なりける女」は一二九・一三〇段にも登場する。しかもこの章段にある和歌は、この一二九、一三〇段の歌をもとに作られている⁽¹²⁾。それにこれらの章段の前にある一二六、一二七、一二八段は檜垣の御のことが記されており、その後にあるから大和物語の作者は同じ人物として、少なくともそのような意識で考えていたのであろう。

次に一四二段は、美しい女性が継母に育てられ結婚もしないで一生を終えた話である。その美しい女性とは故御息所の御姉という人物である。このような書き方をすると我々はすぐに女流歌人である伊勢を思い出す。事実、異本系統に属する御巫本、鈴鹿本、それに勝命本はいずれも「いせのかみのむすめの御姉」となっている。また、この章段にある「ありはてぬ」の歌は伊勢集に見え、さらに古今集にも平中の作として出ていることから、この章段は虚構であることが立証されている⁽¹³⁾。

では、一四一段と一四二段はどのような関係があるのか。一四一段において、筑紫の女は前述の如く檜垣姫を暗示させていることは事実であろう。それに続けるのには、どうしても著名な女流歌人をもつてくる以外にない。そうすると作者の脳裏に伊勢が浮かんだのである。しかし、伊勢の話そのまま載せるのではなく、彼女の姉にしたたのであろう。しかも伊勢の姉ということであるから、才能の持ち主であつたことは読者にとつて、すぐ想像つくことである。この効果をもねらっているのであろう。それに、一四一段と一四二段はその冒頭において共通するものがある。すなわち「よしゑといひける宰相のはらから」、「故御息所の御姉おほいこ」とあり、いずれも兄弟について記している。その上、故御息所の御姉もよしゑも伊勢

の姉であるとか、橘良植ではないかと言っただけではつきりとした証拠はない。一四二段は前述のように虚構であることが立証されている。そうすると一四一段についても、それと同じことが言えるのではないか。つまり大和物語の作者は同じ発想をすることによって類似の話を持って来たのである。「よしいゑといひける宰相のはらから」は発想の手段にすぎなかった。あくまでも筑紫の女に中心があり、はつきりと名前を出さずにぼかしているのは虚構でもって、これからの章段を構成していったことを示しているであろう。⁽¹⁵⁾そして、一四二段の話をもつて来たのは次の章段に関連づけるためであろう。

一四三段は在次君の話。この章段がここに置かれたのは、この章段に「かの在次君の姉の、伊勢の守の妻にいますかりける云々」とあるから、一四二段が御息所の御姉のことを扱っており、これは先程、伊勢の姉のことについて記したのではないかと推定した。しかもこの章段において伊勢の守が出てくることから、一四二段は伊勢の姉のことを記したことに、もはや疑う余地はあるまい。一四四段は在次君が東に下る話である。この章段の場所は東の国であり、地方になる。都の中に地方が入っていることは不自然の感がする。しかし、この話はあくまでもその地方に根ざしたものでなく都の人が地方に旅したにすぎない。このことから都に準じたものとして処理できよう。

一四五・一四六段は亭子の帝が川尻、鳥飼の院にそれぞれ行幸したことについて記したものである。ここに行幸の話をもつて来たのは、一四四段が旅することであり、それに関連づけたのであろう。私はこれらの章段の場所を都としたが、正確には津の国になる。しかし、これは先程の一四四段と同様に帝が単にそこへ行幸しているにすぎない。また説話的な要素も少ない。このようなことから都に準じたものとして処理出来よう(これと同じことは一五〇・一五一段についても言える)。

さて、これらの章段がこの位置にあることについて高橋氏は一四四段の末尾に「この在次君(中略)いとあはれとおもひけり」とあることから、古人を懐しむ気持ちが強く表わされているとし、その結果、一四四・一四五段が続くとしている。確かに古人を懐しむ気持ちは出てくるであろう。しかし、もつと体系的に章段の関連は考えられないだろうか。私見によると、(1)のグループは一四六段までとなる。しかもその順序はおおよそ女性、在原滋春、亭子の帝となり、これは帝を頂点として身分的な配慮でもって並べられているのだろう。このようなことは後の章段についても言えそうである。また一四五・一四六段において、歌を詠んでいるのは大江玉淵女としろである。この二人は、『古今和歌集目録』、『尊卑分脈』によると同一人と出ている。

一方、石井純子氏は両者を別人とみており、さらに一四六段の大江玉淵女も実は玉淵女ではないことを推測されている。⁽¹⁶⁾さしあたって問題になる両者を別人とした理由について、氏は『古今和歌集目録』の著者である藤原仲実あたりが大和物語において遊女の話が並べてあるので、こう考えられてきたことをあげている。

はたして、いずれが妥当なのであろうか。もしも同一人であるとするならば、彼女の父親の大江玉淵は阿保親王の後裔にあたり、業平や滋春とは同じ一族ということになる。事実、今井源衛氏は同一人とみて、そのようなことで関連があることを指摘されている。⁽¹⁷⁾ 大和物語後半の(1)のグループにおいて一四二・一四三段あたりには、前述の如く血縁的な関係を認めることができた。大和物語の作者はその方法を次の一四五・一四六段にも及ぼしたのではないか。思うに、一四五・一四六段の「しろ」と「大江玉淵女」を作者は同一人と考えていたのであろう。そのためにも在次君の章段と同じく、バランスを考えて二章段を配置したのであろう。しかし、なぜ「しろ」と「大江玉淵女」と別々な名称にしたのかは不明である。それとこれらの章段は前述の如く、津の国に行幸することであり、一四七段に津の国が出てくることは何か偶然とは言えない面があろう。

ともかく、(1)のグループはおおむね女、在次君、帝というように表面的には身分的な配慮でもって配列されているのであろう。その上、各章段とも内容面からも関連し合っているように思われる。

(2)

次に(2)のグループである一四七段から一四九段までについて考えてみたい。

まず一四七・一四八段は津の国にまつわる話である。一四七段はあまりにも有名な処女塚伝説である。この話は万葉集にも載っている。ただ、大和物語が万葉集と異なるところは、その構成において三部から成っていることである。即ち伝説、その伝説に基づいての詠歌、後日譚となっている。処女塚伝説は最初の部分だけなのである。特に伝説に基づいての詠歌では伊勢をはじめ、内親王や女房が登場する。いわば、ここには宮廷サロンの姿が映し出されている。このようにしたのは、前段が亭子の帝に関することであり、それに関連つけて宮廷サロンの姿をもつて来たのであろう。もし、一四七段が処女塚伝説のみで終わっていたらどうであろうか。一四六段から一四七段への移行があまりにも唐突しすぎはしまいか。そのため一四七段では(1)の都の要素を含ませつつ、一方では地方の伝説をもつてくることにより自然な展開を試みている。

一四八段は蘆刈り伝説として、これまた著名な章段である。これは前段の連想から同類の話の載せているのであるが、前段は宮廷サロンと伝説などを記しているのに対して、ここでは伝説にのみ終始している。こうしたのは章段間をスムーズに関連させるためにほかなるまい。そうして、いつの間にか一四九段の立田山伝説に読者を引き入れている。この章段もまた有名な話であることから前段と共通している。しかもこの章段は、大和の国が舞台になっている。なぜ、ここに大和の国の話を持って来たのかというと、次の一五〇段から一五三段までは都になり、都に続けるのはどうしても大和の国が必要だったのである。つまり都に近い国を持つてくることにより、スムーズに移行する働きをしていると思うのである。また一四九段の最後にある「この男は王なりけり」(ただし御巫本、鈴鹿本には「在中将の事とそきこえし」、勝命本、支子文庫本には「在中将のことゝそはんに侍る」とある)と

いう本文は在原業平を暗示していることは事実である。彼は平城帝を祖父としていることから、一五〇段から一五三段まで平城帝に関する話を持って来ているという考えもある。⁽¹⁸⁾これは先程の一四六・一四七段とほぼ同様に考えられるところであり、もとより妥当な考えといふべきであろう。

(2)のグループは、いずれも地方の著名な伝説を集めている。この部分を前記の如く稲村雅敏氏は「伝承的部分」とされている。確かにここには伝説が集められているからそう考えられる。しかし、実際に検討してみると各章段は雑然と並べられているのではなく、意図的になされているのである。

(3)

一五〇段から一五三段までは主人公がすべてならの帝である。ならの帝については、一五三段が平城天皇であることが史実（類聚国史）から立証出来るが、これ以外の章段については諸説あり一定していない。というのは一五〇・一五一段に人麿が登場するからである。このため種々の帝があてられてきたのであった。このような中で賀茂真淵は、これらの章段が虚構であることを指摘した。⁽¹⁹⁾ただ、根拠をあげていないのが惜しまれる。これを受けて、今井源衛氏は平安中期における人麿の年代把握が一般にあいまいであったことを指摘され、ならの帝と人麿の結びつけは十分考えられるとしている。そして、当時の伝承を強調している。⁽²⁰⁾

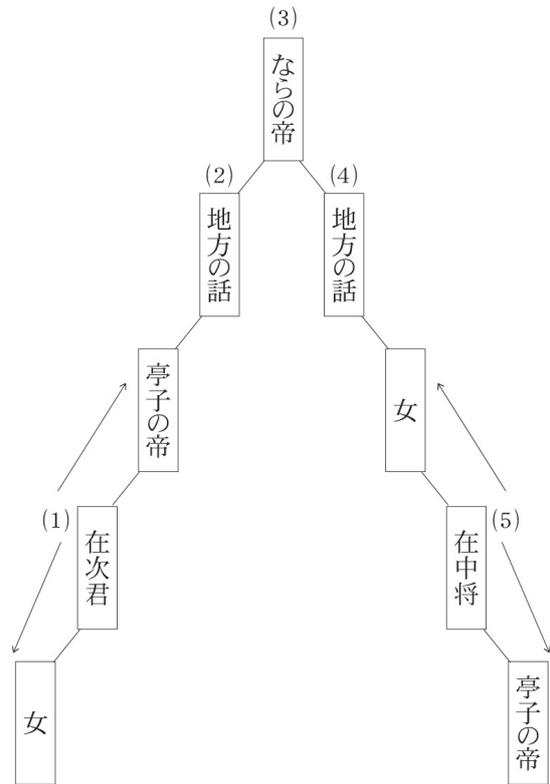
さらに雨海博洋氏は、これらの章段について、史実的な面、とりわけ当時の社会的情勢や他の文献をあさり詳細に検討された。詳しくは氏の『大和物語』の「ならの帝」⁽²¹⁾に譲るが、ここではその結論にあたる部分を引用しておく。

一五〇段は采女の入水にまつわる伝説、伝承歌から成り、この段の「ならの帝」は平城帝を主としながら、桓武帝の要素が采女に関して加わっている。一五一段は前段の平城帝と柿本人麿の組み合わせを受け、古今集仮名序、古今歌をもとに兩人の歌の唱和の歌となり、一五二段では「ならの帝」は桓武帝の鷹に関する史的事実を背景に、「いはで思ふ」の歌で平城帝と結びついて「ならの帝」となっているが、桓武帝の占める位置は一番大きい。

最後の一五三段は平城帝との唱和で、これこそ史実そのもので、「ならの帝」は即平城帝となっている。

これらのことから、一五〇段から一五三段は同じ帝が主人公になっているものの、その内部においては、かなり意図的になされていることが理解出来る。まして、大和物語の作者がこのような構成をすることは今まで述べて来た章段や、これから検討して行く章段を見ても十分考えられると思う。ともかく、このグループは先学の考えで尽きるので、私の入り込む余地はないが、このグループが全体（一四一段以降をさす）からみてどのような位置にあるかについて考えてみたい。

このグループは、前述のようにならの帝でもって統一されていた。これは他のグループに比較すると異質なものである。こうしたのはどのような理由からか。全体からみると、このグループはどのようになっていくかを図式化してみると、おおよそ次のようになる。



ならの帝の章段を中心にして、ほぼ同じ形態のグループが左右に置かれていることがわかる（二五三段以降の章段については後に述べる）。つまり、このグループは橋渡し的な役目をしているのであろう。しかも単にそのようにしてはならず、このグループは頂点に据えられているように思う。もし、単なる橋渡しだけならば、何も帝の話を持つてくる必要はあるまい。やはり、ここにならの帝を置いたのは作者のならの帝への崇敬の念のごとき意識の現れであろう。ただ、このような考えは一四一段以降を後半の章段と見るにより可能なものになる。これは偶然の結果なのであろうか。大和物語の作者は構成に關してはかなり気を配つたようである。このことは今まで見て来た章段や、これから述べていく章段を見ると理解できる。それなのに偶然の一致とは考えられない。大和物語の作者は一四一段以降をそれ以前の章段とは別の意識でもって構成していったのであろう。このようなことから、大和物語の後半を一四一段以降とするのが妥当であろう。これはまた一四一段以降を後半の章段とする先学の説に対しての傍証となろう。

なお、このグループは場所を都としたが、ここに登場するならの帝がいかなる帝をさすかによって多少の変化が出てくる。例えば、ならの帝を文武聖武天皇にとると当時の都は大和の国になり、地方になってしまう。また平城、桓武天皇にとると都になる（大和物語の成立を基準に考えて）。しかし、このことについては雨海氏が前記の論文において、ならの帝は古くから平城帝と認められていたことや、大和物語の作者の意識にも皆同一天皇、すなわち平城帝として扱われていることを指摘されている。したがって、平城帝が作者の意識にあったことは、疑う余地はあるまい。このようなことから

都として処理するのが妥当のように思う。

(4)

次に(4)のグループを検討することにしよう。(3)のグループ、とりわけ一五三段と一五四段はいかなる関連があるのだろうか。はつきりした要素がないようである。しかし、このグループの最後に大和の国を置いていることは地方へ移ることを暗示している。つまり、先程の一四九段と同様に都に近い国を持つてくることにより、唐突を少なくしているのである。これは後に述べる一五八段についても言えることである。

さて、一五四・一五五段は⁽²⁾いずれも男が女を盗んで、女が死んでしまうという類似の話である。それゆえ同類の話を持つて来たことがわかる。しかも前者は立田山、後者は安積山がそれぞれ舞台になっており、(3)のグループが都になり、そこから近い順に並べていることがわかる。これは章段間をスムーズにするひとつの技法でもあろう。また、これらの章段を持つて来たのは立田山、安積山という、歌枕として著名な山を持つてこようとする意識が大和物語の作者にあったのであろう。

次いで一五六段から一五八段までは純粹な地方の話を集めたものである。これらの章段は、いずれも幸福になるという点で共通している。ここでも同類の話をもつて来たことがわかる。これは、一五四・一五五段が不幸にな結末になることから、それと対照させたのであろう。ただ、これからの章段の中で一五六段は異質なものになる。というのは有名な姨捨山が出てくるからである。一五七・一五八段には山が出てこない。ではなぜ、このような章段をここに置いたのかというと、一五四・一五五段に立田山、安積山が出ており、それに関連づけて姨捨山を持つて来たのである。しかし、そうした山を持つて来たとはいうものの、内容においては一五七・一五八段に関連づけている。つまり一五六段は一五四・一五五段と一五七・一五八段との橋渡しをしていると言える。こうすることにより、スムーズに関連し合っているのである。そして一五七段は都を基準にして、信濃国より遠い下野国を配し、一五八段は大和の国となっている。ここに大和の国を置いたのは次の章段から都の話であることを示している。ここでも前述の一四九段や一五四段と同じ事が言える。これは前に述べたことをさらに強化せしめよう。

(4)のグループは地方の話を集めているものの、各章段間は実に綿密になっている。このことから大和物語の作者がいかにその構成において努力したかが理解できよう。

(5)

最後に一五九段から一七三段までについて考えてみよう。まず、一五九段と一六〇段は染殿后と交渉のあった男性との話を載せている。前者は能有大臣、後者は在中将である。そして、一六一段から一六六段までは在中将と女性をめぐる話である。しかもこれらの章段は伊勢物語と共通しており、

当然、それとの関係が考えられる。これについては先学の御説がある。⁽²³⁾

ところで、これらの章段は雑然と並べられているのか。それとも何か意図的なものを見出しうるのか。一六一段は一六〇段の連想から生じた章段である。この章段は伊勢物語三段と七六段とが合わされて、前半は二条後の入内前、後半は入内後の話になっている。このようにしたのは、次の一六二・一六三段と無関係ではない。大和物語一六二段と伊勢物語一〇〇段は登場人物の表記において異同がある。伊勢物語では「あるやんごとなき人」となっているのに対し、大和物語では「御息所の御方」になっている。いずれも貴い人であることには違いないが、大和物語の方がより具体的であるようだ。つまり御息所ということから、二条后を暗示させているのであろう。このような傾向は次の一六三段についても言える。伊勢物語では単なる人になっているのに対し、大和物語では後の宮になっている。大和物語は前段と統一しているのであろう。

ともかく、一六一段で、在中将と二条后を印象づけ一六二・一六三段で入内後の話を載せたのであろう。しかしながら、次の一六四段は両者とも人になっている。このことについて、今井氏は

一六四段では、伊勢五二段の通りに「人」となっている。おそらく歌の内容からみて、沼地に下りてあやめを刈り歩くなどは後の身分にふさわしくないからであろう。しかしその為に一六一段以降に一貫していた在中将と二条後の風流譚という主題性はここに至って弱まった反面、この段は、次段の在中将と弁の御息所との話に移る為の橋渡しの働きをしているとも言えようか。⁽²⁴⁾

と述べておられる。もとより妥当な考えであろう。そして、一六五段は弁の御息所と在中将の話。次いで、その連想から一六六段は、在中将とある女の話の載せている。一六五段は在中将の臨終のことが記されており、連想とは言ってもその後一六六段がくることは一見、不自然の感じがする。在中将関係の話は一六六段で終わるのであるから、最後に臨終の話を持って来るのが自然ではなからうか。いわば、それを無視してまで、なぜこのようにしたのであろうか。これは一六七段にスムーズに関連づけるためではなかったのか。前述の如く一六六段は一六五段の連想から在中将とある女の話になる。女と抽象化し、その上一六六段と一六七段は、⁽²⁵⁾いずれも男が女に振られてしまう話を持つてくることにより、両章段を関連させているのであろう。と同時に次の一六八段以降の章段との橋渡しをしているのであろう。⁽²⁶⁾

以上のように、大和物語における伊勢物語関係章段は雑然と並べられているのではなく意図的になされていることが理解できたと思う。

一六七段以降から別の話になる。一六七段がここに置かれたことについては前に述べた。一六八段は良少将についての話。彼の話をここに載せたのは、この中に小野小町が登場することなどから考えて、前に在中将が出てくることにも無関係ではあるまい。またここには内舎人も登場する。そして次の一六九段は内舎人なる人、一七〇段は伊衡の宰相、一七一一段は今の左大臣、一七二段は亭子の帝帝尊、尊とていうように、これらは身分的な配慮でもつ

て並べられているのではあるまいか。しかも一七〇・一七一段に故式部卿宮が出てくることは、一七二段に亭子の帝が登場することから親子というこ
とで、関連させているのであろう。しかし、一七二段に亭子の帝が登場しても彼の歌は一首もない。ここで詠歌しているのは大友黒主である。これは
(1)のグループの一四五・一四六段と同じ形になっている。次に一七三段は良岑宗貞の話となる。これは一七二段に黒主が出てくることと関係がありそ
うだ。大和物語の後半においては在原業平、小野小町、良岑宗貞、大友黒主という代表的歌人が名を連ねている。これは六歌仙という、著名な歌人を
配置しようという意識が大和物語の作者の脳裏にあったためであろう。

ところで、一六七段以降の章段はその配列において、何か意図的なものが見られないだろうか。先程、身分的な配慮で並べられているのではないかと推測したが、これをはつきりと証明するには障害が伴う。そのこととして一七三段があげられる。もし、これらの章段がなかったならば、実にスムーズになるのである。ここで思い起こすのが高橋氏の説である。⁽²⁷⁾氏は一六九段が途中で終わっていることに注目され、こうなっているのは作者が意図的にしたのであって、こうすることにより、読者の種々の考えを持たせる効果をあげているとしている。そして、大和物語の原本は一六九段で終わっており、一六八段と一七〇段以降を増補とみておられる。しかも一六八段を付加した人は一六九段の物語末尾の方法を知る人であり、一六九段の手法を生かすために一六八段を一六九段の前に置き一六八段の成立は一七〇段以降が付加されなかった時期であると考えておられる。

氏は一六八段もそうみておられる。増補の時期や方法については多くの曲節が予想されようが、ここでは一七三段にしばらく、これらが増補されたものであることを裏付けてみたい。

一七三段についてみるに、勝命本はこの章段を有していない。また、今井氏によると、これの祖本と言われている田村本鎌倉初期古写本にも存在しないとのことである。そして、この章段は文章が全体的にかなりのびのびしていて、他と趣の違った点があることなどから、高橋氏の増補説を支持されている。⁽²⁸⁾御巫本、鈴鹿本は一七二段の次に附載説話があり、一七三段はその後にある。一七二段の後に章段こそ異なるが、巻末にあつてこのような状況を示していることは、本文はもちろん、その章段においても、かなり流動していたのであろう。また、単純なことかもしれないが、大和物語の初段は亭子の帝の話であり、すると最後まで彼の話で終わるのが自然ではなからうか。

それに、このグループは(1)のグループと同じようになっていくことに気づく。これが偶然でないことは(3)で述べた。しかも、これは(1)のグループが身分的な配慮で並べられているという推測を確かなものとしよう。ただ、(5)のグループは在次君から帝へ行く過程を見るに、直接行かず、一六七・一七一段を置いている。これらの章段は前述の如く、ほぼ身分的な配慮で並べられており、当時の貴族社会を描いていると言える。その頂点に帝を置くのは当然である。いわば、これらの章段は一七二段を引き出すためにもって来たにすぎなかったのである。さらに、後半の章段が体系的に配置されて

いるということを見ると、一七三段は(1)のグループと比べてみると矛盾をきたしており、このことから一七三段は増補されたものと考えたい。以上のように、最後のグループは意図的に構成されているが、今まで見て来た中でもっとも複雑な様相を呈していた。しかも最後になって、このようになっていることは大和物語の成立の複雑な一面をのぞかせているようである。

四

従来、大和物語の構成については、主に内容的な面からわずかではあるが追究されて来た。本稿では後半の章段に限定し、しかも各章段の関連ということに主眼を置き、若干の考察を試みたわけである。

実際に調査検討してみると、大和物語の作者は各方面に気を配っていたことが理解できた。前にも述べたことと重複するが、後半の章段は都と地方とを交互に配置し、しかもそれらは単なる羅列で終わっているのではなく、それぞれのグループ間やそのグループ内には内容、人物の面で、うまく関連させている。そして、これらの章段は全体（一四一段以降のこと）からみて体系的に並べられていると思う。このことから大和物語の後半の章段は一四一段以降を指すという考えを支持したい。

ただ、ここでは後半の章段を対象としたため、前半の章段についてはふれないでしまった。これについては今後の課題としておき、以上述べたことは、あくまでもひとつの試論であることを断って、この稿を終わりたい。

- 注(1) 拙稿「最近における『大和物語』研究文献—昭和41年1月より昭和47年12月に至る—」（茨城県立多賀高等学校紀要）1集 昭和48年7月 後に『大和物語の研究』（翰林書房 平成6年2月）、『大和物語研究史』（翰林書房 平成18年11月）にそれぞれ再録）
- (2) 「国語と国文学」30巻2号 昭和28年2月 後に『大和物語 塙選書』（塙書房 昭和37年10月）に再録。
- (3) 御巫本と鈴鹿本のこと。
- (4) 『大和物語 塙選書』
- (5) 「大和物語の構成」（『日本古典全書大和物語』朝日新聞社 昭和36年10月）
- (6) 『王朝歌物語の研究と新資料』（桜楓社 昭和46年11月）

- (7) 「大和物語探求」昭和45年度 二松学舎大学雨海ゼミ。
- (8) 『大和物語の注釈と研究』（武蔵野書院 昭和56年2月）
- (9) 『大和物語』小考―前半と後半の分け方―（「解釈」32巻9号 昭和61年9月 後に『大和物語の研究』に再録）。本書第三章第二節。「語文」24輯 昭和41年6月。
- (10) 山口博氏「檜垣姫集論」（『王朝歌壇の研究』村上冷泉 四融朝篇 桜楓社 昭和42年10月）
- (11) 拙稿「大和物語における虚構の方法―一四・一四二・一五四段を例にして―」（『中古文学』30号 昭和57年10月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和57年』（朋文出版 昭和58年11月）、『大和物語の研究』にそれぞれ再録）。本書第二章第二節。
- (12) 今井源衛氏「大和物語評釈・三六 ありはてぬ命まつ間の」（『国文学』10巻7号 昭和40年6月 後に『大和物語評釈 下巻』（笠間書院 平成12年2月）に再録）
- (13) 『大和物語鈔』、『大和物語抄』、『大和物語虚静抄』など。
- (14) 高橋正治氏も141段について「宰相は参議のことであるが、参議の中には、この名が見当らず、兄弟も条件にあてはまるものがない。未詳とすべきようでもあるが、142段とともに、作り物語とも考えられるので実在の人物をあてはめて考えることは無用かもしれない」と述べておられる（『日本古典文学全集大和物語』小学館 昭和47年12月）。
- (15) 「大和物語一四五段『しろ』と一四六段『大江玉淵女』は別人か」（「解釈」19巻12号 昭和48年12月）
- (16) 「大和物語評釈・三八 大江の玉淵の女」（『国文学』10巻10号 昭和40年8月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録）
- (17) 雨海博洋氏「大和物語」の「ならの帝」（二松学舎大学論集（昭和46年度）昭和47年3月 後に『歌語りと歌物語』（桜楓社 昭和51年9月）に再録）
- (18) 『大和物語直解』（賀茂真淵全集 第十八巻）解説阿部俊子氏 続群書類従完成会 昭和56年7月）
- (19) 「大和物語評釈・四十四 猿沢の池」（『国文学』11巻3号 昭和41年3月 後に『大和物語評釈 下巻』に再録）
- (20) 注(18)に同じ。
- (21) 155段は内舎人である人が安積山へ行くのであるから、これも144段と同じく、都の人がそこへ行っているにすぎない。しかし、ここはあくまでも、そこへ行くことよりも安積山が中心になり、そこで話が展開される。それは安積山伝説と言われる所以でもある。しかも前後の章段に立田山、姨捨山が出ており、これらとも関連づけていると思う。このようなことから地方の話として処理したい。
- (22)

- (23) 阿部秋生氏「伊勢物語と大和物語との関係—物語る部分に就いて—」(『国文学解釈と鑑賞』3巻4号、昭和13年4月)、山田清市氏「大和物語における伊勢物語関係章段について」(『平安朝文学研究』9号、昭和38年7月、後に『伊勢物語の成立と伝本の研究』(桜楓社、昭和47年4月)に再録)
- (24) 「大和物語評釈・五十一 忘れ草」(『国文学』11巻13号、昭和41年11月、後に『大和物語評釈 下巻』に再録)など。
- (25) この章段は都か地方かを判定するのに難解である。それは「人の国にいたづらにみえける物どもなりけり」という本文をどう処理するかにかかっている。これは次のように解釈したほうが妥当ではあるまいか。つまり都にいた男が妻に飽きがきて、地方の女のもとへ行ってしまった。そうして、雉、雁、鴨という地方の産物をもとの妻に送ったのである。これを先程の本文で説明していると思う。このようなことから、あくまでも都が基盤になっている。
- (26) 「大和物語の創作方法—在中将関係の章段を中心にして—」(『大和物語の研究』。本書第二章第九節。
- (27) 注(2)に同じ。
- (28) 「大和物語評釈・六十 蓬の宿」(『国文学』12巻12号、昭和42年10月、後に『大和物語評釈 下巻』に再録)

第四章 大和物語の注釈

第一節 詠み手の心

—『大和物語』第三十段—

*

私達が古典を読んで行く過程で、疑問なところが生じると、多くの場合、辞書や注釈書に頼り解決しようとする。しかし、注釈書にあたってみると、実に様々な解釈をしていることがある。記されていることがほぼ同じなら納得するが、まるで違っていると、はたしていずれが妥当なのか、迷ってしまうこともある。古典を解釈する場合、語句を補わないとうまく理解できないことがある。これはひとつには時代的な隔たりにもよるわけで、それを埋め合わせる場合、注釈者により様々なのである。まして和歌を解釈する場合、その傾向が一段と強い。そこには注釈者の意思が反映されることも少なくない。特に現代語に解釈する場合、語句の許容範囲ということを考えねばなるまい。それは言外に隠されている意味を説き明かすことと言ってもよからう。はたして作者はそこまで考えていたのであろうか。いやそれとは別にこのように考えていたのではないかなどと試行錯誤をくり返し、作者の心情に迫って行くのである。いわばそれは作者と対座して、あらゆる方法を講じてその秘密を説き明かそうとすることである。

そういうわけで、ここではそのひとつのケースとして、大和物語第三十段にある和歌を取り上げ、詠み手の心情に迫ってみたいと思う。

*

大和物語三十段は次のような内容である。

故右京の大夫宗子の君、なりいづべきほどに、わが身のえなりいでぬことと、思ひたまひけるころほひ、亭子の帝に、紀伊国より石つきたる海松

をなむ奉りけるを題にて、人々歌よみけるに、右京の大夫、

沖つ風ふけるの浦に立つ浪のなごりにさへやわれはしづまむ

(注) 本文は『日本古典文学全集』に拠る。

大和物語にあつて短い章段に属する。ここにある「沖つ風」の歌は伊勢集をはじめ、万代集、新千載集にもみられる。これらの中で、成立的に考えて伊勢集との関係が問題になる。伊勢集において、「沖つ風」の歌がある周辺は、いわゆる秀歌選の傾向が強く、後の付加になるものと言われている。⁽¹⁾ 私もそうみるのが妥当であると述べたことがある。⁽²⁾ また、万代集には雑二に、新千載集には恋四に宗于の作としてみられる。当然のことながら、これらは大和物語より後に成るものである。新千載集の場合、柿本奨氏は伊勢集から引かれたものとみておられる。⁽³⁾ ただ、彼の家集である宗于集にはこの歌が収められていない。宗于集は古今集、後撰集から彼の歌を抜粋して成立したようであり、大和物語にある宗于の歌を収めているのは第四類の尊経閣文庫蔵本が有している、三十九段の「しら露の」の歌だけである。これとて後に増補されたものである。⁽⁴⁾ こうみてくると、宗于集に大和物語の歌がとられていないのは宗于集編纂者の何らかの考えの反映とみるべきであろう。

すると、大和物語が成立的に最も古く、もとの姿を止めているとみてよからう。したがって、大和物語の地文に記された詠作事情をもとにしてその解釈にあたるべきであろう。ここは周辺の章段と同じように、官位の上がらぬことへの嘆きがその根底にあつたのであろう。⁽⁵⁾ なお、この章段における諸本間の本文の異同を確かめてみると、解釈上、大きく左右するところはみられない。

ここにある「沖つ風」の歌については、従来、解釈の上でそれほど問題にされなかつた。ここで、あえてこの章段をとり上げたのは、「沖つ風」の歌の「なごりにさへやわれはしづまむ」のところを諸注釈書にあたってみると、色んなふう解釈しており、今ひとつはつきりせず、はたして作者の心情はどうだったかを知りたかつたからにほかならない。これは言い換えると、この歌をいかに解釈したらよいのかということにもなる。

*

まず、古注ではどのように解釈しているであろうか。成立順に列挙してみよう。

(1) ふけ井の浦紀伊国名所也としふけてさへなけきしつまん也と石つきたるみるによせ浅位の述懐を奏し奉らるゝ也

(2) 此物語のこのうたはたゝあらしなみのあまりなとそきこえ侍る歌の心は我身をみなその海松によせてなるへし石つきたるみるを題にてなれば
也なこりにさへやといふにいたくわか身になりいてぬ事の述懐みえ侍るかし

『大和物語抄』

(3) ここもその心に汐干ゆけど猶しづみて有石に身をそへたる也たつ波と先いひてそれがひしほになれるを次にいふ也

『大和物語直解』

(4) 下句は身のなり出ぬ事をふかく歎息し給ふ心見え侍るにや

『大和物語虚静抄』

(5) 汐干ゆけど猶しづみて有石に身をそへたる也立波とはまついひてそれがひしほになれるを次にいふ也

『大和物語錦繡抄』

(注) 本文は『大和物語諸注集成』に拠り、傍線は稿者が施した。以下も同じ。

これらは、(4)を除いてその多くが傍線を施したように、海松に宗于自身を寄せて詠んだものと解釈している。その理由として、大和物語抄では「石つきたるみるを題にてなれば也」と言っている。確かに海松は海中で生息するものであり、まして身の不遇な宗于に寄せていることは十分に理解できよう。ただ、ここで注意しておきたいのは、三十段にみられる海松は宇多帝のもとに献上されたものであり、他の海松とは異なり、めでたく帝の恩恵に欲したものであるということである。このことに関しては、古注では一言もふれていない。海松を献上したことから、海松イコール宗于ととってしまつたのであろう。また、地文にある歌題もそのものに言及している注釈書もみられない。なお、(4)の大和物語虚静抄では海松とどう関係しているのか明らかでない。

*

では、明治以降に刊行された注釈書はどうか。管見に入った注釈書を刊行年代順に列挙してみよう。

(1) なごりは波残の義にて、風の止みたるあとに、なほしづまぬ波をいふ。石つきたる海松に我が身のなり出でがたく沈み勝なるを寄せて述懐せるなり。

『大和物語詳解』明治34年8月

(2) 紀州の吹飯浦に沖風が強く吹いた後の浜辺に打ち上げられもしないで、やはり波の中に沈んで居る石のつきた海松のやうに自分も一向世の中に浮び出られないのであろうか。

『全訳王朝文学叢書 第一巻』 大正13年6月

(3) 石の着いた海松がその重さで吹飯浦に立つ波のなごりにさへ沈んでしまふやうに私もともすれば沈みがちで昇進すべき時にもより昇進せずになることだ。

『大和物語新釈』 昭和6年9月

(4) 吹飯の浦に沖風が強く吹いた後の浜辺に打ち上げられもしないで、波の中に沈んでいる石のついた海松のやうに、自分も世の中で浮び出られず、一向昇進もできないのだ。

『大和物語詳解』 昭和11年5月

(5) 吹飯の浦に沖風が吹いた後の浜辺に打ち上げられもしないで、やはり波の中に沈んでいる石のついた海松のやうに、私も一向に世の中に浮かび出られないのであろうか。

『大和物語新講』 昭和27年1月

(6) 紀州の名所吹飯の浦に沖風が強く吹いて立った浪の名残にさへも浜辺に打ち上げられず、海中に沈んでいる石のついた海松の様に、自分も世に浮び出られぬのだ。

『物語日本文学大和物語』 昭和29年8月

(7) 吹井の浦に立つ荒波の引いた後でさえ浜辺の水に身を沈めているのであろうか。

『日本古典文学大系大和物語』 昭和32年10月

(8) 沖からの風が強く吹いて吹井の浦に立つ荒浪の余波にさへも打ち上げられずに、石にくつついても沈んでいる海松のやうに私も世に浮かび出ないで、沈んでばかりゐるのであろうか。

『日本古典全書大和物語』 昭和36年10月

(9) 沖に風が吹いて吹井の浦に立つ荒浪が引いた後でさえ、(浜辺にうち上げられずに) この身は海中に沈んでいるのでしょうか。(このように、年がふけてからもなお低い位に沈んでいなければならないのでしょうか。)

〔大和物語評釈・六十四〕 昭和43年5月
 (10) 沖から風が強く吹きつける吹井の海岸に立つ波の引いたあとの残り水にさえも私は沈むのでしょうか。石つきの海松さえもこうして拾い上げられているのに。

『大和物語 校注古典叢書』 昭和48年3月

(11) 沖から風が吹いて、吹井の浦に波が立ちますが、石のついた海松のような私は、その余波によってさえ浪打ちぎわにもうち寄せられず、底に沈んだままです。いのでしょうか。

『日本古典文学全集大和物語』 昭和47年12月

(12) 深日の浦に立つ波の名残によってまでも私は沈むかもしれない。

『大和物語の注釈と研究』 昭和56年2月

(13) 波の余波に消え沈む石について海松によせて久しく、昇進もなく、このまま沈んでゆく身の不遇を訴えたもの。

『大和物語 有精堂校注叢書』 昭和63年3月

(14) (この石が海に沈んでいたように) 沖から風が吹いてきて、吹井の浦に立つ波の余波によってさえも、私は沈んでしまうのでしょうか。

『大和物語(上) 講談社学術文庫』 平成18年1月

明治以降、大和物語への関心が高まり、多くの注釈書の出現をみた。その解釈も実に様々である。でも大きく分けると三つになるようである。即ち、そのひとつは歌そのものに忠実な解釈をしたもので、これには(7)、(9)、(12)が該当しよう。これは古注の(4)と同じになる。次にその幅を広げて海松に宗自身を寄せて解釈しているものがある。これには(1)、(2)、(3)、(4)、(5)、(6)、(8)、(11)、(13)、(14)が該当し、一番多い。これは(4)を除いた古注と同じになる。そして、三つめが海松に宗自身を寄せず、海松さえも拾い上げられているのにと解釈している場合である。(10)がそれで、この解釈は一番少ない。ただ、(12)において柿本氏は忠実な解釈をしておられるが、氏は『大和物語の注釈と研究』の「補」の中で次のように述べている。

「立つ浪」は先度の定例除目に譬え、それに漏れて、あと(なごり)の小除目(臨時の除目)にも、この分ではかからない、と嘆くと見る。「沈む」は沈淪する意に波に沈む意をかけ、かけた「沈む」は「波」の縁語。石付きの海松を海底に沈んでいた物と見、それは拾い上げられたのに、自分はその見込みが無いという気持ちを「我は」にこめて訴えた。

これだと(10)と同じになる。それにしてもそのあいまいさは否定できないところであり、先程の解釈に含めるべきである。ただ、(10)や(12)「補」を

が生まれたのは、その見方を変えようという意識の現れとみることができよう。

*

本文に忠実という点からみると、最初の解釈がよい。しかし、人間の心ほど複雑なものはなく、それを三十一文字に詠み込むわけであるから、言外にも表現したいことは当然あつたはずである。また、歌のみならば、そう処理してもよからうが、ここは歌を詠んだ、いきさつを記した重要な働きをしている地文があり、それと一体にして解釈すべきであろう。しかもそこには歌題が示されており、その中には「海松」が出てくるわけであるから、それを含ませてそうすべきである。この点からいうと、最初の解釈には物足りなさを感じる。その点、二番目の解釈は宗于自身を海松に寄せており、一歩進んでいる。さらに三番目の解釈は、海松は海松でも恩恵に欲した海松がそこに生かされている。

先程、この歌を解釈する場合、地文と一体になってそうすべきことを述べた。しかもそこには歌題が示されているのである。その部分を先学はどうとらえているのであろうか。その箇所を列举してみよう。

(1) 亭子院に紀伊国から石に着いて居る海松を献上したのを題として、人々が歌を詠んだ。——全訳王朝文学叢書——

(2) 宇多天皇の許に、紀伊国から、石に着いてゐる海松を献上したのを題にして、人々が歌を詠んだ。——武田祐吉氏——

(3) 宇多天皇の所へ、紀伊国から、石に着いた海松を献上したのを題にして人々が歌を詠んだ。——浅井峯治氏——

(4) 亭子院に、紀伊国から、石に着いてゐる海松を、献上したのを題として、人々が歌を詠んだ。——吉澤義則氏——

(5) 宇多天皇の御許に、紀伊の国から石の着いたまゝの海松を献上した者があつた。それを題にして人々が歌をよんだ折に、——久松潜一氏——

(6) 亭子の帝に、紀伊国から、石にくつついてゐる海松を献上してきましたが、それを題として、人々が歌を詠んだのだったのですが、——今井源

衛氏——

(7) 亭子の帝に紀伊の国から石のついた海松を奉つたことを題として、人々が歌を詠んだときに、——高橋正治氏——

(8) 亭子のみかどに紀の国から石のついた海松を献上した、それを題にして人々が歌を詠んだおりに、——柿本奨氏——

(9) 亭子の帝に紀の国より石に付いてゐる海藻を奉つたのを題にして、人が詠んだ。——雨海博洋氏・他——

おおむね、歌題の解釈が二つに分けられる。ひとつは「献上した」で切つて、その後「それを題に云々」という解釈であり、もうひとつはそこで

切らないで「献上したことを云々」と解釈している場合である。前者にとつているのは(5)、(6)、(8)である。この場合、傍線を施した「それ」が何を受けているのか問題になる。海松だけなのか。それとも海松を紀伊国から献上したことなのかということである。いずれにしてもあいまいな点を残していることは否めない。ただ、海松を献上したことを題にしてとつても先学の中には先程の歌の解釈で示したように海松イコール宗干のみに焦点をあてている方もいる。また、後者の場合でも、(1)、(2)、(3)、(4)、(9)をみると、「海松を献上したのを題として」ただし、「と」が「に」にたつているものもある。とあり、これも「海松」のみととれないこともない。あいまいさは否めないところであろう。その点、(7)は「奉ったこと」を題として傍点は稿者。以下も同様。とあり、あいまいさを解消している。

さて、問題になる本文は「亭子の帝に、紀伊国より石つきたる海松をなむ奉りけるを題にて」とあるが、傍点を付けたところのとり方によって、二つの解釈が生じているようにも思われる。このこと同じような例が他に見ることができようか。大和物語において、「をなむ」は十八例、「をなん」は六例それぞれみられる。しかも、両者のほとんどが文末を連体形で結んでいる。ただ、両者にそれぞれ一例ずつ次のような箇所がみられる。

(ア)少将のもとより文をなんをこすれば、(101段)

(イ)御衣どもをなむ預けさせ給ひけるに、(107段)

これらは係り結びが成立していない箇所、特に(イ)は三十段の例に近い(ただ、異本が「に」を持っていないという欠点もあるが)。その用例は少ないものの、ほぼ同じ例が存在するという事実は、誤りというものではない。やはり三十段の場合、「奉りける」で終止させるのではなく、下へ続けて考えるべきであろう。そして、歌題の始まりの部分は文脈や宗干の宇多帝への嘆願の気持ちをくみ入れれば、「亭子の帝に云々」からとみるのが穏当であろう。このことを歌に含ませて解釈すべきである。先程、(7)は地文の解釈において、あいまいさを解消していると述べたが、それを歌の解釈に生かしていないのは残念である。それと、この箇所には多少なりとも大和物語作者の文章力というものが反映しているのではないか。というのは、作者の文章力がそれほどでもないことを証明する例が他にみられるからである。⁽⁶⁾ 素材をもとにして文章化する場合、もう少し理解しやすいように表現すれば、このような問題は生じなかつたであろう。

ここの文章構造をみると、「亭子の帝に、紀伊国より石つきたる海松をなむ奉りけるを題にて」とあることから、帝に海松を献上したわけであり、この海松にとつては浮き目をみたことになる。また、地文と歌との関連を具体的にあたつてみると、地文に「紀伊国より石つきたる海松をなむ奉りける」とあるから、歌で「沖つ風ふけるの浦に立つ浪の」と表現したわけである。前述したように先学が「なごりにさへやわれはしづまむ」に海松を含ませて解釈していることはよいが、「奉りける」を歌の解釈に生かされていないのである。この歌が詠まれた事情というものを十分に考慮し、それを

解釈に生かすべきである。確かに海松は海中に生息しているものであるが、この場合は献上した海松とそうでない海松とを区別して考えるべきであろう。こう考えてくると、先程の(10)の解釈に近いが、ここには一般の海松を含ませていないように見受けられる。このことが欠点と言えよう。

*

人間の心ほど複雑で厄介なものはない。それを三十一文字に託して詠出される和歌にはそれ以外のことが当然、存在するわけである。解釈する場合、このことを十分考慮すべきである。ここではまず地文を通して、その詠作事情を十分に検討し、それを和歌に移入させて、宗于の心情に迫るべきである。従来、あまりにも海松イコール海中に生息するものにとらわれすぎていたようである。このことは章段の話の一部にしかすぎなかったわけで、あくまでもそれがどのような状況にあつて詠まれたのかを考えないで解釈している。その状況をよく踏まえて、地文と和歌とを融合させて解釈すべきである。それだけに両者は切っても切れない関係にあると言えよう。すると、この関係は次のように考えるのがよからう。

海底の海松 → 献上された海松

宗于 → 宗于の願い

最後にこの歌の試解を示せば、

沖から風が強く吹きつけるふけるの海岸に立つ波の引いたあとの残り水にさへ、石についた海松のように私は沈んでいるのでしょうか。それに比べ、海松の中にはこうして拾い上げられ献上されているものもあるのに……。

となろう。

注(1) 片桐洋一氏 『恋に生き 歌に生き伊勢』(新典社 昭和60年8月)、妹尾好信氏 『伊勢集』に付載されたる秀歌選をめぐって(『源氏物語の内と外』風間書房 昭和62年11月)

(2) 「大和物語の創作方法―伊勢関係の章段―」(『古典論叢』18号 昭和62年8月 後に『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)に再録)。本書第二章第八節。

(3) 『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院 昭和56年2月)

- (4) 島田良二氏「源宗千集」(『平安私家集の研究』桜楓社 昭和62年8月)。なお「しら露」のところが「おく露」となっている伝本もある。為氏本、御巫本、鈴鹿本、勝命本、天福本、群書類従本など。
- (5) 高橋正治氏は「三十段から三十七段までは「官位のアがらないことを嘆く」という内容の群である。」と述べられている(『日本古典文学全集大和物語』小学館 昭和47年12月)。なお、妹尾好信氏は注(1)の論考において、「沖つ風」の歌を恋歌に分類されているが、詠作された当初は身の不遇を訴えた歌であったのであろう。
- (6) 拙稿「大和物語の創作方法—いわゆる「ならの帝」の章段をめぐる—」(『平安文学研究』76輯 昭和61年12月)。本書第二章第七節。「心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに」考—『大和物語』第百四十一段—」(『語文』78輯 平成2年11月)。本書第四章第二節。「大和物語の創作方法—在中将関係の章段を中心に—」(『大和物語の研究』。本書第二章第九節。

第二節 「心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに」考

— 『大和物語』第一四一段 —

—

大和物語に次のような話がある。

よしい糸といひける宰相のはらから、大和の掾といひてありけり。これがもとの妻のもとに、筑紫より女を率て来てすゑたりけり。もとの妻も、心いとよく、今の妻もにくき心なく、いとよく語らひてゐたりけり。かくてこの男は、⁽¹⁾ここかしこ人の国がちにのみ歩きければ、ふたりのみなむゐたりける。この筑紫の妻、しのびて男したりける。それを、人のとかくいひければ、よみたりける。

夜はにいでて月だに見ずはあふことを知らずがほにもいはましものを

となむ。かかるわざをすれど、もとの妻、いと心よき人なれば、男にもいはでのみありわたりけれども、ほかのたよりより、「かく男すなり」と聞きて、この男思ひたりけれど、心にもいれで、たださるものにておきたりけり。

さて、この男、「女、こと人にもいふ」と聞きて、「その人とわれと、いづれをか思ふ」と問ひければ、女

花すすき君がかたにぞなびくめる思はぬ山の風は吹けども

となむいひける。

よばふ男もありけり。「世の中心憂し。なほ男せじ」などいひけるものなむ、この男をやうやう思ひやつきけむ、この男の返りごとなどしてやりて、この妻のもとに、文をなむひき結びておこせたりける。見ればかく書けり。

身を憂しと思ふ心のこりねばや人をあはれと思ひそむらむ

となむ、こりずまよみたりける。

かくて、心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに、男は心かはりにければ、ありしこともあらねば、かの筑紫に親はらからなどありければいきけるを、男も心かはりにければ、とどめでなむやりける。もとの妻なむもろとももありならひにければ、かくていくことを、「いと悲し」と思ひける。山崎にもろともいきてなむ、舟に乗せなどしける。男も来たりけり。このうはなりこなみ、ひと日ひと夜、よろづのことをいひ語らひて、つとめて舟に乗りぬ。いまは男もとの妻は帰りなむとて車に乗りぬ。これもかれも、いと悲しと思ふほどに、舟に乗りたまひぬる人の文をなむもて来たる。かくのみなむありける。

ふたり来し道とも見えぬ浪の上を思ひかけでもかへすめるかな

といへりければ、男も、もとの妻も、いといたうあはれがり泣きけり。漕ぎいでていぬれば、え返りこともせず。車は舟のゆくを見てえいかず、舟に乗りたる人は、車を見らるとおもてをさしいでて漕ぎゆけば、遠くなるままに、顔はいとちひさくなるまで見おこせければ、いと悲しかりけり。

(第一四一段)

(注) 本文は『日本古典文学全集』に拠り、傍線、二重傍線、記号は稿者が施した。以下も同様。

大和物語の中にあつてはどちらかという長文な章段に入るが、かと言って著名な章段でもない。したがって、この章段についてはそれほど深く考究されていない。例えばこの章段にみられる「よしいゑ」なる人物について、その多くの注釈書は実在人物の橘良殖(864〜920)をあてている。冠注大和物語には「うゑを転じているといへるにや」とあるが、ここではあくまでも「よしいゑ」⁽¹⁾ 傍点は稿者 以下も同様なのである。事実、このところを諸本にあたってみると、「ゑ」が「へ」に表記されている伝本がある⁽¹⁾だけである。このような中であつて高橋正治氏は

「宰相」は参議のことであるが、参議の中にはこの名が見あたらず、兄弟も条件にあてはまるものがない。未詳とすべきようでもあるが、一四二段とともに作り物語とも考えられるので、実在人物をあてはめて考えることは無用かもしれない。⁽²⁾

と注目すべきことを述べられておられる。その後、私は氏のこのお考えに啓発され、一四一、一四二、一五四の三章段を対象にして考察した。⁽³⁾ これらの三章段は虚構化されており、その方法について言及し、一四一段の「よしいゑ」なる人物を架空のものともみた。また福井貞助氏はこの章段の後半に注目して、土佐日記と大和物語の影響関係を考察され、その手法等につき注目すべき見解を述べておられる。⁽⁴⁾

以上のように、この章段について研究されてはいるものの、細部に至つてはその余地が残されているように思う。そのような意味で、本稿では二重傍線を施した「心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに」という本文に注目し、この動作主は一体、誰なのかということにふれ、

さらにそれを通し究極の目的として、大和物語の本質の一端なりを探ってみようと思う。

二

さて、さしあたりここで問題にしたいのはこの部分の動作主が誰であるかということである。このところを諸本にあたってみたところ、これを左右する大きな異同はみられない。些細なこともかもしれぬが、実はそのことがこの章段を理解する上で重要な鍵を握っているように思われる。今、とりあえずこの部分がどのようにとらわれているかを知るために、注釈書類にあるものを刊行順に記してみよう。

- (1) もとのめの心也かくすことをかくさすへたてなき心あはれにていとあはれとおもふと也(『大和物語鈔』)
- (2) 本妻の猶へたてなくすを此女もあはれと思ふと也(『大和物語直解』)
- (3) 本妻は心のへたてなければかく心からこと男するを哀かりていと哀とかけり(『大和物語管窺抄』)
- (4) もとの妻がなり(『大和物語詳解』井上覚蔵氏、栗島山之助氏 誠之堂書店 明治34年8月 ただし、「いとあはれと思ふほどに」の部分のみ)
- (5) 心のへだてもなく―筑紫の女が本の妻に対して、いとあはれと思ふ―本妻が也(『新釈日本文学叢書』物集高量氏 日本文学叢書刊行会 大正11年7月)
- (6) さて本夫はこの女を隔心なく愛したから、女も大層懐しく思つてゐる内に(『全訳王朝文学叢書 第一巻』鈴鹿三七氏 王朝文学叢書刊行会 大正13年6月)
- (7) さて、夫はこの筑紫の女とうちとけてから心から可愛がったから、女もたいそうなつかしく思つていたが、(『大和物語新釈』浅井峯治 大同館書店 昭和6年9月)
- (8) 夫はこの女を愛したので、(『物語文学集^{大日本文庫}』吉澤義則氏 春陽堂 昭和10年5月 ただし「心のへだてもなくあはれなれば」の部分のみ)
- (9) さて本夫はこの女を隔心なく可愛がったから、女も大層懐しく思つてゐるうちに、(『大和物語詳解』武田祐吉氏、水野駒雄氏 湯川弘文社 昭和11年5月)
- (10) さて、本夫は、この女を隔てなく愛したから、女も懐しく思つてゐるうちに、(『大和物語新講』吉澤義則氏 藤谷崇文館 昭和27年1月)
- (11) かうしてこゝろおきなく親しみあつたので、(本妻は女を)たいそういとほしく思つていたが、(『物語日本文学大和物語』久松潜一氏 至文堂 昭和29年8月)
- (12) 筑紫の女は、本妻に対して心のへだてもなく打ちとけて、可愛がったから、本妻は、その女を大変かわいいと思つてゐるうちに、(『日本古典全書 大和物語』南波浩氏 朝日新聞社 昭和36年10月)
- (13) このようにして、筑紫の女は本妻に対して、何の心のへだても置かないで、誰でも心うたれる様な存在でしたから、本妻の方でも、この人をた

いそいそしく思っているうちに、(『大和物語評釈・三五 筑紫の女』今井源衛氏 「国文学」10巻6号 学燈社 昭和40年5月)

(14) 筑紫の女は、本妻に対してかくしだてをする気もなく感じよく可愛かったので、本妻はその筑紫の女を真実可愛いと思っっているうちに、(『大和物語 校注古典叢書』阿部俊子氏 明治書院 昭和47年3月)

(15) このようにして筑紫の女は本妻に対して心のへだてもなく愛したから、女もなつかしく思っっているうちに、(『日本古典文学全集大和物語』高橋正治氏 小学館 昭和47年12月)

(16) しかし心の中を正直に告白しているが、本妻にはむしろ同情された。(『古典文学選 別巻』横山青娥氏 塔影書房 昭和52年7月)

(17) このようにして、妻が隔て心もなく、好意的なので、女はともありがたいと思っっているうちに、(『大和物語の注釈と研究』柿本奨氏 武蔵野書院 昭和56年2月)

(18) 筑紫の女は、本妻に対して、心のへだて心もなくともなついでいたので、本妻はともありがたいと思っっているうちに、(『大和物語 有精堂校注叢書』雨海博洋氏 有精堂出版 昭和63年3月)

(19) こうして、(筑紫の女は、本妻に対して)心のへだてもなく、趣のある様子だったから、(本妻はこの女を)ともかわいいと思っっているうちに、(『大和物語全釈』森本茂氏 大学堂書店 平成5年12月)

(注) 古注は『大和物語諸注集成』(雨海博洋氏編著 桜楓社 昭和58年5月)に拠った。

羅列すぎた感があるが、たかがここだけでも注釈というものがいかに多様性を帯びているかを示したのである。このように実に様々なのであるが、この動作主に関しては四つの型に分類できる。それを一覧表にしてみよう。

| 事項 | 区分 | | 注 釈 書 |
|-----|------|------|--|
| | 前 半 | 後 半 | |
| I | 本妻 | 筑紫の女 | (1)、(2)、(3)、(17) |
| II | 夫 | 筑紫の女 | (6)、(7)、(8)、(9)、(10) |
| III | 筑紫の女 | 本妻 | (4)、(5)、(12)、(13)、(14)、(15)、(16)、(18)、(19) |
| IV | 二人 | 本妻 | (11) |

(注) (1)、(3)、(4)、(8)はそれぞれ前半、後半のいずれか一方しか記されていない。それゆえもう片方は推定しておいた。なお前半とは「心のへだてもなくあはれなれば」を、後半とは「いとあはれと思ふほどに」をそれぞれ指している。これは以下も同様。

注釈書の数からいうと、Ⅲ、Ⅱ、Ⅰ、Ⅳの順になる。しかも時代的にみてある程度の傾向を窺えるように思う。古注では前半を本妻とし、また後半を筑紫の女としている。下つて大正から昭和二十年代にかけては(Ⅱ)を除けば、前半を夫に、後半を筑紫の女にそれぞれしている。これらにも影響関係があつたかどうかははっきりしないにしても、それぞれの注釈の態度を探る上で興味深いものがある。ただすべてがそうなっているのではなく、(4)、(5)は早くから昭和二十年代のものと同じになっている。その点では、この二書は異色というべきである。それにしても残念なのは、これらの注釈のいずれもが語釈かもしくは頭注のみで終わっており、そうとつた理由をふれているのは少ないことである。

三

なぜこのように様々なのであろうか。その原因はどこにあるのか、そしていずれが妥当なのか。

この章段には、大和の掾なる人、その妻、筑紫の女、それによぼう人の四人が登場している。ただ、このうちよぼう人はいわば話題の人物として登場しているだけで、実際に行動しているわけではない。そんなわけで、ここでは除いておく。思うにこれら三人の性格というものがそれぞれの注釈書に反映されているのではないか。しかもここは前半が決まれば、後半はおおよそ目安がつく。したがつてまず前半に焦点をあてて考えていくことにする。Ⅰの注釈書では本妻を動作主に行っているが、こうとつたのは本文中に本妻のことを「心いとよく」と表現していることや、筑紫の女が浮気したこと(5)を彼女は夫に言わないとあることから、これらのことを「心のへだてもなく」と理解したのであろう。また柿本獎氏もこの動作主を本妻ととり、「心のへだてもなく」とは本妻と筑紫の女との平素の間柄を述べたものと考えておられる(5)。

次にⅡの注釈書では夫にしているわけだが、この夫についての性格は妻のごとくはつきりと表現されているわけではない。ただ「国がちにのみ歩きければ」とあることから役人として家を離れがちだったのであろうか。また、筑紫の女に対しての夫の行動を本文に即してみると、他の男と浮気する筑紫の女の行動に対して、当初は「思ひたりけれど、心にもいれで、たださるものにて」と思つて気にもかけないでいた。しかし、時がたつにつれ気が気ではなく、「その人とわれと、いづれをか思ふ」と尋ね、筑紫の女が自分を愛していることを確かめている。しかし、その後、筑紫の女が再び浮気したのを知ったからか、夫は心が変わってしまった。このように夫の心が変わる以前の本文から類推するに、この夫は純粹な心の持ち主のようであ

り、まさに「心のへだてもなく」の人物と言えよう。

さらにⅢのように筑紫の女とした場合はどうか。彼女は「にくき心もなく」とあるから性格はよいが、夫のいない隙に他の男に恋心を寄せるといように浮気っぽいところがある。そのため夫の気持ちが変わってしまうのも当然である。ただ、彼女は本妻に対してすこぶる好意を抱いていた。本妻への感謝の気持ちも忘れず、自分の心情を隠しだすることなく正直に吐露している。このことを「心のへだてもなく」ととつたのであろう。

最後にⅣの本妻と筑紫の女の場合であるが、思うにこうしたのはこの部分がいかにも複雑なためにこのように考えたものか。だが、この部分から「親しみあう」という解釈は出てこない。ただ、この場合、後半を本妻をとしているから、全体からみてどちらかというところⅢに近い。

こうみても、Ⅳを除いていずれにも該当してしまう。その大きな要因として考えられることは、みてきたようにこれら三人の登場人物がいずれも善良な人間として描かれているということによる。ともかくどの人をとつても「心のへだてもなく」の人物なのである。そんなわけで、ここは人物面からの解釈は不可能である。

では、この箇所の動作主を誰とみたのがよいのか。別の方法を探る以外にない。まず考えられることはこの二重傍線の前にある「かくて」をどうとるかである。この「かくて」という語は大和物語において多用されており、その働きについて大木恵美子氏は大和物語の「かくて」を中心にして、次のような分類項目をあげ、そのいずれに該当するかを調査された。⁶⁾

| | |
|-------------------------------------|---|
| A、接続詞的役割をもち話しの展開に役立つ「かくて」 | |
| イ、前話と後話との間に長時間が経過し、その間が空白であるもの…………… | 7 |
| ロ、長時間にわたる状態の継続をあらわすもの…………… | 9 |
| ハ、長時間の経過をあらわすもの…………… | 3 |
| ニ、短時間の経過をあらわすもの…………… | 3 |
| ホ、話を過去にさかのぼるもの…………… | 2 |
| ヘ、接続及び話の転換…………… | 6 |
| ト、前文及び後文への説明、補足…………… | 4 |
| チ、短時間にわたる状態の継続…………… | 0 |
| リ、状態の継続…………… | 3 |

B、副詞である状態または事柄をあらわす「かくて」……………9

このように氏は大半の「かくて」が話を展開させるための接続詞的な役目をもっていることを指摘された。

一方、糸井通浩氏は「かくて」の多用について

『伊勢物語』や『平中物語』とは比ぶべくもなく歌物語化の、その未熟さは否めないにしても、『大和物語』が単なる「歌語り」の筆録化にとどまらず、また類語（中略）の群化にとどまらないで、「^イ歌語り」の「歌物語」化を志向する方向にあったことは注目してよいかと思う。「かくて」の多用は、その生みの苦しみを象徴するものとみたい。それはまた、かえって「歌物語」化の未完成をももの語ることにもなったのである。^ロ

と述べられ、「かくて」が大和物語の生成に深く関わっていることを指摘された。前にも述べたようにこの一四一段は虚構化された章段と思われ、そのことを考えると、氏の言われたように傍線部(イ)は当然理解できるし、また傍線部(ロ)にある歌物語の未完成ということは、裏返せば物語をいかに形成していくかという、いわば作者の創作力にも当然関わってくるように思われる。そしてこのことは「かくて」のみならず、これ以外の本文中にもみられるように思う。例えば重複表現がそれである。「もとの妻も、心いとよく」、「もとの妻、いと心よき人なれば」がそのひとつであるし、さらに「男の心かはりにければ」、「男も心かはりにければ」もそれである。これらを整然とささえれば、もう少しすっきりしたものになると思う。この現象から大和物語の作者はさほど文章力にはたけていなかったようである。その一面をここに見ることができようし、さらには「かくて」の多用にもそれが現れているであろう。それだけに話を展開させていく上で、作者は並々ならぬ苦勞をしてみたわけである。

さて、この一四一段には「かくて」が三箇所にわたって出てくる。それぞれの働きについては先程記したように大木氏が分類されており、それに拠らせていただく。即ち(イ)はAのハ（前話と後話両方をうけて）、(ロ)はAのヘ（前話をうけて）、(ハ)はB（前と区切れていない）（ハ）内は本文との関係を示す。のうち(イ)と(ハ)については具体的に本文にあたってみると、はつきり理解できるが、(ロ)についてははつきり断定できない。ただ、少なくともこの(ロ)が(イ)と(ロ)との間に記されている事柄を受けていることは確かである。だが、ここに記されていることは前述したように夫、本妻、筑紫の女の「心のへだてもなく」という性格と結びついてしまうのである。このようなことからこれをもとにしての別な方法を考えなければならぬ。それには(イ)と(ロ)との間に記されている事柄をさらに狭めていく方法が考えられる。とりもなおさずこれは接続詞等から考えていくわけである。

大和物語の作者は創作していく過程で、「かくて」を使用していったわけであるが、同時にこれのみでなく他の語も使用していった。ここには「かくて」(3例)、「かゝる」(1例)、「さて」(1例)が使用されている。これらがどのような働きをしているかという点、「かくて」、「かゝる」は前の事柄や次にある歌を指示している。また「さて」は話の転換の働きをしているわけだが、それにしてもこのあたりを讀んで感じることは話の展開が唐突である

ということである。具体的にいうと、「たださるものにておきたりけり」と「さて」との間と、「となむいひける」と「よばふ男もありけり」との間にそれが認められよう。前者に関連して高橋正治氏は次のように述べておられる。

「ほかのたよりより、『かく男すなり』と聞きて」に相当する（稿者注、「女、こと人ものいふ」について）。時間的に前にもどるが、「その人とわれと、いづれをか思ふ」とたずねたことは、「心にもいれで、たださるものにておきたりけり」と矛盾する。現存『檜垣姫集』伝本の上位善本には、この一節を欠く。かつては、この部分を持つ系統もあつたようだ。⁽⁸⁾

確かに氏の言われるようにこの本文から見ると矛盾している。しかも、ほぼ同じ表現をくり返しているにすぎず、重複表現ととられても仕方あるまい。そのためあつてか、このあたりを注釈書にあたつてみると、いかにもぎこちない口語訳になっている。もちろんそれは本文を忠実に解釈しているからでもあるが。ここは大和物語の作者の立場からみると、夫の心理状態を描こうとしたわけであるが、実際に筆を執つてみると思うように進まなかつたのではないか。そう言えば、かつて指摘したようにこれ以外のところでも重複表現がみられたし、こうすることが作者にとつて精一杯ではなかつたのか。してみると、「さて」で始まる唐突さには作者の創作力が関与しているとみてよからう。また、氏は現存檜垣姫集ではこの一節を欠くことを指摘されているが、おそらくこれは話の展開に矛盾を感じた、その編者が意図的に除去したためであろう。後者の場合も唐突として男が登場している。大和物語管窺抄では「よはふ男有りけり」とは先の忍びておとこしたりといへるには異男のまたよはふ有りけりといふ意」と注釈を加えている。これも作者の創作力の反映とみるべきであろう。

このように大和物語作者の創作力の稚拙さを随所にみることができるのであるが、と同時にひとつひとつのまとまりというものを認めることができ。これは言ってみれば、時間的に話を展開させて行く過程⁽⁹⁾で、ひとつひとつまとめていったことを示している。今、それについて問題になっている「かくて」以前を本文に即してみると、「よしいゑ云々」から「いとよく語りひてゐたりけり」まで、「かくてこの男は云々」から「となむいひける」まで、「かかるわざをすれど云々」から「おきたりけり」まで、「さて云々」から「となむいひける」まで、「よばふ男もありけり云々」から「こりずまによみたりける」までに各々それを認めることができる。そしてあるところには接続詞を用いたり、またあるところではそれを用いていないが、前述の如く箇所によってはその唐突さは否めないところである。ともかく大和物語の作者は時間的叙述を考慮し、ひとつひとつのまとまりごとに本文をつなげていったのであろう。このような筆の進め方から考えて、この「かくて」はかなり前のことを受けていると考えられるよりも、すぐ前のひとつのまとまりを受けていると考えるのが自然である。即ち「よばふ男もありけり」以下をこの「かくて」で受けていると思われる。大和物語の作者は少なくともそのような意識でもつてこの「かくて」を使用したものと考えてよからう。「心のへだてもなく」ということを関連づけて、「よばふ男もありけり」以下に記

されていることは、ひとつに、筑紫の女は夫に対して歌を詠んで反省しつつも、その浮気心を押さえきれずに、また他の男に好意を抱き手紙をやることと彼女は正直者で、そのことを手紙で本妻に打ち明けていることである。この二つのことを「かくて」で受けていると思われる。もうひとつはさらに狭めて「この妻のもとに」以下のことを受けているという考えである。この場合、筑紫の女が何の隠しだてをする事もなく、本妻に打ち明けていることを受けていることになる。この両者のいずれをとっても「こころのへだてもなくあはれなれば」の主語は本妻となるが、「心のへだてもなくあはれなれば」とは前のどのような状況を受けているのであろうか。前者のように筑紫女が異男することまでも本妻は「いとあはれと思ふ」と感じていたか（後述するように「いとあはれと思ふほどに」の主語を本妻ととって）。そうとるには飛躍しすぎるように思う。それよりも、そういうことを隠し立てすることなく知らせてくれたことに対して、本妻は「いとあはれ」と感じていたのであろう。ここは後者のみを受けていると考えたい。

それと「かくて心のへだてもなく云々」以前において登場人物のこの章段での関わりやの程度をみると、確かに本妻は筑紫の女に対して隔て心がないわけであるが、彼女はこの章段の初めの方に出ているにすぎない。この動作主を彼女にするとやや物足りなさを感じる。さらにこの章段はこの「かくて」を境に大きく前半と後半に分けることができる。前半では筑紫の女の、本妻とその夫のもとの生活が記され、後半では筑紫の女が夢破れて故郷へ帰る様子が記されている。このように、あくまでも筑紫の女が中心になっている。このことはこの章段にあるすべての歌を筑紫の女が詠んでいることによっても理解できよう。このような点からも「心のへだてもなくあはれなれば」の動作主は筑紫の女とみるのが妥当であろう。

一方、後半の「いとあはれと思ふほどに」の動作主は誰とみるのがよいか。先程、前半が決まれば、後半はおおよそ目安がつくと述べたが、これは先程の一覧表をみても筑紫の女か本妻になっっていることによっても理解できよう。しかし、考えようによれば、一覧表にみられない夫も該当するのではない。事実、こう考えている方もおられる。⁽¹¹⁾ その場合、筑紫の女の行動と考え合せてみるとどうか。夫は筑紫の女が他の男と付き合うことを認めていたことになる。また、夫は筑紫の女が異男するうわさを聞き、本心を尋ねているのに対し、彼女は「花すすき」の歌を詠み愛を誓っている。この時点では、夫はまさに「あはれ」と感じていたのかもしれない。しかし、その後、彼女は再び異男してしまう。ここの動作主を夫にすると、前述の如くこの章段が時間的叙述を考慮しており不自然のようである。

以上のように私はここの動作主について、前半を筑紫の女に、後半を本妻にそれぞれ考えた。結局は、大方の注釈書と同じようになってしまったが、今までの注釈書でそうとっている理由を記したものは皆無に等しかった。そうとった理由を追究してこそ大和物語の創作性を垣間見られたように思う。

四

この部分の動作主は様々にとられているわけだが、このことは実は重要な問題を含んでいるように思われる。人物のとり方によって、この章段の主題にも絡んでくるからである。それというのも、ここで問題とする本文には「あはれ」、「あはれなれ」という品詞は異なるが、意味上、同じ語が用いられているからである。これらの語がひとつの文中に、しかも隣接して用いられているところは他になく、作者は意図的に用いた節がある。このことに関連して福井貞助氏はこの章段の後半部（稿者注、「かくて心のへだてもなく云々」以下のこと）について次のように述べておられる。

一四一段の後半部（中略）と前掲（稿者云、中略した「かくて心のへだてもなく云々」から「このうはなりこなみ」までの本文のこと）の本文に続いて結末に至るこの後部は、「あはれ」を描こうとしたものなのである。中に「あはれ」「かなし」など重ねた表現は稚拙との評も生じようが、一旦は結ばれた人達の別れを、去り行く人の歌を頂点として、哀愁深き一話を情をこめて語ろうとしたと思われる。そして歌の次には、それから展開する事件を語るのではなく、哀別の情調を盛る。それは最後に「いと悲しかりけり」とある評言の趣で、送る者、去り行く者の間にかもし出される哀感の揺史を表出しようと試みたものなのである。⁽¹²⁾

この章段にある「あはれ」がすべての悲しみを表しているとは考えられないが、氏の御指摘は注目すべきである。今、「あはれ」（あはれと、あはれがる、あはれなり、ものあはれを含めて。以下も同じ）について大和物語と相前後して成立した作品で、どれくらい使われているかを調べてみると次表のようになる。

| 作品 | あはれ | あはれがる | あはれなり | ものあはれ | 合計 |
|------|-----|-------|-------|-------|----|
| 竹取物語 | 3 | 2 | 0 | 0 | 5 |
| 古今集 | 18 | 0 | 2 | 0 | 20 |
| 伊勢物語 | 8 | 4 | 2 | 0 | 14 |
| 土佐日記 | 2 | 1 | 1 | 1 | 5 |

| | | | | | |
|------|----|----|----|---|----|
| 大和物語 | 20 | 14 | 21 | 1 | 56 |
| 平仲物語 | 3 | 5 | 3 | 0 | 11 |

(注) 検索には以下の索引に拠った。山田忠雄氏編『竹取物語総索引』(武蔵野書院 昭和33年6月)、西下経一氏・滝沢貞夫氏編『古今集総索引』(明治書院 昭和47年5月)、日本大学文理学部国文学研究室編『土佐日記総索引』(日本大学人文科学研究所 昭和42年7月)、塚原鉄雄氏・曾田文雄氏編『大和物語語彙索引』(笠間書院 昭和45年9月)、山田巖氏・他編『平中物語本文と索引』(洛文社 昭和44年10月)

厳密にいうと、品詞により多少の出入りはあるものの全体的にみて、大和物語が圧倒的に多い。このことから「あはれ」が大和物語にあつて基調をなす語である⁽¹³⁾ということは論を待たない。それだけにこのようにひとつの文中に二箇所⁽¹³⁾にわたり用いられていることは注目されよう。しかも、この章段にはこれら以外に二箇所⁽¹³⁾に用いられているから、それらを合わせると四箇所になる。

この数がどのような意味を持つかであるが、一体、大和物語にあつて、「あはれ」が一章段に二箇所以上、用いられている章段はどれくらいあるであろうか。今、その章段と、その使用数、及び「あはれ」が誰の動作に使われているかを調べてみると次のようになる。

| 章段 | 使用数 | 動作主 |
|------|-----|-------------------|
| 7 | 2 | 男、女 |
| 41 | 3 | としこ、源大納言、よぶこ、あやつこ |
| 70 | 3 | 監命婦、藤原忠文 |
| 72 | 2 | 故式部卿宮 |
| 126 | 2 | 檜垣御 |
| 141 | 4 | 筑紫の女、本妻、夫 |
| 144 | 2 | 在次君 |
| 146 | 2 | 大江玉淵女 |
| 148 | 5 | 女 |
| 168 | 3 | 小野小町、良少将 |
| 附載説話 | 4 | 男、女 |

概して、大和物語にあつて著名な人物が登場する章段にみられる。一四一段は一四八段に次いで二位を占めている。一四八段というのは蘆刈伝説で、大和物語の中にあつてはかなり長文の章段である。その長さからいうと一四一段のほうがるかに短く、そこに「あはれ」が四箇所も出ていることは注目されるのである。

一四一段において「あはれ」の用い方をみると、筑紫の女はよぼう男に返事をし、同時に本妻にも手紙を忘れない。その歌の中に「あはれ」とあり、これは筑紫の女のよぼう男に対する心情である。そしてこのことを受けたのが、「心のへだてもなくあはれなれば」という筑紫の女の心情になる。このように筑紫の女はよぼう男に対しても本妻に対しても心遣いをしているわけである。このことに感動したかのように、作者は本妻の動作にも「いとあはれなれば」と表現している。そして最後の「あはれがり」は夫と本妻に用いられている。このように登場人物のすべてに用いられている。しかも、ここには、としことか監命婦といった著名な人物が登場するわけではない。大和物語にあつては、いわば無名の人物にすぎない。思うにこうしたのは創作意識を持つて虚構の章段を設定し、それが人物にも及び、ひとつの理想化を目指したのであろう。

それは次のことによつても理解できよう。前述したようにここに登場する人々はすべて善良な人として描かれている。六四段や一三四段もことごとくじょうに人物を配置しているが、各々の人物にあたつてみると、ここにみられるような性格として描かれていない。とすると、このような章段は、大和物語にあつてはここだけであり、それだけに特異な章段と言えよう。ここには作者の理想化の跡をみる事ができよう。このことに関しては今井源衛氏も次のように述べておられる。

作者は理想を内から支える現実の人間としての肉附もかなりゆたかに与えている。だんだんと新しい愛人に心を惹かれてゆく筑紫の女の気持ちや、それにつれて、女への愛が冷却してゆく心の動きなど、素朴な文体ながら、読者を納得させ、その間の彼等のあたゝかく、自然な行動に読者の心を魅するものがある。作者が眼目としたらしい本妻の姿だけは、あまりきれいごとに過ぎる感が免れないが、それだけ作者の意図が露出したといふことではあるまいか。⁽¹⁴⁾

けだし卓見というべきである。特に最後の傍線を施した部分には心強さをおぼえる。それというのも私自身、この章段は虚構化されたものという考えが根底にあるからである。さらに氏はここにみられる四首の歌について、四首とも筑紫の女の述懐であることも珍しいと言われているが、私見によると四首とも虚構になるものであり、⁽¹⁵⁾そこには創作力も絡んでくると思われるが、それはともかくとして彼女が詠んだ歌として作られていること自体、この章段の中心人物であるという意識が作者の心にあつたことは否めない。

五

以上、私は大和物語一四一段にみられる「心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに」という本文について考えてきた。この本文の動作主が誰であるかということは、実はこの章段の構想や意図と密接な関係があったということである。それを探る前提として古注から現代に至る注釈書類をつぶさに調査したわけである。そのとり方は様々であり、それぞれの注釈書の受け止め方というものを知ることができた。ただ、そのようなとった理由を述べているものは少なく、まして作者の意図と深い関わりがあることを指摘したものはなかった。このことからその緩慢さは否定できない。それゆえ、ここではその原因なるものを追究した。結局のところ、それは作者の創作力によると思われる。だからと言ってそれで大和物語を評価しようというのではない。ここで作者はこの一文を草することにより、彼の理想を表出しようとしたのである。むしろ、このことを評価すべきである。しかし、それが思うようにいかなかったというのが、本音であろう。また、一四一段には先学が指摘されているように、大和物語の文学理念というべき「あはれ」なる世界を描いているが、その作者の意図をこの一文に集中させたと言っても過言ではあるまい。

私達はややもすると、著名な章段に目をとらわれがちであるが、このような、いわば日陰に隠れた章段にも注意を払うべきであろう。ここで述べてきた、ほんの些細なところにも実は大和物語作者の意図が秘められていたのである。これと類似したところは他の章段にも存在するかもしれない。それらを追究し、累積して行つてこそ大和物語の方法や本質が見い出せるのではあるまいか。

注(1) 『校本大和物語とその研究』によると為氏本、為衆本、光阿彌陀仏本がこうなっている。

- (2) 『日本古典文学全集大和物語』頭注。
- (3) 拙稿「大和物語における虚構の方法——一四・一四二・一五四段を例にして——」(『中古文学』30号 昭和57年10月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和57年』(朋文出版 昭和58年11月)、『大和物語の研究』(翰林書房 平成6年2月)にそれぞれ再録)。本書第二章第二節。
- (4) 「歌物語は土佐日記から何を得たか」(『文経論叢』11巻3号 昭和51年3月 後に『歌物語の研究』(風間書房 昭和61年4月)に再録)
- (5) 『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院 昭和56年2月)
- (6) 「大和物語における「かくて」の考察」(『二松学舎大学人文論叢』9輯 昭和51年4月)なお、これは以前に同じ題で「大和物語探求」6号(昭和50年11月)

に発表したのを補訂されたものである。

- (7) 『大和物語』の文章—その「なりけり」表現と歌語り—（『愛媛国文研究』29号 昭和54年12月 後に『語り』言語の研究』（和泉書院 平成30年1月）に再録）
- (8) 注(2)に同じ。
- (9) 拙稿「大和物語の創作方法—いわゆる「ならの帝」の章段をめぐって—」（『平安文学研究』76輯 昭和61年12月 後に『国文学年次別論文集 中古2 昭和61年』（朋文出版 昭和62年11月）、『大和物語の研究』にそれぞれ再録。本書第二章第七節。
- (10) 今井源衛氏「大和物語評釈・三五 筑紫の女」（『国文学』10巻6号 昭和40年5月 後に『大和物語評釈 下巻』（笠間書院 平成12年2月）に再録）
- (11) 山崎良幸氏『「あはれ」と「ものものあはれ」の研究—源氏物語を中心として—』（風間書房 昭和61年11月）
- (12) 注(4)に同じ。
- (13) 南波浩氏「大和物語の特質」（『日本古典全書大和物語』朝日新聞社 昭和36年10月）
- (14) 注(10)に同じ。
- (15) 注(3)に同じ。

第三節 甲斐侍従筆『大和物語追考』について

*

本稿では架蔵の甲斐侍従筆『大和物語追考』（以下、架蔵本と略称）の解説をする。『大和物語追考』は北村季吟の手になる『大和物語抄』の補訂をしたものである。これは季吟が『大和物語抄』に書き込んだものを門弟の山岡元隣が整理したと言われている⁽¹⁾。しかし、版行に移されず、今日、写本で伝わっているにすぎない。『大和物語抄』の注釈史上の価値は今さら述べるまでもないが、その補訂ということで、『大和物語追考』も軽視することはできない。その意味で架蔵本が今後の研究に多少なりとも資することができると思っている。

*

『大和物語追考』の伝本は少ない。『^版国書総目録 第七卷⁽²⁾』には静嘉堂文庫蔵本、宮内庁書陵部蔵本（以下、書陵部本と略称）、東京大学文学部国文学研究室蔵本（以下、東大本と略称）、東京大学本居文庫蔵本の四本が紹介されている。また、吉澤義則氏の編になる『未刊国文古註釈大系 第九冊⁽³⁾』の解題には池田亀鑑氏蔵本（押小路家旧蔵）の記述がある。このうち書陵部本が『未刊国文古註釈大系 第九冊』に、また東大本が本多伊平氏により『北村季吟大和物語抄付^{大和物語別勘}』⁽⁴⁾にそれぞれ翻刻されている。なお、これらの伝本は『大和物語追考』のみでなく、『大和物語別勘』、『大和物語系図』と合冊になっているが、架蔵本は『大和物語追考』のみである。まず、その書誌を記しておく。

縦二二・二センチメートル×横一四・七センチメートルの袋綴一冊本。表紙は濃い緑地に花模様を押しした布表紙で左肩上より「大和物語追考」とする

題簽がある。一面十行、本文墨付二十九丁で前後にそれぞれ一枚ずつの遊紙がある。第一丁才に「大和物語追考」と内題がある。また第三十丁才に「いかなりし花の江にかはやまかつのたふさにけかるやまとなてしこ」の歌がある。その裏に次のような奥書がある。

此一帖再昌院季吟述作也右

法印伝授者也

宝永二乙酉年三月中旬

甲斐侍従 花押

該本は宝永二年（二七〇五）三月に甲斐侍従なる人物によって書写されたものである。

甲斐侍従とは誰のことか。侍従という位にあつて甲斐国に関係のあつた人物であろう。甲斐国は従来、徳川家一門にしか与えられない地で重要視されていた。そこへ徳川家以外から、五代將軍綱吉の側用人として多くの功績を立て甲斐府中藩主に迎えられたのが柳沢吉保であつた。宝永元年のことである。しかも彼は元禄元年（二六八八）十二月に侍従の位を与えられ、老中格に昇進していた。⁽⁵⁾まさしく「甲斐侍従」とは柳沢吉保を呼ぶに相応しい呼称と言えよう。彼は学問への造詣が深く、北村季吟との交流もあり、『松蔭日記』⁽⁶⁾によると、季吟は吉保の厚遇により法印となり再昌院と号した。すると、奥書の記述は季吟のことを記していることとなり、しかも柳沢吉保と推定される甲斐侍従がこれを書いていることから、架蔵本の奥書は吉保と季吟の交流の一面を如実に物語つていよう。このように考えてくると架蔵の『大和物語追考』は柳沢吉保の書写にならう。ただ、架蔵本と吉保の筆跡や花押との比較、検討が必要になるが、まだそこまで調査が行き届いていない。それゆえ、ここではその可能性があることに止めておきたい。次に架蔵本の本文をみていくことにする。その際、東大本、書陵部本と比較、検討していくが、本文は前記の翻刻本に拠ることにする。東大本に架蔵本を対校してみるとかなりの異同がある。書式をみると東大本は注釈を項目より一字分程、下げて書いているが、架蔵本は同列になつている。書陵部本はこれに近い。また、東大本で割注のところが架蔵本では小文字で一行書きのところが多い。本文の異同は多く、今、漢字と仮名書きの異同を除き、調査すると次表のようになる。

| 番号 | 頁 | 架蔵本 | 東大本 | 備考 |
|-----|----|-----------------|---------------|-------|
| (1) | 1才 | ナシ(書) | 拾穂志之 | |
| (2) | " | 御説に天慶のころ | 天曆 | 天曆(書) |
| (3) | 1ウ | 公卿補任に正四位下(書) | 四位下 | |
| (4) | " | かたかけのふねにやのりし(書) | のりし | |
| (5) | 2ウ | | 十二月十九日にも(書) | 廿九日 |
| (6) | " | | 九月廿八日よりの(書) | ナシ |
| (7) | " | | 京極のみやす所・ | の(書) |
| (8) | " | | 屏風のうたふちのはな(書) | ナシ |
| (9) | 3才 | | 又案・此段(書) | に |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|------------|--------------|----------------------|-------------|---------------|-------------|--------------|----------|--------------------|--------------|---|--------------|-------------|-------------|--------------|----------------------|---------------|-------------------------|-------------|---------|---------------|----------|---|---|
| (34) | (33) | (32) | (31) | (30) | (29) | (28) | (27) | (26) | (25) | (24) | (23) | (22) | (21) | (20) | (19) | (18) | (17) | (16) | (15) | (14) | (13) | (12) | (11) | (10) |
| 9才 | " | " | 8才 | 7才 | " | 6ウ | " | " | " | 6才 | " | 5ウ | " | 5才 | " | " | " | " | 4ウ | " | " | " | 4才 | 3ウ |
| くりこま山城宇治のほとりなり | 愚案に後撰にも(書) | 于。歸本姓云々 | 以源氏為大君(書) | しかるに後撰集・(書) | きこえさせける。(書) | えし給・さりけり(書) | 当御湯殿之間(書) | 延長七年英時朝臣 | 法皇御記日延長七年(書) | 堤・中納言内の御使にいて | よみ給ひけるにや | 侍・けると云々(書) | 後撰集・云(書) | 世の中は夢にさりける。 | 定る証文と信仰す | 彼家の嫡文(書) | おほつほねとあり云々(宮) | 大納言本にも | よく定りにける名(書) | 清輔朝臣・・・ | 後撰作者におほつほね(宮) | 五位の袍緋(書) | 衣服令伝(書) | 大貳復任・云々 |
| ナシ(書) | ナシ | ナシ(書) | 源氏 <small>源氏</small> | の | けり | は | ナシ | 英明(書) | 皇 <small>法</small> | の(書) | ナシ(書) | り | に | けり(書) | 証本(書) | 嫡子 <small>嫡子</small> | おほつほね | 大納言本書 | ナシ | 本二八(書) | おほつほね | ナシ | 歟(書) | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| (53) | (52) | (51) | (50) | (49) | (48) | (47) | (46) | (45) | (44) | | (43) | (42) | (41) | (40) | (39) | | (38) | (37) | (36) | | | | (35) | |
| " | " | 14ウ | 14才 | " | 13ウ | 13才 | 12ウ | " | 12才 | | 11ウ | 10ウ | " | " | 10才 | | " | " | " | | | | 9ウ | |
| 後撰・目録 | 又・閑院大光源宗于女 | いひて侍り。ければ(書) | 藤原・真樹を勅物に(書) | 此二人の御中にて(書) | 承平元年閏五月十一日(書) | 藤師輔・右大臣 | 申侍しかと今補任を(書) | 書かへて侍へし。 | わたり川。(書) | | 首書 此段後柏原本勅物云貞信 公昌泰二年正月 井八日参議 升今年清慎公 生服後禁色不審云々 | 首書 物仁善子云々 | 此段の御息所後柏原本勅 | 同五年に生れ給へり | 藤実頼五月廿七日兼(書) | 承平三年癸巳(書) | 母 | 此段の北方うせ給ふてと いふ所に後柏原本 | 又天曆元年(書) | 今日元服 | | | | ナシ |
| の(書) | 此(書) | ナシ | の | ナシ | 六 | 任(書) | 申侍りと | 侍るへし | 河 | | ナシ(書) | ナシ(書) | ナシ(書) | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ(書) | 云 | 同日(書) | | | | あけぬていそ きもそするの歌 古今集にあふく まにきりたちわ たりあけぬとも 君をばやらしま てはすへなし 割注 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | コノ歌ノ後 二一とある うたを本歌 にてよめる にやノ本 文ガアル (書) |

| | | | |
|-----------|----------|------------------------------------|------------|
| (107) | (106) | (105) | (104) |
| 〃 | 〃 | 28才 | 27ウ |
| 左氏伝公事・(書) | | 古事記・のさま みなしかり | これかれ見合・て |
| 伝 | な (書) | 等 (書) | せ (書) |
| | | (109) | (108) |
| | | 29才 | 28ウ |
| (書) | | いかなりし花の江にかはやまかつ のたふさにけかるやまとなてしこ | 拾穂 |
| | | ナシ | 拾穂 門弟元隣 |
| | | | ナシ(書) |

(注) 圏点、中黒は異同の対象箇所を示しており、これらがない場合は全体がそうになっている。なお「書」とは宮内庁書陵部本の略称。

異同数は百九箇所みられた。その結果、

架蔵本と書陵部本の共通数…… 62

東大本と書陵部本の共通数…… 39

三本がそれぞれ独自本文…… 8

となり、これら三本間において架蔵本は書陵部本に近く、東大本とはやや離れていると言えよう。また、独自本文は少ないとはいふものの、本文の流れを考える上で無視できない。

そこで、主なところをみていくことにしよう。(1)、(108)、(109)は巻頭と巻末にあるもので、書陵部本は(108)を含んで「明暦元年六月中旬」もない。その代り、(109)では架蔵本と書陵部本とが共通している。ただ、架蔵本では(109)の前に「明暦元年六月中旬 拾穂」という記述があるが、書陵部本にはない。また、架蔵本は(108)のように「門弟元隣」がない。これは架蔵本の奥書に「此一帖再昌院季吟述作也云々」とあることに関係があるう。それと(1)、(109)から改めて架蔵本と書陵部本は近い関係にあることがわかる。ともあれ、(1)、(108)、(109)は架蔵本、引いては『大和物語追考』の成立に深く関係しているように思われる。それゆえ連動させて考えるべきである。架蔵本で章段全体が無い箇所として(35)がある。『大和物語追考』が本来、有していなかったのか、それとも架蔵本の削除、誤脱か判断できないが、書陵部本は「備考」欄に記した本文が歌に続いている。これはこの現象を考える上で参考になろう。

架蔵本には東大本、書陵部本にない本文がみられる。(34)、(38)、(42)、(43)がその例である。(34)を除いた箇所が『大和物語首書』からの引用で、登場人物について補足している。(34)は宇治の所在場所を説明したものである。これらは甲斐侍徒なる人物により付加されたものと考えられる。彼の古典に寄せる関心の深さを垣間見ることができよう。

また、架蔵本には校異を施した箇所がある。(2)、(66)、(74)がそれである。このうち(74)は「イ」となっているが、校異と処理した。(2)をみると、架蔵本の校異本文に一致する伝本はないが、本文において架蔵本は書陵部本と一致する。わずか三箇所では推測をとまなうが、架蔵本で校異に用いた伝本は東大本に近いと言えよう。このことは

東大本の校異本文からその可能性が見えてくる。東大本の校異は(3)、(4)、(17)、(25)、(31)、(98)にみられる。このうち(4)と(31)を除くと校異本文に架蔵本、書陵部本が一致していることから架蔵本は東大本に距離をおき書陵部本と近い関係にあることがわかる。

この外、一部はふれたが、架蔵本、東大本、書陵部本の独自本文は書写過程を探る上で貴重な資料になろう。今後の課題にしたいと考えている。

*

架蔵本の解説をしてきた。その結果、架蔵本の書写者として柳沢吉保の可能性があること。架蔵本の本文は、東大本、書陵部本のそれに比較してみると書陵部本に近く、東大本に近い伝本を異本とみていたのではないかということ。架蔵本は後世的な面も有しているが、その反面、『大和物語追考』の生成を考える上でひとつの資料となり得ることが指摘できると思う。

本稿では『大和物語追考』の一資料として架蔵本の紹介を主眼としたため、詳細な考察ができなかった。例えば、前述したように架蔵本と東大本の関係は離れているが、両本の共通数が少ないとは言え、三十数箇所ありこれをいかに考えたらいのか。これには管見に入らない伝本を含めた調査と検討が必要になろう。この外にも架蔵本についての課題は多い。これらについては今後、考えていきたいと思っている。

注(1) 麻生磯次氏編『国文学研究書目解題』(至文堂、昭和32年6月)

(2) 岩波書店、平成2年9月。

(3) 帝国教育会出版部、昭和13年4月。覆刻版 清文堂、昭和44年3月。

(4) 和泉書院、昭和58年1月。

(5) 竹内誠氏・深井雅海氏編『日本近世人名辞典』(吉川弘文館、平成16年12月)

(6) 上野洋三氏校注『松蔭日記 岩波文庫』(岩波書店、平成17年7月)に拠る。なお、上野氏は本書の著者について「筆録し文章に作りあげたのは確かに正親町町子であろうが、著者は吉保・町子の両名対等とするのが自然であろう。」(同書解説)と述べている。

第四節 日本大学図書館蔵『大和物語鈔』の研究

—

従来、大和物語の注釈書で、最も早く成立したのは承応二年に版行された、北村季吟の大和物語抄と言われてきた。これはつい近年までそう考えられていたが、実はこれ以前に成立した注釈書が出現したのである。即ち大和物語鈔がそれで、これを最初に紹介されたのは今井源衛氏であった。⁽¹⁾これは山鹿素行の手沢本で、いわゆる素行文庫本と呼ばれている零本である。紹介された当初はわずか十三枚にしかすぎなかったが、その後、同氏により残りの大部分が同文庫から発見された。氏はこれに松平文庫旧蔵本（以下、松平文庫本と略称。現在、高橋正治氏蔵本）、内閣文庫本、国会図書館本を加え、これら四本を対象にして、それぞれの系統、関係、及び注釈史上の意義等につき詳細に考察された。⁽³⁾とりわけ系統についてはすべて同系統とされ、さらにそれらをA、B類に分けておられる。A類には素行文庫本、国会図書館本、B類には内閣文庫本、松平文庫本がそれぞれ属し、A類が原型に近いことを指摘された。その後、高橋貞一氏により賀茂季鷹文庫本が紹介された。⁽⁴⁾この本は今井氏の分類基準によるとB類に属する。この外、「玉英堂稀観本書目」175号にはこの零本が掲載されているが、だれの手に入ったかは不明である。それと山崎正伸、上野英子両氏により、黒川文庫蔵大和物語が紹介、翻刻された。⁽⁶⁾この本はA類に属する。

このように、大和物語鈔については徐々に伝本が紹介され、その内容についても言及されてはいるものの、例えばA類とB類との関係が今一つはつきりしない。また、この注釈書はどのようにして伝来したのかなどについても十分とは言えない。

ところで、これと同じ注釈書が、日本大学図書館に一本存在することが判明したのである。早速、調査してみたところ、興味深い点を含んでおり、ここではその紹介を兼ねながら、各伝本と比較し、それぞれの関係、注釈の特色、価値などについて考察し、その位置づけを試みたいと思う。

まず日本大学図書館蔵本（以下、日本と略称）の書誌から始めよう。

大きさ縦27・3 cm×横19・5 cmの袋綴二冊本。表紙はくちなし色、題簽は各冊左肩にやや大き目に「大和物語上」、「大和物語下」と記す。内題なし。巻頭に「日本大学図書館蔵」（朱）、「岡田眞之藏書」（朱）の各印記がある。上巻（通行一九段―本書八一段並―まで）墨付一三三枚。下巻（通

行一二〇段―本書八二段―以下）墨付一三九枚。一面七〜十行。朱、黒の丸点・長点、ミセケチ訂正、校異及び細字の傍注がある。ミセケチ訂正は次の箇所に見られる。

- (1) 春の日にもこそ猶（上9才）
- (2) ひかりみえさせ（上22ウ）
- (3) なけきたるいへり（上31ウ）
梅の花を色（上41才）
- (4) なけく共（上44才）
- (5) たつき者てうの者成（上49才）
- (6) すかるへきことも（上77ウ）
- (7) 伊勢か水の上にいるるへる舟の（上97才）
- (8) 月のお八しろかりけるに（上100ウ）
- (9) 油小路両四町也（上110ウ）
- (10) ふみ分なと身身にしむ（下10ウ）
- (11) 霞に霧も煙とそみる（下16才）
- (12) さはくなるうちにもものを（下22才）
- (13) とありければ御返哥（下29才）

- (15) 読^諸本よしいゑとあれは (下 33ウ)
- (16) なけ^かのすもかな (下 37オ)
- (17) おもひやりけれ^り (下 60ウ)
- (18) 後^はにもいか^はなり^はにけむしらす (下 64オ)
- (19) 古今此哥^左のたに (下 72ウ)
- (20) おほきとえけり^み (下 73ウ)
- (21) あやしきやうになりてけり^に (下 84オ)
- (22) わすれ草といへ^はとも (下 98ウ)
- (23) ともたちめ^もにいかならん (下 105ウ)
- (24) さふらふ人^もくにいらなくなんなき (下 110オ)
- (25) みつ^つのひとつを (下 114オ)
- (26) いそのかみ^とをいふ寺 (下 116ウ)
- (27) かきたる^すならば (下 119ウ)
- (28) おもひをと^ときとりて (下 120ウ)
- (29) 国^ものかみ^もを (下 129オ)
- (30) よかりければ口^とをしくなり (下 132オ)
- (31) 法師^になりたけり (下 133オ)
- (32) み^にこそぎつれう^つひすの (下 134オ)
- (33) にうる^こも有 (下 136ウ)
- (34) す^くへなし (下 139オ)
- (1) 宇多ノ后 (4段、上11ウ、通行5段)
- この現象から、本文の書写には注意を払ったことがわかる。この外、補入が何箇所かにみられる。傍注は次の十箇所だけである。同^{ただし}に關した^{書き入れ}ものを除いて^{校異や異}。

- (2) 待賢門ノ内（4段、上12才、通行5段）
- (3) 号前中書王（7段、上14ウ、通行8段）
- (4) 兵衛ノ作（17段、上27ウ、通行21段）
- (5) 六十八代卅三世ノヒト（19段、上30ウ、通行24段）
- (6) ぬれは千世過し心ちすると（20段、上31ウ、通行25段）
- (7) 葬君候（40段、上51ウ、通行40段）
- (8) 太政大臣為光（67段並、上96ウ、通行93段）
- (9) 此段より異本てにをはなとのかはりはつけず儀あるへきを付侍る（103段、下68ウ、通行149段）
- (10) よるか（113段、下94ウ、通行159段）

(2)(3)(5)は他の伝本では注釈本文の中にあり、日大本は成立的にみて、後になるものであろう。もちろん、他本が日大本の傍注を本文化したのではないかということも考えねばなるまい。しかし、日大本にみられる語句に関する傍注は、これら以外に(1)(8)(10)であり、この外にも、こと同じような例があつてもよさそうである。このことから日大本の傍注が他本より後のものという考えは動くまい。因に(1)は「七条后」、(10)は「典侍」の左傍にそれぞれ記されており、補足したものと思われる。また(8)は「恒徳公高光少将の母」という箇所、「恒徳公」の左側に記されているものである。この記述に疑問を抱き「太政大臣為光」と記したのであろう。また、(4)(6)(7)は和歌の作者と解釈について補足したもので、これも後になされたものと思われる。この外、(9)は103段（通行149段）以降の章段について、異本に付されていたことを記したものである。この注記は異本の実態を探る上で注意すべきものと思う。さらに次のような跋文を有している。

抄出の事去ぬる年の秋、横山山城守長知此物語よめとのたまふ。たゞと申。そのかみ江沼の温泉にてつれづれのほどにとあれば、いにし慶長の頃綴喜禅門一覚といふ人、久世の幽閉にいましまうできし其説もてよみ侍る事繁し。抄せよとあるをいなみがたく一覚老師の本はむかし佐渡守親賢が子、美濃権守入道勝命之がかきうつしにて勘物多く他本よりはおさく段もことばもすくなし。其勘物を段の末にかき、師にきしまゝに草し、冬中書なして奉り、重て田丸西位所持本の奥に「勝命以進上本密々書写す」とあるを請、すこしきにかはれる所をかたはらに付て、ことし令清書、長知に奉る也。愚でつたなきまゝにこと多く抄す。あやまりをあはれみたゞし給へ。

寛永十年癸酉夏五月十八日

於賈州 旅人
金沢書之 葉雪

横山山城守殿

(注) 句読点、濁点およびカギカッコは稿者が施した。以下も同様。

校異、ミセケチ、跋文とも本文と同筆。寛永十年五月十八日の書写。なお、この跋文は後述することから考えて、元からのものではなく、日本が書写された時点に記されたものと思われる。それにしても、このような跋文を添えているのは現存する伝本の中では今のところ、日本のみであり、この本の成立事情はもとより、大和物語鈔そのものの流伝を探る上で貴重なものと言えよう。

これによると、日本は横山山城守長知の御所望に依じて葉雪が書写したものである。この跋文には難解なところがあり、それについては後にもふれるが、とりあえず、大筋をつかむ意味で跋文の理解から始めよう。

この中に「其説もてよみ侍る事繁し」とあることから、一覚老師の説でもって葉雪が長知に講釈したことがわかる。「其説」の内容であるが、これは葉雪の書写になる日本本の形態が現存する他の大和物語鈔の伝本とほぼ一致していることから考えて、大和物語鈔とほぼ同じものを示しているともよからう。その後は一覚老師の本とあるが、これが講釈にどう関わってくるのかはつきりしない。ただ、この本文から少なくとも大和物語鈔そのものの成立に関与しているのではないかと思われる。こう理解しないと、後述するように日本本の後世的な面をどう考えてよいかわからないのである。

日本本が成立するまでに、少なくとも二度の転写があったようである。それは跋文に「冬中書なして奉り」、「ことし令清書、長知に奉る也」とあるからである。このうち前者は長知か、それとも一覚のいずれに献上したのか断定できない。それにしても、後述するように日本本には多くの異同がみられるが、これは葉雪が中書本の如きものを一覚老師にみてもらい、そこで補訂がなされたものか。あるいは跋文で葉雪が「愚でつたなきまゝに」と言っていることから、自分の考えも盛り込まれているのか。いずれとも断定はできないが、手が加わっていることは確かである。

日本本は注釈書とはいうものの、その書名は単に「大和物語上」、「大和物語下」とある。大和物語鈔なる書名について、今井源衛氏は次のように述べておられる。

「抄」「鈔」に、本来はいわば、普通名詞的な大和物語注釈書の意に近かったであろう。本書には、もともと、注釈書としての固有の書名は名づけられていず、また、その上、大和物語には(中略)他に注釈書がはなはだ乏しかったという事情もあつて、それで固有名詞としても間に合ったのであろう。⁽⁷⁾

確かに伝本においてまちまちである。日本本は内閣文庫本と同じになっている。しかも、跋文をみると、そこには「抄出の」とか「抄せよ」傍点は稿者、以下も同様。という表記がみられる。これは注釈書のことを意味していると思われるから、葉雪は「抄」という意識を持っていた。しかし、題僉には単に「大和物

「語」とあり、もともとは「抄」、「鈔」は付けられていなかったであろう。それが、今井氏の指摘されたように「抄」となり、次いで「鈔」となったものと思われる。このように、日本本は書名成立の過程を知る上でも貴重な伝本ということができよう。

なお、跋文に出てくる人物で、長知は前田利家に仕えた老臣とのことであるが、一覚老師、⁽⁸⁾葉雪、及び田丸西位なる人物については詳らかでない。

三

大和物語鈔の用いている物語本文の系統的性情について高橋正治氏は第一類系統中の日群書類従本系統に所属させている。⁽¹⁰⁾また、今井源衛氏はこの本文について詳しく調査された。その結果、本書の作者は正治本系統の本を参照した可能性が強いことを述べられ、総じて未流混態本文ではあるが、無視できない点を孕んでいることを指摘されている。⁽¹¹⁾

このように、大和物語鈔の本文については先学の研究によつて尽きるわけであるが、今井氏の正治本関与説については日大本の跋文にこの本についての記述があることから興味深い。

ところで、日本本の出現で何か変化が見られるであろうか。今、日本本を底本にして他の五本を校合してみたところ、日本本には独自の本文がみられた。その箇所をすべて抜き出してみると次表のようになる。ただし、漢字と仮名書の違いは除く

| 番号 | 通行 段序 | 本書 段序 | 本書 丁数 | 日本本 | 他本 | 日本本に 致する伝本 |
|-----|----------|----------|----------|------------|---------|---------------|
| (1) | 2 | 1並 | 上5ウ | 後までさふらひけり。 | ける | 抄・久 |
| (2) | 3 | 2 | 上7オ | おこせける | おこせたりける | |
| (3) | 8 | 7 | 上14ウ | 御返事に | 御返に | |
| (4) | 37 | 30 | 上43オ | いふへかりけん。 | ける | 久 |
| (5) | 45 | 36 | 上50ウ | 御返事はありけれと | し | |
| (6) | 76 | 59 | 上79オ | たちのほらん。 | ぬ | 衆・抄イ・久 |
| (7) | 87 | 64 | 上86ウ | 兵衛佐なりけるおとこ | おとこの | |
| (8) | 89 | 65 | 上89オ | きこえけり。 | ける | 鈴 |
| (9) | 94 | 68 | 上96ウ | 御いみ | 御いみなと | |

(注) 伝本略号は以下の通り。抄(大和物語抄本文)、久(久曾神昇氏蔵本)、九(九州大学蔵田村専一郎氏旧蔵本)、巫(御巫本)、鈴(鈴鹿本)、衆(為衆本)、

図(宮内庁書陵部蔵本)、抄イ(大和物語抄にイとあるもの)、氏(為氏本)、なお黒点は異同の対象を示す。これは以下も同様。

日大本にいずれの伝本が一致するかを下欄に記しておいたが、その大半は日大本の独自異文である。このうち(26)(46)は日大本の誤写と思われる。因に(26)は不注意によるものであり、(46)は「こ」を「て」とそれぞれ読み誤ったものと思われる。すると(46)の場合、日大本は漢字と仮名書きの違いはあるものの、勝命本系統の九州大学蔵田村専一郎氏旧蔵本(以下、九大本と略称)や久曾神昇氏蔵本(以下、久曾神本と略称)に近いと言えよう。この外(14)は大きな異同となっている。この本文をみると、日大本は「この女…(中略)…くはず」が召使の会話になっている。他の伝本はすべて会話外にある。ここは周囲の状況から考えて日大本はなんとなく不自然である。しかし、誤写か改作かははっきりしない。

(1)(4)(6)(8)(19)(21)(29)(30)(31)(32)(41)(42)において日大本は異本系統の伝本と一致している。そうかと思えば、(11)(13)(15)(17)(28)において、日大本は書き入れ校異を持っており、それは他本の本文に一致し、日大本と対立している。しかもこの書き入れ校異は田丸西位本(以下、田丸本と略称)に拠っており、この本は前述の如く勝命本系統の一本と思われる。このように、いわば矛盾した姿になっているわけだが、これをいかに理解したらよいのであろうか。跋文によると、田丸本によって書き入れ校異を記載したのは最終段階になってからであり、日大本の本文の成立と時間的な隔たりがあり、それがこのような形になっているのであろう。この外、日大本と流布本のみが一致するのは(48)ただし書き入れがあるにすぎない。

これらのことから、日大本の物語本文は他の大和物語鈔の本文よりも異本系統の本文を多く持っていることができる。前述したように日大本は現在の姿になるまで、少なくとも二度の転写があつたようである。その過程で異本と接触した可能性が考えられよう。それにしても、誤写を除いて大半を占める日大本の独自異文の存在をどう考えたらよいのか。これについては、あと一、二の資料を得てから結論を下すことにして、今の段階では混態本文とみておきたい。

四

日大本の注釈本文の性格を探るために、先程の本文の場合と同様に日大本と他の五本とを比較してみるとここでも日大本の独自異文が多数を占めている。それらについて、

(イ)日大本のみが有している場合

(ロ) 日大本のみが欠けている場合
 (ハ) 本文を有しているが、日大本のみに異同のある場合
 の三つに分けてみていきたい。
 まず(イ)からみていこう。その前に論述の便宜上、主な用例をあげておく。

| (1) | | | 番号 | 日 大 本 |
|---|------|------|-------|-------|
| | | | 段序 通行 | |
| | | | 段序 本書 | |
| (4) | (3) | (2) | 上1才 | 丁数 本書 |
| 8 | 5 | 4 | | |
| 7 | 4 | 3 | | |
| 上16才 | 上12才 | 上11才 | | |
| <p>やまと物かたりはたれつくらせ給ふともさたかならず或説に花山の法皇の御製作と也はしめに宇多の御門おり給て御出家のことあり後花山の僧正けさあらひにとてうつふしそめのあさのけさなりとかきとめ世をのかるをほいとす物語也 題号やまとものかたりとは大和の国の事のみにあらず事ありてよみかはしたる歌物語也やまとものかたり也大やうは此国のふるきものかたりといふ題目也 花山院人王六十五代三十六世御諱師貞冷泉第一御子御母皇后藤原懷子撰政太政大臣伊尹公女也治天下二年弘徽殿の女御太政大臣為光公かくれ給ひ御悲歎あり花山寺にて御出家寿四十一才 事は文武の朝より村上の御時までの事也天子親王大臣公卿后宮女僧凡庶の名多し名ありて事なきもあり おほよう三代集の作者の哥多くみえたり官ありて名なきは其段のことにあらはし官名なきは撰集の哥の名にする也官ありてたれとなきもあり其段を後にあらはし後あるにはしめをしる物語也 上巻八十一段段のならひ廿一段下巻四十二段ならひ十三段すへて百五十七段也 後撰集のことかきに小野のよしふるの朝臣西のうてのつかひにまかりて二とせといふとし四位にかならずまかりなるへかりけるをさもあらずなりにければくることにしもさゝれにける事やすからぬよしをうれへをくりて侍ける返事のうらにかきてつかはしけると也 おもはしといふ心也侘ぬれはとはなけかしとおもへともなり 白風にわひぬれはしめて忘れんとおもへとももの心なり 嵯峨天皇の離宮也大沢の辺也</p> | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------|--------|-------------------------|-------|-----------------------------------|---------------|------------------------|--------------------|-----------|-------------|-----------------------|-----------------|---------------------|--------------------------|-----------------------|---------------------------------------|--------------------------|---------------|--------------------------------------|----------------------|---------------|-------------------|---------------------------------------|------|
| (28) | (27) | (26) | (25) | (24) | (23) | (22) | (21) | (20) | (19) | (18) | (17) | (16) | (15) | (14) | (13) | (12) | (11) | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) |
| 130 | 125 | 122 | 109 | " | 103 | 98 | 93 | " | 71 | 69 | 63 | 54 | 41 | 35 | " | 27 | 24 | 20 | 16 | 14 | " | 11 | 10 |
| 88並 | 86 | 84 | 75並 | " | 72 | 69並 | 67並 | " | 57 | 56 | 51 | 43 | 34 | 28 | " | 22 | 19 | 16 | 13 | 12 | " | 10 | 9 |
| 下17才 | 下10才 | 下6才 | 上124ウ | 上111ウ | 上111才 | 上102ウ | 上96才 | 上76ウ | 上76才 | 上75才 | 上67才 | 上55ウ | 上47ウ | 上42才 | " | 上35才 | 上30ウ | 上27才 | 上23ウ | 上22才 | 上19才 | 上18才 | 上17ウ |
| さきの哥狂言にて此哥やさしければ記者褒美しかけると也 | 卒尔 日本紀 | しかにまうてたりける崇福寺(中略)三井寺の末也 | 後撰に入 | むさしのかみのむすめになん当時武蔵守藤原経邦といふ人ありその女にや | 色好みかゝりて なまめく也 | 温子号七条后也(中略)延喜帝の后宮穩子は妹也 | こと葉つゝき幽玄にして哀ふかき哥と也 | はるゝの哥 心明也 | さきにほひの哥 心明也 | むかしは十里ゝに駅をたてゝ公用をつとめし也 | 故右京のかみ宗于也女誰共しれす | 命しらねはといへる朋友をおもふ哀ふかし | 六帖君によりよくゝよゝとねをのみそなくゝよゝゝと | 院の御門宇多法皇也もの心ほそけにてのわたり | 家 一説に友則は有常か子といへり有常は名虎か子なれば友則は敏行か母の妹也 | 宗祇 陵在 山階醍醐寺北 曼陀羅堂丑寅故号後山階 | 桂宮 六條の北西洞院の西也 | はるけなからもとは久しくあひみすなから忘れ給ふへきならぬにわすれ給ふ事也 | いもうとおほつふね後撰の作者也在口伝名也 | 久しくはの哥 わか宮の哥也 | 故源大納言は清蔭卿也さきにみえたり | よろつてんねんのことほりおもへは世の中のうらみも身のなげきもなきという儀也 | |

| | (29) | (30) | (31) | (32) | (33) | (34) | (35) | (36) | (37) | (38) | (39) | | | | | | | | | | | | | | |
|--|---------|----------|-------------|----------------------------|------------|--------|------|-----------------------------|------------------------|---------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|------------------|---------------------------------------|----------------|--------------------------------|---------------------------------------|--|--------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------------|----------------------|
| | 139 | 146 | 147 | 148 | 149 | 153 | 157 | ” | 168 | ” | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 94 | 100 | 101 | 102 | 103 | 107 | 111 | ” | 118 | 118並 | 卷末 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 下28才 | 下47ウ | 下58才 | 下65才 | 下73才 | 下80ウ | 下90才 | | 下90ウ | 下113才 | 下119才 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | 下138ウ | | | | | | | | | | | | | | |
| | 此哥拾遺にあり | 筑紫に有へしと也 | ゆみやなくひ 弓矢立也 | 花と見て折とすれば女郎花うたはあまの名にこそありけれ | 日本紀に金鏡といへり | 大覚寺御所也 | 万 | 大舟のまかちしすぬきこき出にし沖はふかせん塩はひぬとも | 大井河岩浪高し幾出代崩の紅葉にあからめなせそ | こゝにありときゝて 流転三界中のさま也 | しそくなりける人のむすめ親族也藤原敏行の女也素性の母は敏行のいもうと也 | 師本になく諸本にある二段五十八段人の国のかみのくたりけるむまのはな | むけを堤中納言してといふ段の次に | おなし中納言のかのしんでむのまへにすこしとをくたてりける桜をちかくほりうへ | 給ひけるかれさまに見えければ | やとちかくうつしてうへしかひもなくまちとをにのみみゆるはな哉 | とよみたまへりける又七十一段のならひおなし少将やまひにいといたうわつらひて | とある段の次に土佐守にありける酒井の人さねといひける人やまひしてよくゝなりて | ゆく人はそのかみこむといふものをこゝろほそしやけふのわかれば | 此二段なり今其所ゝにかきくわへとすれとならざるをつたえむやと人いへり他本 | にあるをもたさんもさすかにて爰にかき侍る酒井人真は古今第十四に大空はこひし | き人のかたみかは物おもふ草になかめらるればといふ哥などの作者也そのかみこん | といふものは別るる時やかてこんといふをといへる心なるへしそのかみは当時也 | 又一本にうつふしそめのあさのけさ也の段のおくに平中か事かける段あり諸本にな | ければくはへす諸本まちゝ也了簡し給ふへし |

(注) 傍線部分はその対象箇所を示し、稿者が施した。以下も同様。

個々にあたつてみることにしよう。(1)は大和物語についての総説ともいうべきもので、作者、題号、登場人物等について記している。作者については不詳としながらも花山法皇説を紹介し、初段と最終章段に出家の事が記されていることからこの物語は世間から逃れることを趣旨に書かれたものとみている。これは作者の意図に言及したものであり、興味深い。また、題号については大和の国の事ということのを否定し、大和歌物語にもとづくとし、その内容は大方、此国の古い物語を載せたものとみている。ここで注目したいのは大和物語を歌物語と規定していることである。近世初期にこのような意識が芽生えていたことは留意すべきことである。なお、大和歌物語という考えは、後に北村季吟が大和物語抄の中でほぼ同じことを言っており、両者にどのような関係があつたのかは明らかでないが、季吟以前に同じ考えが存在していたことは注意してよからう。

この後には花山院についての出自が記されているが、これは前に花山院作者説のことが記されており、注釈者(日大本の創始者)が大和物語の成立にあつて、彼に重きを置いていたために記したものである。さらに登場人物について記している。この中で興味深いのは章段の配列と登場人物の理解の仕方についてふれていることである。最後に上、下巻の章段数を記し終わっている。

次に(2)(3)(5)(9)(15)(16)(19)(20)(21)(25)(28)(29)(32)(35)(36)は和歌に関したものである。(2)では後撰集の詞書を引用し、また(15)では古今六帖から、(32)では古今集から、(35)では万葉集から、さらに(36)では金葉集からそれぞれ詠歌状況や語句の用例を引き出し、理解を助けている。(25)(29)もこれに準じて考えることができよう。(16)は歌意を補つたものであるが、これは何かをもとにしている節がある。この箇所の前後の部分を記してみる。

足のむかかんかたへ

放埒の心をいへる文章也朋友をしのふ心やさしき也人倫性善の端をかく段也

ナシ(日)

しおりしての歌

みちのしおりに袖のしほりをそへ命しらねはといへる朋友他本ナシをおもふ哀ふかし人ナシ(日)にうとまる

身も家に生れみちをふむ感情也

(注) 「日」は日大本を示し、傍線、波線は稿者に拠る。これらは以下も同様。

日大本が持つていない一部と日大本のみが持つている部分とが類似している。日大本は「朋友をしのふ心又やさしき也」を簡略にしてあの位置に持つてきたのであろう。本文には「さて思ひける友だちのもとへ」とあり、日大本は本文を考慮し、このような表現にしたのであろう。またこれはその位置にみても「しおりして」の歌のところにあつた方が自然である。日大本を除く他の五本は「人倫性善の端をかく段也」と「人にうとまる、身も家に生れみちをふむ感情也」を持つているが、日大本はこれらを欠いている。他の五本が持つている両者の本文は内容の上で類似している。日大本がこ

れらを欠いているのは除去したためであろう。そしてここには日大本創始者の、この章段に対する考えを反映していると思われる。(28)は次のようになっている。

これもつくしなる女とあればさきの同人成へし此歌やさしき風情なれはかくもよみたる褒美の儀也

秋風の哥(中略)こころやつらきといへる也さきの哥猶云にて此哥やさしければ記者褒美しかけるかと也

これも「秋風」の歌の注なので、そこへ移動させたのであろう。ただ、そのまま移動させたのではなく、「褒美しかけるか」と慎重な言い回しになっている。

(19)(20)は同じ章段にあるもので、ともに歌について「心明也」と記している。両者の前後の本文を記してみよう。

さきにほひの歌 心明也

紅葉は風にまかせてみるよりもはかなき物は命なりけりの心に同じ贈答二首表よくきこえたるに本文又古歌引さまたくるかも感膽まとひて也

※三条の右のおと、定方公也

はるくの歌 心明也

諸法従本来常白而滅相の心也

日大本は「心明也」と記してはいるものの、「紅葉は」の歌と「諸法云々」を残している。これらは「心明也」の後にあり、書き方がなんとなく不自然である。両者とも引用しているものだから「くの心云々」とあったほうが自然な姿である。ここは両者とも「くの心」とあり、それを除去して「心明也」の方へ持ってきたようになっていいる。しかも(19)の方は「贈答云々」以下をも欠いているが、これは「心明也」とすることによって、不必要と考えて除去したのであろう。ここに「二首よく云々」とあることから、それが(20)の「心明也」へも及んだものと思われる。

なお、※印を付けた「三条の右のおと、定方公也」を日大本は欠いている。彼はすでに二九段に登場していることから除去したのであろう。さらに(3)(5)(9)(21)も歌の注釈に関するものである。(3)は次のようになっていいる。

今よろこひにはかなしき事おもはしといふ心也佗ぬれはとはなけかしとおもへともなり下句明也 風にわひぬれはしるて忘れんとおもへとももの心なり

波線部を日大本は持っているわけだが、前者の波線部の場合、すでに「今よろこひにはかなしき事おもはし」と歌意を示しており、波線部はそれを補

足したものである。また、後者の傍線部も前に「下句明也」とあるから、ここも付加したものであろう。いずれも蛇足的なものにすぎない。(5)の場合、日大本を除く他の五本はもとにした歌を説明しているにすぎない。その点、日大本はその歌の意味にまで言及している。(9)も歌意について詳しく記している。(5)と(9)はいずれも細字補入の形になっており、ここも理解を助けるために補足したものとと思われる。(21)もおそらく付加されたものと考えられるが、この中に「幽玄」なる語がみられる。これは注釈の面から注意してよからう。ただ、この語については後述するように除去しているところもみられ、要所くを見きわめて処理している。

人物に関しては、一覧表にはあげなかったが、系図が三箇所(上3才・22ウ・35ウく36才)にわたって記されている。このうち上巻3才と22ウにあるのは日大本のみにみられるもので、これは理解を助けるために記載されたものと思われる。上巻35ウく36才にみられる系図は他の伝本も持っているが、日大本には異同がある。その一部が(12)(13)に関したことである。他本で「一説」とあるところが、日大本では具体的に誰の説であるかを示しているわけである。(12)(13)とこの系図は同一章段内にあるもので、それぞれの説を系図にも付加したものと思われる。このことから、宗祇の説や家の説の存在を示している。(14)それにしても「家」とは具体的にどのような流派や家柄を指しているのか、ここからは知る由もないが、少なくとも日大本は、そのような家で伝えられて来たことを示している。(30)は大江玉淵女について、彼女は筑紫にいたと記されているが、定かでない。また、(38)では藤原敏行の女のことと記されており、彼の妹が素性の母であると言う。これらは付加されたものと思われるが、何に拠ったかについては記されていない。(6)では清蔭が以前に登場した旨を記し、気配りしている。(8)は直接ここに関係のないもので、このような記述は先の(38)に類似している。(14)はこれがなくても、この章段に「延喜帝より法皇への御使也」と注釈があることにより、十分理解できよう。(17)は宗干の後に付け足したものと思われる。(22)は温子の妹について記しており、これまた(17)と同様。(24)もこの部分がなくても十分に理解できる。ともかく、これらは理解を助けるために付加されたものと思われるが、いずれもが付随的なものばかりである。なお、人物に関して(7)をみると、「久しくは」の歌の作者について、日大本では「わか宮」とあるのに対し、他本では何も記されていない。これはあくまでも東の方の作と考えていたから、あえて記す必要もなかったのであろう。事実、ここは東の方の作とみるのが自然である。(15)日大本は本文をよく理解しないで若宮の作とってしまったのであろう。この本の欠点というべきである。

これら以外で語句に関したものととして、(4)(10)(11)(18)(23)(26)(31)(34)があげられる。このうち(4)(10)(11)(26)(34)は住居とか場所を説明したものである。例えば、(10)は次のようになっている。

故式部卿宮 これも敦慶親王也

桂のみこ 寛平皇女孚子内親王也…(中略)…懸想し給ふとここに見えたり

久かたの歌 孚子内親王の歌也（以下略）

桂宮 六条の北西洞院の西也

桂皇子が登場することから、その住まいを説明するためにこれを記したものとと思われる。それにしても本文にはその住まいに關したことは何も記されていないし、注の位置も本文での記載順序からみて、「久かたの」の歌の前に行くのが自然である。これらのことから考えて、後の付加であることがわかる。このような傾向はこれ以外のところでもみることが出来る。残りの(18)(23)(31)は語句についてで、付加したものとと思われる。また、(27)と(33)には「日本紀」なる書名が記されている。「ゆくりもなく」と「金鏡」について説明したもので、注の一部に付加し理解を助けている。日本紀からの引用はこのみでなく、大和物語鈔全体に引かれている。

最後に(39)であるが、前半は師本（一覚老師所持本）にない二章段を補足したものである。ここには資料への配慮をしようとする態度が見られる。また、後半では平中物語と共通する章段を持つ伝本の存在を記している。日本本の創始者はこれが平中物語と共通していることを何かの資料から知ったことがわかる。ここには隈なく資料にあたらうとする姿勢を見ることができよう。

平中物語は天下の孤本で昭和に入って発見された。⁽¹⁷⁾それ以前の伝来については『本朝書籍目録』に書名が出てくる以外、明らかでなかった。その意味で、日本本にこのような形にしる、その名が出てくることは注目してよからう。

(ロ)

次に日本本のみが欠けている箇所について見ていこう。

まず気づくことは日本本を除く他の五本で傍注になっている箇所が日本本には存在しないことである。それらを記してみよう。

- (1) 服は未かゝるとも仏事はやくしたまふ也（通9、鈔8）
- (2) 通兼公アレハ粟田関白ト申堤中納言兼輔卿ノ家粟田ニアレハ命婦共ニ行クニヤ（通10、鈔9）
- (3) おくの歌の故に秋と書けりと云々（通18、鈔21）
- (4) 心の替たる心（通26、鈔21）
- (5) 四臣のかみなる故也（通30、鈔24）
- (6) 惣々其所を知者也（通33、鈔26）
- (7) たゝ左遷斗を云と云々（通38、鈔31）

- (8) こゝの女の惣名弾上をかぬる也(通39、鈔32)
- (9) 太平記に(通42、鈔35)
- (10) 内親王ナケレハ孫ニテモ用ト也諸女王ヲ用親王ノ子ヲ占也ト也孫ノ事也名ヲ書付テタレトウラナウ事也(通93、鈔67並)
- (11) 參議ハ禁色ヲキル也禁色ノ後色ゆるさるゝ成へしとあり(通98、鈔69並)
- (12) 經文に不_レ斷_二類_一惱_一不_レ離_二五_一欲_一得_二淨_一諸_レ根_一ヲ滅_一除_{セシ}諸_レ罪_一と也(通105、鈔74)
- (13) 大宰也ヨソニハナシ(通105、鈔74)
- (14) 内ニテ忌詞七外ノ忌詞七拾介ニ此事アリ(通146、鈔100)
- (15) 私とくつきてなと云事あれば其心にもみるへきにや(通148、鈔102)
- (16) かたる翁の心(通148、鈔102)
- (17) 私集ニ返歌を入れて作る歟(通148、鈔102)
- (18) 私拾遺ニ返し歌ある故一行あけて是に書人の心可成(通148、鈔102)
- (19) 私男ノカウカイヲ女ノカンサシヘウツリシテト云々髮ヲウツクシクユヒタル事也(通149、鈔103)
- (20) 諸兄也(通149、鈔103)
- (21) 采女の町として居る孀也内侍のつかひ者と云々(通150、鈔104)
- (22) 又ソゝケルタル射腐(通150、鈔104)
- (23) 神なひヲミトヨム(通151、鈔105)
- (24) 和歌ノキホヲミセントテノ事也(通151、鈔105)
- (25) 私古今ニテハ前後ニ入是ハ打カヘシテ入タリ此ニテハ人丸歌トシラセントテ前段ノ筆法ニ二首アクル此ヲ以定家左注ニスルト云々古今ニテ左
ニ注ヲ人丸トセスヒスル故也人丸歌ト云事秘セシト也作者まで伝授ニセシト云々(通151、鈔105)
- (26) 巴に隨身大臣大将ハ上ヨリ被下今ハ其外ハ自身カゝユルト云々(通155、鈔109)
- (27) 古ノい物ヨリ急也是ハ又古ヨリ急也い物ニハ心ちしぬへき古今ニハやまひしてよはく成にける時トアリ(通165、鈔115)
- (28) 何事もたぬ事也(通168、鈔118)

- (29) 私伊衡は敏行か子也敏行かむすめのせうとの事也 (通168、鈔118並)
 (30) 大和の神也 (通169、鈔119)

(注) 本文は松平文庫旧蔵本に拠る。カッコ内の数字は章段数を二示し、「通」は通行本、「鈔」は大和物語鈔のことである。以下も断らない限り同様。全部で三十箇所にわたっている。この現象は何を意味しようか。考えられることは、日本本の除去か、それとも他の五本が後に付加したもののか、のいずれかであろう。これは傍注ということや、後述する傍注との関連から考えて後者とするのが妥当であろう。事実、今井源衛氏は

この傍注が多いのは、注本文の成立の時代と、付注の付加された時代との距離の大であることを物語るものではなからうか。⁽¹⁸⁾と述べておられる。

本文に、ほぼ同じ内容のことが記されていたり、すでに前の章段にみられるために除去されたのではないかと思われるところがある。

- (1) 此哥にめてゝかたふたかりけれとおはしましたる也 (通8、鈔7)
 (2) 心は人のあたにかれゆけはせめて我をもとみし人ともいふなそれをたいに我をおもふ事とせんと也人のきかくにはきくに也かはそへもし也ふかく世人をはちおもふ心也 (通26、鈔21)
 (3) かつらのみこ 孚子内親王也如前 (通76、鈔59)
 (4) 後撰集にはけふよりはの歌はかり入返しみえず抑ついたち此有「子細」事也これは歌にけふよりはとあればたゝ文章也後撰には返歌なし (通86、鈔63)
 (5) 桃園兵部卿宮也寛平第四敦固親王也おくに岩江という所に家作り給ふ故兵部卿宮とあるは村上第三致平親王也岩江に家もち給へる也 (通89、鈔65)
 (6) 亭子のみかとなんに御せうそこ聞え給ていろゆるされ給ける宇多天皇延喜帝へおほせられて禁色をゆつり給也 (通98、鈔69並)
 (7) 以上京織の図に見えたり京織とて本有右京左京の事たる也 (通103、鈔72)
 (8) 世にへ給へはこそ雲井よりも音にきこえ給へ雲井にのみおはしませはいとゝはるかにおもひ奉ると也 (通106、鈔74)
 (9) あくた河といふ名にはたかはぬと也もとよしのみこを芥川の宮と申と也きて名にはたかはぬといへり (以下略) (通139、鈔94)
 (10) もとをはとかくつけゝる 返事をいろゝにいへともかくなり記者の詞也是本説と云心也 (通152、鈔106)
 (11) 二條后大原行啓は東宮に立給ふ以後也末中宮にならざる故に東宮の女御と也 (通161、鈔114)
 (12) 臍ある 優怨也やさしき也 (通168、鈔118)
 (13) わかさうそく 装束也袍指貫帯太也 (通168、鈔118)

(14) さらに少将成けりと 此返歌の風体を小町聞知つて宗貞なりと治定したりと也此作者されたる歌多し我おちにきと人にかたるなはひまつれよ
枝はおるともなと也更に少将成けりと思ひてと有は記者後撰に真性法師遍昭の事也風体をもしれとの事也(通168、鈔118並)

(1)と(3)は、この箇所を日大木は持つていない。(1)は本文をみると「方ふたがりけれど、おはしましてなん、おほとのごもりにける」とあつて、これとほぼ同じことが記されている。また、(3)はこの下に「如前」とある。いずれもが重複しており、そのために除いたのであろう。

これら以外において、日大木は波線部を持つていない。ここでも傍線部と波線部をよくみると重複したり、あるいはほぼ同じことが記されているのに気付く。このことから、片方を除去したものと思われる。

次のような箇所もみられる。

- (1) 未来記といふ躰に似たり上句にとをくといひ下句にちかくとあるこのましからぬと也(通44、鈔35並)
- (2) えしうの段此物語の狂言なりとそ(通44、鈔35並)
- (3) 宇多院の御時の齋院は文徳の孫王也中務卿惟彦親王也孫王の例此一度也源氏さかきの巻に齋院は御ふくにておりぬ給にしかはあさかほのひめ君はかりにる給にき賀茂のいつきには孫王のる給ふ例多くもあらさりけりとかけり(通49、鈔39並)
- (4) 延喜齋院の御事也と云説あり此三首親子贈答の御歌也選子内親王は天曆第七宮也此物語に志賀の山越の道に岩江という所に家つくり給ふ兵部卿宮は第三のみこ也(通51、鈔41)
- (5) 此段誹詣なり(通65、鈔53)
- (6) 有口伝也(通66、鈔54)
- (7) 誹詣なり(通76、鈔59)
- (8) そこ井なき淵やはさはく山河の浅き瀬にこそあた涙はたて(通78、鈔60)
- (9) くれさらめやくるゝとおもへ共ととめたるやもし也(通92、鈔67)
- (10) なくなく返し かく書に此を添たること葉也書をよみてよしと也(通103、鈔72)
- (11) ねこそに根の心なしとそ(通113、鈔76並)
- (12) ちくさのこえちくちくのこえといへるを竹と云字のこえちくのこえなれはかくよめると云説不用こちくは来の字にもあらず下に来なくと有(通121、鈔83)
- (13) 又哀ふかし水くむすみてよむ也三輪組幽去ならず年ふれは我黒かみも白糸のよるは仏の名をとなへつゝとよめるもあり(通126、鈔87)

- (14) 旧説なりとむつかし落字有かといへり或説在次君の方は山蔭卿のむすめ也と種姓をいへるはかりにて忍ひてすむは又よの女伊勢守か召人といふ義歟と也それならはめしうとにてありける女とあるへし(通143、鈔98)
- (15) 上手のわざ也(通147、鈔101)
- (16) 此四首同人の作也(通147、鈔101)
- (17) 呉竹にはいふなよ竹にはいはずと也(通147、鈔101)
- (18) わたらひ世にふる様自然におとろへたる也渡世のわきに非ず(通148、鈔102)
- (19) にしこそといひければ 私給ひにしの心には詞可成(通158、鈔112)

これらの中には未来記、狂言、幽玄、口伝、説などと言った語がみられる。これらは後に付加されたのではないかということも一往考えるべきであろうが、日大本を除く他の五本はこれらを有しており、しかも日大本自体、後世的な面が強いことを考慮すると、削除されたとみるのがよからう。このことは、(15)において、この部分がないと前後の続き具合がよくないことや、さらに(14)をみると、ここは諸説を列挙しており、ある部分の説のところがないことから理解できよう。(8)をみると、日大本は歌一首を欠いている。この歌は古今集卷十四にある素性法師の作である。これは「うちつけにまどふ心と聞くからにはなぐさめやすくおもほゆるかな」の歌の、内容上の類似歌として記されたものである。日大本ではこの前に「あだにまどふ心はなぐさめやすからんをと也」とあり、異同がみられる。このことがこの歌の有無に関係しているのであろう。他本の如く「さめやすからん」とあると、「そこ井なき」の歌の意と合致する。しかし、日大本のように「なぐさめやすからん」とあると、なぐさめるのであるからこの歌の意にそぐわない。日大本は歌に「なぐさめやすし」とあるから、それをくみ取り改めたものか。それにともない「そこ井なき」の歌を除去したのであろう。まだまだ多くの用例を検討しなくてはならないが、少なくとも、今までの例からみた限り、本文を整えたとみるよりもそのような考えに賛同しかねて、その部分を削除したのであろう。

このような傾向は次のようなところにもみることができ。別な考えを示すために除去されたと思われるところがある。日大本では

下照姫の歌にいしかはかたふちかたふちにあみはりわたしとありかたかけはかたふち也此方の

万葉にも也

さまを相聞といふとなり

恋の事の歌ことに云て恋をする相聞と云也

のところを欠き、次のようになっていいる。

かたかけの舟にやのれるの歌 江の舟也 泻陰也岸高き河の舟白浪にさはかれ出るをたとへてさはく時のみおもひいつる君といへり(通3、鈔2)

日大本を除く他の五本がこの歌を引用したのは「かたかけ」を説明するために外ならない。そして、結局かたかけとは「かたふち」のことであると記している。

これに対して、日大本は「かたかけ」を「泻陰也」と言い切っている。それゆえこの歌と「瀉陰也」という箇所は成立的に言って密接な関連が考えられる。そして、いずれかがその歌に不審を抱き別な考えを示したのであろう。推測するに、日大本を除く他の五本がほぼ同じ本文を持っていることから考えて、これらがもとの姿で、日大本は除去したのではあるまいか。その代わりに別の考えを示したとみるべきであろう。「かたかけ」については諸説⁽¹⁹⁾あるが、それにしても日大本のように「泻陰」と解釈しているのは、管見に入った注釈書にはみられず、このみということになる。その妥当性については後考を待つにしても、同じ系統の注釈書ながら別の考えを示していることは、その態度を知る上で注意してよからう。

日大本には注全体が欠けているところがある。

- (1) おなし人 戒勝也(通28、鈔22並)
- (2) よゝと 如前(通57、鈔46)
- (3) 三条の右のおとゝ 定方公也(通71、鈔57)
- (4) あさて 明後日也明日去て也(通101、鈔71)
- (5) 方ふたかり 如前(通103、鈔72)
- (6) 上達部 如前(通145、鈔99)
- (7) いとかしこく おそれよろこぶ也(通146、鈔100)
- (8) そのかみ 其時也(通146、鈔100)
- (9) つきてこし人 宿へつきて也其人を云也(通148、鈔102)
- (10) 宮たてたり 御殿也(通148、鈔102)
- (11) つれなきかほ 不知かほの心(通149、鈔103)
- (12) かくいかねを あなたの女の心もおそろしからんと也(通149、鈔103)
- (13) 取かひ たゝかふ心也(通152、鈔106)

- (14) みつからも 大納言也 (通152、鈔106)
- (15) おもてをのみ 大納言を也 (通152、鈔106)
- (16) せうそこ 文をも詞をも云也 (通157、鈔111)
- (17) めをさまして 男也 (通158、鈔112)
- (18) 啓せさせけり 人して申上たる也 (通168、鈔118)
- このうち、(1)はかいせん、(3)は定方についての注記である。彼らはすでに二七段、二九段に登場しており、そのために削除されたのであろう。また、(2)(5)(6)をみると「如前」とあり、これも前と同じような理由で除かれたものである。しかし、これら以外のところではそれらしい根跡がみられない。結論については保留しておきたいが、これらは問題となるような箇所ではなく、概して簡単なものが多い。
- 日大本には部分的に欠けているところがある。
- (1) 陽成院のみかと (通14、鈔12)
- (2) 染川をわたらん人のいかでかは色になるてふ事のなからん (通21、鈔17)
- (3) あた人の寄をめでありといひて忘れてつかはささりしを今たつね求てつかはすさま也 (通21、鈔17並)
- (4) 古今集 (通26、鈔21)
- (5) 源大納言陽成院のみこ清蔭卿也 (通41、鈔34)
- (6) 忘れ給ふ我は忘れやす忘れぬ也 (通64、鈔52)
- (7) 後撰集には (通81、鈔62)
- (8) 左のおとゝ貞信公嫡男清慎公也御母すかはらの君清慎公の御母は (中略) といへり (通98、鈔69並)
- (9) 袖をしもの哥 七夕にはかささりしを今朝わかるゝにおほえす (以下略) (通114、鈔77)
- (10) 後撰にわかりのりの歌閑院のことあり (通118、鈔81)
- (11) 歌の上句 (通120、鈔82)
- (12) 世をみだし筑紫にありしを天慶三年に筑紫にてほろほされし也 (通126、鈔87)
- (13) 秋の山辺や底にみゆらんと優にことわりたる也 (通128、鈔87並)

- (14) 在原業平朝臣也 (通160、鈔113並)
 (15) かほりたる歌を (通166、鈔116)

(1) の場合、「みかど」がなくても「陽成院」だけでわかることから、簡略化したのであろう。(5)(8)(14)もこれと同様。このことは作品についても言える。
 (4)(7)(9)(15)において日大本は簡略化している。また、(9)(10)の場合、その章段に各々一首しか存在しないことから、初句を引かなくても十分に理解できる。
 さらに(2)でも下句を省略しているし、(3)(13)では主要な箇所だけを残している。(6)と(12)の場合は前後に類似した表現があり、除去されたのであろう。ともかく、これらも簡略化されたものとみてよからう。

日大本では欠けたようになっていたが、実は位置の異なっているところがある。

- (1) 心かはらすもかなと おひぬ共に老をよせ 孝行までをかねていへる心也 (通21、鈔17)
 (2) いたはるをもかなしふをもきらふをもいふは志の字也 ナシ ちらふをもいふ也 (通103、鈔72)

(注) 底本は日大本。校異は他本を示す。黒点は稿者が施した。これは以下も同様。

(1) において日大本が簡略になっている。(2)の場合、日大本は一文中に組み込ませて、より整理している。

これらには先程の部分的に欠けている箇所で見られた簡略化に共通する面がある。

(ハ)

最後に(ハ)についてみていこう。まず、注が全面的に変わっているものに次のようなものがある。

- (1) 前段横堅 ならび (通2、鈔1堅並)
 (2) 大蔵卿国綱息 紀の男 (通4、鈔3)

(3) 又己酉日在良六日東五日巽六日南五日坤六日酉五日乾六日北五日也千六日在天上八方其方くにはしまる
 はしまる日わか家よりつねにまいるかたに神あれは方たかへし次々の日はいますまいるなり西にたかゆればよし
 わか宿ヨリ常ニ行方ニ神在ヲ方タカヘスレハ次々ノ日イマスサレハイスノ初二方タカユレハ次ノ替タカフル也

安家説

陰陽雜書ニ或曰 (以下略)

金櫃経曰 (以下略) (通8、鈔7)

(4) 今は私の哥 世をうしと山に入すて・・・ても・・・うき事のたえぬナシ或今はいつちへゆかましと母に侘ナシびたる也

みつねかよめる哥を身にしり今は我いつちゆかましといひ世のうき事は猶もたえぬ哉といへり
いかならむ岩ほの中にすまはかは世のうき事のきこえこさらんといふにおなし三界無安知火宅の道心の歌なり (通27、鈔22)

(5) 左のおほいとの君 小野宮左大臣清慎公の女 (通92、鈔67)

橘廣相抄に從六位乃所に舍人正とあり

(6) 侍従の下内記の上也從五位下也 (通169、鈔119)

(注) 右に記した本文は日大本を示す。

順次みていこう。(1)は章段間の結びつきについての注記である。日大本を除く他の五本は「たて横交タル八何も堅二成と云々」という注記がある。「前段横堅」ということを示すために、この注記があるわけで、日大本はそのような見方に賛同しかねるために、単に「ならび」としたのである。日大本はすべて「ならび」で統一している。(2)は源公忠の父についての注記で、『尊卑分脈』には「国紀の男」とあり、日大本に一致している。他本はすべて「国綱息」とあるところを見ると、日大本は誤りに気付いて改めたものと思われる。(3)の場合、内容ということよりも書式ということでもとり上げたのである。各伝本は次のようになっている。

- 1、頭注になっている—国会図書館本、素行文庫本、松平文庫本
- 2、傍注になっている—賀茂季鷹文庫本
- 3、本文になっている—日大本
- 4、存在しない—内閣文庫本

このような状況から、複雑な生成が予想できようが、少なくとも日大本は最終的に近いものと言えよう。このことはその後「安家説」「金櫃経曰」という注があることによっても納得できよう。これは日大本にのみ見られるもので、前文を本文化する際に付加されたものであろう。それにしても、安家なる人物については不明であるが、大和物語注釈史上の流传を考える上で注意してよからう。

(4)に進もう。これは「今はわれいづちゆかまし山にても世のうきことはなをもたえぬか」という歌についての注である。日大本を除いた他の五本はこの歌を解釈し、類歌として古今集にある「いかならむ」の歌を引用している。これに対して、日大本は本文に異同があるものの、古今集にある躬恒の歌を引用している。日大本は内容的にみて、より近い歌を引き、理解しやすくしたものと思われる。古注から現代の注釈書までにおいて、いずれの

| 番号 | 段通行 | 段本 | 丁本 | 日大本 | 他本 |
|------|-----|-----|-------|-------------------|---|
| (1) | 25 | 20 | 上31ウ | をなげきたる | 千世も過し心地する悲歎のおもひをのへり |
| (2) | 85 | 62並 | 上85ウ | 序歌也 | よくおほしめしわけよ也海士のひろはぬうつせ貝卑下にしてやさしき序也下句明也 |
| (3) | 94 | 68 | 上99ウ | かきつたへたるさまの筆法也 | いまこゝにかきし罪おなし也源氏はゝき木の巻にかくろへ事をさへかたりつたへけん人の物いひさかなさよとかくに同じ |
| (4) | 98 | 69並 | 上102才 | 左のおとゝの母慎清公の母欣子の御母 | 左のおとゝ 貞慎公嫡男清慎公也御はゝのすかはらの君 清慎公の御母は寛平皇女欣子也源氏なれ共欣子の御母(以下略) |
| (5) | 113 | 76並 | 上127才 | とあれは | 諸共とよめる山吹の歌返しやうにきこゆれば |
| (6) | 118 | 81 | 上131才 | 哥の心は | むかしよりの歌ことかきになにともなけれと |
| (7) | 132 | 89並 | 下18ウ | 躬恒在前 | 躬恒先祖不見甲斐少目御厨子所預延喜七年正月十三日任丹後權大目後任淡路掾 |
| (8) | 134 | 90 | 下21才 | 記者啜して也 | 此筆法をひ出し給けるもの哉をひ出給ものかなとはしたなきをいみしうと心にこめ啜してかけり |
| (9) | 137 | 92 | 下24ウ | 前出のさま也 | 家もりなどにかきてあつらへたる成へし |
| (10) | 141 | 96 | 下36ウ | なりさま也 | なるまでみをくりてかなしひて事はえゆかす也 |
| (11) | 142 | 97 | 下38ウ | 詠吟せる | 心にもものゝかなはぬ時詠吟したる |

歌が引用されているかを調べてみると、すべて日大本と同じ歌を引用している。すると、日大本は最も早くこの歌を引用していることになり、注釈への意欲的な態度を窺うことができる。(5)において、日大本は「清慎公の女」となっている。六七段の冒頭はこうである。「故権中納言、左のおほいどの、の君をよばひ給ひける年のしはすのつごもりに云々」とある。このことから、ここは日大本が正しい。日大本は誤りに気付き改めたのである。最後の(6)は内舎人についての注で、日大本は不審を抱き他の資料から引いたと思われる。大和物語鈔には多くの文献が引かれており、それらについては今井源衛氏が詳しく検討されている。⁽²⁰⁾ただ、「橘廣相抄」なるものは日大本だけにみられる。この書物は有識故実に關したもののなか、その内容は詳らかではないにしても、日大本にはその書物の存在を伝えている点で意義がある。と同時にここには広く文献を漁ろうとする態度を窺うことができよう。日大本には他の五本に比べると、簡略になっているところがある。

個々にあたってみよう。(1)(2)(7)(8)(11)をみると、日本本は他本の一部を持っていることに気付く。これらは日本本が簡略にしたものであろう。このうち、(1)をみると次のようになっている。

ぬれは千世過し心ちすると 千世過し心地すると悲嘆のおもへをのへり
 松かれはやくむかしになりたるさまをなげきたるいへし

日本本では「ぬれは千世過し心ちすると」と傍注になっている。日本本は、「千世過し心地すると悲嘆のおもへをのへり」の箇所を分割し、後の方を「なげきたる」と改めている。

また、(3)(4)(5)(6)(7)(9)においても日本本はかなり簡略になっている。(6)はこの章段に歌が一首しかないことから、日本本は初句を引用せず、単に「歌の云々」としている。(7)と(9)も前に出ていることから改めて記すのを避けている。これは(3)(10)も同じことで、必要最小限に書き止めている。(5)は他本が本文の一部と初句を引用しているのに対し、日本本は本文だけにしている。ここも本文だけで十分に理解できることから、簡略にしたのであろう。(4)は次のようになっている。

左のおとゝ、貞信公嫡男清慎公也

御は、すかはらの君清慎公の御母は寛平皇女励子也源氏なれ共励子の御母は菅丞相の御女なるをもてすかはらの君といへり

他本では二つの注に分かれているが、日本本は初めのところを「左のおとゝの母」としてひとつの注にし簡略にしている。

一方、これらに対して日本本の方が詳しくかなっているところもある。

| 番号 | 通行 段序 | 本書 段序 | 本書 丁数 | 日大本 | 他本 |
|-----|----------|----------|----------|----------------------------------|------------|
| (1) | 55 | 44 | 上56才 | みるかことくにてしにたりときけ とまたるゝかなしさをいへり | おもふにかなしからん |
| (2) | 168 | 118 | 下112才 | 親王へ少将の行来をしらせ給へと いのる事を也 | 生死をしらせよ也 |
| (3) | 169 | 119 | 下121ウ | おひをときとらせるかもちたる文 にひきゆきて | 草子の余情也 |

(1)の場合、他本では男が死んだということに関し表現不足の感がある。そのために、日本本は歌の一部を引き補ったわけである。(2)(3)においても日

大本は具体的になっており、これは他本を改めたのであろう。また、一覧表にはあげなかったが、次のようなところもある。

①にみえたり返し歌かはれり(国、素)
古今伊勢物語にはしるしらぬ(以下略)
 此段伊勢物語右近の馬場のおりの日とあり返し哥かはれり古今にも伊勢のことし異説は是非を^Bしたよりなればかはりたる返しうた世にあるを^Cと云説と書
記者詞也
 こゝにかきて記者これらはものかたりにて世にある事ともいへり(通166、鈔116)

(注) 伝本略号は以下の通り。国(国会図書館本)、素(素行文庫本)、松(松平文庫本)、内(内閣文庫本)、賀(賀茂季鷹文庫本)。これらは以下も同様。Aの部分において、①がもとの姿で、それが②に進み、具体的に傍注でその歌を示したのであろう。日大本は伊勢物語の冒頭部分を引用している。ただ、日大本は伊勢物語が「ひおりの日」となっているのに対して、「おりの日」とある。これは誤写か、意図的にしたのかははっきりしないが、①②よりも後の改作であることはいまでもあるまい。さらにB、Cにも異同がある、日大本は他本に比べて、理解しやすく整理されている。解釈上の違いのみられるところがある。

| 番号 | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) |
|----------|--|------|------|-------|------|---|
| 通行 段序 | 131 | 131 | 148 | " | " | 162 |
| 本書 段序 | 89 | 89 | 102 | " | " | 114並 |
| 本書 丁数 | 下17ウ | 下17ウ | 下64才 | 下65才 | 下66ウ | 下98ウ 下99才 |
| 日大本 | 哥心上句春はきのふはかりにて過しをうしとおしむ はなかぬをおしくいへる心也 領知ある人也 | | | あまりなん | いふへし | あるやむことなき人の御つほねよりと有こゝは宮す所の御かたより人々とあり御息所誰とも不知 |
| 他本 | 愛したる いふに過にし春をおしむ心あり此 うくひすは 歟 うたてからん うくらん(国、素) 義歟 | | | | | とあり二条の後のうへ局にや女御に御子おはせは御息所と申陽成院誕生以後成へし |

(1)と(2)は同じ章段にあり、関連している。再度、その部分を記してみよう。

うくひすのけふなかぬを恨たるにあらす(1) 愛したる哥心上句春はきのふはかりにて過しをうしとおしむ心也(2) いふに過にし春をおしむ心あり此うくひすはかきれること
なかぬとはなかぬをおしくいへる心也(以下略)

日大本の「哥心上句春はきのふはかりにて過しをうしとおしむ心」と他本の「いふに過にし春をおしむ心あり此うくひすは」とは密接な関係がある。日大本では上句云々と記しているが、はたしてこの本文は上句の注記なのか、それとも下句のものなのか、他本では下句のものになっている。この歌をみると、「春はただきのふばかりをうぐひすの」とあることから考えるが、日大本の方が妥当というべきである。つまり、下句に「かぎれること云々」とあるから、日大本のように「なかぬをおしくいへる心也」とあるのがよい。

では、どうしてこのような現象が生じたのであろうか。日大本は、他本が「うぐひすの…心也」と全体を通しての記事であることを上句、下句に分けて解釈しているわけである。こうみてくると、日大本は他本をもとにわかりやすく整理したのであろう。

(3)(5)において日大本ははつきりと言いついて、(6)において日大本は御息所が誰であるのか不明とあり、他本では二条后とある。これらの現象から、少なくとも日大本創始者の理解の仕方を窺い知ることができよう。最後に(4)の場合、これに入れてよいか、疑問な点も生じようが、一往ここに入れて検討してみる。今、この注の全体文を改めて記してみよう。

うたてわか男転也(他本)
うたゝ今うくらんと(内、奉)の男うたてからんと(内、賀)きゝてはあまりならん也

「うたて」についての注記である。「うたゝ」という意味であることを最初に記している。そして、その次に注解を加えている。ここで異同がみられる。内閣文庫本、賀茂季鷹文庫本は「うたてからん」、国会図書館本、素行文庫本は「うくらん」とあり、日大本は「あまりならん」となっている。いずれの場合も意味上、同じことを言っており誤りというものではない。ただ、これらの関係ということを考えてみるに、日大本はこれらの中で最終的な本文とみてよからう。「うたてからん」と「うくらん」の関係は転写の際に生じたものであろうか、今ははつきりしない。ともあれ、日大本はわかりやすく注解を加えたものと思われる。それはこの後は前述したように金葉集にある「花と見て折とすれば女郎花うたゝはあまの名にこそありけれ」の歌を引き、「うたゝ」の用例を示していることによっても理解できよう。

注釈本文における日大本の独自異文について、三つに分けてみてきたが、傍注を除いてこの多くが後世に成るものと思われる。とりわけ総説は注釈

史上、注目される。また、理解しやすくするための様々な工夫もみられた。さらに、本文の簡略化や誤りを正したり、考えに納得できず除去したところもみられた。とにかく日大本創始者の意欲的な取り組みを窺うことができた。

五

一方、日大本と共通する伝本について調査してみると、注目すべきことは国会図書館本、素行文庫本と一致するところがみられることである。今、その箇所を一覧表にしてみよう。

| 番号 | 通行 段序 | 本書 段序 | 本書 丁数 | 日大本・素行本・国会本 | 他本 |
|------|----------|----------|--------------|-------------|---------------------------|
| (15) | 86 | 63 | 上 86 才 | ナシ | |
| (14) | 81 | 62 | 上 83 ウ | ナシ | |
| (13) | 73 | 58 | 上 78 才 | ナシ | |
| (12) | 69 | 56 | 上 74 才 | ナシ | |
| (11) | 〃 | 〃 | 〃 | ナシ | |
| (10) | 65 | 53 | 上 69 ウ | ナシ | |
| (9) | 64 | 52 | 上 68 才 | ナシ | |
| (8) | 62 | 50 | 上 66 才 | ナシ | |
| (7) | 56 | 45 | 上 57 才 | ナシ | 我が子を也(〃) |
| (6) | 36 | 29 | 上 42 ウ | ナシ | ツヒイタス事也(〃) |
| (5) | 26 | 21 | 上 32 ウ | ナシ | ムリニイコリス也(〃) |
| (4) | 13 | 11 | 上 21 才 | ナシ | いよのこか(〃) |
| (3) | 8 | 7 | 上 15 才 | ナシ | イよのこか(〃) |
| (2) | 4 | 3 | 上 10 ウ | ナシ | タチヌイカ大ウチキト小ウチキト八違也(〃) |
| (1) | 1 | 1 | 上 3 ウ | ナシ | うらむる心也 |
| | | | | | イクマシキヲ添タリ(傍注) |
| | | | | | 七日乞ノ事也源氏二朔日コロノ夕月夜トアリ口伝(〃) |
| | | | | | 兄弟ナトヲハ二代三代ニテモ一世ト云(傍注) |
| | | | | | 一階上ル事也(〃) |
| | | | | | 角ノニテ一日ツカケル故四日ヒケル也(〃) |
| | | | | | 古今ニモ入(〃) |
| | | | | | 古今の歌也(〃) |
| | | | | | 始に齋宮なりに行給時送りて行ものを云也(〃) |
| | | | | | 久しく来らぬ道も無事と云を添たる也(〃) |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---------------|---------------|---------------|---------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|------|--------------|---------------|------|---------------|---------------|
| (33) | (32) | (31) | (30) | (29) | (28) | (27) | (26) | (25) | (24) | (23) | (22) | (21) | (20) | (19) | (18) | (17) | (16) |
| " | " | " | 173 | 168 | 150 | 148 | 147 | 143 | 140 | 138 | 137 | " | 128 | 111 | " | " | 105 |
| " | " | " | 123 | 118 | 104 | 102 | 101 | 98 | 95 | 93 | 92 | " | 87 並 | 76 | " | " | 74 |
| 下 136 ウ | 下 136 オ | 下 134 ウ | 下 133 ウ | 下 112 ウ | 下 74 ウ | 下 66 オ | 下 57 ウ | 下 40 オ | 下 30 オ | 下 25 ウ | 下 24 ウ | " | 下 16 オ | 上 125 ウ | " | 上 121 オ | 上 120 オ |
| ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ |
| ウキ世ニアル官ノ事(傍注) 花族の事(〃) 見もせぬと也(〃) 此世ハ如何様ニモシテヨランカ也(〃) 龍宮ニ立ルト云カケタルナルヘシ常は清也(〃) 伊勢ノ説也(〃) 隠タル詞也(〃) トロノ事也(〃) いくましきの心也(〃) 中納言娘也(〃) 余ノモノト云事(〃) 舟ニシタル木ヲキラスニヲキタラハ也(〃) 文武ならを見立られたり其次の帝よりなら七代の初 に成と云々四十五聖武此卷ノ口伝(〃) 花の衣に此の心あり(〃) 離屋と同じ(〃) シルニシタル事ヲ云(〃) 宿に用あれはの心也(〃) にこる義も有 | | | | | | | | | | | | | | | | | |

共通するとはいうものの、それぞれの本文を有していない点で共通するわけだが、注目すべきことはそのほとんどが傍注であるということである。傍注でないのはわずかに(13)と(33)ただし(33)の場合の二箇所には不明の二箇所にはすぎない。

日大本のこの現象をいかに考えたらよいのか。それにはふたつの考え方が可能であろう。そのひとつは日大本がもともと持っていなかったということであり、もうひとつは日大本も持っていたのだが、それを除去してしまったということである。前者の場合はどうか。日大本の跋文によると講釈したのをもとにして一書を成したようである。しかも、少ないけれども前述したように日大本には他本で傍注のところが本文化されている。⁽²¹⁾ここにあ

げた傍注の中でもそのようになっていく箇所があってもよさそうである。また、(13)と(33)のように本文での共通箇所がみられることから、傍注は転写していく過程で徐々に付け加えられていったものとみたほうがよからう。前述したように、今井源衛氏は大和物語鈔の伝本を、A、B類に分けられ、A類が原型に近いことを指摘された。日大本はおおむねB類に属するが、ここでとり上げた傍注と注釈本文においてはA類に共通している。つまり、日大本はB類とはいうものの、A類の要素を持っているということである。このことから日大本は大和物語鈔の本文の流れを考える上で貴重な伝本と思われる。

なお、大和物語鈔の伝本における上、下巻の分け方は各伝本によってまちまちであるが、今井源衛氏によると、国会図書館本の親本は一一九段までが上巻であったことを指摘されている。⁽²⁾すると、これは日大本と一致していることになる。このことは先程の傍注、注釈本文のことと絡んで興味深い。参考までに、松平文庫本は賀茂季鷹文庫本、「玉英堂稀覯本書目」175号に掲載の零本と一致している。

六

日大本のみでなく、他の伝本にも異同のみられるところがある。その例をあげてみよう。

(1) 通行本82段(六二段)

狩に飯を添かりそめなるをあはしとおもひしを中絶を(賀・内・松)うらみいへりナシ(国、素)

(2) 通行本105段(七四段)

彈正安帥常陸上総上野の太守太宰也よそにはなし(素) 太宰也よそにはなし(傍注) (内、賀、松、国)

(3) 通行本155段(一〇九段)

大納言たれともなし①殿にちかうつかまつりけるうとねり大納言の大將なる歎たたの大納言うとねりの隨身を具②
 せすうとねり本府隨身也大納言大將成へし撰政関白大將に内舍人の隨身を給ふ也③
④殿には大納言殿に也⑤ 巴に

隨身大臣大將は上より被下今は其外は自分から申けると云

(4) 通行本168段(118段並)「おりつれば」の歌の注

おりなは手にけかる也ふさはつきに也たつきふにけかる也(素、国)

おりなは手にけかる也ふさはつきに也(松、内、賀)

おりなは手にけかる也手ふさはたつきふに也(日)

(5) 通行本113段(76段並)

ナシ(内、国、松、素)

かくてこれは女 離別せざる時もろたゝかたとたへを恋てなり

(6) 通行本168段(118段)

を(素、国)

ナシ(素、国)

血の涙にてなんありける遁世し紅涙あるは有漏身の定緩とおもふ心也たとへてあはざる戒急忍土の性也

(7) 通行本173段(123段)「賢人」の傍注

臣イ(内、賀)

臣歟(内、国)

臣也(松)

賢人

(8) 通行本148段(102段)「私とくつきてなど云事あれば真心にも可見にや」

傍注——賀、素、松、内

本文——国

ナシ——日

(9) 通行本158段(112段)「にしこそといひければ 私給ひにし心てにはの詞成へし」

本文——賀、内、国、松

細字——素

ナシ——日

(注) カッコ内は大和物語鈔の章段を示す。なお、(3)の底本は国会図書館本に拠る。

このような箇所はそれほど多くない。順次みていくことにする。(1)において、日本本は中間的な本文を有している。(2)において、素行文庫本は本文に組み入れている。松平文庫本、内閣文庫本、国会図書館本は傍注になっている。日本本は有しておらず、この傍注は後に付加されたことがわかる。(3)において、松平文庫本、内閣文庫本、賀茂季鷹文庫本は①、③の傍線部を持っていない。日本本は②、④の波線部を有しておらず、異同が拡大している。ここは、大納言についての注記である。①と①はほぼ同じ内容のことを言っており、そのために日本本は片方を除去したのではなからうか。松平文庫本、内閣文庫本、賀茂季鷹文庫本は何らかの理由でもって両方を除去したのであろう。さらに、「殿には大納言殿に也」も前とほぼ同じことが記されており、その可能性が高いとみてよからう。⑤の「巴」は紹巴の注と思われる。前にもふれたように「巴」以下を松平文庫本、賀茂季鷹文庫本、それに内閣文庫本は傍注として記されている。これは後に付加されたものであろう。したがって、これら三本は、①、①、③を除いた代わりに、「巴」以下を残したのではないか。それは「たたの大納言うとねりの隨身を具せず」という箇所を持っていることでも理解できよう。日本本は後世の本文と思われるが、重複を除き内容を整えている。そして、日本本の存在によって「巴」以下の部分は後の付加であることがわかる。(4)の場合、それぞれ異同がみられるが、おおむね素行文庫本と国会図書館本は松平文庫本、内閣文庫本、賀茂季鷹文庫本、日本本の本文を持っている。日本本とA類の伝本との関係を認めることができよう。では、後の本文に「かくてこれは女通ひける時に」とある。日本本は波線部を考慮して「せざる」となっている。しかし、後のほうでは「とたへて云々」とあるが、これはまだ完全に離別したのではなく、それに近い時点としてとらえたのであろう。これ以外の伝本は「離別」と「とたへ」を同じ時期ととらえている。日本本には時間に対する微妙な変化が現れている。いずれがもとの姿かは断定できないが、日本本には細かな配慮がみられる。(6)の場合、素行文庫本、国会図書館本は他の伝本に比べると簡略になっている。日本本は松平文庫本、内閣文庫本、賀茂季鷹文庫本に近く、「心処発動」を平易な表現に改めている。それゆえ、日本本はこれら三本より後世のものとみてよからう。しかし、素行文庫本、国会図書館本と松平文庫本、内閣文庫本、賀茂季鷹文庫本とにおいて、いずれがもとの姿かは不明である。

(7)に進もう。これは「賢人」についての傍注の異同である。日本本を除いた他の伝本は「人」に「臣」の漢字をあてている。これとて断定しているのもあれば、そうでないものとまちまちである。日本本は「ケンシン」と読み仮名を付しているだけで傍注はみられない。これらから複雑な生成過程が予想されるが、少なくとも日本本はもとの姿を止めていると思われる。(8)(9)において日本本はその箇所を持っていない。前者について、今井源衛氏は「私」とあることから後人の付注が紛れて本文化したのではないかと推測されている。⁽²³⁾日本本がこれを持っていないことと、さらに(9)においても他本では「私」とあり、しかも日本本が(8)と同様に持っていないことは今井氏の考えを補強するものと思われる。

これらの用例から日大本の生成の一面を垣間見ることができた。と同時に先程、日大本、素行文庫本、国会図書館本とが共通するところで述べた、私の考えを多少なりとも補強できたのではないかと思う。

七

日大本には多くの書き入れ校異がみられる。その数は約四百箇所にもよる。こうしたことについては跋文に「重て田丸西位所持本の奥に勝命以進上本密々書写すとあるを請す、こしきにかはれる所をかたはらに付て、云々」とあることによつて理解できる。田丸西位なる人物に所持本を借用し、気にかかった箇所の異同を記したようである。そして、何よりもここで注目すべきことは、現在、異本でしかも数少ない勝命本系統の一本をその対象にしているということである。

では、書き入れ校異に用いた田丸本と、現存する勝命本系統の伝本とはどのような関係にあるのであろうか。現在、勝命本系統の伝本は九大本と久曾神本の二本が知られており、前者は一三四段以降の零本である。そして、後者は前者の孫本にあたると思われる。⁽²⁶⁾ 日大本の書き入れ校異が勝命本系統の一本に拠っていることは、両者が共通していることでも理解できる。

今、その例をあげてみよう。

- (1) 返しとしこイ (通行122段、本書84段)
- (2) いつくイニらんにすむらんと二字なし (通行126段、本書87段)
- (3) これを人にもイニもなししらせ給はせ (通行134段、本書90段)
- (4) 女をイニまうめてきてすへたりけりイニまう (通行141段、本書96段)
- (5) はかまたまふひとかけ (通行146段、本書100段)
- (6) つみてイニ無そをなんきたりけるイニ (〃)
- (7) 和泉の国の人になむなりけり (通行147段、本書101段)
- (8) さおもふなん (〃)

- (9) おもひわつらひぬるさらは (通行147段、本書101段)
- (10) 女かはりイになりて (〃)
- (11) としいみしうころねたきもの (〃)
- (12) おとこにきてイをのれは (通行148段、本書102段)
- (13) おのれまろイひとりまからん (〃)
- (14) よくみまほしきイさに (〃)
- (15) あれイしはしといわせけれと (〃)
- (16) はつせに位におはしましける時 (通行153段、本書107段)
- (17) きぬきてイにけて家きぬきてイにきて (通行156段、本書110段)
- (1) (2) の例からみて田丸本は完本の可能性が強い。また、その書式をみると、「イ」と記しているのが大半であるが、こうなっていないところもある。それゆえ別々な本に拠ったとも考えられよう。しかし、跋文にその旨のことが記されていないことや、「イ」と記されていないところを調べてみると現存の勝命本系統に一致することから考えて、同一本に拠っているとみてよからう。
- だが、日大本の書き入れ校異は九大本と久曾神本にすべてが共通しているわけではない。すると、いずれに近かったのであろうか。今、書き入れ校異がいずれに一致するかを調査してみると次のような結果になる。
- (1) 男ありイおとこすなり (通行141段、本書96段 九大本「おとこ」)
- (2) ゆきかひちとおもひしかを (通行144段、本書98段並)
- (3) まことかなとはせ給時イに (通行146段、本書100段 九大本「とき」)
- (4) よくゑひたるおりイほとにて (〃) 九大本「をり」
- (5) 人のなけきをもいたつきをいたつらにおもふもふにいとくをしとおし (通行147段、本書101段 九大本「ほ」)
- (6) イニも人無いまする人あり (〃) 九大本「いますか子も」

- (7) としころありけるへにけるイ (通行148段、本書102段) 九大本「ありけるへに」
- (8) 風なとふきけるよイに(〃)
- (9) なにの打ひかせ給ひきをさせイ (通行148段、本書102段)
- (10) おうなともいさ給へ女共イ (通行156段、本書110段) 九大本「女とも」
- (11) 女ふこのとイといらへけり (通行158段、本書112段) 九大本「ふと」
- (12) 在中将物見おなし中将いきたりけるおりイにいて(通行166段、本書116段) 九大本「をり」
- (13) こひしきはくイ (〃) 九大本「こひしは」
- (14) かくてをこなひけるイな(通行168段、本書118段並) 九大本「お」

(注) 傍点は異同の対象箇所を示す。以下も同様。

(1)(3)は漢字と仮名書きの違いによるもの。(4)(5)(12)(14)は仮名の相違によるもの。(7)(13)は九大本においてルビになっているもの。そして(2)(6)(8)(9)(11)は久曾神本のみに一致するものである。これらに対して単独で九大本に一致するところはみられない。このことから田丸本は久曾神本に近いと言えよう。

しかしながら、九大本と久曾神本で平仮名のところが書き入れ校異では漢字になっているところがある。その箇所をあげてみる。

- (1) きて入イ (通行137段、本書92段)
- (2) してやりて打イ (通行141段、本書96段)
- ※(3) 中納言のみ御めいイひめ (通行143段、本書98段) 九大本「みめい」、久曾神本「みめる」
- (4) みこたちあまたさなと多さふらひイふらひ (通行145段、本書99段)
- (5) おほせ給れはイられければ (〃) 九大本コノ章段ヲ欠ク
- (6) かくてその男此イ (通行147段、本書101段) 御巫本・鈴鹿本「此」
- (7) 生田川のつら女出てイにひらはり (〃)
- (8) そのいたつき御イ (通行147段、本書101段) 九大本「身」

- (9) いるほ時イとにひとり時イは (通行147段、本書101段) 為氏本「時」
- (10) 津ツの国ツつくりつ又ツいつみツのかみツのはツへるツ時ツにツイ (〃) 九大本、久曾神本「に」ナシ
- (11) はハこハひハてハこハにハ (〃) 御巫本、鈴鹿本「入」
- (12) 又又イひとり今イの男今イ (〃) 御巫本、鈴鹿本「今」
- (13) さて共イ男共イは (〃) 御巫本「ともは」
- ※(14) たタふタたりタすタみタわたタるタ (通行148段、本書102段並) 九大本「をとこ女」、久曾神本「おとこ女」
- (15) す又イて又イて又イは又イい又イつ又イち又イい又イか又イむ又イ (〃)
- (16) ひとり又イこ又イち又イけ又イる又イ (〃)
- (17) い本よりよき人に有ければイとき本よりよき人に有ければイよ本よりよき人に有ければイけ本よりよき人に有ければイにか本よりよき人に有ければイほ本よりよき人に有ければイか本よりよき人に有ければイた本よりよき人に有ければイち本よりよき人に有ければイ (〃) 久曾神本「あり」
- (18) 此人給イをおも給イひ給イけ給イり (通行148段、本書102段)
- (19) ひとければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイつければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイなければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイんければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイありければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイけければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイるければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイいければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイかければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイにければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイしければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイてければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイあければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイらければ此津の国の男を哀とおもふになん有けるイむ (通行148段、本書102段) 九大本「くに」、[南]
- (20) 見所イる所イへ所イき所イこ所イと所イに所イな所イん所イあ所イる所イ (〃)
- ※(21) 此事て家のイをて家のイやて家のイらて家のイせ (〃) 九大本「ていゑの」、久曾神本「ていへの」
- ※(22) 侍いひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイけるいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイといいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイへいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイはいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイこいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイのいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイおいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイといひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイこいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイにいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイかいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイくいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイおいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイほいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイせいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイこいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイといひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイあいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイりいひければ猶いふへきことなんある声のあたひもたまはんとてよへとイて (〃) 九大本「事」、[る]
- (23) いロイとロイいロイふロイかロイひロイなロイくロイおロイしロイくロイおロイほロイさロイるロイにロイなロイむ (通行152段、本書106段)
- (24) い覚えつツイと覚えつツイわ覚えつツイひ覚えつツイし覚えつツイく (通行155段、本書109段)
- (25) 心住てイか住てイは住てイり住てイは住てイて (通行157段、本書111段)
- (26) 此此わらほイわ此わらほイら此わらほイほ此わらほイイ (〃)
- (27) 此此イか此イへ此イを此イへ此イた此イて此イた此イる此イ男 (通行158段、本書112段)
- ※(28) ひ給イし給イき給イと給イい給イふ給イ物給イを給イこ給イせて (通行161段、本書114段) 久曾神本「賜」

※(29) よみたりけるたるとなん有イ (通行162段、本書114段並) 久曾神本「む」

(30) こち子イこの (通行169段、本書119段) 久曾神本「このく」

※(31) おほせてこと給へりイとたまへりければ (通行172段、本書122段) 九大本「事」

これらの中で※印を付けたものは注意すべきと思われる。(3)では「い」と「ゐ」の違いがあり、このみでは田丸本が九大本に近い。(10)において、「に」を九大本、久曾神本とも持つていない。いずれの本でもないことを暗示する例。(18)は「有」の表記から九大本に近い例。これとは反対に(19)(22)は、久曾神本に近い例。(28)では久曾神本が漢字を使用しているものの「賜」になっている。(31)も「こと」の例から久曾神本に近い。(6)(11)(12)(27)は漢字ともいうものの、「イ」には御巫本、鈴鹿本が一致している。これが何を意味しているかは明らかでないが、注意すべきであろう。

一方、これとは反対に九大本、久曾神本で漢字のところ書き入れ校異で平仮名になっているところは、わずかに次の一箇所すぎない。

かなしくとおもひやりてよみける (通行148段、本書102段)

さらに書き入れ校異には次のような箇所もみられる。

- (1) 雪のふりかイニたるを也りたりけるを (通行139段、本書94段) 九大本、久曾神本「おほひ」
- (2) かきつけとなむしけるおふさをイ (通行144段、本書98段並) 久曾神本「しけるをふさ」
- (3) 人のくイニなしにありきイニなしくて (〃) 久曾神本「あるきありきて」
- (4) ものたまふしイ (通行145段、本書99段) 九大本欠落
- (5) かの七郎君もとにイかり (通行146段、本書100段) 九大本、久曾神本「のもとに」
- (6) いづれイ無にもあふイ無ましけれ (〃)
- (7) をとのしみければさる事なしければあやしみければさる事なしとおもひて (通行147段、本書101段) 九大本、久曾神本、御巫本、鈴鹿本「みせければ」
- (8) さて人てイをやりて (通行148段、本書102段) 九大本、久曾神本「を」ナシ
- (9) あはれえ此イにおほゆれば (通行148段、本書102段) 九大本、久曾神本「おほえければ」
- (10) 心うくおもふしのふるイをおもふしのふるイるになむありける (通行149段、本書103段) 九大本、久曾神本「しのふ」、御巫本、鈴鹿本「忍」

- (11) いとかなしくて（通行149段、本書103段）九大本、久曾神本「いみしうて」
 (12) うちやすみけるほとにねすきにたる（通行168段、本書118段）九大本「程にねいりにけるになむありける」
 (13) おひをときとりて（通行169段、本書119段）
てとらせけりさて彼このしりけるをひをまたときてもにけるイ
 (14) たしかにとひ奉りて（通行171段、本書121段）九大本、久曾神本「ふ」

順を追って見ていこう。(1)は九大本、久曾神本とも「おほひたるを」とあるから、むしろ「おほひ」も記すべきであり、九大本は記すにあたって緩慢なところがみられる。次に(2)はあの位置に「を」があるとおかしい。久曾神本をみると、「しけるをふき云々」とあり、「を」があるものと錯覚したのであろう。さらに(3)であるが、久曾神本は「あるきありきて」とあるから、これも錯覚でもって「イニなし」と記してしまったのであろう。また、(4)において、「ものしたまふ」とある伝本は今のところ存在しない。久曾神本は「ものたまふ」とある。この書き入れ校異は「た」の傍に「しイ」と記されており、この箇所を複製本にあたってみると、確かに「し」と読み誤ってしまいそうな書体である。おそらく九大本はそうとってしまったのであろう。(5)は九大本、久曾神本とも「ものもとに」とあるから、ここは誤脱であろう。(7)も同様であろう。(6)において、「も」の傍に「イ無」とあるが、九大本、久曾神本で実際に異なるのは「に」の部分である。これは不注意によるものである。(8)において、九大本と久曾神本は「を」を持っていない。かと言って「て」を持っている伝本もない。九大本の錯覚であろう。(9)も同じか。(10)において、久曾神本、九大本とも「しのふ」とあり、また御巫本、鈴鹿本も「忍」とある。おそらくここは本文に「おもふる」とあることから、誤って校異のほうにも「る」を付してしまったのであろう。(11)もこれと同じようなもので、九大本と久曾神本は「いみしうて」とウ音便になっているが、本文ではそうになっていない。ここは「いみイ」として後の方は注意しなかったであろう。(12)も前に「程」とあり、それがもとで錯覚を生じ、「ほと」と記してしまったのであろう。(13)は「もにける」ではおかしい。誤写であろう。最後に(14)において、「女」とあると意味上おかしい。九大本、久曾神本には「ふ」とある。ここは草書体の「ふ」を「女」に読み誤ったのであろう。

(1)から(14)でとり上げたところは書き入れ校異全体からすると、その数は少ないのであるが、それを記すにあたっての態度の一面を知ることができよう。したがって、平仮名を漢字に改めることなどは当然、予想できよう。こうみてくると、田丸本は久曾神本に近い伝本と言えよう。ただ、そのものとみるには難点がある。久曾神本にはそれほど多くはないが、書き入れ校異や傍注がみられる。今その箇所を抜き出してみると次表のようになる。

| (19) | (18) | (17) | (16) | (15) | (14) | (13) | (12) | (11) | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) | (4) | (3) | (2) | (1) | 番号 |
|--|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 137 | 136 | 126 | 122 | 119 | 115 | 113 | 105 | 103 | 99 | 91 | 75 | 68 | 55 | 51 | 27 | 17 | ” | 1 | 章通行 |
| 92 | 91 | 87 | ” | 84 | 78 | 76並 | 74 | 72 | 70 | 66 | 58並 | 55 | 44 | 41 | 22 | 14 | ” | 1 | 章久本 |
| 76ウ | 76オ | 71ウ | 69オ | 66ウ | 65ウ | 64ウ | 58ウ | 57ウ | 51オ | 46オ | 38オ | 34ウ | 26ウ | 25ウ | 16オ | 11ウ | ” | 1ウ | 丁久本 |
| <p>久曾神本の書き入れ校異、傍書</p> <p>あひもおしまじ<small>ぬイ</small></p> <p><small>ナド</small>いつか見ざらむ<small>何カナルベシ</small></p> <p>秋かぜになびくおばな<small>は</small></p> <p>あらがひなと<small>は</small></p> <p>花の色をみてやしりなむ<small>も</small></p> <p>かざりとぎけば<small>ド</small></p> <p>おりにをこせる<small>スイ</small></p> <p>こしのしらやましらずとも<small>ねイ</small></p> <p>女のたえてわびし<small>ひさしく</small></p> <p>亭子のみかどの御もと<small>とも</small>に</p> <p>世をわぶるなみだながれて<small>たい</small></p> <p>物いひなどもうたてあり<small>るを</small></p> <p>かくてそれは女<small>こ</small></p> <p>いまはかゝれる<small>も</small></p> <p>こえむとはせめ<small>し</small></p> <p>それはひらにすむ院の殿上もする<small>え</small></p> <p>物のぐもみなとられいて<small>は</small></p> <p>またおとこの心さかしく<small>ひごろさはがしく</small>て<small>歟</small></p> <p>いもくうといふ所に<small>わく歟</small></p> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岩江(目) | 傍書 | 本文 | イ | 傍書 | 傍書 | イ | イ | 傍書 | 傍書 | 傍書 | 傍書 | 傍書 | イ |
| <p>日大本に一致する箇所及び備考</p> | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| (60) | (59) | (58) | (57) | (56) | (55) | (54) | (53) | (52) | (51) | (50) | (49) | (48) | (47) | (46) | (45) | (44) | (43) | (42) | (41) | (40) |
|--------------------|-----------------|------------------|--------------------|----------------|-----------------------|-----------------------|-------------------|--------------|--------------|------------------|-----------------|-----------|---------------|------------------|------------------|-----------------|--------------|----------------|---------------------|--------------------|
| 160 | 159 | ” | 153 | 152 | 150 | 149 | ” | ” | ” | 148 | ” | ” | ” | ” | ” | ” | ” | ” | ” | 147 |
| 113 並 | 113 | ” | 107 | 106 | 104 | 103 | ” | ” | ” | 102 | ” | ” | ” | ” | ” | ” | ” | ” | ” | 101 |
| 113 ウ | 112 ウ | ” | 106 オ | 104 ウ | 103 ウ | 102 ウ | 99 オ | ” | 96 オ | 95 オ | 94 オ | ” | ” | ” | ” | 93 ウ | 93 オ | 90 ウ | 90 オ | 89 ウ |
| しかぞわぶなる なぐイ | あやのいなうも ろをもイ | こゝろのまゝに にかなふイ | たをりたるてふ けふイてふよし | 心ぎうをまどはして も | そのいけにかうかけさせ はなさせイ | 在中将のことゝぞほんに侍る イ二なし | なりにたるを思やるに はる歟 | かゝりかれば どか | かゝりければ れど | いますかるを あ | せめて夢にやあらんと さ | 侘きて侍 に | あまたの人の るたび | もとめづかと南いひける お | はかますをうし えほうし歟 | かりぎぬはかま かぎりて | 我身のそこを な歟 | おやありてさはぎ は歟 | この河にうきて侍らん さぶらふ歟 | いとかしこそよろこびあへり う |
| イ。ただし「わふイ なくなる」 | イ。ただし「色をも いな | イ。ただし「心に かなふ」 | 本文 | 傍書 | はかせさせ かつかけイ （目） | 在中将の事とぞ本に侍るイ （目） | おもひはるかに （目） | かゝれど（目） | 傍書 | 「いますかあるを」 （目） | 傍書 | 傍書 | 傍書「旅人」 | 傍書。ただし「おとめ」 | 本文 | 本文 | 傍書 | 傍書 | 傍書 | く（目） |

| (63) | (62) | (61) |
|---------------|------------------|------------------|
| ” | 168 | 167 |
| ” | 118 | 117 |
| 123 ウ | 122 ウ | 118 オ |
| いらなくイ いみじう | みさとし、 ありしところ | うきなもぞつく みイニチン |
| なきあはれがりけり | | |
| イ | イ。ただし「さとと」 御イ | イ |

(注) 「久本」とは久曾神本を示す。

まず、これを考える前にこれらが本文と同筆か否かということであるが、この点につき久曾神氏は何もふれておられない。⁽²⁷⁾すると本文と同一と見ていたであろう。

さて、田丸本と久曾神本を同じ本と仮定して考えて見るに、不自然な点が多いのである。跋文によれば、田丸本による書き入れ校異は気にかかった箇所のみを記したようである。もしそうだとしても、久曾神本の本文に一致するのは(12)(24)(25)(44)(45)(57)の六箇所にすぎず、あまりにも少ない。これら以外は傍書、「イ」に一致しているか、日本本の独自異文となっている。傍書の中には(4)(16)(17)(20)(26)(56)の如く、久曾神本の本文が明らかに誤写であり、そのために傍書のほうを採用したのかもしれない。それにしても全体から見ると少なすぎる。またこれらの中には(32)(33)(46)(58)(59)(60)(62)の如く日本本は書き入れ校異として採用しているが、これも少なすぎる。しかもこの中で(58)(59)(60)(62)の「イ」に日本本は一致し、本文のほうを校異として記している。田丸本が久曾神本と同一本であるとするならば、このようなことは普通考えられない。

日本本の独自異文書久曾神本の書き入れ校異、日本本の本文の中での傍は(19)(23)(33)(38)(40)(50)(53)(55)である。これらの中には誤りではないかと思われるところもあるが、久曾神本からの校異とするには不自然と言えよう。むしろ跋文でその旨を記すべきであろう。

このようなことから、田丸本を久曾神本そのものとみるには不自然な要素が多かった。ただ、田丸本と久曾神本とが近い関係にあることはいままでもない。勝命本系統の伝本は久曾神本が書写されるまで、何度かの転写を経て来たようである。このことは久曾神本の識語から知ることができる。もしかすると、田丸本というのはその転写過程の一本かもしれない。もしそうだとすると、書き入れ校異とはいうものの、勝命本系統の伝本を探る上で貴重なものと言えよう。

なお、先程の一覧表の(32)(50)にふれておきたい。(32)の場合、日本本は久曾神本の傍書に一致している。しかも「御めいイ」とその傍に校異を記している。久曾神本をみると「中納言のみめい」とあって、「い」をミセケチ訂正している。日本本が「御めいイ」としていることは田丸本においてミセケチ訂正がされていないからであろう。久曾神本は書写する時点で、ミセケチ訂正したのではあるまいか。このことは日本本の書き入れ校異がこの本から

ではないことを示していよう。日大本では「み」を「御」と漢字にしており、何か暗示的である。(50)の場合、久曾神本では「いますかるを」とあるが、同系統の九大本では「いますかるを」とあつて、傍書がない。日大本(松平文庫本、内閣文庫本、賀茂季鷹文庫本を含めて)は傍書をとり込んだ形で久曾神本と一致しているただし、「あ」は「め」の誤写であろう。ここでは一箇所という難点があるものの、大和物語鈔の生成を考える上で留意すべきであろう。

八

跋文によると、一覚老師の本をもって「其勘物を段の末にかき云々」とある。「其」とは「佐渡守親賢が子、美濃権守入道之がかきうつしにて云々」とあるから、一覚老師の本もまさしく勝命本系統の一本ということになる。この跋文にはもう一箇所、勝命本に関する記述がある。それは先程述べたように書き入れ校異に用いた田丸本である。両者は別々な伝本とみるのが自然のように思われる。それにしてもなぜ、田丸本を本文に比較したのかということになるが、やはり、大和物語鈔の生成に関わっている一覚老師の本が勝命本系統の一本ということと同じ系統のものをを用いたのではなからうか。ところで、この一覚老師の本について、跋文に「勘物多く他本よりはおさく段もことばもすくなし」とある。確かにこの系統の伝本には数多くの勘物を見ることが出来る。また、「おさく云々」とあるが、この部分は表現上、不自然とはいふものの、「すくなし」のほうに主眼が置かれているであろう。すると、一覚老師の本はかなり章段数が少ないことになり、いわば零本の可能性が強い。その勘物を段末に記載したとあるが、ここで問題になるのは日大本だけならいざしらず、他の勝命本系統の伝本もほぼ同じ勘物を有し、しかも今までの考察から日大本は大和物語鈔の原型とは考えられないということである。

そこで、この記述が何を意味しているのかを探る糸口として、両者の勘物を比較してみよう。その用例をあげてみる。

| 番号 | 通行 段序 | 本書 段序 | 本書 丁数 | 勝命本 | 日大本 |
|-----|----------|----------|----------|------------------------------------|---|
| (1) | 21 | 17 | 上27ウ | 良峯義方承平六年右少将天慶三年藏人八年中将 天慶元年卒 | 良少将良峯義方也承平六年右少将天慶三年藏人八 年中将天慶元年卒 |
| (2) | 39 | 32 | 上44ウ | 正明南院式部卿惟忠親王子承平四年十二月右中将 天慶四年参議大粥 | 源正明也南院式部卿是忠親王五男承平四年十二月 右少将 <small>中イ</small> 天慶八年左中将天慶五年参議大粥 |

| (14) | (13) | (12) | (11) | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) | (4) | (3) | | |
|--------------------------------|--|---|----------------------------------|----------------------------------|--------------|---|--------------|--------------|--------------|-----------------------|------------------------|--------------|------------------------|
| 170 | 168 | 160 | 159 | 147 | 142 | 141 | 140 | 139 | 137 | 135 | 134 | | |
| 120 | 118 | 113 並 | 113 | 101 | 97 | 96 | 95 | 94 | 92 | 91 | 90 | | |
| 下 123 ウ | 下 120 オ | 下 93 ウ | 下 92 ウ | 下 52 オ | 下 38 オ | 下 33 ウ | 下 29 ウ | 下 27 オ | 下 23 ウ | 下 22 オ | 下 20 ウ | | |
| 式部卿延喜八年四月五日為親王五年三天曆八年九月十四日薨四十九 | 式部卿宮重明親王本名持保母大納言源昇女也三品素性非僧都也遍昭嫡男僧都由性也(以下略) | 此哥業平集ニハウエシウエハアキナキヤカレサラムトイウ哥ノカヘシナリ後撰五秋上詞云七月許ニ女ノモトヨリヲコセテ侍ケル | 染殿内侍典侍藤原因香朝臣寛平九年十月廿九日從四位下掌侍母尼敬信也 | 本院兵衛敷重明親王女在後撰恋三寄賀贈太政大臣伊尹左大臣顯忠家女房 | 古今定文哥也 | 參議 <small>よしすゑ</small> 又 <small>よし</small> 家 | 左大臣從一位融二男 | 承香殿女御見上 | 兵部卿宮見上也 | 元良 | 元良 | | |
| | | | | | | | | | 廿四白薨三年九十三 | 天元四年五月十一日出家住三井寺長久二年二月 | 故兵部卿宮致平村上第三子母更衣正妃四品兵部卿 | 定家第三女乳女子十三人也 | 延喜 |
| | | | | | | | | | | | | | 先段とおなし |
| | | | | | | | | | | | | | むすめは惟正の母也 |
| | | | | | | | | | | | | | 故兵部卿宮村上第三四品兵部卿致平親王也 |
| | | | | | | | | | | | | | 天元四年五月出家三井寺住長久二年二月十四薨 |
| | | | | | | | | | | | | | 九十三 |
| | | | | | | | | | | | | | 陽成第一三品兵部卿元良親王也延喜の女御光孝女 |
| | | | | | | | | | | | | | 王三位和子也 |
| | | | | | | | | | | | | | 故兵部卿宮元良親王也前段のつゝき也昇大納言河 |
| | | | | | | | | | | | | | 原左大臣融二男延喜十四年大納言民部卿四十八薨 |
| | | | | | | | | | | | | | ナシ |
| | | | | | | | | | | | | | 此哥は古今第十八に平貞文かつかさとしてよめる |
| | | | | | | | | | | | | | 二首のうち也(以下略) |
| | | | | | | | | | | | | | ナシ |
| | | | | | | | | | | | | | 典侍藤原因香朝臣寛平九年十一月廿九日從四位下 |
| | | | | | | | | | | | | | 母敬信 |
| | | | | | | | | | | | | | ナシ |
| | | | | | | | | | | | | | ナシ |
| | | | | | | | | | | | | | 敦慶親王大歌所別当也(以下略) |

| | | | |
|---|---------|---------|---------|
| (18) | (17) | (16) | (15) |
| 172 | " | 171 | 170 |
| 122 | " | 121 | 120 |
| 下 130 才 | 下 128 才 | 下 127 才 | 下 123 才 |
| 兵衛命婦重明親王女云々本院兵衛右大臣從二位自 延木至千康保現存左兵衛督顯忠卿家女房 与陽成院皇子元良親王贈答兼茂朝臣女兵衛或兵衛 督自寛平至平千延木現存業茂事也 峯茂女兵衛已上三人後撰作者古今作者 藤高経女兵衛藤忠房家女房高経者懸大臣長男自貞 親至于寛平現存已上四人各無命婦之字四人之中高 経女歟年紀相叶之故也 式部卿宮為平親王村上第四皇子（以下略） 広幡中納言源庶明寛平天皇第二皇子三品齋世親王 二男母山城守橘公広女（以下略） 黒主清和陽成光孝字多之間人歟又延喜大嘗会哥作 者也又後撰云於唐崎勤祓禊祿陰陽師歟 | | | |
| 兵衛の命婦は藤原高経女古今作者也命婦八中臈也 職員会二内命婦ノ注目婦人帯 ^二 五位以上 ^一 為 ^二 内 命婦 ^一 五位以下ノ妾日 ^一 外命婦也 敦慶親王也（陽、三、天） 寛平のみこ三品齋世親王の男也母橘広相女（陽、 細） 与多都磨の息也与多都丸大伴朝臣姓を給ふ也清和 陽成光孝字多醒醐 又後撰 ^二 於唐崎勤祓禊 五代朝に有し人也志賀明神也 祿陰陽師歟イノ物 | | | |

（注） 134段以前は久曾神本に、それ以後は九大本にそれぞれ拠った。伝本略号は、陽（陽明文庫蔵本）、三（学習院大学蔵三条西家旧蔵本）、細（九州大学蔵細川家旧蔵本）、天（野坂家蔵天福本）をそれぞれ示している。

これらはその一部をあげたにすぎないが、(1)(2)(3)(5)(6)(7)(9)(11)(15)(18)は両者がほぼ共通しているものである。ただ、共通するとはいうものの、(2)では「右少将」と「右中將」の違いがある。そして日大本は田丸本との異同を記している。同様に(18)においても日大本は田丸本のそれを傍に記している。(5)においては亡くなった日付が異なっているものの、故兵部卿宮を致平親王ととっている。多くの注釈書は元良親王をあてており、致平親王とみているのは勝命本系統の伝本と大和物語鈔だけである。(15)をみると、勝命本は諸説をあげて、高経女が妥当と記している。日大本は結論からみると共通している。次に、(4)(14)(16)(17)は両者とも持っているが、異同がみられるものである。残りの(8)(10)(12)(13)は日大本が持っていない勘物である。

こうみてくると、日大本の勘物は一覚老師の本のそれを記したという跋文からは相違している。ただ、一覧表の(14)(16)と日大本の「ナシ」を除けば、すべて勝命本と日大本が持っているものばかりである。しかも、両者には類似した勘物もみられることから、一概に関係なしと断ずるのも危険である。

すると、跋文の記述をいかに理解したらよいかということになる。これから述べることは単なる憶測にしかすぎないが、跋文を信ずる限り、一覚老師の本の勘物が大和物語鈔の生成に関わっていると思われるから、そっくりそのまま記載したのではなく、それをもとにしつつ、必要と考えた箇所のみを記し、同時に他の考えを盛り込んだのではかなろうか。両者の異同がそのことを物語っているように思われる。そのことを葉雪は伝え聞いていたのではないか。それを舌足らずの表現で「其勘物を段の末にかき」と記してしまったのであろう。

九

以上、紹介を兼ねながら日本大学図書館蔵の大和物語鈔について考察してきた。この本の貴重なところは跋文を持っていることである。この中で葉雪は日大本の成立事情を生々しく記している。

さて、こうして出来上がった注釈書であるが、物語本文、注釈本文とも独自異文が多数を占め、その多くは後世に成ったものと思われる。そこには物語の概念、題号、平中物語のこと、和歌の引用、注釈本文の簡略化、誤植の訂正、納得できない箇所除去など様々な現象をみることができた。これらのことから日大本創始者の意欲的な一面を見ることができよう。

一方、日大本には古い姿を残しているところもみられ、本文の流れを窺い知ることができる。さらに、憶測になるが、一覚老師の本が大和物語鈔の生成に関わっているのではないかと思われる。これは勝命本系統の一本ということ注目されよう。

このように新旧両面を持っているのが日大本ということになる。日大本は他の伝本と同じ祖本から別れていると思われる。しかも、日大本はA、B両類の要素を有し、かつ独自異文も多く、強いて言うならば、ひとつの系列、即ちC類にわけてもよいかと思われる。

この外、日大本の書き入れ校異は何と言っても重宝と言えよう。それは現在、二本しか知られていない勝命本の伝来を窺い知ることができるからである。この系統の伝本は昭和になってから一般に知られるようになったものの、どのように伝えられてきたのか不明であった。それがこのような形にしろ、はるかに古い江戸時代初期の注釈書にみられることは注目すべきことである。また、日大本の題簽は「大和物語」とあるだけで、これはこの注釈書の書名成立を考える上で一石を投じるかもしれない。

大和物語鈔なる注釈書がどのようにして流伝してきたのかについては、それほど明らかではなかった。しかし、日大本の出現によって享受の場という、その一面を見ることができた。要するに日大本は大和物語鈔の伝本の中にあつて、特色あるものであり、従来の大和物語鈔の考えを継承しつつ、さら

に新しい面を切り開いていった伝本ということができよう。それにしても残念なのは一覚老師をはじめ、葉雪、及び田丸西位がどのような人物かを知ることができなかつたことである。これについては今後の課題にしたいと思う。

注(1) 『山鹿素行「大和物語抄」に就いて』(『語文研究』16号 昭和38年6月 後に『今井源衛著作集』第14巻 平安朝文学文献考』(笠間書院 令和元年5月)に再録)

に再録)

- (2) 『大和物語の研究』(私家版 昭和48年8月)に影印され、また『大和物語諸注集成』(雨海博洋氏編著 桜楓社 昭和58年5月)に翻刻されている。
- (3) 『古注『大和物語鈔』考』(『創立四十周年記念論文集 九州大学文学部』九州大学文学部 昭和41年1月 後に『王朝文学の研究』(角川書店 昭和45年10月 再版 パルスト社 平成7年4月)、『今井源衛著作集 第14巻 平安朝文学文献考』にそれぞれ再録)
- (4) 『大和物語抄(賀茂季鷹文庫本)』(高橋貞一氏解説 古典文庫 昭和54年7月)
- (5) 昭和62年4月発行。次のような解説がある。「大和物語抄 室町末期写 上巻一冊 少し幅広の大美濃判(二九・三×二一・一糎) 袋綴百二十二枚。每頁十行。平仮名交り。原装、原題簽は「大和物語抄上」、内題なし。朱筆で固有名詞に線を引き、一段毎に圈を引く。又、語釈の一項毎に朱線をかけている。序跋ともなく、著者不明。内容は、まず一段分の本文を記し、あとに語釈・勘物・解説批評などが記されている。本文は今まで最も古かつた北村季吟の「大和物語抄」とは別本で、複製「大和物語の研究 古注本影印篇(高橋正治蔵 寛文頃写)」とほとんど同一。この本で注目されるのは段章序数で、現行一般は一七二段であるが、これは一二三段(ただしこの本は上巻のみで、八九段まで)その他は前段の「並ならび」という扱いになっている。大和物語の注釈としては恐らく最古のもの。「日本古典文学大辞典」には、「室町時代末期の成立になるうか」とあるが、あるいはこれが原本か。諸本は松平文庫旧蔵高橋正治蔵本・国会図書館本・内閣文庫本・素行文庫本(零本)の四本のみ。上巻、だけとはいえ、大いに注目すべきものである。原装・原題簽付裏打なれど保存良。映入。」
- (6) 『黒川文庫蔵『大和物語鈔』翻刻(上)・(下)』(実践女子大学文芸資料研究所「別冊年報V・VI」平成13年3月、平成14年3月)、「黒川文庫蔵『大和物語鈔』解題」(実践女子大学文芸資料研究所「年報」21号 平成14年3月)
- (7) 注(3)に同じ。
- (8) 『石川県大百科事典』(編者芳井先一氏 北国出版社 昭和50年8月)
- (9) 『名家伝記資料集成 第一巻 あーき』(編者森繁夫氏 思文閣出版 昭和59年2月)には「一覚イツカ 時宗法師 ツクバ集 新撰ツクバ集入 明輪鈔八六

頭傳明名録七ノ四八二」とある。また、『国書総目録著者別索引』（森末義彰氏・市古貞次氏・堤精二氏編 岩波書店 昭和51年12月）にも「一覚長享三年八月二日一覚是観等百韻」とある。しかし、長享三年と日大本が書写された寛永十年との間は百四十四年の開きがあり、同一人とみるには疑問なところがある。それにしても日大本には「宗祇説」と記されているところがあり、先程の「一覚是観等百韻」には二人の外に兼載、宗般、宗長と言った宗祇関係の人物が登場しており、興味深いものがある。

(10) 『大和物語 埴選書』（埴書房 昭和37年10月）

(11) 注(3)に同じ。

(12) 日大本では次のように記されている。(11)「そうしたまへと」(13)「五六日なりぬ」、(15)「草にかゝりし」、(17)「すまざりければ」(「よみてやりける」)「(28)「此人をおもひけり」

(13) 「我ひのものとことばをもてやまとうたの道によりたる事共をかきあつめたるゆへなるへし」(『大和物語諸注集成』に拠る)

(14) 『大和物語新講』（吉澤義則氏監修 西義一氏著 藤谷崇文館 昭和27年1月）の解題には「注釈書には、宗祇法師の大和物語註云々」という記述がある。「宗祇の説」とこの注釈書がいかなる関係にあるのか、興味あるところだが、「大和物語註」なる注釈書の存在は明らかでない。

(15) 11段（鈔10段）は次のような内容である。

故源大納言の君、忠房のぬしのみむすめ東の方を、年ごろ思ひてすみたまひけるを、亭子院の若君につきてたてまつりたまひて、はなれたまうて、ほど経にけり。子どもなどありければ、言も絶えず、おなじ所になむすみたまひける。さて、よみたまへりける。

住の江の松ならなくに久しくも君と寝ぬ夜のなりにけるかな

とありければ、返し、

久しくもおもほえねども住の江の松やふたび生ひかはらむ

となむありける。

(『日本古典文学全集』に拠る。注(7)も同様)

(16) 20段（鈔16段）は次のような内容である。

故式部卿の宮を、桂のみこ、せちによばひたまひけれど、おはしまさざりける時、月のいとおもしろかりける夜、御文奉りたまへりけるに

久かたの空なる月の身なりせばゆくともみえで君は見てまし

となむありける。

- (17) 川瀬一馬氏「大和物語の異本と平中物語の発見(下)」(『国文学誌』1巻8号 昭和6年12月 後に『日本書誌学之研究』(講談社 昭和18年6月)に再録)
- (18) 注(3)に同じ。
- (19) 「汀」、「片帆」、「かたわれ」、「島陰」
- (20) 注(3)に同じ。
- (21) この外、他本で細字のところ为本文化されている。「文武の御時石上朝臣^{イソノカミ}磨淡海公^{マルタンシヤカウ}紀朝臣磨三人大宝元年三月任^ニ大納言^ニ大伴安磨^{トモヤスル}慶雲二年八月任大納言四人のうちいづれとしれず安磨といふ説有り」(下79オウウ)。
- (22) 注(3)に同じ。
- (23) 注(3)に同じ。
- (24) 『支子文庫本大和物語(影印)、(解題・釈文)』(解説今井源衛氏 在九州国文資料影印叢書刊行会 昭和56年5月)
- (25) 『勝命本大和物語と研究』(久曾神昇氏・山本寿恵子氏編著 未刊国文資料刊行会 昭和32年8月)、『大和物語 勝命本』(解題久曾神昇氏 汲古書院 昭和47年1月)
- (26) 今井源衛氏「田村専一郎氏旧蔵支子文庫本『大和物語』について(上)、(中)、(下)」(九州大学「文学研究」74、75、76輯 昭和52年3月、昭和53年3月、昭和54年3月 後に『王朝の物語と漢詩文』(笠間書院 平成2年2月)、『今井源衛著作集 第14巻 平安朝文学文献考』にそれぞれ再録)
- (27) 注(25)に同じ。

〈付記〉

日本本の題簽には「鈔」の漢字が付されていませんが、日本本は他の大和物語鈔と同じ系統の注釈書ということと、単なる伝本と注釈書との混同を避けるために、題目に「鈔」を付した次第です。御了解いただけたら幸いです。

後記

本書は大和物語について今まで発表したものの中から二十五編を選び、それらをテーマに沿い四つの章に分類して一書にしたものである。まずは各論考の初出を明らかにしておこう。

第一章 大和物語の伝本

第一節 『校注大和物語』（新典社、昭和63年4月）の解説をもとに大幅に補訂。

第二節 『大和物語』の研究』（私家版、平成12年12月）

第三節 「語文」第46輯（日本大学国文学会、昭和53年12月）・第49輯（昭和54年12月）

第四節 『大和物語の研究』（翰林書房、平成6年2月）原題「日本大学総合図書館蔵『大和物語』の伝本―新資料の紹介を中心にして―」

第五節 『物語文学の生成と展開―伊勢・大和とその周辺―』（新典社、平成31年2月）

第六節 「古典論叢」第13号（古典論叢会、昭和58年11月）

第七節 『大和物語』の研究』（私家版、平成12年12月）

第二章 大和物語の創作性

第一節 「解釈」第24巻第4号（解釈学会、昭和53年4月）

第二節 「中古文学」第30号（中古文学会、昭和57年10月）

第三節 「平安文学研究」第73輯（平安文学研究会、昭和60年6月）

第四節 『大和物語の研究』（翰林書房、平成6年2月）

第五節 「解釈」第49巻第3・4号（解釈学会、平成15年4月）

第六節 『物語文学の生成と展開―伊勢・大和とその周辺―』（新典社、平成31年2月）原題「『大和物語』の創作性―第三段を考察の対象として―」

第七節 「平安文学研究」第76輯（平安文学研究会、昭和61年12月）

第八節 「古典論叢」第18号（古典論叢会、昭和62年8月）

第九節 『大和物語の研究』（翰林書房、平成6年2月）

第十節 『歌語りと説話』（新典社、平成8年10月）原題「『大和物語』覚書―『後撰集』との関わり的一面―」

第三章 大和物語の構成

第一節 「商学集志 人文科学編」第25巻第1号（日本大学商学研究会、平成5年9月）

第二節 「解釈」第32巻第9号（解釈学会、昭和61年9月）副題を改める。

第三節 『『大和物語』の研究』（私家版、平成12年12月）

第四節 「語文」第39輯（日本大学国文学会、昭和49年3月）一部補訂。

第四章 大和物語の注釈

第一節 「商学集志 人文科学編」第24巻第2・3合併号（日本大学商学研究会、平成5年3月）

第二節 「語文」第78輯（日本大学国文学会、平成2年11月）

第三節 「総合文化研究」第16巻第3号（日本大学商学研究会、平成23年3月）原題「甲斐侍従筆『大和物語追考』―翻刻と解説―」を改編。

第四節 「中古文学」第50号（中古文学会、平成4年11月）原題「日本大学総合図書館蔵大和物語鈔について」を大幅に補訂。

以下、各々の論考について簡単に解説しておきたい。

第一章は伝本についての考察で、基礎的なものである。第一節では伝本についてその研究状況を俯瞰し、今後の研究の方向について述べた。これ以降は具体的に伝本の考察を行った。即ち第二節では流布本を代表する伝為氏筆本の本文について、また、第三節では、これとは反対に異本を代表する鈴鹿本の本文についてそれぞれ考察し、それぞれの性格を明らかにした。第四節は日本大学図書館が所蔵する新資料の紹介である。とりわけ親長本の出現は今後の研究の進展につながるものと確信している。第五節も新資料で三条実起筆大和物語についての考察である。この本から江戸時代における大和物語本文の流布状況の一面を知ることができる。第六・七節は異本（御巫本、鈴鹿本）にみられる附載説話の考察である。前者では附載した意図や創作性について、後者では前者の補足を兼ね、本文の性格についてそれぞれ考察し、ともに附載説話というものをどうとらえるか、ひとつの考えを提示した。

第二章は大和物語の創作性についての考察である。第一節の業平関係の章段にはじまり、第二節では無名章段とも言うべく一四一、一四二、一五四の各章段を対象にし、第三節では業平関係の章段の一つである一六六段を再度とりあげて詳細に検討した。さらに第四節では立田山伝説として著名な一四九段をとりあげその生成過程を述べた。第五節では一四一、一四二段にみられる対照性について考察し、大和物語作者の創作意図を探った。この論は先程の第二章第二節と相補う関係にある。第六節では前半の三段の成り立ちについて多角的に考察した。さらに第七節ではならの帝関係の章段、第八節では伊勢関係の章段へと進み、第九節では第一節でとりあげた業平関係の章段を新たな視点から考察した。最後の第十節では大和物語の成立に後撰集がどのように関与しているかを探った。いずれの論考も徹底した比較が基盤になっている。そしてこれらの章段を通して大和物語は歌語りの集成と言われてきたが、必ずしもそれだけではなく、中には作者が虚構という意識でもって創作した章段がみられることを指摘した。ただここでとりあげた章段は大和物語全体からみると少なく、しかもその多くが後半の章段に集中している。その意味で、今後は前半においてもこれらと同じような章段が存在するかが課題になろう。

第三章は大和物語の構成についての考察である。大和物語は連想の如く章段を配置している。ここではそれを念頭に置き、より詳細に分析し考察を試みた。即ち、第一節では前半において部分的にみられる構成意識を探り、次いで第二節では大和物語前半と後半に分ける場合、構成意識をもとにするのがよいのではないかという提案をした。さらに第三節では登場人物が構成にどう関わっているかを、宗子関係の章段を対象にして考察した。大和物語の登場人物については、その考証の研究が主流で多くの成果をあげている。しかし、登場人物が構成にどう関わっているかについての研究はほとんどなされていない。それゆえこのような観点からの考察も必要ではあるまいか。最後の第四節は大和物語の後半の構成についての考察である。ここでは整然とした構成になっていることを指摘した。この章でとりあげたいずれの論考もひとつの試論に過ぎない。今後は様々な視点からの追究はもちろんのこと、より多くの章段にあたる必要がある。

最後に第四章には四編の論考を掲載した。いずれも注釈に関してのものである。第一節と第二節は和歌と地文を対象にした。前者では詠作者の心情に迫った。また、後者では動作主が誰であるかや「あはれ」の語がこの章段の創作や意図と深い関わりがあることを指摘した。次いで、第三節と第四節は新資料の注釈書に関しての考察である。前者は甲斐侍従なる人物の書写による大和物語追考の本文の性格、及び位置づけを試みたものである。また後者は大和物語の注釈書の嚆矢ともいうべき大和物語鈔についての考察で、日本大学図書館蔵本の紹介とその位置づけを試みた。大和物語鈔の伝本は少ない上に、日本本は注目すべき内容を多く含んでおり注釈史上、看過することができない貴重な資料と言える。ともあれこれら四編を通して、大和物語の注釈を考える上での一助にもなればと思っている。

以上のように系統立てて編集してみた。各論考を通して大和物語という作品がいかにも多くの問題点を有しているかが理解できたのではなからうか。本研究ではその問題点を対象にして様々な視点から考察してきた。結果として推論が多く、説得力に乏しい内容となってしまったことは否めない。ただ、未開拓な分野に切り込んだことは大和物語研究の一段階として多少なりとも学界に寄与できたのではないかと思う。その一方で、取り残した問題も多い。今後はそれを究明するためにも、さらなる研究が必要になる。これが私の課題である。

柳田忠則

令和元年七月

